
加 須 市

長 竹 遺 跡 III

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

2018

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	3
3. 発掘調査・報告書作成の組織	5
II 遺跡の立地と環境	7
1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	7
III 遺跡の概要	9
IV 北盛土の遺構	27
1. 住居跡	27
2. 竪穴状遺構	154
3. 土壌墓・土壌	159
4. 遺物集中	287
5. 埋甕	298
6. 柱穴列	300
7. 焼土跡	302
8. 不明遺構	307
9. グリッドピット	310

(第2分冊)

V 北盛土の遺物	335
1. 土器	335
(1) 住居跡出土土器	335
(2) 竪穴状遺構出土土器	476
(3) 土壌出土土器	492
(4) 遺物集中出土土器	670
(5) 埋甕出土土器	685
(6) 柱穴列出土土器	686
(7) 焼土跡出土土器	687
(8) 不明遺構出土土器	690
(9) グリッドピット出土土器	693
2. 土製品	713
(1) 住居跡出土土製品	713
(2) 竪穴状遺構出土土製品	744
(3) 土壌出土土製品	750
(4) 遺物集中出土土製品	770
(5) 不明遺構出土土製品	773
(6) グリッドピット出土土製品	773
3. 石器	780
4. 骨製品	835
VI 調査のまとめ	836

(第3分冊)

写真図版

付図

插图目次

(第2分册)

第239图 住居跡出土土器 (1)	361	第273图 住居跡出土土器 (35)	395
第240图 住居跡出土土器 (2)	362	第274图 住居跡出土土器 (36)	396
第241图 住居跡出土土器 (3)	363	第275图 住居跡出土土器 (37)	397
第242图 住居跡出土土器 (4)	364	第276图 住居跡出土土器 (38)	398
第243图 住居跡出土土器 (5)	365	第277图 住居跡出土土器 (39)	399
第244图 住居跡出土土器 (6)	366	第278图 住居跡出土土器 (40)	400
第245图 住居跡出土土器 (7)	367	第279图 住居跡出土土器 (41)	401
第246图 住居跡出土土器 (8)	368	第280图 住居跡出土土器 (42)	402
第247图 住居跡出土土器 (9)	369	第281图 住居跡出土土器 (43)	403
第248图 住居跡出土土器 (10)	370	第282图 住居跡出土土器 (44)	404
第249图 住居跡出土土器 (11)	371	第283图 住居跡出土土器 (45)	405
第250图 住居跡出土土器 (12)	372	第284图 住居跡出土土器 (46)	406
第251图 住居跡出土土器 (13)	373	第285图 住居跡出土土器 (47)	407
第252图 住居跡出土土器 (14)	374	第286图 住居跡出土土器 (48)	408
第253图 住居跡出土土器 (15)	375	第287图 住居跡出土土器 (49)	409
第254图 住居跡出土土器 (16)	376	第288图 住居跡出土土器 (50)	410
第255图 住居跡出土土器 (17)	377	第289图 住居跡出土土器 (51)	411
第256图 住居跡出土土器 (18)	378	第290图 住居跡出土土器 (52)	412
第257图 住居跡出土土器 (19)	379	第291图 住居跡出土土器 (53)	413
第258图 住居跡出土土器 (20)	380	第292图 住居跡出土土器 (54)	414
第259图 住居跡出土土器 (21)	381	第293图 住居跡出土土器 (55)	415
第260图 住居跡出土土器 (22)	382	第294图 住居跡出土土器 (56)	416
第261图 住居跡出土土器 (23)	383	第295图 住居跡出土土器 (57)	417
第262图 住居跡出土土器 (24)	384	第296图 住居跡出土土器 (58)	418
第263图 住居跡出土土器 (25)	385	第297图 住居跡出土土器 (59)	419
第264图 住居跡出土土器 (26)	386	第298图 住居跡出土土器 (60)	420
第265图 住居跡出土土器 (27)	387	第299图 住居跡出土土器 (61)	421
第266图 住居跡出土土器 (28)	388	第300图 住居跡出土土器 (62)	422
第267图 住居跡出土土器 (29)	389	第301图 住居跡出土土器 (63)	423
第268图 住居跡出土土器 (30)	390	第302图 住居跡出土土器 (64)	424
第269图 住居跡出土土器 (31)	391	第303图 住居跡出土土器 (65)	425
第270图 住居跡出土土器 (32)	392	第304图 住居跡出土土器 (66)	426
第271图 住居跡出土土器 (33)	393	第305图 住居跡出土土器 (67)	427
第272图 住居跡出土土器 (34)	394	第306图 住居跡出土土器 (68)	428

第307图	住居跡出土土器 (69)	429	第344图	住居跡出土土器 (106)	466
第308图	住居跡出土土器 (70)	430	第345图	住居跡出土土器 (107)	467
第309图	住居跡出土土器 (71)	431	第346图	住居跡出土土器 (108)	468
第310图	住居跡出土土器 (72)	432	第347图	住居跡出土土器 (109)	469
第311图	住居跡出土土器 (73)	433	第348图	住居跡出土土器 (110)	470
第312图	住居跡出土土器 (74)	434	第349图	住居跡出土土器 (111)	471
第313图	住居跡出土土器 (75)	435	第350图	住居跡出土土器 (112)	472
第314图	住居跡出土土器 (76)	436	第351图	住居跡出土土器 (113)	473
第315图	住居跡出土土器 (77)	437	第352图	住居跡出土土器 (114)	474
第316图	住居跡出土土器 (78)	438	第353图	住居跡出土土器 (115)	475
第317图	住居跡出土土器 (79)	439	第354图	竪穴状遺構出土土器 (1)	478
第318图	住居跡出土土器 (80)	440	第355图	竪穴状遺構出土土器 (2)	479
第319图	住居跡出土土器 (81)	441	第356图	竪穴状遺構出土土器 (3)	480
第320图	住居跡出土土器 (82)	442	第357图	竪穴状遺構出土土器 (4)	481
第321图	住居跡出土土器 (83)	443	第358图	竪穴状遺構出土土器 (5)	482
第322图	住居跡出土土器 (84)	444	第359图	竪穴状遺構出土土器 (6)	483
第323图	住居跡出土土器 (85)	445	第360图	竪穴状遺構出土土器 (7)	484
第324图	住居跡出土土器 (86)	446	第361图	竪穴状遺構出土土器 (8)	485
第325图	住居跡出土土器 (87)	447	第362图	竪穴状遺構出土土器 (9)	486
第326图	住居跡出土土器 (88)	448	第363图	竪穴状遺構出土土器 (10)	487
第327图	住居跡出土土器 (89)	449	第364图	竪穴状遺構出土土器 (11)	488
第328图	住居跡出土土器 (90)	450	第365图	竪穴状遺構出土土器 (12)	489
第329图	住居跡出土土器 (91)	451	第366图	竪穴状遺構出土土器 (13)	490
第330图	住居跡出土土器 (92)	452	第367图	竪穴状遺構出土土器 (14)	491
第331图	住居跡出土土器 (93)	453	第368图	土壇出土土器 (1)	530
第332图	住居跡出土土器 (94)	454	第369图	土壇出土土器 (2)	531
第333图	住居跡出土土器 (95)	455	第370图	土壇出土土器 (3)	532
第334图	住居跡出土土器 (96)	456	第371图	土壇出土土器 (4)	533
第335图	住居跡出土土器 (97)	457	第372图	土壇出土土器 (5)	534
第336图	住居跡出土土器 (98)	458	第373图	土壇出土土器 (6)	535
第337图	住居跡出土土器 (99)	459	第374图	土壇出土土器 (7)	536
第338图	住居跡出土土器 (100)	460	第375图	土壇出土土器 (8)	537
第339图	住居跡出土土器 (101)	461	第376图	土壇出土土器 (9)	538
第340图	住居跡出土土器 (102)	462	第377图	土壇出土土器 (10)	539
第341图	住居跡出土土器 (103)	463	第378图	土壇出土土器 (11)	540
第342图	住居跡出土土器 (104)	464	第379图	土壇出土土器 (12)	541
第343图	住居跡出土土器 (105)	465	第380图	土壇出土土器 (13)	542

第381图	土墙出土土器 (14)	543	第418图	土墙出土土器 (51)	580
第382图	土墙出土土器 (15)	544	第419图	土墙出土土器 (52)	581
第383图	土墙出土土器 (16)	545	第420图	土墙出土土器 (53)	582
第384图	土墙出土土器 (17)	546	第421图	土墙出土土器 (54)	583
第385图	土墙出土土器 (18)	547	第422图	土墙出土土器 (55)	584
第386图	土墙出土土器 (19)	548	第423图	土墙出土土器 (56)	585
第387图	土墙出土土器 (20)	549	第424图	土墙出土土器 (57)	586
第388图	土墙出土土器 (21)	550	第425图	土墙出土土器 (58)	587
第389图	土墙出土土器 (22)	551	第426图	土墙出土土器 (59)	588
第390图	土墙出土土器 (23)	552	第427图	土墙出土土器 (60)	589
第391图	土墙出土土器 (24)	553	第428图	土墙出土土器 (61)	590
第392图	土墙出土土器 (25)	554	第429图	土墙出土土器 (62)	591
第393图	土墙出土土器 (26)	555	第430图	土墙出土土器 (63)	592
第394图	土墙出土土器 (27)	556	第431图	土墙出土土器 (64)	593
第395图	土墙出土土器 (28)	557	第432图	土墙出土土器 (65)	594
第396图	土墙出土土器 (29)	558	第433图	土墙出土土器 (66)	595
第397图	土墙出土土器 (30)	559	第434图	土墙出土土器 (67)	596
第398图	土墙出土土器 (31)	560	第435图	土墙出土土器 (68)	597
第399图	土墙出土土器 (32)	561	第436图	土墙出土土器 (69)	598
第400图	土墙出土土器 (33)	562	第437图	土墙出土土器 (70)	599
第401图	土墙出土土器 (34)	563	第438图	土墙出土土器 (71)	600
第402图	土墙出土土器 (35)	564	第439图	土墙出土土器 (72)	601
第403图	土墙出土土器 (36)	565	第440图	土墙出土土器 (73)	602
第404图	土墙出土土器 (37)	566	第441图	土墙出土土器 (74)	603
第405图	土墙出土土器 (38)	567	第442图	土墙出土土器 (75)	604
第406图	土墙出土土器 (39)	568	第443图	土墙出土土器 (76)	605
第407图	土墙出土土器 (40)	569	第444图	土墙出土土器 (77)	606
第408图	土墙出土土器 (41)	570	第445图	土墙出土土器 (78)	607
第409图	土墙出土土器 (42)	571	第446图	土墙出土土器 (79)	608
第410图	土墙出土土器 (43)	572	第447图	土墙出土土器 (80)	609
第411图	土墙出土土器 (44)	573	第448图	土墙出土土器 (81)	610
第412图	土墙出土土器 (45)	574	第449图	土墙出土土器 (82)	611
第413图	土墙出土土器 (46)	575	第450图	土墙出土土器 (83)	612
第414图	土墙出土土器 (47)	576	第451图	土墙出土土器 (84)	613
第415图	土墙出土土器 (48)	577	第452图	土墙出土土器 (85)	614
第416图	土墙出土土器 (49)	578	第453图	土墙出土土器 (86)	615
第417图	土墙出土土器 (50)	579	第454图	土墙出土土器 (87)	616

第455図	土壙出土土器 (88)	617	第492図	土壙出土土器 (125)	654
第456図	土壙出土土器 (89)	618	第493図	土壙出土土器 (126)	655
第457図	土壙出土土器 (90)	619	第494図	土壙出土土器 (127)	656
第458図	土壙出土土器 (91)	620	第495図	土壙出土土器 (128)	657
第459図	土壙出土土器 (92)	621	第496図	土壙出土土器 (129)	658
第460図	土壙出土土器 (93)	622	第497図	土壙出土土器 (130)	659
第461図	土壙出土土器 (94)	623	第498図	土壙出土土器 (131)	660
第462図	土壙出土土器 (95)	624	第499図	土壙出土土器 (132)	661
第463図	土壙出土土器 (96)	625	第500図	土壙出土土器 (133)	662
第464図	土壙出土土器 (97)	626	第501図	土壙出土土器 (134)	663
第465図	土壙出土土器 (98)	627	第502図	土壙出土土器 (135)	664
第466図	土壙出土土器 (99)	628	第503図	土壙出土土器 (136)	665
第467図	土壙出土土器 (100)	629	第504図	土壙出土土器 (137)	666
第468図	土壙出土土器 (101)	630	第505図	土壙出土土器 (138)	667
第469図	土壙出土土器 (102)	631	第506図	土壙出土土器 (139)	668
第470図	土壙出土土器 (103)	632	第507図	土壙出土土器 (140)	669
第471図	土壙出土土器 (104)	633	第508図	遺物集中出土土器 (1)	673
第472図	土壙出土土器 (105)	634	第509図	遺物集中出土土器 (2)	674
第473図	土壙出土土器 (106)	635	第510図	遺物集中出土土器 (3)	675
第474図	土壙出土土器 (107)	636	第511図	遺物集中出土土器 (4)	676
第475図	土壙出土土器 (108)	637	第512図	遺物集中出土土器 (5)	677
第476図	土壙出土土器 (109)	638	第513図	遺物集中出土土器 (6)	678
第477図	土壙出土土器 (110)	639	第514図	遺物集中出土土器 (7)	679
第478図	土壙出土土器 (111)	640	第515図	遺物集中出土土器 (8)	680
第479図	土壙出土土器 (112)	641	第516図	遺物集中出土土器 (9)	681
第480図	土壙出土土器 (113)	642	第517図	遺物集中出土土器 (10)	682
第481図	土壙出土土器 (114)	643	第518図	遺物集中出土土器 (11)	683
第482図	土壙出土土器 (115)	644	第519図	遺物集中出土土器 (12)	684
第483図	土壙出土土器 (116)	645	第520図	埋葬出土土器	685
第484図	土壙出土土器 (117)	646	第521図	柱穴列出土土器	686
第485図	土壙出土土器 (118)	647	第522図	焼土跡出土土器 (1)	688
第486図	土壙出土土器 (119)	648	第523図	焼土跡出土土器 (2)	688
第487図	土壙出土土器 (120)	649	第524図	焼土跡出土土器 (3)	689
第488図	土壙出土土器 (121)	650	第525図	不明遺構出土土器 (1)	690
第489図	土壙出土土器 (122)	651	第526図	不明遺構出土土器 (2)	691
第490図	土壙出土土器 (123)	652	第527図	不明遺構出土土器 (3)	692
第491図	土壙出土土器 (124)	653	第528図	グリッドピット出土土器 (1)	696

第529図	グリッドピット出土土器 (2) ……	696	第566図	土壇出土土製品 (7) ……	759
第530図	グリッドピット出土土器 (3) ……	697	第567図	土壇出土土製品 (8) ……	760
第531図	グリッドピット出土土器 (4) ……	698	第568図	土壇出土土製品 (9) ……	761
第532図	グリッドピット出土土器 (5) ……	699	第569図	土壇出土土製品 (10) ……	762
第533図	グリッドピット出土土器 (6) ……	700	第570図	土壇出土土製品 (11) ……	763
第534図	住居跡出土土製品 (1) ……	715	第571図	土壇出土土製品 (12) ……	764
第535図	住居跡出土土製品 (2) ……	716	第572図	土壇出土土製品 (13) ……	767
第536図	住居跡出土土製品 (3) ……	720	第573図	土壇出土土製品 (14) ……	768
第537図	住居跡出土土製品 (4) ……	721	第574図	土壇出土土製品 (15) ……	769
第538図	住居跡出土土製品 (5) ……	722	第575図	遺物集中出土土製品 (1) ……	771
第539図	住居跡出土土製品 (6) ……	723	第576図	遺物集中出土土製品 (2) ……	772
第540図	住居跡出土土製品 (7) ……	724	第577図	不明遺構出土土製品 ……	773
第541図	住居跡出土土製品 (8) ……	725	第578図	グリッドピット出土土製品 ……	773
第542図	住居跡出土土製品 (9) ……	727	第579図	遺構出土石鏃 ……	786
第543図	住居跡出土土製品 (10) ……	728	第580図	遺構出土石鏃・ スクレイパー (石匙) ……	787
第544図	住居跡出土土製品 (11) ……	729	第581図	遺構出土スクレイパー (石匙・石筥) ……	788
第545図	住居跡出土土製品 (12) ……	730	第582図	遺構出土二次加工剥片・礫器 ……	789
第546図	住居跡出土土製品 (13) ……	731	第583図	遺構出土礫器 ……	790
第547図	住居跡出土土製品 (14) ……	732	第584図	遺構出土打製石斧 (1) ……	791
第548図	住居跡出土土製品 (15) ……	733	第585図	遺構出土打製石斧 (2) ……	792
第549図	住居跡出土土製品 (16) ……	734	第586図	遺構出土打製石斧 (3) ……	793
第550図	住居跡出土土製品 (17) ……	735	第587図	遺構出土打製石斧 (4) ……	794
第551図	住居跡出土土製品 (18) ……	740	第588図	遺構出土磨製石斧 (1) ……	795
第552図	住居跡出土土製品 (19) ……	741	第589図	遺構出土磨製石斧 (2) ……	796
第553図	住居跡出土土製品 (20) ……	742	第590図	遺構出土砥石 (1) ……	797
第554図	住居跡出土土製品 (21) ……	743	第591図	遺構出土砥石 (2) ……	798
第555図	堅穴状遺構出土土製品 (1) ……	745	第592図	遺構出土砥石 (3) ……	799
第556図	堅穴状遺構出土土製品 (2) ……	747	第593図	遺構出土砥石 (4) ……	800
第557図	堅穴状遺構出土土製品 (3) ……	748	第594図	遺構出土敲石 (1) ……	801
第558図	堅穴状遺構出土土製品 (4) ……	749	第595図	遺構出土敲石 (2) ……	802
第559図	堅穴状遺構出土土製品 (5) ……	750	第596図	遺構出土凹石 ……	803
第560図	土壇出土土製品 (1) ……	751	第597図	遺構出土磨石 (1) ……	804
第561図	土壇出土土製品 (2) ……	754	第598図	遺構出土磨石 (2) ……	805
第562図	土壇出土土製品 (3) ……	755	第599図	遺構出土磨石 (3) ……	806
第563図	土壇出土土製品 (4) ……	756	第600図	遺構出土磨石 (4) ……	807
第564図	土壇出土土製品 (5) ……	757			
第565図	土壇出土土製品 (6) ……	758			

第601図	遺構出土磨石 (5)	808
第602図	遺構出土磨石 (6)	809
第603図	遺構出土磨石 (7)	810
第604図	遺構出土磨石 (8)	811
第605図	遺構出土磨石 (9)	812
第606図	遺構出土磨石 (10)	813
第607図	遺構出土石皿 (1)	814
第608図	遺構出土石皿 (2)	815
第609図	遺構出土石皿 (3)	816
第610図	遺構出土石皿 (4)	817

第611図	遺構出土石皿 (5)	818
第612図	遺構出土台石	819
第613図	遺構出土軽石類	820
第614図	遺構出土石錘・石棒	821
第615図	遺構出土石棒	822
第616図	遺構出土石剣	823
第617図	遺構出土独鈷石・石冠	824
第618図	遺構出土岩版・垂飾・不明品	825
第619図	遺構出土骨製品	835

表 目 次

(第2分冊)

第17表	遺構出土復元土器観察表 (1)	701
第18表	遺構出土復元土器観察表 (2)	702
第19表	遺構出土復元土器観察表 (3)	703
第20表	遺構出土復元土器観察表 (4)	704
第21表	遺構出土復元土器観察表 (5)	705
第22表	遺構出土復元土器観察表 (6)	706
第23表	遺構出土復元土器観察表 (7)	707
第24表	遺構出土復元土器観察表 (8)	708
第25表	遺構出土復元土器観察表 (9)	709
第26表	遺構出土復元土器観察表 (10)	710
第27表	遺構出土復元土器観察表 (11)	711
第28表	遺構出土復元土器観察表 (12)	712
第29表	遺構出土耳飾り観察表 (1)	774
第30表	遺構出土耳飾り観察表 (2)	775
第31表	遺構出土土製円盤観察表 (1)	775

第32表	遺構出土土製円盤観察表 (2)	776
第33表	遺構出土土製円盤観察表 (3)	777
第34表	遺構出土土製円盤観察表 (4)	778
第35表	遺構出土土製円盤観察表 (5)	779
第36表	遺構出土石器観察表 (1)	826
第37表	遺構出土石器観察表 (2)	827
第38表	遺構出土石器観察表 (3)	828
第39表	遺構出土石器観察表 (4)	829
第40表	遺構出土石器観察表 (5)	830
第41表	遺構出土石器観察表 (6)	831
第42表	遺構出土石器観察表 (7)	832
第43表	遺構出土石器観察表 (8)	833
第44表	遺構出土石器観察表 (9)	834
第45表	遺構出土骨製品観察表	835

V. 北盛土の遺物

1. 土器

(1) 住居跡出土土器

第99号住居跡出土土器 (第239図1~4、第275~277図)

1は丸底の鉢で、水平口縁に鱗状の突起を配し、胴上半部には帯縄文を巡らせて突起を配する。胴中段に押圧隆帯、胴下半部には弧状の擦り消しモチーフを巡らせる。安行3b式である。

2は台付き鉢で、円柱状で裾が「ハ」の字に開く。体部との境に眼鏡状隆帯を巡らせるほかは無文である。安行3aから3b式であろう。

3・4は無文の深鉢で、4は内湾する口縁部で、口唇断面肥厚して外面に指頭の押圧を残す。晩期安行式の土器であろう。

第275~277図は破片資料である。

1は称名寺式、2は堀之内1式である。3~5は加曾利B式である。

6~59は安行式である。6~11は大波状口縁深鉢で、6は安行1式、7は安行2式、8~11は安行3aから3b式であろう。

12~19は水平口縁深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画を持ち貼り瘤を持つものである。14・15は安行2から3a式である。19は安行3aから3b式であろう。

20~26は砲弾形の深鉢である。20・21・23は安行2から3a式、22は安行3b式である。27は中央に押圧を持つ円形貼り付け文の土器で、安行3c式であろう。

28~30は精製深鉢胴部で、大波状口縁深鉢に伴うものであろう。28は安行3a式、29・30は安行3b式である。

31~36は水平口縁深鉢で、口縁直立ないし外反して擦り消し文様を持つものである。34・35は安行2式、31~33は安行3b式、36は安行3bから

3c式か。37・38はこれらに伴う胴部で、安行3aから3b式であろう。

39~46は頸部屈曲して口縁外反する深鉢で、安行3aから3b式である。47は細密沈線文の土器で、安行3b式であろう。

48・49は台付き鉢で、48は安行2式の口縁部、49は安行3b式の脚台部である。

50~54は浅鉢で、50・51は安行3aから3b式、52~54は安行3bから3c式であろう。

55・56は壺の胴部で、安行3b式であろう。55は貼り瘤を中心に入り組み三叉文を描き、赤色顔料が付着する。57は瓢形の深鉢で、安行3c式か。58・59も安行3c式の深鉢であろう。

60は鍵の手文を描く土器で、信州系の佐野Ib式か。

61~82は安行式の粗製深鉢である。いずれも胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾する。61~64は胴上半部に文様帯を持たない。61は口縁外面に装飾を持たない。62・63は押圧隆帯を巡らせる。64は口縁外面に段を持って押し引き文と平行沈線を巡らせる。

65~82は胴上半部に文様帯を持つ土器である。65~71・75~78は平行沈線で斜行文や弧線文・対弧文等を描くもので、75は口縁部の隆帯が反転して胴部に侵入する。いずれも安行3aから3b式であろう。

79~82は擦り消し縄文を持つ土器で、安行3b式であろう。72~74は幅広の沈線で文様を描き、73は沈線間に列点文を充填する。安行3c式であろう。

83以下は無文土器である。83は口端上に押圧を巡らせる。84~96は折り返し口縁の土器である。90~96は扁平な折り返し口縁で、95・96は末端

が反り返る。97～102は口唇断面肥厚する。103・104は単純な内湾口縁である。

105・106は製塩土器である。105は口端を水平に切り落とし、106は外削ぎ状に整形している。

第100号住居跡出土土器（第239図5～第241図22、第278～284図）

5は大波状口縁深鉢で、波頂部に刻みを持つ縦瘤を配し、胴上半部には帯縄文で三角形区画文を描いて豚鼻突起を配する。安行3 a 式であろう。

6・7は砲弾形深鉢で、6は口縁外面に帯縄文で楕円形区画文を描いて接点に縦瘤と豚鼻突起を配する。安行3 a から3 b 式であろう。7は口縁外面に帯縄文を3段巡らせて縦瘤を配し、胴部に条線を施文する。安行1 式であろう。

8は安行式の精製深鉢で、帯縄文を2段巡らせ、刻みを持つ縦瘤を配して結紐状のモチーフを描く。安行2 から3 a 式か。

9・10は水平口縁の深鉢で、9は口端上に三角形の小突起を巡らせ、胴上半部には縦位の鋸歯文と蛇行沈線文を交互配置し、胴部屈曲して平行沈線を巡らせ、胴下半部には条線を施文する。安行2 式であろう。10は水平口縁で胴部中段に緩い段を持ち、帯縄文で器面を多段に区画して入り組み文を描く。安行3 a 式である。

11は瓢形土器であろう。強い内湾口縁で口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文と押し引き文を巡らせ、胴上半部には対向弧線文を巡らせる。後期安行式であろう。

12は精製土器で、胴部中段に平行沈線文を巡らせてボタン状の貼り付け文を配し、胴下半部に縄文を施文する。安行3 b から3 c 式か。

13は水平口縁の深鉢で、一本調子に開く単調な器形で、口縁は断面三角形に張り出す折り返し口縁である。胴上半部に文様帯を持って不規則かつ粗雑な沈線文を描き、下端を1条の沈線で区画する。器面は比較的良く研磨している。口縁の特徴が晩期前葉の粗製土器に類似しており、同時期の

土器と考えられる。

14は丸底の鉢であろう。緩やかな波状口縁で、波頂部に小突起を配する。胴上半部に三叉文や入り組み文を描いて縄文を施文し、胴部中段に眼鏡状隆帯を巡らせる。安行3 a から3 b 式である。

15～17は浅鉢で、いずれも安行2 から3 a 式であろう。15はボウル状の浅鉢で、緩やかな波状口縁の波頂部に対をなす鱗状突起を配し、外面に刻みを持つ縦瘤、内面に渦巻き文を配する。胴部には対向弧線文を巡らせて縄文を施文する。16は平底で、直線的に開く皿状の器形である。口縁外面に帯縄文と対向弧線文を巡らせ、胴下半部には条線を施文する。底部周縁には段を持って沈線を巡らせる。17は胴部には対向弧線文を描き、底部周縁に帯縄文を巡らせる。

18は注口土器で、胴部に多段の帯縄文を巡らせ、注口部下面には二叉の瘤を配する。

19～21は安行式の粗製深鉢である。内湾する水平口縁で口唇断面肥厚する。19・20は条線地文で、口縁外面と胴部中段に押圧隆帯を巡らせる。19は胴上半部に弧線文を描く。20は後期末から晩期前葉の土器であろう。21は条線を施文せず、口縁外面に段を持って胴部中段に沈線を巡らせる。晩期の土器であろう。

22は小波状口縁の深鉢で、晩期前葉の土器か。第278～284図は破片資料である。

1は加曾利EⅢ式、2は称名寺式である。

3～6は堀之内1 式、7は堀之内2 式で口縁内湾する鉢である。8・9は加曾利B 1 式である。

10は加曾利B 2 式で遠部第三類、11は遠部第一類で、加曾利B 3 から曾谷式であろう。

12は高井東式の山形波状口縁深鉢、13は曾谷式で瓢形深鉢であろう。

14～106は安行式である。14～25は大波状口縁深鉢である。14～17・20は安行2 式、18・19・21は安行3 a 式である。23・24は安行3 a から3 b 式、25は姥山系の土器で安行3 b 式であろう。

26～38は水平口縁深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画を描く土器である。26～29は安行1式、30～32・34は安行2から3a式である。33・35は安行3a式か。

39～58は砲弾形の深鉢である。41～43・50は安行1式、44・47は安行2式であろう。45・46・48・49・57は安行2から3a式、52は安行3b式であろう。

58～62は瓢形深鉢である。安行1式とみられるが、口縁外面に帯縄文の区画を持たない。58は時期が下る可能性がある。

63～68はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。64・65は安行2式の大波状口縁深鉢であろう。66～68は安行1式で瓢形深鉢であろう。

69～82は擦り消し文様を描く水平口縁深鉢で、安行3aから3b式である。70～72は弧線文の土器、73・74は入り組み文の余白を三叉文で埋めている。75・77・81は入り組み三叉文で、安行3b式であろう。

83～89は安行3c式である。83は姥山系の波状口縁深鉢、84は胴張りの深鉢ないし鉢か。85・86は浅鉢ないし台付き鉢であろう。水平口縁で、外面に列点文を巡らせる。87は口縁に山形の小突起を巡らせ、入り組み文を描く。

90～99は台付き鉢である。90・91・93は安行1式、92は安行2式である。94は安行2から3a式か。95は安行3aから3b式の胴部であろう。

96～99は脚台部である。96・97は安行1から2式、98・99は安行3aから3b式であろう。

100～102・105は胴部中段が張り出す鉢である。103・104は浅鉢で、103は台付き鉢の可能性もある。いずれも安行3aから3b式である。106は注口土器の胴部で安行2式である。

107は東北系の新地式で、壺の胴部であろう。

108～185は安行式に伴う粗製深鉢である。108～153は胴上半部の文様帯を持たない土器である。108・109は口縁外面に沈線を巡らせる。110～118

は押し引き文と沈線の区画を巡らせる。119～140は押圧隆帯や刻み隆帯の区画を巡らせる。

141～153は口縁外面に段を持ち、141～146は段の上、147～153は段の下に押し引き文を巡らせる。146は段に沿って沈線を巡らせる。

154～185は胴上半部に文様帯を持つ土器である。154は縦位の平行沈線文、155～157は平行沈線の斜行文である。158～171は弧線文を描く土器で、158・161～164は対弧文である。

172～174は縦位の蛇行沈線文である。175～177は口縁の隆帯が反転して胴上半部に侵入する。178～180は擦り消し文様を描く。181～185は平行沈線間に列点文を施文する。

186～202は無文の深鉢口縁部である。186・187は折り返し口縁、188・189は口唇断面肥厚して外削ぎ状になるものである。190～202はいずれも内湾口縁で口唇断面肥厚する。191・195・196は内面に段を持つ。

203～208は製塩土器である。203～207は口縁部である。いずれも口唇断面は角頭棒状で、特に204・206は寛で切り落としたように水平になっている。

209は網代痕を持つ底部で、安行式であろう。

第101号住居跡出土土器（第284・285図）

第284・285図は破片資料である。

1・2は堀之内1式、3は堀之内2式である。4・5は加曾利B2式で、遠部第四類である。6は瓢形深鉢で、加曾利B3から曾谷式である。7は遠部第一類で、やはり加曾利B3から曾谷式段階の土器であろう。8は縄文のみの深鉢口縁部で、後期前葉から中葉の粗製土器であろう。

9～21は安行式である。9～11は水平口縁深鉢で、外面に帯縄文を巡らせるものである。9・10は安行1式、11は安行2から3a式であろう。

12～14は砲弾形の深鉢で、12・14は安行1式、13は安行3a式か。14は瓢形深鉢の可能性もある。15・16はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。後

期安行式に伴うもので、非常に薄手であり、瓢形深鉢とみられる。

17～21は台付き鉢である。いずれも後期安行式とみられる。18は豚鼻突起を持つ安行2式である。21は浅鉢で、安行3aから3b式であろう。

22～28は安行式に伴う粗製深鉢である。22は口縁外面に刻み目文+沈線を巡らせる土器で、後期安行式であろう。23・24は押圧隆帯を巡らせる土器で、後期末から晩期初頭の土器か。

25～28は胴上半部に文様帯を持つ土器で、大半が晩期前葉の土器であろう。29は無文の浅鉢である。30は晩期の製塩土器で、火熱により器面が剥落している。

第102号住居跡出土土器 (第241図23、第285・286図)

23は条線を施文する深鉢で、安行式である。

第285・286図は破片資料である。

1～3は堀之内1式で、1は称名寺系の土器である。4は加曾利B1式で内文ある浅鉢、5は加曾利B2式である。

6～21は安行式である。6は大波状口縁深鉢、15・16はこれに伴う深鉢胴部で安行2式である。7～12は砲弾形の深鉢で、7は安行1式、8～10・12は安行2式であろう。

13・14は擦り消し文様を描く水平口縁深鉢で、13は安行2式、14は安行3b式であろう。

17～19は台付き鉢で、17・18は安行1式の口縁部、19は安行3aから3b式の脚台部で、三叉文風の透かし文様を持つ。20・21は浅鉢で、20は安行3aから3b式、21は安行3c式である。

22～32は安行式に伴う粗製深鉢である。22～29は胴部に文様帯を持たない。口縁直立する22は安行1式であろう。30～32は弧線文を描く。

33は口端上に刻み目を持つ横長の突起を持つ浅鉢で、晩期安行式であろう。34・35は無文の深鉢である。36は晩期の製塩土器である。

37は底面に文様を持つ浅鉢で、安行3aから3b式であろう。

第103号住居跡出土土器 (第241図24、第286・287図)

24は台付き鉢で、短く直線的に開く高台状で、全面に縄文を施文する。晩期の土器であろう。

第286・287図は破片資料である。

1は10段多条の羽状縄文で、早期末から前期初頭の土器である。2・4は直線的な擦り消し縄文で、加曾利EⅣから称名寺式である。3・5は堀之内1式である。6～8は櫛歯状工具の集合沈線を描く土器で、堀之内式であろう。9・10は遠部第一類で、10は加曾利B2式、9は加曾利B3から曾谷式期の土器であろう。

11～33は安行式である。11は大波状口縁深鉢で安行2式である。12～19は砲弾形の深鉢で、12・13は安行1式、14・15は安行2から3a式である。20は瓢形深鉢で安行2式であろう。28～30・31はこれら精製土器に伴う深鉢胴部で、28・30は安行1式、29・32は安行2式である。

21は浅鉢ないし台付き鉢で、後期末葉の土器であろう。22～24は胴部中段が張り出す鉢で安行3aから3b式である。

25は頸部がくびれて口縁外反する深鉢、26・27は浅鉢で、安行3aから3b式である。32・33は台付き鉢で、32は体部、33は脚台部である。安行3aから3b式であろう。

34～49は安行式に伴う粗製深鉢である。34～37は安行1式か。無文地に太い沈線で文様を描く46～48は安行3bから3c式。他は後期末から晩期前葉の土器であろう。

50～52は無文の深鉢である。

53～56は晩期の製塩土器で、口端は53・56は断面角頭棒状、54・55は竈で切り離したような内削ぎ状となっている。

第104号住居跡出土土器 (第241図25～第247図58、第288～295図)

25は高井東式の大波状口縁深鉢で、無文で、口縁外面に隆帯を巡らせ、波底部に円形の瘤を配する。

26～33は安行式の精製深鉢である。26は大波状口縁深鉢で、波頂部に形骸化した二段の豚鼻突起を配し、胴上半部には帯縄文で菱形の区画を構成して豚鼻突起を配する。安行3b式である。27～29は水平口縁深鉢で、いずれも安行1式である。口縁外面に帯縄文を巡らせて縦瘤を配し、胴部には半円状の擦り消しモチーフを巡らせる。30は瓢形土器である。胴部中段にくびれを持ち、胴上半部に樽状入り組み文、胴下半部に対向弧線文を描く。安行1式であろう。31・32は安行1から3b式であろう。31は胴下半部に平行沈線を巡らせて無文部とし、それ以外を縄文で埋めている。32は胴部中段に対向弧線文を描き、胴下半部は縄文帯としている。底部の裾に段を持つ。33は安行3d式で、水平口縁で、口縁部から胴上半部にかけて菱形区画文を多段に配置し、内部に対向三叉文を描く。胴部中段には平行沈線+列点文の区画を巡らせて、胴下半部に連続弧線文を描く。

34～43は安行式の粗製深鉢である。34～39は口縁直立する土器で、後期安行式に伴うものであろう。34・36はいずれも外面に条線以外の装飾を持たない。34は縦位の条線を施文する。36は胴部中段に押し引き文を巡らせ、胴上半部に横位の条線を施文する。35は胴部中段に平行沈線の区画を巡らせ、胴上半部は縦位、下半部は斜位の条線を施文する。37は口縁外面に押し引き文を巡らせ、胴部中段に平行沈線の区画を持つ。胴上半部に縦位の条線を施文するが、胴下半部は無文である。38は口縁外面に押し引き文+沈線の区画を巡らせ、縦位の条線を施文する。39は口唇断面著しく肥厚して内面が突出する。口縁と胴部中段に押し引き文+沈線の区画を巡らせて、縦位の条線を施文する。40～42は胴上半部に文様帯を持つ土器である。40は口縁強く内湾して口唇断面肥厚する。口縁外面と胴部中段に刻み隆帯を巡らせ、胴上半部に縦位の刻み隆帯を2本一組で貼り付ける。地文条線を持たない。晩期前葉の土器であろう。41は口縁

直立して、口縁と胴部中段に押圧隆帯を巡らせ、胴上半部にも縦位の隆帯を配する。縦位の条線を地文とする。後期末から晩期初頭の土器であろう。42は胴部中段に刻み隆帯を巡らせ、胴上半部に擦り消し文様を描く。地文条線を持たない。安行3b式であろう。43は口縁内湾して外面に段を持つ。胴上半部から中段にかけて横位の条線を施文する。晩期の土器であろう。

44～47は地文条線で、安行式に伴うものである。48は無文土器である。

49は口縁強く内湾して口唇断面肥厚する。口縁外面に段を持って縄文を施文し、胴部に条線を施文する。安行3aから3b式か。

50は無文の底部である。

51・52は安行式の付け鉢である。51は球状の脚台部で、帯縄文を多段に巡らせ、中段には弧線文を巡らせる。後期安行式であろう。52は裾部に平行沈線+列点文を巡らせ、疎らな条線を施文する。晩期前葉の土器か。

53～58は浅鉢である。53は口縁外面に帯縄文を巡らせて、「ノ」の字状の瘤を配する。曾谷式から安行1式であろう。54は口縁外面に3段の帯縄文を巡らせる。後期安行式に伴うものか。55は水平口縁に山形の小突起を配し、口端上に列点文を巡らせる。胴上半部には粗雑な三角形区画文を描き、文様帯下端を平行沈線で区画する。安行3c式か。56・57は無文の浅鉢である。56は底面広く、胴部はほぼ直立して口縁内湾する。57はボウル状の鉢、58は浅い半球状の鉢で、入り組み三叉文を描く。安行3b式であろう。

第288～295図は破片資料である。

1～3は堀之内1式である。4は堀之内式に伴う粗製土器であろう。5は加曾利B1式、6・7は加曾利B2式であろう。9は加曾利B3式である。

8・10は瓢形深鉢で、加曾利B3から曾谷式であろう。11～16は紐線文の深鉢で、13・14は加曾

利B3から曾谷式、他は加曾利B2式であろう。17は口縁に縄文帯を持つ深鉢で、加曾利B式であろう。

18～23は高井東式の大波状口縁深鉢である。24～29は曾谷式である。30～31は吊り手土器で、高井東式に伴うものであろう。

32～141は安行式である。32～42は大波状口縁深鉢である。32～35は安行1式、36は安行2式、37～39は安行3a式、40・41は安行3b式である。42は安行2から3a式であろう。

43～62は水平口縁深鉢で、外面に帯縄文の区画と貼り瘤を持つ。安行1式であろう。63～83は砲弾形深鉢である。63は安行1式、64～67は安行2から3a式、68～71は安行3aから3b式であろう。75～77・80・81は瓢形深鉢の可能性ある。84～94は瓢形深鉢で、安行1式である。

95～110はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。95～101は後期安行式、109・110は安行3aから3b式である。

111～119は擦り消し文様を描く水平口縁深鉢で、安行3aから3b式である。112～114は安行3a式で、112は壺や注口土器の可能性ある。119は安行3b式である。

120～124は安行3c式で、122は姥山系の土器である。

125～131は台付き鉢である。大半が安行1式であろう。128・131は脚台である。132～135は胴部中段が張り出す鉢である。安行3aから3b式であろう。

136～138は浅鉢、139～141は注口土器で、いずれも安行3aから3b式である。142は新地式の壺である。

143～207は安行式に伴う粗製深鉢である。

143～180は胴部に文様帯を持たない。143～151は口縁部に装飾を持たない。152は口縁外面に沈線を巡らせる。153～165は口縁外面に押し引き文を巡らせる土器で、153・154・156～160は安行1

式であろう。

166～168は口縁外面に押し引き文と沈線の区画を巡らせる。166・169は胴部中段に平行沈線と押し引き文を巡らせる。166は安行1式であろう。

170～176は押圧隆帯、177・178は刻み隆帯を巡らせる。179・180は口縁外面に段を持つ。

177～207は胴上半部に文様を描く土器である。181は平行沈線の斜行文、182～189は各種の弧線文を描く。190～194は斜行文と弧線文を交互配置する。195・199は横V字のモチーフと弧線文を組み合わせる。206・207は沈線間に列点文を施文する土器である。

208～231は無文土器である。208は二又の山形波状口縁である。209は頸部屈曲し、口端上に押圧を巡らせる。210・211は口端外屈する。212・213は折り返し口縁である。214～216は口唇断面肥厚して外面に緩やかな段を持つ。217・218は口端内屈する。219～222は口唇断面肥厚して内面に段を持つ。229は無文の浅鉢で、外面に貼り瘤を持ち、内面に赤色顔料が付着している。

232～235は製塩土器である。口端部は、232・233は竈で切り落としたような内削ぎ状、234・235は指で摘み出したように先細りになっている。

第105号住居跡出土土器（第247図59～第249図83、第296～301図）

59・60は砲弾形の深鉢である。59は口縁内湾して口端直立する。口縁外面に帯縄文を巡らせて扁平な豚鼻突起を配する。胴部中段には緩やかな弧線文を描いて、これに沿って縄文を施文する。安行3b式であろう。60は口縁から胴上半部にかけて2段の紡錘文を巡らせ、接点に簡略化した豚鼻突起を配する。文様帯下端は平行沈線で区画し、縄文を施文しない。安行3bから3c式であろう。

61は水平口縁深鉢で、胴部中段にくびれを持って口縁外傾し、口端上に小突起と豚鼻突起を配する。胴上半部と胴部中段に文様帯を持って粗雑な対向三又文や弧線文を描き、矮小な豚鼻突起を配

する。安行3 b式であろう。

62は砲弾形の深鉢で、安行3 c式であろう。胴上半部に文様帯を持って斜行文と弧線文を交互配置し、地文を持たない。

63はほぼ無文の砲弾形深鉢で、口縁外面に段を持ち、胴上半部に粗雑な沈線文を持つ。晩期前葉から中葉の土器であろう。

64・65・67～70は台付き鉢である。64は内湾しつつ単調に開き、65は口縁外屈する。胴上半部に入り組み文を描いて間隙を三叉文で埋める。64は胴下半部に帯縄文を巡らせる。65は胴下半部に縄文を施文し、脚台部は円孔を挟んで三叉文を描くものとみられる。67～70は脚台部である。67～69は晩期前葉の土器とみられる。67は体部との境に楕円形の深い押圧を巡らせるが、これは眼鏡状隆帯をイメージしたものか。脚台部には弧線文を巡らせて円孔を配する。68は弧線文を巡らせて間隙を三叉文で埋めている。安行3 a式であろう。69は帯縄文を巡らせる。70は胴部との境を眼鏡状隆帯で区画する。胴部には条線を施文し、脚台部は無文である。晩期前葉の土器であろう。

66・71・72は注口土器であろう。66は内湾しつつ立ち上がる口縁部で、胴部との境にくびれを持つ。口唇外面に細かな弧線文を巡らせて縄文を施文し、間隙を三叉文で埋めて、下端を沈線で区画する。安行3 a式であろう。71は口縁外面に簡略化した豚鼻突起を多段に配し、胴上半部には帯縄文による粗雑な区画文を描く。胴部中段には刻みを持つ鰭状突起を巡らせている。安行3 b式か。72は胴部中段が「く」の字に張り出すソロバン玉状の器形で、胴上半部に入り組み三叉文を描き、胴下半部は縄文帯とする。安行3 b式であろう。

73～76・78・79は浅鉢である。73は碗状の器形で、胴上半部に文様帯を持って集合沈線文を施文する。晩期安行式に伴う土器であろう。74は水平口縁上に山形突起を配し、弧線文を巡らせて間隙を三叉文で埋めている。胴部中段に帯縄文を巡ら

せ、胴下半部にも弧線文を巡らせている。安行3 a式であろう。75は無文の浅鉢である。波状口縁で、波頂部に刻みを持つ突起を配し、波底部にも豆粒状の小突起を配する。76は外面無文の鉢である。底面広く、上げ底状となる。平面観楕円形で、長軸側の内面に貼り付け文を持つ。晩期安行式と考えたが、高井東式期である可能性もある。78・79は丸底扁平な鉢である。水平口縁に2個一對の小突起を巡らせる。78は入り組み文を描いて間隙に三叉文を配し、79は崩れた玉抱き三叉文である。いずれも文様帯下端を帯縄文で区画する。晩期前葉の土器であろう。

77は壺ないし注口土器であろう。胴部内湾して頸部直立し、口縁はわずかに外反する。頸部に平行沈線と短沈線の区画を巡らせて、上下にまたがって円文を描く。晩期安行式に伴う土器であろう。

80～83は深鉢底部である。83は斜位の条線を施文し、他は無文である。いずれも安行式に伴うものであろう。

第296～301図は破片資料である。

1は関山式、2は諸磯a式、3は諸磯c式、4は興津式である。5・6は称名寺式で、6は時期が下るかもしれない。7～12は堀之内1式である。13は櫛歯状工具の条線を施文する土器で、堀之内式であろう。

14～17は加曾利B 2式であろう。18～22は紐線文の土器で、22が加曾利B 2式、他は加曾利B 3から曾谷式であろう。23～27は曾谷・高井東式である。

28～93は安行式である。28～39は大波状口縁深鉢で、28・29は安行1式、30・31・35・36・39は安行3 a式、32～34・37は安行3 b式である。38は姥山系の土器で、安行3 bから3 c式であろう。

40～45は水平口縁深鉢で、外面に帯縄文の区画を巡らせて貼り瘤を配する土器である。45は安行3 a式か。他は安行1式であろう。46～55は砲弾

形の深鉢で、46～48は安行1式、49～51は安行2から3a式である。

56～60はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。56は安行1式、57・59・60は安行3b式である。58は安行3aから3b式であろう。

61～63は波状口縁で頸部屈曲し、擦り消し文様を描く土器で、安行3aから3b式である。64～69は水平口縁で擦り消し文様を描く土器で、67は安行2式、他は安行3aから3b式であろう。70は安行3c式の浅鉢である。

71～76は台付き鉢である。71は口縁部で安行1式、他は脚台部で、74が安行3bから3c式、他は安行3aから3b式であろう。

77～88は浅鉢である。77・78は安行3a式、他も安行3aから3b式であろう。89・90は壺で、89は安行3a式、90は安行3b式である。91～93は安行2式の注口土器であろう。

94～97は異系統の土器で、94・95は天神原式、96は前浦式、97は佐野Ib式である。

98～135は安行式に伴う粗製深鉢である。98～110は胴部に文様を持たない。91・101・102は安行1式であろう。111～134は胴上半部に文様帯を持つ。111は斜行文の交点に豚鼻突起を配する。121・130～132は擦り消し文様を描く安行3b式、120・124～128・133・134は安行3bから3c式であろう。135は胴部中段に刻み隆帯の区画を持つ。

136～156は無文土器である。136～140は折り返し口縁で、140は内面にも段を持つ。141～148は口唇断面肥厚する。143～148は内面に段を持つ。149・150は口端上に突起を配する。

157～161は製塩土器で、157～159は口端が内削ぎ状、160・161は指で摘み出したような先細りである。162・163は無文の浅鉢である。

第106号住居跡出土土器（第249図84～第251図104、第301～303図）

84は緩やかな5単位の波状口縁で、波頂部に刻

みを持つ縦瘤を配する。胴上半部に文様帯を持って入り組み文を描き、胴下半部には疎な条線を施文する。安行3a式である。

85・86は水平口縁深鉢である。85は口端上に円柱状の小突起を配し、口縁外面に平行沈線文を巡らせて刻みを持つ縦瘤を配する。胴上半部には同心円文を描いて平行沈線文で連繫し、文様帯下端を幅広の凹線で区画する。胴下半部にはごく浅い条線を施文する。文様帯部分は良好に研磨するが、条線部分は削り調整を残している。北関東晩期中葉の天神原式である。86は小型の水平口縁深鉢である。折り返し口縁で、胴上半部に文様帯を持って上下を単沈線で区画し、平行沈線の粗雑な斜行文を巡らせる。胴部中段以下は淡い条線を施文する。晩期安行式に伴う土器であろう。

87・88は台付き鉢である。87は口縁強く外反して口唇外面に刻み目を巡らせ、頸部に縦位の条線を施文する。胴部には帯縄文を巡らせる。後期末から晩期初頭の土器であろう。88は半球状の脚台で、裾に平行沈線文と連続弧線文を巡らせる。胴部は無文である。晩期中葉の土器であろう。

89は鉢ないし台付き鉢である。内湾する水平口縁で、口端上に小突起を配し、口縁外面に押圧を持つ縦瘤を配し、帯縄文を3段に巡らせる。胴部中段以下には条線を施文する。安行1式であろう。

90～92は浅鉢である。90・91は胴部中段が張り出して隆帯を巡らせる。90は口縁外反して突起を配し、胴上半部にステッキ状の沈線文を巡らせる。安行3b式であろう。91は内湾口縁で鰭状突起を配し、胴上半部には刻みを持つ横瘤を挟んで対向三叉文を描く。安行3aから3b式である。92は浅いボウル状の鉢で、口縁外屈して外面に縄文を施文し、口端上に小突起を配する。安行3aから3b式であろう。

93は金魚鉢形の鉢で、球胴状で、胴部中段に粗雑な波頭文を重畳させる。底部は裾が張り出して、若干上げ底状となる。94は無文の広口壺である。

95・96は注口土器である。95は胴部中段に最大径を持ち、口縁直立ないし外反するものと思われる。胴上半部に文様帯を持って、円文を中心とした入り組み文を描いて、空隙を肉彫り状の三叉文で埋めている。全体に入念な研磨を施し、光沢を持つ。安行3 a式である。96は無文地に注口を付して、下面に一对の縦線を配する。胴下半部には平行沈線を巡らせる。安行3 c式であろう。

97~101は安行式の粗製深鉢である。97~100は内湾口縁で口唇断面肥厚し、口縁外面と胴部中段に刻み隆帯の区画を巡らせて、胴上半部に文様帯を持つ。97・98は条線地文の土器で、後期末から晩期初頭の土器であろう。97は縦位の平行沈線を描く。98は平行沈線の斜行文を巡らせる。99・100は条線を施文しない土器で、晩期安行式に伴うものであろう。99は蛇行沈線文の左右に対弧文を描く。100は2個一単位に対弧文を描き、胴部の隆帯が反転して文様帯内部に侵入する。101は口縁直立して外面に刻み+沈線の区画を巡らせる。胴部中段には押し引き文+沈線の区画を巡らせて胴上半部を文様帯とし、対向弧線文を描いて内部に条線を充填する。胴下半部には疎らな条線を施文する。安行3 aから3 b式に伴う土器である。

102は口縁が強く内湾する無文深鉢である。103は水平口縁の深鉢で、口端内屈して小突起を配する。胴上半部に平行沈線の斜行文を巡らせて上下を沈線で区画し、胴下半部に淡い条線を施文する。器面を良好に研磨している。安行3 c式か。104は無文の底部である。

第301~303図は破片資料である。

1・2は堀之内1式である。3~5は紐線文の遠部第一類で、加曾利B 2式。6も加曾利B式である。7は高井東式で、大波状口縁の深鉢である。

8~38は安行式である。8~13は大波状口縁深鉢である。8は安行2式、9~12は安行3 a式、13は安行3 b式であろう。

14~20は水平口縁の深鉢で、帯縄文の区画を巡らせて貼り瘤を配するものである。14・17が安行1式、15・16は安行2から3 a式である。21・22は砲弾形の深鉢で、安行3 aから3 b式であろう。23は安行1式の瓢形深鉢である。

24~27は擦り消し文様を描く水平口縁深鉢で、安行3 aから3 b式であろう。28は平行沈線+列点文で文様を描く土器で、安行3 bから3 c式か。

29~34は精製深鉢の胴部である。29は姥山系の土器で安行3 b式、30は安行3 a式の大波状口縁深鉢である。31は安行3 a式、32は後期安行式、33は安行3 b式であろう。

35は胴部中段の張る鉢で、安行3 a式か。36・37は後期安行式の台付き鉢で、37は脚台である。38は浅鉢で、安行3 aから3 b式であろう。

39~66は安行式に伴う粗製深鉢である。39~51は胴上半部に文様帯を持たない。

39は口縁部に装飾を持たない。40は口縁外面に押し引き文を、41は1条の沈線を巡らせる。39・40は安行1式であろう。

42は口縁外面に刻み目文+沈線、43~45は押し引き文+沈線の区画を巡らせる。46・47は紐線文の土器で、曾谷式の可能性もある。48~51は口縁内湾して押圧隆帯を巡らせる土器で、後期末から晩期初頭の土器か。

52~66は胴上半部に文様帯を持つ土器である。52は縦位の平行沈線文、59~62は斜行文である。53・54・57・58は各種の弧線文である。55・56は縦位の蛇行沈線文に弧線文を組み合わせる。63・64は隆帯文の土器で、他の沈線文と組み合わせて用いている。65は口縁部に帯縄文を巡らせる土器で、安行3 b式であろう。

67~69は無文土器で、口唇断面肥厚する。68は内面に段を持ち、69は折り返し口縁である。70は製塩土器で、指で摘み出したような先細りの口縁である。

第107号住居跡出土土器（第251図105~第254図

125、第303～307図)

106は高井東式の大波状口縁深鉢で、口縁外面に凹線を巡らせ、波底部に縦瘤を配する。

106・107は安行1式の大波状口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を多段に巡らせ、波頂部と波底部に縦瘤を重畳させる。106は波頂部台形で円孔を穿つ。107は山形波状口縁で、波頂部に小突起を配する。

108～110は砲弾形深鉢である。108は口縁外面に3段の帯縄文を巡らせて扁平な瘤を配し、胴部中段以下に条線を施文する。曾谷から安行1式であろう。109は口縁外面に2段の楕円文を巡らせて縄文を充填し、接点に刻みを持つ縦瘤を配する。胴部中段以下は無文である。安行3bから3c式であろう。110は瓢形深鉢の可能性もある。口縁外面に断面三角形の刻み隆帯を2段に巡らせ、間を幅広い凹線としている。胴部には淡い斜位の条線を施文する。高井東式に伴うものであろう。

111は瓢形深鉢で、口縁内湾して口唇断面著しく肥厚する。口縁外面には帯縄文+押し引き文の区画を2段に巡らせる。安行1式である。

112・113は安行式に伴う粗製深鉢である。112は口縁直立して口唇断面肥厚し、口端上面を平坦に整形する。口縁外面には押し引き文+沈線の区画を巡らせて、胴部には縦位の条線を施文する。安行1式に伴う土器であろう。113は胴部中段に緩いくびれを持って刻み隆帯を巡らせ、口縁外反ないし直立するものとみられる。地文は斜位の条線である。後期安行式に伴うものであろう。

114は折り返し口縁の深鉢で、口縁内湾して外面に段を持つ。晩期前葉の土器であろう。

115・116は無文の深鉢である。115は胴上半部が張って頸部がくびれ、口縁外反する。116は内湾口縁で口唇断面肥厚し、口縁外面がやや張り出す。

117は瓢形深鉢で、薄手の器壁で、対向弧線文を巡らせて縄文を充填し、沈線の区画をはさんで

胴下半部には条線を施文する。曾谷から安行1式であろう。

118～121は無文の深鉢である。122は条線地文の底部で安行1から3b式である。

123・124は台付き鉢である。123は扁平な体部で、水平口縁上に小突起を配し、口縁外面に帯縄文を巡らせて円形の貼り瘤を配する。安行1式であろう。124は円錐形の脚台である。平行沈線で文様を描いた後、モチーフの外側の器面を肉彫り風に撫でつけることで文様を浮き立たせる独特の手法を用いる。横位の紡錘文を多段に巡らせて、接点に貼り瘤を配し、間隙を十字状の刺突文で埋めている。東北地方後期後葉の新地式に類似する。

125は浅鉢で、胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部はくびれて口縁外反する。胴上半部に縄文帯を持って、上下を沈線で区画し、横8の字状の突起と平行沈線の対置状モチーフを配する。加曾利B2式であろう。

第303～307図は破片資料である。

1は加曾利EⅢ式の陶耳壺、2～7は堀之内1式である。8・9は堀之内式の半粗製土器、10は堀之内2式の精製深鉢である。

11は加曾利B1式、12は加曾利B2式である。13～18は加曾利B3式で、17は浅鉢である。19は遠部第四類、20～24は遠部第一類で、20・21が加曾利B3から曾谷式、ほかは加曾利B2式であろう。

25～29は曾谷・高井東式で、25～27は山形波状口縁、28・29は水平口縁の深鉢である。30～34は加曾利Bから曾谷式の粗製土器であろう。

35～100は安行式である。35～45は大波状口縁深鉢で、35～42・45は安行1式、43・44は安行3aから3b式である。

46～54・61～67は水平口縁深鉢で口縁外面に帯縄文と貼り瘤を持つものである。46～53は安行1式で、54は安行3b式である。55～60は砲弾形深鉢で、55～58は安行1式、59・60は安行2から3

a式である。57は曾谷式の可能性がある。

68～70は口縁外面に刻み隆帯の区画と縦瘤を配する土器で、安行1式であろう。

71～79は安行1式の瓢形深鉢で、曾谷式を含む可能性がある。

80～85は擦り消し文様を描く深鉢で、80・84は安行3a式、85が安行3b式、他も安行3aから3b式であろう。

86～96は台付き鉢で、ほとんどが安行1式であろう。97・98は注口土器ないし鉢で、安行3a式である。99は角底鉢で安行3aから3b式である。100は胴部中段が張り出す鉢で、安行3b式であろう。

101～136は安行式に伴う粗製深鉢である。101～125は胴上半部に文様帯を持たない土器で、101は口縁外面に装飾を持たない。102～104は口縁外反して押し引き文を巡らせる。安行1式であろう。

107～115は押し引き文と沈線の区画を巡らせる。105～107等は安行1式であろう。116は口唇断面肥厚し、口縁外面に段を持って押し引き文を巡らせる。117～124は押圧隆帯の土器である。125は口縁外面に凹線を巡らせ、地文を持たない。

126～134は胴上半部に文様帯を持つ土器で、口縁部の装飾と胴部の文様との組み合わせで様々なバリエーションを持つ。地文条線を持たず、太い沈線で文様を描く。130は安行3bから3c式、132～134は擦り消し縄文の土器で、安行3b式であろう。135・136は胴部で、135は平行沈線、136は平行沈線+刻み目文の区画を巡らせる。

138～144は無文土器である。145は内湾口縁で疎らな縄文を施文する深鉢で、後期から晩期の土器であろう。

第108号住居跡出土土器（第254図126・127、第307・308図）

126は無文の広口壺ないし注口土器で、頸部に「く」の字にくびれて口縁短く外反する。

127は浅鉢で、5単位の山形波状口縁で、平面

観五角形である。体部は扁平なボウル形で、頸部がくびれて口縁外反する。頸部および胴下半部に沈線+列点文の区画を巡らせる。安行3c式である。

第307・308図は破片資料である。

1～6は諸磯b式、7～9は浮島式である。10～12は称名寺式であろう。13・15は堀之内1式、14は堀之内2式である。

16は加曾利B1式、17は加曾利B2式で遠部第四類である。18は加曾利B3式である。19・20は曾谷式である。21は遠部第一類で、加曾利B3から曾谷式であろう。

22～35は安行式である。22・23は外面に帯縄文を持つ水平口縁深鉢で、安行1式である。24～26は砲弾形の深鉢で、24は安行1式である。27は安行1式の瓢形深鉢で、加曾利B3から曾谷式の可能性もある。

28～30は台付き鉢で、安行3b式であろう。31～33は擦り消し文様を描く水平口縁の深鉢で、安行3aから3b式であろう。34は列点文を持つ外反口縁で安行3b式、35は胴張りの鉢で、安行3aから3b式であろう。

36～43は安行式に伴う粗製深鉢である。36～38は安行1式、擦り消し縄文の42は安行3b式、列点文の40・41は安行3c式である。天神原式に類似の刺突文を持つ43も安行3c式期の土器であろう。

44～48は無文土器である。44～47は折り返し口縁で、44・45は内面に稜線を持ち、46・47は折り返し口縁の末端が外に反り返る。

第109号住居跡出土土器（第254図128～第256図141、第308～313図）

128は安行1式の大波状口縁深鉢で、波頂部が二叉に分かれて、外面に縦瘤を重畳させる。胴上半部には帯縄文を巡らせ、胴部中段には押し引き文を巡らせる。

129は安行1式の水平口縁深鉢で、口縁直立し

て外面に帯縄文の長方形区画文を巡らせ、接点に2段の縦瘤を配する。胴部には縦位の条線を描く。

130は砲弾形の深鉢で、口縁内湾して口唇断面肥厚する。口縁外面に縦瘤を配して平行沈線を巡らせ、胴部中段にも平行沈線の区画を巡らせる。安行3c式か。

131は波状口縁深鉢で、対をなす波状口縁を4単位配し、波底部に同心円文を中心としたX字状の捺し消しモチーフを描いて、波頂部に菱形の区画を構成している。北関東の天神原式に類似する。安行3bから3c式期の土器であろう。

132は後期安行式の粗製深鉢で、口縁直立して口唇断面肥厚し、口縁外面と胴部中段に刻み目+沈線の区画を巡らせる。地文は斜位の条線である。

133は折り返し口縁の砲弾形無文深鉢である。

134~136は深鉢である。134は縄文、他は条線地文で、いずれも安行式である。

137・138は台付き鉢の体部である。137は大きく開く外反口縁で、口唇外面に刻み隆帯を巡らせ、頸部に縦位の条線を施文する。胴部中段には多段の刻み目隆帯を巡らせて、胴下半部は横位の条線を施文する。安行1式であろう。138は口縁は短く外反し、刻み隆帯で器面を多段に分帯して、豚鼻突起を配する。安行2式であろう。

140は壺で、胴上半部に粗い縄文を2段巡らせる。晩期の土器か。

141は角底の鉢で、131に類似の捺し消し文様を描くものとみられ、底部は四隅が突出する。安行3bから3c式であろう。

第308~313図は破片資料である。

1は堀之内1式、2・3は加曾利B1式である。4・5は加曾利B2式で、6は加曾利B1式の注口土器であろう。

7~11は遠部第一類で、11は加曾利B2式、他は加曾利B3から曾谷式であろう。12は加曾利B1式、13は加曾利B2式の粗製土器である。14・15は遠部第四類で、15は加曾利B2式、14は加曾

利B3から曾谷式か。16は縄文のみの深鉢で、加曾利B式に伴う土器であろう。

17~24は曾谷・高井東式で、17は大波状口縁深鉢の波頂部、18は山形波状口縁深鉢、19はソロバン玉状の鉢である。20~23は水平口縁の深鉢で、24は瓢形深鉢である。

25~97は安行式である。25~33は波状口縁の深鉢で、25は安行1式、26・27は安行3a式、28~30は安行3b式であろう。

35~50は外面に帯縄文を巡らせて貼り瘤を配する水平口縁深鉢で、35・36・39・46・48は安行1式、47は安行2式、37・38は安行2から3a式、40~45・49・50は安行3aから3b式であろう。

34・51~59は砲弾形の深鉢で、34・51・52・56・57は安行1式、53~55は安行3aから3b式であろう。

60~66は瓢形深鉢で、大半が安行1式であろう。67~71はこれらの精製土器に伴う胴部破片で、68は安行2式、67・69・70は安行2から3a式、71は後期安行式であろう。

72~77は捺し消し縄文の深鉢で、安行3aから3b式である。72・73・76は安行3a式か。

78~89は台付き鉢で、78~80・84~86は安行1式、83・87は安行2式、81・82は安行2から3a式である。88・89は安行3b式であろう。

90~92は浅鉢で、92は安行2式、90・91は安行3aから3b式であろう。93~97は胴部中段が張り出す鉢で、95・96は安行2式、94・97は安行3b式であろう。

98は東北系の新地式である。

99~148は安行式に伴う粗製深鉢である。99~130は胴上半部に文様を持たない。99・100は口縁部に装飾を持たない。101~104は口縁外面に沈線を、105・106は押し引き文を巡らせる。

107~119は口縁外面に押し引き文や刻み目文+沈線の区画を持つ。120~125は押圧隆帯の土器である。126~129は口縁外面に段を持ち、127・128

は段の上、129は段の下に押し引き文を巡らせる。130は段の上に刻み目文を巡らせ、地文条線を持たない。

131～143は胴上半部に文様帯を持つ土器である。131～133は縦位の平行沈線文で、133は沈線間に蛇行沈線が垂下する。134～137・139は弧線文の土器である。139は上下の押圧隆帯の区画を縦位の隆帯で連繋する。138・142・143は擦り消し縄文の土器である。148は沈線間に列点文を充填する。

144～148は胴部破片で、胴部中段に区画を配する。144～146は沈線＋押し引き文、147・148は押圧隆帯の区画である。

149～157は無文土器である。149～152は口唇断面肥厚し、151・152は内面に段を持つ。153は外反口縁で口端に刻み目を巡らせる。

158は製塩土器である。折り返し口縁で、口端は先細りとなり、小突起を配する。

第111号住居跡出土土器（第256図142～第257図150、第313～315図）

142・143は波状口縁深鉢である。142は波頂部と波底部に刻みを持つ縦線を配し、胴上半部には帯縄文の三角形区画文を描く。安行3 a 式である。143は胴上半部に入り組み三叉文を巡らせ、胴下半部に疎かな条線を施文する。器面が強い火熱を受けて溶解発泡しており、著しい変形を生じている。安行3 b 式であろう。

144～146は水平口縁深鉢である。144は頸部にS字状の緩やかな屈曲を持って、口縁直立する。胴上半部に多段の弧線文を巡らせて縄文を充填し、豚鼻突起を配する。安行3 b 式か。145は軽微に内湾しつつ単調に開き、口端上に2個一対の突起を配して外面に縄文を施文する。胴上半部に文様帯を持って、対向弧線文を巡らせて縄文を充填する。安行3 b 式であろう。146は底部から口縁まで内湾しつつ単調に開く。口端上に鱗状突起を配し、胴上半部に文様帯を持って、平行沈線の

稲妻状モチーフを巡らせる。縄文は施文しない。安行3 b から3 c 式であろう。

147は深鉢である。胴部中段に平行沈線＋列点文の区画と、1段の帯縄文を巡らせる。安行3 b から3 c 式である。

148～149は安行式の粗製深鉢である。148は内湾口縁で口唇著しく肥厚し、口縁外面に段を持ち、段上に押し引き文を巡らせる。胴部中段には沈線＋押し引き文の区画を巡らせ、胴上半部には平行沈線の斜行文を描く。地文は斜位から横位の条線で、口縁段上含め全面に施文している。後期末から晩期初頭の土器であろう。149は平行沈線の区画を巡らせ、斜位の条線を施文する。後期安行式に伴うものか。

150は地文条線で、安行式の土器であろう。

第313～315図は破片資料である。

1・2は堀之内1式で、2は称名寺系の土器である。3は堀之内2式で、波状口縁の精製深鉢である。4は堀之内式の粗製土器で、櫛歯状工具の条線を施文する。5は加曾利B 2式の浅鉢である。6は遠部第一類で、加曾利B 3から曾谷式であろう。

7は高井東式の波状口縁深鉢、8・9は加曾利B 3から曾谷式の水平口縁深鉢であろう。

10～38は安行式である。10～17は大波状口縁深鉢で、10は安行2から3 a 式、11～13・16・17は安行3 a から3 b 式、14・15は安行3 b 式であろう。

24は水平口縁深鉢で、安行3 b 式であろう。18～23は砲弾形の深鉢で、18は安行1式、19～21は安行2から3 a 式、22・23は安行3 b 式か。

25は波状口縁の深鉢で、波頂部に扁平な渦巻き状の隆帯を配する。安行3 b 式であろう。26～31は擦り消し文様の深鉢で、安行3 a から3 b 式である。26・27は安行3 a 式、28は安行3 b 式であろう。31は瓢形の深鉢か。

32～34は精製深鉢の胴部である。33は安行3 b

式、他も安行3 aから3 b式であろう。35・36は胴部中段が張り出す鉢で、安行3 aから3 b式である。37・38は台付き鉢で、37は安行2式、38は安行3 a式であろう。

39～65は安行式に伴う粗製深鉢である。39～48は胴部の文様帯を持たない土器である。39・40は口縁外面の装飾を持たない。41は口縁外面に押し引き文を巡らせる。42・43は押し引き文+沈線の区画を持つ。44～46は押圧隆帯の土器である。47・48は口縁外面に段を持って押し引き文+刻み目文を巡らせる。39・41は安行1式であろう。49～65は胴上半部に文様帯を持つ。49～51・58は弧線文の土器である。52～54は弧線文の間に蛇行沈線文が垂下する。55～58は平行沈線の斜行文である。59～61は沈線間に列点文を施文する。安行3 bから3 c式であろう。62・63は押圧隆帯が胴上半部に侵入する。64・65は擦り消し縄文の土器で、安行3 b式であろう。

66～74は無文土器である。66は水平口縁上の小突起を配する。67・68は折り返し口縁である。69～73は内湾口縁で口唇断面肥厚する。

75～80は晩期の製塩土器である。口端部の形状は、75・76は先細りで、75は指で摘み出したような造りである。77～80は断面角頭棒状で、77・78は竈で切り落としたように鋭角である。75・80は器壁の剥落が著しく、79は溶け崩れたような風化を示す。

81は木葉痕を残す深鉢底部で、安行式であろう。
第112号住居跡出土土器 (第257図151～第258図153、第315～317図)

151は後期安行式の粗製深鉢で、口縁直立して口唇断面肥厚し、内面突出する。口縁外面に刻み目文を巡らせ、胴部中段に平行沈線+刻み目文の区画を持つ。地文は縦位の条線で、胴上半部と中段以下で別個に施文している。

152は条線地文の安行式の深鉢、153は無文土器である。

第315～317図は破片資料である。

1・2は諸磯a式である。3は堀之内式の粗製土器で、格子目状の条線を施文する。4～6は加曾利B1式の粗製土器であろう。7は遠部第一類で、加曾利B3から曾谷式であろう。8～11は曾谷・高井東式で、10は吊り手、11は注口土器か。

12～35は安行式である。12～14は大波状口縁深鉢で、12は安行1式、13・14は安行3 b式であろう。15～17は水平口縁深鉢で、16は安行2から3 a式、他は安行1式であろう。18・19は砲弾形の深鉢で後期安行式、20は安行1式の瓢形深鉢である。

21～24はこれらの精製土器に伴う胴部である。21は安行1式の水平口縁深鉢であろう。24は安行3 aから3 b式である。

25は頸部がくびれて口縁外反し、外面に縄文を施文する。安行3 aから3 b式である。26～28は擦り消し縄文の深鉢で、安行3 bから3 c式であろう。29・30は安行3 c式であろう。

31～35は台付き鉢で、31・32は安行1式、33は安行3 aから3 b式であろう。

36～47は安行式に伴う粗製深鉢である。36・41・43・44等は安行1式か。

48～54は無文土器である。48は口端上に対をなす突起を配する。49は口縁外面に断面三角形の隆帯が巡る。50は折り返し口縁、51・52は口縁内面に段を持つ。

55～57は製塩土器である。55は口端を竈で切り落としたように平坦になっている。56・57は指で摘み出したような先細りの口縁である。

第113号住居跡出土土器 (第258図154～第260図167、第317～319図)

154は高井東式の大波状口縁深鉢で、口縁外面に段を持って沈線+刻み目文を巡らせ、波底部に貼り瘤を配する。

155は水平口縁の無文深鉢である。胴部は緩やかなS字を描いて立ち上がり、口縁内屈して外面に稜をなす。

156は安行1式の波状口縁深鉢で、緩やかな山形波状口縁で、波頂部に縦瘤を重畳させる。口縁外面のみ縄文を施文し、胴上半部は平行沈線の区画を多段に巡らせる。安行1式である。

157・158は安行1式の水平口縁深鉢である。157は口縁外面に帯縄文の楕円形区画文を2段に施文し、接点に縦瘤を配する。胴部中段には押し引き文の区画を巡らせる。158は口縁外面には帯縄文を巡らせて縦瘤を配し、胴上半部には半円形の擦り消しモチーフを巡らせる。

159～161は瓢形深鉢である。159は胴下半部に最大径を持ち、胴部中段がくびれて押し引き文を巡らせる。口縁は内湾して口唇断面著しく肥厚する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、胴上半部に櫛状入り組み文、胴下半部に対向弧線文を描く。安行1式であろう。160は胴部中段にくびれを持って押し引き文を巡らせ、対向弧線文を描いて縄文を充填する。胴下半部は縄文帯としている。曾谷から安行1式であろう。161は胴部中段にごく緩いくびれを持ち、口縁内湾する。口縁外面に段を持って、段の上と下にそれぞれ刻み目文を巡らせ、胴部中段にも粗雑な刻み目文の区画を巡らせる。胴上半部には疎な条線を施文し、胴下半部は無文である。高井東式に伴うものであろう。

162・163は浅鉢である。162は口縁外面と胴上半部に隆帯を巡らせて、間を縄文帯としている。163は平底で、胴下半部に帯縄文を巡らせる。いずれも安行式に伴うものであろう。

164は注口土器で、胴部中段からやや上に最大径を持って3本沈線の区画を巡らせ、つまみ状の突起と縦瘤を交互配置して、1箇所注口を配する。高井東式に伴うものであろう。

165・166は条線地文の安行式、167は底径の大きな無文の底部である。

第317～319図は破片資料である。

1は称名寺式、2は堀之内式である。3は堀之内2式の浅鉢であろう。4～8は組線文の土器で、

ほとんどが加曾井B2式であろう。9・10・29は曾谷・高井東式である。

11～45は安行式である。11・12は安行1式の大波状口縁深鉢である。13～28は水平口縁深鉢で、帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する土器である。13～20は安行1式、21以下も大半が同時期のものであろう。30・31は砲弾形の深鉢で、後期安行式であろう。32～37はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。大半が後期安行式であろう。38～40は安行1式の台付き鉢である。41・42は無文の台付き鉢ないし浅鉢である。43・44は安行3b式の台付き鉢であろう。45は安行3c式の深鉢である。46～50は安行式に伴う粗製深鉢である。46は安行1式、50は安行3b式であろう。51～56は無文土器である。

第114号住居跡出土土器（第260図168～第261図182、第319～322図）

168は安行2式の水平口縁深鉢で、口縁内湾して山形の突起を配し、外面に段を持って縄文を施文する。胴上半部には刻み隆帯の区画を多段に巡らせ、刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起を配する。

170は胴部中段にくびれを持って、口縁外傾しつつ立ち上がる。口端上に台形の突起を配し、胴上半部には紡錘形の擦り消しモチーフを多段に巡らせて、間隙に縦位の蛇行沈線文を垂下させる。安行2式である。

171は胴部は内湾しつつ単調に立ち上がり、口縁わずかに外傾する。口縁から胴上半部にかけて上下を刻み隆帯で区画した縄文帯を持ち、菱形の区画文を描いて豚鼻突起を配する。胴部中段にも幅広の縄文帯を持って豚鼻突起を配する。安行2式である。

172は緩やかな波状口縁の深鉢で、胴上半部に幅広の文様帯を持って入り組み三叉文を描き、上下を帯縄文で施文する。安行3aから3b式である。

173は瓢形深鉢で、胴下半部に最大径を持ち、

胴部中段よりやや上にごく弱いくびれを持って、2段の押し引き文を巡らせる。胴上半部に櫛状入り組み文、胴部中段の区画から下に対向弧線文を描き、胴下半部は縄文帯としている。曾谷から安行1式であろう。

174・175は台付き鉢である。174は条線を施文する。175は球状の脚台部で、帯縄文と弧線文を巡らせて円孔を穿つ。いずれも後期安行式であろう。

176は扁平な浅鉢で、胴部は直線的に開いて、口縁部付近でやや内湾する。水平口縁上に小突起を持って外面に刻みを持つ縦線を配し、胴上半部に帯縄文の楕円形区画文を2段に配する。胴下半部には縦位の条線を施文する。安行2式であろう。

177は後期安行式の粗製深鉢で、口縁直立して口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に沈線+押し引き文の区画を巡らせる。地文は縦位の条線で、口縁から胴部まで一続きに施文する。

178は水平口縁の深鉢で、軽微に内湾しつつ開く単調な器形で、口端がやや内屈する。胴上半部に粗い斜位の条線を施文する他は文様を持たない。曾谷・高井東式か。

179～182は深鉢底部で、いずれも安行式である。第319～322図は破片資料である。

1は称名寺式、2～4は堀之内1式、5は堀之内2式である。

6は加曾利B2式の突起である。12～14は紐線文の土器で、13・14は加曾利B2式、12は加曾利B3から曾谷式であろう。15～18は縄文のみの深鉢で口端内面に沈線を巡らせる。加曾利B式の粗製土器である。

7～11は曾谷・高井東式で、8・9は大波状口縁深鉢、10・11は瓢形深鉢である。

19～74は安行式である。19～24は大波状口縁深鉢で、19～22は安行1式、23・24は安行2式である。25～34は水平口縁深鉢で、外面に帯縄文の区画を巡らせて貼り瘤を配する土器である。25～27

は安行1式、28は安行3b式であろう。29以下は大半が後期安行式であろう。

35～37は口縁外面に刻み隆帯の区画を巡らせて縦瘤を配する土器で、安行1式である。38～45は砲弾形の深鉢で、39～41は安行1式、42は安行3aから3b式であろう。46～49は安行1式の瓢形深鉢である。

50～55はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。50・51は安行1式、54は安行2式、52・53・55は安行3aから3b式であろう。

56～58は擦り消し縄文の深鉢で、安行3aから3b式である。59は安行3c式、60は安行3cから3d式である。61は前浦式に類似の鉢である。

62～73は台付き鉢で、62～64は安行1式、65・66は安行2式、67は安行3a式であろう。68～71は後期安行式で、70・71は脚台である。72は安行3a式、73は安行3aから3b式である。74は胴部中段が張り出す鉢で、安行3aから3b式であろう。

75～115は安行式に伴う粗製深鉢である。75～103は胴部に文様帯を持たない。75～77は口縁外面に文様を持たない。いずれも安行1式か。78～82は外面に押し引き文を巡らせる。安行1式であろう。

83～89は押し引き文+沈線の区画を巡らせる土器で、83は波状口縁である。83～87は安行1式であろう。90～98は押圧隆帯の土器である。90は安行1式であろう。99～103は口縁外面に段を持つ土器で99～102は段上に押し引き文や刻み目文を巡らせる。

104～114は胴上半部に文様帯を持つ。104・105は4本沈線の斜行文である。106～109は縦位の平行沈線文で、107・108は沈線間の地文を擦り消している。107は矢羽状の細密沈線を地文とする土器で安行3b式。108は地文縄文を残している。後期安行式か。110は括弧状の沈線文を描いて、沈線間の条線を擦り消す。

111は口縁部の隆帯が反転して胴上半部に侵入する。113は擦り消し縄文の土器で安行3b式か。無文地に沈線文を描く112・114は安行3c式であろう。115は平行沈線+押し引き文の区画を巡らせる胴部である。

116~124は無文土器である。123は器壁が著しく風化している。124は外面に輪積み痕を残している。

第115号住居跡出土土器（第262図183~第263図196、第322~327図）

183は堀之内1式で、キャリパー形の大波状口縁深鉢で、口縁は大きく開いて口唇は内屈して外面に段を形成し、1条の沈線を巡らせて、波頂部には貫通孔を持つ突起を配する。頸部は無文で、胴部との境に平行沈線の区画を持って8の字状の貼り付け文を配する。

184は安行式の大波状口縁深鉢で、波頂部に鰭状の突起と刻みを持つ横瘤を配し、胴上半部には帯縄文の三角形区画文を描いて交点に扁平な豚鼻突起を配する。安行3b式であろう。

185・186・188は安行1式の水平口縁深鉢である。胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁は軽微に内湾して口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配し、胴上半部には半円形の擦り消しモチーフを巡らせる。胴部中段には平行沈線+押し引き文の区画を巡らせて、胴下半部には対向弧線文を描く。

187は砲弾形の深鉢で、胴上半部に最大径を持って、口縁内湾し口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文の区画を多段に巡らせ、縦瘤を配する。曾谷から安行1式である。

189は瓢形深鉢で、胴下半部に最大径を持ち、胴部中段でくびれて、口縁内湾し、口唇断面肥厚して外面に段を持つ。口縁外面および胴部中段に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせる。胴上半部には帯縄文を多段に施文し、胴下半部には深く入り組む対向弧線文を描いて縄文を充填する。底部

付近は縄文帯となる。曾谷から安行1式である。

190は安行式の精製深鉢で、胴部中段に隆帯を巡らせて縄文を施文し、胴下半部には斜位の条線を施文する。安行3aから3b式であろう。191は縄文施文の安行式の精製深鉢であろう。

192・193は曾谷から安行1式の粗製深鉢である。192は胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁外反して口唇断面肥厚する。口縁外面に装飾を持たず、胴上半部に斜位の条線を施文して、逆方向の斜行沈線文を等間隔に巡らせる。胴部中段には平行沈線の区画を持って、沈線間の地文を擦り消している。193は胴部中段にくびれを持って押圧隆帯を巡らせ、口縁外反するものとみられる。地文は斜位の条線である。

194は無文の深鉢である。195は無文の深鉢底部で、網代痕を残している。196は無文の小型浅鉢である。底径大きく、胴部は扁平で、緩やかなS字を描いて立ち上がり、口縁外反する。

第322~327図は破片資料である。

1は諸磯b式、2・3は称名寺式である。4~8は堀之内1式、9~11は堀之内2式である。12は加曾利B2式、13は遠部第四類で加曾利B2式である。

14~19は集合沈線を施文する土器で、14~16は波状口縁の深鉢である。17・18は矢羽状の沈線が巡る胴部である。いずれも加曾利B2式とみられるが、19は加曾利B3から曾谷式の可能性がある。20~22は加曾利B3式であろう。

39~42は遠部第一類で、大半が加曾利B2式であろう。43・44も加曾利B式の粗製土器である。

23~38は曾谷・高井東式である。23~31は波状口縁の深鉢、32以下は水平口縁である。36~38は無文で口縁外面に段を持つ。

45~128は安行式である。45~50は大波状口縁深鉢である。45~48は安行1式、49・50は安行3aから3b式である。

51~81は水平口縁の深鉢で、外面に帯縄文の区

画を巡らせて貼り瘤を配する土器である。51～66・69・70・80は安行1式、他も大半が後期安行式であろう。82～85は口縁外面に幅広の帯縄文を巡らせる土器で、安行3aから3b式か。99～101も同時期の水平口縁深鉢であろう。

86～89は安行1式の砲弾形深鉢である。98は帯縄文で器面を鋸歯状に区画し、交点に円形の貼り付け文を配する。安行3aから3b式であろう。90～97は安行1式の瓢形土器である。

102～117はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。102～111は後期安行式で、102は波状口縁、104は水平口縁の深鉢である。

118～128は台付き鉢である。119～124は安行1式であろう。

129～134は異系統の土器で、129・130は天神原式、131～133は新地式、134は前浦式に伴う深鉢であろう。

135～144は安行式に伴う粗製深鉢で、大半が安行1式である。145～153は無文土器である。146は水平口縁上に小突起を配する。152は口端外屈する。153は頸部がくびれて、口縁は内湾しつつ立ち上がる。

154～159は製塩土器である。154の口端は寛で切り落としたように水平になっている。155～158は先細りの口縁で、157・158は指で摘み出したような造りである。

第116号住居跡出土土器（第263図197～第266図219、第327～330図）

197・198は曾谷・高井東式の水平口縁深鉢で、胴部中段にくびれを持って胴上半部は外反し、口縁直下で屈曲して段を形成する。197は段の部分に明瞭な稜線を持って横瘤を配する。

199も曾谷・高井東式の水平口縁深鉢で、内湾しつつ単調に開く器形で、口縁がやや外屈する。口縁外面に平行沈線を巡らせて縄文を施文し、「ノ」の字状の貼り瘤を配する。胴部には縦位の条線を密に施文する。

200～205は安行1式の水平口縁深鉢である。胴部中段にくびれを持って口縁外反し、口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する。胴部中段には沈線+押し引き文の区画を巡らせる。胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を施文する。200～202・204・205は胴上半部に半円形の捺り消しモチーフを描く。203・204は口縁外面に2段の区画と縦瘤を配し、203は胴上半部に帯縄文を重畳させる。202は曾谷式の可能性もある。

206は砲弾形深鉢で、口縁外面に楕円形の区画文を描いて刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起を配し、胴上半部に帯縄文を巡らせて豚鼻突起を配する。胴部中段以下には縦位の条線を施文し、胴下半部では方向の異なる条線が交錯する。安行3b式であろう。

207は曾谷から安行1式の精製深鉢胴部で、胴上半部に帯縄文、胴部中段には押し引き文を巡らせて、胴下半部には矢羽状の条線を巡らせている。

208は曾谷式の瓢形深鉢で、胴部中段には押し引き文を多段に巡らせ、胴下半部には深く入り組む対向弧線文を描いて、交点に矮小な貼り瘤を配する。底部付近は縄文帯である。

209は台付き鉢で、胴部中段に刻み隆帯の区画を巡らせ、以下、平行沈線を多段に巡らせて、2本一組の短沈線で上下連繋する。安行1式か。

210・211は安行1式の胴張り浅鉢である。強く内湾する水平口縁で、口唇断面著しく肥厚する。口縁から胴上半部にかけて帯縄文の区画を多段に巡らせ、胴下半部には斜位の条線を施文する。210は2個一対の縦瘤を配し、211は縦瘤を重畳させるものとみられる。

212・213は無文の浅鉢である。212は強く外反しつつ開く水平口縁で、口端内面に2個一対の小突起を配する。213は扁平なボウル状の胴部で、頸部が「く」の字に屈曲して口縁外反する。

214は曾谷から安行1式の粗製深鉢である。キャ

リバ形で口縁内屈し、口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に押し引き文の区画を巡らせる。地文は斜位の条線で、口縁から胴部まで一続きに施文している。

215は刻み隆帯の区画を巡らせて、疎らな地文縄文上に斜位の条線を施文する。加曾利B3から曾谷式に伴うものであろう。

216は無文の深鉢である。胴上半部に最大径を持って口縁内湾する。晩期安行式に伴うものであろう。

217・218は縄文地文で安行式であらう。219は無文の底部である。

第327～330図は破片資料である。

1は称名寺式、2～6は堀之内1式である。7は加曾利B1式、8～10は加曾利B2式である。11・12は加曾利B1式の粗製土器であらう。13～15は遠部第一類で、加曾利B3から曾谷式であらう。16～21は曾谷・高井東式で、21は注口土器の胴部であらう。

22～73は安行式である。22・23は安行1式の大波状口縁深鉢である。24～40は水平口縁深鉢で、外面に帯縄文の区画を巡らせて貼り瘤を配する。大半が安行1式である。41は砲弾形の深鉢で、安行1式である。42～45は安行1式の瓢形深鉢である。46～52はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。

53～61は頸部屈曲して口縁外反する深鉢で、安行3aから3b式である。53は口縁外面に文様帯を持って、三叉文を描く。安行3a式か。56は無文で、口端上に内文を持つ小突起を配する。

62・63は擦り消し縄文を描く深鉢で、安行3aから3b式である。64・65は細密沈線文の土器で、安行3b式であらう。66は鋭利な工具の刺突を地文とする土器で安行3bから3c式、67は紡錘状の擦り消し文様を描く深鉢で、前浦式に伴う土器である。

68～71は台付き鉢で、68・69は安行1式、70・71は安行3aから3b式の脚台である。72は無文

の口縁で浅鉢ないし台付き鉢、73は浅鉢の底部である。

74～78は安行式に伴う粗製深鉢である。74・75は安行1式であらう。79～81は無文土器である。79・80は折り返し口縁の土器で、79は扁平な2段の折り返し口縁である。

第117号住居跡出土土器（第266図220～第267図227、第330～332図）

220は曾谷式の瓢形深鉢で、口縁と胴部中段に押し引き文を巡らせ、胴上半部には幅広い縄文帯を持つ。

221は縄文地文の底部で、瓢形深鉢に伴うものであろう。

222は台付き鉢の体部で、胴下半部は裾が張り、直線的に開いて、口縁がわずかに外屈する。水平口縁で、内面に貼り付け文を持つ。細密沈線文の土器で、胴部に七宝文を描いて、間隙に円文を配する。安行3bから3c式である。

223も台付き鉢の体部とみられる。わずかに内湾しつつ直線的に開く盃形の器形である。器面全体に入り組み文や渦文を描き、間隙を三角文や楕円文で埋めている。安行3c式である。

224～226は無文の深鉢底部である。

227は注口土器で、胴部はソロバン玉形で、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁は内湾しつつ立ち上がる。棒状工具の平行沈線で文様を描く。口縁外面に平行沈線の区画を巡らせて縄文を施文する。胴部は弧線文を入り組ませて縄文を充填し、中割れの貼り瘤を配する。曾谷式期の土器であらう。

第330～332図は破片資料である。

1・2は加曾利EⅣ式の口縁部、3・4は加曾利EⅢからⅣ式の胴部である。5～8は堀之内1式、9～11は堀之内2式で、11は内文を持つ浅鉢である。12は堀之内式の粗製土器で、櫛歯状工具による小波状の条線を描く。

13～17は加曾利B1式で、16は浅鉢、17は注口

土器の肩部であろう。18は加曾利B 2式、20は加曾利B 3式である。

21～27は紐線文の土器で、21・22は加曾利B 1式、23・26は加曾利B 2式である。24・25・27は加曾利B 3から曾谷式であろう。28～30は口縁内面に沈線が巡る深鉢で、加曾利B式の粗製土器であろう。31～33は曾谷式である。

34～59は安行式である。34は安行1式の水平口縁深鉢、35は同時期の深鉢胴部である。36は台付き鉢で、安行1式であろう。

37～40は頸部屈曲して口縁外反し、外面に縄文帯を持つ深鉢で、安行3 aから3 b式であろう。41はこれに似て縄文を細密沈線で代替する土器で、安行3 b式である。42は折り返し口縁上に縄文を施文し、胴上半部に文様帯を持つ土器で、安行3 b式であろう。

43は無文の壺で頸部屈曲して口縁外反し、内面に沈線を巡らせる。44・45は胴部中段の張り出す鉢で、44は安行3 b式、45は安行3 aから3 b式である。46～57・59は安行3 c式で、46～49は波状口縁、50～54は水平口縁の深鉢である。57は小型の壺、59は台付き鉢であろう。58は前浦式類似の単位文で安行3 d式と考えられる。

60～64は無文土器である。60～62は折り返し口縁で、60は刻み目文を巡らせる。62は扁平で口唇断面先細りの折り返し口縁である。

第118号住居跡出土土器 (第267図228～第270図263、第332～337図)

228～232は安行式の精製深鉢である。228は胴部中段に押し引き文を巡らせ、胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を施文する。底部付近は縄文帯となる。安行1式であろう。229は胴部中段に帯縄文を巡らせ、胴下半部には斜位の条線を施文する。安行3 aから3 b式であろう。230～232は縄文を施文する底部である。

233・234は内湾口縁の砲弾形の深鉢で、安行3 c式である。233は口唇断面著しく肥厚し、外面

に段を持つ。胴上半部には対向弧線文を2段に巡らせる。地文縄文を持たない。234は口縁に沿って同心円文を巡らせる。

235・236は小型の鉢で、やはり安行3 c式であろう。235は胴上半部に対向弧線文を描いて、上下を沈線で区画する。236は胴上半部に平行沈線を巡らせて平行沈線の斜行文を描き、胴下半部には粗雑な条線を施文する。

237～240は台付き鉢である。237・238は後期安行式であろう。237は扁平なボウル形の体部で、口縁のみわずかに外反する。口縁外面に縄文を施文して、胴上半部に平行沈線を巡らせ、胴部中段に帯縄文の区画を持つ。

238は強く外反する口縁で、縦位の条線を施文し、口端外面に刻み目文を巡らせる。胴部の文様帯との境にも刻み目文を巡らせている。安行1式であろう。

239・240は脚台部である。239はドーム状で、裾が外反する。帯縄文で器面を多段に分帯して、対弧文を描いて楕円形の区画文を構成し、四面に縦瘤を配する。体部との境には刻み隆帯を巡らせている。内面に赤色の顔料が付着している。曾谷から安行1式か。240は球状の脚台である。裾に1条の沈線を巡らせる他は文様を持たない。安行3 c式であろう。

241～247は鉢ないし浅鉢である。241は口縁内湾する鉢で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を重畳させる。胴部には斜位の条線を施文する。安行1式である。

242は内湾口縁で、口端上に刻みを持つ小突起を配する。外面に帯縄文を巡らせて対弧文で上下連繋し、刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起を配する。安行3 a式であろう。

243は内湾口縁で、口唇断面著しく肥厚する。口縁外面に縄文を施文し、胴上半部には横位の条線を施文する。文様帯下端を1条の沈線で区画して貼り瘤を配する。胴下半部は無文である。曾谷

式である。

244は内湾口縁で、口端上に2個一対の小突起を配し、直下に貼り瘤を配して、口縁に沿って凹線を巡らせる。曾谷・高井東式である。

245は内湾口縁で口端上に鱗状突起を配する。口縁外面に刻みを持つ縦瘤を配して円孔を穿つ。胴下半部に平行沈線を巡らせる。安行3c式であろう。

246はボウル状の鉢で、胴上半部に縄文を巡らせる他は文様を持たない。曾谷式であろう。

247は浅鉢とみられる。裾張りでわずかに上げ底状となり、胴部との境に平行沈線を巡らせる。晩期安行式であろう。

248は注口土器であろう。無文で、胴部は球状に張る。底部に小環状の高台を持つ。

249は注口土器である。上下を帯縄文で区画した文様帯を持ち、入り組み文を描いて間隙を三叉文で埋めている。注口部の下には二叉の貼り瘤を配する。安行3a式である。

250～254・257は安行式の粗製深鉢である。250～254は曾谷から安行1式である。胴部中段に緩いくびれを持って、口縁外反ないし直立する。口縁外面と胴部中段に押し引き文や刻み目文を巡らせる。250・251の地文は縦位の条線で、251は胴部中段に沈線+押し引き文の区画を巡らせる。252は胴部中段に段を持ち、胴上半部と下半部では方向を変えた斜位の条線を施文する。253・254は横位の条線を地文とする。257は口縁外面に段を持って押王隆帯を巡らせ、胴上半部には太い沈線で弧線文や紡錘文を描いて押し引き文を充填する。斜位の条線を地文とする。安行3bから3c式であろう。

258は脚台で、粗い縄文を施文する。晩期安行式に伴うものか。

259は晩期の製塩土器で、薄手の器壁で、外面は輪積み痕を残し、被熱による風化が観察される。内面には甑状工具による粗い調整痕を残してい

る。

260・261は無文の深鉢である。軽微に内湾しつつ立ち上がる単調な器形である。

262・263は無文の底部である。262は底面が広く、網状痕を残す。263は底径が小さい。

第332～337図は破片資料である。

1・2は早期末から前期初頭の土器で、1は押し引き鋸歯文、2は0段多条の羽状縄文である。3・4は諸磯c式である。5～9・11は堀之内1式、10は堀之内2式である。17は加曾利B1式、18～25は加曾利B2式である。

12～16・41～48は加曾利B式の粗製土器で、12・41は加曾利B1式、42は加曾利B2式であろう。43～46は遠部第一類で、44が加曾利B2式、他は加曾利B3から曾谷式であろう。26～40は曾谷・高井東式である。

49～140は安行式である。49～61は大波状口縁深鉢で、49～53は安行1式、54～61は安行3aから3b式である。55・56・61は安行3b式か。

62～95は外面に帯縄文の区画を巡らせる水平口縁深鉢で、62～78は安行1式、79は安行2式、80～83は安行3aから3b式であろう。

96～99・101～105は砲弾形の深鉢で、96は安行1式、97は安行2から3a式である。101は瓢形深鉢の可能性もある。

100・106～111は瓢形深鉢で、安行1式である。

112～114は頸部屈曲して口縁外反する深鉢で、112は口縁外面に文様帯を持つ。116は無文の口縁に小突起を配する。いずれも安行3aから3b式であろう。117・118は無文地に沈線文を描く土器で、安行3bから3c式であろう。

115・119～130はこれら精製深鉢に伴う胴部である。119は大波状口縁深鉢、120は水平口縁深鉢、122・123は瓢形深鉢で、いずれも安行1式である。130は安行3aから3b式であろう。

131～133は安行1式の台付き鉢である。134・135は浅鉢とみられ、134は安行1式、135は安行

3 a から 3 b 式であろう。136・138は胴部中段が張り出す鉢で安行 3 a から 3 b 式である。139・140は注口土器とみられる。139は安行 2 式、140は安行 3 a 式であろう。

141は浅鉢で安行 3 b 式、142は清水天王山式に類似的の深鉢である。

143～176は安行式に伴う粗製深鉢である。143～165は胴部に文様帯を持たない。

143～147は口縁外面に装飾を持たない。148・149は口縁外面に沈線を巡らせる。150・151は押し引き文を巡らせる土器である。

152～155は押し引き文+沈線の区画を持つ土器で155は胴部である。156～165は押圧や刻みを伴う隆帯を巡らせる。143～148・150～160は安行 1 式か。165は安行 3 c 式であろう。

166～176は胴上半部に文様帯を持つ土器である。166は縦位の平行沈線文、167は斜行文、168～170は弧線文で、168は括弧状のモチーフの間に縦位の蛇行沈線文を描く。168・169は対弧文である。

171～173は押圧隆帯の土器である。174は擦り消し縄文の土器で安行 3 b 式、176は平行沈線+列点文で、安行 3 b から 3 c 式であろう。

177～186は無文土器である。177は折り返し口縁、178～180は内面に段を持つ。186は無文の瓢形深鉢である。

第119号住居跡出土土器（第270図264～268、第338・339図）

264は深鉢ないし浅鉢で、胴部中段が「く」の字に張り出して、口縁内傾し、口端屈曲し直立する。全面に縄文を施文している。加曾利 B 式に伴う粗製土器であろうか。

265は曾谷から安行 1 式で、遠部第一類の粗製土器である。胴部中段よりやや上方にくびれを持ち、口縁外反して、口端に刻み目文を巡らせる。無文地に斜位の条線を密に施文している。

266は縄文地文の土器で、安行式であろう。

267・268は無文の深鉢底部である。いずれも底面に網代痕を残すが、267は中央部を掻き取っている。

第338・339図は破片資料である。

1・2は加曾利 E IV 式、3・4は称名寺式である。5～9は堀之内 1 式、10は堀之内 2 式で壺形土器である。11～16は加曾利 B 2 式、17～24は加曾利 B 式に伴う粗製土器である。

25～31は紐線文の土器で、遠部第一類である。26は加曾利 B 2 式、他は加曾利 B 3 から曾谷式に伴う土器であろう。

32は曾谷式の瓢形深鉢である。

33～38は曾谷から安行 1 式の水平口縁深鉢である。39は瓢形土器の胴部、40は深鉢胴部で、いずれも安行 1 式であろう。

41は浅鉢で、安行 3 a から 3 b 式である。42は安行 3 c 式の深鉢胴部である。

43～45は安行式に伴う粗製深鉢である。43は安行 1 式、45は安行 3 b から 3 c 式であろう。

46～56は無文土器である。

第120号住居跡出土土器（第270図269、第339～343図）

269は加曾利 B 1 式の精製深鉢で、3単位波状口縁で、波頂部に盲孔を伴う小突起を配する。胴上半部に平行沈線を巡らせるが縄文は施文しない。内文を持つ。

第339～343図は破片資料である。

1・2は諸磯 a 式、3～6は加曾利 E IV 式である。7は櫛歯状工具の短沈線を地文とする土器で、称名寺から堀之内 1 式である。8は称名寺式であろう。9～21は堀之内 1 式である。

22～31は堀之内 2 式である。32・33は堀之内式に伴う粗製土器、34は鉢ないし注口土器の底部で、堀之内 2 式である。

35～39は加曾利 B 1 式で、38・39は注口土器である。40～51は加曾利 B 2 式である。52～58は加曾利 B 3 式である。59～95は加曾利 B 式に伴う粗

製深鉢で、遠部第一類・第三類等を含み、一部は曾谷式に下る可能性がある。

96~101は曾谷式である。102~113は安行式である。102~105は水平口縁深鉢、106は砲弾形深鉢で、いずれも安行1式である。107は安行3b式の砲弾形深鉢か。108は瓢形深鉢で、安行1式である。

109~112は外反口縁の深鉢で、安行3aから3b式。113は注口土器で、安行3b式である。114は安行3cから3d式であろう。115は綾線文を施する深鉢胴部で、大洞系の土器である。

116・117は末端が反り返る折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う粗製土器である。

118~120は無文土器である。

121は晩期の製塩土器、122・123は網代痕を持つ底部で、123は浅鉢ないし注口土器であろう。

第121号住居跡出土土器（第270図270・271、第343・344図）

270は遠部第一類の粗製深鉢で、胴部中段にくびれを持ち、口縁外反する。口縁と胴部中段に刻み隆帯を巡らせる。地文は斜位の条線で、胴上半部と下半部では施文方向を変えている。曾谷から安行1式である。271は縄文地文の底部で、曾谷から安行式である。

第343・344図は破片資料である。

1は黒浜式、2は諸磯b式である。3~5は称名寺式、6・7は堀之内1式、8・9は加曾利B式に伴う粗製土器である。10は高井東式で、大波状口縁深鉢の突起である。

11~28・32は安行1式である。11は大波状口縁の深鉢、12~18は水平口縁深鉢で、12は曾谷式の可能性ある。19~22は瓢形深鉢である。24~27は精製深鉢に伴う胴部で、23・26は瓢形深鉢である。28は台付き鉢、32は浅鉢である。29は安行1式に伴う粗製深鉢である。

30・31は無文土器である。

第122号住居跡出土土器（第270図272~第271図

276、第344・345図）

272は水平口縁の深鉢で、口端上に2個一対の小突起を配し、内面に沈線を巡らせる。口縁以下前面に地文縄文を施文する。加曾利B1式の粗製土器であろう。

273は無文の底部である。裾が三角形に張り出し、底面には網代痕を残している。堀之内2から加曾利B1式の精製深鉢であろう。

274・275は浅鉢の底部であろう。274は胴下半部に平行沈線を、275は帯縄文を巡らせている。加曾利B式であろう。

276は球胴状の注口土器で、3本沈線で円文を描いてS字や「の」の字状の単位文を配し、上下を3本沈線で区画している。加曾利B1式である。第344・345図は破片資料である。

1は黒浜式、2は諸磯a式、3・4は諸磯b式である。5・6は称名寺式、7~9・11~15は堀之内1式で、13は南東北の網取式に類似する。10・16~21は堀之内2式である。22~24は堀之内式に伴う粗製土器である。

25~61は加曾利B式である。25~27は加曾利B1式、28~35は加曾利B2式である。36~38は加曾利B3式であろう。39は無文の口縁で浅鉢か。40・41は注口土器であろう。42~61は加曾利B式に伴う粗製深鉢で、一部は曾谷式に下る可能性がある。

62~64は安行3b式であろう。

第123号住居跡出土土器（第271図277~279、第345・346図）

277は粗製深鉢で、直線的に開く単調な器形で、口縁外面に段を持って押圧を巡らせる。晩期安行式に伴うものであろう。

278は浅鉢である。扁平なフラスコ状の胴部に、大きく開く朝顔状の口縁部を接続している。頸部には刻み隆帯を巡らせて8の字状の貼り付け文を配し、胴部には平行沈線文を等間隔に配して縄文を充填している。堀之内2式である。

279は鉢で、胴部中段が「く」の字に張り出して、頸部屈曲して口縁は短く外反する。頸部に帯縄文区画を持って、上下に刺突列を巡らせる。曾谷式であろう。

第345・346図は破片資料である。

1～11は堀之内1式で、1は称名寺系の土器である。12は堀之内2式、13は無文の口縁、14は条線地文の深鉢で、堀之内式に伴う粗製土器である。

15は加曾利B1式、16は加曾利B2式である。17～20は加曾利B式に伴う粗製深鉢である。17・18は加曾利B1式、19は加曾利B2式であろう。21～23は曾谷式、24は安行3aから3b式、25～27は安行3c式である。

28～36は無文土器である。28・29は口端部に押圧を巡らせる土器で、29は広口壺である。30～33は折り返し口縁の深鉢である。34は口縁が外屈する。

第124号住居跡出土土器（第271図280・281、第346・347図）

280は安行式の粗製深鉢で、内湾口縁で、口唇断面肥厚して外面に段を持ち、段の上に押し引き文を巡らせる。胴上半部に文様帯を持って、縦位の平行沈線文を描く。地文は斜位の条線である。安行3aから3b式に伴うものであろう。

281は台付き鉢で、球状の脚台で、多段の帯縄文と、半円形の擦り消しモチーフを巡らせる。後期安行式に伴うものであろう。

第346・347図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は堀之内式に伴う粗製土器である。3は加曾利B2式であろう。4～18は安行式である。4・5は大波状口縁の深鉢で、4は安行3a式、5は安行1式であろう。

6は外面に帯縄文の区画を持つ水平口縁深鉢で安行2式、7～11は砲弾形深鉢で、7～9が安行1式、11は安行3aから3b式である。12・13は注口土器で安行2から3a式である。

14・15はこれらの精製深鉢に伴う胴部で、14は

安行3a式、15は安行2式の大波状口縁深鉢である。16～18は擦り消し縄文の深鉢で、16は安行2式、17・18は安行3b式か。19も晩期安行式であろう。

20～28は安行式に伴う粗製深鉢である。29～31は晩期の製塩土器で、30の口端部は指で摘み出したような先細りである。

第126号住居跡出土土器（第271図282、第347・348図）

282は大波状口縁深鉢で、波頂部に簡略化した豚鼻突起を重畳させ、胴上半部には帯縄文の三角形区画文を描いて交点に矮小な豚鼻突起を配する。胴部中段には楕円形の区画文を巡らせ、交点に縦長の豚鼻突起を配する。安行3b式であろう。

第347・348図は破片資料である。

1は諸磯b式、4・5は堀之内式である。2・3・6・9は加曾利B2式であろう。7・8は遠部第一類で、8は加曾利B2式、7は加曾利B3から曾谷式であろう。10は加曾利B式に伴う粗製土器である。

11・12は曾谷式である。13～15は安行1式である。16は晩期安行式の粗製深鉢である。17は無文の深鉢である。18は晩期の製塩土器で、口端部を内割ぎ状に整形している。

第128号住居跡出土土器（第272図283、第348・349図）

283は大型の精製深鉢である。胴下半部が「く」の字に張りだし、胴部中段がくびれて、口縁外反し、口端内屈する。底面は上げ底状となる。胴上半部から中段にかけて櫛歯状工具の波状文を描き、上下を沈線で区画して、口縁側の区画には8の字状の貼り付け文を配する。口端上には両端と中央に押圧を持つ刻み目列の単位文を3単位配する。堀之内2式である。

第348・349図は破片資料である。

1は諸磯c式、2は加曾利EIV式である。5～15は堀之内1式で、5は称名寺系の土器、15は4

単位の橋梁状把手を持つ壺である。

16～22は堀之内2式で、22は注口土器であろう。23・24は加曾利B1式、25・26は加曾利B2式で、25は浅鉢である。27・28は加曾利B式に伴う粗製深鉢で、27は加曾利B2式の遠部第一類、28は加曾利B1式である。

33は安行1式、34はこれに伴う粗製深鉢である。29～32は無文の口縁、35・36は網代痕を持つ底部で、後期から晩期の土器であろう。

第129号住居跡出土土器（第273図284・285、第349図）

284は水平口縁の深鉢で、胴張り、頸部にくびれを持つ。胴部中段に平行沈線＋列点文の区画を巡らせる。胴上半部には集合沈線でU字状の区画を描く。区画の中央には刻みを持つ縦の楕円文を配し、これを中心に粗雑な対向三叉文を描く。胴下半部には連続弧線文を巡らせる。安行3d式であろう。

285は水平口縁深鉢で、緩やかに内湾しつつ立ち上がり、口縁直立する。胴上半部には長楕円形の区画文を2段巡らせ、胴部中段以下は斜位の条線を施文する。前浦式に伴う粗製土器である。

第349図は破片資料である。

1は加曾利EⅣ式、2～4は堀之内1式である。5は加曾利B1式の浅鉢、6～11は加曾利B2式である。12はこれに伴う粗製深鉢で遠部第一類、13・14は内面に凹線を巡らせる口縁で、加曾利B式に伴う粗製深鉢である。

15は曾谷式、16は安行1式の砲弾形深鉢である。17は安行3aから3b式、18は安行3c式であろう。19は安行3b式に伴う粗製深鉢である。

20～22は折り返し口縁の土器で、晩期安行式に伴う土器である。

第130号住居跡出土土器（第349図）

1は堀之内2式である。2は堀之内式に伴う粗製土器である。6は曾谷式の瓢形深鉢である。

3・4は水平口縁の深鉢で、3は安行1式、4

は安行3a式であろう。5は砲弾形の深鉢で、安行1式か。

7は後期安行式、8は安行3b式の粗製深鉢である。

第131号住居跡出土土器（第273図286～289、第350・351図）

286は浅鉢である。胴部中段が「く」の字に張り出して、頸部で屈曲して口縁外反する。水平口縁上に貫通孔を持つ円盤状突起を配する。胴上半部に縄文帯を持って上下を平行沈線で区画し、ボタン状の貼り付け文を起点に同心円文を描いている。胴下半部は無文である。堀之内1式である。

287は球胴状の鉢である。内湾口縁で、刻み隆帯の区画を巡らせ、貫通孔を持つ把手の下に縦瘤を重畳させる。胴部中段以下には矢羽状の条線を施文する。曾谷・高井東式であろう。

288は縄文地文で、安行式であろう。

289は無文の小型浅鉢で、底径が広く、胴部から口縁にかけて外反しつつ開く。

第350・351図は破片資料である。

1は浮島式、2は加曾利EⅡ式、3は加曾利EⅣ式である。4～10は堀之内1式である。11・12は堀之内式に伴う粗製土器である。

13は加曾利B1式、14は加曾利B3式である。15～25は加曾利B式に伴う粗製土器である。15は遠部第四類、17は遠部第二類、19・20は遠部第一類である。

26～28は曾谷・高井東式である。29～41は安行式である。29・30は大波状口縁深鉢で、29は安行1式である。30・33～36は水平口縁深鉢で、30は安行1式、32・37・38は砲弾形深鉢で、32は安行3a式であろう。

39・40はこれらの精製深鉢に伴う胴部で、39は安行1式の大波状口縁深鉢、40は砲弾形深鉢であろう。41は晩期安行式の注口土器、42は東北系の土器で、大洞C1式か。

43～45は安行式に伴う粗製深鉢で、いずれも後

期安行式である。46・47は折り返し口縁の深鉢、48～51は無文土器である。

第132号住居跡出土土器（第351・352図）

1は田戸下層式、2は諸磯a式である。3は加曾利EⅣ式である。

4～6は堀之内Ⅰ式、7は堀之内Ⅱ式に伴う粗製深鉢である。8は加曾利BⅡ式、9～11は加曾利BⅢ式に伴う粗製土器である。12～14は曾谷・高井東式である。

15～25は安行式である。15は安行Ⅰ式の大波状口縁深鉢、16～21は水平口縁の深鉢で、16・18・21は安行Ⅰ式、17は安行Ⅲa式であろう。22は安行Ⅲc式で、波状口縁の深鉢である。

23は後期安行式の付け鉢、24は安行Ⅱ式の注口土器である。25は安行ⅢaからⅢb式の浅鉢で、底面に擦り消し文様を持つ。

26～29は安行式に伴う粗製深鉢で、26・27は後期安行式、28・29は晩期の土器であろう。

第133号住居跡出土土器（第273図290～第274図292、第352・353図）

290は安行Ⅰ式の水平口縁深鉢で、緩やかな外反口縁で、外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する。

291はこれに伴う粗製土器で、胴部中段にくびれを持って、口縁は内湾しつつ立ち上がり、口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に押し引き文を巡らせる。地文は斜位の条線で、口縁から胴下半部まで一様に施文している。

292は曾谷・高井東式の注口土器である。胴部中段よりやや上方が「く」の字に張り出して、頸部屈曲して口縁外反する。胴上半部に2段の平行沈線による区画を巡らせ、器面を4分割して3箇所、背割れの縦瘤を残る1箇所に注口を配する。胴下半部には矢羽状沈線を巡らせ、上端を平行沈線で区画する。

第352・353図は破片資料である。

1は加曾利EⅢからⅣ式で、両耳壺である。2～4・7・8は堀之内Ⅰ式である。9は堀之内Ⅱ式で、5は堀之内Ⅱ式に伴う粗製土器である。

10・11は加曾利BⅡ式、12は加曾利BⅢ式である。13・14は加曾利BⅣ式に伴う粗製土器である。15～18は曾谷・高井東式である。

19～30は安行式である。19～23は水平口縁の深鉢、24は砲弾形深鉢、25は瓢形深鉢で、いずれも安行Ⅰ式である。

26・27はこれらの深鉢に伴う胴部である。26は後期安行式の水平口縁深鉢であろう。28は外反口縁の深鉢で、安行ⅢaからⅢb式である。29は後期安行式の付け鉢、30は安行Ⅱ式の注口土器である。

31～33は後期安行式の粗製深鉢である。34は折り返し口縁の深鉢、35・36は無文土器である。

第134号住居跡出土土器（第274図293、第353図）

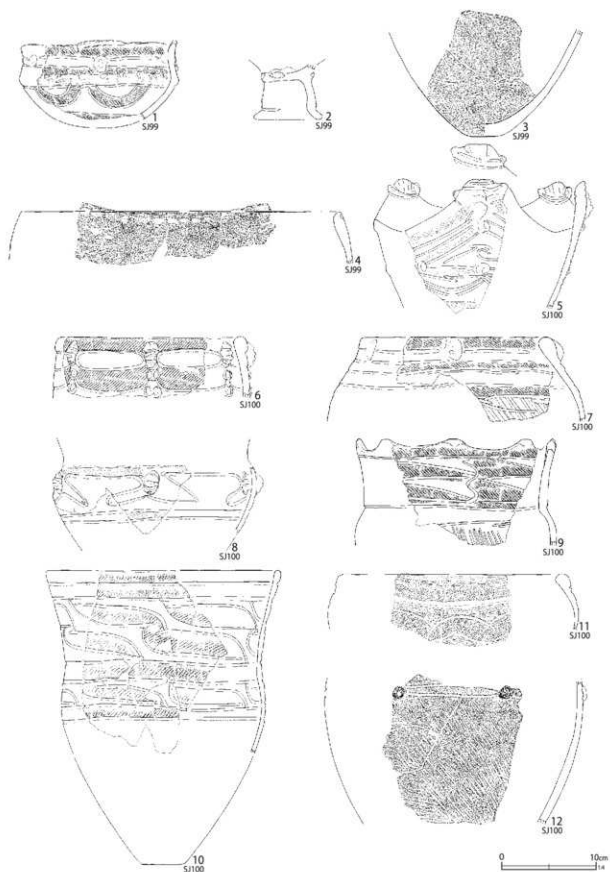
293は安行Ⅰ式の水平口縁深鉢である。胴部中段にくびれを持ち、口縁は緩やかに内湾しつつ立ち上がる。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて2段の縦瘤を配し、胴上半部には半円形の擦り消しモチーフを巡らせる。胴部中段には沈線+押し引き文の区画を巡らせる。胴下半部には対向弧線文を描いて、縄文を充填する。

第353図は破片資料である。

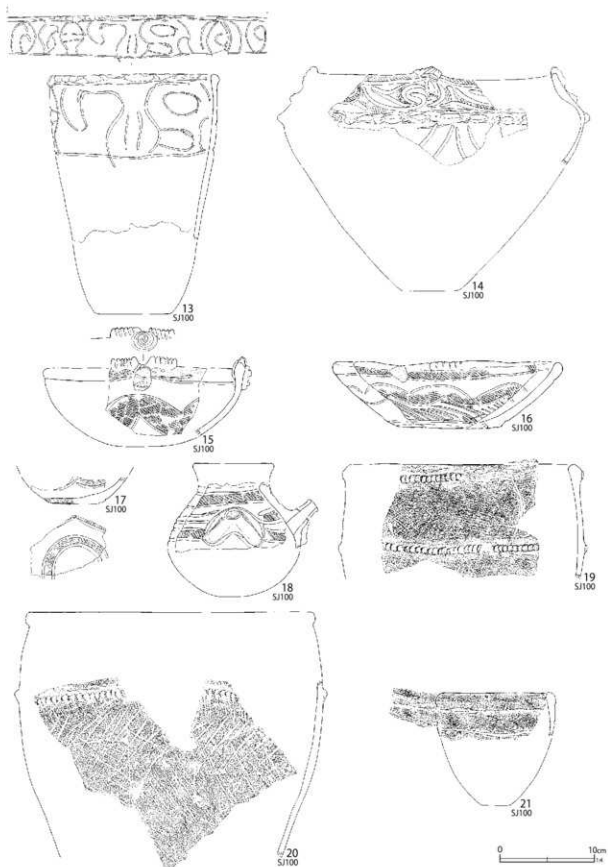
1は諸磯b式、2は加曾利BⅠ式である。4は加曾利BⅢ式、5・6は曾谷から安行Ⅰ式、10は加曾利BⅡ式の粗製深鉢であろう。7は水平口縁深鉢、8は瓢形深鉢でいずれも安行Ⅰ式、9は安行ⅢaからⅢb式の胴部である。

11は小型の砲弾形深鉢で、安行Ⅰ式であろう。

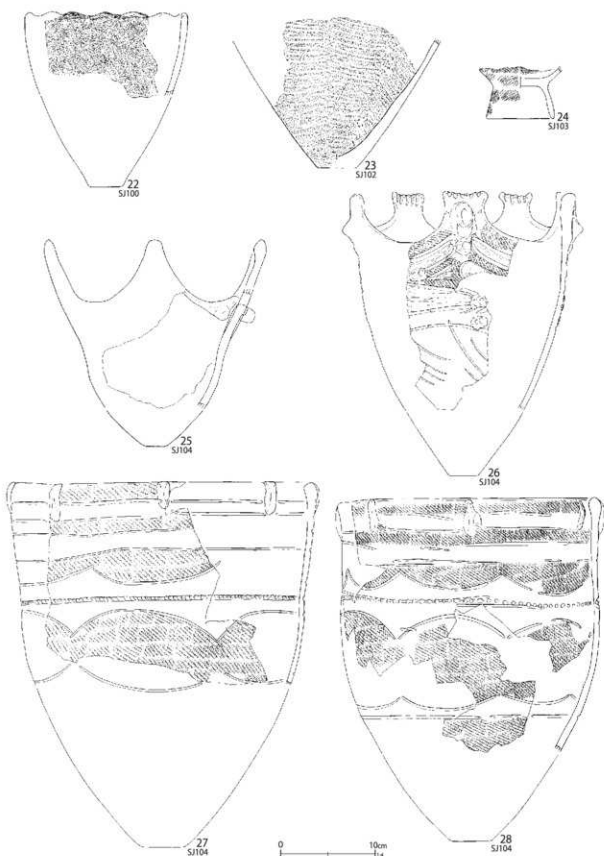
12は同時期の粗製深鉢である。13は手づくねの無文深鉢と考えたが、何らかの土製品の可能性もある。後期から晩期の土器である。



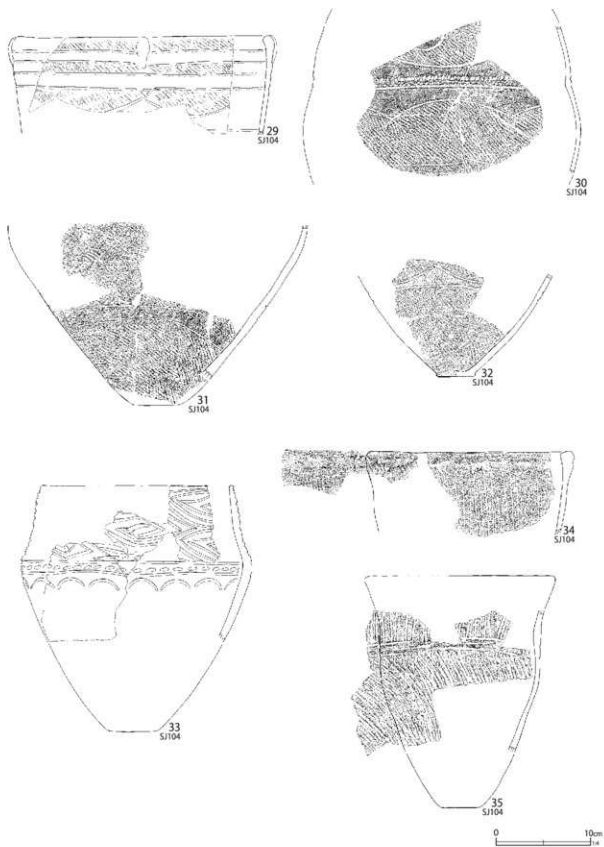
第239图 住居跡出土土器(1)



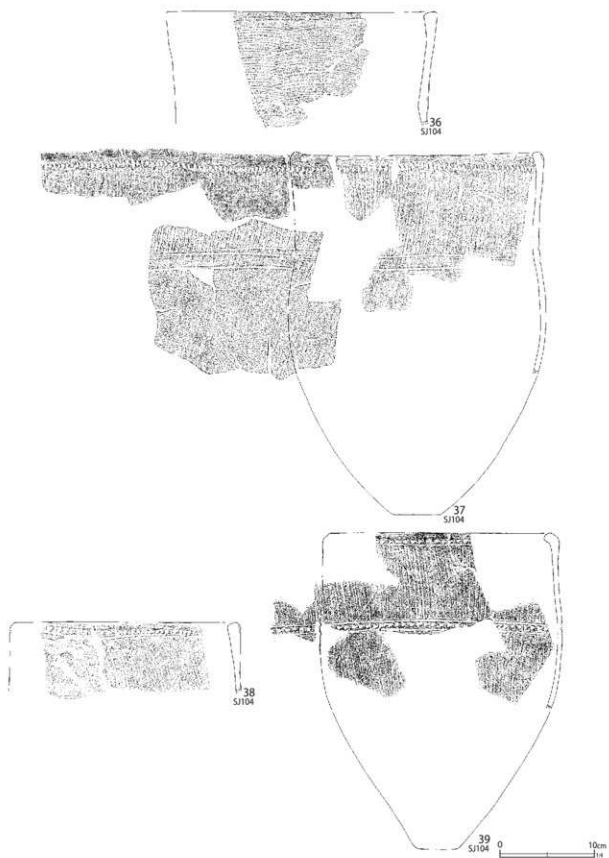
第240図 住居跡出土土器（2）



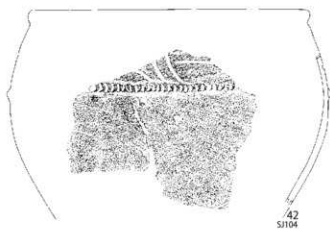
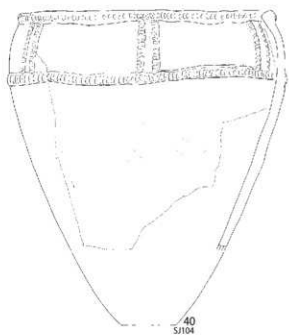
第241图 住居跡出土土器 (3)



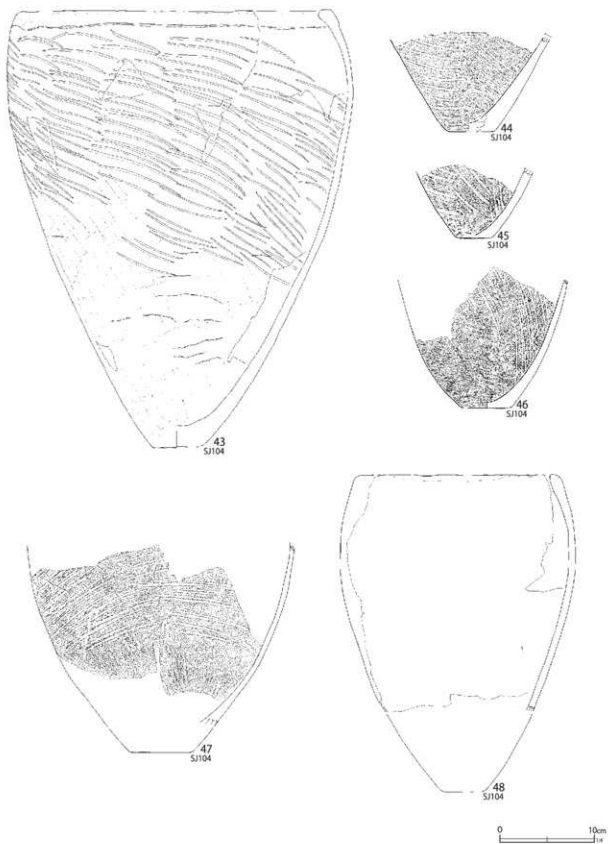
第242図 住居跡出土土器（4）



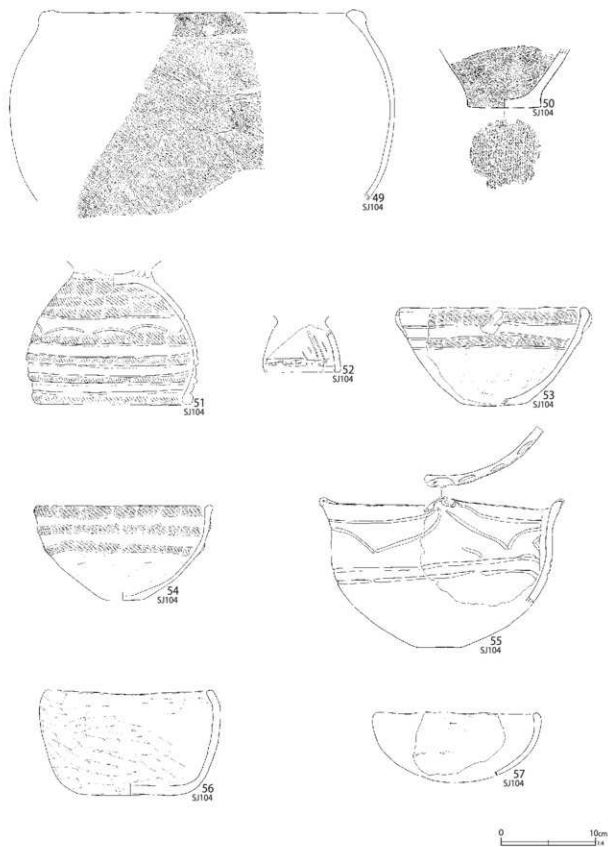
第243図 住居跡出土土器 (5)



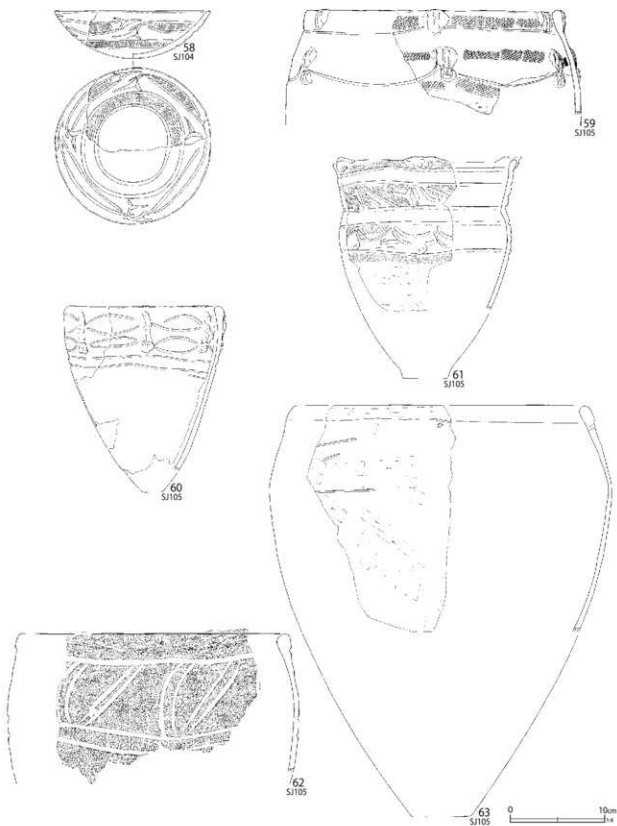
第244図 住居跡出土土器 (6)



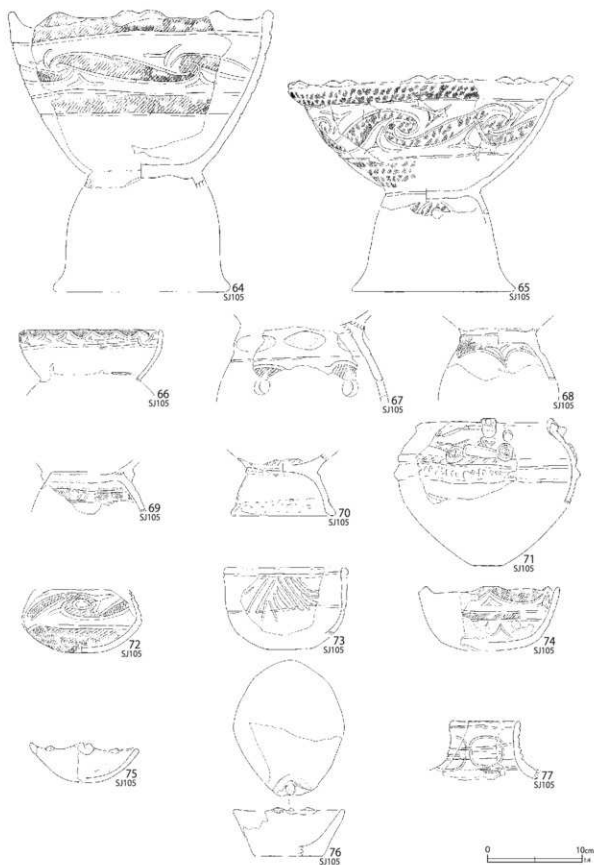
第245図 住居跡出土土器（7）



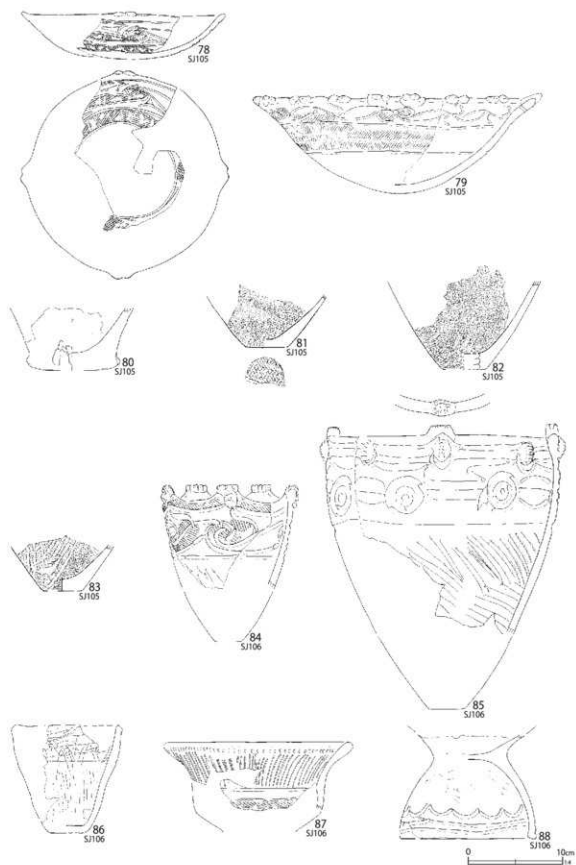
第246図 住居跡出土土器 (8)



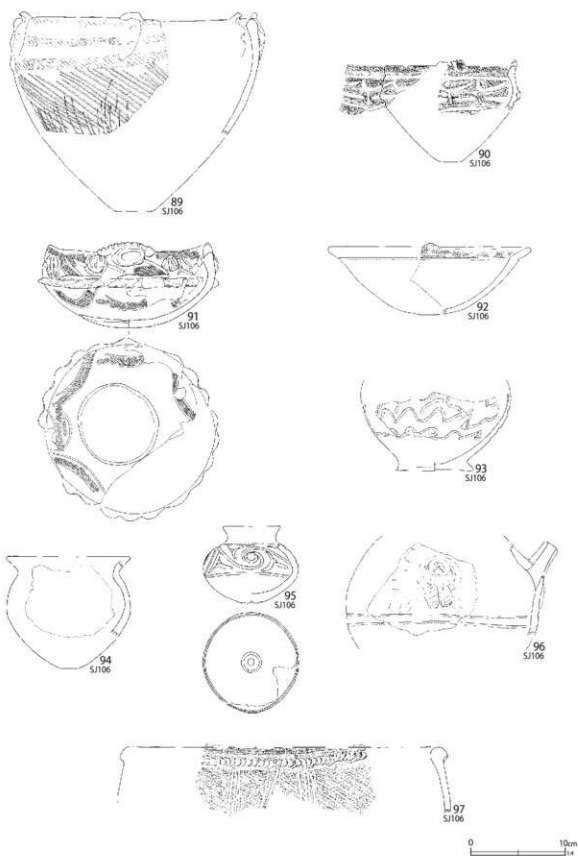
第247図 住居跡出土土器（9）



第248図 住居跡出土土器 (10)



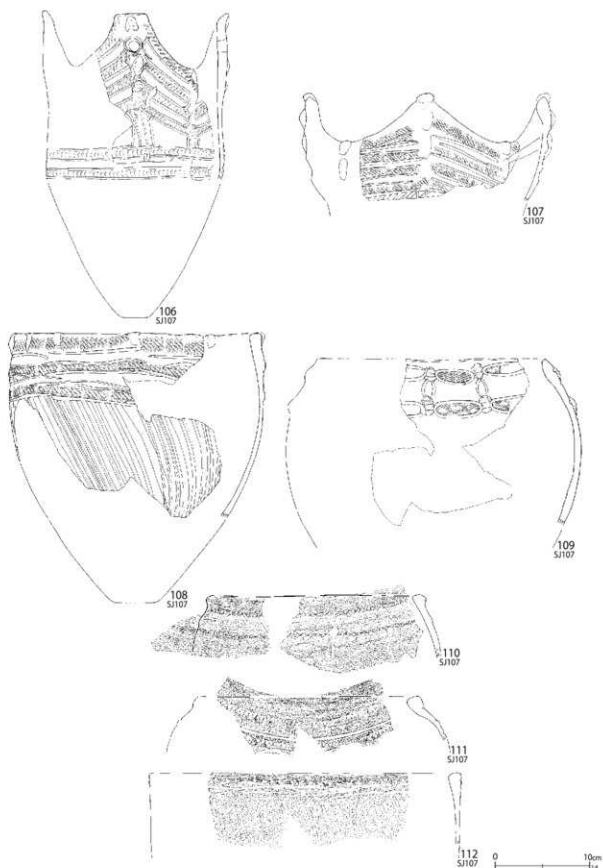
第249図 住居跡出土土器 (11)



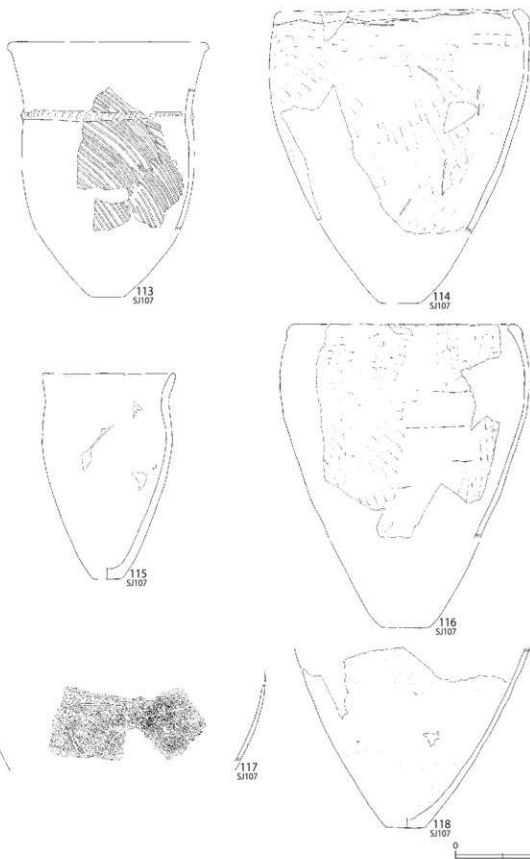
第250図 住居跡出土土器 (12)



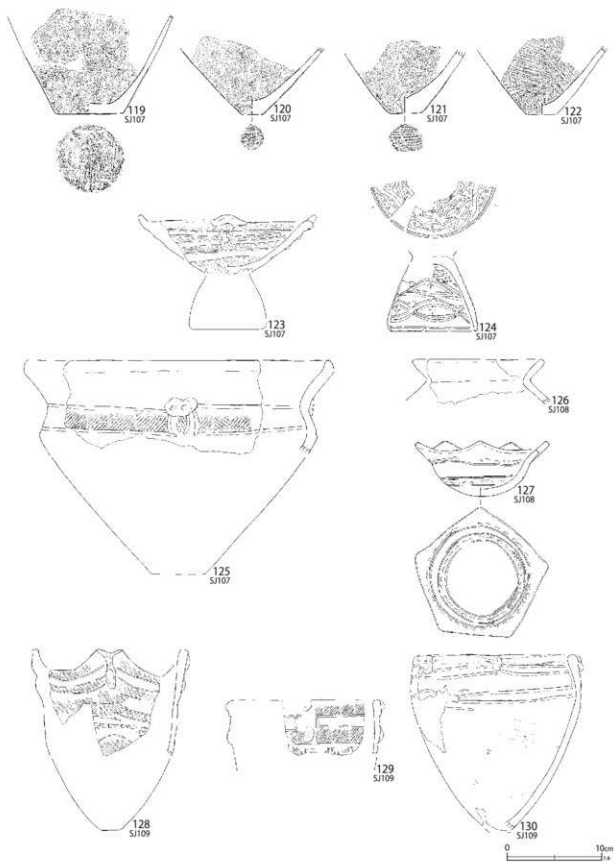
第251図 住居跡出土土器 (13)



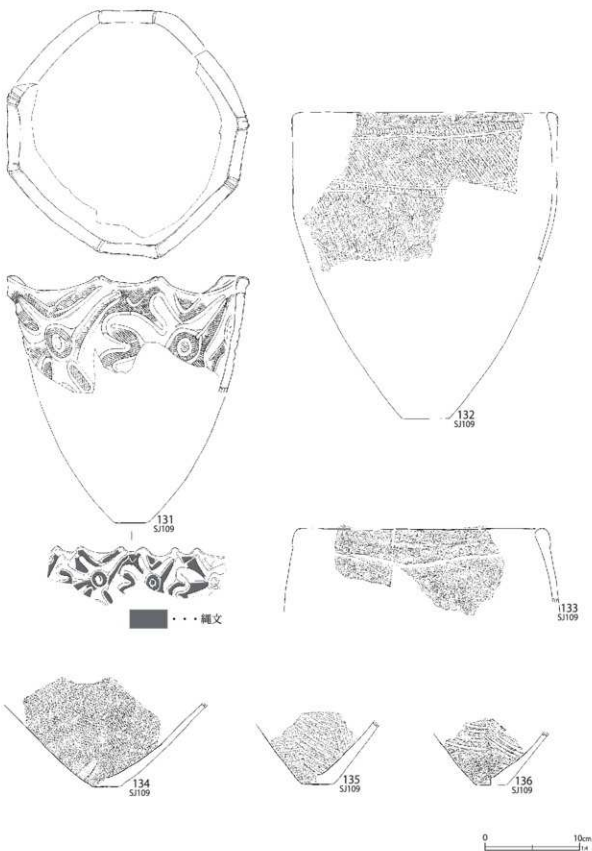
第252図 住居跡出土土器 (14)



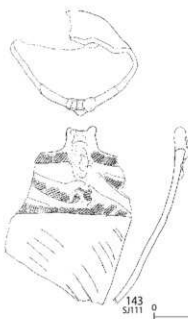
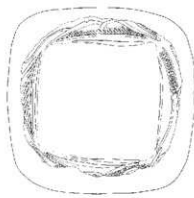
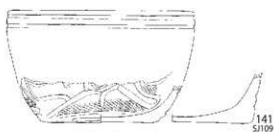
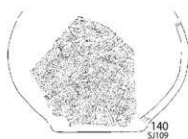
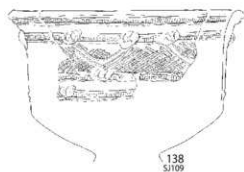
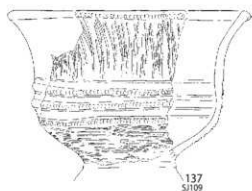
第253図 住居跡出土土器 (15)



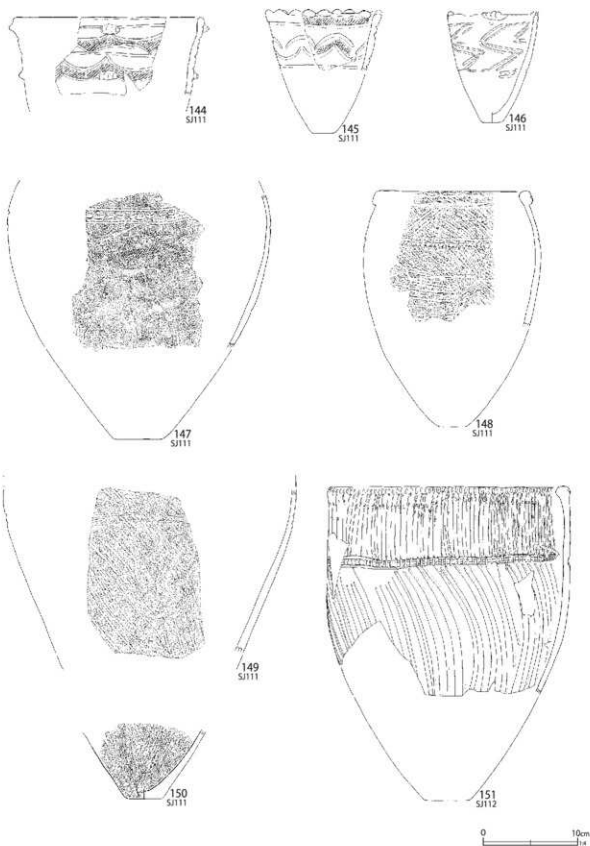
第254図 住居跡出土土器 (16)



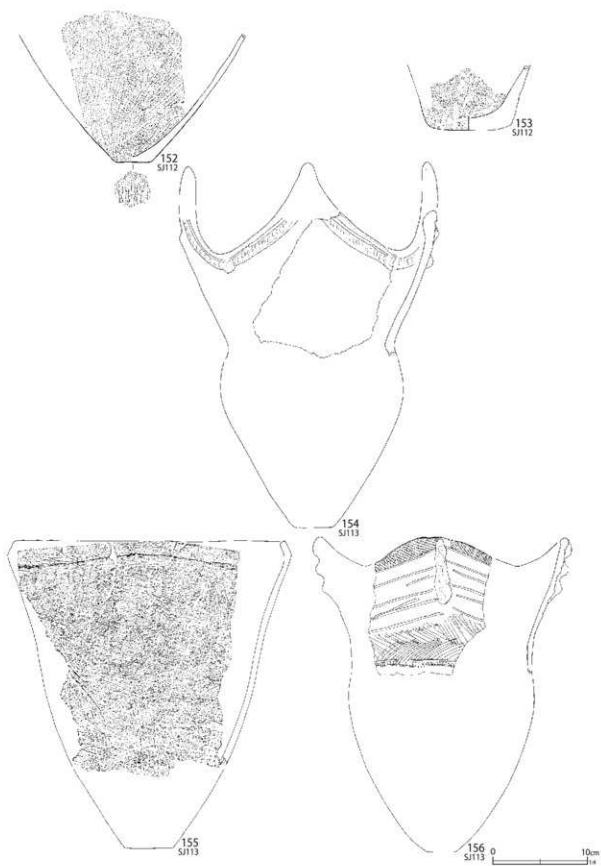
第255図 住居跡出土土器 (17)



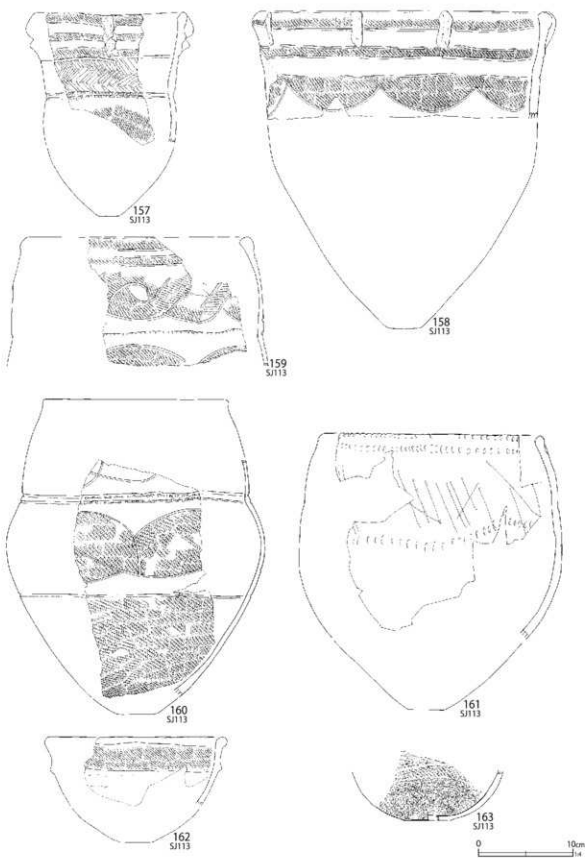
第256図 住居跡出土土器 (18)



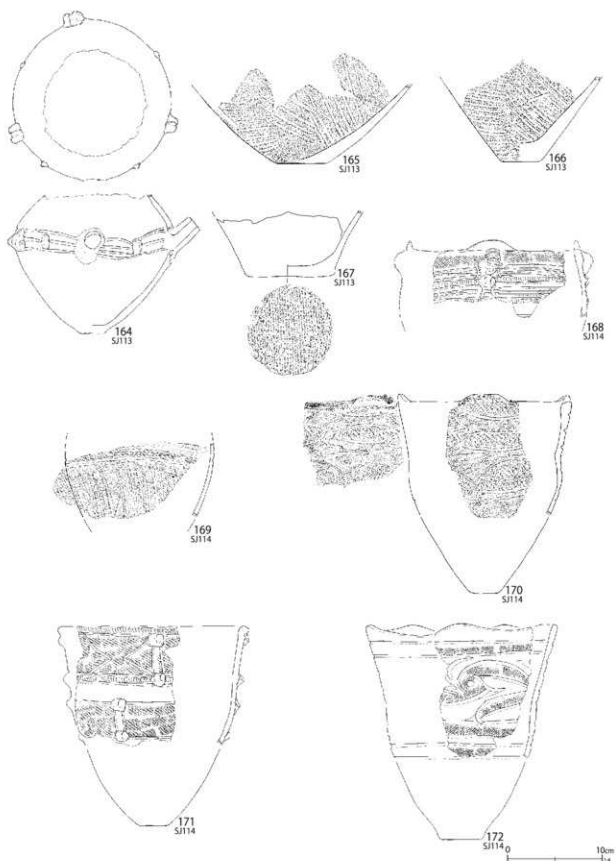
第257図 住居跡出土土器 (19)



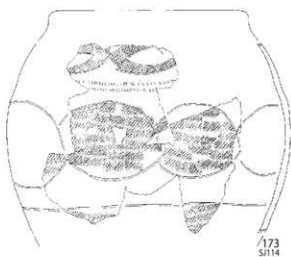
第258図 住居跡出土土器 (20)



第259図 住居跡出土土器 (21)



第260図 住居跡出土土器 (22)



173
SJ114



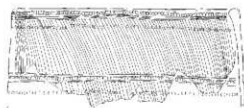
174
SJ114



175
SJ114



176
SJ114



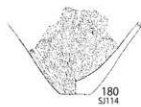
177
SJ114



178
SJ114



179
SJ114



180
SJ114



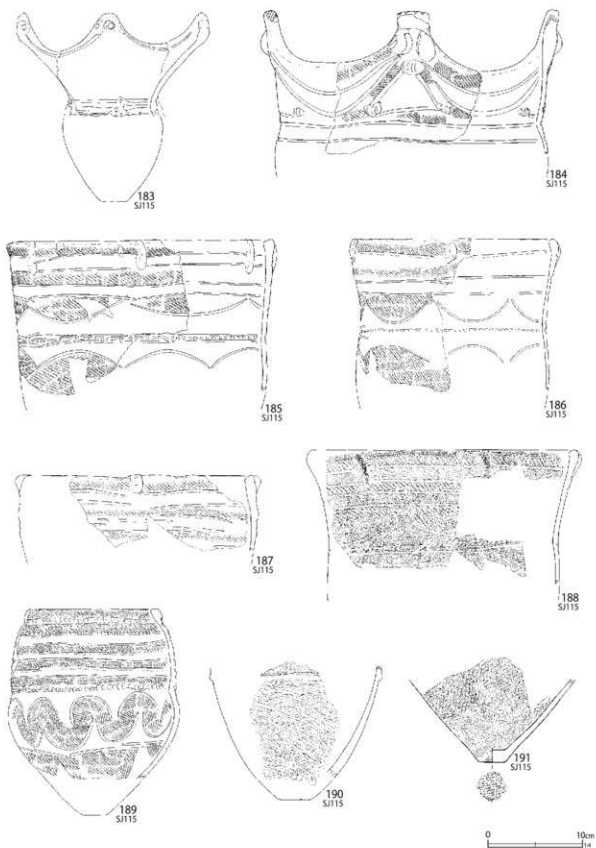
181
SJ114



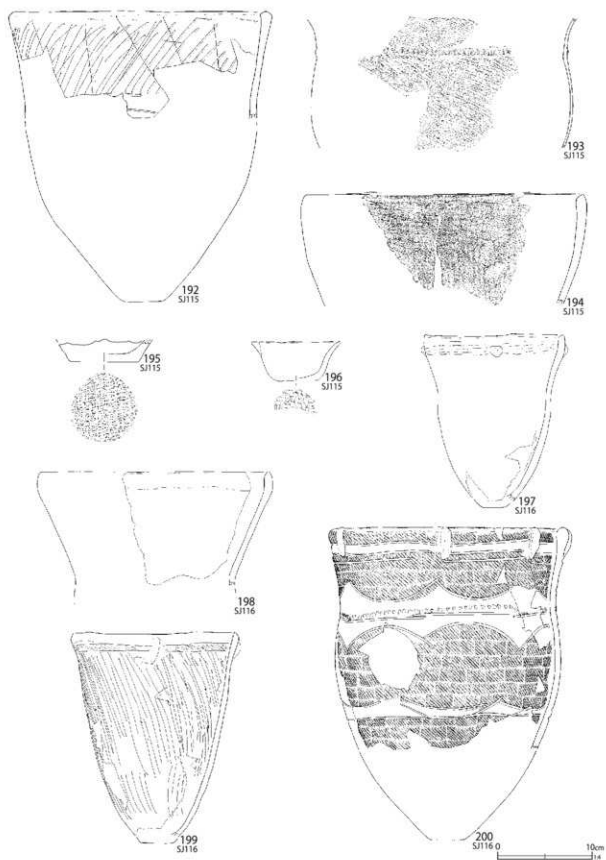
182
SJ114



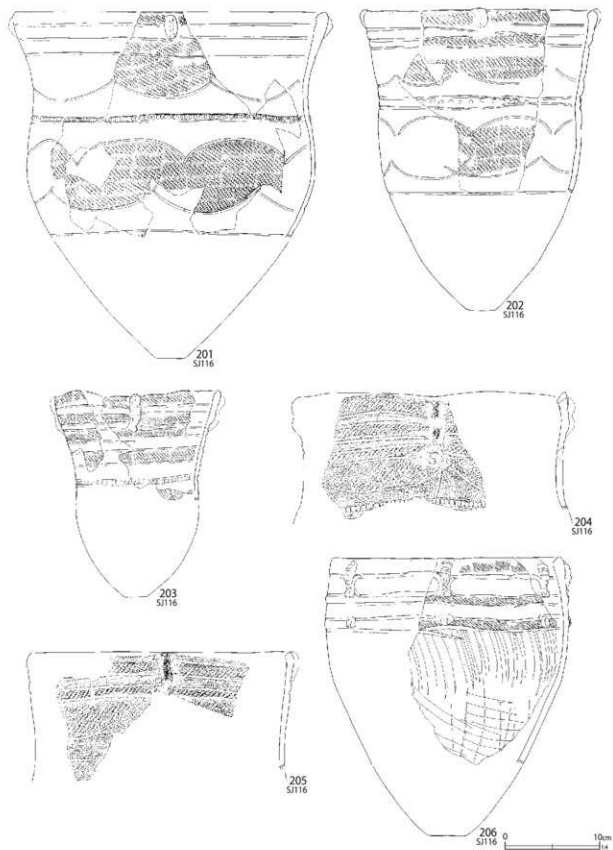
第261図 住居跡出土土器 (23)



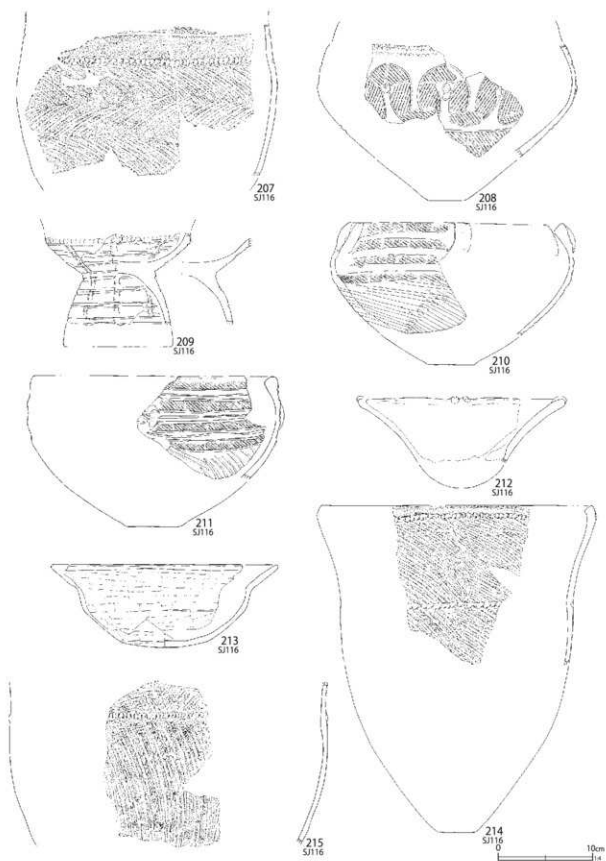
第262図 住居跡出土土器 (24)



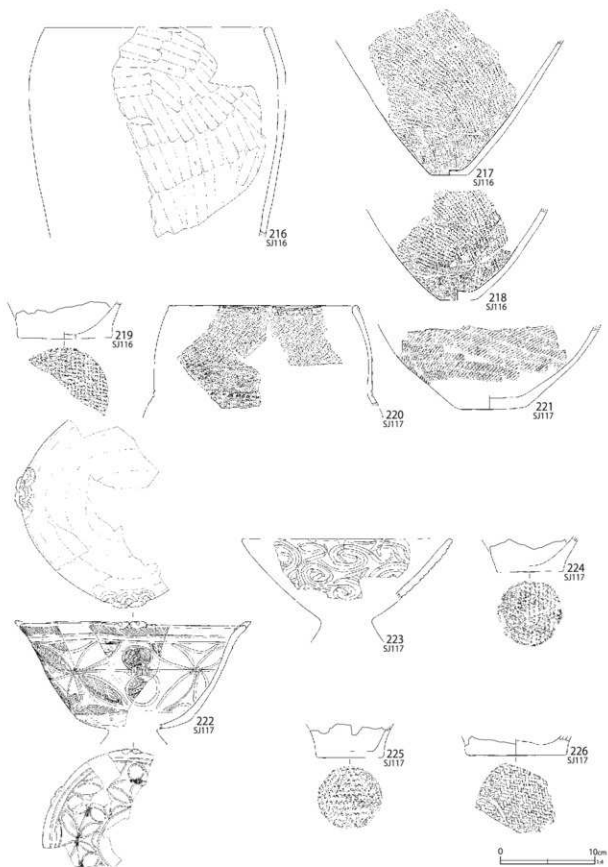
第263図 住居跡出土土器 (25)



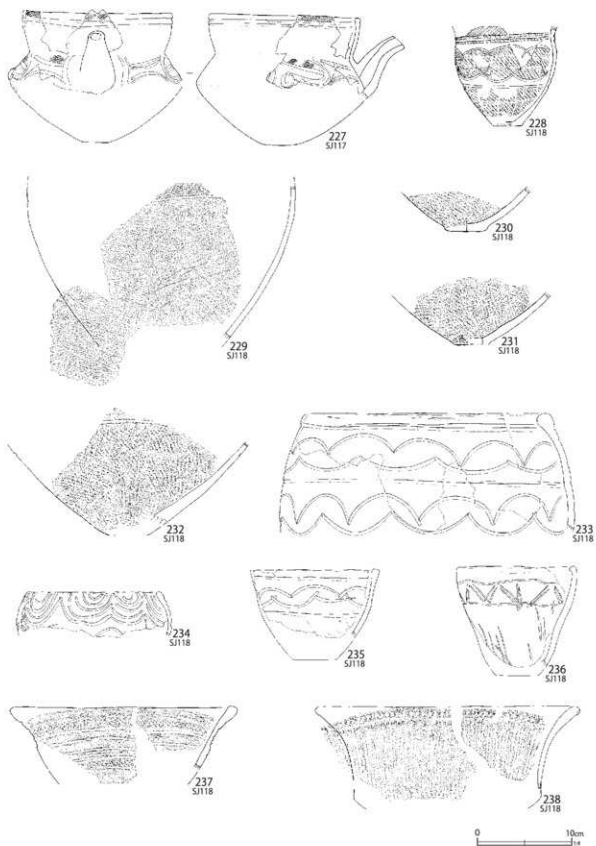
第264図 住居跡出土土器 (26)



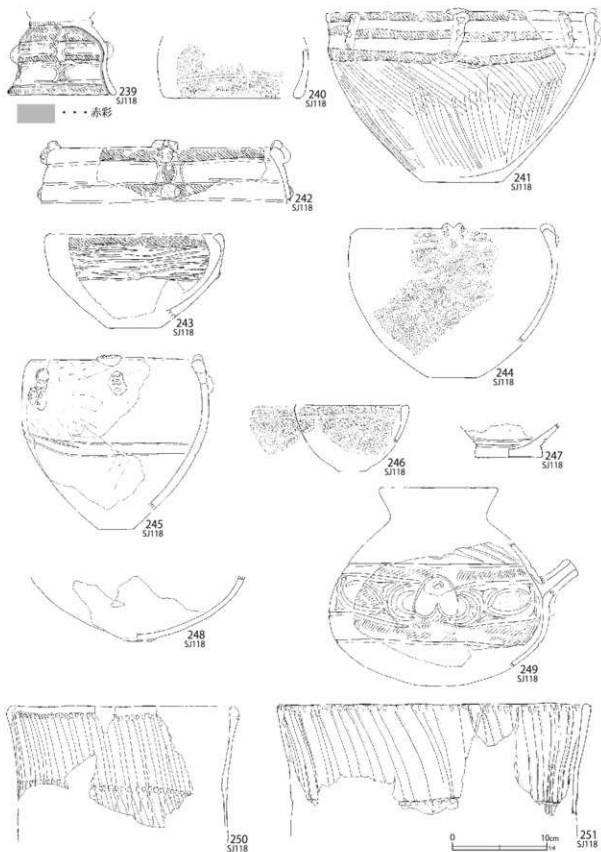
第265図 住居跡出土土器 (27)



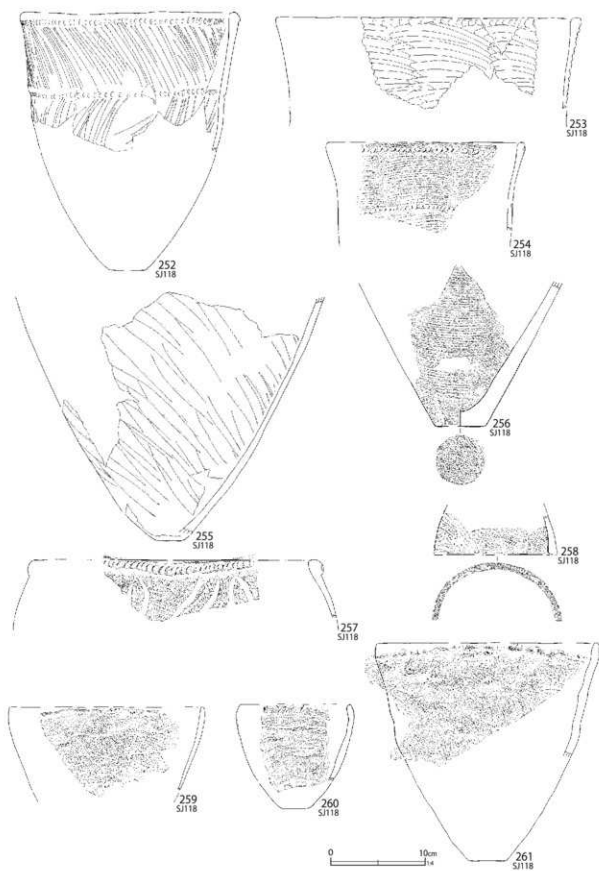
第266図 住居跡出土土器 (28)



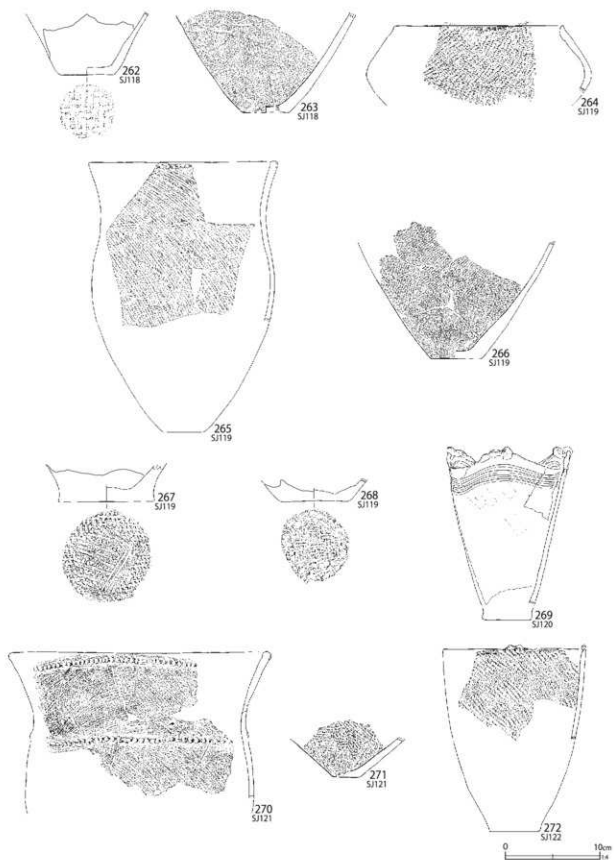
第267図 住居跡出土土器 (29)



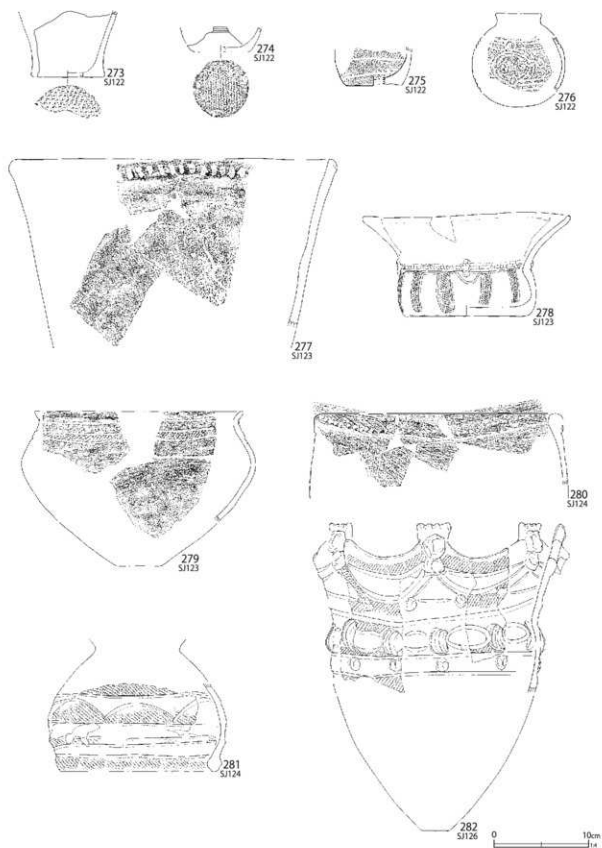
第268図 住居跡出土土器 (30)



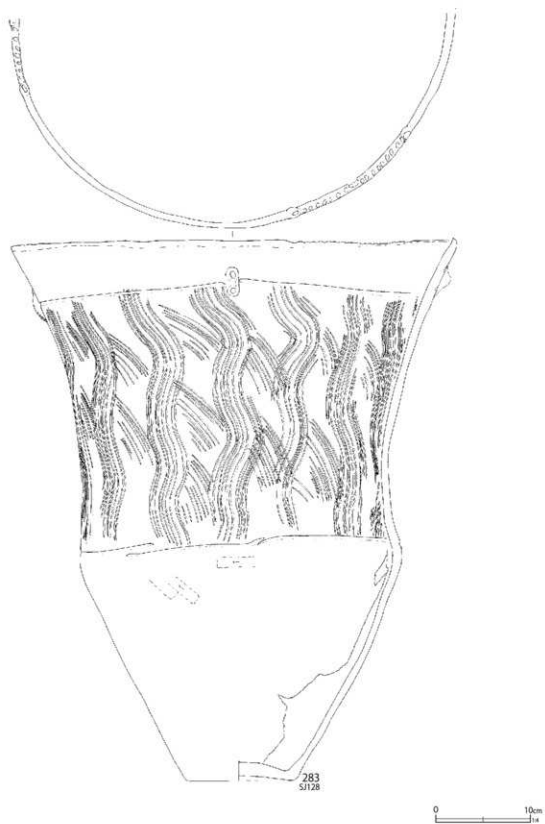
第269図 住居跡出土土器 (31)



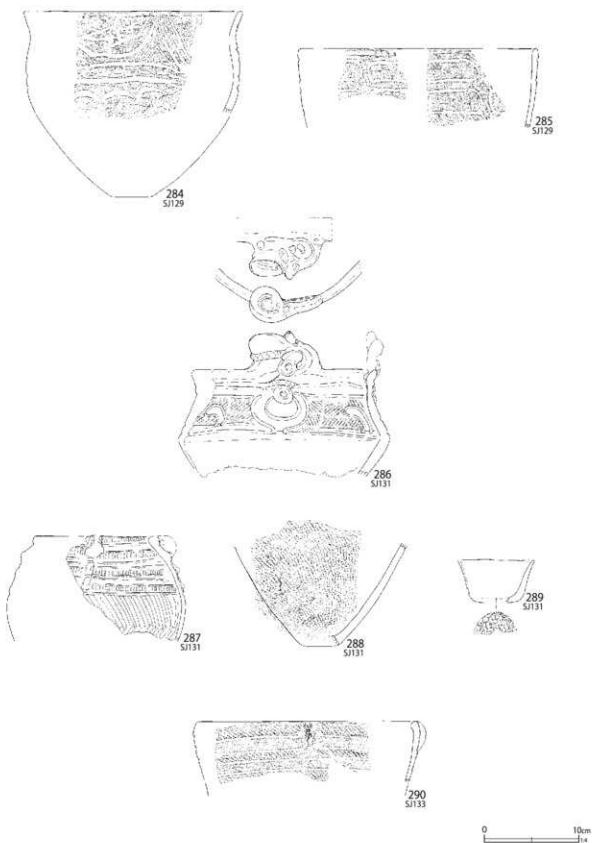
第270図 住居跡出土土器 (32)



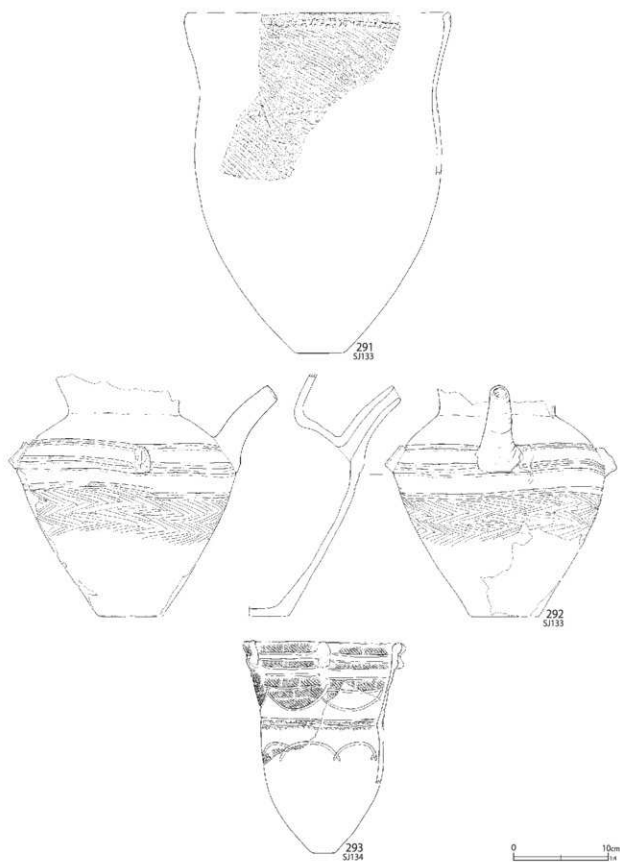
第271図 住居跡出土土器 (33)



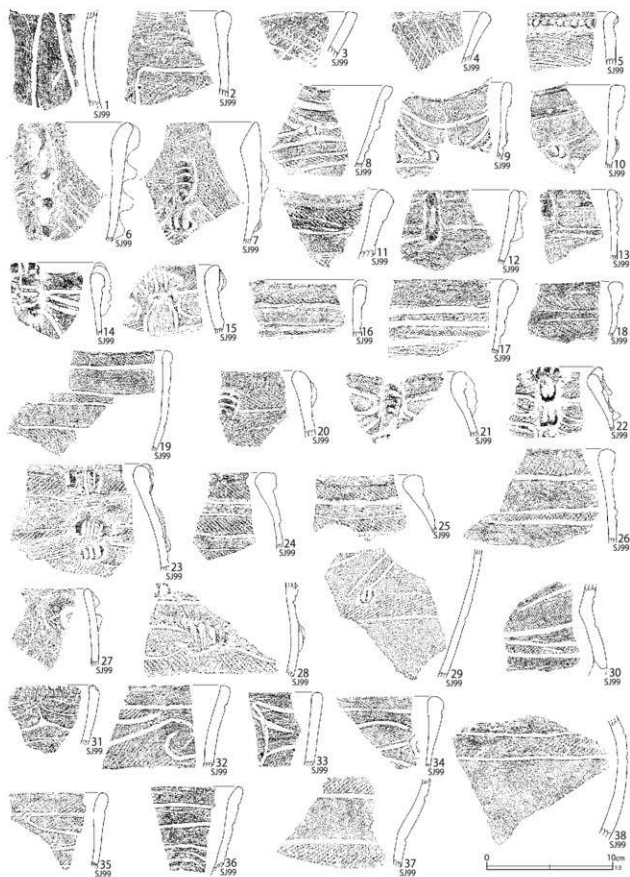
第272図 住居跡出土土器 (34)



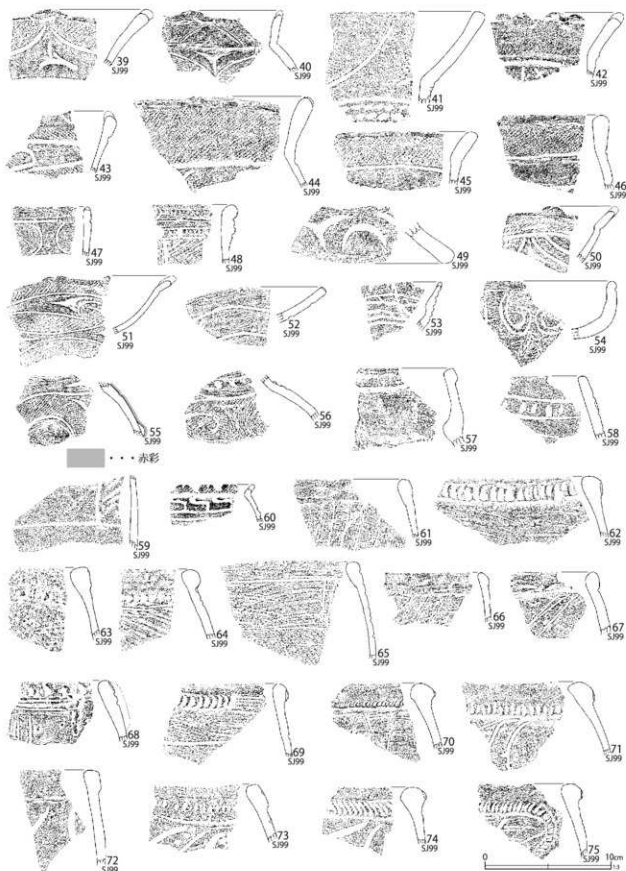
第273図 住居跡出土土器 (35)



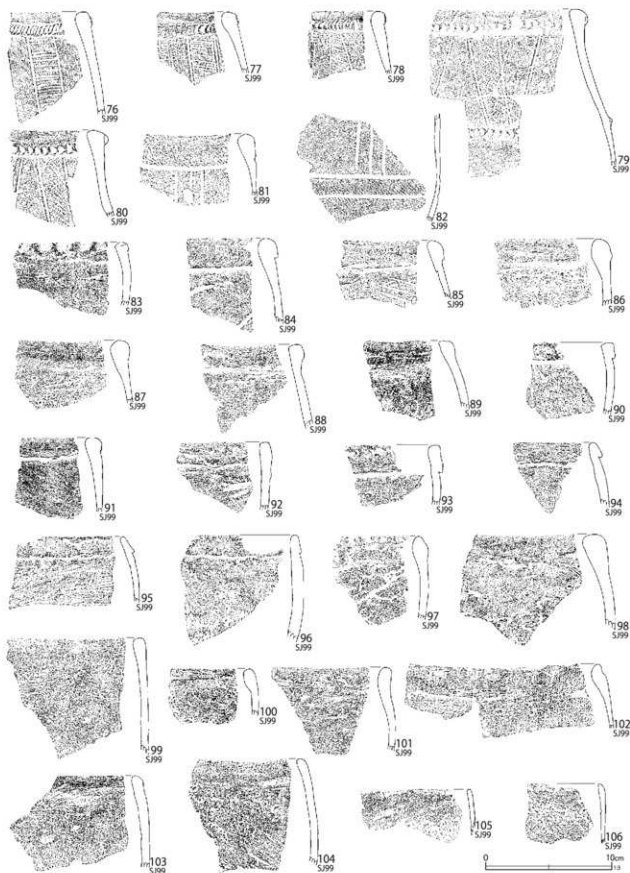
第274図 住居跡出土土器 (36)



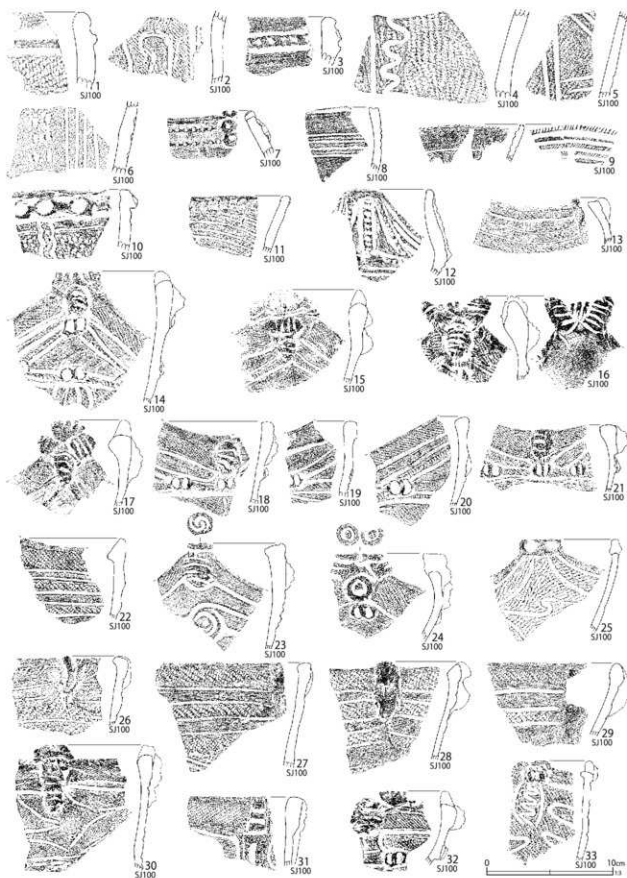
第275图 住居跡出土土器 (37)



第276図 住居跡出土土器 (38)



第277图 住居跡出土土器 (39)



第278图 住居跡出土土器 (40)



第279图 住居跡出土土器 (41)



第280図 住居跡出土土器 (42)



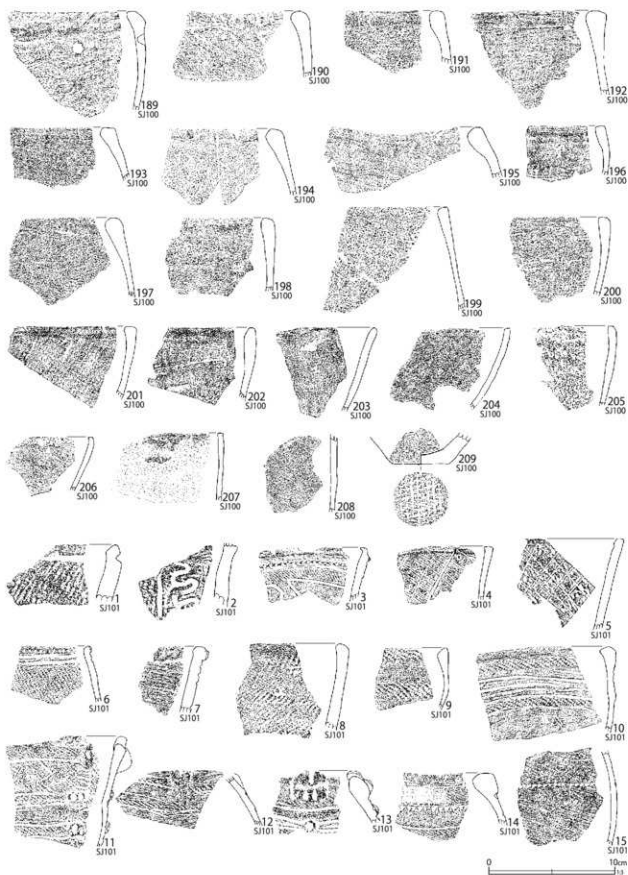
第281图 住居跡出土土器 (43)



第282図 住居跡出土土器 (44)



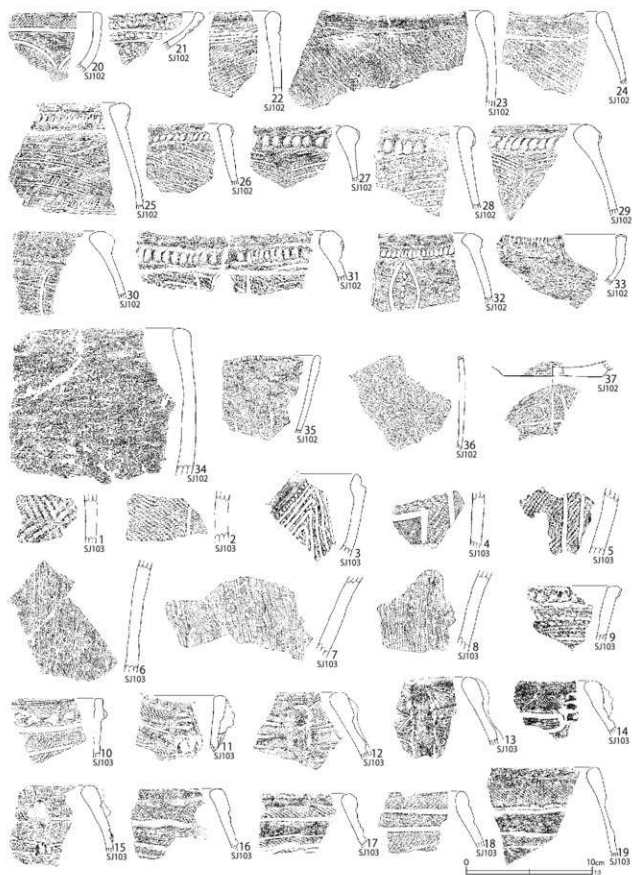
第283图 住居跡出土土器 (45)



第284图 住居跡出土土器 (46)



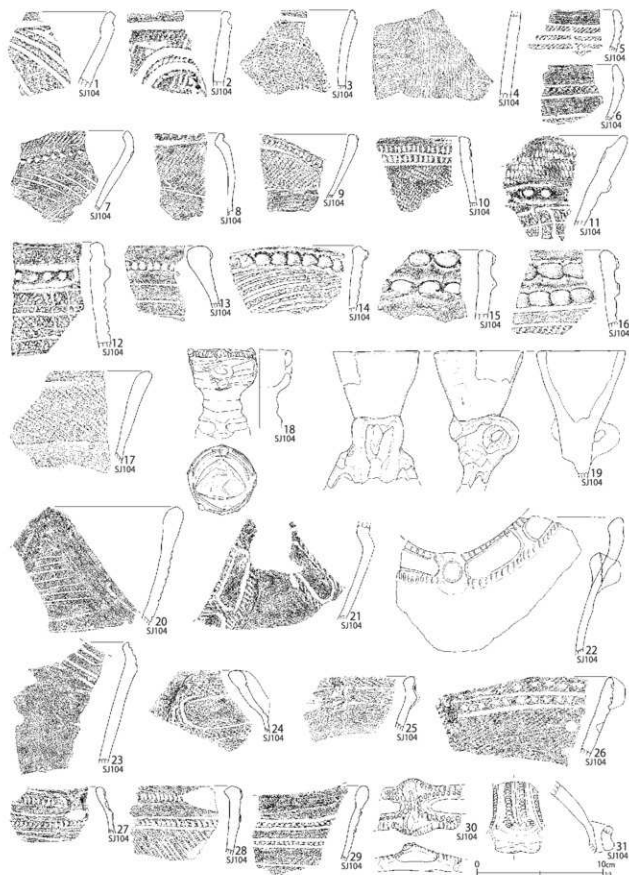
第285図 住居跡出土土器 (47)



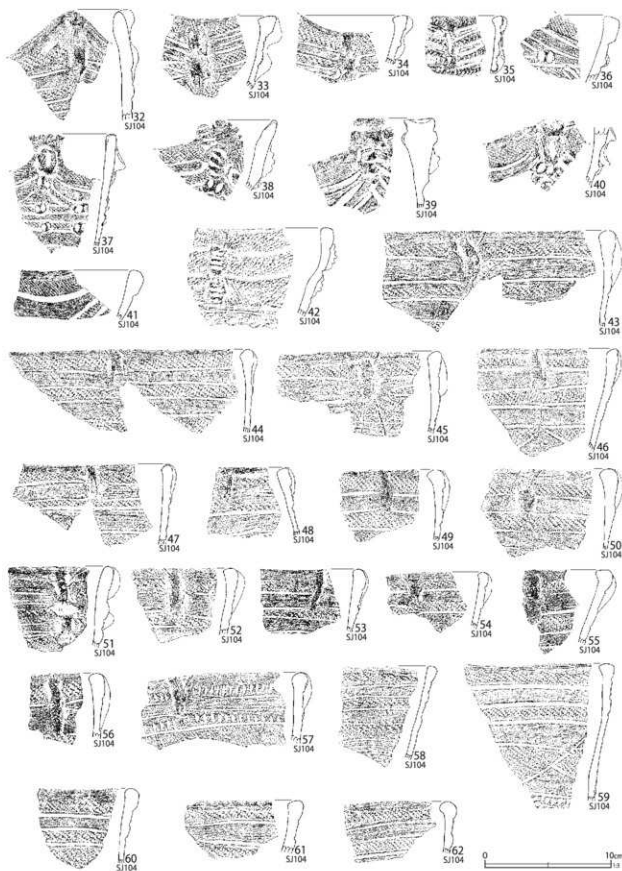
第286图 住居跡出土土器 (48)



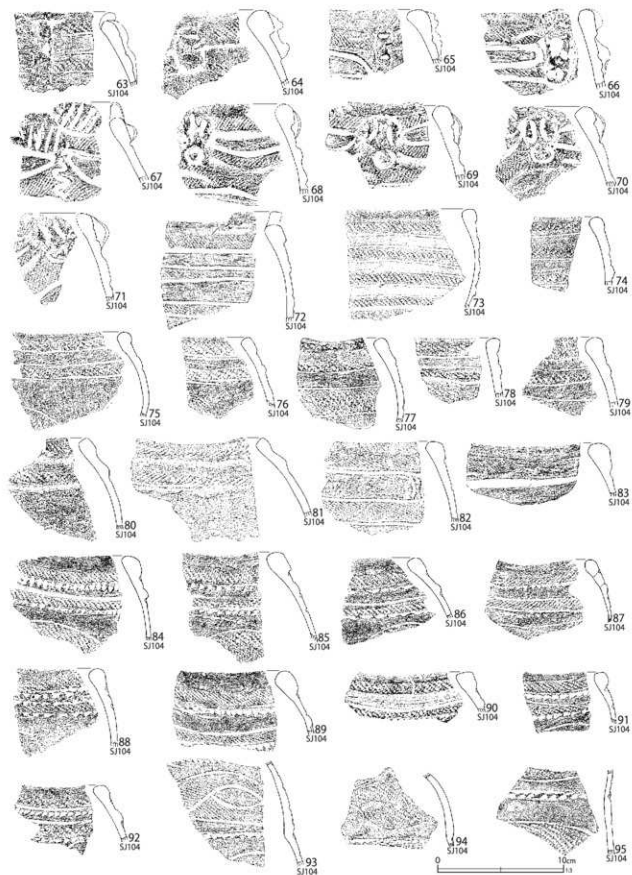
第287图 住居跡出土土器 (49)



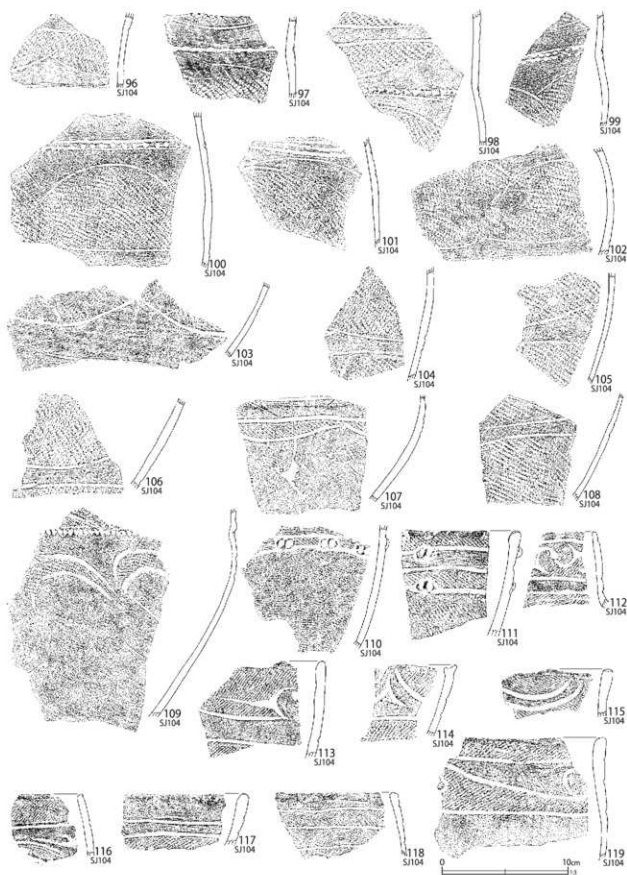
第288图 住居跡出土土器 (50)



第289图 住居跡出土土器 (51)



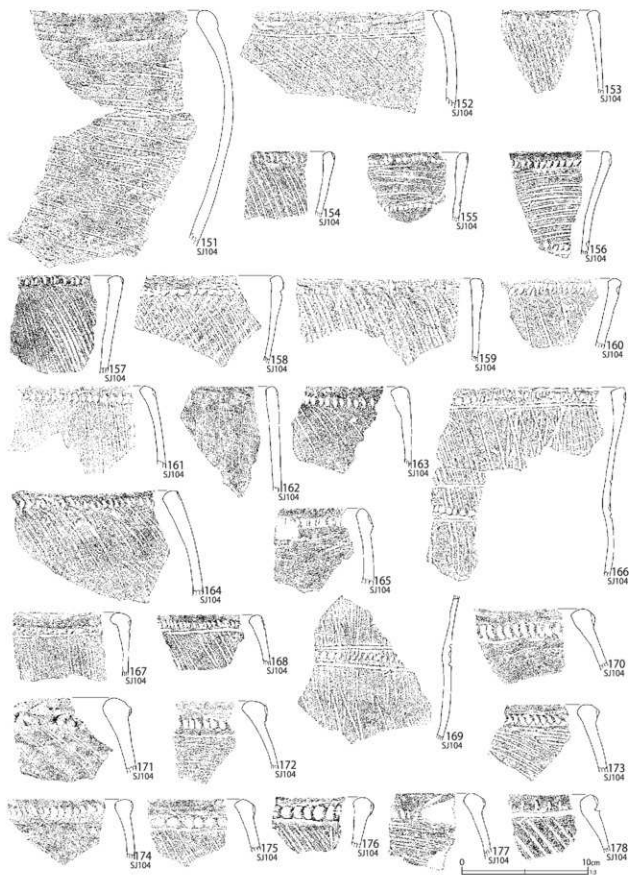
第290图 住居跡出土土器 (52)



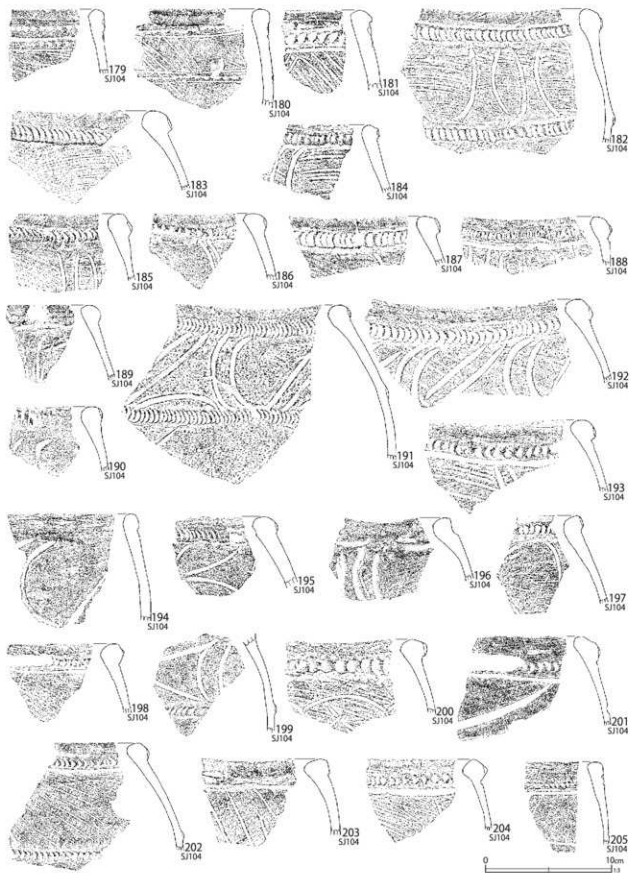
第291图 住居跡出土土器 (53)



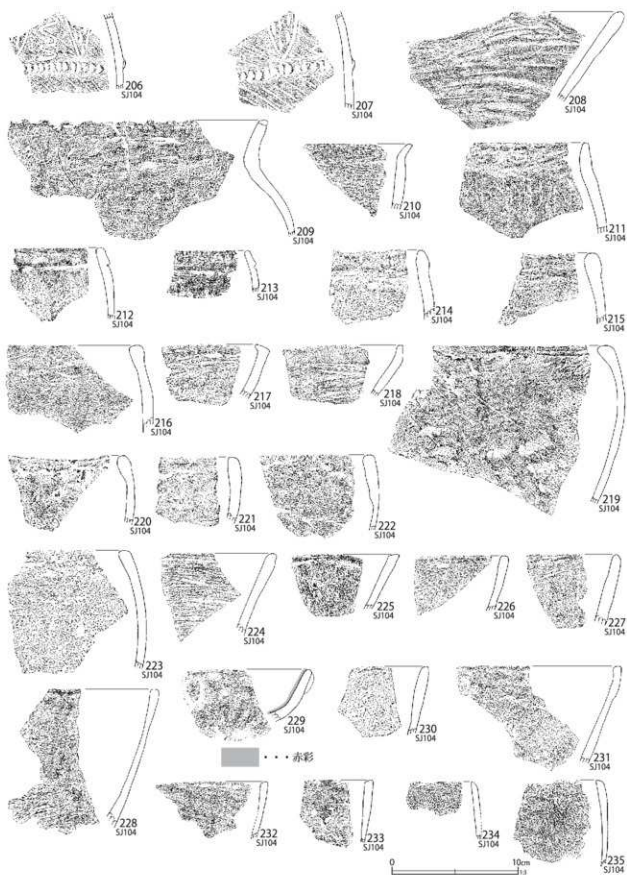
第292図 住居跡出土土器 (54)



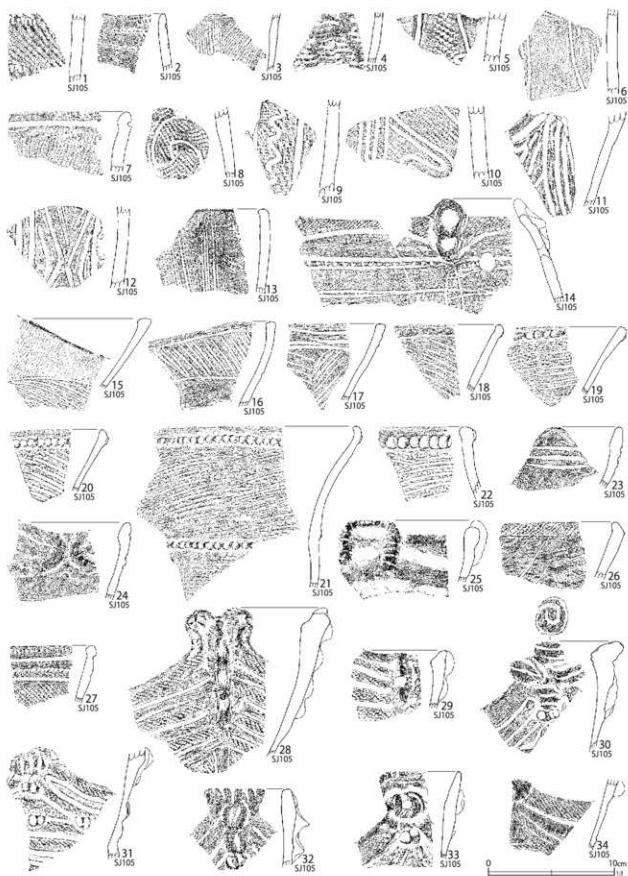
第293图 住居跡出土土器 (55)



第294図 住居跡出土土器 (56)



第295図 住居跡出土土器 (57)



第296图 住居跡出土土器 (58)



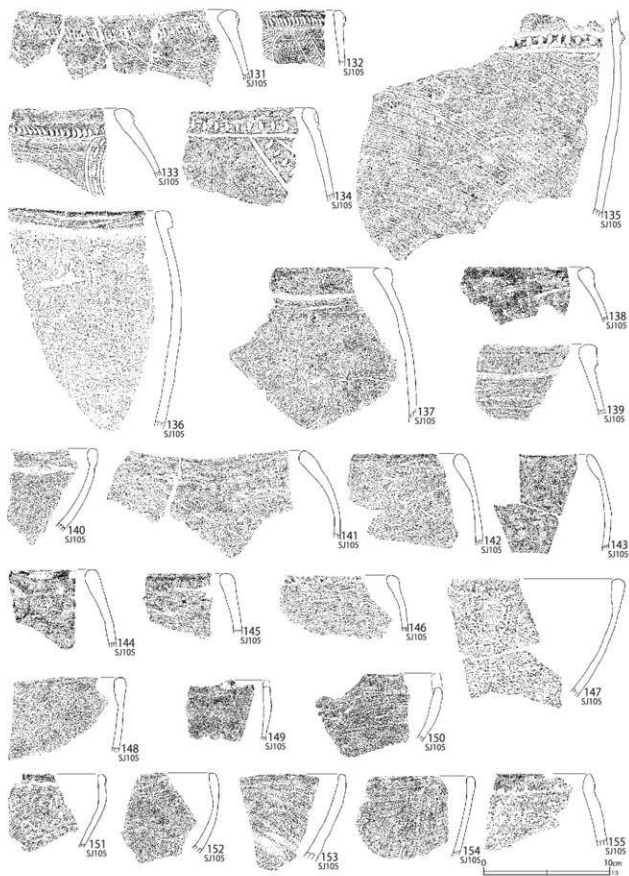
第297图 住居跡出土土器 (59)



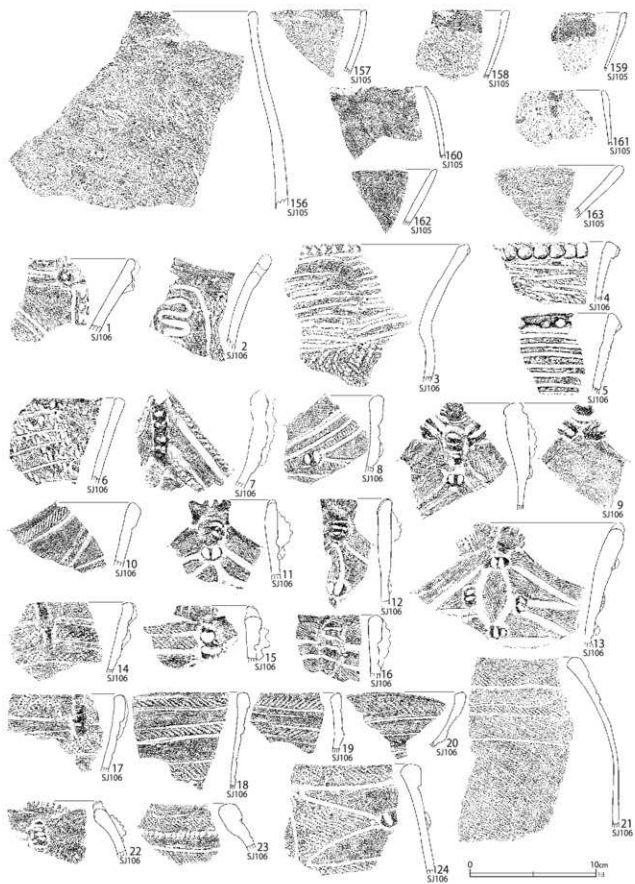
第298図 住居跡出土土器 (60)



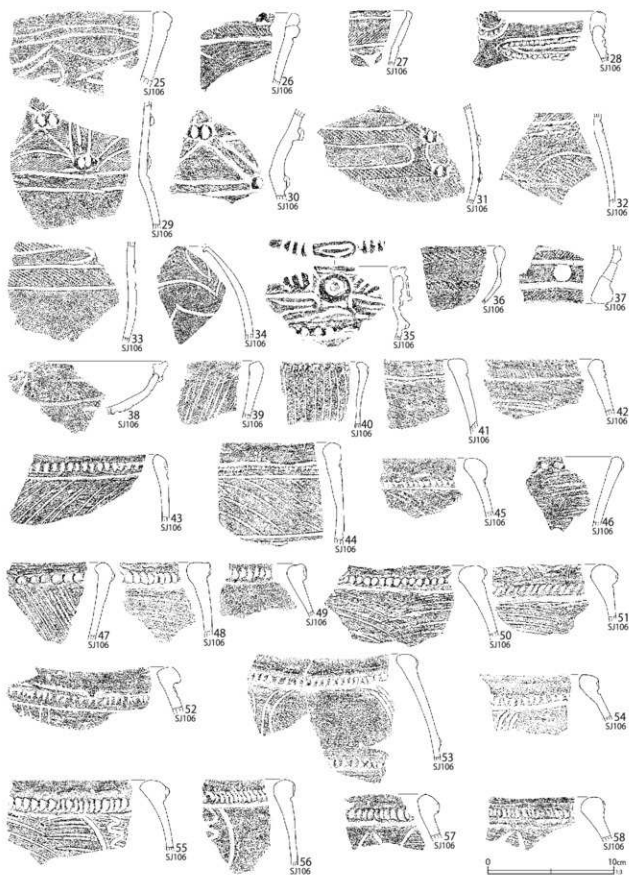
第299図 住居跡出土土器 (61)



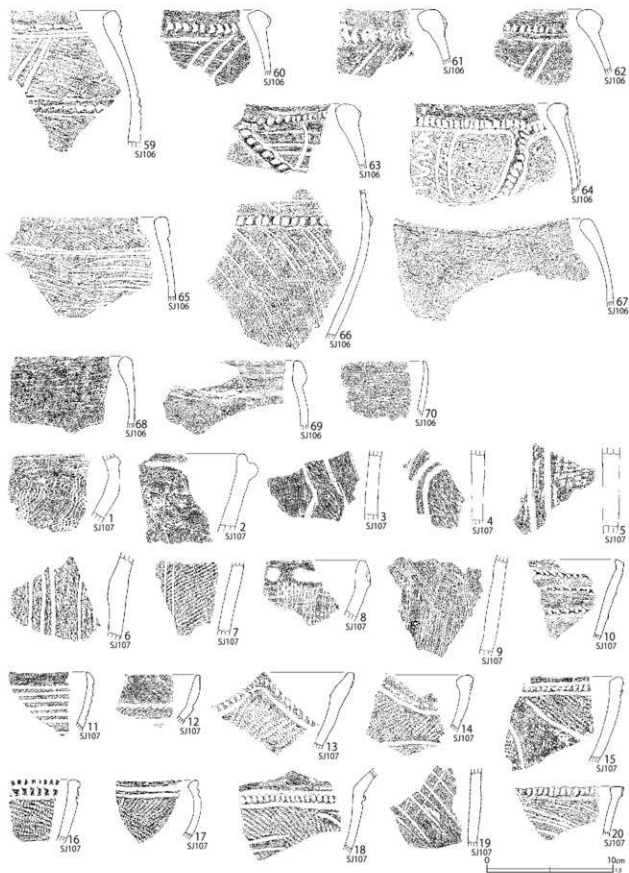
第300図 住居跡出土土器 (62)



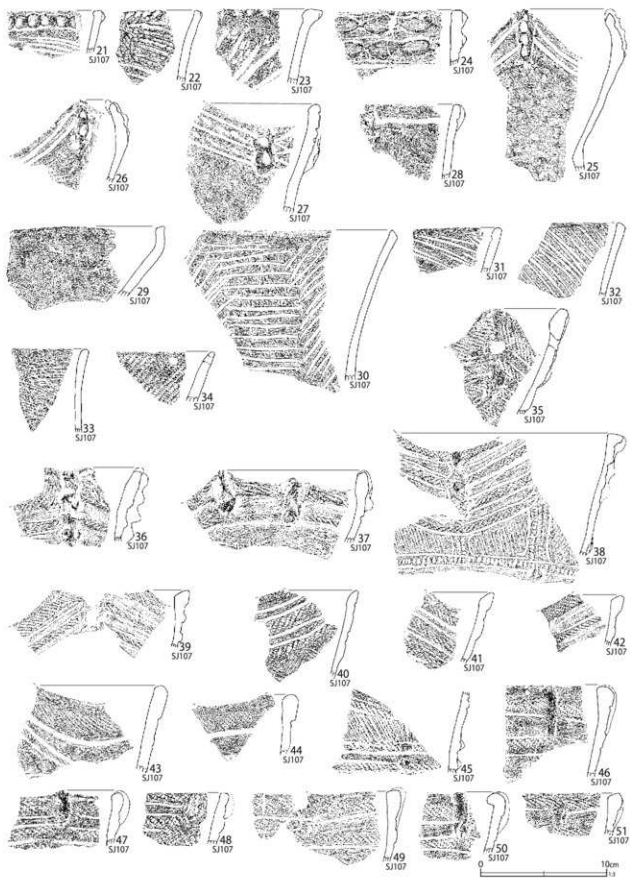
第301图 住居跡出土土器 (63)



第302图 住居跡出土土器 (64)



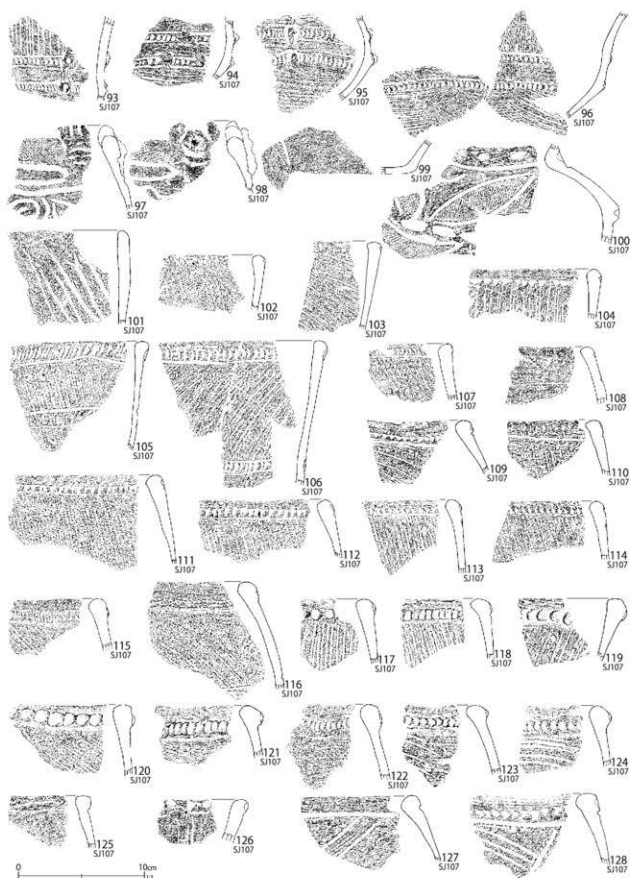
第303图 住居跡出土土器 (65)



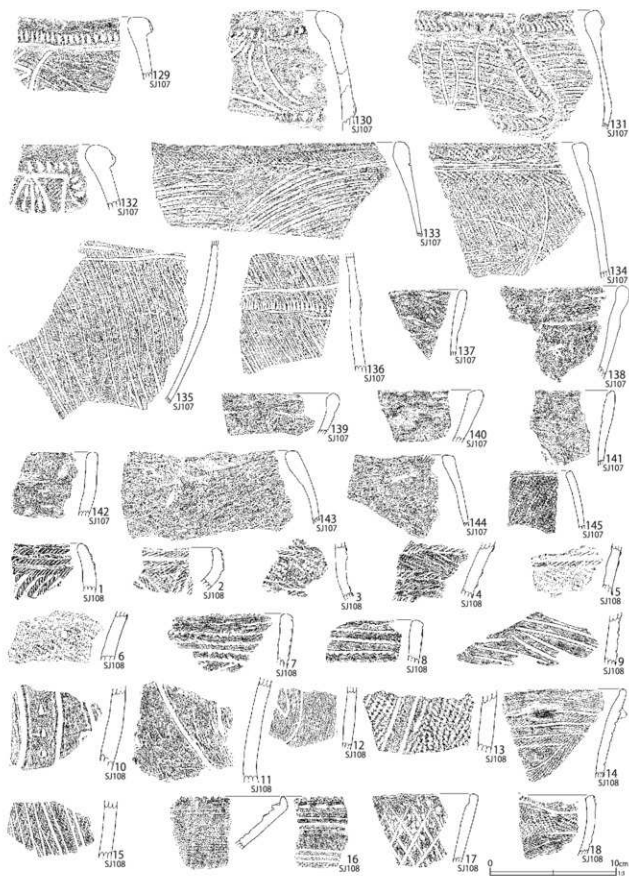
第304図 住居跡出土土器 (66)



第305图 住居跡出土土器 (67)



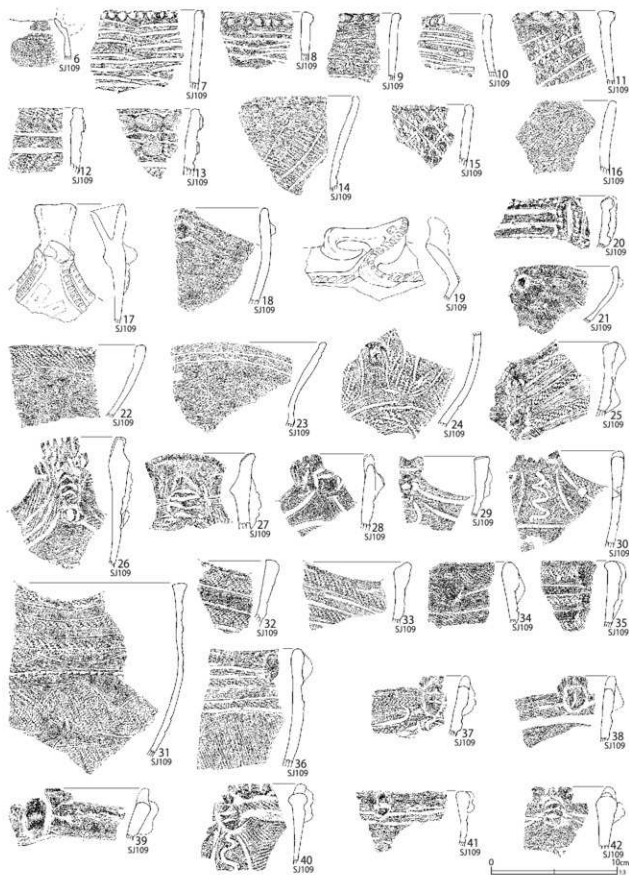
第306図 住居跡出土土器 (68)



第307图 住居跡出土土器 (69)



第308図 住居跡出土土器 (70)



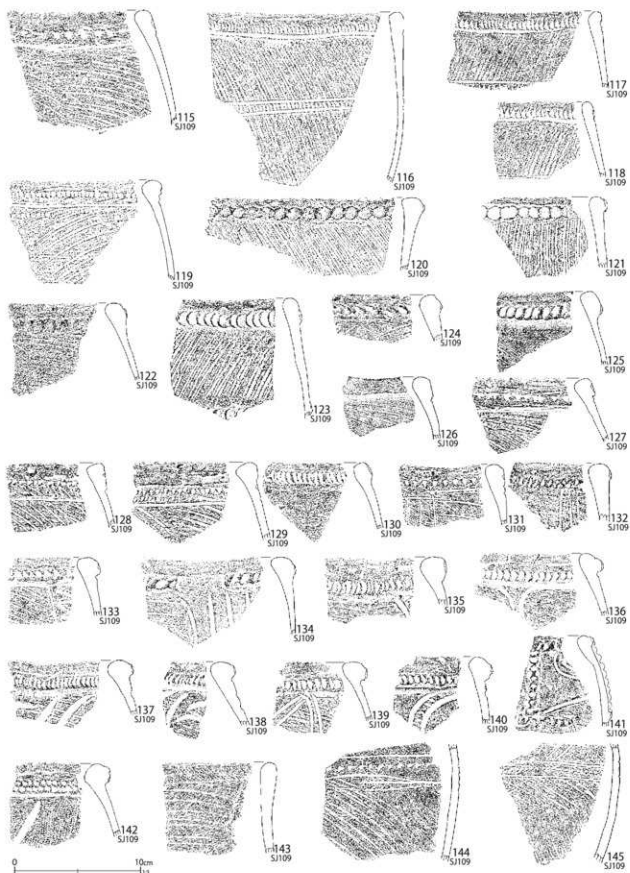
第309图 住居跡出土土器 (71)



第310図 住居跡出土土器 (72)



第311图 住居跡出土土器 (73)



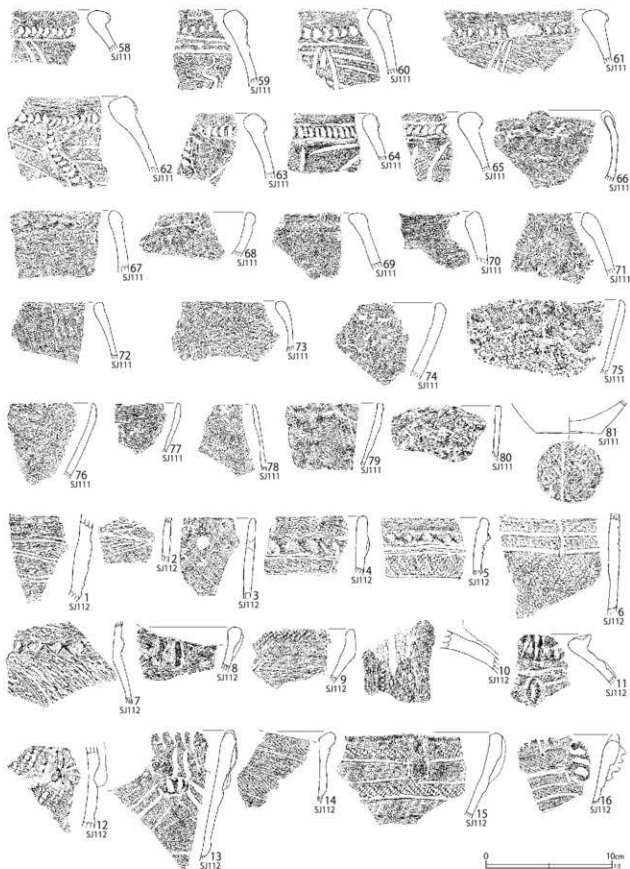
第312图 住居跡出土土器 (74)



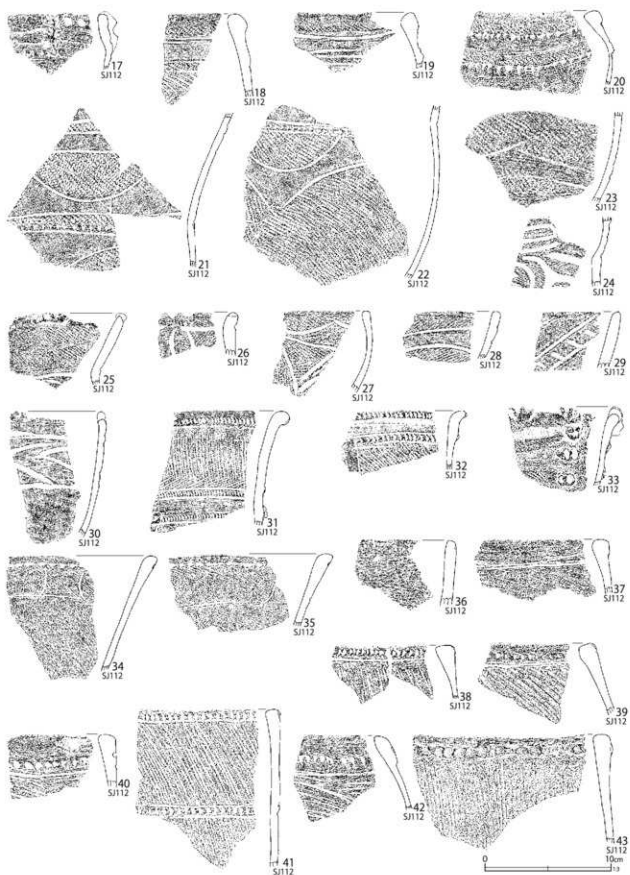
第313图 住居跡出土土器 (75)



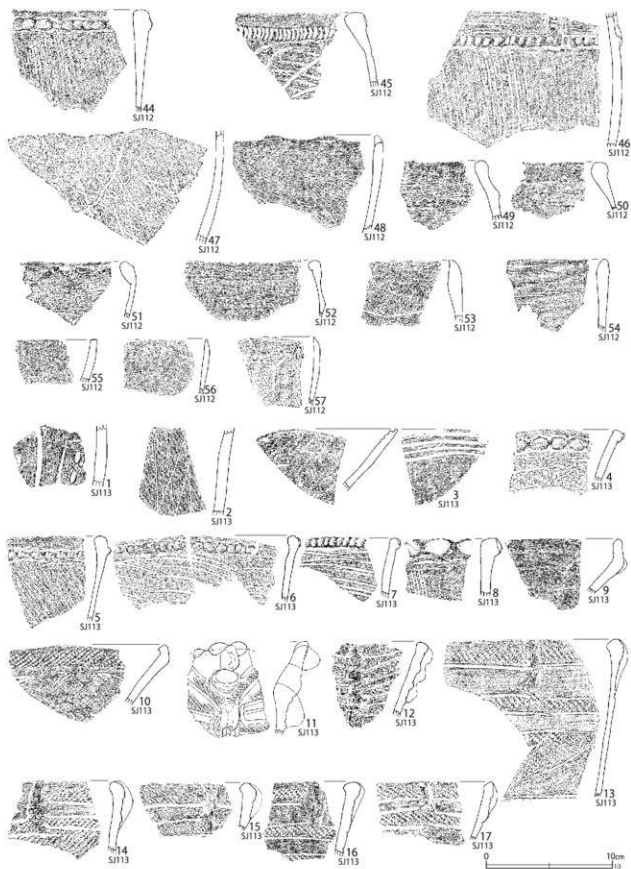
第314图 住居跡出土土器 (76)



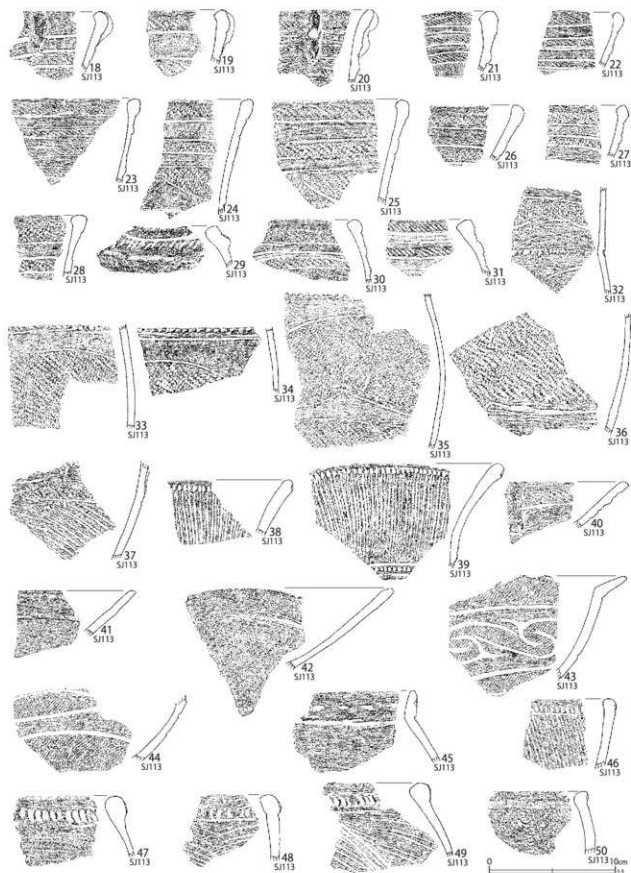
第315图 住居跡出土土器 (77)



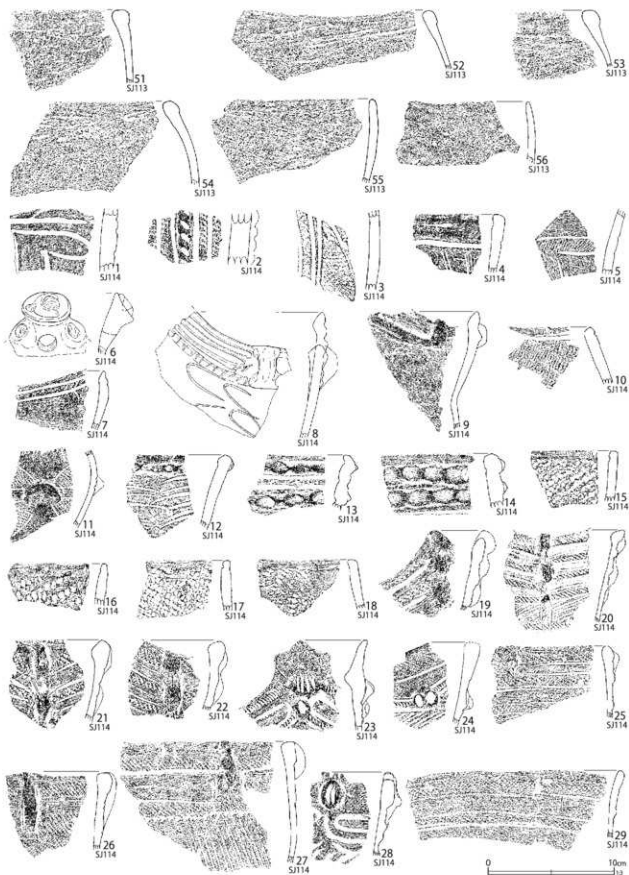
第316図 住居跡出土土器 (78)



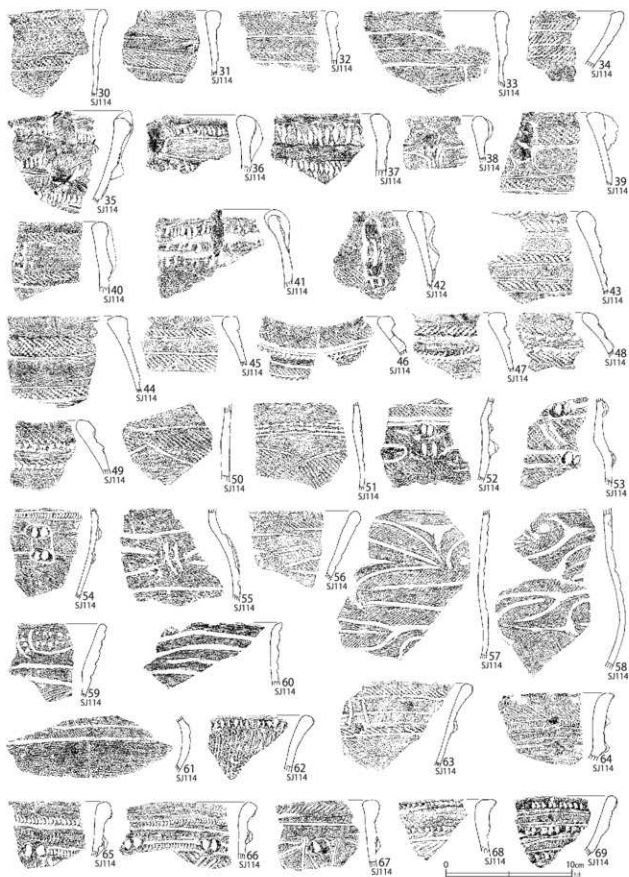
第317图 住居跡出土土器 (79)



第318図 住居跡出土土器 (80)



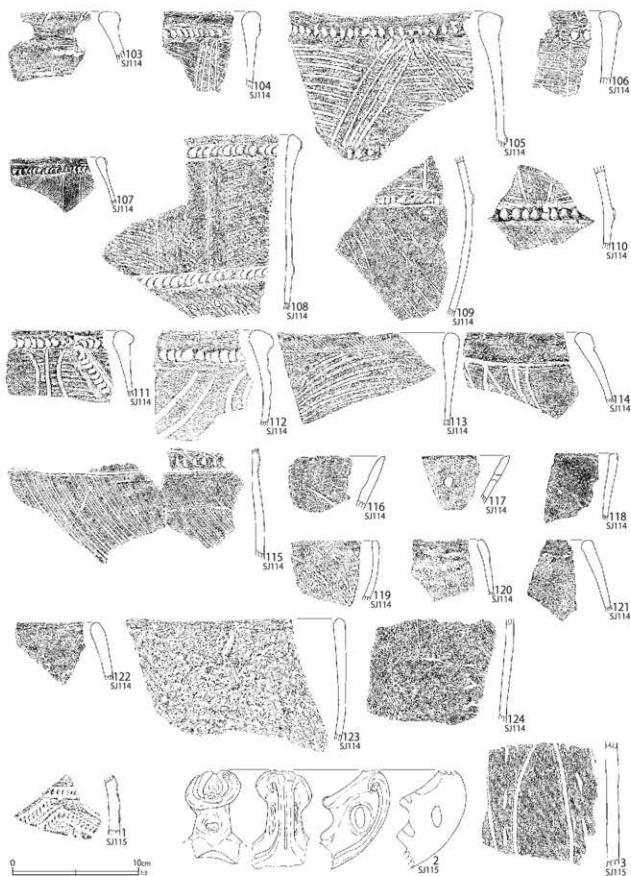
第319図 住居跡出土土器 (81)



第320图 住居跡出土土器 (82)



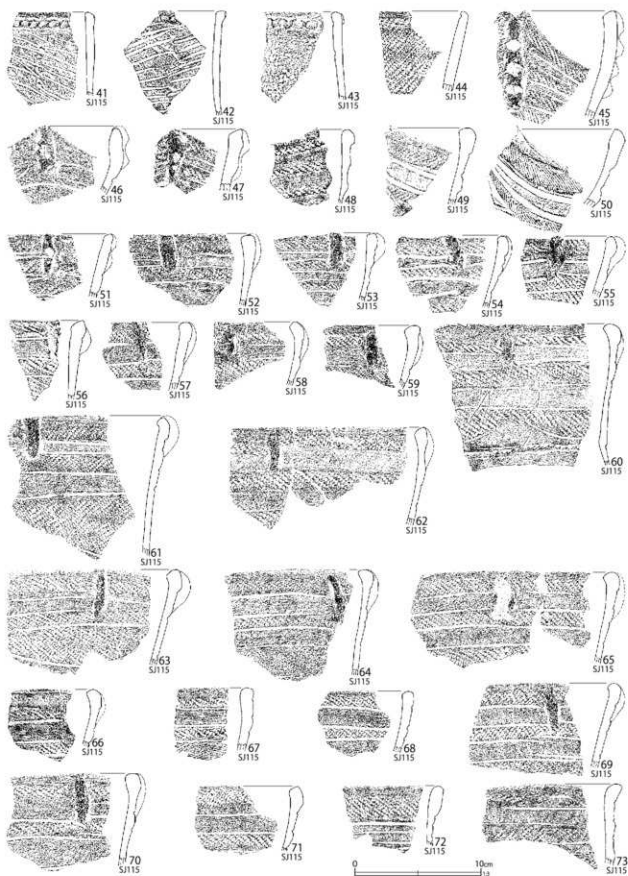
第321图 住居跡出土土器 (83)



第322図 住居跡出土土器 (84)



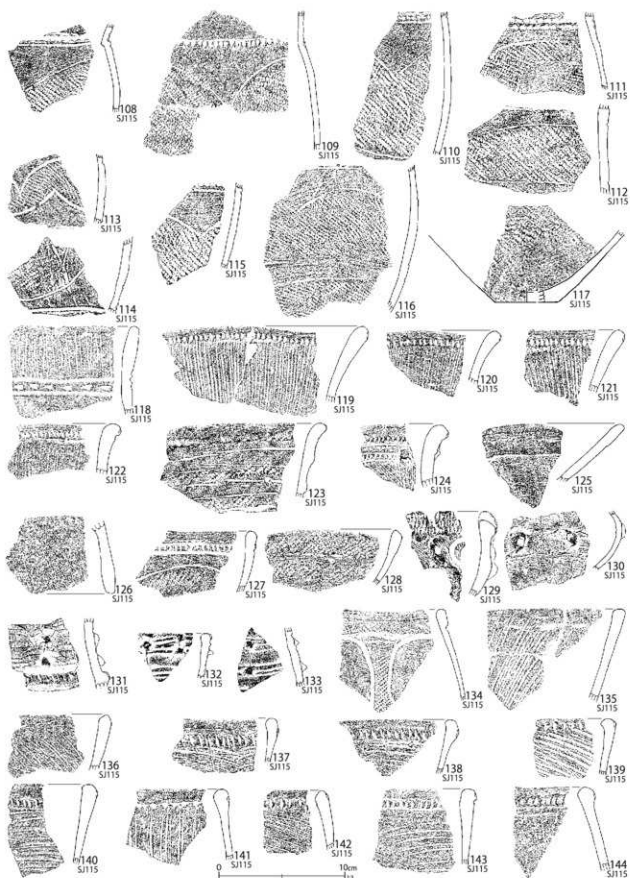
第323图 住居跡出土土器 (85)



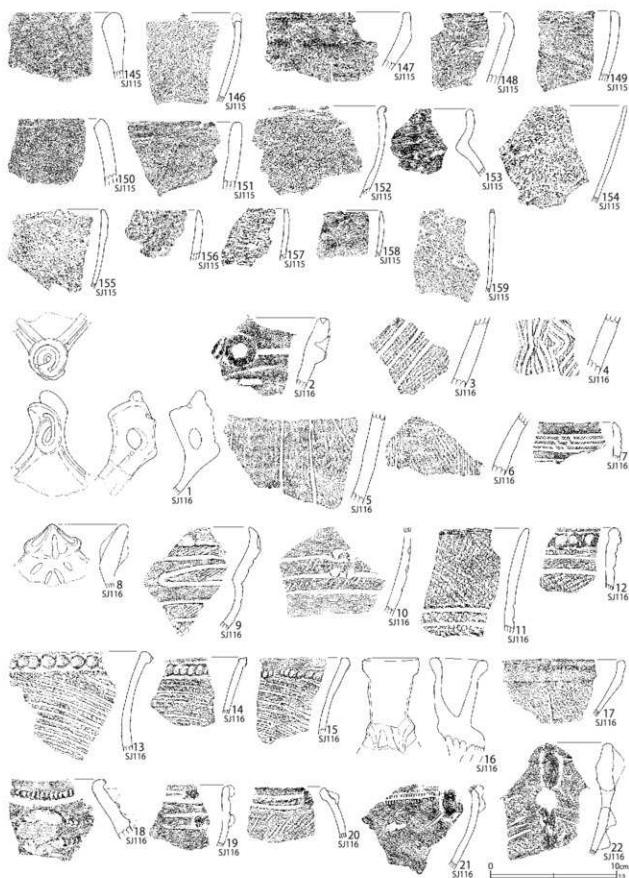
第324図 住居跡出土土器 (86)



第325图 住居跡出土土器 (87)



第326图 住居跡出土土器 (88)



第327图 住居跡出土土器 (89)



第328图 住居跡出土土器 (90)



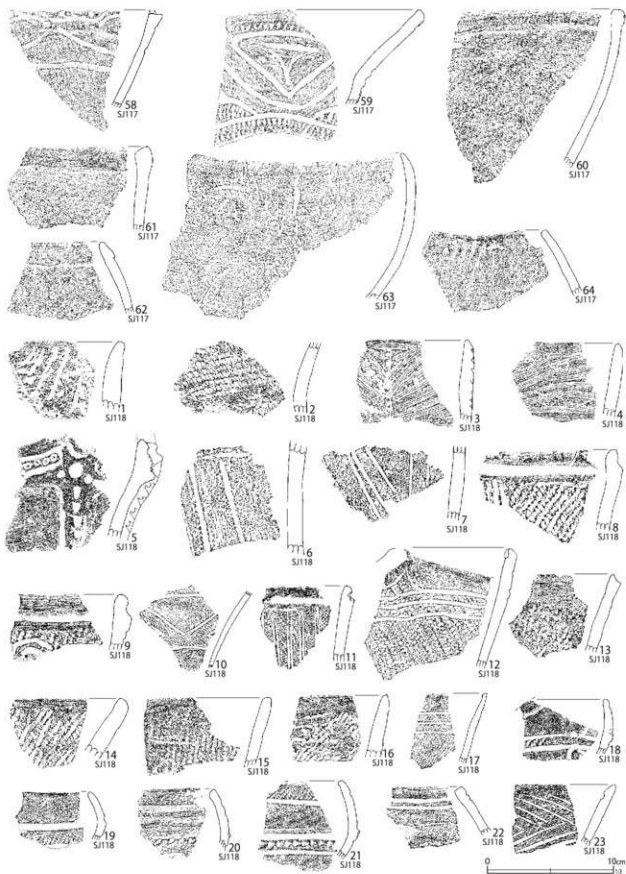
第329图 住居跡出土土器 (91)



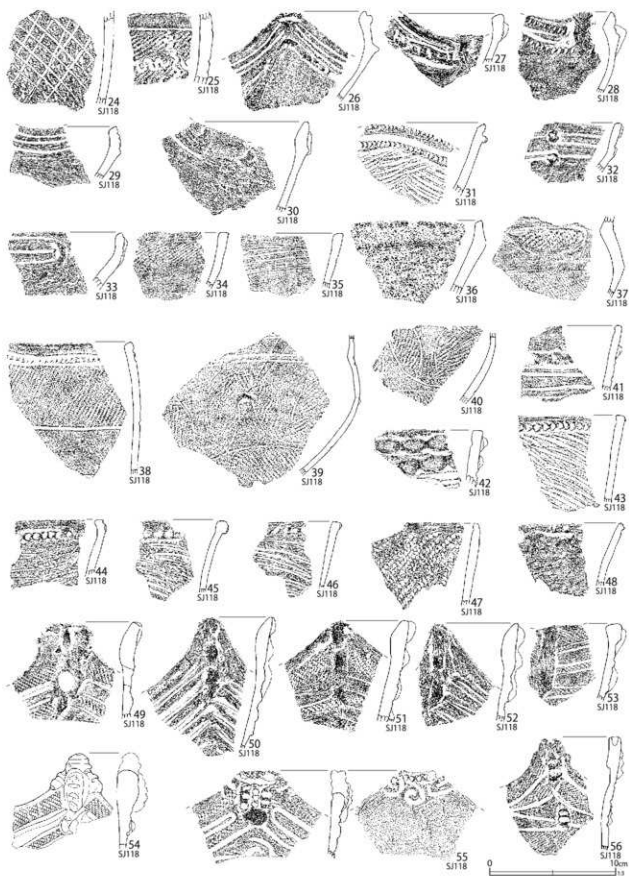
第330图 住居跡出土土器 (92)



第331图 住居跡出土土器 (93)



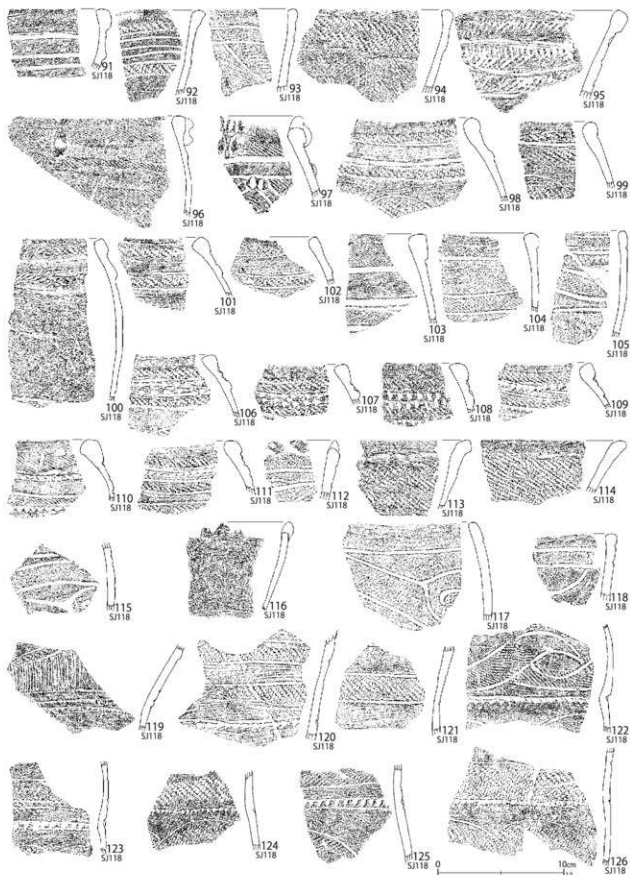
第332图 住居跡出土土器 (94)



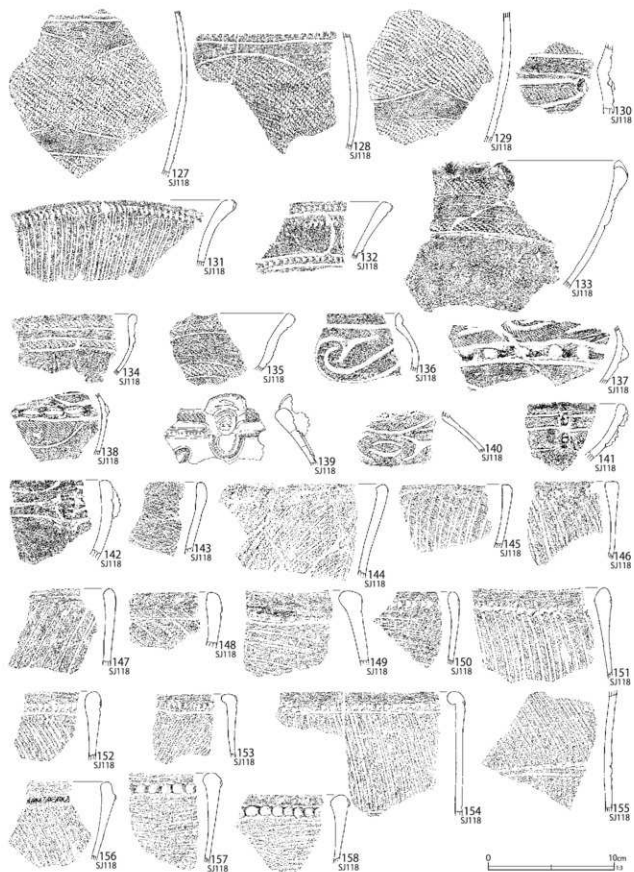
第333图 住居跡出土土器 (95)



第334图 住居跡出土土器 (96)



第335图 住居跡出土土器 (97)



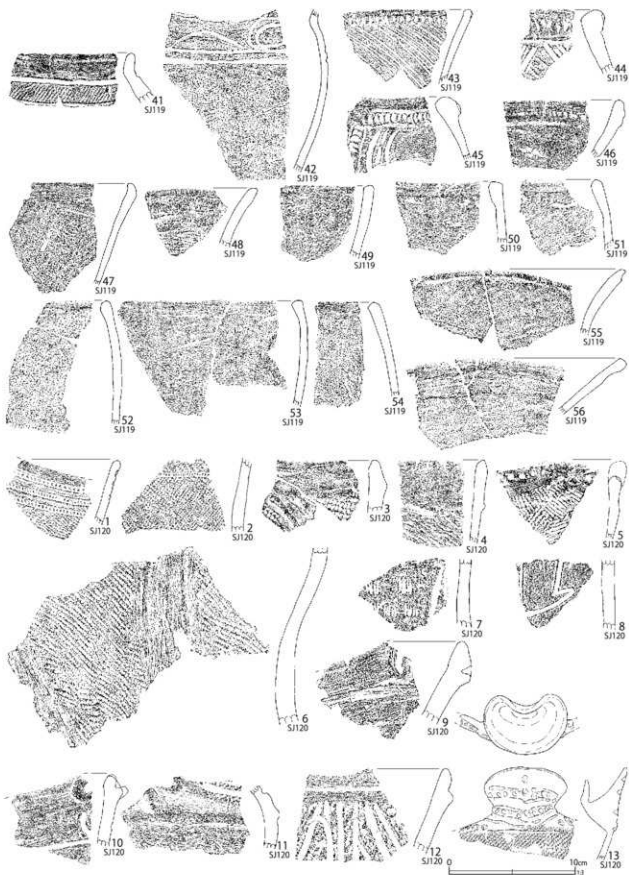
第336图 住居跡出土土器 (98)



第337图 住居跡出土土器 (99)



第338图 住居跡出土土器 (100)



第339图 住居跡出土土器 (101)



第340图 住居跡出土土器 (102)



第341图 住居跡出土土器 (103)



第342图 住居跡出土土器 (104)



第343图 住居跡出土土器 (105)



第344图 住居跡出土土器 (106)



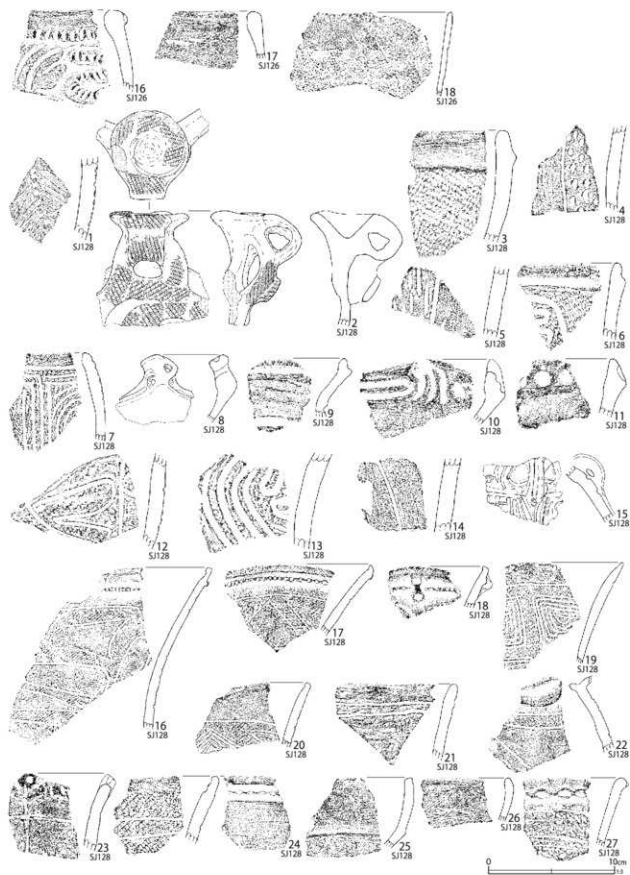
第345图 住居跡出土土器 (107)



第346图 住居跡出土土器 (108)



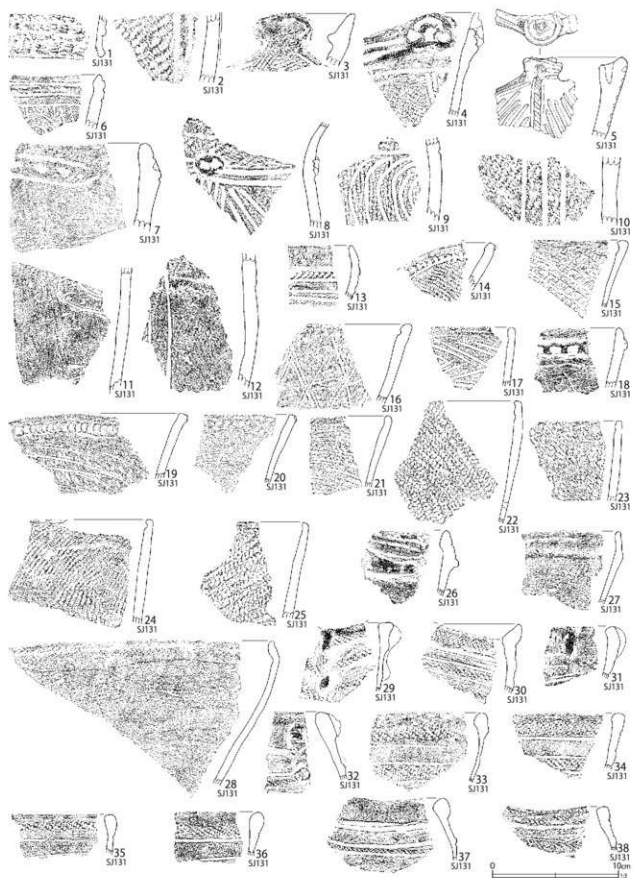
第347图 住居跡出土土器 (109)



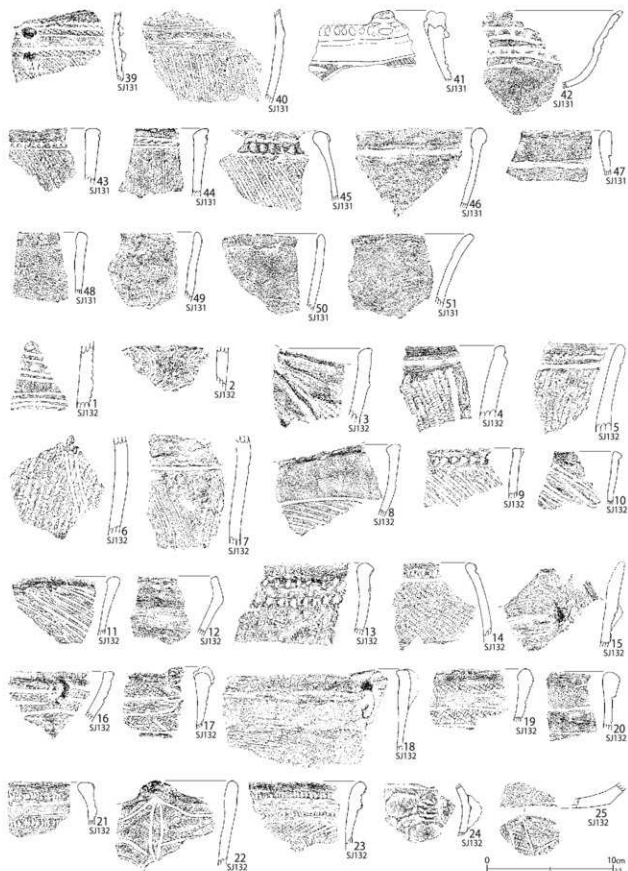
第348图 住居跡出土土器 (110)



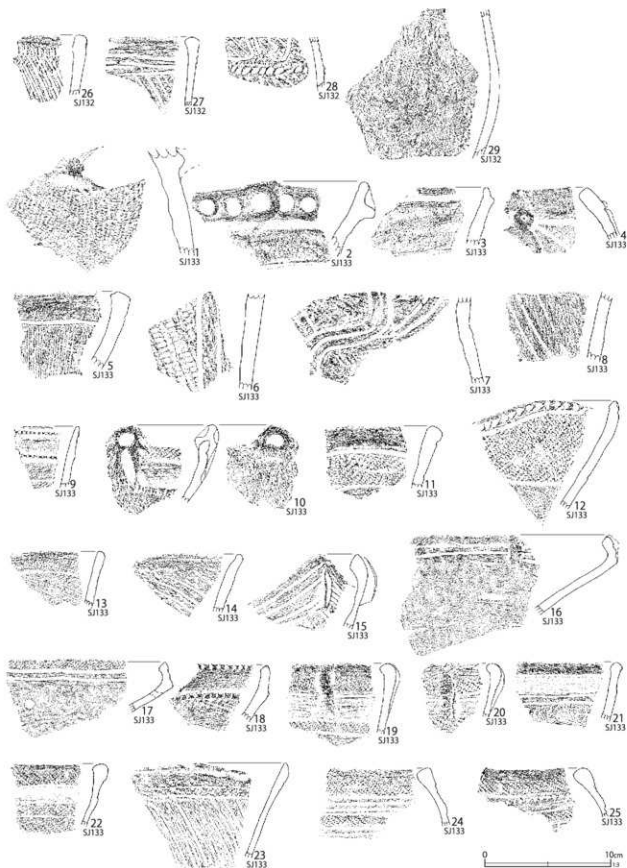
第349図 住居跡出土土器 (111)



第350图 住居跡出土土器 (112)



第351図 住居跡出土土器 (113)



第352图 住居跡出土土器 (114)



第353図 住居跡出土土器 (115)

(2) 竪穴状遺構出土土器

第8号竪穴状遺構出土土器 (第354図1～6、第359～361図)

1は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁内湾して口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する。

2は瓢形深鉢で、胴部中段にごく弱いくびれを持ち、口縁強く内湾して口唇断面肥厚し、外面に段を持つ。口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせる。胴上半部には帯縄文を多段に巡らせて縦瘤を重畳させる。胴部中段には押し引き文の区画を巡らせる。胴下半部には深く入り組む対向弧線文を描いて、接点に横瘤を配する。底部付近は縄文帯となる。曾谷式である。

3は台付き鉢の口縁部である。強く外反して口唇外面に刻み目文を巡らせ、頸部には縦位の条線を施文する。安行1式であろう。

4・5は粗製深鉢である。いずれも曾谷から安行1式に伴うものであろう。4は胴下半部に最大径を持ち、胴部中段よりやや上が緩やかにくびれ、口縁は内湾しつつ開く。口唇断面は肥厚する。口縁外面に装飾を持たず、地文として斜位の条線を施文する。5の口縁は軽微に内湾しつつ立ち上がって、口唇断面肥厚する。地文は斜位の条線である。

6は折り返し口縁の深鉢である。砲弾形の鉢で、口縁外面に扁平な段を持ち、ここから鉤状の隆帯が分岐する。段及び隆帯上には列点文を施文している。晩期安行式に伴う粗製土器である。

第359～361図は破片資料である。

1は黒浜式、2は諸磯b式である。3～5は堀之内1式、6・7は堀之内2式、8は曾谷式である。9は加曾利B3から曾谷式の浅鉢である。10は遠部第二類、11は遠部第一類、13は遠部第三類で、加曾利B2式か。12・14・15も加曾利Bから曾谷式の粗製土器である。

16～54は安行式である。16～18は大波状口縁深

鉢で安行1式である。19～26は後期の水平口縁深鉢で、19～24は安行1式。30は安行1式の瓢形深鉢である。27～29はこれらの精製深鉢に伴う胴部で後期安行式である。31・32は台付き鉢で、31は安行1式である。

33～44は擦り消し縄文の土器、45は胴部中段に眼鏡状隆帯を巡らせる鉢で、いずれも安行3aから3b式である。46～54は安行3c式である。

55～66は安行式に伴う粗製深鉢である。55～58・60は後期安行式、64～66は安行3b式であろう。67～76は折り返し口縁、77～86は無文土器である。

第9号竪穴状遺構出土土器 (第354図7～第358図41、第361～367図)

7・8は高井束式の大波状口縁深鉢である。口縁に沿って隆帯による楕円形の区画文を巡らせ、波頂部と波底部に橋梁状の把手を配する。波頂部には突起が存在したが欠失している。8は口縁に沿って3本隆帯の区画を巡らせる。波底部に橋梁状の把手を配する。

9～12は安行1式の砲弾形深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する。胴部には条線を施文する。14はこれらに伴う胴部とみられる。口縁部の文様帯下端を帯縄文で区画し、胴部に縦位の条線を施文して、横位の平行沈線を巡らせる。

13は安行式に伴う粗製土器である。砲弾形で、口縁と胴部中段に帯縄文の区画を巡らせる。安行3b式であろう。

15・16は外反する水平口縁の深鉢である。15は胴部中段にくびれを持ち、口縁は強く外反しつつ立ち上がる。口縁外面に縄文を施文して縦瘤を配し、胴上半部には稲妻状の沈線文を描いて縄文を施文し、間隙に蛇行沈線文を垂下させる。胴下半部には深く入り組む対向弧線文を描いている。安行2式であろう。16は胴上半部にくびれを持って、

口縁は内湾しつつ開く。口唇断面は著しく肥厚する。口縁外面に縄文を施文し、胴上半部には楕円形の擦り消しモチーフを巡らせる。後期安行式である。

17は瓢形深鉢である。胴下半部に最大径を持って、胴部中段にくびれを持ち、口縁内湾する。口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせて縦瘤を配する。胴上半部には帯縄文を巡らせて縦瘤を配する。胴部中段には帯縄文+押し引き文の区画を持つ。曾谷式であろう。

18は小型の水平口縁深鉢で、薄手の器壁で輪積み痕を残し、器面に凹凸がみられる等、製塩土器に似る。胴部には粗雑な対向弧線文を2段に巡らせる。晚期安行式に伴う土器であろう。

19は小型深鉢である。逆円錐形の単調なプローションで、口縁外面に沈線を巡らせる他は文様を持たない。沈線を挟んで口縁部に横位、胴部には縦位の研磨を施しており、内面の調整も悪くない。晚期安行式に伴う土器であろう。

20~28は安行式に伴う粗製深鉢である。20は胴部中段にくびれを持ち、口縁にかけて内湾しつつ開く。口縁と胴部中段に刻み目文を巡らせる。地文条線を持たず、甕状工具の調整痕を残す。晚期安行式に伴う土器であろう。21~25は口縁軽微に内湾ないし直立する。口縁と胴部中段に沈線+押し引き文や刻み目文の区画を持つ。23・24は貝殻腹縁による押し引き文である。地文は条線で、24は胴上半部の横位に施文している。いずれも後期安行式に伴う土器であろう。26は口縁軽微に外反し、口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に押圧隆帯を巡らせる。胴上半部に横位、胴下半部には縦位の条線を施文する。後期安行式に伴う土器であろう。27は内湾口縁の深鉢である。口縁と胴部中段に押圧隆帯を巡らせ、両者の間を縦位やクラック状の押圧隆帯で連繫している。後期末から晩期初頭の土器であろう。28も内湾口縁で、口唇断面著しく肥厚して外面に刻み隆帯を巡らせ、胴上

半部に平行沈線の弧線文を描く。地文は斜位の条線である。晚期安行式に伴う土器であろう。

29~35は深鉢である。29~33は条線地文の安行式である。33は瓢形深鉢等特殊な器形に属する可能性がある。34・35は無文の底部である。

36は台付き鉢である。中段が「く」の字に張り出して、2段の刻み隆帯の区画を巡らせ、貼り瘤を配する。安行1式であろう。

37~39は浅鉢ないし鉢である。37は内湾口縁で、外面に2段の瘤を配し、2段の凹線で連繫する。高井東式であろう。38は小型の深鉢である。ボウル状の鉢で、水平口縁上に4単位の突起を持つ。晚期安行式に伴う土器であろう。39は胴部中段が張り出す鉢であろう。底部直上および胴下半部に沈線を巡らせる。安行3 aから3 b式か。

40は角底の皿である。胴部は外傾して短く立ち上がり、楕円文を描いて縄文を施文する。底面にも文様を持って、楕円文や入り組み文・三叉文を描いて縄文を施文する。底面の文様配置から、胴張りの長方形であった可能性がある。安行3 aから3 b式である。

41は無文の円口方底浅鉢である。底部は胴張りの方形で四隅が突出し、上げ底状となる。胴部はほぼ垂直に立ち上がって、口縁は外屈する。編み籠に粘土を貼って焼成した籠目文土器を模したものか、籠編みの際の芯材であった可能性が考えられる。

第361~367図は破片資料である。

1・2は黒浜式、3・4は称名寺式、5~10は堀之内1式、11は堀之内2式である。12~17は加曾利B2式で、16・17は遠部第四類である。18・19は加曾利B3式である。21~25は加曾利B式の粗製土器で、21は加曾利B1式、22は加曾利B2式である。20・26~29は曾谷・高井東式である。

30~136は安行式である。30~50は大波状口縁深鉢で、30~37は安行1式、41~44は安行2式、45~48は安行3 aから3 b式である。51~69は帯

縄文の区画を巡らせる水平口縁深鉢で、51～57は安行1式、60～67は安行2から3 a 式、68は安行3 b 式であろう。

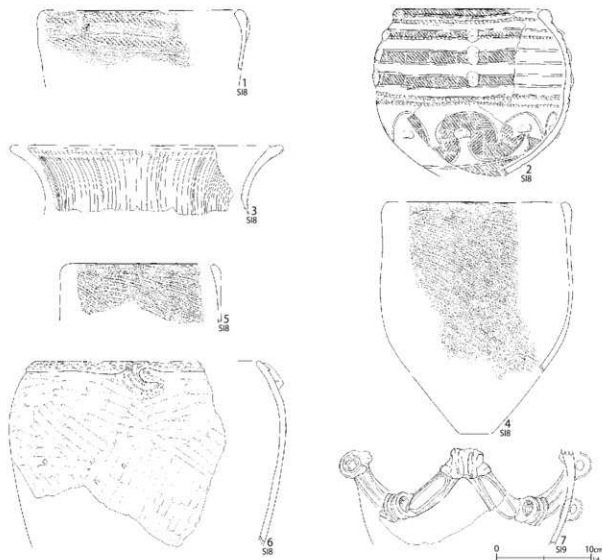
70～87は砲弾形の深鉢で、70～77は安行1式、87は安行2式、78～80は安行2から3 a 式である。88～98は安行1式の瓢形深鉢である。99～108はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。99・100は安行2から3 a 式、101は安行3 a 式か。102～106は後期安行式である。

109～115は擦り消し縄文の土器である。109・110は安行2式、111～115は三叉文を描く安行3 a 式である。116～128は台付き鉢で、116～118・126は安行1式、123～125は安行2式、122は安

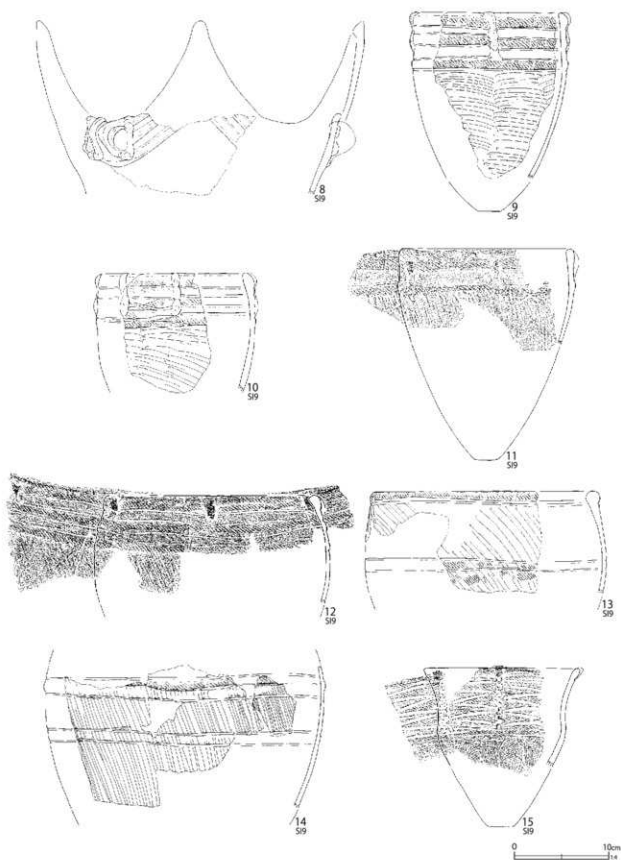
行3 a 式、他は後期安行式である。127・128は脚台部で、後期安行式であろう。

129～132は胴部中段が張り出して突起や隆帯を配する鉢で、安行3 a から3 b 式である。133・134は浅鉢、135～137は注口土器で、135は安行2式、他は安行3 a から3 b 式である。138は大洞BC式である。

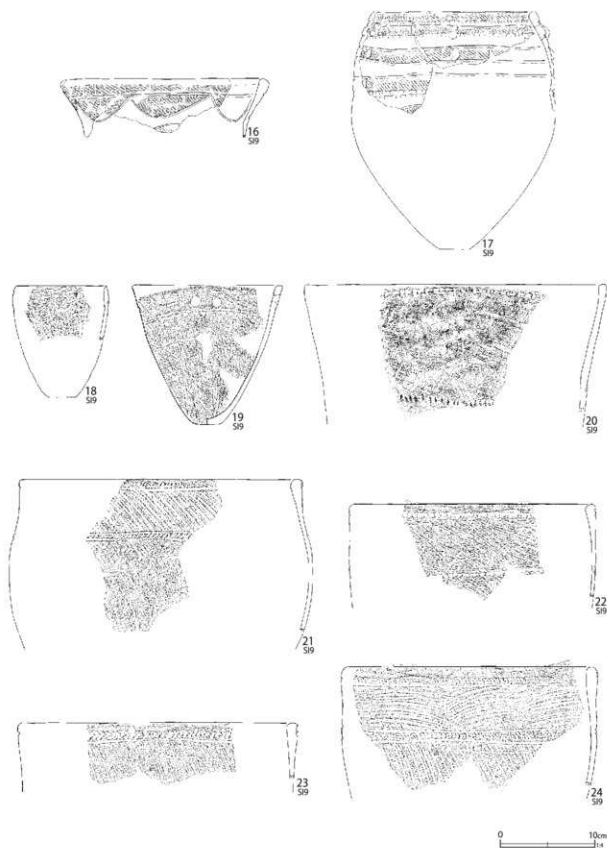
139～219は安行式の粗製深鉢である。220～236は無文土器である。237～241は晩期の製塩土器である。237は口縁部が匏で切り落としたように水平になっている。238・239は指で摘み出したような先細りの口縁である。240・241は外削ぎ状の口縁である。



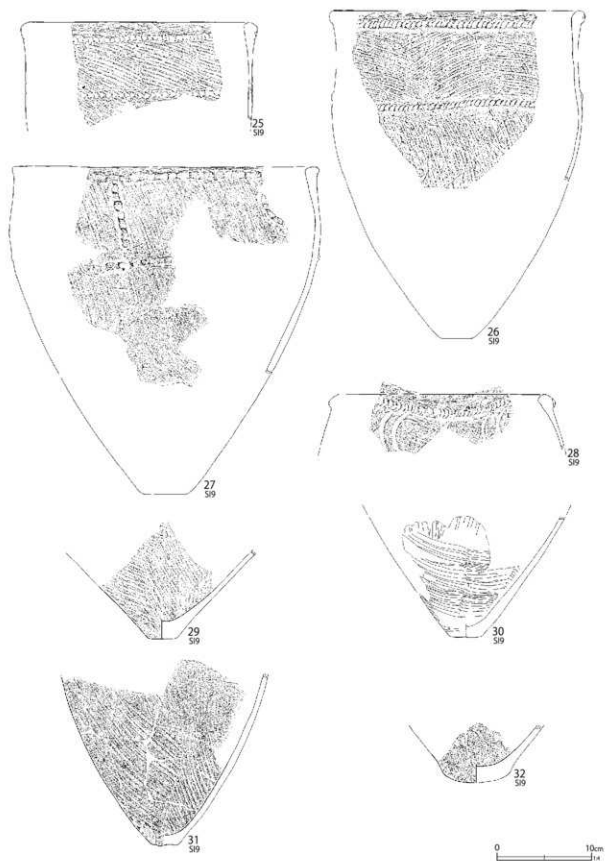
第354図 堅穴状遺構出土土器 (1)



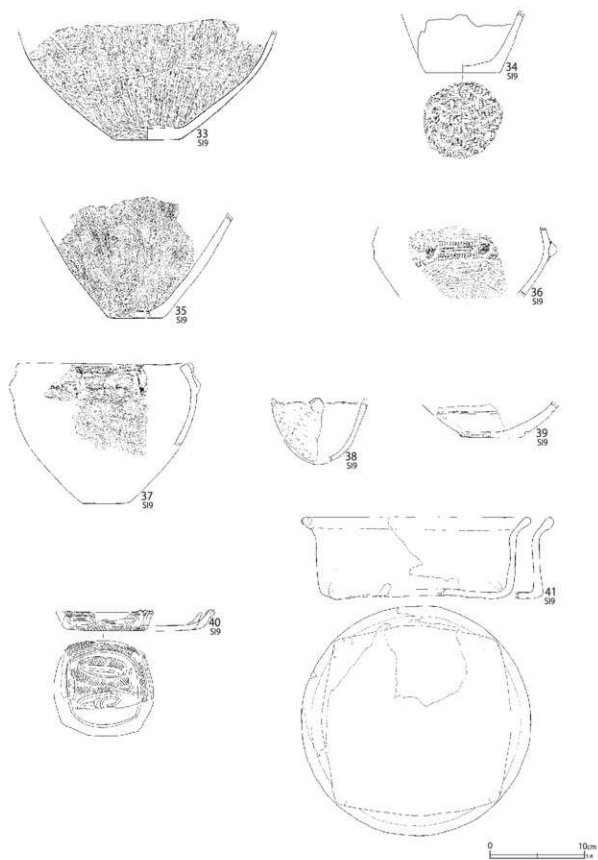
第355図 堅穴状遺構出土土器（2）



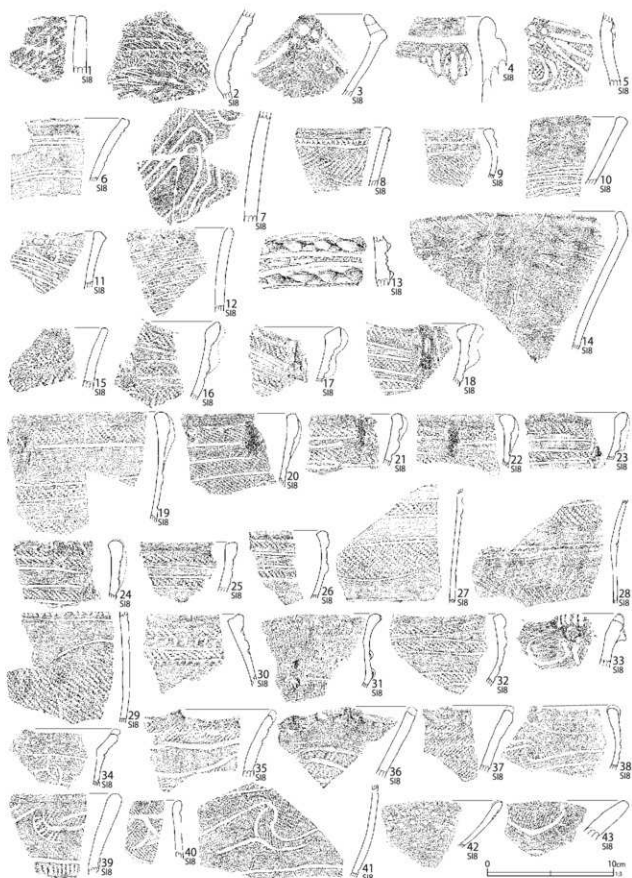
第356图 坚穴状遺構出土土器（3）



第357图 竖穴状遺構出土土器 (4)



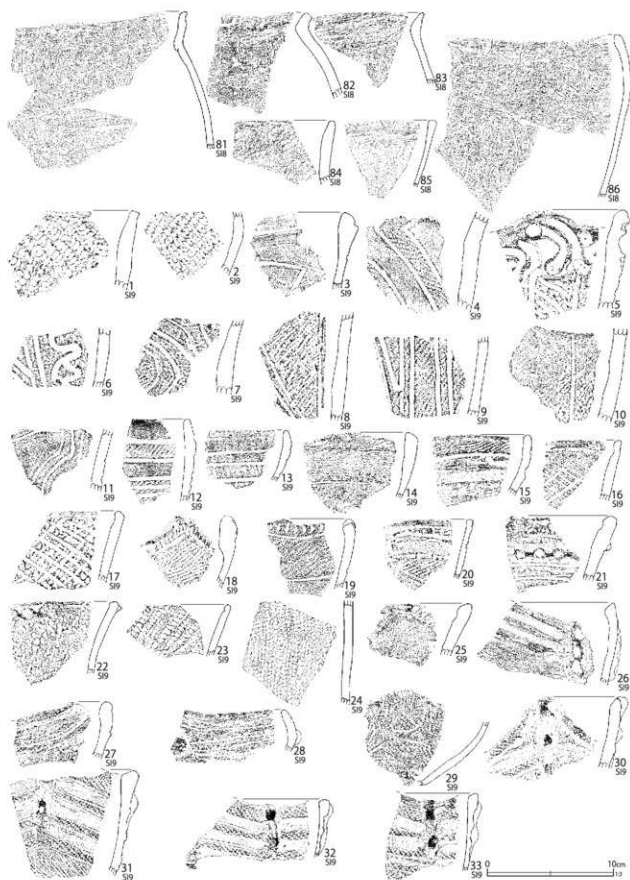
第358図 堅穴状遺構出土土器（5）



第359図 堅穴状遺構出土土器 (6)



第360图 堅穴状遺構出土土器 (7)



第361図 堅穴状遺構出土土器 (8)



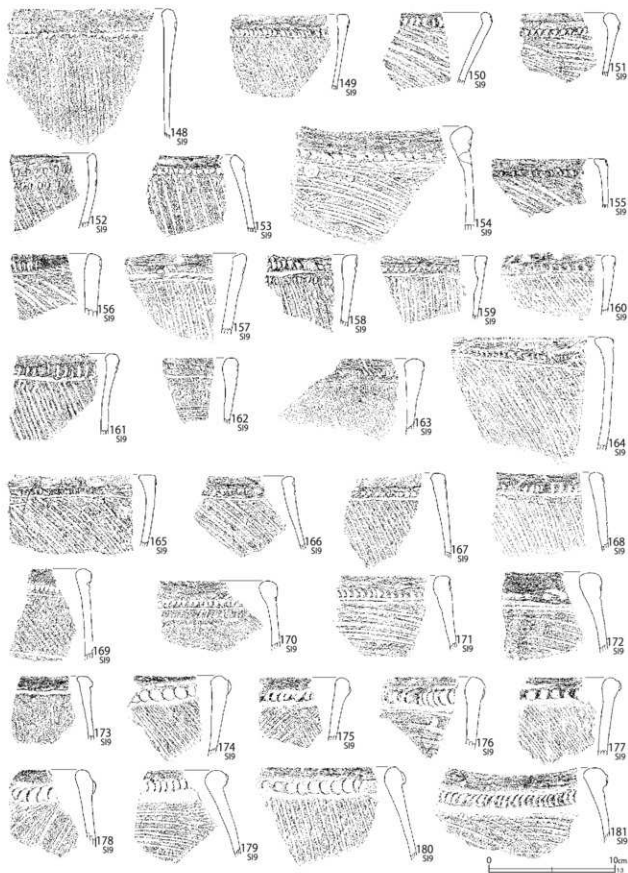
第362図 堅穴状遺構出土土器 (9)



第363图 竖穴状遺構出土土器 (10)



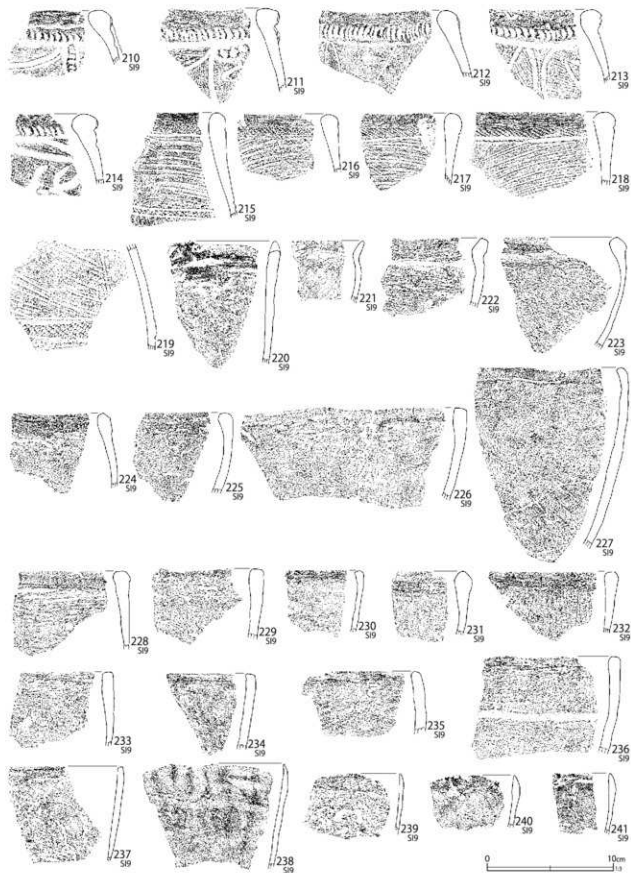
第364図 堅穴状遺構出土土器 (11)



第365图 竖穴状遺構出土土器 (12)



第366図 堅穴状遺構出土土器 (13)



第367図 堅穴状遺構出土土器 (14)

(3) 土壙出土土器

第196号土壙出土土器 (第368図1~3、第413・414図)

1は小型の壺である。頸部に2本隆帯の区画を巡らせて、四方に円文を配する。曾谷・高井東式に伴う土器であろう。

2は無文の深鉢で、胴部は単調に開いて、頸部が屈曲して口縁直立し、外面に凹線を巡らせる。

3も無文の深鉢で、単調に内湾しつつ立ち上がる紡錘形のプロポーションである。器面に輪積み痕を残しており、被熱による風化がみられる。

第413・414図は破片資料である。

1・2は堀之内1式、3・4は加曾利B1式、5~8は加曾利B2式である。9・31は注口土器で、加曾利B1式である。10~12は加曾利B式の粗製土器であろう。13は高井東式で山形波状口縁深鉢である。

14は後期安行式の深鉢胴部である。15~30・32~38は晩期安行式である。15は姥山系の波状口縁深鉢で、安行3bから3c式であろう。16・21・22は安行3b式の波状口縁深鉢であろう。

29は台付き鉢の胴部か。32は細密沈線文の安行3b式である。33~38は安行3c式である。

39~43は安行式の粗製深鉢である。39は安行1式、40も後期安行式であろう。44~49は折り返し口縁の深鉢で晩期安行式に伴う土器である。50~58は無文土器である。

第197号土壙出土土器 (第368図4~8、第414・415図)

4は小型の深鉢で、無文で水平口縁、胴部は内湾しつつ立ち上がり、頸部で屈曲して口縁は短く外反する。頸部に横位、胴部に縦位の入念な研磨を施している。

5は無文の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して口端が外に突出する。

6~8は浅鉢である。6・7は扁平丸底の鉢である。

6は底部から口縁まで内湾しつつ単調に立ち上がる。口端上に小突起を持ち、胴上半部と底部周縁に帯縄文を巡らせる。安行3aから3b式である。

7は無文の浅鉢で、底部から口縁まで内湾しつつ立ち上がり、口端が外屈して2個一對の小突起を配する。

8は丸底で、底部周縁に段を持って沈線を巡らせ、弧線文を描いて縄文を施文している。胴部は無文で内湾しつつ立ち上がる。安行3aから3b式であろう。

第414・415図は破片資料である。

1は曾谷式である。2~34は安行式である。2~12・51は擦り消し縄文の土器で、安行3aから3b式であろう。

13~18は安行3c式である。13・14は口端上に押圧を巡らせ、長方形の区画文を描く。15~17は列点文を巡らせる胴部である。

19~26は安行3d式である。27~34・50・54は安行3cから3d式の胴部である。35は前浦式であろう。36は口端に刻みを持つ無文土器、37~41は折り返し口縁の深鉢、42~49・53は無文土器である。

第198号土壙出土土器 (第368図9・10、第415図)

9は無文の広口壺で、丸底で、底部周縁に屈曲を持つ。胴部中段が「く」の字に張り出して、頸部屈曲して口縁は短く外反する。口端上に2個一對の小突起を配する。

10は無文の浅鉢で、扁平丸底で、胴部から口縁にかけて直線的に開き、口端上に2個一對の小突起を配する。

第415図は破片資料である。

1・2は安行3b式で、細密沈線文の土器である。3~6は安行3c式である。7は安行3bから3c式の粗製深鉢である。8は無文深鉢である。

第199号土壙出土土器 (第369図11・12、第416図)

11は異形の深鉢で、胴部中段よりやや下方に軽

微なくびれを持つ。胴上半部が張って、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁は直線的に開く。口端上に2個一対の小突起を配する。胴上半部から中段にかけて帯縄文で区画した2段の文様帯を持ち、入り組み三叉文を描く。安行3b式か。

12は粗製深鉢で、口縁内湾し、口唇断面著しく肥厚して、外面に押圧隆帯を巡らせる。地文は横位の粗雑な条線である。晩期前葉の土器であろう。

第416図は破片資料である。

1～3は安行3aから3b式で、2・3は台付き鉢であろう。4は安行3c式、5は安行3d式、6・7は安行3cから3d式の胴部である。8・9は無文土器である。

第200号土壙出土土器（第369図13～15）

13は壺である。胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部屈曲して、口縁は短く直線的に開く。胴部中段に中央押圧を伴う横瘤を配し、半円形の擦り消しモチーフで左右連繋する。胴上半部には入り組み三叉文を描き、頸部と胴下半部に帯縄文を巡らせる。安行3b式である。

14・15は無文の浅鉢である。いずれも水平口縁で、丸底で胴部との境に緩やかな屈曲を持つ。

14は胴部から口縁にかけて内湾しつつ立ち上がる。器面に縦位の研磨を施している。

15は扁平な鉢で、胴部は内湾気味に立ち上がっている。器壁は分厚く、表面の調整は比較的粗い。

第201号土壙出土土器（第369図16）

16は人面注口土器で、ほぼ完形である。ソロバン玉を2段重ねた瓢形の器形で、下段は羊歯状文を2段に巡らせている。上段は口縁直下に羊歯状文を巡らせ、注口部の直上に人面装飾を持っている。また、上下段とも最大径の部分にB突起を巡らせているが、下段のみ突起をすべて失っており、意図的に取り除いた可能性もある。

人面は、横3の字の隆帯で眉と鼻を表現し、横位の沈線で両目と口を、B突起で両頬と顎を表現している。また、顔の両側に小波状の沈線を並べ

て縄文を施文しており、頭髮を表現したものとみられる。

土器としては東北系の大洞BC式だが、人面は同時期の土器の、みずく系・遮光器系のいずれの表現とも異なっており、優れて写実的な表現といえる。底面は無文で良好に研磨しているが、中央部のみ著しく磨減しており、長期にわたる使用を反映するものとみられる。

第202号土壙出土土器（第369図17～第370図19、第416図）

17・18は浅鉢である。

17は丸底・扁平なボウル状の器形で、口縁のみわずかに外反している。胴上半部に直線化した羊歯状文を巡らせ、口縁外面にも羊歯状文を巡らせて、その一部が口端上に立ち上がり、対をなす小突起となっている。胴下半部は縄文帯となって、下端を1条の沈線で区画するが、沈線の末端は上下に食い違い、わらび手状に巻いている。大洞C式か。

18は無文の鉢で、丸底で、底部の周縁に段を持ち、口縁は内湾しつつ大きく開いている。器面は良好に研磨している。

19は注口土器で、胴部中段がソロバン玉状に張り出し、頸部で屈曲して、口縁はやや内湾しつつ円筒状に立ち上がる。頸部および注口の接続部分に凹線が巡るほかは無文で、器面を非常に入念に研磨している。晩期安行式に伴う土器であろう。

第416図は破片資料である。

1は砲弾形深鉢の胴部で、安行3bから3c式であろう。2は同時期の粗製深鉢である。

第203号土壙出土土器（第370図20、第416図）

20は無文の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して、口唇断面肥厚する。

第416図は破片資料である。1は擦り消し縄文の口縁部、2は帯縄文の胴部である。3は細密沈線文で安行3b式、4は胴部中段に隆帯の巡る鉢である。

第204号土壙出土土器 (第416図)

1は堀之内1式、3は加曾利B式の粗製土器であろう。2・4・5は堀之内式の粗製土器である。

第206号土壙出土土器 (第416図)

1は安行3c式、2は同時期の土器で、折り返し口縁の深鉢である。

第207号土壙出土土器 (第370図21～第371図27、第416・417図)

21・24は台付き鉢の脚台部である。

21は球状の脚台であったとみられ、三叉状の透かし文様を配している。下半部で屈曲して平行沈線・列点文の区画を巡らせ、裾が「ハ」の字に開く。裾の外面には弧線文を巡らせる。安行3bから3c式であろう。

24は擦り消し文様を描く脚台で、釣鐘状の胴体に円形や三叉状の透かし文様を配し、「ハ」の字に開く裾部に接続する。安行3aから3b式であろう。

22・23は折り返し口縁の深鉢で、胴上半部に最大径を持って口縁内湾しつつ立ち上がる。口縁外面に段を持ち、23は段が外に反り返る。

25は浅鉢で、口縁外面に列点文を、口端上にはB突起を巡らせる。胴部には雲形文を描いて縄文を施し、ネガ部分を肉彫り風に削り込んでいる。底面の内外面ともに円文を配する。大洞C1式である。

26は壺であろう。口縁から頸部にかけて無文で「コ」の字状に屈曲し、口端が上方に突出する。肩部には雲形文を描き、ネガ部分を削り込んでいる。全体を赤彩していたものとみられ、肩部および頸部・口縁部の内面にも赤色顔料が付着している。大洞C1式であろう。

27は注口土器で、扁平なソロバン玉状の胴部で、頸部は屈曲して口縁外反する。胴部と口縁部にB突起を巡らせ、胴上半部に雲形文を描く。胴下半部は縄文帯で、注口の直下に雲形文風の単位文を描いている。底面は高台風に削り込んでいる。大

洞C1式であろう。外面および口縁内面に赤色顔料が付着しており、全体を赤彩していたものとみられる。

第416・417図は破片資料である。

1は加曾利B2式である。2～5は安行3aから3b式であろう。6・7は安行3c式である。8は大洞C1式か。

9は口端に押圧を巡らせて細密沈線文を描く。安行3b式か。10・11は折り返し口縁の深鉢、12～17は無文土器である。18は綾線文を施文する大洞系の土器である。19・20は無文の底部である。

第208号土壙出土土器 (第372図28～34、第417図)

28は5単位波状口縁の深鉢である。非常に幅広の沈線で文様を描いており、胴上半部に文様帯を持って縄文を施し、胴下半部は無文である。波状口縁の波底部にX字状の沈線文を配して、上下に三叉文を配し、波頂部下に菱形の区画を構成する。区画内部には対向三叉文を描いて、接点に簡略化した豚鼻突起を配する。安行3cから3d式期の土器であろう。

29・30は無文の深鉢である。29は水平口縁上に4単位の山形突起を配し、頸部は「く」の字に屈曲する。30は内湾する水平口縁である。

31は台付き鉢で、胴部中段に上下対向する弧線文を巡らせて菱形の区画を構成し、内部に刺突文を充填する。区画の上下の余白には三叉文を配する。文様帯下端は平行沈線・列点文で区画している。脚台部との境には対向三叉文を巡らせている。安行3cから3d式と考えられる。

32は浅鉢である。波状口縁で、1箇所のみ1対の山形突起を配する。口縁に沿って平行沈線を巡らせ、縄文を施文する。底面は丸底で、周縁に緩やかな段を持つ。晩期安行式である。

33は壺である。球状で頸部でくびれ、口縁短く外反する。丸底の周縁に緩やかな段を持つ。胴上半部に平行沈線・刺突の区画を2段に巡らせる。器面を入念に研磨する。安行3c式か。

34は注口土器で、胴部中段がソロバン玉状に張り出してB突起を巡らせる。菱形の隆帯区画の中央に注口を配し、左右に三叉文を描く。胴上半部には粗雑な雲形文、胴下半部には前浦式類似の「の」の字状の単位文を描いている。安行3cから3d式であろう。

第417図は破片資料である。

1・2・10は安行3aから3b式であろう。3～6・11は安行3c式、7～9は安行3d式で、9は台付き鉢の脚台である。12は粗い縄文の上に太い沈線で文様を描く土器で、後期から晩期の土器であろう。13は晩期安行式の粗製土器であろう。

14～30は晩期安行式に伴う土器であろう。14・15は口端上に押圧を巡らせる。16～22は折り返し口縁の深鉢で、16は指頭押圧を巡らせ、18は胴部にひだ状の圧痕を持つ。23～30は無文土器である。

第209号土壙出土土器（第418図）

1は加曾利EⅣ式、2は称名寺式である。3～6は堀之内1式である。

第210号土壙出土土器（第372図35・第373図36、第418図）

35は深鉢ないし広口壺である。胴上半部に最大径を持って「く」の字に張り出し、頸部はくびれて眼鏡状隆帯を巡らせる。口縁外反して、1条の沈線を巡らせる。安行3b式であろう。

36は注口土器である。胴部が円盤状に張って頸部屈曲し、口縁は内湾しつつ円筒状に立ち上がる。口縁外面に入り組み文、胴上半部に入り組み三叉文を描き、注口を挟んで対向三叉文を配する。胴下半部は縄文帯となり、底部は無文で丸底である。安行3b式である。

第418図は破片資料である。

1は加曾利EⅣ式、2～5は安行3aから3b式であろう。6・8は晩期安行式の粗製深鉢である。7は折り返し口縁の深鉢で、やはり晩期安行式に伴う土器であろう。9は大洞系の深鉢胴部であろう。

第211号土壙出土土器（第373図37・38）

37は小型の深鉢である。中段が緩やかに張る樽形の胴部で、頸部屈曲して口縁内湾しつつ立ち上がる。水平口縁上に小突起を巡らせる。胴上半部には入り組み三叉文を描き、胴下半部は縄文帯となる。安行3b式である。

38は皿である。水平口縁で、1箇所に対をなす鱗状突起を配して円孔を穿つ。突起を起点とする帯縄文で器面を分割し、左右対称に入り組み文を描いて縄文を施文する。安行3b式である。

第212号土壙出土土器（第418図）

1は浅鉢で、安行2から3a式である。

第213号土壙出土土器（第373図39・40、第418図）

39は無文の深鉢で、晩期安行式に伴う土器であろう。

40は小型の注口土器で、胴上半部に最大径を持って、刻み隆帯を巡らせる。口縁との間を幅狭の文様帯として、肉彫り風の文様を描いて刺突文を充填する。水平口縁で、対をなす山形突起を巡らせる。北関東天神原系の土器で、安行3bから3c式であろう。

第418図は破片資料である。

1～3は安行3aから3b式であろう。4～7は無文土器である。

第214号土壙出土土器（第418図）

1～6は堀之内1式、7は同時期の粗製土器であろう。

第215号土壙出土土器（第373図41・第374図42、第419図）

41は無文の深鉢胴部である。胴上半部が「く」の字に張り出す。

42は壺であろう。胴上半部に文様帯を持って、平行沈線文と三叉文を描き、下端を3本沈線で区画する。晩期安行式に伴う土器であろう。

第419図は破片資料である。

1・2は安行3b式である。3～7は安行3c式で、4は天神原式の可能性がある。8は大洞C

1式である。9は折り返し口縁の深鉢、10は無文土器である。

第216号土壌出土土器（第374図43）

43は無文の深鉢である。胴部中段が張る紡錘形のプロボーションで、内外に輪積み痕を残す。

第217号土壌出土土器（第419図）

1は諸磯b式、2～8は堀之内1式である。

第218号土壌出土土器（第374図44～47、第419図）

44は波状口縁の深鉢で、胴部中段にくびれを持ち、口縁は直線的に開く。波頂部に半円形の突起を配して隆帯を貼り付け、口縁に沿って沈線を巡らせて列点文を施文する。胴上半部には横紡錘形のモチーフを描いて列点文を充填し、文様帯下端を1条の沈線で区画する。

45は安行式の粗製深鉢で、口縁外面に刻み隆帯を巡らせる。胴上半部に文様帯を持って、平行沈線の斜行文と弧状文を描いて縄文を施文し、刻み隆帯を貼り付ける。安行3b式であろう。

46は鉢で、胴上半部に最大径を持って、文様帯を有し、下端を平行沈線＋列点文で区画する。安行3c式であろう。

47は注口土器で、丸底で、胴部は中段の張り出す円盤状、頸部屈曲して円筒状に立ち上がり、口端は短く外反する。また、注口部の上に2個一対の小突起を配する。胴上半部に入り組み三叉文を持ち、胴下半部に帯縄文を巡らせる。安行3b式であろう。

第419図は破片資料である。

1は称名寺式、2～4は堀之内1式である。

6は安行3aから3b式で、注口土器であろう。

7は細密沈線文の安行3b式、8～10は安行3c式であろう。11・12は大洞C1式である。13～19は堀之内式に伴う粗製土器であろう。

第219号土壌出土土器（第375図48、第420図）

48は安行式の粗製深鉢で、口唇断面著しく肥厚し、口縁外面と胴部中段に押圧隆帯を巡らせる。胴上半部に文様帯を持って平行沈線の斜行文を描

き、横位の条線を地文とする。胴部中段以下は無文である。晩期安行式に伴う土器であろう。

第420図は破片資料である。

1は安行3aから3b式の注口土器であろう。2・3は安行3c式、4は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器であろう。

第220号土壌出土土器（第375図49～51、第420図）

49は小型の深鉢である。胴部中段が緩やかに張る紡錘形のプロボーションで、底部は丸底気味で、周縁に段を持つ。胴上半部に鋭利な工具による斜位の条線を施文する。器面は入念に研磨している。晩期安行式に伴う土器であろう。

50は無文の深鉢底部である。

51は無文の浅鉢で、底径広く、胴部は内湾しつつ立ち上がる。口端上の3箇所刻み目文列を配する。

第420図は破片資料である。

1は大洞B C式である。2・3は安行3aから3b式であろう。4は無文の深鉢胴部で、内面に輪積み痕を残す。

第221号土壌出土土器（第375図52、第420図）

52は浅鉢である。胴部は内湾しつつ立ち上がり、頸部に屈曲を持って、口縁外反する。水平口縁上に刻みを持つ小突起を配する。底径小さく、周縁に沈線を巡らせる。口縁外面にステッキ状の沈線文を描いて、頸部に1条の沈線を巡らせ、間隙に縄文を施文する。胴部中段には帯縄文の区画を配する。胴部外面にタール状の物質が付着している。安行3b式である。

第420図は破片資料である。

1は無文の口縁部、2は擦り消し縄文を描く胴部で、いずれも後晩期の土器である。

第222号土壌出土土器（第375図53・54、第420図）

53は浅鉢で、胴部は内湾しつつ立ち上がり、頸部に屈曲を持って、口縁外反する。水平口縁上に内文を持つ小突起を配する。口縁外面に縄文を施文し、胴部中段に帯縄文を巡らせる。安行3bか

ら3 c 式であろう。

54は小型の壺で、胴下半部が張り出し、底部は丸底である。頸部は「く」の字に屈曲して、口縁外反する。胴上半部に文様帯を持って、粗雑な雲形文を描いて縄文を施文し、上下を沈線+円形刺突文で区画している。安行3 c 式であろう。

第420図は破片資料である。

1~3は安行3 a から3 b 式であろう。4・5は安行3 c 式である。

第223号土壺出土土器（第375図55・第376図56、第420図）

55は小型の深鉢である。胴部中段が緩やかに張る紡錘形のプロポーションである。胴上半部に矢羽状の条線を施文する。晩期安行式に伴う土器であろう。56は無文の深鉢である。

第420図は破片資料である。

1は安行3 a から3 b 式であろう。2は安行3 c 式である。3は無文の深鉢胴部である。

第224号土壺出土土器（第376図57・58、第420・421図）

57は無文の深鉢胴部である。

58は浅鉢である。丸底気味で、底部周縁に沈線を巡らせる。胴部は内湾しつつ立ち上がり、頸部屈曲して、口縁外反する。水平口縁上にM字状の突起を配する。頸部と胴部中段に帯縄文を巡らせる。安行3 b から3 c 式であろう。

第420・421図は破片資料である。

1は堀之内1式である。2は安行3 a 式の浅鉢である。3・10は安行3 a から3 b 式であろう。

4~9は安行3 b 式で、5・6は姥山系の文様であろう。11~16は安行3 c 式である。

17~28は晩期安行式に伴う土器である。17は口端に押圧を持つ深鉢、18は無文の浅鉢である。19~23は扁平な折り返し口縁の深鉢、24~28は無文土器である。

29~31は台付き鉢の脚台部で、29は安行3 a から3 b 式。30・31も晩期安行式である。32は無文

の底部である。

第225号土壺出土土器（第376図59・60、第421図）

59は砲弾形の深鉢で、口縁内湾して外面に段を持ち、縄文を施文する。胴部中段に帯縄文を巡らせて、胴上半部を文様帯とし、擦り消し文様を描く。安行3 b から3 c 式であろう。

60は無文の深鉢底部である。

第421図は破片資料である。

1は安行3 b 式、2・3は安行3 a から3 b 式である。4~7は安行3 c 式である。8は折り返し口縁、9は無文の口縁で、いずれも晩期安行式に伴う土器である。

第226号土壺出土土器（第376図61~第377図64、第421・422図）

61は小型の深鉢で、水平口縁で、内湾しつつ開く単調な器形である。口縁外面と胴部中段に平行沈線+円形刺突文の区画を巡らせる。安行3 c 式であろう。

62・63は無文の深鉢胴部である。

64は無文の広口壺で、肩部が「く」の字に張り出し、頸部がくびれて口縁外反する。

第421・422図は破片資料である。

1は安行1式の水平口縁深鉢である。2は姥山系の土器で安行3 b 式、細密沈線の3も安行3 b 式である。4は安行3 a 式である。5は安行3 a から3 b 式である。

6・7は安行3 c 式、8は無文深鉢であろう。9は無文の浅鉢、10・11は台付き鉢の脚台部でいずれも晩期安行式である。12は無文の深鉢底部である。

第227号土壺出土土器（第422図）

1は称名寺式、2・3は安行3 c 式である。4は指頭押圧を伴う折り返し口縁、5は無文の深鉢胴部である。

第228号土壺出土土器（第422図）

1は細密沈線文の土器で、安行3 b 式である。

第229号土壙出土土器 (第422図)

1は加曾利EⅣ式、2～4は堀之内1式である。
5は堀之内式に伴う粗製土器であろう。

第230号土壙出土土器 (第377図65)

65は無文の深鉢で、口縁直下に最大径を持ち、口縁は強く内湾して口端外屈する。口端上に指頭押圧を巡らせる。

第231号土壙出土土器 (第422図)

1は無文の底部である。

第232号土壙出土土器 (第377図66～68、第422図)

66は折り返し口縁の深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁は内湾する。折り返し部は扁平で、末端がわずかに外に張る。晩期安行式に伴う土器であろう。

67は無文の深鉢底部で、底面中央に網代痕を残している。

68は注口土器である。注口部を欠損する。平底で、胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部屈曲して、口縁は内湾気味に立ち上がる。胴上半部に文様帯を持って、紡錘文を挟んだ対向三叉文を描き、口縁外面にも同一のモチーフを配する。底面に弧線文を巡らせて縄文を施文する。安行3b式である。

第422図は破片資料で、1・2は無文の深鉢である。

第233号土壙出土土器 (第378図69・70、第422・423図)

69は折り返し口縁の深鉢で、小突起を持つ可能性がある。胴上半部に最大径を持って口縁内湾し、折り返し部分が反り返って外に張り出す。晩期安行式に伴う土器であろう。

70は台付き鉢で、胴部はやや内湾しつつ開いた後にS字に屈曲し、口縁は直線的に開いて口端が内屈する。脚台部は円筒状で円孔を配する。平行沈線を巡らせて器面を多段に分帯し、口縁外面に波頭文を巡らせる。縄文は施文しない。器面を良好に研磨している。安行3c式である。

第422・423図は破片資料である。

1は安行3aから3b式であろう。2～8は安行3c式である。9～14は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。

第233・248号土壙出土土器 (第423図)

1・2は安行3aから3b式である。

第234号土壙出土土器 (第378図71、第423図)

71は5角形の浅鉢である。5単位の山形波状口縁で、波頂部には内文を伴う突起を配する。口縁に沿って平行沈線文を巡らせて縄文を施文し、胴部中段に帯縄文を巡らせる。安行3b式であろう。

第423図は破片資料で、1は安行3aから3b式、2～4は安行3c式である。

第237号土壙出土土器 (第379図72・73、第423図)

72は無文の深鉢で、胴上半部に最大径を持って「く」の字に張り出し、口縁は内湾する。

73は折り返し口縁の深鉢である。胴上半部に最大径を持って「く」の字に張り出し、口縁は内湾する。晩期安行式に伴う土器であろう。

第423図は破片資料である。

1～4は安行3b式で、1は姥山系の土器である。5は胴部中段に隆帯が巡る鉢で、安行3aから3b式である。

6・7は安行3c式である。8は大洞C1式、9は安行式に伴う粗製深鉢である。

10・11は扁平な折り返し口縁、12・13は無文の口縁部で、いずれも晩期安行式に伴う土器である。14は加曾利B1式の浅鉢である。

第238号土壙出土土器 (第379図74～第380図79、第424図)

74は小型の深鉢である。底径小さく、内湾しつつ立ち上がる単調な器形で、口縁直立する。胴上半部に文様帯を持って、三角形の区画文を描いて列点文を充填し、上下を沈線で区画して間隙に弧線文を配する。胴下半部には弧線文を巡らせる。安行3c式である。

75も小型精製の深鉢である。胴上半部が丸く張

り、頸部にくびれを持って、口縁直立する。水平口縁上に2個一對の小突起を配する。口縁外面に縄文を施文し、胴上半部に文様帯を持って、ステッキ状の沈線文を巡らせて縄文を充填する。安行3b式であろう。

76は無文の深鉢である。

77は無文の浅鉢である。丸底で、底部周縁に段を持つ。胴部は内湾しつつ単調に立ち上がり口縁に至る。

78・79は注口土器である。

78は胴部円盤状で、頸部がくびれて口縁外反する。口端上にB突起を巡らせ、口縁外面に縄文を施文する。胴上半部には形散化した羊歯状文を施文する。注口部の付け根には眼鏡状隆帯を巡らせる。大洞BC式であろう。

79は胴部円盤状で、頸部がくびれて口縁は内湾しつつ立ち上がる。口縁外面に魚眼三叉文を巡らせ、胴上半部にはX字状の擦り消しモチーフを巡らせる。安行3b式である。

第424図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は堀之内式に伴う粗製土器である。3は安行3b式で台付き鉢、4は安行3aから3b式である。5は後期安行式に伴う粗製深鉢、6は折り返し口縁で、晩期安行式に伴う土器であろう。

第239号土壙出土土器（第380図80、第424図）

80は無文の深鉢底部である。

第424図は破片資料である。

1は安行3a式、2・5は安行3aから3b式である。3は細密沈線文の安行3b式、4は安行3c式である。

第240号土壙出土土器（第424図）

1・2は姥山系の波状口縁深鉢で、1は安行3b式、2は安行3c式である。3は安行3aから3b式である。4・5は晩期安行式の粗製深鉢である。

6は折り返し口縁、7は無文の脚台部で、いず

れも晩期安行式に伴う土器である。

第241号土壙出土土器（第380図81・82、第424～426図）

81は台付き鉢で、扁平なボウル状の体部で、口端上にB突起を巡らせる。胴部には粗雑な雲形文を描いて、ネガ部分を肉彫り状に削り込む。大洞C1式であろう。

82は浅鉢で、胴部は中段が丸く張り出し、頸部でくびれて1条の沈線文を巡らせる。口縁は直線的に外反する。口縁外面には弧線文を巡らせ、口端上に形散化したB突起を巡らせる。安行3c式であろう。

第424～426図は破片資料である。

1は曾谷式の山形波状口縁深鉢、2は姥山系の波状口縁深鉢で、安行3bから3c式である。3は内文を持つ浅鉢で安行3b式、4は台付き鉢の脚台部で安行3aから3b式である。5・6は細密沈線文の土器で安行3b式、7～20は安行3c式である。21は晩期安行式に伴う粗製深鉢であろう。

22～51は晩期安行式に伴う土器である。22は胴部に1条の沈線文を巡らせる土器で、安行3c式。23～32は折り返し口縁の深鉢で、32は末端が反り返る。34～36は口端に押圧を巡らせる。48は無文薄手の浅鉢である。49・50は大洞系の深鉢胴部で、49は綾線文を施文する。

第242号土壙出土土器（第426図）

1は安行3aから3b式である。2・3は細密沈線文の安行3b式、4・5は安行3c式である。6は指頭押圧を伴う折り返し口縁、7～9は無文の深鉢である。

第244号土壙出土土器（第426図）

1は加曾利B式の粗製土器である。2・3は曾谷式で、2は鉢、3は瓢形深鉢である。

第245号土壙出土土器（第380図83・第381図84、第426・427図）

83は堀之内2式の精製深鉢の胴部である。胴上

半部に擦り消し縄文によるパネル状のモチーフを描く。胴部中段以下は無文である。

84は縄文地文の底部で、同時期のものであろう。

第426～427図は破片資料である。

1は諸磯a式、2は称名寺式である。3～8は堀之内1式、9～23は堀之内2式で、9は浅鉢、23は注口土器である。24～31はこれに伴う粗製深鉢である。

第245・246号土壌出土土器 (第427図)

1～3は加曾利B2式、4・5はこれに伴う粗製土器である。6は安行3aから3b式、7は堀之内2式で、8はこれに伴う粗製土器であらう。

第246号土壌出土土器 (第381図85、第428図)

85は波状口縁の浅鉢である。丸底で、内湾しつつ一本調子に立ち上がって、口端は外屈して外面に沈線を巡らせる。胴部中段の無文帯を挟んで上下に縄文を施文している。加曾利B3から曾谷式であらう。

第428図は破片資料で、1は堀之内1式、2は遠部第一類で、加曾利B3から曾谷式であらう。

第248号土壌出土土器 (第381図86～第382図90、第428図)

86は安行式の精製深鉢で、胴部中段に対向弧線文を描いて縄文を施文する。胴下半部には帯縄文を巡らせる。安行3b式であらう。

87は台付き鉢である。ボウル形の胴部で、頸部が屈曲し、口縁は内湾しつつ開く。胴部に2段の波状線を巡らせて上下に縄文を施文し、間に楕円形の区画を形成する。区画内部には対向三叉文を巡らせて接点の紡錘形の部分に縄文を施文している。器面を赤彩している。安行3b式である。

88は鉢である。胴部中段が緩やかに張り出し、胴上半部にくびれを持って、口縁は外反する。胴上半部に文様帯を持って直線的な羊歯状文を描き、胴下半部は縄文帯として、上下に緩線文を巡らせている。大洞C1式であらう。

89は注口土器である。底部直上にくびれを持つ

ほかは単調に内湾しつつ立ち上がり、口縁上に山形の突起を巡らせる。胴上半部に刻み隆帯の区画を配して注口を付し、円孔を穿つ。胴部中段にはボタン状の貼り付け文を巡らせる。天神原系の土器で、安行3bから3c式であらう。

90は角底土器である。底部は四隅が突出して、体部の四方に隆帯を貼り付け、パネル状の区画文を構成している。晩期安行式に伴う土器であらう。

第428図は破片資料である。

1は曾谷式、2は安行3b式である。3～5は安行3c式、6は前浦式で壺の肩部である。7は安行3aから3b式である。8・9は折り返し口縁、10～12は無文の口縁部で、11は内面に段を持つ。いずれも晩期安行式に伴う土器である。

第249号土壌出土土器 (第382図91～第383図94、第428図)

91は姥山系の大波状口縁深鉢である。波頂部には形骸化した豚鼻突起を配し、菱形の区画文を2段に配し、同心円文を重畳させる。波底部には小入り組み文を配する。胴下半部には平行沈線文を巡らせる。安行3c式である。

92は浅鉢である。平底で、胴部は内湾しつつ立ち上がる。口縁直下に平行沈線を巡らせ、口端上に2個一対の小突起を配する。安行3c式であらう。

93は注口土器である。底部直上にくびれを持つほかは単調に内湾しつつ立ち上がり、口縁上に山形の突起を巡らせる。胴上半部に刻み隆帯の区画を配して注口を付し、円孔を穿つ。胴部中段にはボタン状の貼り付け文を巡らせる。天神原系の土器で、安行3bから3c式であらう。

94は浅鉢である。基本的に水平口縁の鉢だが、1箇所のみ山形の突起となり、菱形の区画文を描いて小入り組み文を配する。口縁外面にステッキ状の沈線文を巡らせて縄文を施文し、文様帯下端を帯縄文で区画する。姥山系の文様を描く土器であり、安行3bから3c式であらう。

第428図は破片資料である。

1・2は安行3 b式である。3は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。

第249・250号土壙出土土器（第428図）

1・2は安行3 c式である。3～5・7は安行3 aから3 b式で7は台付き鉢、6は大洞系の土器で、大洞C 1式であろう。8～11は折り返し口縁、12・13は無文の口縁部である。

第250号土壙出土土器（第383図95～97、第429図）

95は無文の深鉢底部である。

96は扁平な浅鉢で、文様帯上下の区画に沿って弧線文を巡らせて縄文を施文し、わらび手状の沈線文を巡らせる。安行3 b式か。

97は無文の小型壺である。胴部中段が張り出し、頸部は急速にすばまって、口縁は短く外反する。口端上に小突起を配する。器面を良好に研磨しているが、胴部中段の一箇所のみ風化して蜂の巣状に穿孔している。

第429図は破片資料である。

1は安行3 a式、2～4・10は安行3 aから3 b式である。5～9は安行3 c式である。11は細密沈線の安行3 b式、12・13は折り返し口縁、14～17は無文の口縁部である。

第250・251号土壙出土土器（第429図）

1・2は安行3 b式の台付き鉢、3は安行3 c式である。4は安行3 aから3 b式の台付き鉢の脚台部、5は大洞C 1式であろう。6は折り返し口縁、7は無文の口縁部である。

第251号土壙出土土器（第430図）

1は安行3 aから3 b式である。2～4は安行3 c式、5は無文土器である。

第252号土壙出土土器（第430図）

1は安行3 b式、2は安行3 aから3 b式である。

第253号土壙出土土器（第383図98、第430図）

98はボウル状の浅鉢である。丸底だが、底部周縁に段を持つ。口縁に沿って沈線を巡らせており、

口端上の数箇所に刻目文列を有する。晩期安行式に伴う土器であろう。

第430図は破片資料である。

1・2は安行3 aから3 b式の台付き鉢の脚台部で、透かし文様を持つ。3～6は折り返し口縁の深鉢、7～10は無文の深鉢である。

第254号土壙出土土器（第430図）

1は安行3 b式の大波状口縁深鉢である。2・3は無文土器である。

第255号土壙出土土器（第430図）

1は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。

第256号土壙出土土器（第383図99、第430・431図）

99は深鉢である。平底で、内湾しつつ単調に立ち上がり、口縁直立する。縦位の帯縄文で器面を4分割して扁平な豚鼻突起を配し、横位の平行沈線で区画内部をさらにパネル状に分割して、弧線文や三叉文を配する。本来は細密沈線文系の土器に特有の文様であり、安行3 b式であろう。

第430・431図は破片資料である。

1・2は安行3 b式で、1は蛇山系の土器である。3はこれらに伴う粗製深鉢である。4～7は安行3 c式である。8・9は無文土器である。

第257号土壙出土土器（第383図100・第384図101、第431図）

100は小型の深鉢で、胴部中段が張り出し、頸部屈曲して口縁は直線的に開く。口端上に2個一対の突起を配する。平行沈線に刻みを施した区画を口縁外面と胴部中段に巡らせる。大洞C 1式であろう。

101は浅鉢である。丸底で、底面を円形に削り込んでいる。体部は扁平のボウル状で、頸部が強く屈曲し、口縁は内湾しつつ立ち上がる。水平口縁上に2個一対のB突起を配する。胴部から頸部にかけて粗放な雲形文を描き、ネガ部分を肉彫り風に削り込んでいる。大洞C 1式であろう。

第431図は破片資料である。

1は安行3bから3c式、2は安行3b式で台付き鉢の脚台部である。3は安行3c式である。4は折り返し口縁、5は無文土器である。

第260号土壌出土土器 (第431図)

1・5は安行3aから3b式で、1は台付き鉢である。2～4は安行3c式である。6～9は無文土器である。7は口縁に刻みを持つ。

第261号土壌出土土器 (第431図)

1は安行3aから3b式、2～4は安行3c式である。5～7は無文土器である。

第262号土壌出土土器 (第384図102、第431図)

102は水平口縁の深鉢である。胴部中段に最大径を持ち、頸部屈曲して、口縁直立し、2個一単位の小突起を配する。胴上半部に入り組み文を描き、上下を沈線で区画する。口縁部には複列の列点文を巡らせる。安行3c式である。

第431図は破片資料である。

1は安行3aから3b式、2は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。

第266号土壌出土土器 (第432図)

1は細密沈線文の安行3b式、3は列点文の安行3c式である。2・4～6は無文土器である。

第267号土壌出土土器 (第432図)

1・2は安行3b式で、2は壺ないし注口土器である。3は安行3aから3b式で、台付き鉢の脚台部である。

第268号土壌出土土器 (第384図103)

103は浅鉢で、中段が張り出す円盤型の胴部で、頸部屈曲する。底面を円形に削り込んでいる。晩期安行式に伴う土器であろう。

第269号土壌出土土器 (第432図)

1は安行3c式、2は無文土器である。

第273号土壌出土土器 (第432図)

1は加曾利EⅢからEⅣ式である。2は加曾利B2式、3は加曾利B3式である。5は加曾利B式に伴う粗製土器、4は曾谷から安行1式に伴う粗線文土器である。

第520号土壌出土土器 (第432・433図)

22は諸磯a式、2は加曾利EⅣ式の両耳壺であろう。1～17は堀之内1式と考えたが、14・15は称名寺式の可能性がある。18～20は堀之内2式で、19・20は注口土器である。

23～25は安行式で、23は安行2から3a式の砲弾形深鉢、24は安行3a式の浅鉢、25は安行3c式である。26・27は晩期安行式の粗製深鉢である。28・29は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢。30は晩期の製塩土器で、口端は断面角頭棒状である。

第522号土壌出土土器 (第433図)

1は安行3aから3b式、2～5は安行3b式である。6～8は安行3c式である。10は晩期安行式の粗製深鉢である。9・11は折り返し口縁、12～14は無文の深鉢である。15・16は晩期の製塩土器で、15は口唇断面角頭棒状、16は指で摘み出したような先細りの口縁である。

第523号土壌出土土器 (第384図104、第434図)

104は条線地文の深鉢底部で、安行式に伴う土器である。

第434図は破片資料である。

1は堀之内1式の突起である。2～6は安行式で、2は安行1式の台付き鉢、3は安行3a式の砲弾形深鉢である。4は水平口縁深鉢で後期安行式、5は姥山系の土器で安行3b式である。6は砲弾形深鉢の胴部か。7・8は後期安行式に伴う粗製深鉢で、7は安行1式であろう。9・10は安行3c式で、10は浅鉢であろう。

第525号土壌出土土器 (第434図)

1は安行1式の瓢形深鉢、2・3は安行3aから3b式である。4・5は無文土器である。

第526号土壌出土土器 (第384図105、第434図)

105は台付き鉢であろう。胴部中段に入り組み三叉文を描き、上下を帯縄文+複列の列点文を巡らせて区画する。安行3b式である。

第434図は破片資料である。

1～5は安行式である。1～3は砲弾形深鉢で、1は安行1式、2・3は安行3aから3b式であろう。4は台付き鉢で安行2式、5は安行3aから3b式である。6は安行式に伴う粗製深鉢、7は扁平な折り返し口縁、8は無文の口縁部である。

第527号土壙出土土器（第384図106・107、第434～436図）

106は小型の深鉢である。底径ごく小さく、胴部は内湾しつつ単調に立ち上がり、口縁直立する。口縁外面に弧線文を巡らせて、上下を沈線で区画する。安行3c式である。

107は深鉢で、斜位の条線を地文とする、晩期安行式の粗製土器であろう。

第434～436図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は堀之内2式である。3～5は加曾利B2式、6も遠部第四類で加曾利B2式である。7は曾谷・高井東式である。

8～33は安行式である。8～11は大波状口縁深鉢で、8は安行1式、9・10は安行2式、11は蛇山系の土器で、安行3bから3c式である。

12～24は外面に帯縄文の区画を巡らせて貼り瘤を配する水平口縁深鉢で、12～17・20・21は安行1式、18は安行2から3a式、19は安行3b式であろう。22・23は擦り消し縄文の水平口縁深鉢で、22は安行2式、23は安行3aから3b式である。24～26はこれらの精製深鉢に伴う胴部で、安行3aから3b式であろう。

27～30は安行1式の瓢形深鉢である。31・32は台付き鉢で、31は安行3b式、32は脚台部で後期安行式である。33は安行3aから3b式の浅鉢であろう。34～57は安行式に伴う粗製深鉢である。

第528号土壙出土土器（第436図）

1は曾谷・高井東式である。2は安行2式、3は安行3aから3b式の大波状口縁深鉢である。4は擦り消し縄文の深鉢で、安行3b式であろう。5は晩期安行式に伴う粗製深鉢である。

第529号土壙出土土器（第437図）

1は加曾利B2式、2も加曾利B式である。3～6は安行式で、3は安行1式の大波状口縁深鉢、4・5は後期安行式の水平口縁深鉢である。6は安行1式の瓢形深鉢である。7・8は安行式に伴う粗製深鉢である。

第530号土壙出土土器（第437図）

1は安行2式の注口土器である。2は安行3b式、3は無文深鉢である。

第531号土壙出土土器（第384図108、第437図）

108は台付き鉢である。平行沈線で上下を区画し、脚台部には蛇行沈線文を描く。安行3bから3c式であろう。

第437図は破片資料である。

1・2は堀之内1式、3は加曾利B2式である。4～8は安行式で、4は大波状口縁深鉢、5は水平口縁深鉢、6は砲弾形深鉢、7は精製深鉢胴部で、いずれも安行1式である。8は安行3a式であろう。9～14は安行式に伴う粗製深鉢で、9は安行1式である。15は二又の突起を持つ浅鉢、16は胴部中段に眼鏡状隆帯を巡らせる鉢で、いずれも安行3aから3b式である。

第532号土壙出土土器（第437・438図）

1は堀之内1式、2は遠部第一類で加曾利B2式である。3は曾谷式である。4・5は水平口縁深鉢で4は安行1式、5は安行2式である。6～8は安行式に伴う粗製深鉢で、6は安行1式、7・8は晩期安行式である。9は無文土器である。

第533号土壙出土土器（第384図109、第438図）

109は大波状口縁深鉢である。波頂部に扁平縦長の豚鼻突起を配する。胴上半部には帯縄文の三角形区画文を描いて交点に豚鼻突起を配する。安行3b式である。

第438図は破片資料である。

1・2は安行3aから3b式で、1は大波状口縁深鉢、2は浅鉢である。3は安行3b式の粗製深鉢であろう。4は無文土器、5は晩期の製塩土器で、指で摘み出したような先細りの口縁である。

第534号土壙出土土器 (第385図110・111、第438～440図)

110は水平口縁深鉢で、胴下半部が「く」の字に張り出し、胴部中段がくびれて、口縁やや外傾しつつ立ち上がる。胴上半部に文様帯を持って対向三叉文を中心に集合沈線文を描き、文様帯下端を平行沈線+列点文で区画する。胴下半部には連続弧線文を巡らせる。安行3 d 式である。

111は縄文地文の深鉢で、安行式の精製深鉢であろう。

第438～440図は破片資料で、1は加曾利EⅣ式、2・3は堀之内1式で、4は曾谷・高井東式である。

5～28は安行式である。5・6は大波状口縁深鉢で安行3 a から3 b 式、7・8は水平口縁深鉢で安行1式、9・10は砲弾形深鉢で安行3 a 式。11・13はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。

14は安行3 b から3 c 式の浅鉢、15は細密沈線文の安行3 b 式である。16は天神原式であろう。17～21は安行3 c 式、22～27は安行3 d 式である。28は安行3 b から3 c 式の深鉢胴部であろう。46は安行3 a から3 b 式の鉢の底部である。

29～32は安行式の粗製深鉢である。33は折り返し口縁の深鉢、34・38～45は無文土器である。35～37は晩期の製塩土器で、35・36の口唇は寛で水平に切り落としたようなつくりである。

第536号土壙出土土器 (第385図112～114、第440図)

112は縄文地文の深鉢で、胴部の文様帯との境を沈線で区画している。安行式の精製深鉢であろう。

113は安行1式の粗製深鉢で、胴部中段にくびれを持って口縁直立し、口縁外面と胴部中段に押し引き文を巡らせる。地文は縦位の条線である。

114は浅鉢ないし台付き鉢である。扁平な盃形で、口縁外面に帯縄文による楕円形区画文を配し、胴下半部は無文である。安行1式であろう。

第440図は破片資料である。

1は加曾利EⅢ式、2は堀之内1式である。3

は半裁竹管状工具の平行沈線文を描く土器で堀之内式の粗製土器である。4は遠部第一類で、加曾利B 3から曾谷式であろう。5～7は安行1式である。5・6は水平口縁深鉢で、6は強い火熱を受け還元状態となり、器壁が著しく歪んでいる。7は砲弾形の深鉢である。8・9は後期安行式の粗製土器、10は無文土器である。

第537号土壙出土土器 (第440図)

1～3は堀之内2式、4は後期安行式の深鉢胴部、5は安行3 c から3 d 式である。6～8は無文土器である。

第538号土壙出土土器 (第385図115、第440図)

115は無文の深鉢である。第440図は破片資料で、1は折り返し口縁、2は無文の口縁部である。

第539号土壙出土土器 (第385図116～第386図118、第441図)

116は水平口縁深鉢で、二叉の山形突起前面に三叉文を配し、胴上半部には入り組み三叉文を描いて、文様帯下端を帯縄文で区画する。安行3 a から3 b 式であろう。

117は楕円形の浅鉢である。水平口縁に沿って平行沈線文と連続弧線文を巡らせ、口端上に豆粒状の貼り付け文を配する。安行3 c 式であろう。

118は折り返し口縁の深鉢である。内湾口縁で、外面に丸みを帯びた段を持つ。晩期安行式の粗製土器であろう。

第441図は破片資料である。

1は加曾利B 1式、2は加曾利B 2式、3は曾谷式である。

4～16は安行式である。4は安行3 a 式で、大波状口縁深鉢である。5～10は帯縄文の区画を巡らせる水平口縁深鉢で、5は安行1式、6・7は安行3 a 式、8・10は安行3 a から3 b 式である。11・12は砲弾形深鉢である。13～15はこれらの精製深鉢に伴う胴部で、13・14は安行1式、15は安行2から3 a 式である。16は安行3 a から3 b 式で、浅鉢であろう。

17~29は安行式の粗製深鉢で、20・21は安行1式、27・28は安行3b式である。30・31は無文土器、32は晩期の製塩土器で、口端は外削ぎ状に整形している。

第539・540号土壙出土土器（第442図）

水平口縁の深鉢で、1は安行1式、2は安行3a式である。

第540号土壙出土土器（第386図119・120、第442図）

119は安行1式の砲弾形深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を2段に巡らせ、円形の貼り瘤を重畳させる。

120は東北系の新地式の流れを汲む土器で、上下2段の入り組み文を描くが、下段のみ入り組み三叉文となっている。安行3aから3b式であろう。

第442図は破片資料である。

1は口端に小突起を持つ無文土器である。2は曾谷式である。3~10は安行式である。3・4は大波状口縁深鉢で、3は安行1式、4は安行3a式である。5・6は水平口縁深鉢で、5は安行3a式、6は安行1式である。7は砲弾形深鉢である。8・9は台付き鉢で、安行1式である。10は安行3aから3b式で注口土器であろう。

11~17は安行式に伴う粗製深鉢で、11~13は安行1式、16・17は晩期安行式である。18は無文土器である。

第541号土壙出土土器（第386図121~123、第442図）

121は無文の深鉢で、胴部中段に最大径を持ち、頸部で屈曲して口縁直立する。口唇断面は肥厚する。122も無文の深鉢である。

123は台付き鉢の脚台部で、屈曲を持って裾が直線的に広がり、括弧状のモチーフを挟んで対向三叉文を描き、縄文を施文する。安行3b式であろう。

第442図は破片資料である。

1~3は精製深鉢胴部で、1は安行1式、2・3は安行3aから3b式である。4は安行3b式

の台付き鉢ないし浅鉢、5は安行3aから3b式である。10は安行3bから3c式である。6~8は安行式の粗製深鉢で、6は安行1式である。9は無文土器である。

第542号土壙出土土器（第386図124、第443図）

124は台付き鉢で、押圧隆帯と沈線を巡らせる。晩期安行式である。

第443図は破片資料である。

1は高井東式の大波状口縁深鉢である。2・4は安行1式の水平口縁深鉢、3は砲弾形深鉢で安行3aから3b式である。5・6は玉抱き三叉文を描く土器で、5は浅鉢、6は深鉢でいずれも安行3a式である。7・8は外反口縁の深鉢、9は胴部中段の張り出す鉢で、いずれも安行3b式であろう。

10~14は安行式の粗製深鉢で、10~13は安行1式、14は晩期安行式であろう。15・16は折り返し口縁、17・18は無文の口縁部である。

第544号土壙出土土器（第386図125~第387図137、第443・444図）

125・126は波状口縁深鉢である。

125は姥山系の土器で、胴上半部に三角形区画文を重畳させ、波頂部と波底部に円文を配する。安行3bから3c式であろう。

126は平行沈線+刺突文により文様を描く。波底部に縦瘤を中心としたX字文を描いて波頂部に菱形の区画文を構成する土器で、やはり姥山系の土器で、安行3c式であろう。

127・128は水平口縁の深鉢である。

127は胴部中段が張り出し、頸部屈曲して口縁外反する。口端上と外面にそれぞれ刻み目文を巡らせ、B突起を配する。胴上半部に平行沈線を巡らせる。安行3c式であろう。

128も共通の器形と文様で、口端上と外面に交互の刻み目文を巡らせる。

129は浅鉢で、底面が剥落している。内湾しつつ開く盃形の鉢で、平行沈線+刺突文により方形

区画文を描く。器面は入念に研磨している。安行3c式であろう。

130も浅鉢とみられ、入り組み文を巡らせて文様帯下端を沈線で区画し、底面を丸く削り込んでいる。安行3c式であろう。

131は無文の浅鉢である。丸底で、底部周縁に段を持ち、内湾しつつ単調に開く。

132・134は折り返し口縁の深鉢で、いずれも晩期安行式に伴う土器であろう。

132は胴部中段に最大径を持ち、頸部がくびれて口縁直立する。口縁外面に段を持ち、口端上の数箇所に刻み目文列を配する。頸部には縦位のケズリ調整を残すが、胴部には横位の研磨を施している。

133は無文の深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾する。器外面に輪積み痕を残す。134は胴上半部に最大径を持って口縁内湾する。丸みをおびた折り返し口縁である。器外面に輪積み痕を残す。135は無文の深鉢である。胴部中段が丸く張り出す。

136・137は無文の底部である。

第443・444図は破片資料である。

1は安行3aから3b式、2は安行3b式である。3は安行3c式、4～9は安行3d式である。10は東関東系の前浦式である。11～15は折り返し口縁、16～23は無文土器である。

第545号土壌出土土器（第444図）

1・2は安行1式の水平口縁深鉢、3～5は安行3b式である。6は前浦式に類似の半肉彫り文様の土器で、安行3d式であろう。7は安行1式の粗製深鉢、8は晩期安行式に伴う折り返し口縁の土器、9は直線的な羊歯状文で大洞C1式であろう。

第546号土壌出土土器（第388図138、第444・445図）

138は台付き鉢で、直線的に開く盃形の土器で、口端上に7個一組の貼り付け文を配する。胴上半部には入り組み三叉文を描いて縄文を施文し、胴

下半部は縄文帯とする。胴下半部を中心に器面の風化と剥落がみられる。安行3b式である。

第444・445図は破片資料である。

1・2は加曾利B2式、3は内面に凹線を持つ加曾利B式の粗製土器であろう。4～6は安行3aから3b式、7は安行3c式であろう。8・9は前浦式である。10・11は無文土器、12は綾線文を施文する大洞系の土器、13は晩期の製塩土器で、口端部は匳で水平に切り落としたようなつくりである。

第547号土壌出土土器（第388図139～141、第445図）

139は台付き鉢の脚台部である。三叉状や円形の透かし文様を持ち、内外面とも赤彩している。晩期安行式である。140は浅鉢である。平底で、胴部内湾しつつ開き、口縁直立する。晩期安行式に伴う土器であろう。

141は注口土器で、胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部屈曲して口縁は内湾しつつ立ち上がる。胴上半部には紡錘文を挟んで三叉文を描き、口縁外面にも対向三叉文を描く。安行3b式か。

第445図は破片資料である。

1は加曾利B2式、3は遠部第一類で、加曾利B3から曾谷式であろう。2・4・5は曾谷・高井東式である。

6は安行1式の台付き鉢、7は安行3c式、8は安行3bから3c式、9は浅鉢で安行3a式である。10は胴部中段が張って押圧隆帯を巡らせる鉢で、安行3aから3b式である。11～13は晩期安行式の粗製深鉢、14は扁平な折り返し口縁で製塩土器の可能性がある。15～17は無文土器である。

第547・548号土壌出土土器（第445図）

1は遠部第一類で加曾利B2式であろう。

第548号土壌出土土器（第388図142～第389図147、第445・446図）

142は大波状口縁深鉢である。波頂部に扁平縦長の豚鼻突起を重畳させ、胴上半部に三角形区画文を描く。安行3b式である。

143は水平口縁深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、頸部がくびれて口縁直立する。口端上には2個一対の小突起を配する。口縁外面に縄文を施し、胴上半部に単沈線の入り組み文を描いて、下方の区画との間に縄文を施文する。

147はこれに似るが、口縁との間に無文帯を持つ。いずれも安行3b式である。

144は折り返し口縁の深鉢である。折り返し部分の段上に指頭押圧を巡らせ、末端が反りかえる。晩期安行式に伴う土器であろう。145・146は無文の胴部である。146は外面に輪積み痕を残す。

第445・446図は破片資料である。

1・2は堀之内1式、3・4は加曾利B2式である。5・6は遠部第一類で5は加曾利B2式、6は加曾利B3から曾谷式である。7は曾谷式である。8～19は安行式である。8・9は大波状口縁深鉢で安行3b式である。10～13は外反口縁深鉢で10～12は安行3aから3b式、13は安行3b式である。

14は安行3a式の台付き鉢であろう。15・16は細密沈線文の安行3b式、17～19は安行3c式であろう。20～24は安行式の粗製深鉢である。25～28は折り返し口縁、29・30は無文土器である。31・32は浅鉢ないし注口土器の底部で、後期から晩期の土器である。

第549号土壌出土土器（第389図148・149、第446・447図）

148は胴部がソロバン玉状に張る鉢で、口縁と胴部に帯縄文の区画を持ち、間を斜行文で連繫して三角形区画文を構成する。帯縄文の交点にはボタン状の貼り付け文を配する。安行3a式か。

149はこれに伴う粗製土器とみられる。内湾口縁で、外面に押し引き文を巡らせ、胴部に斜位の条線を施文する。

第446・447図は破片資料である。

1・5・6は安行1式、2は安行3a式の鉢、3は安行3c式である。4は姥山系の土器で安行

3b式である。7は安行1式、8～10は晩期安行式の粗製深鉢である。

第550号土壌出土土器（第389図150～152、第447図）

150は無文の深鉢で、胴部中段が丸く張る。151は無文の深鉢底部で、裾が軽微に張り出す。152は無文の浅鉢である。

第447図は破片資料である。

1は加曾利EⅣ式の突起である。2は曾谷式、3は加曾利B3から曾谷式であろう。4・5・11は台付き鉢で4は安行3a式、5・11は安行3b式である。6～10は外反口縁の深鉢で安行3aから3b式である。

12は細密沈線の安行3b式、13・14は安行3c式、15は大洞C2式である。16は安行1式の粗製深鉢、17～19は無文土器である。

第551号土壌出土土器（第448図）

1は加曾利EⅢ式、2は堀之内式の粗製土器、3は曾谷式である。4は安行3aから3b式、5は大洞C2式である。6は口端に押圧を巡らせる土器で、晩期安行式に伴う土器である。

第552号土壌出土土器（第448図）

1・2は遠部第一類で、加曾利B3から曾谷式である。3は曾谷式である。4～6は安行3c式である。7～10は折り返し口縁で、晩期安行式に伴う土器である。

第553号土壌出土土器（第448図）

1は堀之内式の粗製土器、2～7は安行式で、2は安行1式、3～5は安行3b式、7・8は安行3c式である。9は安行式の粗製深鉢、10は折り返し口縁、11・12は無文土器である。

第555号土壌出土土器（第390図153・154、第448・449図）

153は折り返し口縁の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、口縁は直立して外面に弱い段を持つ。晩期安行式に伴う土器であろう。

154は台付き鉢で、胴部は内湾しつつ立ち上がり、頸部は屈曲して口縁は直線的に開く。口端上

には二又の突起を2個一組で4単位配する。胴上半部に入り組み三又文を描いて縄文を充填し、脚台との境には平行沈線+複列の列点文の区画を配する。安行3b式であろう。

第448・449図は破片資料である。

1は堀之内1式である。2は安行3b式で、大波状口縁深鉢である。3は精製深鉢の胴部で、安行3a式であろう。4は安行3b式である。6・7は安行3aから3b式である。5は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式である。9は折り返し口縁、8・10は無文土器である。

第556号土壌出土土器 (第390図155、第449図)

155は安行式の粗製深鉢で、内湾口縁で、口縁外面に段を持って、段の下に押し引き文を巡らせる。また、胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を巡らせる。地文は斜位の条線である。後期末葉から晩期前葉の土器であろう。

第449図は破片資料である。

1は加曾利B2式である。3～10は安行式である。3～5は大波状口縁深鉢で、3は安行3b式、4・5は安行3aから3b式である。6は水平口縁深鉢、7・8は瓢形深鉢でいずれも安行1式である。9は台付き鉢の脚台、10は胴部中段が張る鉢で安行3aから3b式である。2は綾織文を施文する大洞系の土器である。11～13は晩期安行式の粗製深鉢、14は折り返し口縁、15は無文土器である。16は晩期の製塩土器である。

第557号土壌出土土器 (第449図)

1は安行1式、2は安行3aから3b式である。3・4は安行式の砲弾形深鉢である。5・6は安行式の粗製深鉢で、5は安行1式であろう。7は安行3b式の台付き鉢、8は無文土器である。

第558号土壌出土土器 (第450図)

1～3は曾谷・高井東式である。4～9は安行式である。4は大波状口縁深鉢、8は精製深鉢胴部、9は台付き鉢でいずれも安行1式、6は安行2式である。10～16は安行式の粗製深鉢で、10は

安行1式、11・12も後期安行式であろう。

第561号土壌出土土器 (第390図156～159、第450～453図)

156は安行1式の砲弾形深鉢である。内湾口縁で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、2段の縦瘤を配する。

157は安行式の粗製土器である。内湾口縁で、口唇断面肥厚して、外面に段を持つ。段の下に複列の押し引き文を巡らせ、胴部との境に沈線を巡らせる。胴上半部には平行沈線で斜行文や弧線文を描くものとみられる。晩期安行式に伴う土器であろう。158は斜行沈線を地文とする深鉢で、安行式である。

159は無文の深鉢で、底径ごく小さく、周縁に段を持つ。

第450～453図は破片資料である。

1は称名寺式、2・4は堀之内1式、3は堀之内2式である。5は加曾利B1式の粗製土器、6は遠部第四類で加曾利B2式である。7～10は曾谷・高井東式である。

11～54は安行式である。11～21は大波状口縁深鉢で11～15は安行1式、16～18は安行2式、19～21は安行3aから3b式である。22～36は水平口縁深鉢で、22・23・30は安行1式、24～26・35は安行2から3a式、27～29は安行3aから3b式である。37～41は砲弾形深鉢である。

42～45はこれらの精製深鉢の胴部である。43は安行2式、44は曾谷から安行1式で瓢形深鉢である。46は安行3c式である。47～53は台付き鉢ないし浅鉢であろう。47・48は安行2式、49～52は安行3aから3b式、53は安行3bから3c式である。54は安行2式の注口土器である。

55～101は安行式の粗製深鉢である。55～66・75～79等は後期安行式、83～101等は晩期安行式であろう。102～107は無文土器である。

第562号土壌出土土器 (第453図)

1は安行3a式の大波状口縁深鉢である。

第564号土壌出土土器 (第391図160・161、第453・454図)

160は無文の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、頸部はくびれて、口縁は短く外反する。口端上の数箇所に棒状工具先端による押圧列を配するものとみられる。

161は浅鉢で、扁平なボウル状の鉢で、水平口縁上にB突起を巡らせる。口縁直下に楕円形の区画文を描いて、内部に「の」の字状の単位文を配する。胴部中段には帯縄文を巡らせ、上下に同様の単位文を描く。前浦式の影響下にある土器であろう。

第453・454図は破片資料である。

1は早期末から前期初頭の土器で、0段多条の羽状縄文である。2は諸磯a式である。3は加曾利EⅣ式である。

4・5は堀之内1式、6は加曾利B1式、7～9は加曾利B2式、10は加曾利B3式である。11・12は加曾利B2式の粗製深鉢であろう。

13は安行3b式、14～17は安行3c式、18は安行3d式である。19～22は異系統の土器である。19は天神原式、20は前浦式である。21は直線化した羊歯状文、22は雲形文で大洞C1式、24は大洞C2式か。25～33は無文土器である。

第565号土壌出土土器 (第391図162・163、第454図)

162は水平口縁の深鉢で、胴部中段にくびれを持って、口縁は緩やかに外反して、口唇断面肥厚する。口端上に2個一対の小突起を配する。胴上半部に文様帯を持って、鋸歯文と蛇行沈線文を交互配置する。胴部中段には帯縄文の区画を持ち、胴下半部には斜行沈線を施文する。安行2式であろう。

163は安行式の粗製深鉢で、内湾口縁で、口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に刻み隆帯の区画を巡らせ、文様帯を持って、平行沈線の弧線文を対向させる。地文は斜位の条線である。後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

第454図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は加曾利B3式の浅鉢である。8は加曾利B式の粗製土器であろう。3は安行2式、4は安行1式の砲弾形深鉢である。5～7は安行式の粗製深鉢である。

第567号土壌出土土器 (第392図164、第454・455図)

164は無文の深鉢で、水平口縁で口端は外削ぎ状、篋状工具の粗い調整痕を残している。

第454・455図は破片資料である。

1は堀之内1式、2～4・6・7は堀之内2式である。5は加曾利B1式、8～10は加曾利B2式である。11～14は加曾利B式の粗製土器であろう。15～17は安行3aから3b式、18～20・24は安行3c式である。

21は天神原式、22は大洞C2式、23は大洞C1式である。25～28は無文土器である。

第568号土壌出土土器 (第392図165、第455図)

165は無文の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、頸部屈曲して、口縁は直線的に開く。口縁外面に篋状工具の粗い調整痕を残している。

第455図は破片資料である。

1は堀之内式、2～4は安行3c式である。

第568・569号土壌出土土器 (第392図166・167、第455図)

166は台付き鉢で、胴部は内湾しつつ単調に開き、口端が外屈する。水平口縁で口端上に沈線を巡らせ、2個一対の小突起を配する。胴上半部には対向三叉文を中心に集合沈線文を描き、文様帯下端を1条の沈線で区画して連続弧線文を巡らせる。安行3d式であろう。167は浅鉢で、胴部は内湾しつつ立ち上がり、口縁直立する。胴上半部に文様帯を持って、単純化した雲形文を描く。大洞C2式期の土器であろう。

第455図は破片資料である。

1は加曾利B1式の浅鉢、2は安行3aから3b式、3～6は安行3d式、7はこれに伴う浅鉢である。8・9は晩期安行式の粗製土器および無

文土器である。

第569号土壙出土土器 (第456図)

1は高井東式、2は前浦式、3～6は安行3cから3d式である。

第570号土壙出土土器 (第456図)

1は称名寺式、2は加曾利B2式である。3は加曾利B式の粗製土器である。4～8は安行式で、4は安行1式、8は安行3c式である。

第571号土壙出土土器 (第456図)

1～8は安行式である。1・2は安行3b式、3・4は安行3aから3b式、5～9は安行3c式である。10～12は折り返し口縁、13～16は無文土器である。

第573号土壙出土土器 (第392図168、第456・457図)

168は台付き鉢である。入り組み文を描いて間隙に三叉文を描き、楕円形の透かしを配する。安行3aから3b式であろう。

第456・457図は破片資料である。

1～6は安行式で、1・3は安行3a式、2は安行2から3a式、4・5は安行3aから3b式である。6は安行3c式である。7～9は晩期安行式の粗製深鉢、10は無文土器である。

第574号土壙出土土器 (第457図)

1は花積下層式、2は堀之内1式、3は安行1式、4は安行3aから3b式である。5は無文土器である。

第575号土壙出土土器 (第457図)

1は安行3b式、2は安行3aから3b式である。3は晩期安行式の粗製深鉢である。

第578号土壙出土土器 (第393図169・170、第457図)

169は深鉢である。地文縄文上に半截竹管状工具の多条沈線文を描く。堀之内1式である。

170は無文の底部で、裾が張り出し、上げ底状となる。堀之内式であろう。

第457図は破片資料で、1～3は堀之内1式、4は堀之内2式、5は加曾利B2式である。

第579号土壙出土土器 (第393図171～第394図173、

第457・458図)

171・172は安行式の粗製深鉢で、口縁内湾して口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に刻み隆帯の区画を持つ。地文は斜位の条線である。172は胴上半部に文様帯を持って、平行沈線の斜行文を描く。後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

173は斜位の条線を地文とする底部で、安行式である。

第457・458図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は堀之内2式、3・4は加曾利B2式、5は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式であろう。6～17は安行式である。6・7は波状口縁の深鉢で6は安行2式、7は安行3b式である。8・9は水平口縁深鉢で8が安行1式、9は安行3b式である。10は砲弾形深鉢で安行3aから3b式である。

11～14は精製深鉢の胴部で、13は後期安行式、他は安行3aから3b式である。15～17は台付き鉢で、15は安行2式、他は後期安行式であろう。18～27は安行式に伴う粗製深鉢、28は無文土器である。

第580号土壙出土土器 (第394図174・175、第458・459図)

174は砲弾形の深鉢で、口縁内湾して口端外屈し、1条の沈線を巡らせる。胴上半部に文様帯を持って、平行沈線の弧状文と横V字のモチーフを交互配置し、文様帯下端を平行沈線で区画する。安行3c式であろう。

175は無文の胴下半部から底部である。

第458・459図は破片資料である。

1は加曾利B1式で、2はこれに伴う粗製土器、3は加曾利B3式である。4は加曾利B式にともなう粗製土器である。5・6は高井東式である。

7～42は安行式である。7～9は大波状口縁深鉢で、9は安行3a式、他は安行1式である。10～18は帯縄文を巡らせる水平口縁深鉢で、10～12は安行1式、13は安行3aから3b式である。

19～24は砲弾形深鉢で、19は安行1式である。25～27は安行1式の瓢形深鉢で、27は曾谷式の可能性がある。30～35はこれら精製深鉢の胴部で、30～33は後期安行式、35は安行3b式である。

28・36・37は擦り消し縄文の深鉢で安行3aから3b式、29は安行3c式であろう。38～40は浅鉢で、38は安行3b式、他は安行3a式か。41は胴部中段に押圧隆帯を巡らせる鉢で、安行3b式であろう。42は注口土器で安行2式である。

43～58は安行式に伴う粗製深鉢である。59～64は無文土器である。65・66は晩期の製塩土器である。

第581号土壙出土土器（第394図176、第460図）

176は注口土器であろう。胴部中段が「く」の字に張り出し、口縁内湾して口唇断面著しく肥厚する。口端上には刻みを持つ突起と豚鼻突起を重ねさせる。口縁外面に段を持って押し引き文を巡らせ、円孔を穿つ。胴部は刻み隆帯で多段に分帯し、豚鼻突起を配する。底部付近は縄文帯となる。安行2式であろう。

第460図は破片資料である。

1は加曾利B式の粗製土器である。2は安行式の水平口縁深鉢、3は瓢形深鉢で安行1式であろう。4は安行2式の注口土器である。

5～7は安行式の粗製深鉢で、7は安行3b式、他は安行1式であろう。

第582号土壙出土土器（第460図）

1は安行2から3a式の粗製深鉢である。

第583号土壙出土土器（第460図）

1は波状口縁深鉢で、2はこれに伴う胴部、3は粗製土器で、いずれも安行1式であろう。

第584号土壙出土土器（第394図177～第395図183、第460・461図）

177は水平口縁の深鉢で、胴部中段が丸く張り出し、頸部屈曲して、口縁は直立する。無文の水平口縁で、胴上半部に文様帯を持ち、縦位の平行沈線で器面を分割して弧線文を描き、ネガ部分に

縄文を充填する。胴下半部には斜位の条線を施文する。安行2から3a式か。

178は瓢形の深鉢で、胴部中段にくびれを持って押し引き文の区画を巡らせ、上下に櫛状入り組み文と対向弧線文を配する。口縁内湾して外面に段を持ち、帯縄文と押し引き文の区画を巡らせる。安行1式であろう。

179は晩期安行式の粗製深鉢である。内湾口縁で、口縁外面と胴部中段に刻み隆帯の区画を巡らせ、胴上半部に文様帯を持って、平行沈線＋列点文の斜行文や弧線文を描いている。地文は斜位の条線である。

180は水平口縁の深鉢である。胴部は内湾しつつ立ち上がり、口縁直立する。口縁外面に平行沈線を巡らせる。晩期安行式に伴う土器であろう。

181は無文の深鉢で、口縁内湾する。

182は製塩土器である。内湾しつつ立ち上がる単調な器形で、口唇断面は指で摘み出したような先細りである。内外面に篋状工具の調整痕を残す。晩期前葉の土器であろう。

183はまばらな斜位の条線を施文する深鉢胴部で、晩期安行式であろう。

第460・461図は破片資料である。

1～17は安行式である。1～4は大波状口縁深鉢で、3は姥山系の安行3b式、他は安行3aから3b式である。5は安行3b式の水平口縁深鉢、6～9は砲弾形の深鉢で、6・7は安行3a式であろう。

10・11は擦り消し縄文の深鉢で安行3aから3b式である。12～17はこれら精製深鉢に伴う胴部である。14は後期安行式、16は安行3c式、他は安行3aから3b式である。

18～23は安行式に伴う粗製深鉢で、18は安行1式である。24は無文土器である。

第585号土壙出土土器（第461図）

1は堀之内1式、2は同時期の粗製土器である。6は加曾利B2式である。3は安行3b式、4は

安行3 a式、5・7は安行3 aから3 b式である。8は安行3 c式である。9～11は無文土器である。

第586号土壙出土土器（第395図184～186、第461図）

184・185は姥山系の大波状口縁深鉢である。

184は波底部に円文を中心としたX字状のモチーフを描き、波頂部に菱形の区画文を構成し、小入り組み文を重畳させる。安行3 b式であろう。

185は胴上半部に平行沈線で菱形の区画文を描き、平行沈線と列点文を重畳させる。胴部中段に帯縄文の区画を巡らせ、胴下半部には斜位の条線を施文する。安行3 b式であろう。

186は鉢である。丸底だが、周縁部が著しく摩耗しており、脚台か、高台状の部分が剥落している可能性もある。全面に縄文を施文している。

第461図は破片資料で、1は北陸の三十稲葉式、2は加曾利B 1式の粗製土器である。3は安行3 aから3 b式である。4～10は無文土器である。

第588号土壙出土土器（第396図187～193、第462・463図）

187は大波状口縁深鉢で、波底部に入り組み文を中心としたX字状のモチーフを描いて、波頂部に菱形の区画を構成する。安行3 b式であろう。

188は砲弾形の深鉢で、口縁外面に帯縄文で楕円形区画文を描き、交点に扁平な豚鼻突起を重畳させる。区画の下には三又文と連続弧線文を巡らせ、胴部中段に帯縄文の区画を持つ。安行3 b式であろう。

189～191は無文の深鉢である。

189は緩やかに内湾しつつ開き、口縁直立する。190は紡錘形の胴部中段である。191は直線的に開く胴下半部から底部である。

192・193は浅鉢である。192は丸底気味で、胴部内湾しつつ立ち上がり、頸部で屈曲して、口縁は直線的に開く。口端上には2個一単位の小突起を2つ一組で配する。口縁外面と胴部中段に帯縄文を巡らせる。安行3 b式であろう。

193は底部で、丸底に同心円文を描く。晩期安

行式に伴う土器であろう。

第462・463図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は加曾利B式の粗製土器である。3～18は安行式で、大半が安行3 b式である。3・4は大波状口縁深鉢、5～8は砲弾形の深鉢で、9・10はこれに伴う胴部、11～13は同時期の粗製深鉢である。14は注口土器、15～18は浅鉢である。

19は異系統の土器で大洞C 1式、20～27は無文土器である。28は晩期の製埴土器である。

第590号土壙出土土器（第397図194・195、第463図）

194は安行式に伴う粗製深鉢である。内湾口縁で、口唇断面肥厚する。口縁外面と胴部中段に刻み隆帯の区画を巡らせる。胴上半部に文様帯を持って、平行沈線による斜行文で三角形の区画を構成し、内部に弧線文を配する。地文条線を持たない。晩期安行式に伴うものである。

195は無文の深鉢底部である。

第463図は破片資料で、3は高井東式、1・2は安行3 a式である。4～6は安行式に伴う粗製深鉢で、4は後期、他は晩期の土器である。7～9は無文土器である。

第591号土壙出土土器（第463図）

1は堀之内2式である。

第592号土壙出土土器（第463図）

1は安行3 c式、2は無文土器である。

第593号土壙出土土器（第463図）

1は堀之内1式である。

第594号土壙出土土器（第463図）

1は安行3 aから3 b式、2は安行3 c式である。

第596号土壙出土土器（第463・464図）

1～4は堀之内1式の口縁部、7～11は称名寺から堀之内1式である。12は加曾利B 3式である。

第598号土壙出土土器（第464図）

1は堀之内式で、いわゆる狩猟土器の可能性がある。

第599号土壙出土土器 (第464図)

1は堀之内1式、2・3は安行3 aから3 b式、4は安行3 d式である。

第600号土壙出土土器 (第464図)

2は安行3 aから3 b式、1・3は安行式に伴う粗製深鉢である。

第601号土壙出土土器 (第397図196、第464・465図)

196は安行式に伴う粗製深鉢で、口縁直立して口唇断面肥厚し、口端上は平坦に整形している。口縁外面に押圧隆帯を巡らせ、胴部には斜位の条線を施文する。後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

第464・465図は破片資料である。

1は堀之内1式である。2～7は安行式である。2は大波状口縁深鉢で安行1式、3～6は砲弾形の深鉢で、3は安行1式、5は安行2式である。7は精製深鉢の胴部である。8～11は安行式の粗製深鉢で、後期安行式であろう。12・13は無文土器である。

第602号土壙出土土器 (第397図197・198、第465図)

197は条線地文の深鉢底部で、安行式である。

198は浅鉢で、直線的に開く盃形の器形で、口端上に2個一対の小突起を配する。口縁外面には帯縄文で楕円形の区画文を描き、胴部中段には帯縄文の区画を持って、胴下半部には横位の条線を施文する。安行2から3 a式であろう。

第465図は破片資料である。

1～3は後期安行式で、1は水平口縁深鉢、2は胴部で瓢形深鉢か。3は安行2式の付付き鉢である。4～8は安行式に伴う粗製深鉢で、4・6・7は後期安行式、5は晩期安行式、8は安行3 b式であろう。

第603号土壙出土土器 (第397図199～201、第465・466図)

199は安行式の粗製深鉢である。内湾口縁で、口唇断面肥厚して外面に段を持ち、段の下に押し引き文を巡らせる。胴部中段には平行沈線と押し

引き文の区画を巡らせる。地文は横位の条線である。後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

200・201は条線地文の底部で、安行式である。

201は浅鉢であろう。

第465・466図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は加曾利B 2式の粗製土器である。3は曾谷式である。4～19は安行式である。4・5は大波状口縁深鉢で、安行2式である。6・7・10は砲弾形の深鉢で、6・7は安行1式である。8・9・11は水平口縁の深鉢、12・13はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。

14～19は付付き鉢で、18が安行2式、他は安行1式であろう。20～31は安行式の粗製深鉢で、20・21・23～28等は後期安行式か。32・33は無文土器である。

第604号土壙出土土器 (第397図202、第466図)

202は安行式の粗製深鉢である。胴部中段がやや張り出して、口縁直立し、口唇断面肥厚する。口縁外面と胴部中段に押圧隆帯の区画を持ち、縦位の隆帯で上下連繫する。地文は斜位の条線である。後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

第466図は破片資料である。

1は加曾利B 2式の粗製土器であろう。2～12は安行式である。2～4は水平口縁深鉢で2・3は安行1式。6は砲弾形深鉢で安行1式。7は瓢形深鉢で、安行1式であろう。

8～10は精製深鉢胴部で、9は安行2から3 a式である。5・11・12は付付き鉢で、5は安行2式、12は安行3 b式か。13～15は後期安行式の粗製深鉢である。

第605号土壙出土土器 (第466図)

1は安行式の砲弾形深鉢である。

第606号土壙出土土器 (第398図203、第467図)

203は浅鉢で、胴部には内湾しつつ単調に開き、口縁はやや外傾する。水平口縁上に台形の突起を配して、直下に縦線を配し、左右に帯縄文の区画を巡らせる。胴部には粗い条線を施文する。安行

1式であろう。

第467図は破片資料である。

1～7は安行式で、1は水平口縁深鉢、2～4は砲弾形深鉢で、2・3は安行1式である。5は後期安行式の精製深鉢胴部、6・7は台付き鉢で、6は安行2式、7も後期安行式で脚台部である。8～11は安行式の粗製深鉢で、9以外は後期の土器か。

第607号土壌出土土器 (第467・468図)

1は堀之内2式、2は加曾利B式の粗製土器である。3～16は安行式である。3～5・8・9は大波状口縁深鉢で、3が安行1式、9は安行2式、4・5・8は安行3a式である。6・7は砲弾形深鉢で、6は安行1式、7は安行2式である。

10～13は擦り消し文様の深鉢で、10は安行2から3a式、11～13は安行3b式である。14～16は台付き鉢で、14は安行3aから3b式、15・16は脚台部で後期安行式であろう。17は東北系の新地式である。18～31は安行式に伴う粗製深鉢である。18～21は後期安行式であろう。

第608号土壌出土土器 (第398図204、第468・469図)

204は浅鉢である。胴部内湾しつつ立ち上がり、頸部でS字に屈曲して口縁は直線的に開く。口縁外面に入り組み文を巡らせて縄文を施文し、胴部中段には帯縄文を巡らせる。安行3b式である。

第468・469図は破片資料である。

1～7は安行式である。1は大波状口縁深鉢で安行3b式、2～4は擦り消し文様の深鉢で、安行3aから3b式である。5～8は台付き鉢で、5は安行3b式、6～8は安行3aから3b式である。9は綾織文を施文する大洞系の土器である。10・11は折り返し口縁、12・13は無文土器である。

第609号土壌出土土器 (第469図)

1・2は無文土器である。

第610号土壌出土土器 (第469図)

1は堀之内1式、2・3は加曾利B2式、4は加曾利B式の粗製土器である。5は曾谷式である。

第611号土壌出土土器 (第398図205、第469図)

205は無文の深鉢底部である。

第469図は破片資料である。

1は諸磯a式である。2～8は称名寺式である。9・10は堀之内1式、11は堀之内式に伴う粗製土器である。12は加曾利B3から曾谷式の粗製土器であろう。

第612号土壌出土土器 (第469図)

1は安行3aから3b式、2・3は安行3c式である。4は曾谷式か。5は無文土器、6は晩期の製塩土器で口端丸みを帯びる。

第613号土壌出土土器 (第470図)

1は加曾利B2式、2は安行式の砲弾形深鉢、3は北関東系の天神原式である。4～6は晩期安行式に伴う粗製深鉢、7は無文土器である。

第614号土壌出土土器 (第398図206・207、第470図)

206は広口壺である。胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部は屈曲して口縁直立する。口端上の3箇所に刻み目文列を配する。口縁外面に縄文を施文し、胴部中段にも帯縄文の区画を持つ。胴上半部に文様帯を持ち、平行沈線・縄文の弧線文と斜行文を交互配置する。安行3b式か。

207は無文の皿である。

第470図は破片資料である。

1は安行3aから3b式、2・3は安行3c式である。4は直線化した半歯状文の大洞C1式であろう。5～8は折り返し口縁、9は無文土器の胴部である。

第615号土壌出土土器 (第398図208、第470図)

208は台付き鉢である。胴部は緩やかなS字を描いて開き、内外面にそれぞれ稜をなす。口縁は外反しつつ開く。口端内面に刻み目を巡らせるほかは無文で、器面は入念に研磨している。晩期安行式に伴う土器であろう。

第470図は破片資料である。

1は堀之内2式、3は加曾利B2式、2は加曾利B式の粗製土器である。4・5は外反口縁で安

行3 aから3 b式、6・7は安行3 b式である。8～10は安行3 c式である。11は大洞C1式であろう。12は晩期安行式の粗製深鉢、13・14は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。

第616号土壙出土土器（第398図209・210、第471図）

209は深鉢ないし壺であろう。胴上半部に集合沈線でU字文を描いて間隙に列点文を充填し、文様帯下端を平行沈線＋複列の列点文で区画して、接点に押圧を持つ円形貼り付け文を配する。区画の下には連続弧線文を巡らせる。安行3 cから3 d式である。

210は五角形の浅鉢ないし皿である。5単位波状口縁で、波頂部と波底部に内文を持つ小突起を配し、口唇内面に沈線を巡らせる。胴部に三角形の区画文を描いて「の」の字状の単位文を配する。前浦式であろう。

第471図は破片資料である。

1は堀之内1式である。2・3は安行3 aから3 b式、4・5は安行3 b式である。6は綾線文を施文する大洞系の土器、7は後期前葉の粗製土器か。8・9は折り返し口縁、10～14は無文土器である。

第617号土壙出土土器（第471図）

1・2は無文土器である。

第620号土壙出土土器（第398図211、第471図）

211は無文の底部で、浅鉢であろう。裾が三角形に張り出し、胴部は強く外反する。

第471図は破片資料で、1～4は堀之内1式である。5・6は堀之内2式、7は曾谷式であろう。

第622号土壙出土土器（第471・472図）

1は安行3 c式、2・3は北関東系の天神原式である。4～7は折り返し口縁の深鉢、8～10は無文土器である。

第623号土壙出土土器（第472図）

2は折り返し口縁、1・3は無文土器である。

第624号土壙出土土器（第398図212～215、第472図）

212は水平口縁の鉢である。緩やかに内湾しつ

つ立ち上がり、口端は軽微に内屈する。口端上に刻みを巡らせ、口縁外面に1条の沈線を巡らせる。晩期安行式に伴う土器であろう。

213は台付き鉢で、胴部は内湾しつつ立ち上がり、頸部屈曲して口縁は外反する。口端上に小突起を配し、口縁外面に平行沈線の弧線文を巡らせて列点文を充填する。胴部中段には平行沈線＋列点文の区画を巡らせる。安行3 c式である。

214は浅鉢で、胴部は内湾しつつ立ち上がり、口端外屈する。水平口縁上に三叉の小突起を配し、口縁外面に1条の沈線を巡らせる。晩期安行式に伴う土器であろう。

215は無文の底部で、丸底の浅鉢とみられる。

第472図は破片資料である。

1は加曾利B1式、2・3は安行3 aから3 b式である。4・5は安行式に伴う粗製土器である。6～8は無文土器、9は晩期の製塩土器である。

第625号土壙出土土器（第472図）

1は加曾利EⅢ式、2は堀之内式、3は曾谷式である。4は安行3 c式である。5・6は無文土器である。

第628号土壙出土土器（第472・473図）

1・2は堀之内1式である。3・4は称名寺式で、時期が下る可能性もある。5は堀之内2式、6～8は堀之内式の粗製土器であろう。9は安行3 b式の大波状口縁深鉢、10は安行2式の砲弾形深鉢、11は外反口縁で安行3 aから3 b式である。12・13は安行式に伴う粗製深鉢である。

第629号土壙出土土器（第399図216・217、第473図）

216は堀之内1式の精製深鉢である。胴部中段が張り出して、頸部でくびれ、口縁外反する。口唇断面肥厚して、内外に稜を形成する。水平口縁上に大小2種類の突起を、2単位ずつ対向して配置している。口縁は無文で、頸部に3本沈線の区画を巡らせて8の字状の貼り付け文を配する。胴部には3本沈線でJ字文を描き、やはり3本沈線の櫛状のモチーフで横位に連繫している。地文は櫛

歯状工具による短沈線である。

217は称名寺式の流れを汲む深鉢胴部で、粗雑な「J」字文と縦位の集合沈線文を描く。堀之内1式期の土器であろう。

第473図は破片資料である。

1～10は堀之内1式で、大半が称名寺系の土器である。11は加曾利B2式、12は堀之内式に伴う粗製土器であろう。

第630号土壌出土土器（第399図218～第400図224、第474図）

218は折り返し口縁の深鉢である。胴部中段に最大径を持ち、口縁内湾する扁平な折り返し口縁で、口唇断面は先細りである。晩期安行式に伴う土器であろう。

219は無文の深鉢胴部で、胴上半部が丸く張り出し、頸部はくびれている。

220は無文の鉢である。丸底気味で、胴部から口縁にかけて内湾しつつ単調に開く。

221は台付き鉢であろう。胴上半部に沈線を巡らせた下に「の」の字状の単位文と短沈線を交互配置し、間に縄文を施文する。安行3bから3c式か。

222は浅鉢である。丸底で、胴部は直線的に立ち上がって口縁わずかに外反する。口縁外面にステッキ状の沈線文を巡らせて頸部を沈線で区画し、胴下半部に平行沈線文を巡らせる。安行3bから3c式であろう。

223は無文の浅鉢である。丸底で、胴部は内湾しつつ立ち上がり、口縁は外傾して内面に稜を持つ。

224は注口土器である。底径広く、胴部中段が「く」の字に張り出す。口端は外屈して上面平坦となり、4単位の中割れの貼り付け文を挟んで対向三又文を巡らせる。胴部中段には等間隔の押圧を持つ刻み隆帯を巡らせて注口を配し、胴上半部には楕円形の区画文、胴下半部には帯縄文を巡らせている。安行3b式か。

第474図は破片資料である。

1～10は安行式で、1～4は安行3b式、5～10は安行3c式である。11は大洞C1式、12～14は折り返し口縁、15・16は無文土器である。

第631号土壌出土土器（第400図225～228、第474・475図）

225・226は加曾利B1式にともなう粗製深鉢であろう。

225は水平口縁で、口縁内面に沈線を巡らせ、口縁以下全体に縄文を施文する。

226は3単位の緩やかな波状口縁で、外面に押圧隆帯、内面に沈線を巡らせる。隆帯から下、胴部中段付近まで縄文を施文して、以下無文となり縦位の研磨を施している。

227・228は無文の底部である。

第474・475図は破片資料である。

1～7は堀之内2式である。8～15は加曾利B式に伴う粗製土器である。17は安行3aから3b式、18～20は安行式に伴う粗製深鉢である。

第632号土壌出土土器（第401図229～232、第475図）

229は安行1式の瓢形深鉢である。口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせ、胴上半部に櫛状入り組み文を描くものとみられる。

230は安行式の粗製深鉢で、口縁内湾して外面に段を持ち、段上に押し引き文を巡らせる。胴部中段には平行沈線文+押し引き文の区画を巡らせる。胴上半部に文様帯を持って、平行沈線による弧線文と斜行文を交互配置して縄文を充填する。安行3b式であろう。

231は無文の深鉢で、胴部から口縁にかけて単調に内湾しつつ立ち上がる。

232は水平口縁の浅鉢で、胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾する。口縁外面に平行沈線を巡らせ、胴上半部に縄文帯を持って、胴下半部は無文である。加曾利B3式であろう。

第475図は破片資料である。

1・2は加曾利B式に伴う粗製土器で、1は遠

部第三類で加曾利B 2式、2は遠部第一類で加曾利B 3から曾谷式期の土器である。

3～13は安行式である。3～5は波状口縁の深鉢で、3は安行1式、4は安行3 b式である。6～11は帯縄文の区画を持つ水平口縁深鉢で、6～10は安行1式である。12は安行3 a式、13は安行3 c式である。

14～16は安行式に伴う粗製深鉢で、14・15は安行1式、16は安行3 bから3 c式であろう。17～19は晩期安行式に伴う土器である。

第633号土壙出土土器 (第401図233、第475・476図)

233は地文縄文の深鉢で、安行式の精製土器であろう。

第475・476図は破片資料である。

1は諸磯b式、2は高井東式である。

3～12は安行式である。3～6は水平口縁深鉢で、3は安行1式である。7は砲弾形深鉢、8は瓢形深鉢で、いずれも安行1式である。9はこれらの精製深鉢に伴う胴部である。10は安行3 b式の大波状口縁深鉢である。11は安行3 b式の鉢、12は安行3 d式期の土器であろう。13は東北系の浅鉢で、大洞C 2式か。14は安行3 aから3 b式の台付き鉢脚台部である。

15・16は曾谷から安行1式の粗製深鉢、17は曾谷式か。19～21は無文土器である。

第634号土壙出土土器 (第476図)

1は安行3 aから3 b式、2は後期安行式の粗製深鉢である。

第635号土壙出土土器 (第476図)

1は曾谷式である。

第636号土壙出土土器 (第476図)

1は堀之内2式、2・3は安行3 c式である。

第637号土壙出土土器 (第476図)

1は晩期安行式の粗製深鉢である。

第638号土壙出土土器 (第401図234～第402図237、第476図)

234は砲弾形の深鉢で、胴部中段に最大径を持

ち、口縁は直立する。口縁外面と胴部中段に平行沈線+複列の列点文の区画を巡らせる。胴上半部に文様帯を持ち、弧線文と斜行文を組み合わせた文様を描いて列点文を充填する。安行3 c式である。235は無文の深鉢である。

236は浅鉢である。丸底で、胴下半部に帯縄文を巡らせる。安行3 aから3 b式であろう。

237は小型の壺である。胴部は中段にくびれを持つ瓢形で、口縁は短く外反する。上下二段の文様帯を持ち、粗雑な入り組み三叉文を描いて、上下を沈線で区画する。安行3 b式であろう。

第476図は破片資料である。

1は安行3 b式、2は安行3 c式である。3は大洞B C式、4は大洞C 1式、5は大洞C 2式である。6は晩期安行式の粗製深鉢、7・8は無文土器である。

第639号土壙出土土器 (第477図)

1・2は安行式の水平口縁深鉢、3は安行3 c式で台付き鉢である。4は晩期安行式の粗製深鉢である。

第641号土壙出土土器 (第477図)

1は加曾利B 2式、2はこれに伴う粗製深鉢である。

第642号土壙出土土器 (第477図)

1は称名寺式、2は安行1式である。

第643号土壙出土土器 (第477図)

1・2は加曾利B 2式、3は加曾利B 1式である。4は曾谷式、5は加曾利B 3から曾谷式期の粗製土器であろう。6～8は加曾利B式の粗製土器、9は安行3 a式である。

第644号土壙出土土器 (第477図)

1は安行3 c式である。

第646号土壙出土土器 (第477図)

1は加曾利B式の粗製土器、2は安行式の精製深鉢胴部、3は縄文のみの胴部で後期から晩期の土器である。

第647号土壙出土土器 (第402図238、第477・478図)

238は深鉢で、胴部中段に3本沈線の同心円文を描き、2～3本の沈線で左右連繋する。堀之内1式である。

第477・478図は破片資料で、1は諸磯b式である。2～12は堀之内1式で、6～11は称名寺系の土器である。13は堀之内式の粗製土器である。

第648号土器出土土器 (第402図239、第478図)

239は小型の浅鉢である。丸底で、胴部は直立し、口縁外反する。胴部中段に無文帯を持ち、上下に平行沈線の区画を巡らせて、内部に小入り組み文を充填する。口縁外面と底部に縄文を施文する。安行3aから3b式であろう。

第478図は破片資料である。

1は安行3b式の砲弾形深鉢である。

第649号土器出土土器 (第478図)

1は堀之内1式、2は加曾利B2式である。

第650号土器出土土器 (第478図)

1～3は加曾利B2式、4～6は晩期安行式に伴う粗製深鉢である。7・8は無文土器である。

第651号土器出土土器 (第478図)

1～4は加曾利B2式で、3は遠部第四類、4は遠部第一類である。5は加曾利B3式の浅鉢である。

第652号土器出土土器 (第478図)

1は安行式の精製深鉢胴部、2は加曾利B式の粗製土器である。

第653号土器出土土器 (第478図)

1は堀之内2式である。2は安行3aから3b式、3は晩期安行式の粗製深鉢、4は無文土器である。

第654号土器出土土器 (第478図)

1は加曾利EIV式、2は遠部第四類で加曾利B2、3は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式、4は安行式の粗製深鉢である。

第655号土器出土土器 (第402図240、第479図)

240は無文の深鉢である。底部はやや裾が張り出し、胴部は外反しつつ立ち上がる。堀之内式の

精製土器であろう。

第479図は破片資料である。

1・2・7は加曾利B3式、3は加曾利B2式の粗製土器、4も加曾利B式の粗製土器である。5は安行3aから3b式で砲弾形深鉢、8・9は安行式の粗製深鉢である。

第658号土器出土土器 (第479図)

1は称名寺から堀之内1式、2は堀之内式の粗製土器、3は加曾利B1式である。4～8は加曾利B2式で、6・7は遠部第二類、8は遠部第四類である。

第660号土器出土土器 (第479図)

1は加曾利B2式である。2は水平口縁深鉢、3は台付き鉢、4は精製深鉢胴部でいずれも安行1式である。5はこれに伴う粗製土器であろう。

第661号土器出土土器 (第402図241、第479図)

241は条線地文の深鉢胴部で、安行式である。

第479図は破片資料である。

1は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式、2は遠部第三類で加曾利B2式であろう。3～11は安行式である。3は安行1式の大波状口縁深鉢、4～6は水平口縁深鉢で、4は安行1式である。

7は瓢形深鉢、11は台付き鉢でいずれも安行1式、8は後期安行式の精製深鉢胴部である。9は擦り消し縄文の深鉢胴部、10は注口土器でいずれも安行2式である。12～15は安行式の粗製深鉢である。

第662号土器出土土器 (第480図)

1は加曾利B3から曾谷式の粗製土器である。2は大波状口縁深鉢、3は水平口縁深鉢、4は瓢形深鉢で、いずれも安行1式、5～7は同時期の粗製深鉢であろう。

第663号土器出土土器 (第402図242・243、第480図)

242は安行式の粗製深鉢で、胴部中段にくびれを持ち、口縁はやや外傾して、口唇断面肥厚する。口縁外面と胴部中段に押し引き文を巡らせる。地文は縦位の条線で、上下一続きに施文している。

安行1式であろう。

243は浅鉢ないし台付き鉢である。胴部から口縁まで直線的に開く盃形で、口縁外面と胴上半部に帯縄文を巡らせる。安行1式であろう。

第480図は破片資料で、1・2は安行1式の瓢形深鉢、3～10は同時期の粗製深鉢であろう。

第665号土壙出土土器（第480図）

1・2は堀之内1式、3・4は晩期安行式の粗製深鉢である。

第666号土壙出土土器（第480図）

1は堀之内1式、2は堀之内2式、3は加曾利B2式であろう。4は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式、5は遠部第三類で加曾利B2式である。6・7は曾谷式、8は安行式の水平口縁深鉢である。9・10は晩期安行式の粗製深鉢、11は無文土器である。

第667号土壙出土土器（第402図244、第481図）

244は小型の深鉢である。無文で、底部は裾が張り、胴部は外反しつつ立ち上がる。堀之内式の精製深鉢であろう。

第481図は破片資料である。

1は浮島式、2は諸磯b式である。3～7は堀之内1式で、3・4は称名寺系の土器である。8・9は堀之内2式である。10・11は加曾利B式の粗製土器、12は深鉢底部で堀之内1式であろう。

第668号土壙出土土器（第481図）

1・2は加曾利B2式で、2は遠部第二類である。3は曾谷式、4は安行3a式である。

第669号土壙出土土器（第481図）

1は加曾利B1式の浅鉢、2は加曾利B式の粗製土器、3は曾谷式である。

第670号土壙出土土器（第481図）

1は堀之内1式、2は堀之内式の粗製土器である。

第673号土壙出土土器（第481図）

1・2は堀之内1式である。

第674号土壙出土土器（第402図245～第403図249、

第481図）

245は大波状口縁深鉢である。底部から口縁部まで内湾しつつ一本調子に立ち上がる。波頂部には扇形の突起をもって形骸化した豚鼻突起を配し、胴上半部は短沈線と縄文によって省略化した三角形区画文を表現する。安行3b式であろう。

246・247は広口壺である。246は胴部中段に最大径を持ち、頸部は屈曲して口縁は緩やかに外反する。口端上に小突起をもち、帯縄文で器面を多段に分帯して、胴上半部に豚鼻突起を配する。安行3aから3b式であろう。

247は胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部は屈曲して口縁は直線的に開く。胴部中段に貼り瘤を持ったものとみられるが失っている。貼り瘤同士を半円形の擦り消しモチーフで横位連繋し、胴上半部は紡錘文をはさんで対向三叉文を描き、縄文を充填する。口縁部と胴下半部には縄文を施文する。安行3b式であろう。

248は無文の深鉢で、底面に木葉裏を持つ。

249は浅鉢で、扁平なボウル状で、口端上に内面押圧をもつ突起を配する。突起の直下に玉抱き三叉文を描いて、沈線で横位連繋し、文様帯下端を沈線で区画する。胴部には縄文を施文する。安行3a式であろう。

第481図は破片資料である。

1は安行3b式で、胴部中段が張り出す鉢である。2・3は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。

第675号土壙出土土器（第403図250・251、第481・482図）

250は安行式の粗製深鉢である。内湾口縁で、口唇断面肥厚して外面に段を持つ。胴部には横位の条線を施文する。晩期安行式に伴う土器である。

251は折り返し口縁の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち口縁は強く内湾して、外面に軽微な段を持つ。晩期安行式に伴う土器である。

第481・482図は破片資料である。

1は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式であろう。2～4は曾谷・高井東式である。5～10は安行式で、5は安行1式の水平口縁深鉢、6・7は砲弾形深鉢で、6は安行1式である。8は外反口縁で安行3aから3b式、9・10は安行3b式で台付き鉢か。

11・12は晩期安行式の粗製深鉢である。14は縄文のみの破片で、晩期の土器である。13・15は無文土器である。

第676～678号土壌出土土器（第403図252、第482図）

252は水平口縁の深鉢で、頸部は外反し、口縁直下で「く」の字に屈曲して、口端は内屈する。口縁外面に縄文を施文して、1条の沈線を巡らせ、横長の小突起を配する。胴上半部には鋭利な工具による矢羽状沈線を施文する。曾谷式である。

第482図は破片資料である。

1は加曾利B2式、2・3は同時期の粗製土器で、2は遠部第一類である。4～11は曾谷・高井東式である。

12～16は安行式で、12・13は水平口縁深鉢、14は瓢形深鉢でいずれも安行1式である。15・16は精製深鉢胴部である。17・18は無文土器である。

第677号土壌出土土器（第483図）

1は無文土器である。

第678号土壌出土土器（第483図）

1は安行3a式の砲弾形深鉢である。

第679号土壌出土土器（第483図）

1は加曾利B1式の粗製深鉢である。2・3は曾谷式、4は安行3c式で焼山系の土器である。

第680号土壌出土土器（第483図）

1は曾谷から安行1式の粗製土器、2・3は安行3b式である。

第681号土壌出土土器（第483図）

1は後期安行式の粗製深鉢である。

第682号土壌出土土器（第403図253、第483図）

253は後期安行式の精製深鉢で、押し引き文＋沈線の区画を巡らせ、上段に横位の紡錘文、下段

に粗放な対向縦線を描いて縄文を施文する。

第483図は破片資料である。

1は堀之内2式、2は加曾利B3から曾谷式の粗製土器であろう。3～7は安行式で、3は大波状口縁深鉢、4は水平口縁深鉢、5は瓢形深鉢でいずれも安行1式である。6は精製深鉢胴部、7は台付き鉢で後期安行式である。8は粗製土器で後期安行式であろう。

第683号土壌出土土器（第403図254、第483図）

254は縦位の条線を施文する深鉢で、安行式である。

第483図は破片資料である。

1～6は後期安行式で、1は安行2式の大波状口縁深鉢、2は水平口縁深鉢、3は砲弾形深鉢、4は精製深鉢胴部でいずれも安行1式、5・6は台付き鉢である。7～9は後期安行式の粗製深鉢である。

第684号土壌出土土器（第484図）

1・2は堀之内1式、3は加曾利B2式である。4は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式であろう。5～9は安行1式である。5は大波状口縁深鉢、6は水平口縁深鉢、7は瓢形深鉢である。8・9は台付き鉢である。10・12は同時期の粗製土器であろう。

第685号土壌出土土器（第484図）

1は加曾利B3式、2は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式である。

第686号土壌出土土器（第484図）

1は加曾利B3から曾谷式の粗製土器、2は安行式の砲弾形深鉢である。3は精製深鉢胴部、4は台付き鉢で、いずれも後期安行式である。

第687号土壌出土土器（第403図255～第404図258、第484・485図）

255は安行1式の砲弾形深鉢である。口縁から胴上半部にかけて帯縄文の区画を重畳させ、3段の縦瘤を配する。胴中段以下には縦位の条線を施文する。

256~258は安行式に伴う粗製深鉢である。256・257は内湾口縁で、口唇断面肥厚し、口縁と胴部中段に押圧隆帯の区画を巡らせる。

256は区画隆帯の末端が鉤状に反転する。地文は縦位の条線である。

257は斜位の条線を地文とする。いずれも後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

258は口縁外傾し、口唇断面肥厚して、口端上面を平坦に整形している。口縁と胴部中段に押し引き文の区画を巡らせる。地文は斜位の条線である。安行1式であろう。

第484・485図は破片資料である。

1・2は加曾利EⅣ式、3は堀之内1式、4~6は加曾利B1式の粗製深鉢である。

7~24は安行式である。7~11は大波状口縁深鉢で、11は安行2式で他は安行1式、12~15は水平口縁深鉢で、12~14は安行1式。16・17は砲弾形深鉢で、16は安行1式、17は安行2式である。

18・20は精製深鉢胴部で18は安行1式、20は安行2式である。19・21~24は台付き鉢で、19・21・22は安行1式、23・24は後期安行式の脚台部である。

28~52は安行式の粗製深鉢である。52は安行3b式で、他はほとんどが後期安行式であろう。28~36は安行1式である。

第688号土壙出土土器 (第486図)

1は安行1式の水平口縁深鉢、2はこれに伴う粗製土器であろう。

第689号土壙出土土器 (第486図)

1は堀之内2式、2・3は堀之内式の粗製土器である。4は安行3cから3d式である。

第690号土壙出土土器 (第486図)

1は諸磯b式、2・3は堀之内2式である。4は安行1式の粗製深鉢であろう。5・6は安行3a式の大波状口縁深鉢である。

第691号土壙出土土器 (第486図)

1・2は加曾利EⅣ式、3は堀之内1式である。

4は加曾利B2式の浅鉢、5は加曾利B式の粗製土器である。6は安行3b式、7は安行3c式、8は安行3d式である。

第692号土壙出土土器 (第486図)

1は堀之内2式、2は遠部第一類で曾谷から安行1式である。3は晩期安行式の粗製深鉢、4は無文土器である。

第693号土壙出土土器 (第404図259、第486図)

259は水平口縁の深鉢である。胴下半部が彫れ、胴部中段に緩いぐびれを持って、口縁はやや外傾する。1箇所に内文を持つ大型の橋梁突起を配する。胴部は櫛歯状工具で縦位の波状文を描いた後に研磨を加え、文様を半ば擦り消している。称名寺から堀之内1式であろう。

第486図は破片資料で、堀之内1式である。

第694号土壙出土土器 (第487図)

1は称名寺式、2は堀之内1式、3は安行3a式である。

第695号土壙出土土器 (第487図)

1は堀之内1式である。

第697号土壙出土土器 (第487図)

1は諸磯b式、2~8は堀之内1式、9~14は堀之内2式である。

第698号土壙出土土器 (第487図)

1は堀之内1式、2は堀之内式の粗製土器である。3は安行1式で砲弾形深鉢である。

第699号土壙出土土器 (第404図260、第487図)

260は小型の浅鉢である。胴上半部が張り、口縁直立する。口唇外面に眼鏡状隆帯を巡らせ、胴部中段に3本沈線の区画を巡らせて、胴下半部には撚糸文を施文する。大洞C2式か。

第487図は破片資料で、安行3cから3d式である。

第701号土壙出土土器 (第404図261・262、第487図)

261は小型の鉢である。胴部中段に最大径を持つ樽形で頸部がぐびれて口縁外反する。水平口縁上に二又の山形突起を配する。胴上半部に文様帯

を持って、平行沈線の弧線文を上下に巡らせ、列点文を充填している。安行3 c 式である。

262は浅鉢であろう。底径広く、胴部は内湾しつつ立ち上がる。胴部中段に縄文を施文する。晚期安行式であろう。

第487図は破片資料である。

1は加曾利B式の粗製土器、2は安行3 b 式、3～5は安行3 c 式である。

第702号土壌出土土器（第487図）

1は加曾利B式、2は安行3 b 式の粗製深鉢である。

第703号土壌出土土器（第488図）

1～16・18～21は堀之内1式、24～34は堀之内2式、22・23・35は堀之内式の粗製土器である。36は加曾利B 3式、17は曾谷式であろう。

第704号土壌出土土器（第489図）

1・2は諸磯b 式である。3は加曾利B 1式の浅鉢、4・5は同時期の粗製深鉢である。7は遠部第四類で加曾利B 2式、6・8は加曾利B 式の粗製深鉢である。

10は大洞C 2式か。11は晚期安行式の折り返し口縁深鉢である。12は無文の底部で、加曾利B 式か。

第705号土壌出土土器（第489図）

1・2は加曾利E IV 式で、2は両耳壺である。3～5は堀之内1式、6は堀之内式の粗製土器である。

第706号土壌出土土器（第489図）

1は堀之内1式である。

第707号土壌出土土器（第489図）

1・2は堀之内1式、4は堀之内2式、3は堀之内式の粗製土器である。5は無文土器である。

第711号土壌出土土器（第489図）

1は加曾利B 1式、2は加曾利B 式、3は晚期安行式の粗製土器である。

第713号土壌出土土器（第489・490図）

1は堀之内2式、2は安行3 c 式である。3は

注口土器ないし壺で、後期の土器であろう。4～6は安行式の粗製深鉢である。4は後期安行式、5は晚期安行式、6は安行3 b 式であろう。

第714号土壌出土土器（第404図263・264、第490・491図）

263は無文の深鉢で、内湾口縁で、口唇断面肥厚する。

264は条線地文の深鉢で、安行式である。

第490・491図は破片資料である。

1～6は加曾利B 式である。1は加曾利B 1式で波状口縁深鉢、2は加曾利B 2式である。4・5は遠部第一類で加曾利B 3から曾谷式、6は遠部第三類で加曾利B 2式、3は加曾利B 式の粗製土器である。7・8は曾谷・高井東式である。

9～21は安行式である。9～11は大波状口縁深鉢で安行1式である。12～14は水平口縁深鉢で12・13は安行1式、15～17は安行1式の瓢形深鉢である。

18は砲弾形深鉢、19は瓢形深鉢の胴部で、いずれも安行1式である。20・21は付付き鉢で、やはり安行1式であろう。22～26は後期安行式の粗製深鉢である。27は無文土器である。

第716号土壌出土土器（第405図265、第491図）

265は深鉢で、山形波状口縁の波頂部が二又に分かれるものとみられる。胴上半部に文様帯を持ち、大柄の波頭文を描いている。文様帯下端を平行沈線で区画する。安行3 c から3 d 式である。

第491図は破片資料である。

1は称名寺式、2～4は安行3 c 式である。

第718号土壌出土土器（第491・492図）

1は諸磯a 式、2は加曾利E IV 式の瓢形土器である。3～15は堀之内1式である。16～24は堀之内2式、25～28は堀之内式に伴う粗製土器であろう。

第719号土壌出土土器（第492図）

1・2は堀之内1式、3～5は堀之内2式である。6は加曾利B 3から曾谷式の瓢形深鉢か。7は安

行3 a式である。

第720号土壙出土土器 (第492図)

1・2は堀之内1式である。

第722号土壙出土土器 (第492図)

1は堀之内1式、2は堀之内2式である。

第723号土壙出土土器 (第492図)

1は晩期安行式の粗製深鉢である。

第724号土壙出土土器 (第492図)

1は堀之内1式である。2は曾谷式の鉢であろうか。

第726号土壙出土土器 (第405図266・267、第492図)

266・267は浅鉢である。

266はボウル状の鉢で、水平口縁上の1箇所に内文を持つ突起を配して円孔を穿つ。胴上半部に平行沈線の区画を巡らせる。安行3 bから3 c式であろう。

267は平底で、胴下半部で屈曲して胴部中段は直立し、口縁は直線的に開く。口端上に対をなす小突起を配する。晩期安行式に伴う土器であろう。

第492図は破片資料で、細密沈線文の安行3 b式である。

第727号土壙出土土器 (第492図)

1・2は堀之内1式、3は安行1式である。

第730号土壙出土土器 (第492図)

1は堀之内1式である。2～7は安行式である。3・4は水平口縁深鉢、2・5は砲弾形深鉢でいずれも安行1式である。6・7は精製深鉢胴部で6は安行3 a式、7は後期安行式である。8・9は安行式の粗製深鉢、10は無文土器である。

第731号土壙出土土器 (第492図)

1は加曾利B 1式、2は曾谷式である。3～5は安行1式で、3・4は水平口縁深鉢、5は大波状口縁深鉢である。6は晩期安行式の粗製深鉢、7は無文土器である。

第732号土壙出土土器 (第405図268、第493図)

268は大波状口縁深鉢である。鋭角に立ち上がる山形波状口縁で、口縁外面に隆帯を巡らせ、波

頂部と波底部に円柱状の貼り瘤を配する。高井東式である。

第493図は破片資料である。

3は安行1式の水平口縁深鉢、他は後期安行式の粗製深鉢であろう。

第733号土壙出土土器 (第493図)

1は曾谷式である。

第734号土壙出土土器 (第405図269～第406図270、第493図)

269は水平口縁の深鉢で、胴部中段にくびれを持ち、口縁にかけて内湾しつつ立ち上がる。口縁外面に隆帯と沈線の区画を巡らせて、ねじり棒状の突起を配して貫通孔を穿つ。胴部に幅広の文様帯を持って、ネガ文のJ字文を描き、いくつかの単位文を配するものとみられる。称名寺式の流れを汲む土器だが、堀之内1式に下る土器であろう。

270は水平口縁の深鉢で、緩やかに内湾しつつ開く単調な器形で、口縁直立する。胴部には鋭利な工具で、縦に間延びした格子目文を描き、入念な研磨を施している。堀之内1式であろう。

第493図は破片資料で、いずれも堀之内1式である。

第735号土壙出土土器 (第493図)

1は加曾利B 1式、2～5は加曾利B 2式、6～8は加曾利B 2式の粗製深鉢であろう。9は曾谷式である。

10は安行1式、11は安行2式でいずれも砲弾形深鉢、12は無文土器である。

第737号土壙出土土器 (第493図)

1・2は安行2式の精製深鉢胴部である。

第738号土壙出土土器 (第406図271、第493図)

271は堀之内2式の小型精製深鉢で、3単位の波状口縁とみられ、波頂部に左右非対称の突起を配し、直下に鎖状の隆帯を垂下させて、左右に刻み隆帯を巡らせる。胴部には幅広の帯縄文を巡らせる。

第493図は破片資料で、1は堀之内2式、2は

同時期の粗製土器、3は加曾利B 2式であろう。

第741号土壙出土土器（第406図272～277、第493・494図）

272は砲弾形深鉢で、口縁外面に3段の帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する。胴部中段には沈線を巡らせ、以下に縦位の条線を施文するが、途中に平行沈線を巡らせて、沈線間の地文を擦り消している。安行1式である。

273・274は安行式の粗製深鉢である。

273は胴部中段に緩いくびれを持って口縁外反し、口唇断面肥厚して、口端は内屈する。全面に斜位の条線を施文し、胴部中段に平行沈線の区画を巡らせる。安行1式に伴う土器であろう。

274は口縁強く外反して口唇断面肥厚する。地文は横位の条線である。安行1式に伴う土器であろう。

275～277は底部で、安行式であろう。275は縄文、276は横位の条線を地文とし、277は無文である。

第493・494図は破片資料である。

1・2は堀之内2式、3は加曾利B 2式、4は加曾利B 3式である。5・6は遠部第四類で、加曾利B 2からB 3式である。7～10は曾谷・高井東式である。

11～20は安行式である。11は砲弾形深鉢で安行1式、12～14は水平口縁深鉢、15は浅鉢、20は台付き鉢でいずれも後期安行式、16～19は安行1式の瓢形深鉢で、19は曾谷式の可能性がある。21・22は後期安行式の粗製深鉢である。

第742号土壙出土土器（第406図278～第407図282、第494図）

278は安行1式の大波状口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を重畳させ、波頂部と波底部に多段の縦瘤を配する。胴部中段には縦位の条線を施文している。

279は縄文地文の底部で、安行式の精製深鉢に伴うものであろう。

280・281は安行式に伴う粗製深鉢である。胴下

半部に最大径を持ち、口縁は直立、口唇断面肥厚する。口縁と胴部中段に押圧隆帯を巡らせる。地文は縦位の条線である。後期末葉から晩期初頭の土器であろう。

282は地文条線の深鉢底部で、安行式である。

第494図は破片資料である。

1は大波状口縁深鉢、2は砲弾形深鉢で、いずれも安行1式である。3はこれに伴う精製深鉢胴部である。4～6は後期安行式の粗製深鉢である。

第743号土壙出土土器（第407図283～第408図285、第494・495図）

283は水平口縁の深鉢で、胴部から口縁まで内湾しつつ単調に開く。口縁外面に沈線を巡らせ、胴部に歯歯状工具の条線を、縦に伸びた格子目状に施文している。堀之内2式であろう。

284は鉢ないし注口土器で、胴部中段が丸く張り出して、口縁内湾する。水平口縁上に鱗状の突起を配し、外面に押圧を伴うボタン状突起を配して、左右に弧状の区画文を巡らせる。胴部中段には豚鼻突起を配して、紡錘文で左右連繫する。胴上半部には縦位の紡錘文を描いて縄文を施文する。安行3 b式であろう。

285は浅鉢で、胴上半部が「く」の字に張り出し、口縁内湾する。口縁外面に楕円形の区画文を巡らせ、縄文を充填する。区画の接点に鉤状の隆帯を配し、内面に一対の小突起を配する。胴部中段以下は無文である。加曾利B式か。

第494・495図は破片資料である。

1は称名寺式、2～11は堀之内1式である。12～19は称名寺から堀之内1式の胴部であろう。20は堀之内式の粗製土器、21は安行3 aから3 b式の浅鉢である。

第744号土壙出土土器（第408図286～第409図299、第496・497図）

286は深鉢である。胴上半部にU字状の沈線文を巡らせ、胴下半部は無文である。内面に輪積み痕を残している。称名寺式であろう。

287は大波状口縁深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて、波頂部と波底部に縦線を重畳させる。胴部中段には2段の帯縄文を巡らせて円形の貼り瘤を配し、押し引き文を巡らせる。胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を施文する。安行1式である。

288は水平口縁の深鉢であろう。頸部に緩いぐびれを持ち、口縁外反して、口唇断面肥厚する。口端に刻み目文を巡らせ、頸部には横位の条線を施文する。胴部との境に帯縄文を巡らせ、貼り瘤を配する。胴部は縦位の平行沈線で器面を分割し、弧線文を描いて、ネガ部分に縄文を施文する。安行1式である。

289・290は台付き鉢である。

289は胴下半部は盃形で、胴部中段はほぼ直立し、口縁にかけて強く外反する。口唇断面肥厚する。口端に刻み目文を巡らせ、頸部に縦位の条線を施文する。胴部中段には刻み隆帯を3段巡らせて対をなす貼り瘤を配し、胴下半部には横位の条線を施文する。安行1式である。

290は裾に沿って3段の帯縄文を巡らせる。上半部は無文である。後期安行式であろう。

291・292は安行式の粗製深鉢である。

291は胴部中段で屈曲して内湾しつつ立ち上がり、口縁はほぼ直立する。口縁外面と胴部中段に刻み目文を巡らせる。地文を持たず、器面に篋状工具の撫で調整を施し、光沢を持つ。安行1式か。

292は砲弾形の鉢で、口縁直立し、口唇断面肥厚する。口縁外面と胴部中段に刻み目文を巡らせ、胴上半部のみ斜位の条線を施文する。安行1式であろう。器面に篋状工具による粗い撫で調整を施し、胴下半部のみ横位の磨きを加えている。安行1式であろう。

293は無文の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して口唇断面肥厚する。

294は小型の深鉢である。胴部は単調に開いて、口縁内湾する。口縁直下に成形時の手づくぬ痕を

残している。後期から晩期の土器であろう。

295～299は深鉢底部である。いずれも安行式に伴うものであろう。298は縦位の条線を施文するが、他は無文である。

第496・497図は破片資料である。

1は加曾利B2式、2は加曾利B1式の粗製土器である。3～7は加曾利B式の粗製土器で、3は加曾利B2式、他は加曾利B3から曾谷式であろう。8は加曾利B2式の浅鉢である。9・10は曾谷・高井東式である。

11～29は後期安行式である。11・12は大波状口縁深鉢、13は水平口縁深鉢で、いずれも安行1式である。14～16は砲弾形深鉢で14は安行1式である。17は安行1式の瓢形深鉢である。

18～23は精製深鉢胴部で、19・20は安行1式である。24～26は台付き鉢で26は安行1式である。27～29は同一個体とみられる小型の浅鉢で、安行1式であろう。

30～40は後期安行式の粗製深鉢で、大半が安行1式であろう。

第745号土壌出土土器 (第409図300)

300は無文の深鉢底部である。底面に網代痕を持つが篋状工具で撫で消しており、特に中央は削り込まれてやや上げ底状となっている。底部の周縁が軽く張り出す。

第746号土壌出土土器 (第497図)

1～8・10は堀之内1式で、称名寺系の土器を多く含む。9は堀之内式の粗製土器である。

第750号土壌出土土器 (第497・498図)

1は浮島式、2は諸磯b式である。3は称名寺式、4は堀之内1式で称名寺系の土器か。5は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式、6は遠部第三類で加曾利B2式である。7・8は曾谷・高井東式である。

9～15は安行式である。9は大波状口縁深鉢、10は水平口縁深鉢、11は鉢でいずれも安行1式である。12は浅鉢、13は深鉢胴部で後期安行式、

14・15は安行3 c式であろう。

第752号土壙出土土器 (第498図)

5は堀之内1式、2は北陸系の三十稲葉式、3は堀之内式の粗製土器である。8は曾谷式の浅鉢であろう。9は晩期安行式の粗製深鉢である。

第754号土壙出土土器 (第498図)

1・2は加曾利EⅡ式、3は堀之内1式、4・5は堀之内2式、6は遠部第二類で加曾利B2式、7は安行2式で注口土器であろう。

第758号土壙出土土器 (第498図)

1は堀之内1式、2は安行3 aから3 b式である。

第762号土壙出土土器 (第498図)

1は諸磯a式である。2は0段多条の縄を用いた鋭角な羽状縄文で、早期末葉の土器であろう。

第763号土壙出土土器 (第410図301・302、第498・499図)

301は安行式の粗製深鉢である。口縁内湾して外面に段を持つ。段の下に1条の沈線を巡らせ、胴部中段にも平行沈線の区画を持つ。地文は斜位の条線である。晩期安行式に伴う土器か。

302は浅鉢である。底部から口縁まで軽微に内湾しつつ開く盃形で、口端は外削ぎ状で内面に突出する。口縁外面に平行沈線を巡らせる。晩期安行式に伴う土器であろう。

第498・499図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は堀之内2式である。3は加曾利B2式である。4は曾谷式の浅鉢か。

5～11は安行式である。5は安行2式の大波状口縁深鉢、6・7は安行1式の水平口縁深鉢である。8は砲弾形深鉢で、安行3 a式か。9は後期安行式の台付き鉢である。

10は安行3 a式の反外口縁深鉢、11は安行3 bから3 c式で砲弾形の深鉢ないし注口土器である。12～20は安行式に伴う粗製土器である。

第765号土壙出土土器 (第410図303)

303は深鉢である。紡錘形の胴部で、胴上半部

に矢羽状ないし斜位の沈線を施文したのちに入念な研磨を施している。曾谷・高井東式か。

第766号土壙出土土器 (第410図304、第499図)

304は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配し、胴上半部には半円形の擦り消し文様を描く。

第499図は破片資料である。

1は称名寺式、2は安行1式の水平口縁深鉢、3は後期安行式の精製深鉢胴部である。

第768号土壙出土土器 (第499図)

1は加曾利B3から曾谷式の浅鉢である。2・3は加曾利B式の粗製土器、4・5は曾谷・高井東式である。6は安行1式の大波状口縁深鉢、7は同時期の粗製深鉢である。

第769号土壙出土土器 (第410図305・306、第499図)

305は瓢形深鉢である。胴部中段に強いくびれを持ち、胴下半部には深く入り組む対向弧線文を描いて縄文を充填する。曾谷から安行1式であろう。

306は小型の深鉢底部である。上げ底で、底面に網代痕を残し、胴部はほぼ垂直に立ち上がる。堀之内から加曾利B式であろう。

第499図は破片資料である。

1は加曾利EⅣ式である。2～8は後期安行式である。2・3は水平口縁深鉢、4～6は瓢形深鉢で安行1式である。7・8は精製深鉢に伴う胴部である。9～13は安行1式の粗製深鉢であろう。

第770号土壙出土土器 (第500図)

1～5は堀之内1式である。

第771号土壙出土土器 (第500図)

1は堀之内1式である。

第772号土壙出土土器 (第500図)

1は大波状口縁深鉢、2は粗製深鉢でいずれも安行式である。

第774号土壙出土土器 (第410図307、第500図)

307は折り返し口縁の深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して、外面に緩い段を持

つ。晩期安行式に伴う土器であろう。

第500図は破片資料である。

1は加曾利B式の粗製土器、2・3は晩期安行式に伴う土器で、折り返し口縁の深鉢である。

第775号土壌出土土器（第410図308～310、第500図）

308は深鉢底部である。上げ底で、胴部は比較的緩やかに開く。胴下半部に縄文を施文し、底部周辺には横位の篋撫を施している。堀之内1式か。

309は台付き鉢で、胴部は内湾しつつ開き、口縁外屈する。水平口縁上に対をなす小突起を配する。胴上半部に入り組み三叉文を描いて縄文を施文し、口縁と胴下半部は縄文帯となる。安行3b式であろう。

310は壺である。平底で、胴部は球状に張る。頸部にくびれを持ち、口縁は短く外反する。胴上半部には横位の平行沈線を多段に巡らせ、列点文を施文する。口縁と胴下半部には縄文を施文する。安行3b式であろう。

第500図は破片資料である。

1～14は安行式である。1は安行3b式の大波状口縁深鉢、8～10は安行3c式で、8は北関東の天神原式か。11・12は安行3d式である。13・14は安行3cから3d式の胴部である。15・16は晩期安行式の粗製深鉢である。

17は大洞C2式で、注口土器ないし壺の肩部である。18・19は折り返し口縁の深鉢、20・21は無文土器、23は無文の底部である。22は晩期の製塩土器で、口端部は篋で切り落としたように水平になっている。

第776号土壌出土土器（第501図）

1は安行1式の水平口縁深鉢である。2は安行式の精製深鉢胴部、3は安行1式の粗製深鉢である。4は無文土器である。

第778号土壌出土土器（第501図）

2・3は堀之内1式である。4は加曾利B3式、5は加曾利B2式、6は遠部第一類で、加曾利B

3から曾谷式であろう。1・7・9は曾谷式、10は安行1式である。11～14は後期安行式の粗製土器である。

第781号土壌出土土器（第501図）

1・2は堀之内2式である。

第782号土壌出土土器（第501図）

1は堀之内1式、2～5は堀之内2式である。6は堀之内式、7は加曾利B式の粗製土器、8は無文土器である。

第783号土壌出土土器（第410図311・第411図312・313、第502～504図）

311は水平口縁の深鉢である。胴部中段が丸く張り出し、頸部屈曲して、口縁外反する。口端に刻み目を巡らせる。頸部に半裁竹管状工具の平行沈線文を巡らせ、胴部に粗い縄文を施文して、縦位の平行沈線文を垂下させる。堀之内1式か。

312は壺形土器である。胴部中段に最大径を持ち、頸部が「く」の字に屈曲して、口縁外反する。口唇断面は外削ぎ状である。肩部に断面三角形の隆帯を巡らせて、ここから口縁に4単位の橋梁状把手を配する。胴上半部から中段にかけて縄文を施文する。堀之内1式である。

313は水平口縁の深鉢である。胴下半部が丸く張り、胴部中段にくびれを持って、口縁やや外傾し、口唇断面肥厚する。胴上半部に文様帯を持って、横W字の沈線文と蛇行沈線文を交互配置して、縄文を充填する。胴部中段に帯縄文を巡らせ、胴下半部には斜位の条線を施文する。安行2式である。

第502～504図は破片資料である。

1は称名寺式、2～29は堀之内1式、30～38は堀之内2式である。39・40は遠部第一類で、39は加曾利B3から曾谷式、40は加曾利B2式である。41・42も加曾利B式の粗製土器であろう。

43は後期安行式、44は安行2式、45・46は安行3a式の水平口縁深鉢である。47は安行3aから3b式の浅鉢底部である。48～53は安行式の粗製

深鉢である。54は無文土器である。

第784号土壙出土土器（第412図314、第504図）

314は深鉢で、胴上半部が「く」の字に張り出し、頸部が屈曲して、口縁は短く外反する。口縁外面に粗い列点文を巡らせ、胴上半部は押圧を伴うボタン状貼り付け文を中心に平行沈線による菱形の区画を描く。文様帯の下端には扁平化した連続弧線文を巡らせる。胴下半部には縦位の粗い匏撫でを施す。天神原式である。

第504図は破片資料である。

1は無文土器である。2は無文の底部で、後期から晩期の土器である。

第785号土壙出土土器（第504図）

1は安行3b式である。

第786号土壙出土土器（第504図）

1は堀之内2式である。

第787号土壙出土土器（第412図315、第504図）

315は波状口縁の鉢である。平底で、胴部は球状に張り、頸部が屈曲して、口縁は内湾しつつ立ち上がる。4単位の山形波状口縁で、内文を持ち、波頂部に貫通孔を穿つ。外面に文様を持たず、器面を入念に研磨している。加曾利B1式であろう。

第504図は破片資料である。

1は堀之内2式、2は加曾利B1式である。3は加曾利B式の粗製土器であろう。

第795号土壙出土土器（第504図）

1は加曾利B2式である。

第797号土壙出土土器（第504図）

1は遠部第一類で加曾利B3から曾谷式、2は堀之内から加曾利B式の粗製土器である。

第798号土壙出土土器（第504図）

1・2は諸磯b式、3・4は加曾利B2式であろう。

第799号土壙出土土器（第504図）

1は称名寺式である。

第800号土壙出土土器（第504図）

1は諸磯b式、2・3は称名寺式である。

第801号土壙出土土器（第505図）

1は堀之内1式、3は安行3a式、2は無文土器である。

第802号土壙出土土器（第505図）

1は堀之内1式である。

第803号土壙出土土器（第505図）

1は加曾利B2式、2は安行1式の粗製深鉢である。

第807号土壙出土土器（第412図316、第505図）

316は浅鉢で、胴部から口縁まで内湾しつつ一本調子に立ち上がる。緩やかな波状口縁で、口縁内面に隆帯を巡らせ、内文を持つ。器面を入念に研磨している。加曾利B1式である。

第505図は破片資料で、加曾利B1式である。

第808号土壙出土土器（第505図）

1は加曾利B2式、2は加曾利B式の粗製土器である。3は安行3b式、4は晩期安行式の粗製深鉢である。5・6は無文土器である。

第809号土壙出土土器（第505図）

1は堀之内1式、2は堀之内式の粗製土器である。3・4は無文土器である。

第810号土壙出土土器（第505図）

1は称名寺式、2は加曾利B2式である。

第811号土壙出土土器（第505図）

1・2は加曾利EIV式、3は堀之内式の粗製土器である。4は折り返し口縁の深鉢で、無文土器である。

第812号土壙出土土器（第506図）

1は加曾利EIV式である。

第813号土壙出土土器（第506図）

1は加曾利EIV式、2は加曾利B1式、3は加曾利B2式である。

第816号土壙出土土器（第506図）

1～4は堀之内1式である。

第819号土壙出土土器（第412図317、第506図）

317は水平口縁の深鉢で、胴部から口縁まで直線的に立ち上がり、口唇断面肥厚して、外面に段

を持ち、2個一対の縦長の貼り付け文を配する。胴部には直線的な沈線文でJ字やV字のモチーフを描いている。称名寺式の流れを汲む土器だが、堀之内1式に時期が下る可能性がある。

第506図は破片資料である。

1・2は堀之内1式で、称名寺系の土器である。
3は安行1式の水平口縁深鉢である。

第820号土壙出土土器（第507図）

1～10は堀之内1式で、2～4・9・10は称名寺系の土器である。

第822号土壙出土土器（第507図）

1・2は堀之内1式である。

第823号土壙出土土器（第507図）

1・2は水平口縁深鉢、3は台付き鉢で、いず

れも後期安行式である。4は無文土器である。

第824号土壙出土土器（第507図）

1は安行式の粗製深鉢胴部である。

第827号土壙出土土器（第507図）

1は安行3aから3b式である。

第828号土壙出土土器（第507図）

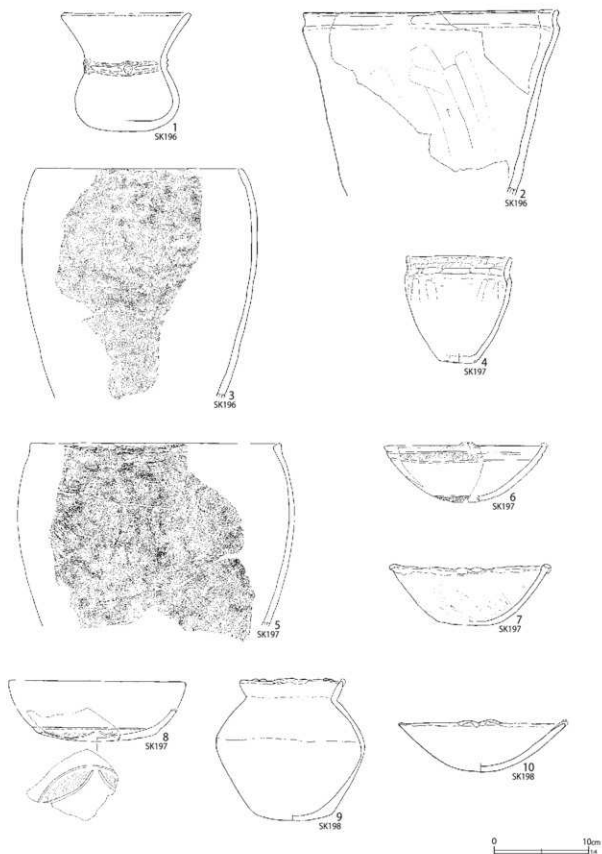
1は堀之内1式である。

第831号土壙出土土器（第507図）

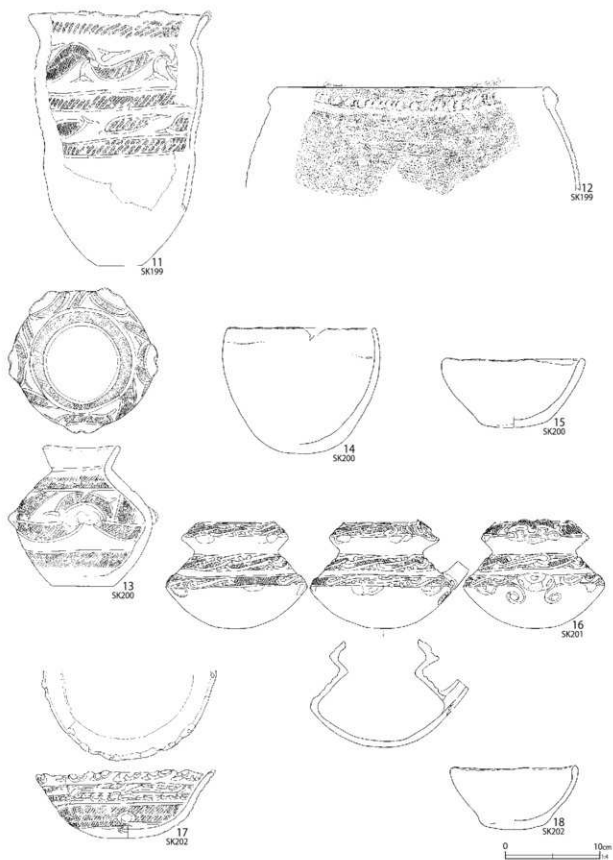
1は安行3c式である。

第835号土壙出土土器（第507図）

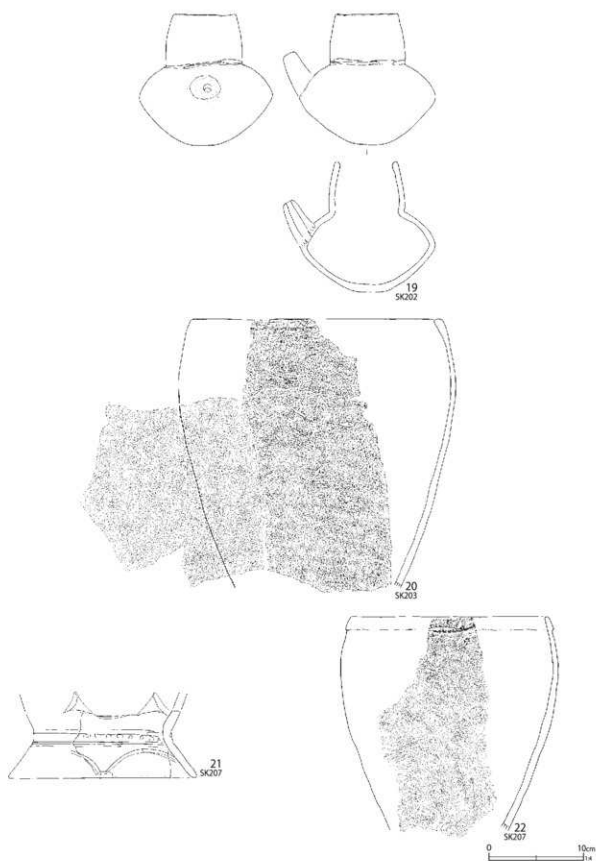
1は遠部第四類で加曾利B2式、2は加曾利B3式の浅鉢である。3は安行1式の大波状口縁深鉢、4・5は安行式の粗製深鉢である。



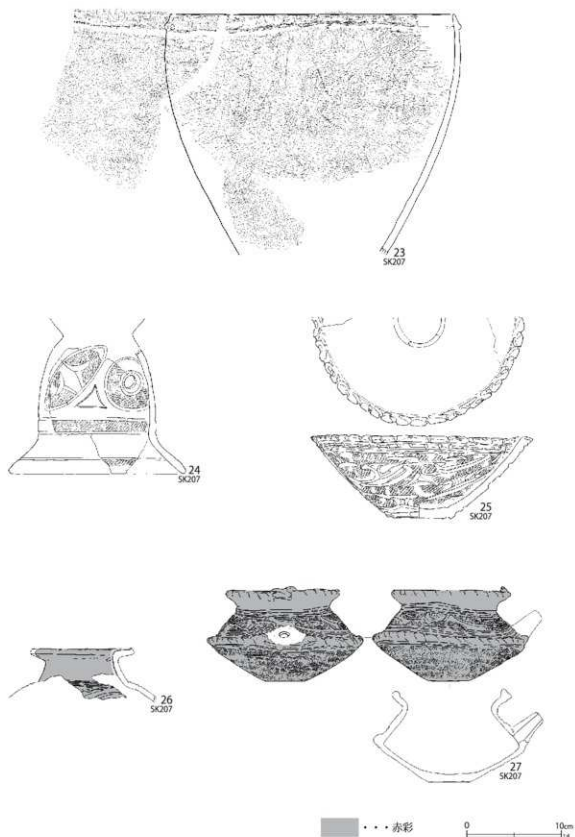
第368図 土城出土土器 (1)



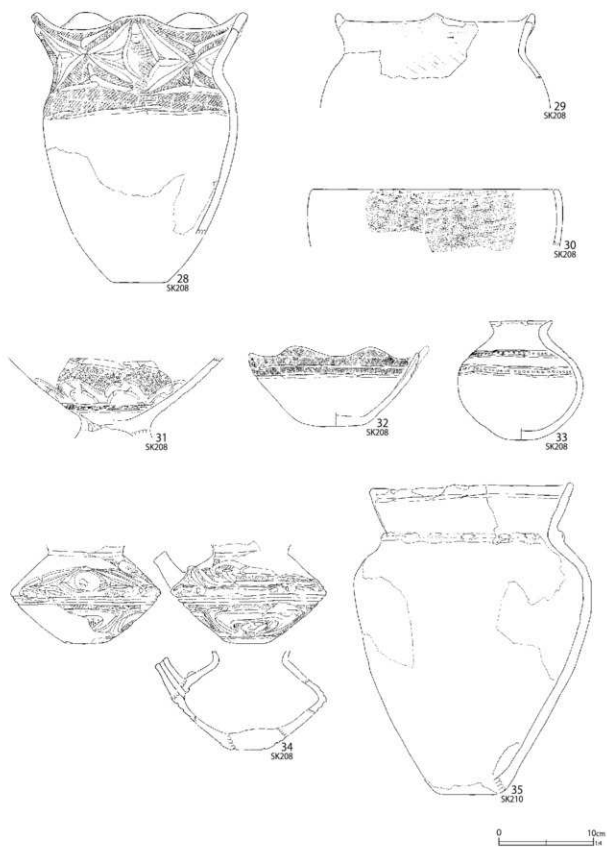
第369図 土曜出土土器 (2)



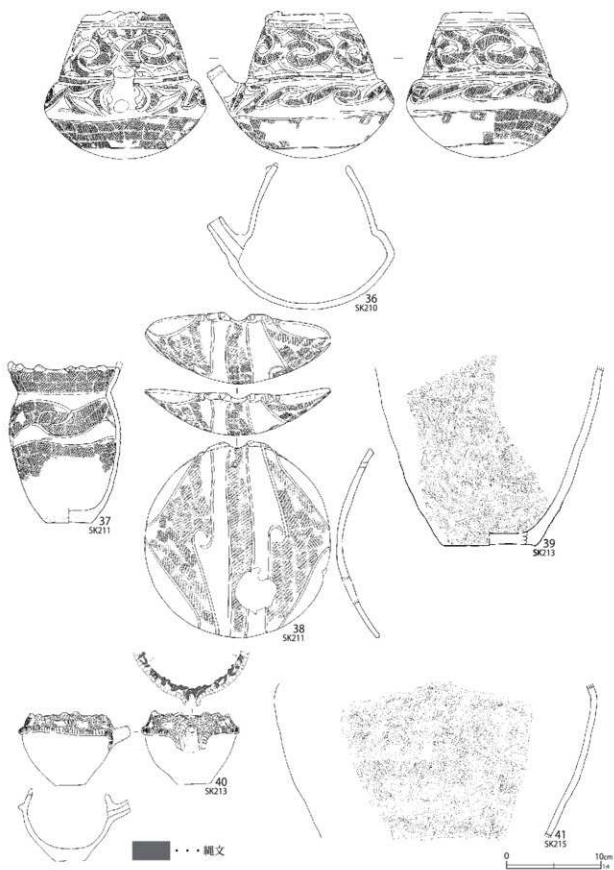
第370図 土壙出土土器（3）



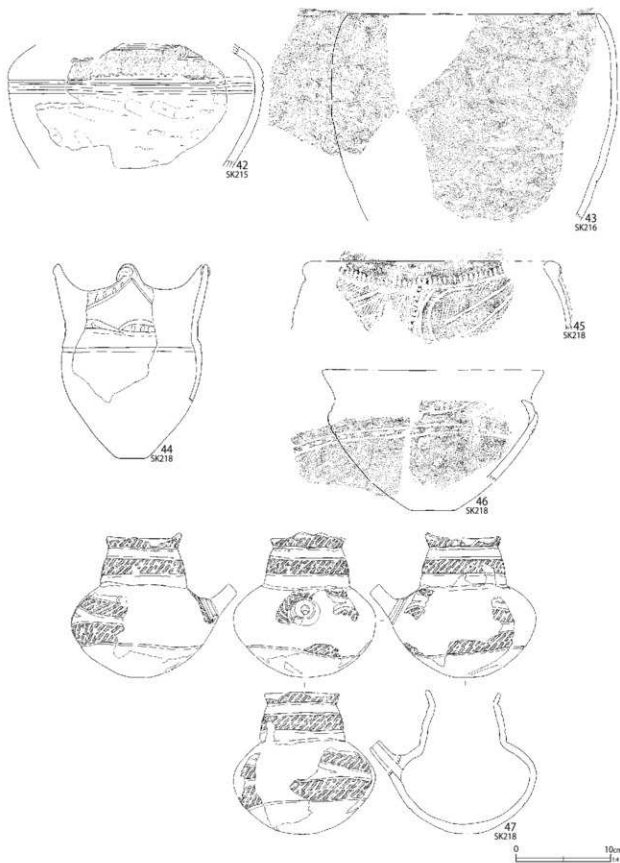
第371図 土曜出土土器 (4)



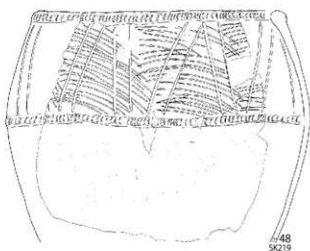
第372図 土曜出土土器 (5)



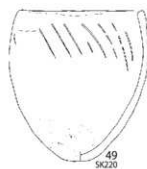
第373図 土曜出土土器 (6)



第374図 土城出土土器 (7)



48
SK219



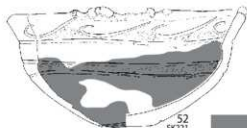
49
SK220



50
SK220

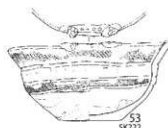


51
SK220



52
SK221

・・・黑色付着物



53
SK222



54
SK222

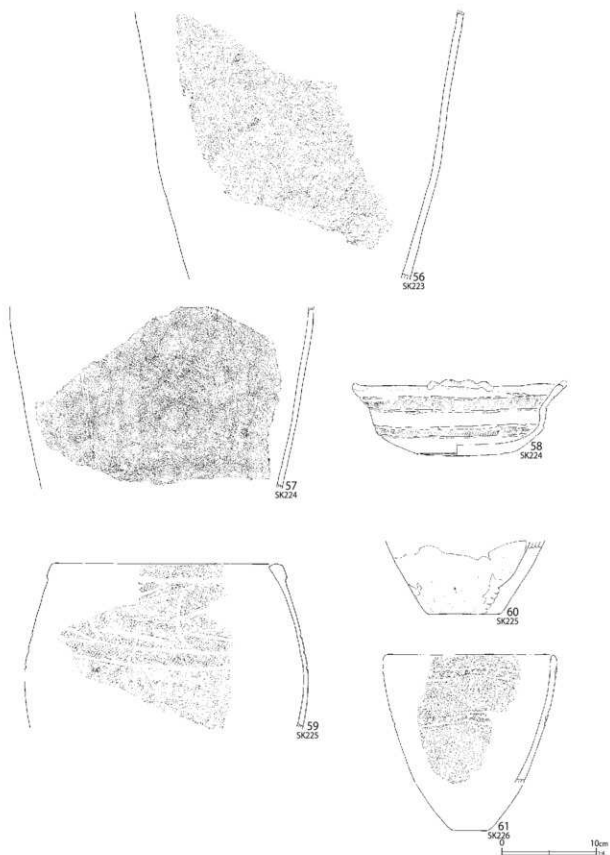
・・・縄文



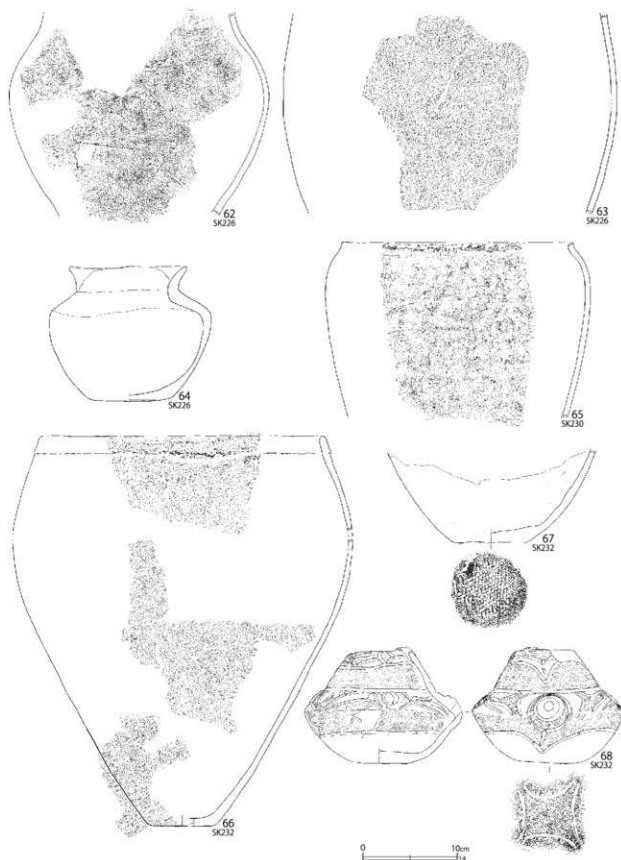
55
SK223

0 10cm
1/4

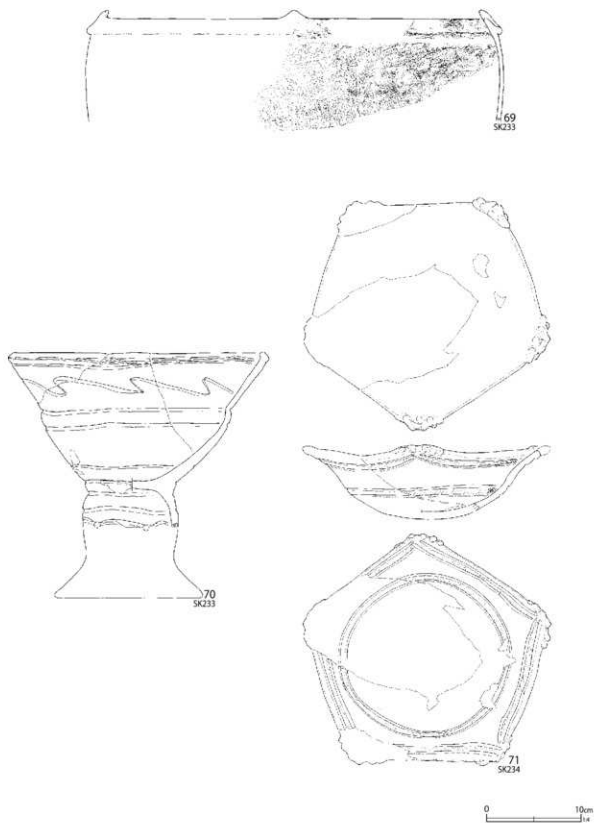
第375図 土曜出土土器 (8)



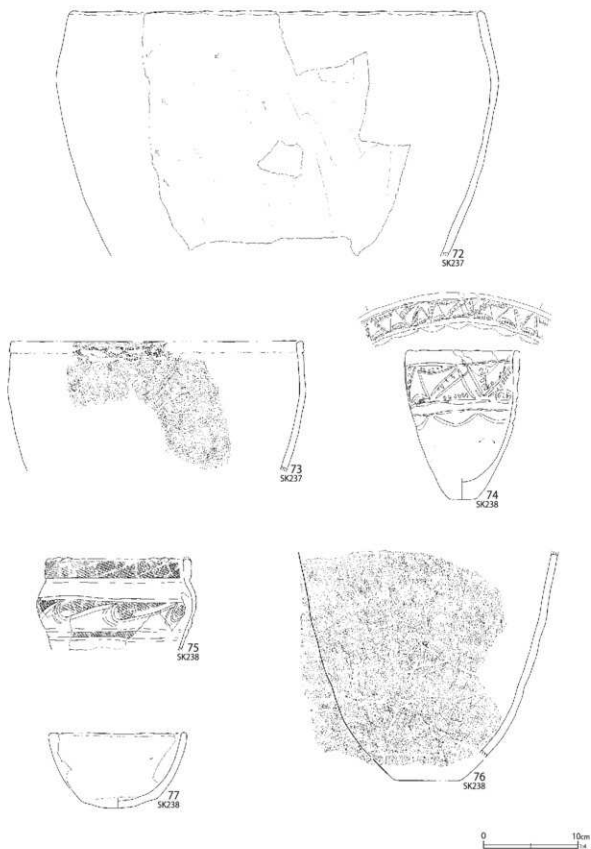
第376図 土城出土土器（9）



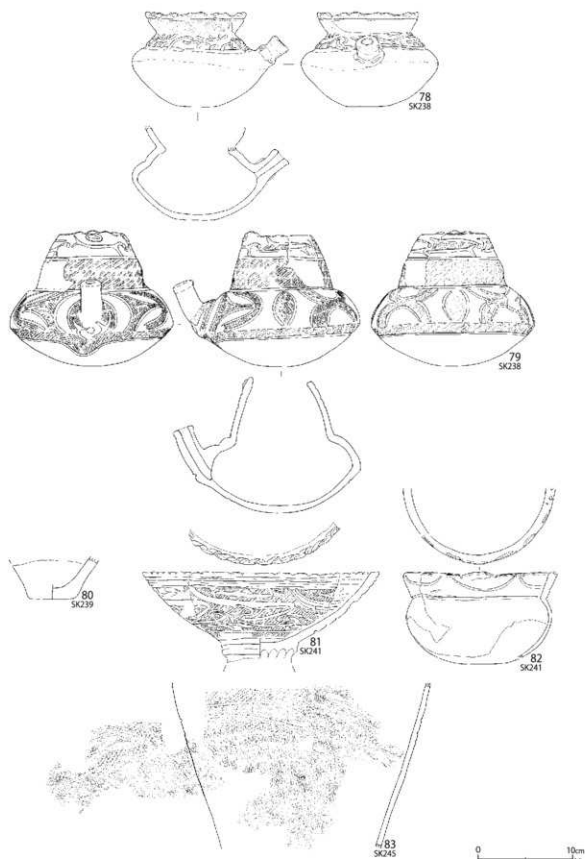
第377図 土曜出土土器 (10)



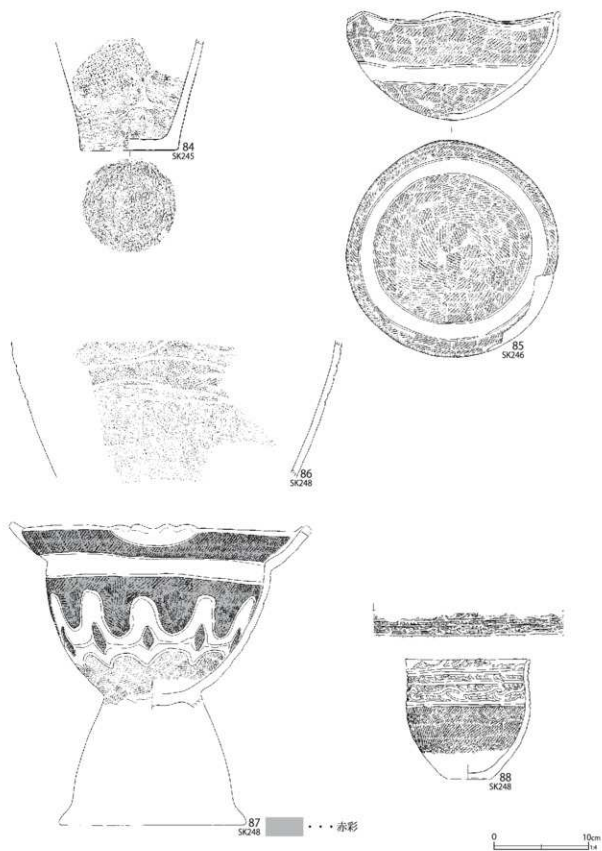
第378図 土城出土土器 (11)



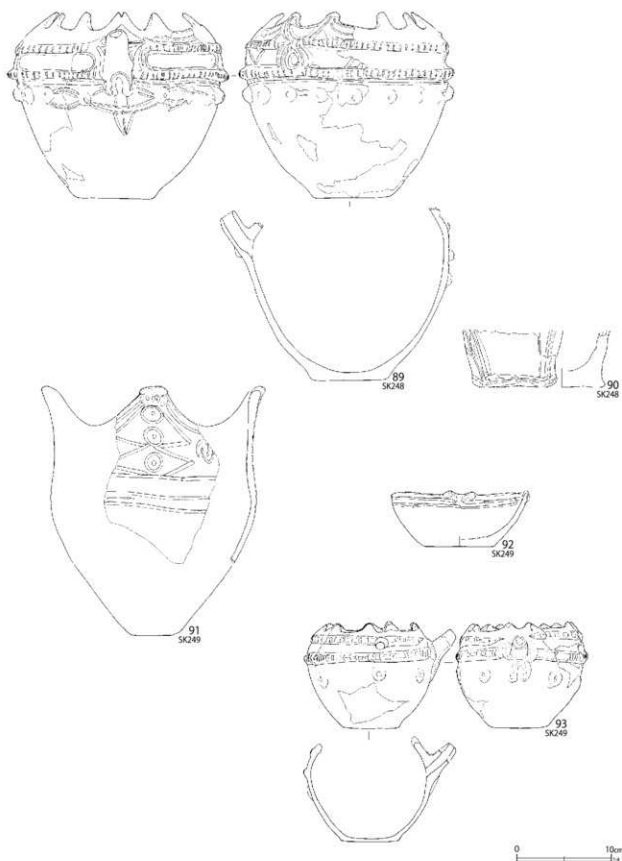
第379図 土曜出土土器 (12)



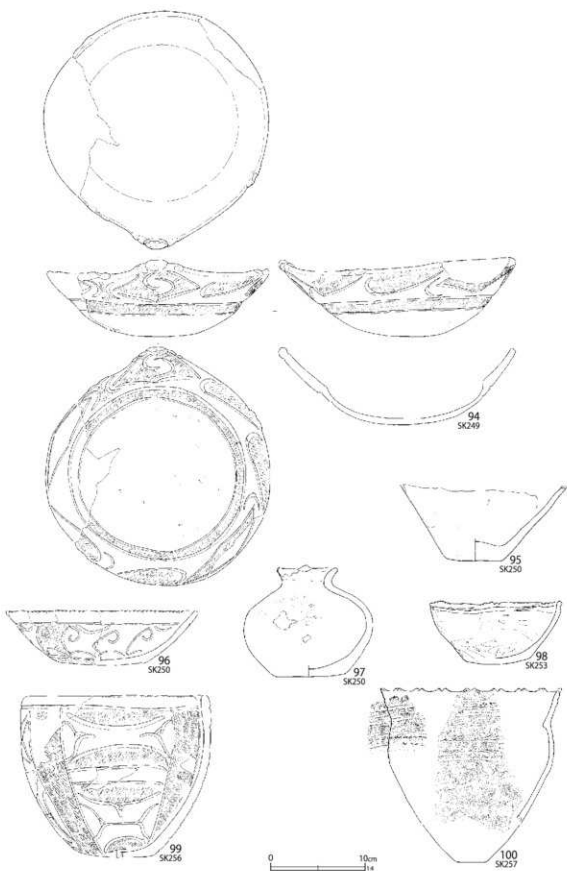
第380図 土城出土土器 (13)



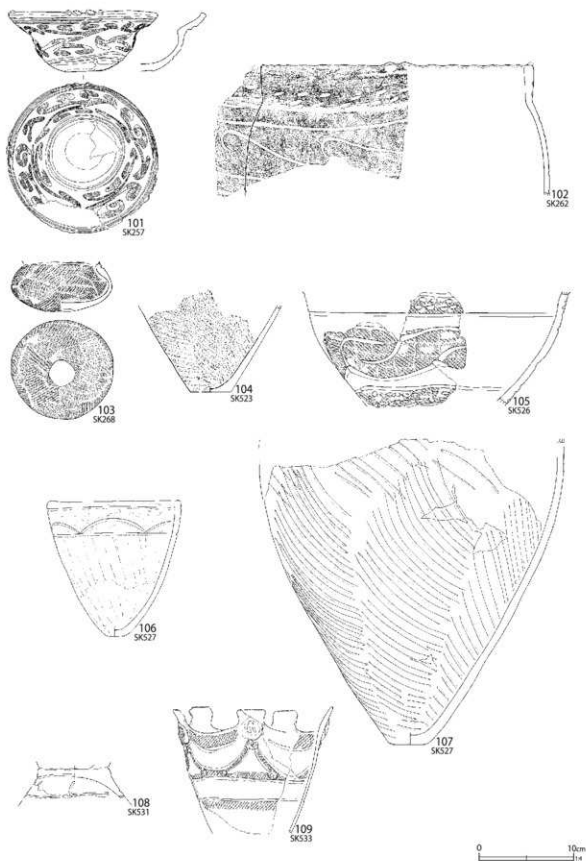
第381図 土曜出土土器 (14)



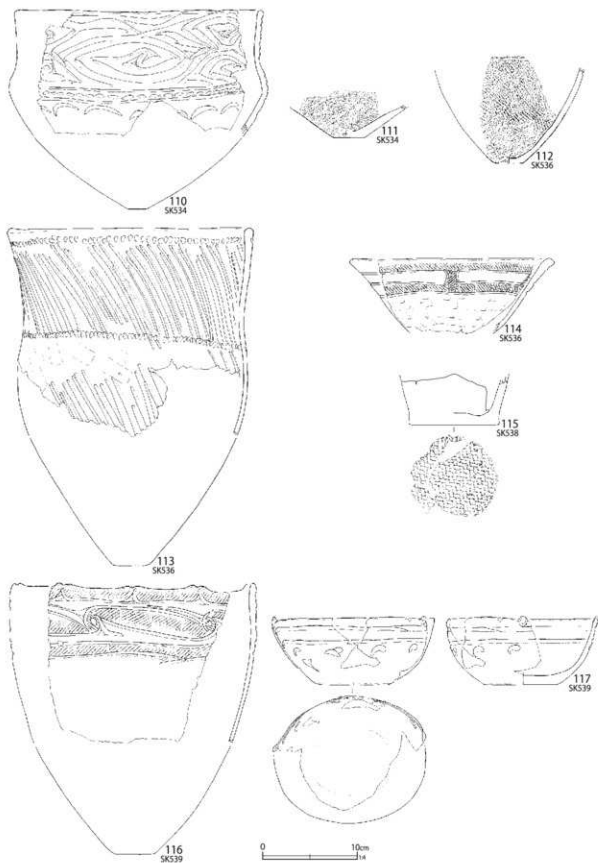
第382図 土城出土土器 (15)



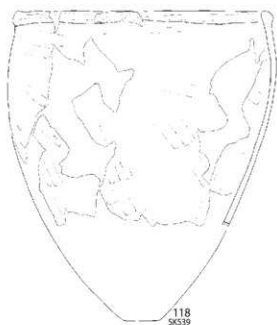
第383図 土曜出土土器 (16)



第384図 土城出土土器 (17)



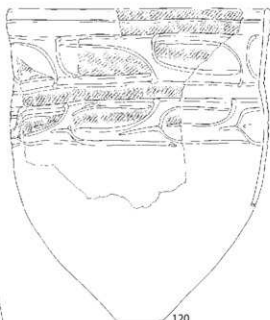
第385図 土曜出土土器 (18)



118
SK539



119
SK540



120
SK540



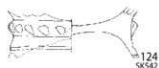
121
SK541



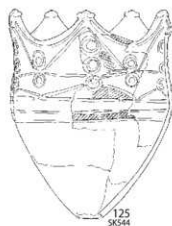
122
SK541



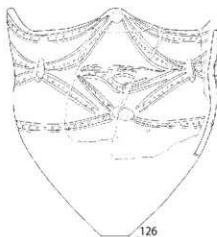
123
SK541



124
SK542



125
SK544



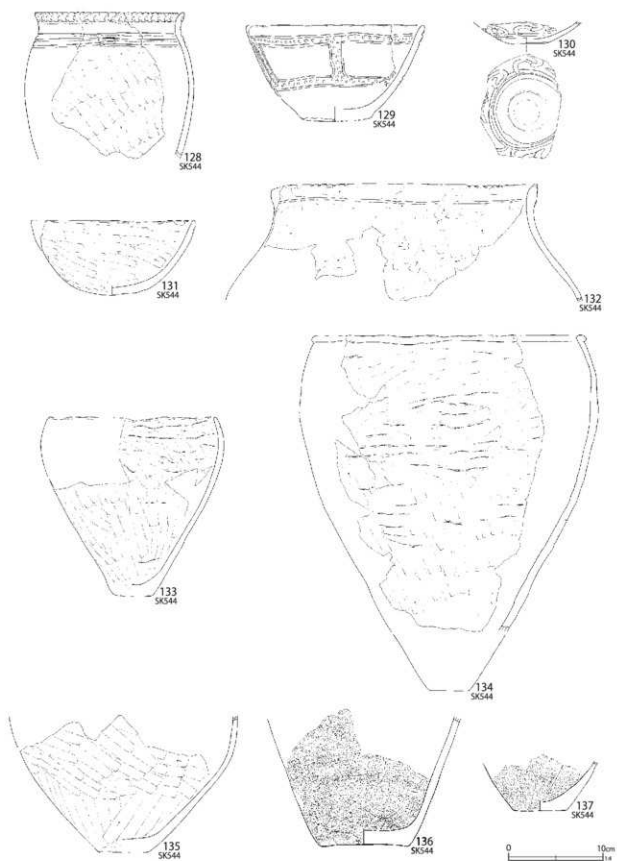
126
SK544



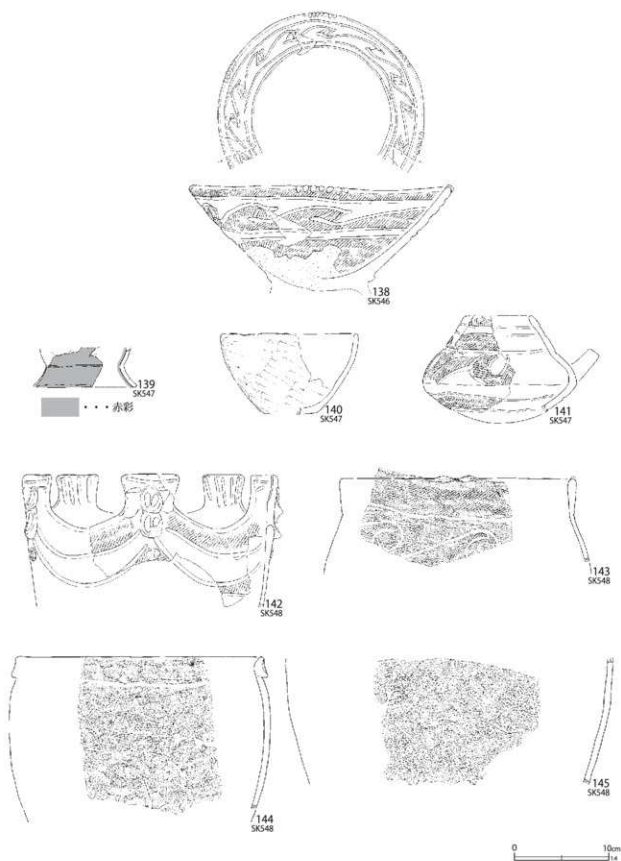
127
SK544

0 10cm
1/4

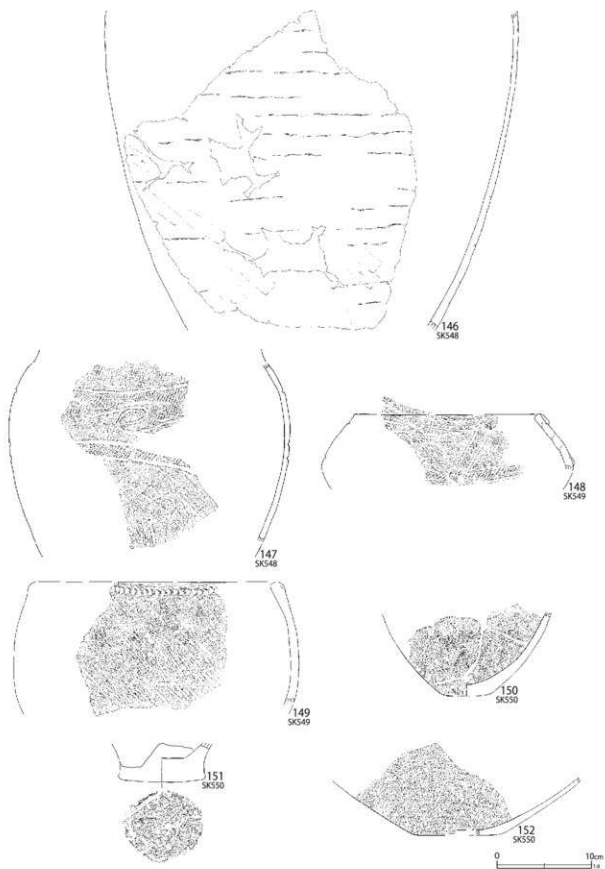
第386図 土城出土土器 (19)



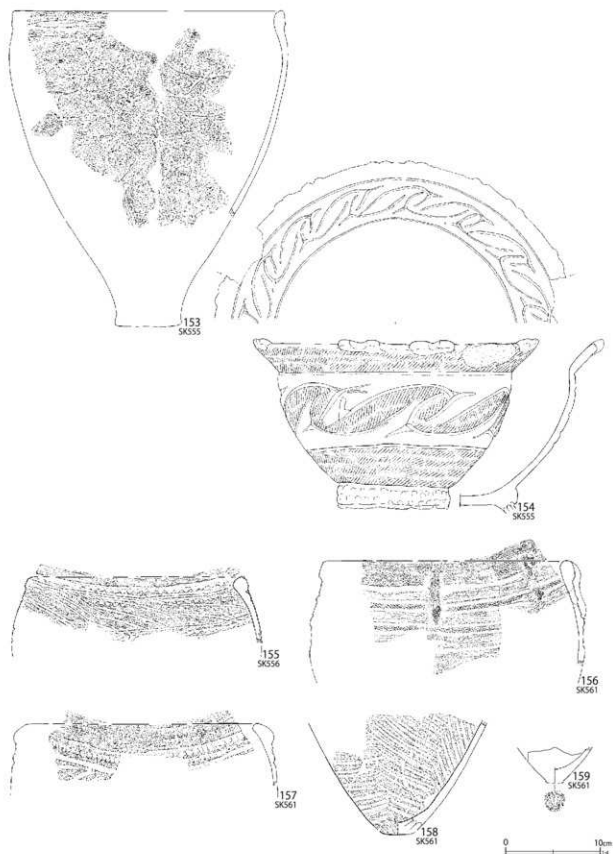
第387図 土曜出土土器 (20)



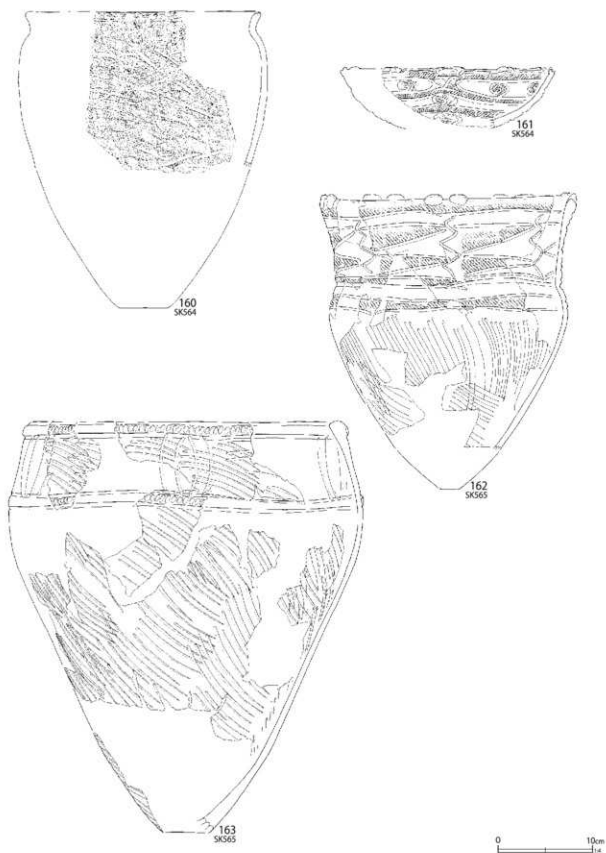
第388図 土城出土土器 (21)



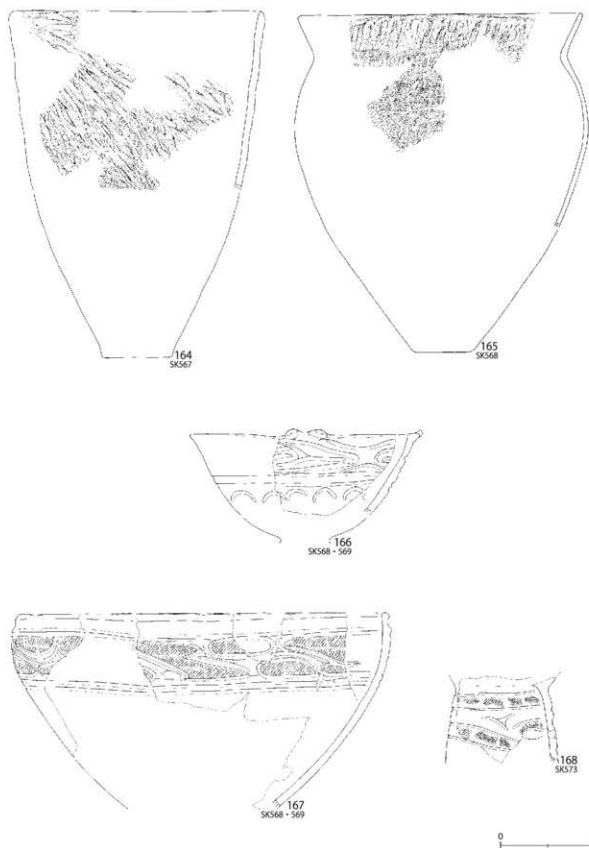
第389図 土曜出土土器 (22)



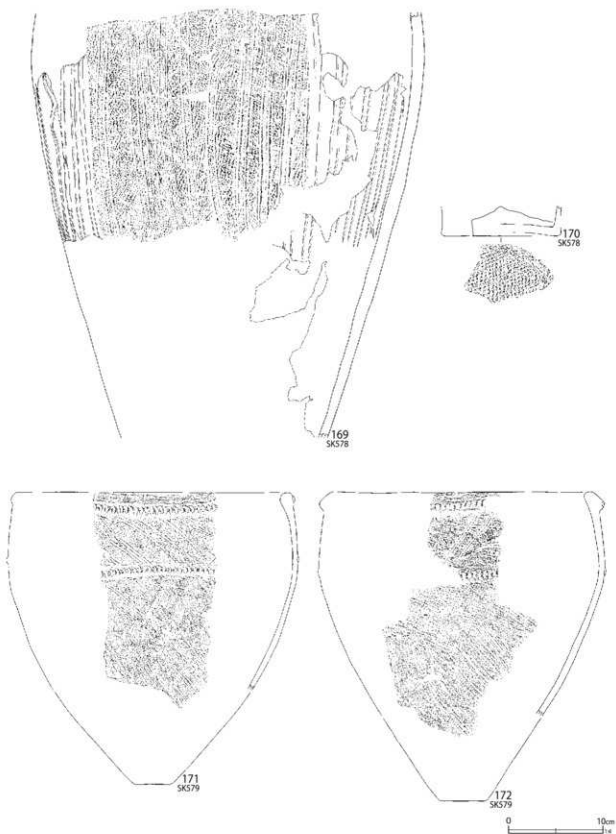
第390図 土城出土土器 (23)



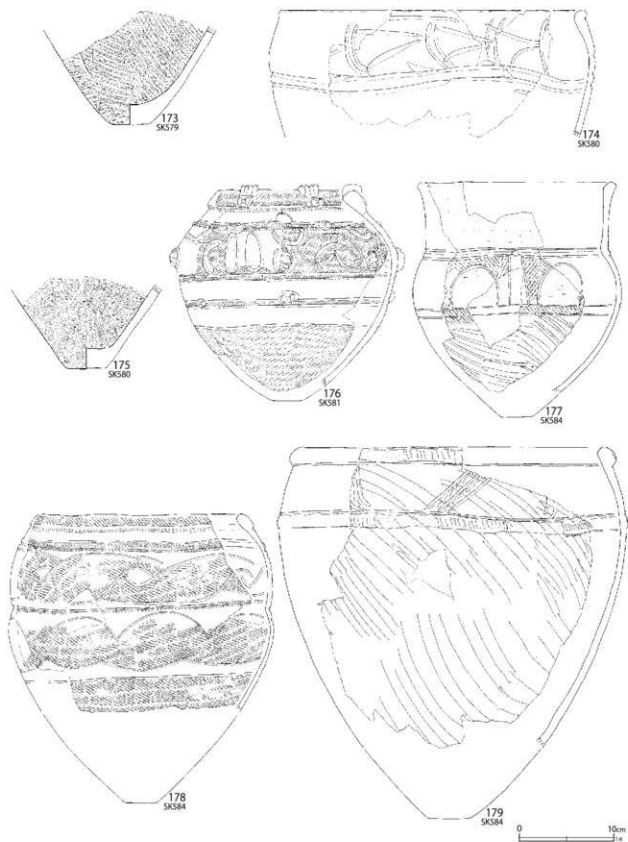
第391図 土曜出土土器 (24)



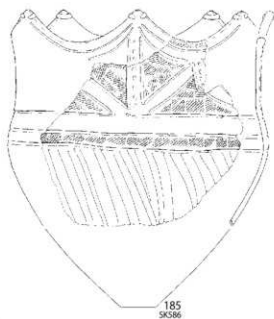
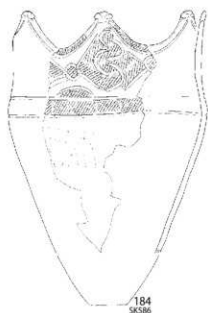
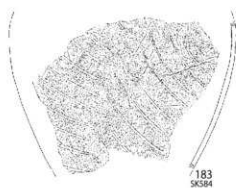
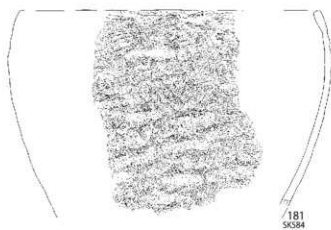
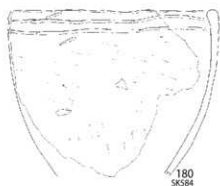
第392図 土城出土土器 (25)



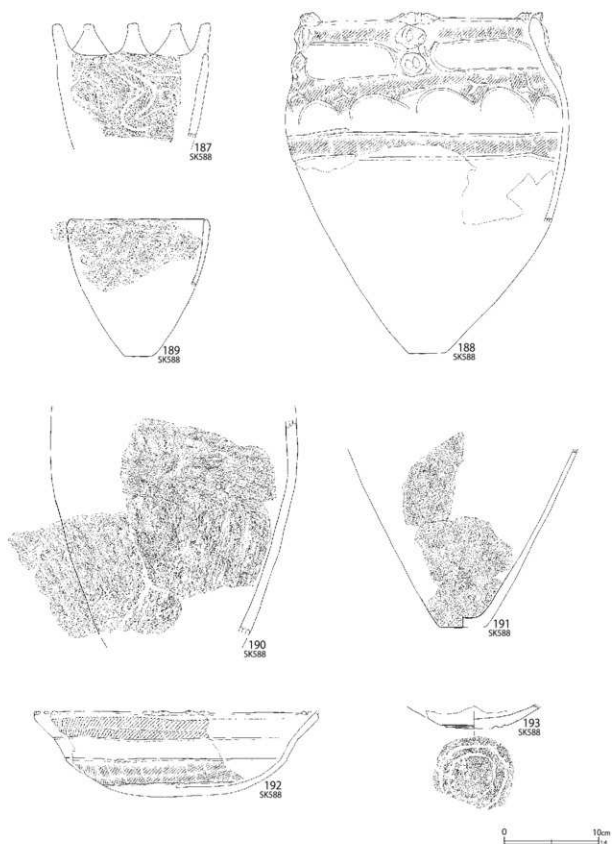
第393図 土曜出土土器 (26)



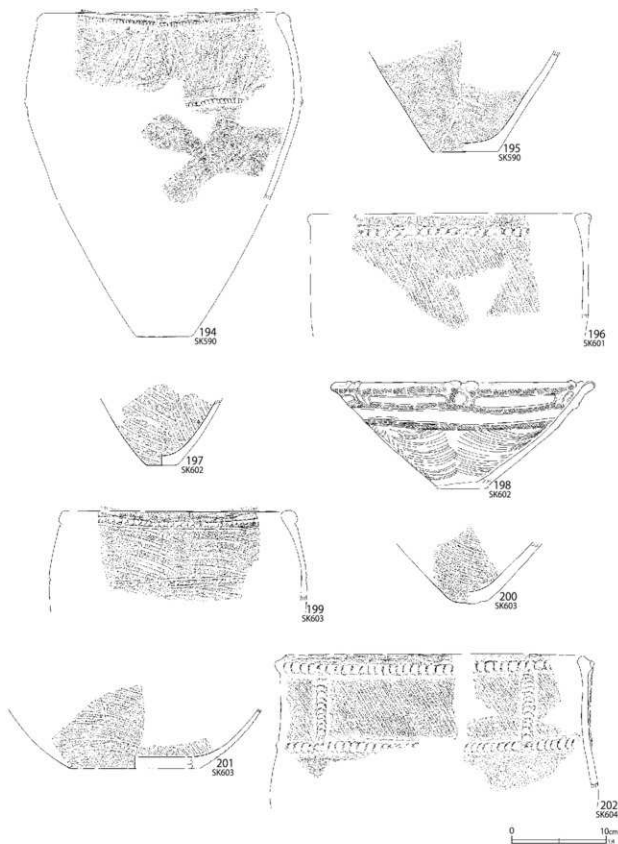
第394図 土城出土土器 (27)



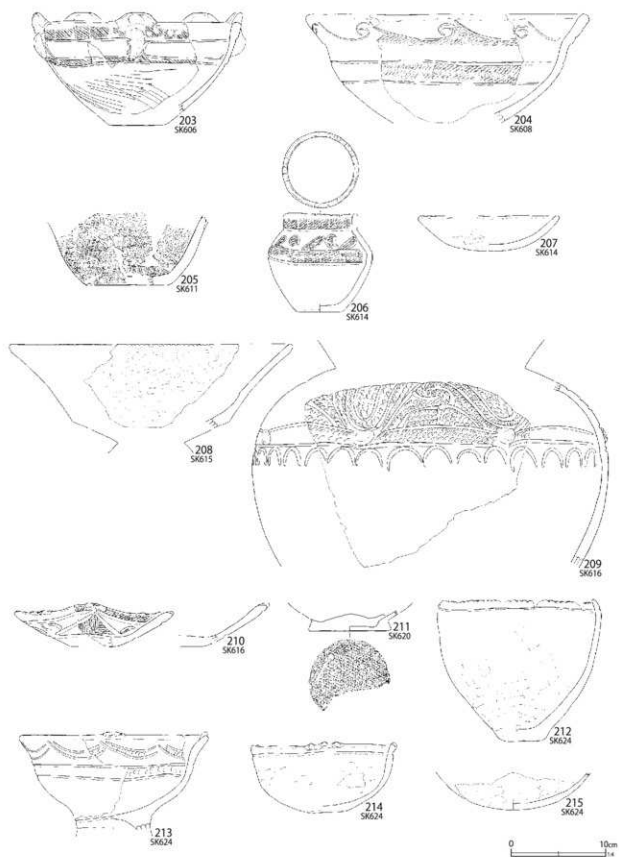
第395図 土曜出土土器 (28)



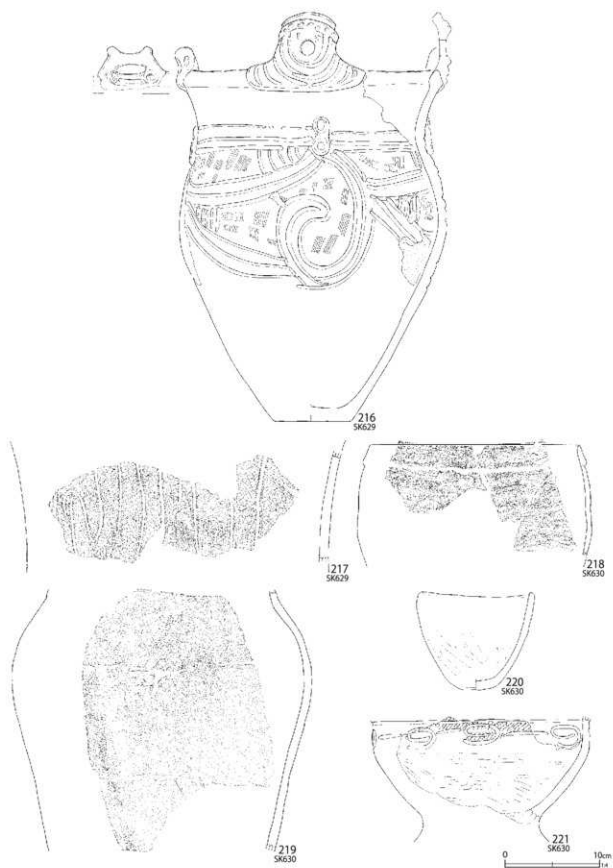
第396図 土城出土土器 (29)



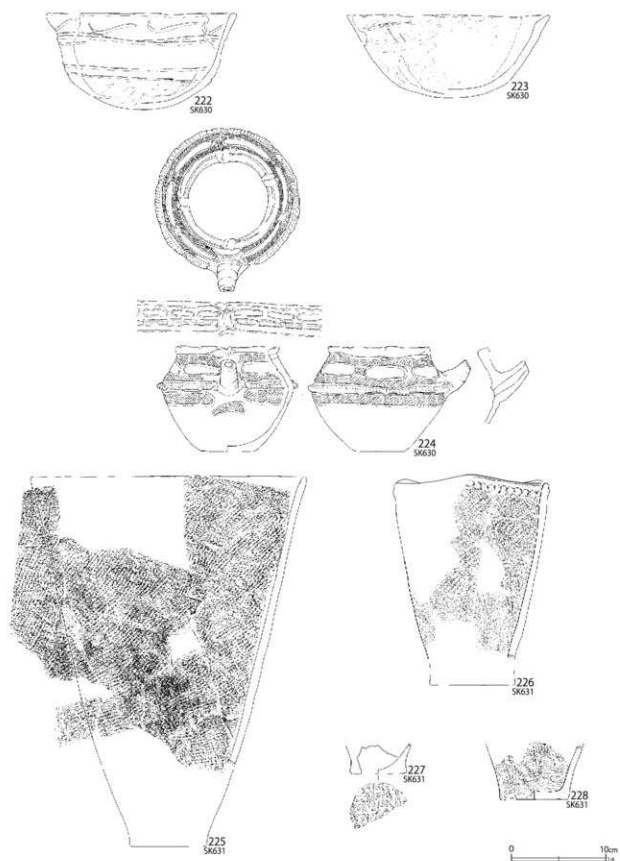
第397図 土曜出土土器 (30)



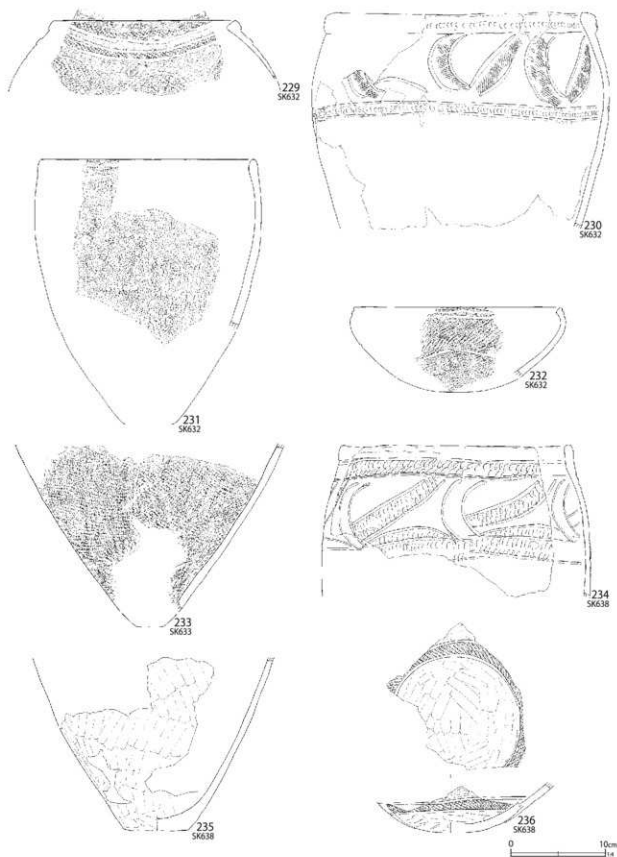
第398図 土城出土土器 (31)



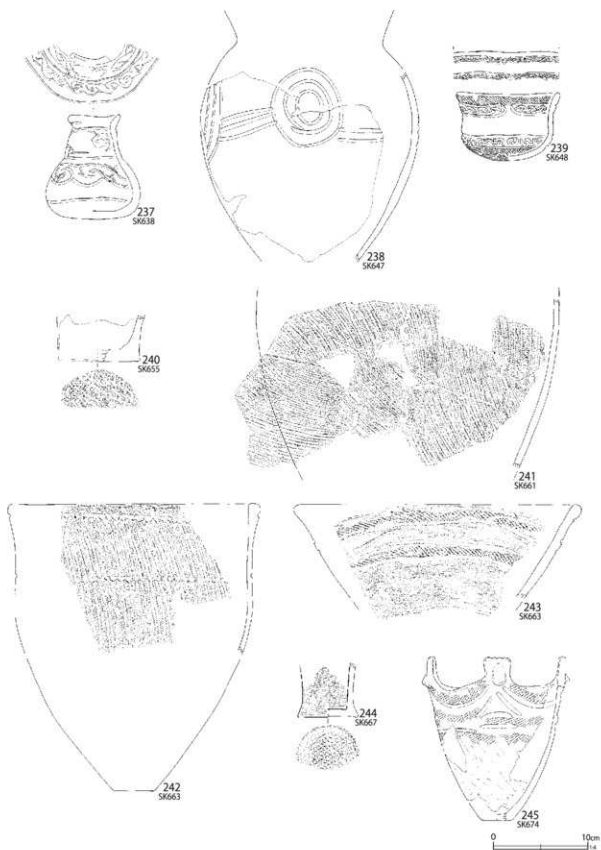
第399図 土曜出土土器 (32)



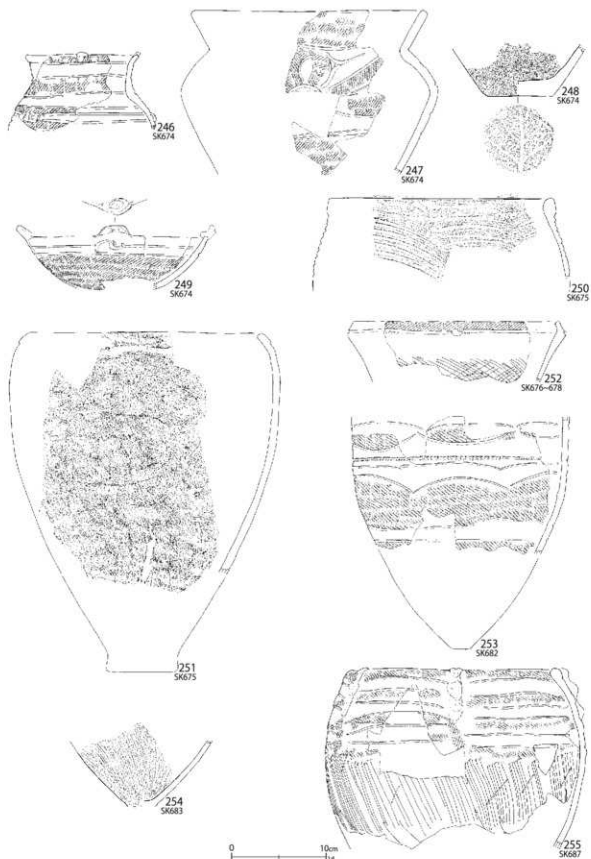
第400図 土城出土土器 (33)



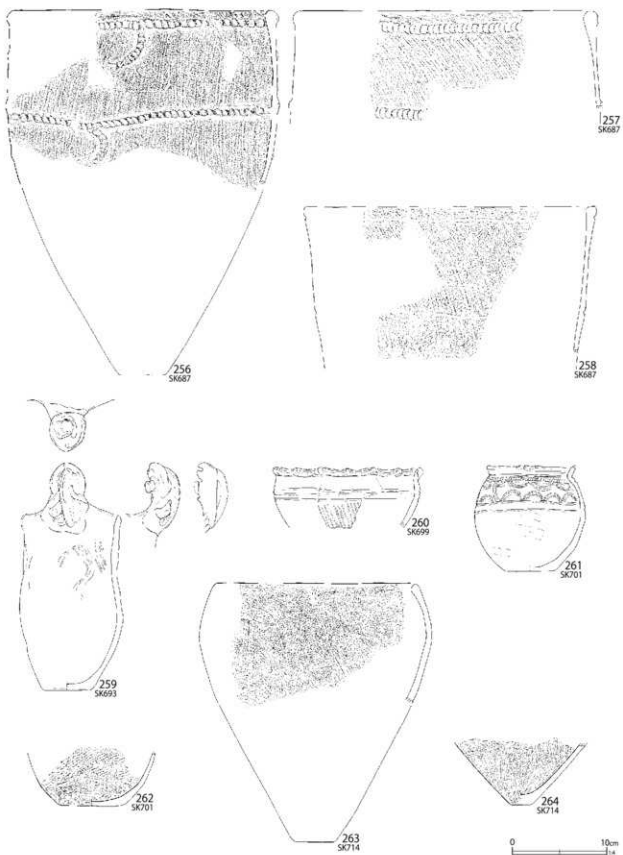
第401図 土曜出土土器 (34)



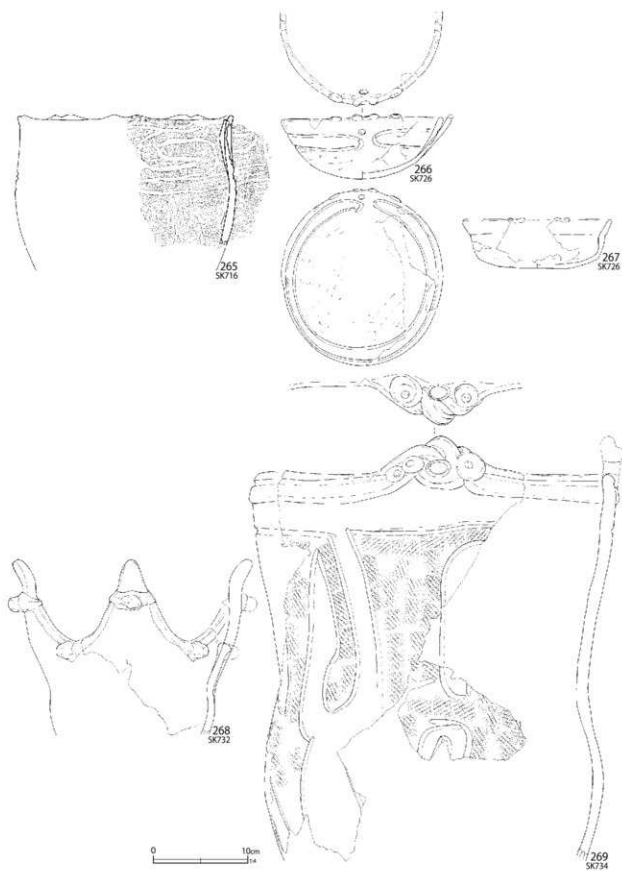
第402図 土城出土土器 (35)



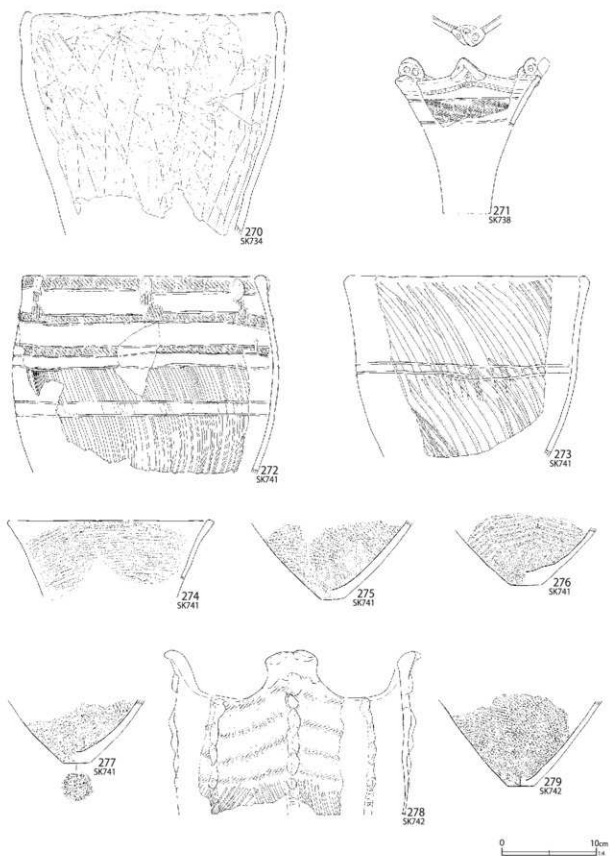
第403図 土曜出土土器 (36)



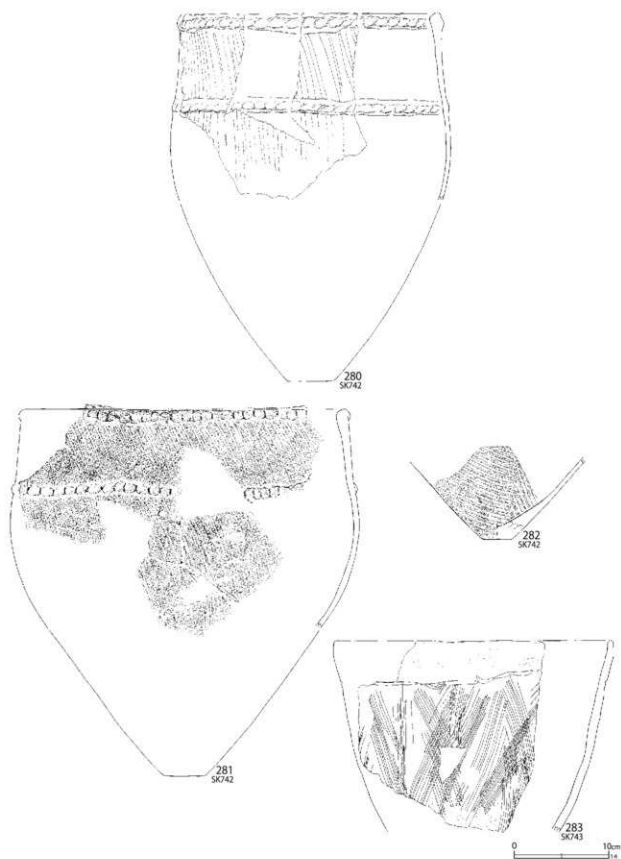
第404図 土曜出土土器 (37)



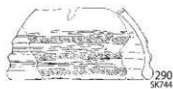
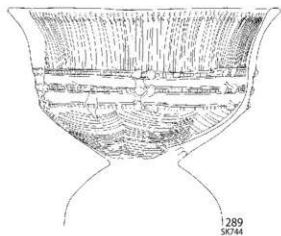
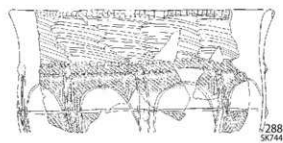
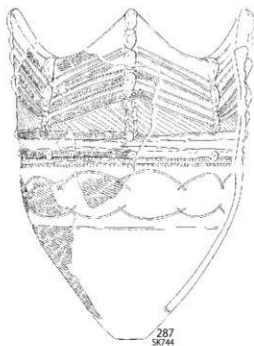
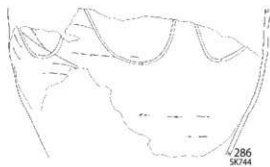
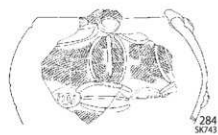
第405図 土曜出土土器 (38)



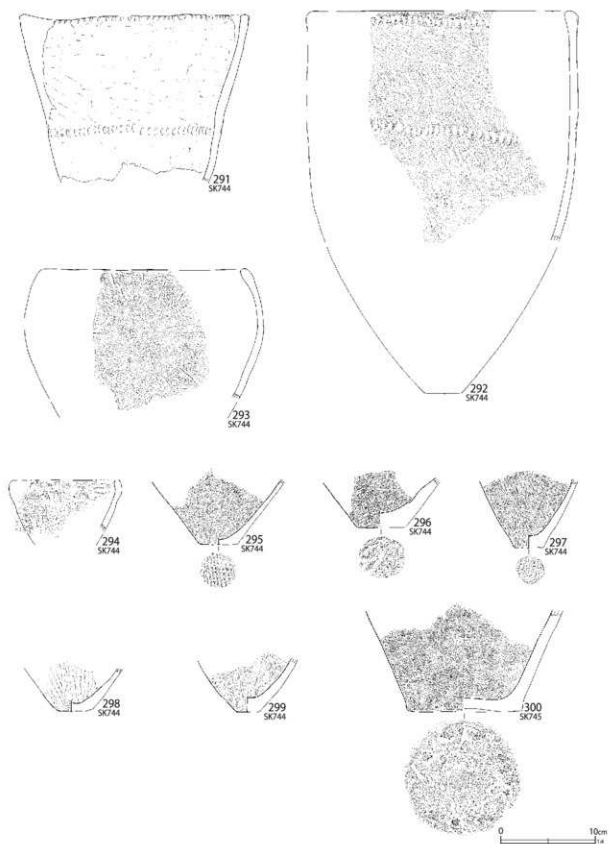
第406図 土城出土土器 (39)



第407図 土曜出土土器 (40)



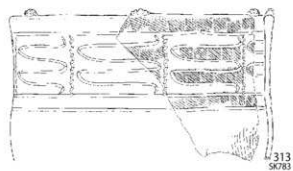
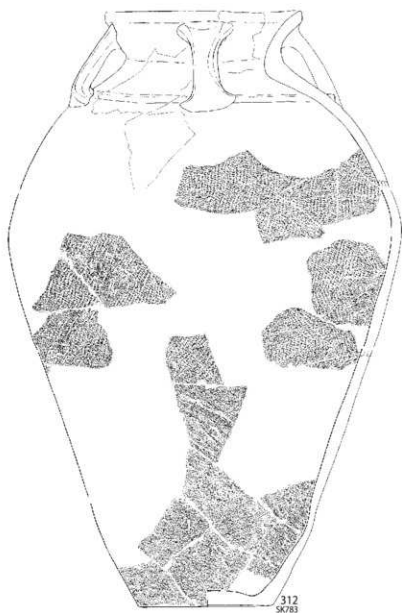
第408図 土城出土土器 (41)



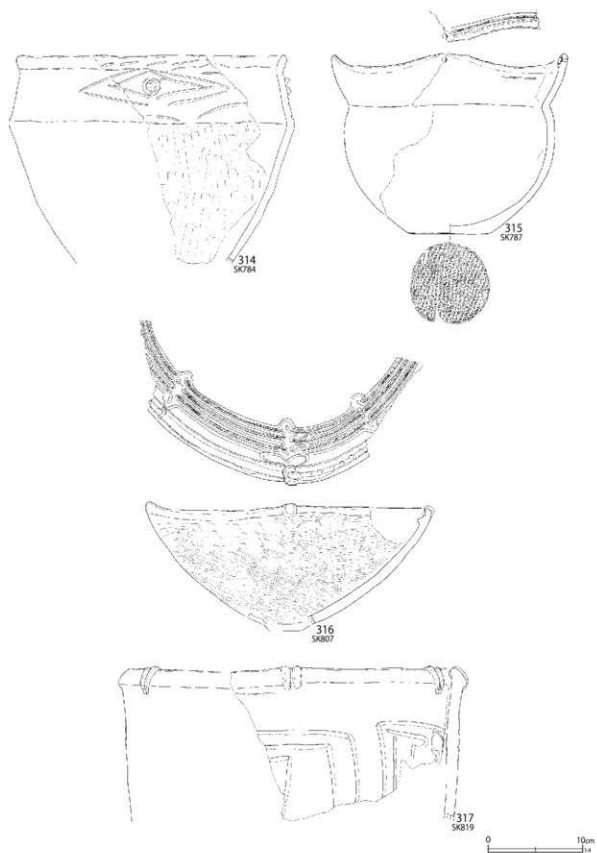
第409図 土曜出土土器 (42)



第410図 土城出土土器 (43)



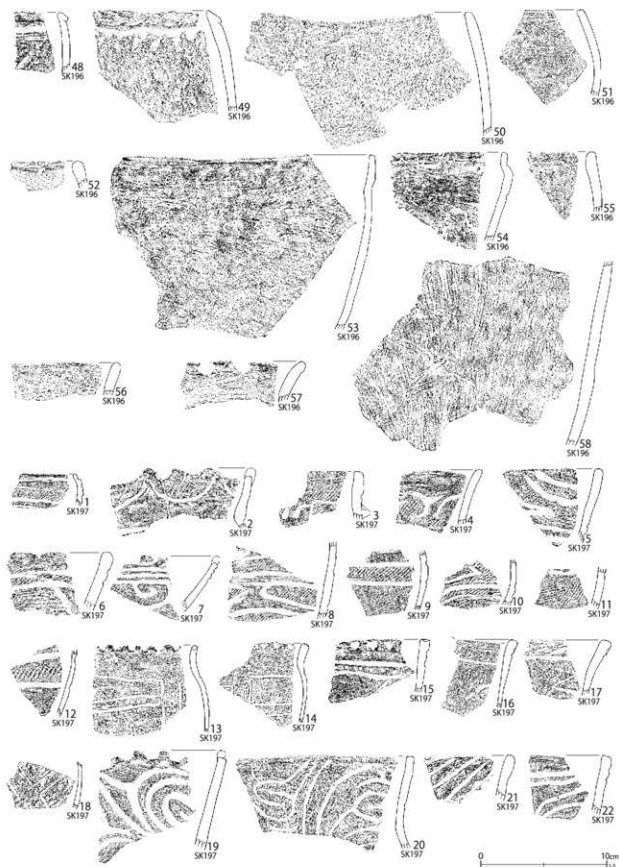
第411図 土壙出土土器 (44)



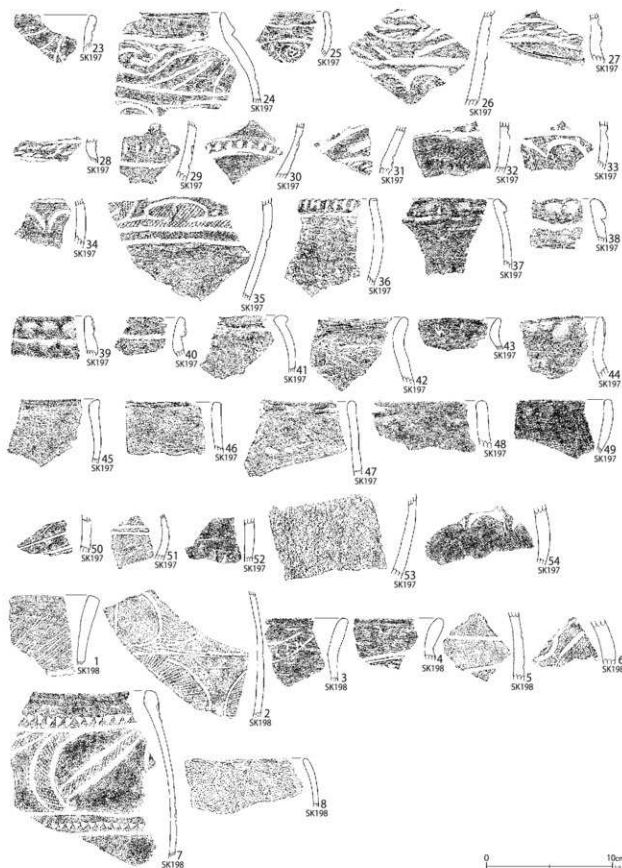
第412図 土壇出土土器 (45)



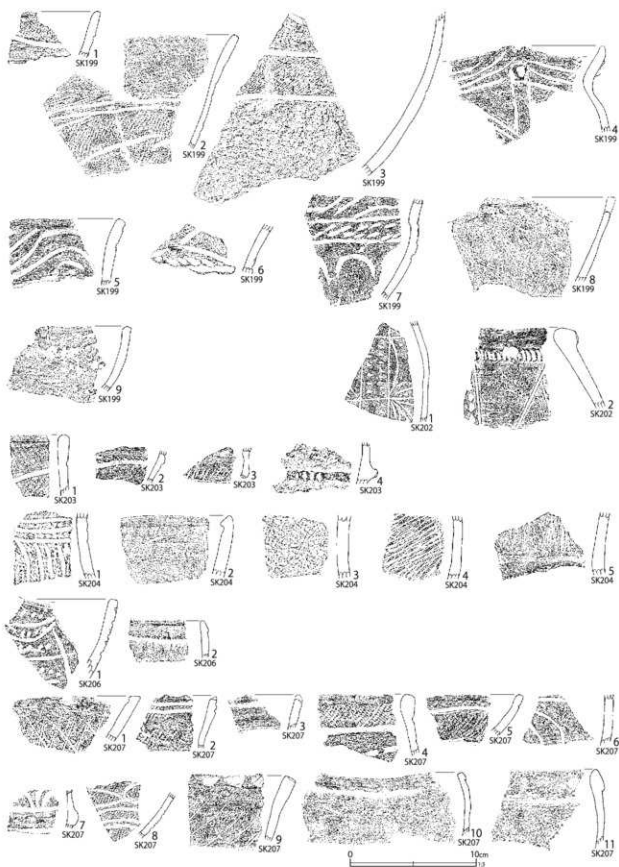
第413图 土壤出土土器 (46)



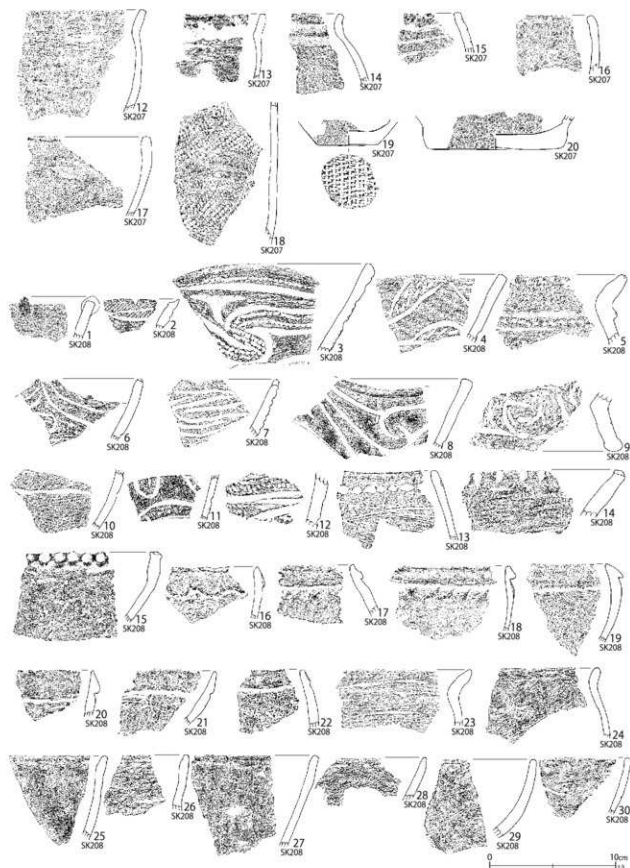
第414図 土城出土土器 (47)



第415図 土壇出土土器 (48)



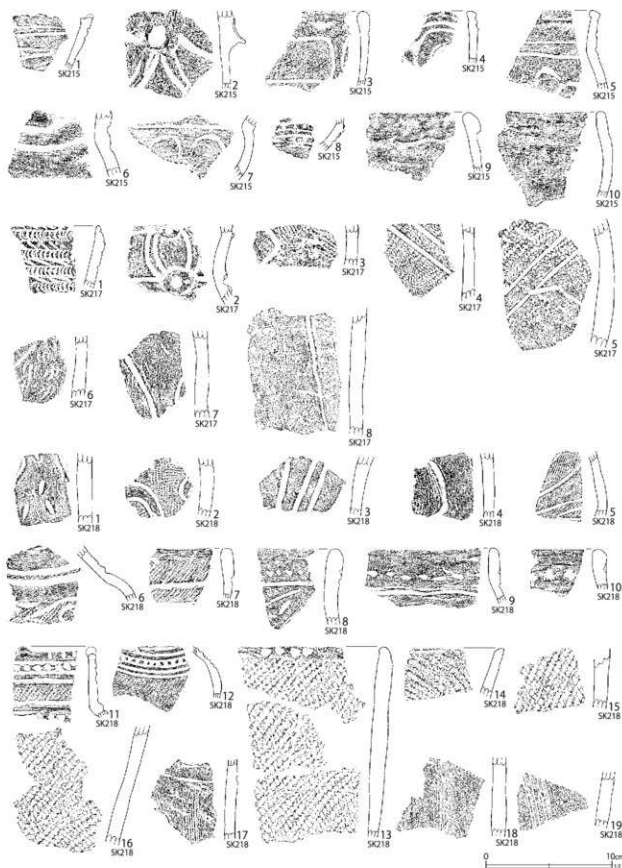
第416図 土城出土土器 (49)



第417图 土曜出土土器 (50)



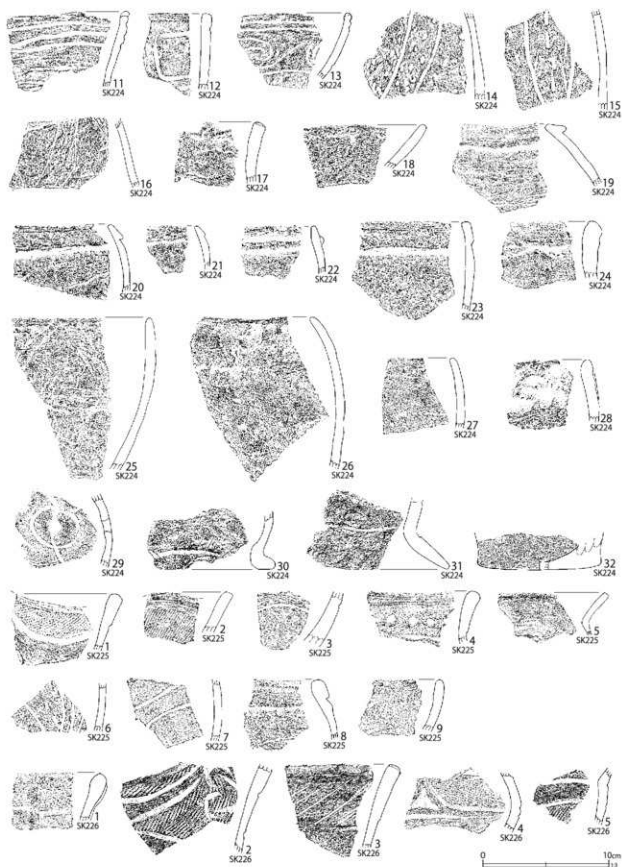
第418图 土壤出土土器 (51)



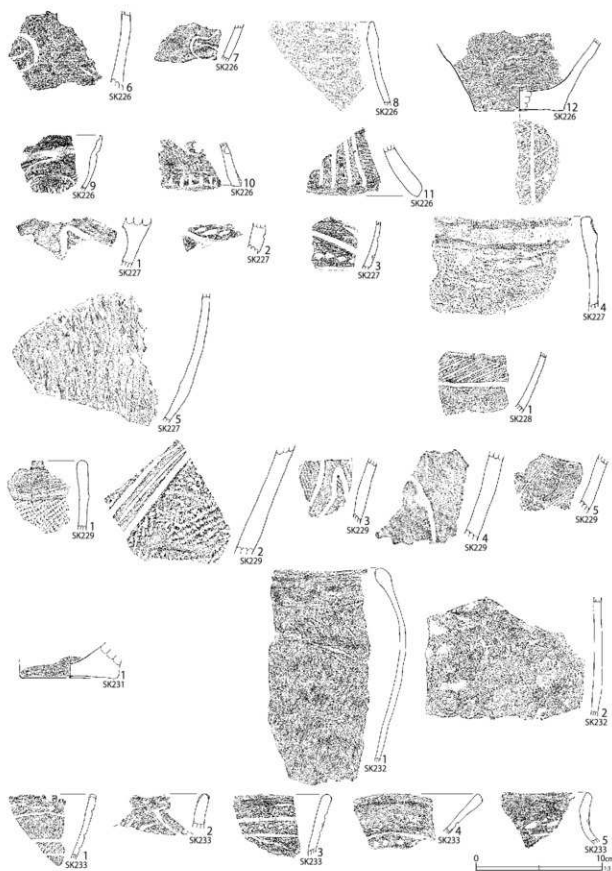
第419図 土曜出土土器 (52)



第420図 土城出土土器 (53)



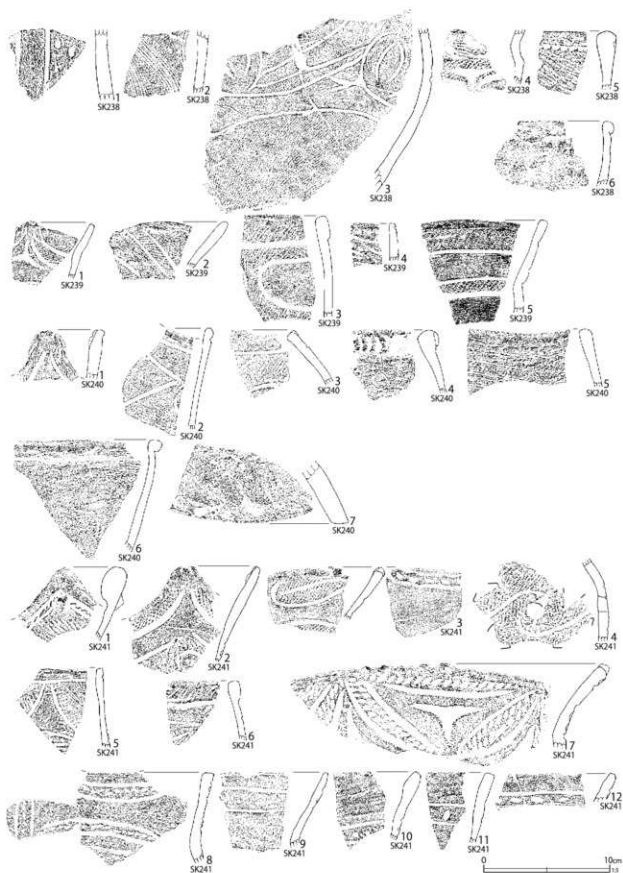
第421图 土壙出土土器 (54)



第422図 土城出土土器 (55)



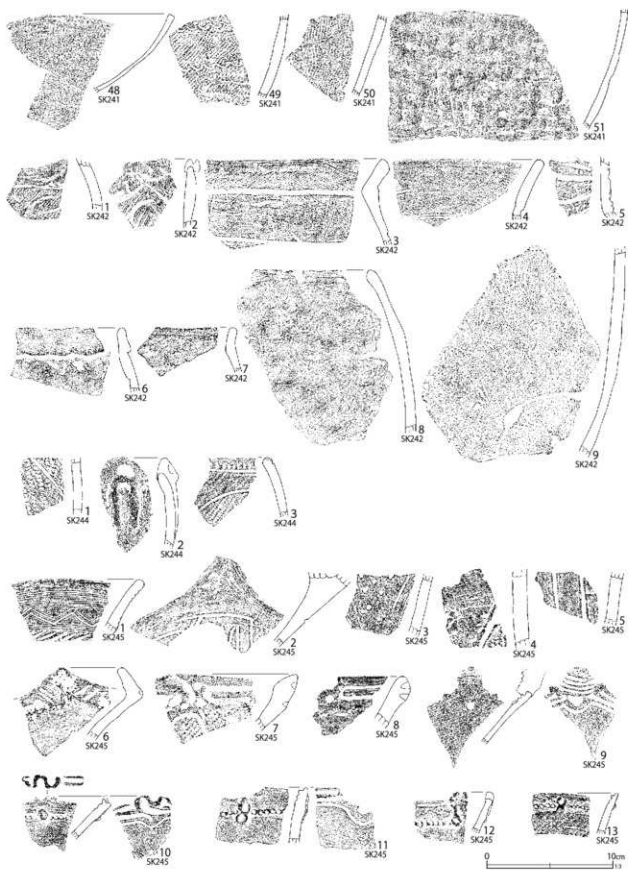
第423図 土曜出土土器 (56)



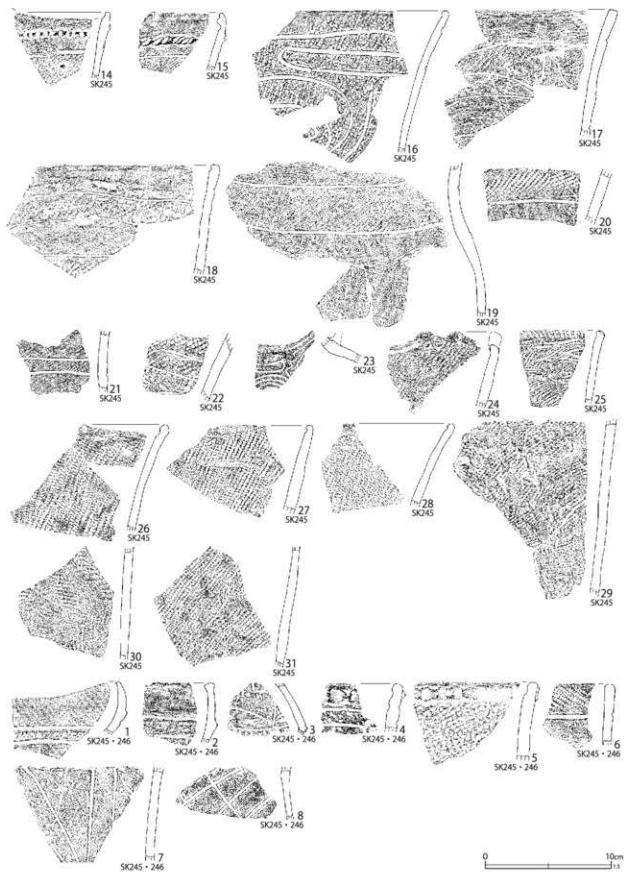
第424図 土城出土土器 (57)



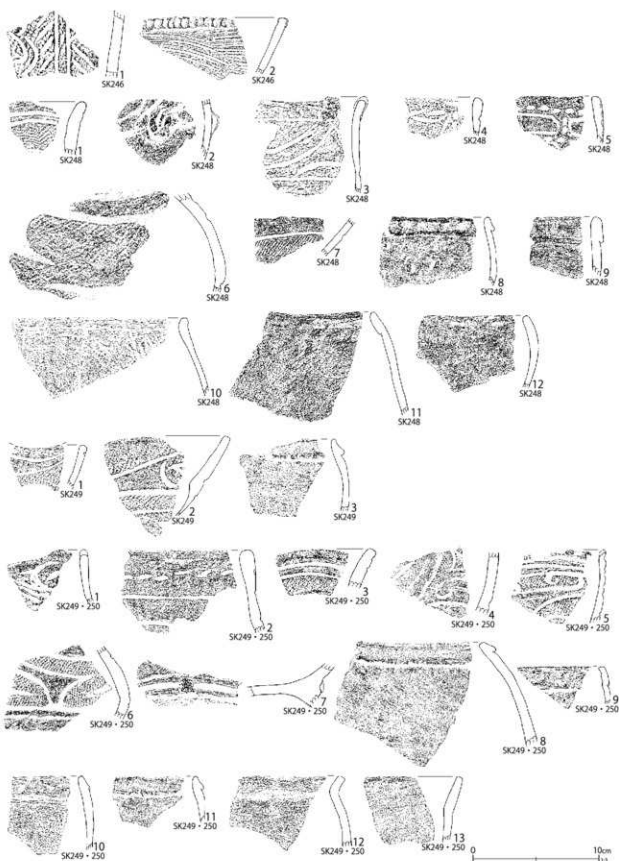
第425図 土壇出土土器 (58)



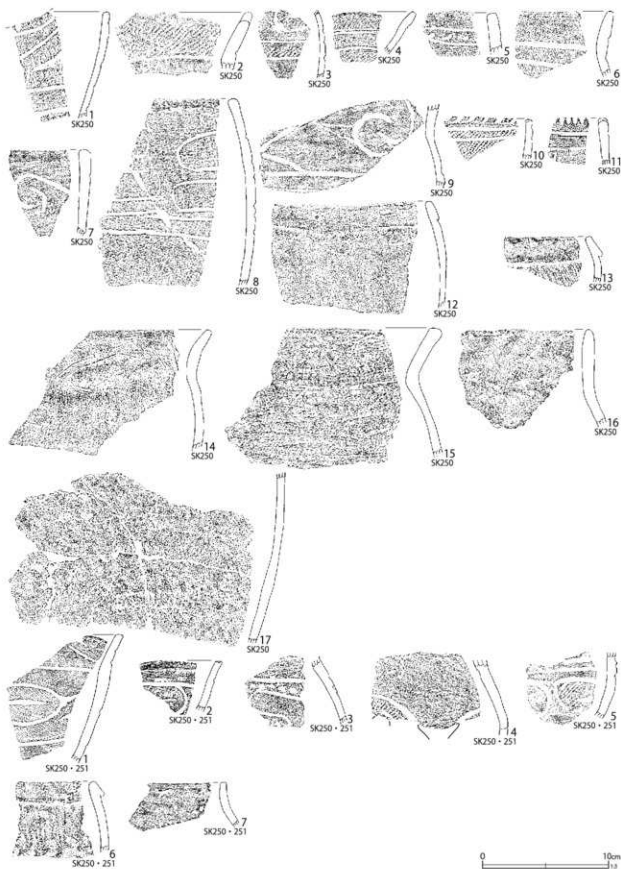
第426図 土城出土土器 (59)



第427図 土曜出土土器 (60)



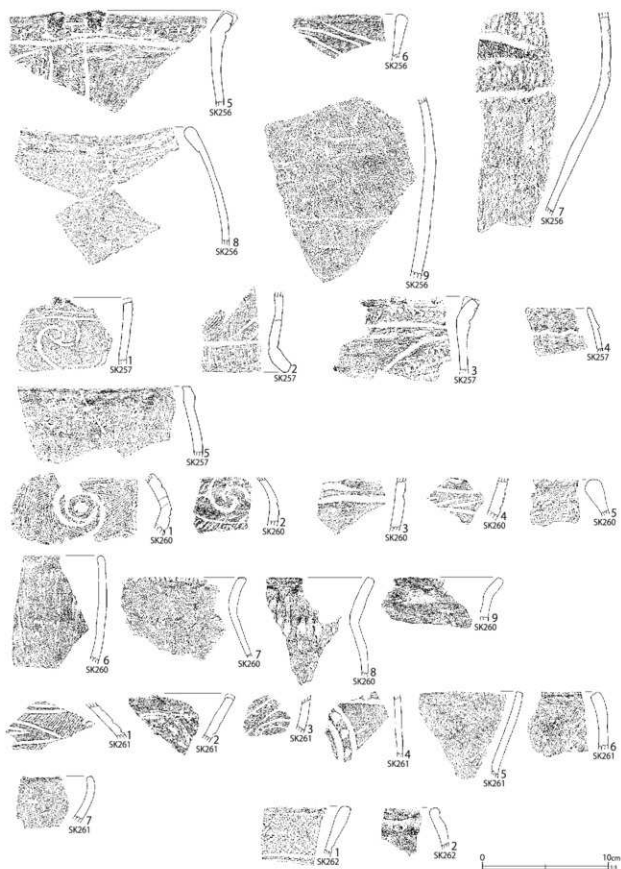
第428图 土城出土土器 (61)



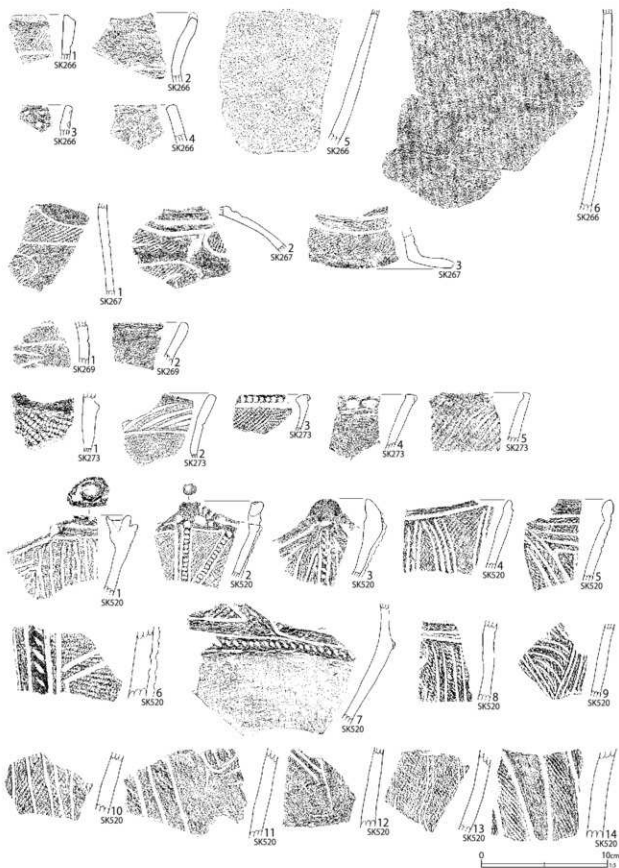
第429図 土曜出土土器 (62)



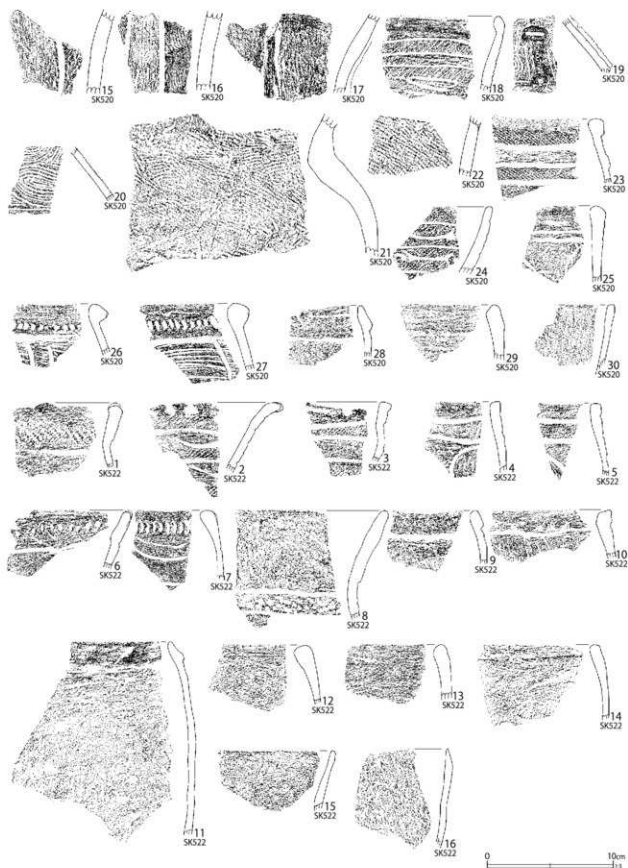
第430図 土城出土土器 (63)



第431图 土曜出土土器 (64)



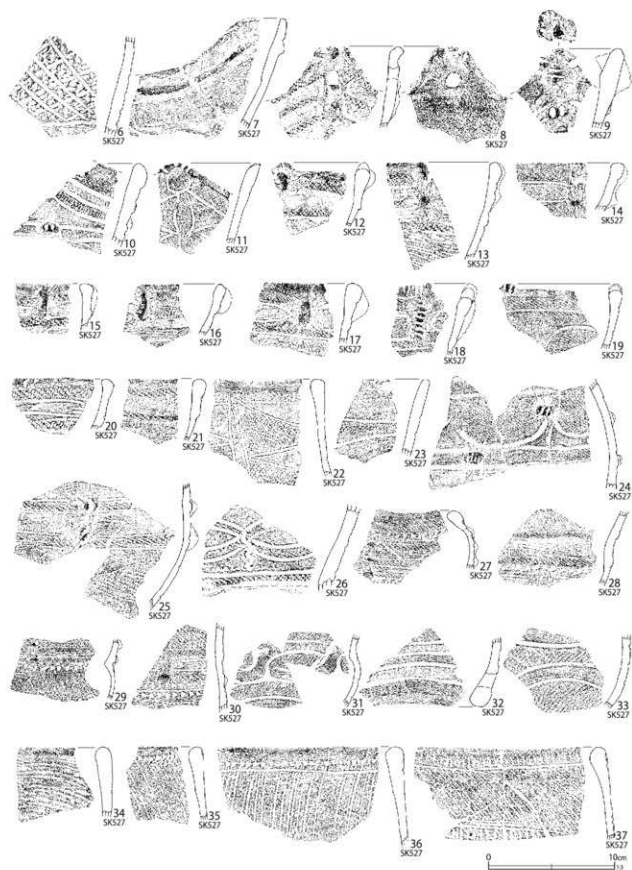
第432図 土城出土土器 (65)



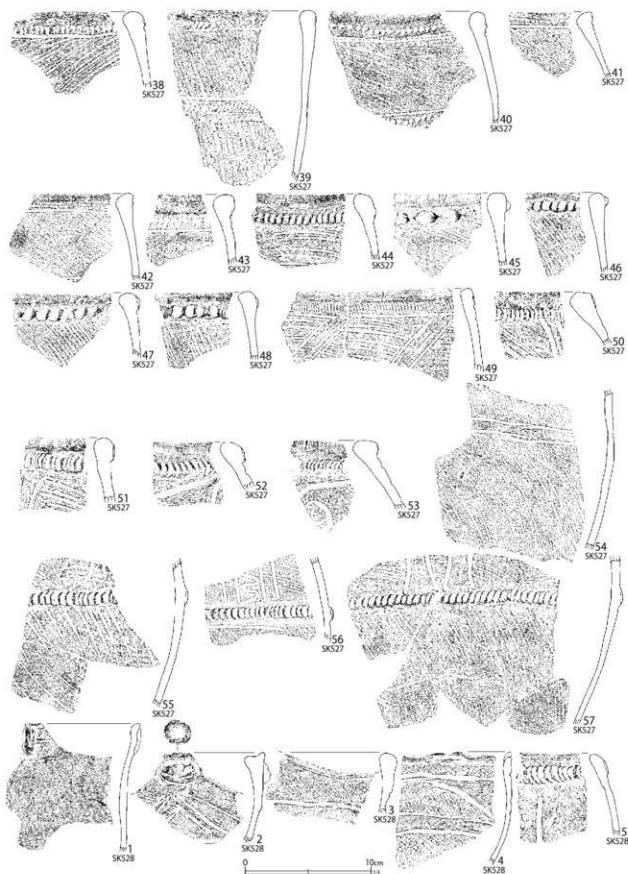
第433图 土壙出土土器 (66)



第434図 土城出土土器 (67)



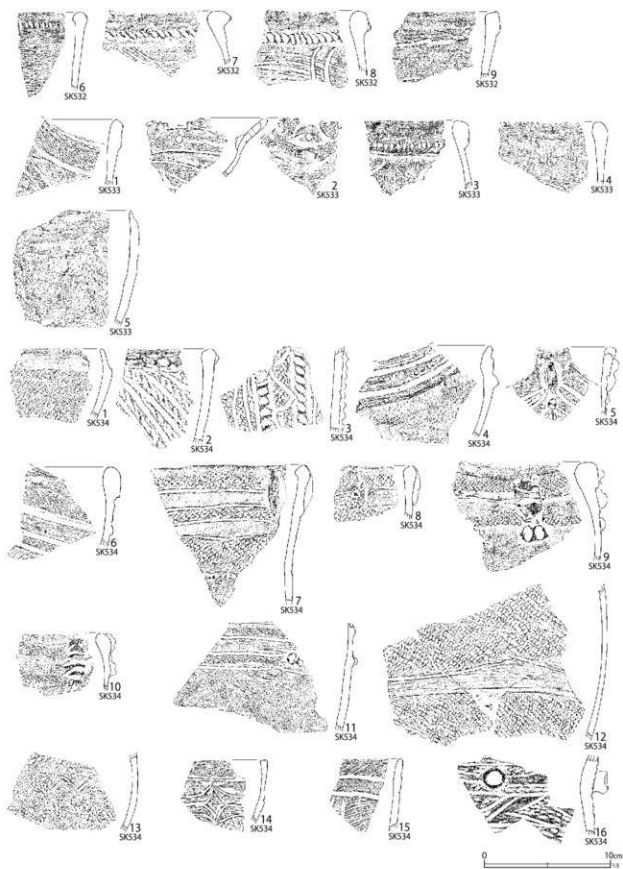
第435図 土曜出土土器 (68)



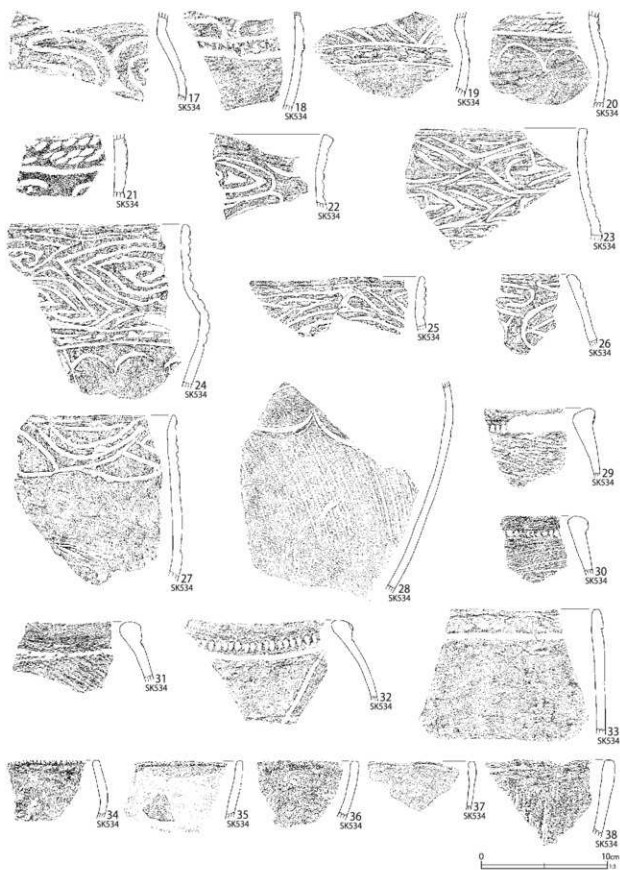
第436图 土城出土土器 (69)



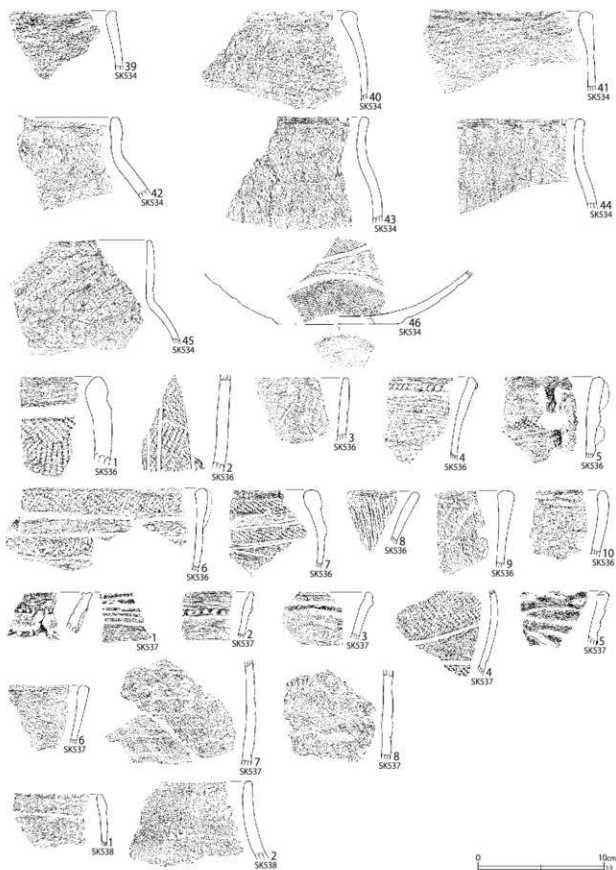
第437図 土壇出土土器 (70)



第438图 土城出土土器 (71)



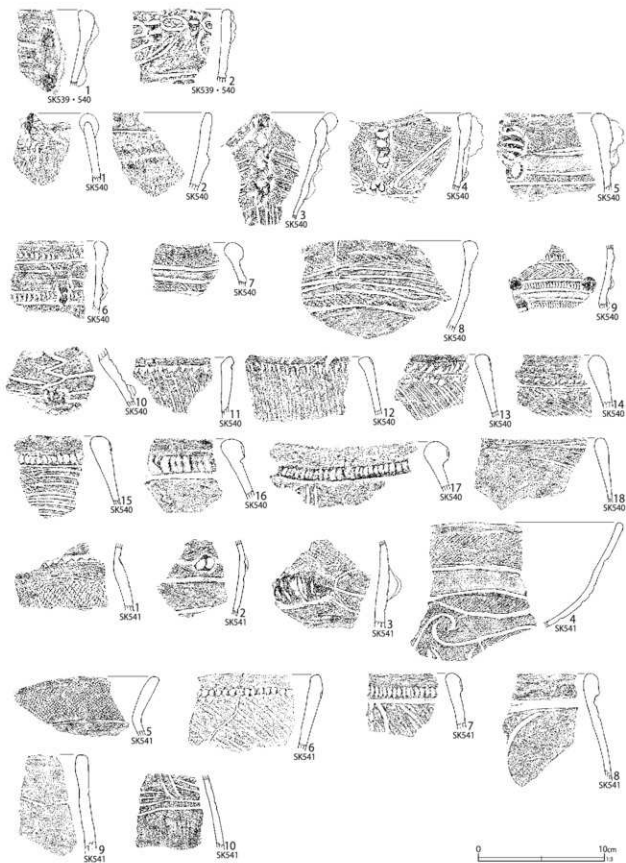
第439図 土曜出土土器 (72)



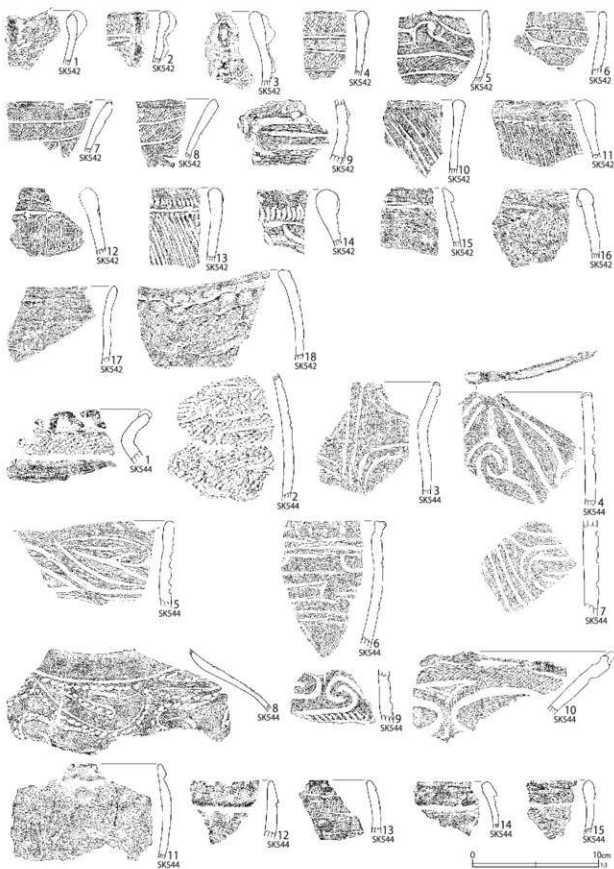
第440図 土城出土土器 (73)



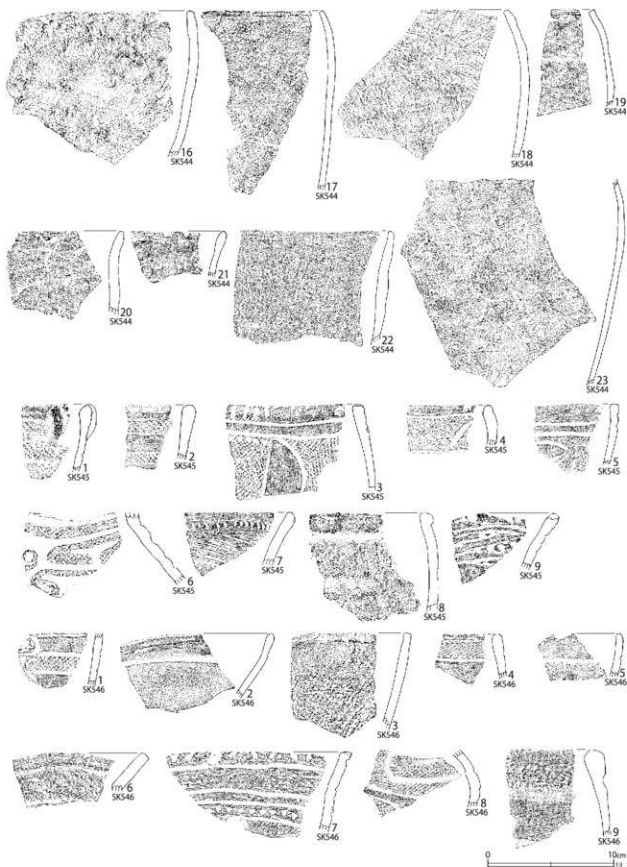
第441图 土壤出土土器 (74)



第442図 土曜出土土器 (75)



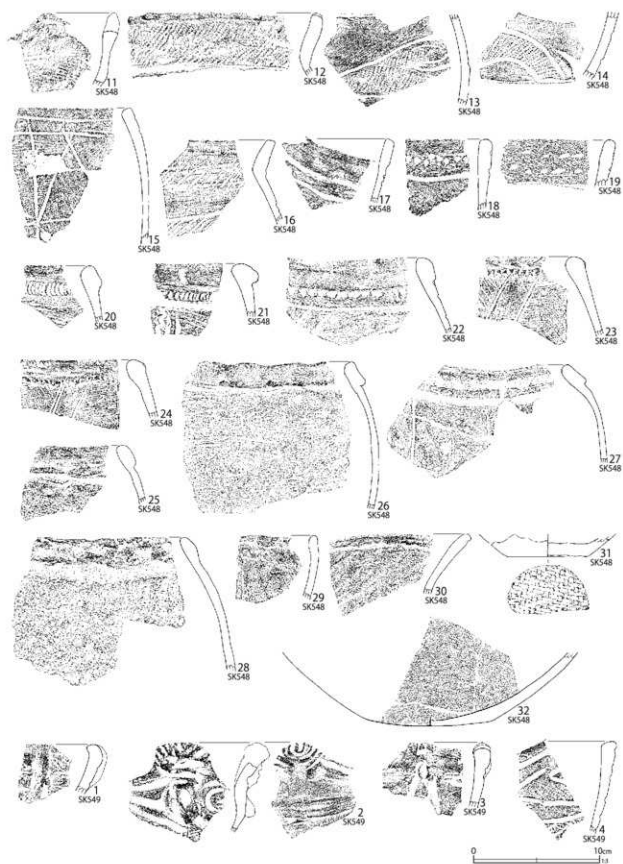
第443图 土壙出土土器 (76)



第444图 土城出土土器 (77)



第445図 土壇出土土器 (78)



第446図 土城出土土器 (79)



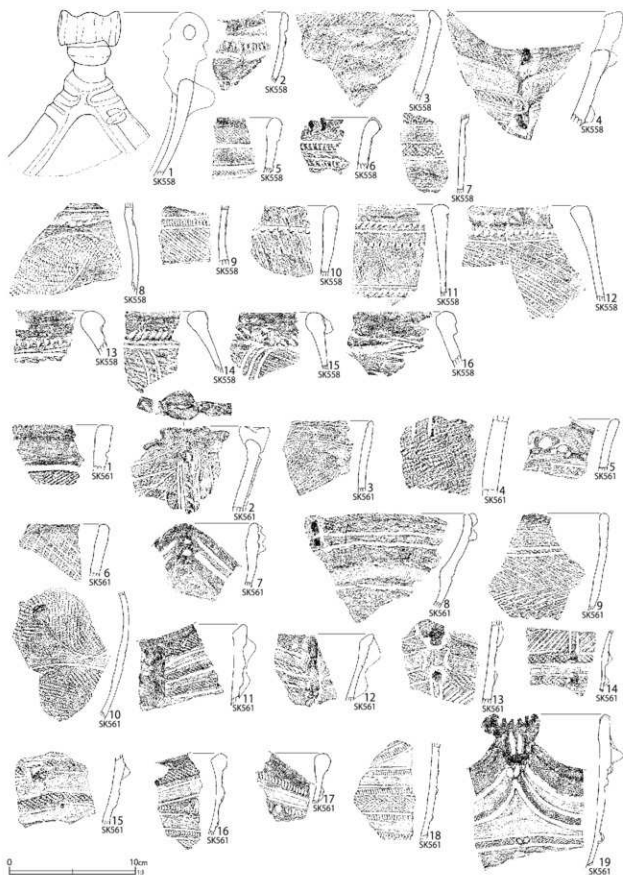
第447図 土曜出土土器 (80)



第448図 土城出土土器 (81)



第449図 土壇出土土器 (82)



第450図 土城出土土器 (83)



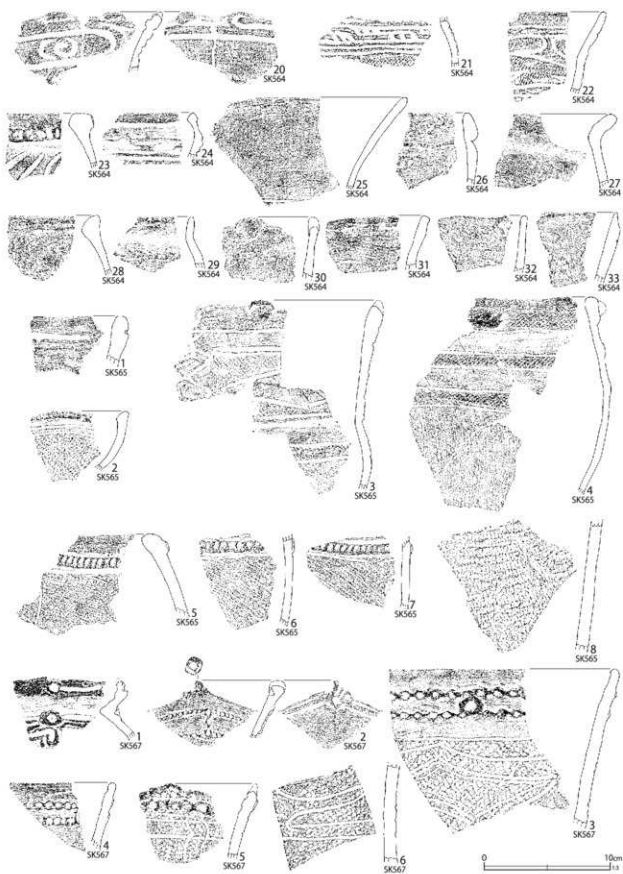
第451図 土壇出土土器 (84)



第452図 土城出土土器 (85)



第453图 土壤出土土器 (86)



第454図 土城出土土器 (87)



第455図 土曜出土土器 (88)



第456图 土城出土土器 (89)



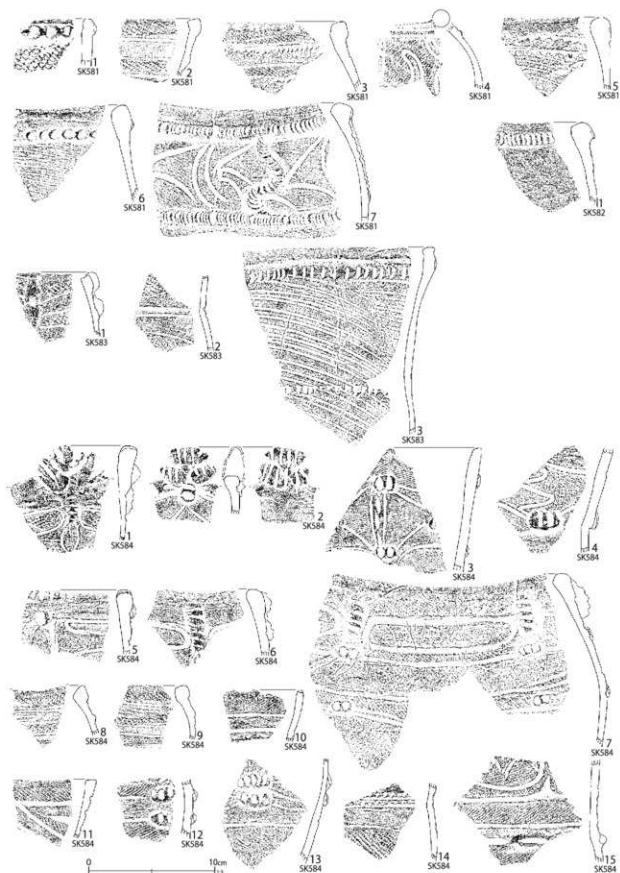
第457図 土壇出土土器 (90)



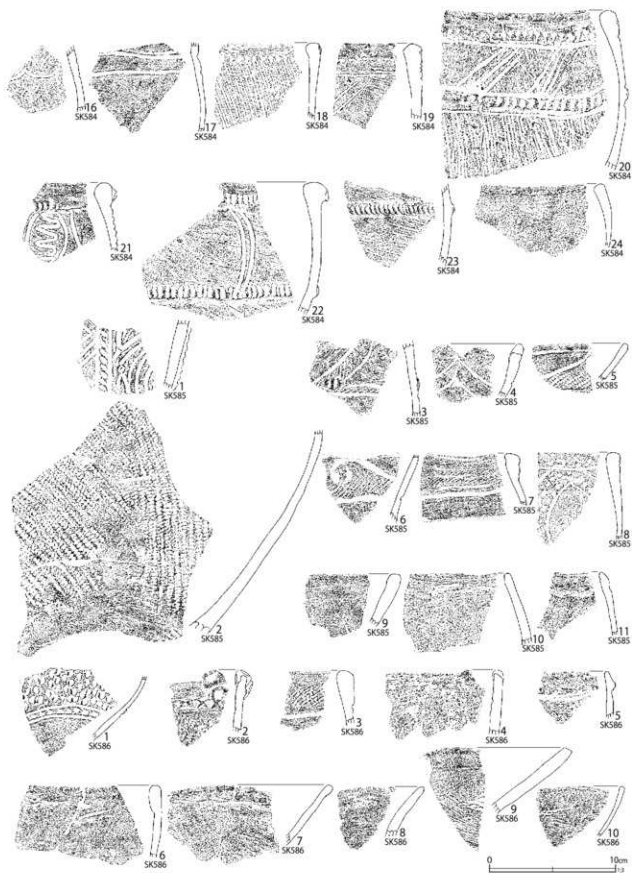
第458図 土城出土土器 (91)



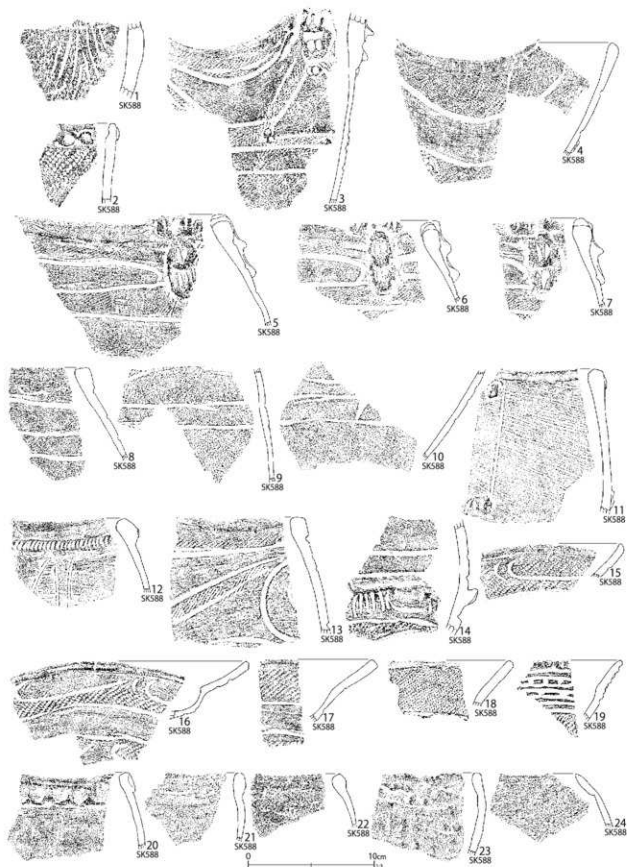
第459図 土曜出土土器 (92)



第460図 土城出土土器 (93)



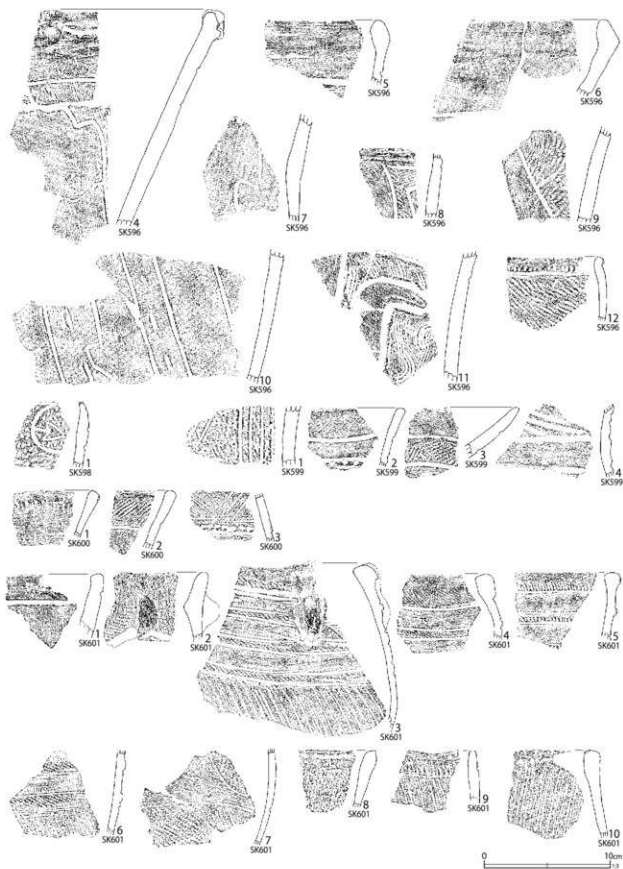
第461図 土曜出土土器 (94)



第462図 土壇出土土器 (95)



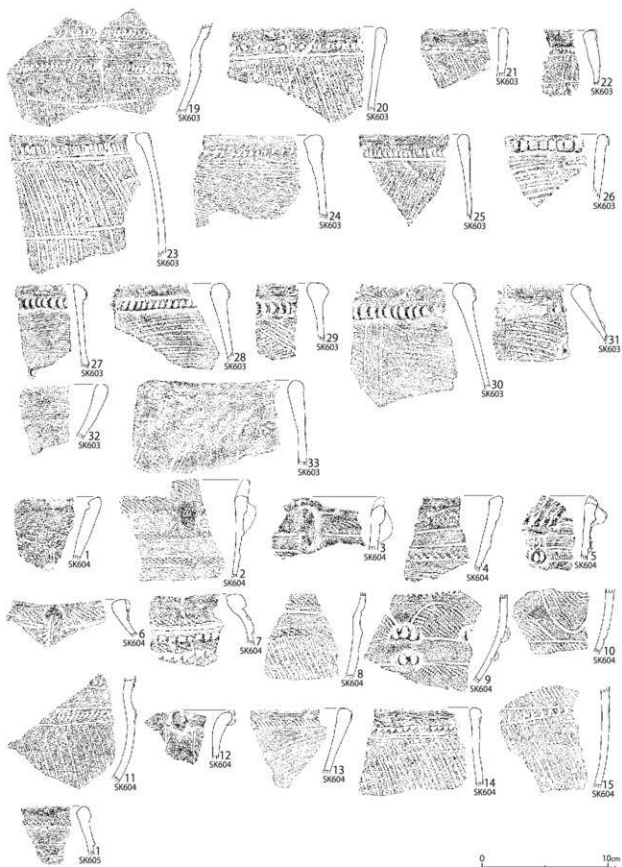
第463図 土壌出土土器 (96)



第464図 土城出土土器 (97)



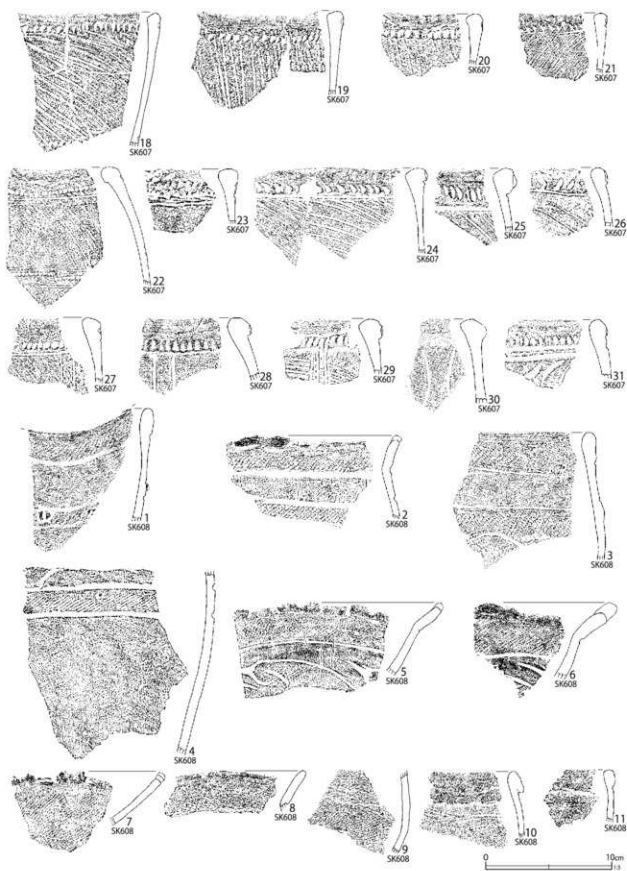
第465図 土壇出土土器 (98)



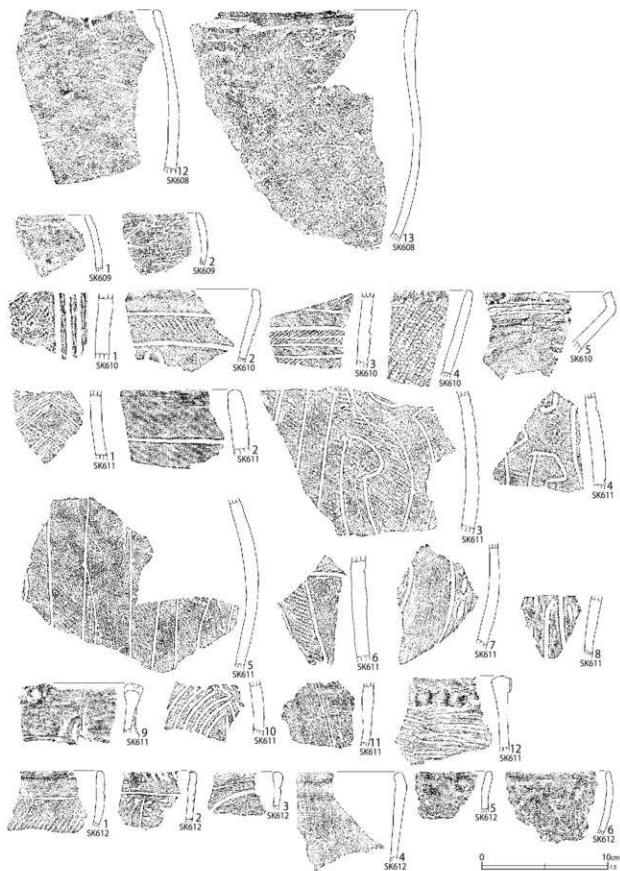
第466図 土城出土土器 (99)



第467図 土壙出土土器 (100)



第468図 土壇出土土器 (101)



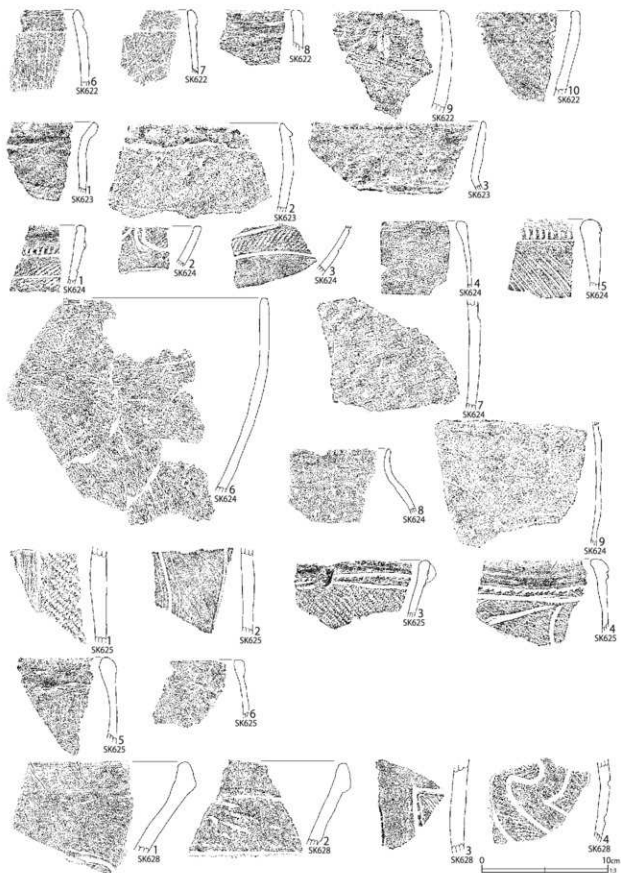
第469図 土壙出土土器 (102)



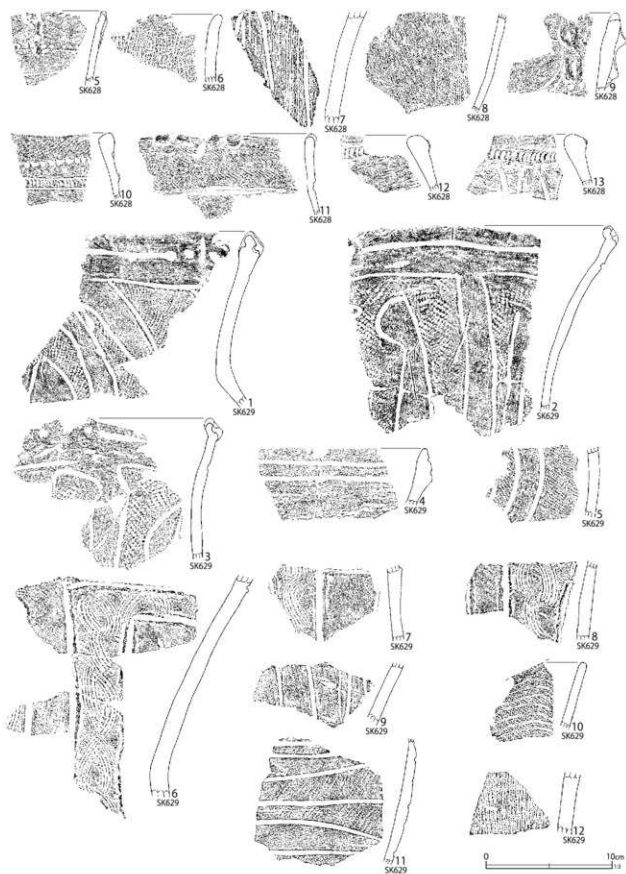
第470图 土坑出土土器 (103)



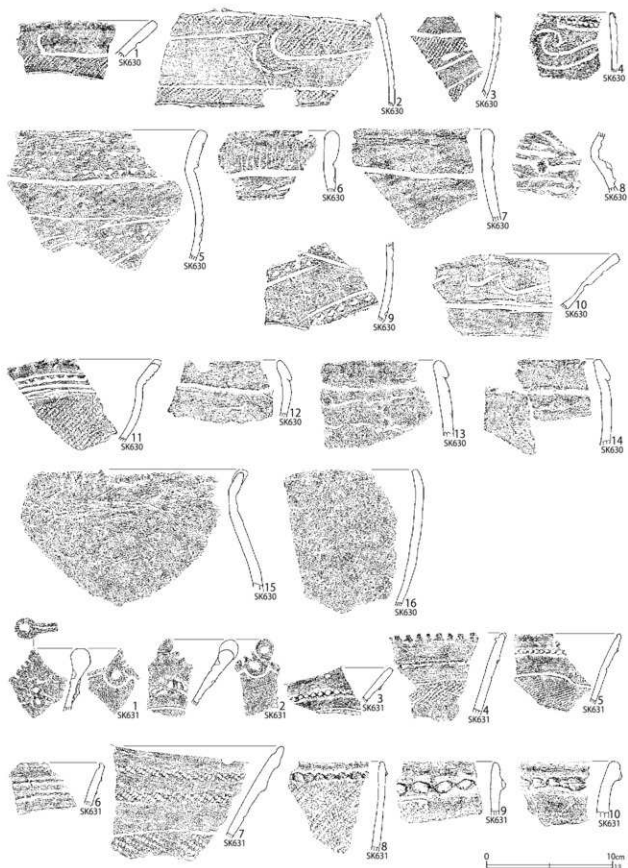
第471图 土壙出土土器 (104)



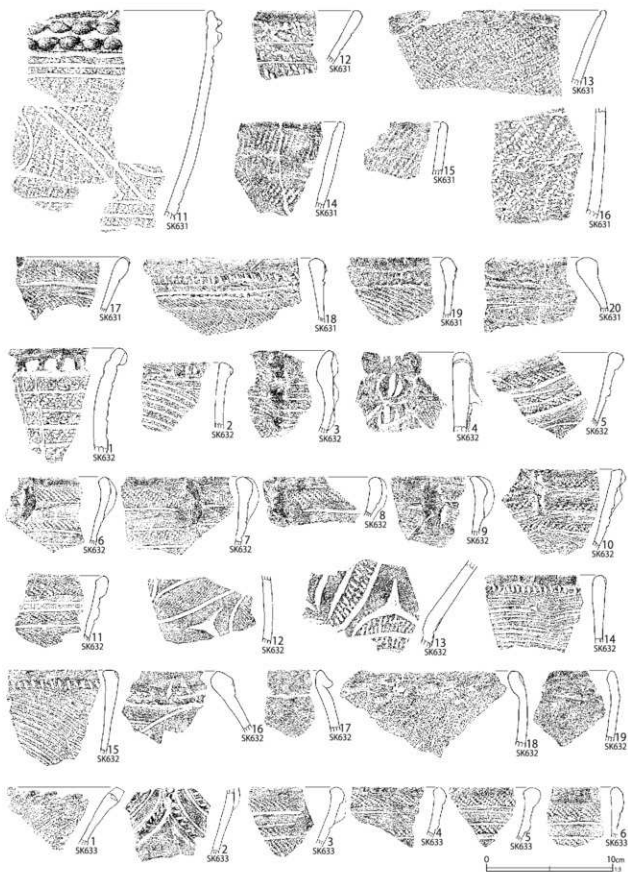
第472图 土城出土土器 (105)



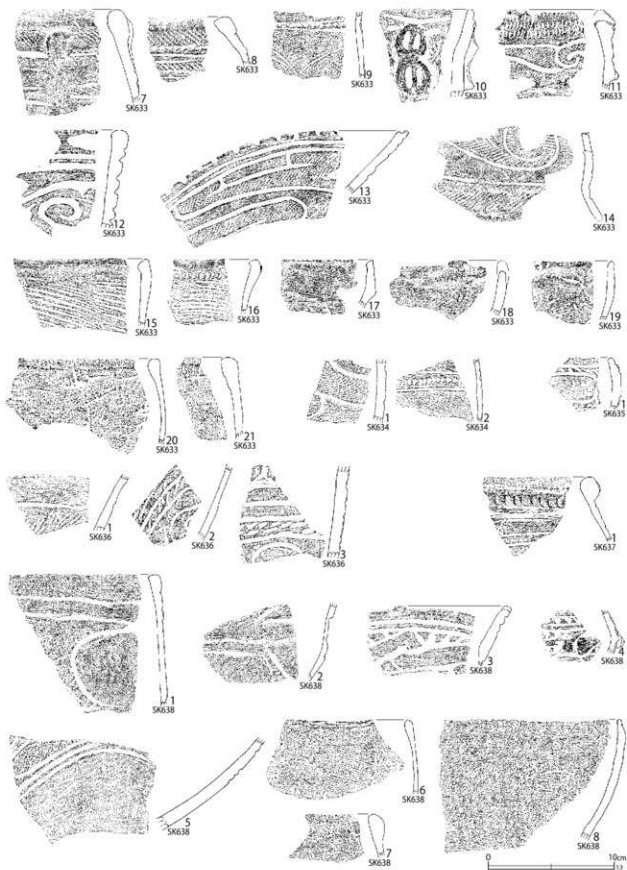
第473图 土坑出土土器 (106)



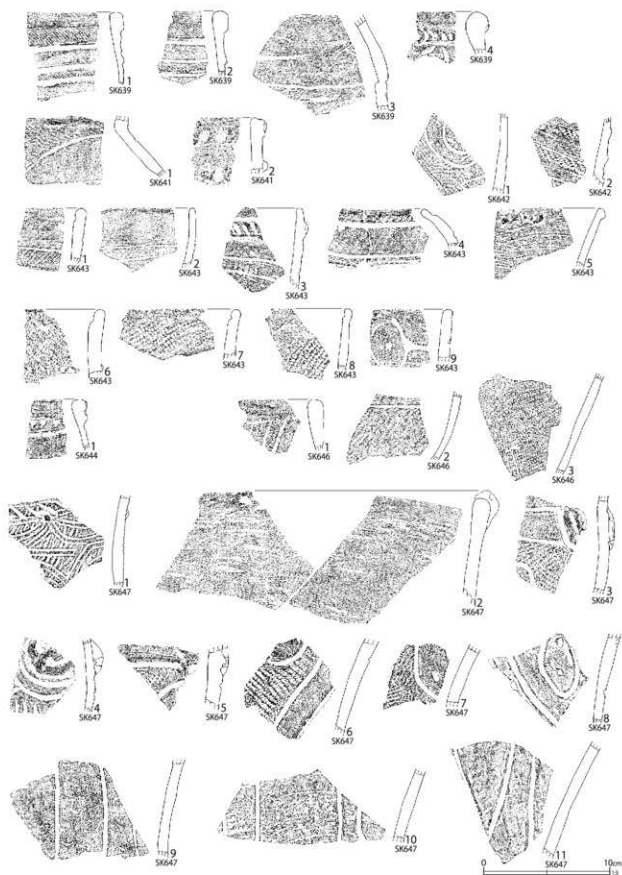
第474图 土城出土土器 (107)



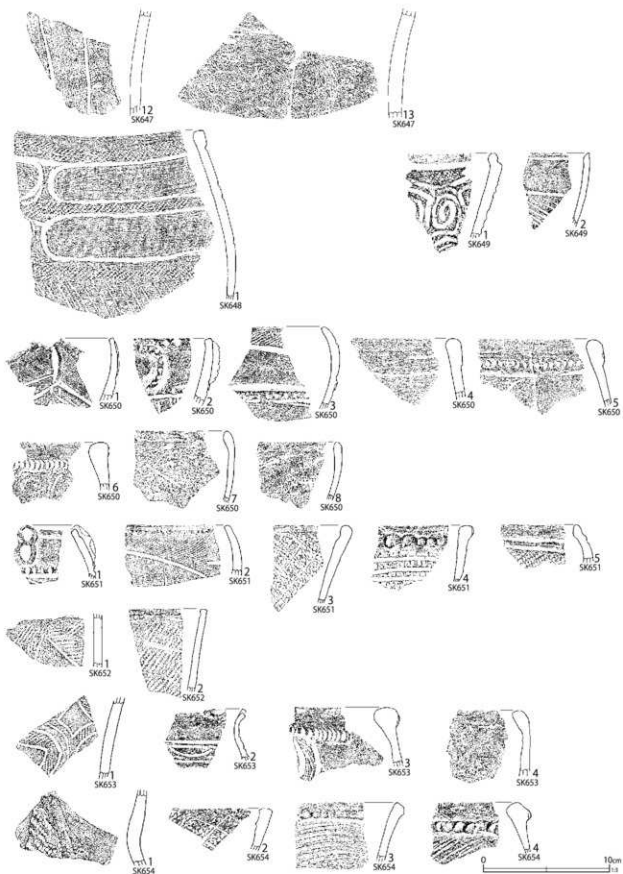
第475図 土壙出土土器 (108)



第476図 土壇出土土器 (109)



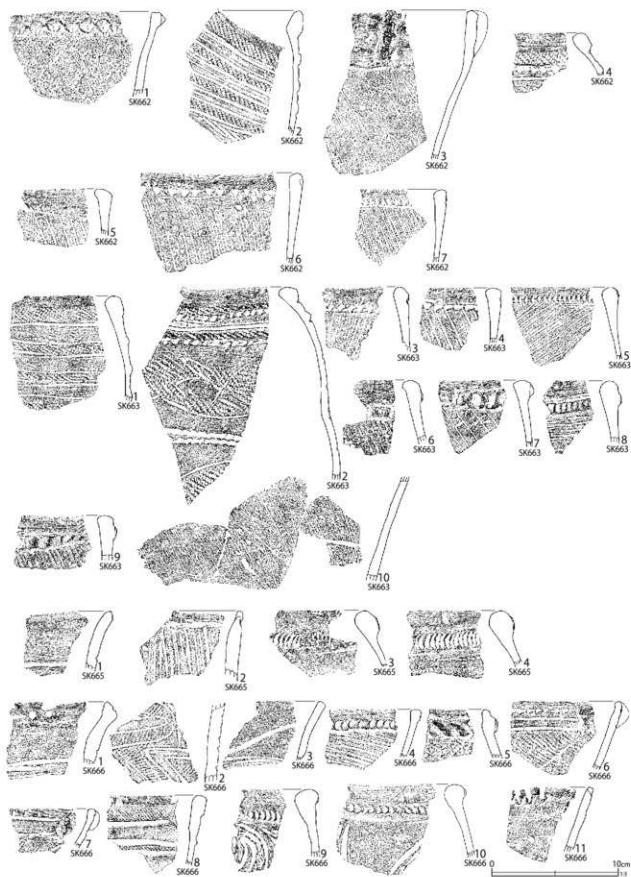
第477図 土壙出土土器 (110)



第478图 土罐出土土器 (111)



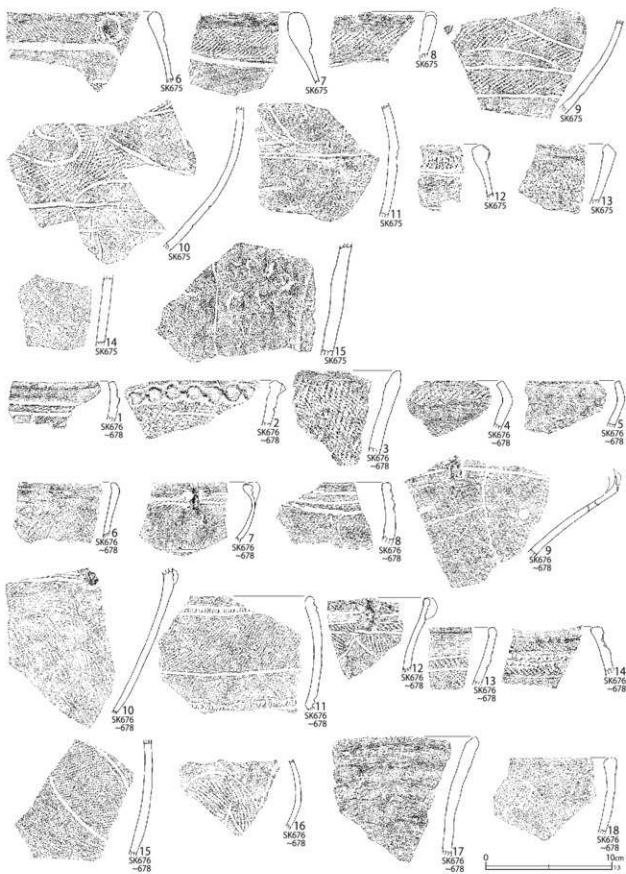
第479図 土壇出土土器 (112)



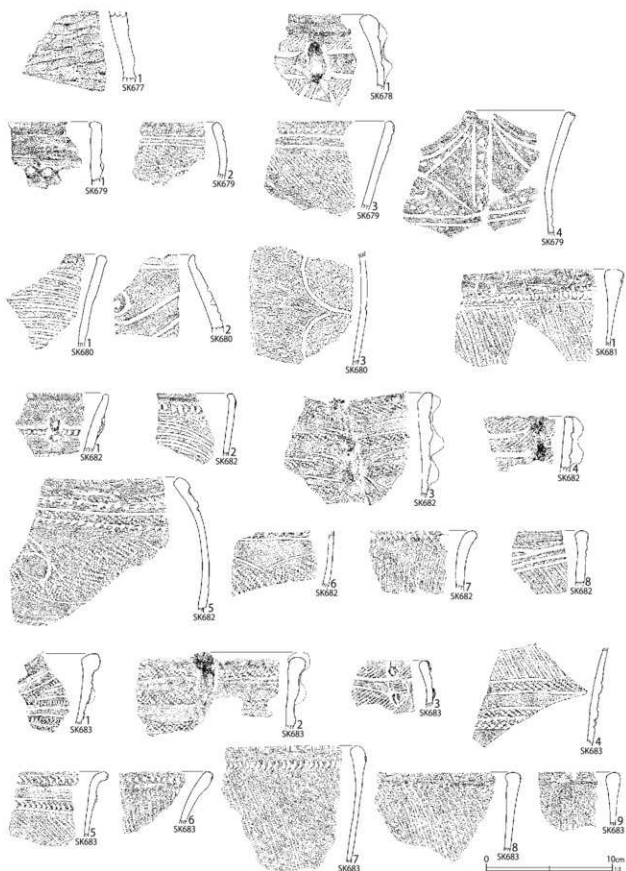
第480图 土城出土土器 (113)



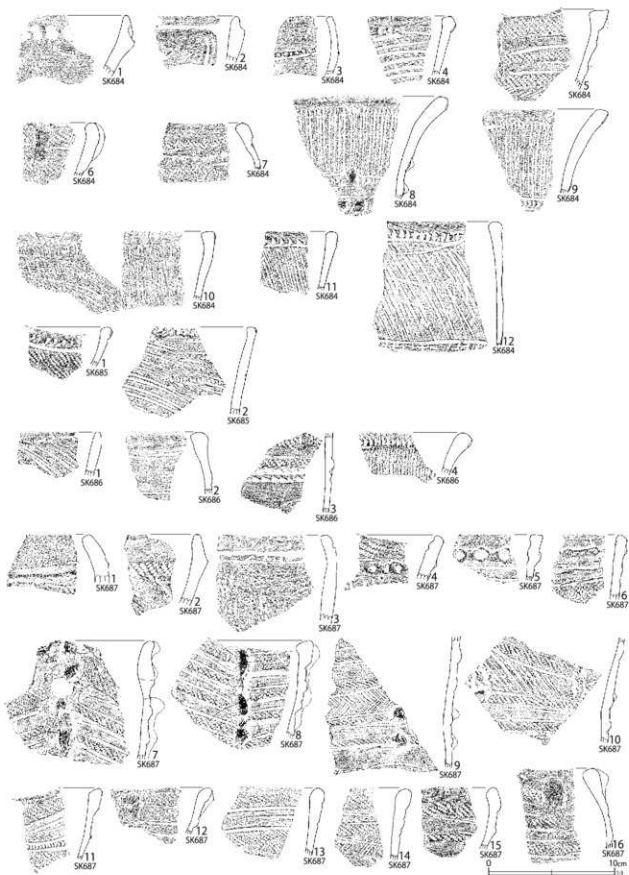
第481图 土壙出土土器 (114)



第482图 土城出土土器 (115)



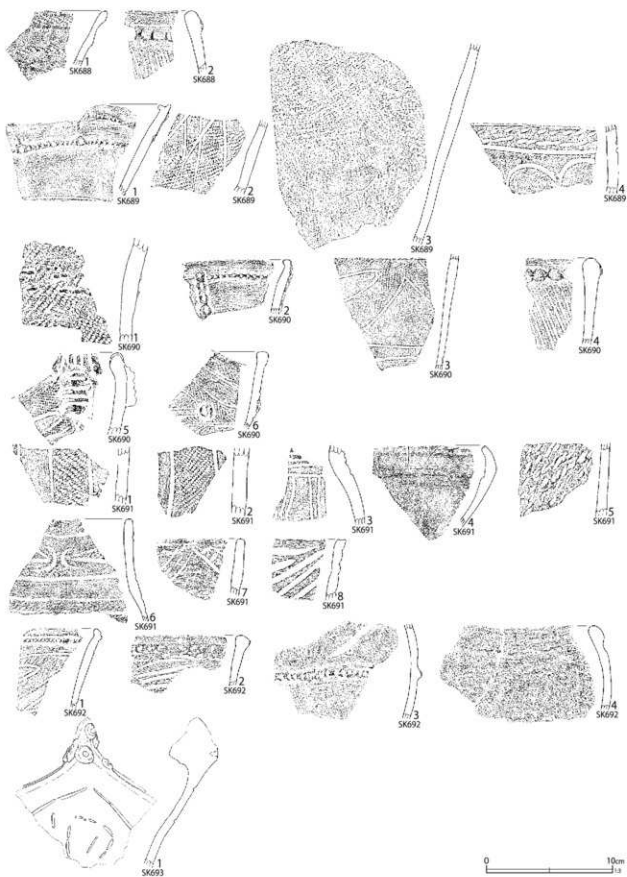
第483图 土坑出土土器 (116)



第484图 土壙出土土器 (117)



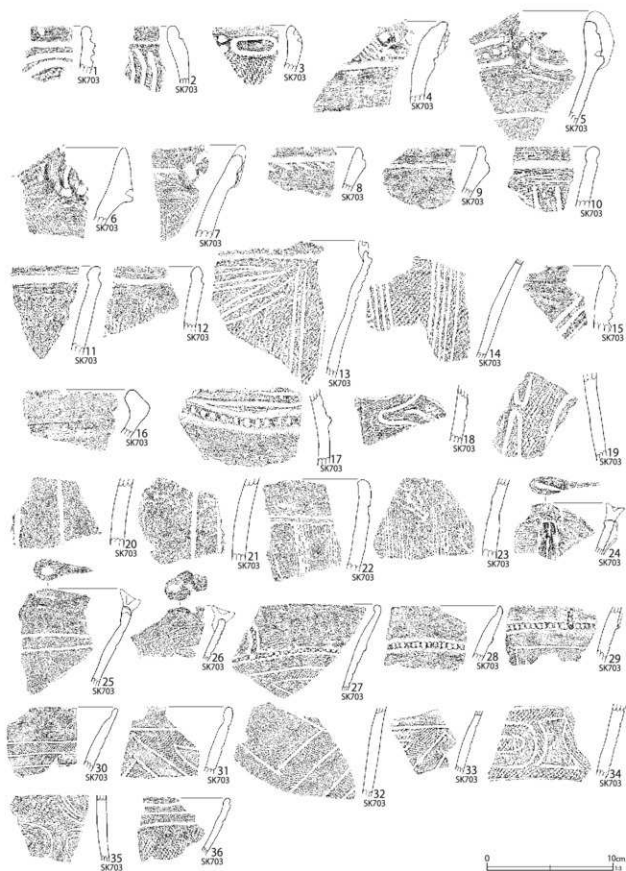
第485図 土壇出土土器 (118)



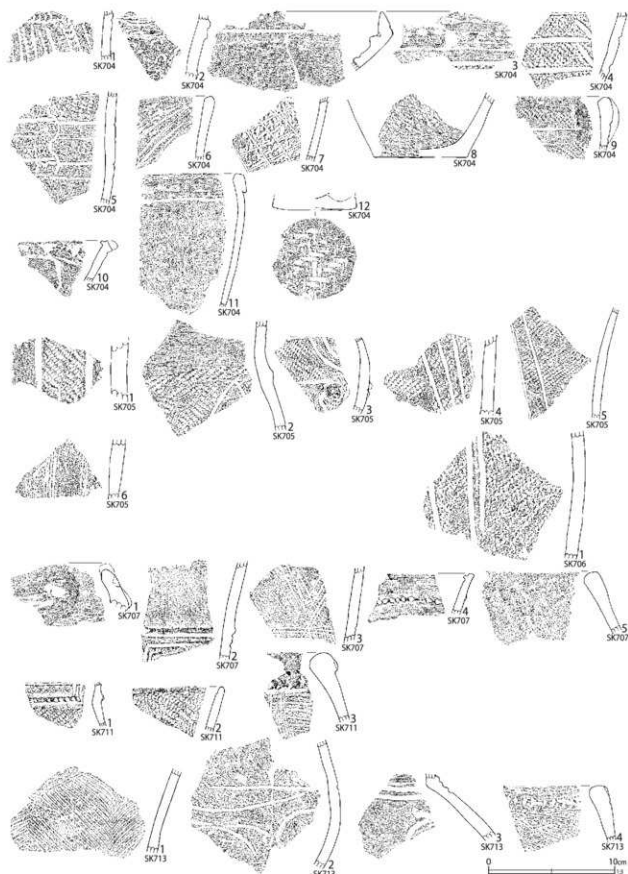
第486图 土城出土土器 (119)



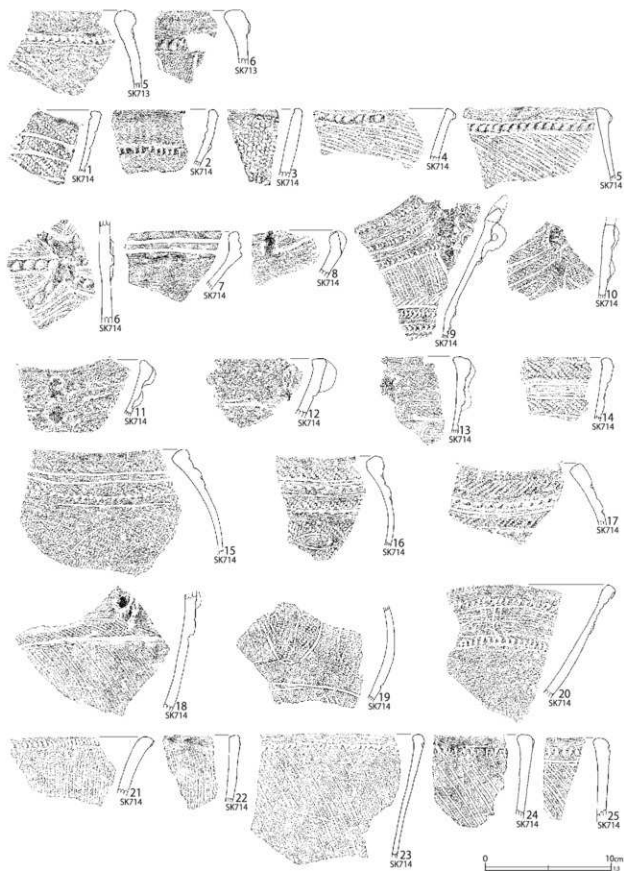
第487図 土壙出土土器 (120)



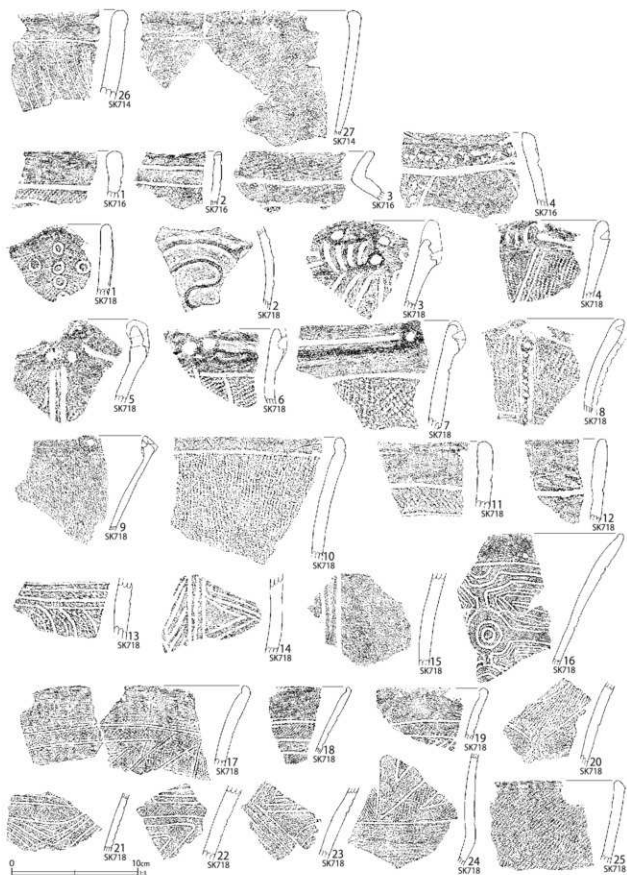
第488図 土壇出土土器 (121)



第489図 土壙出土土器 (122)



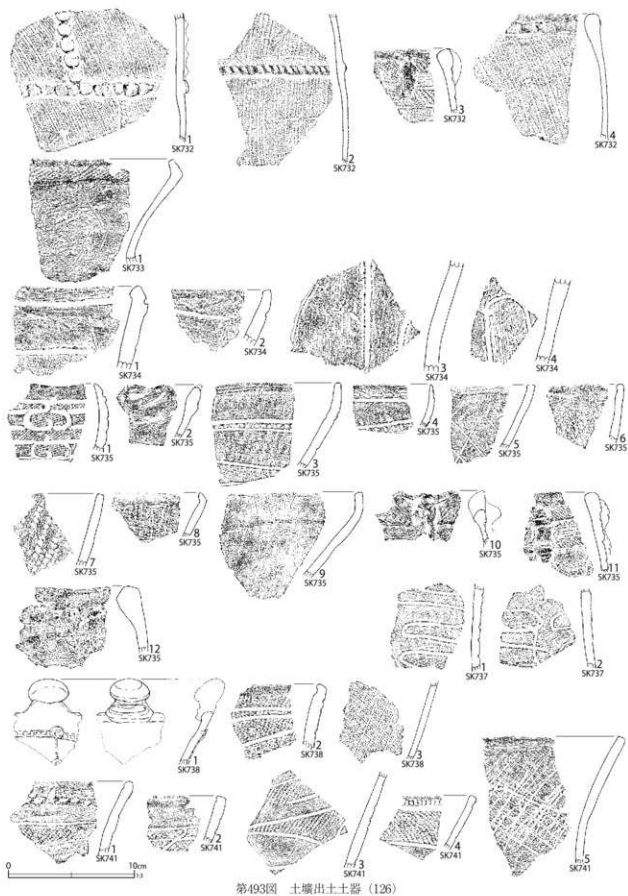
第490図 土壙出土土器 (123)



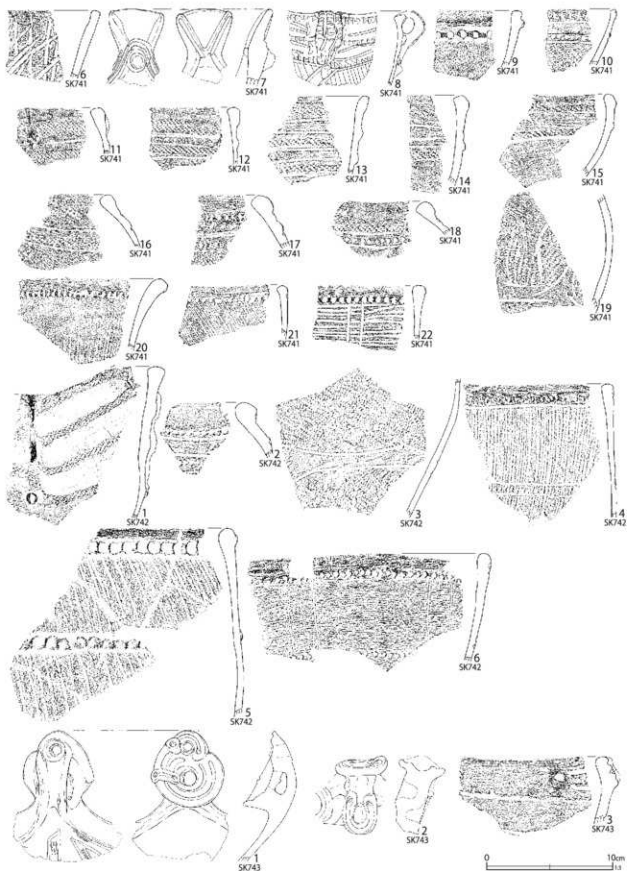
第491図 土壙出土土器 (124)



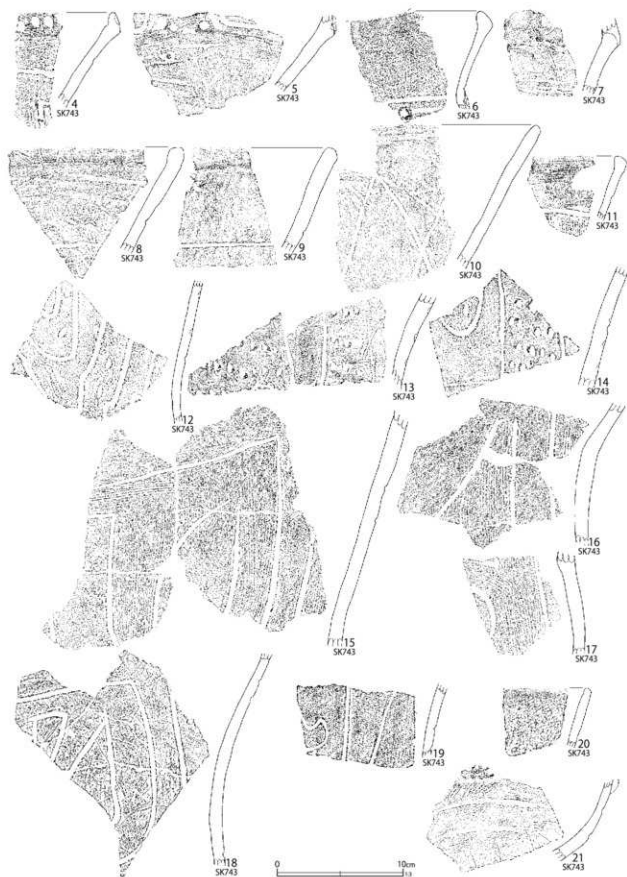
第492図 土織出土土器 (125)



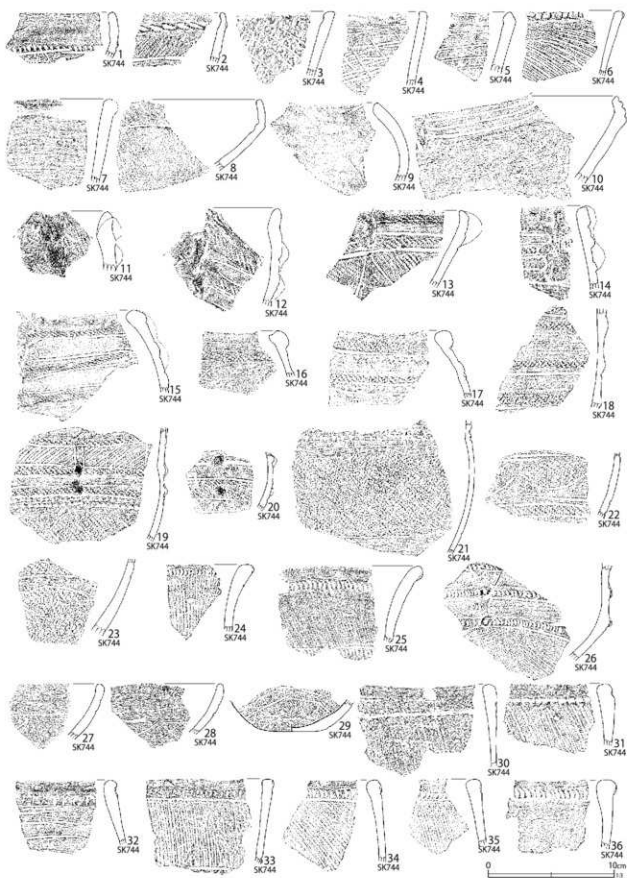
第493图 土壤出土土器 (126)



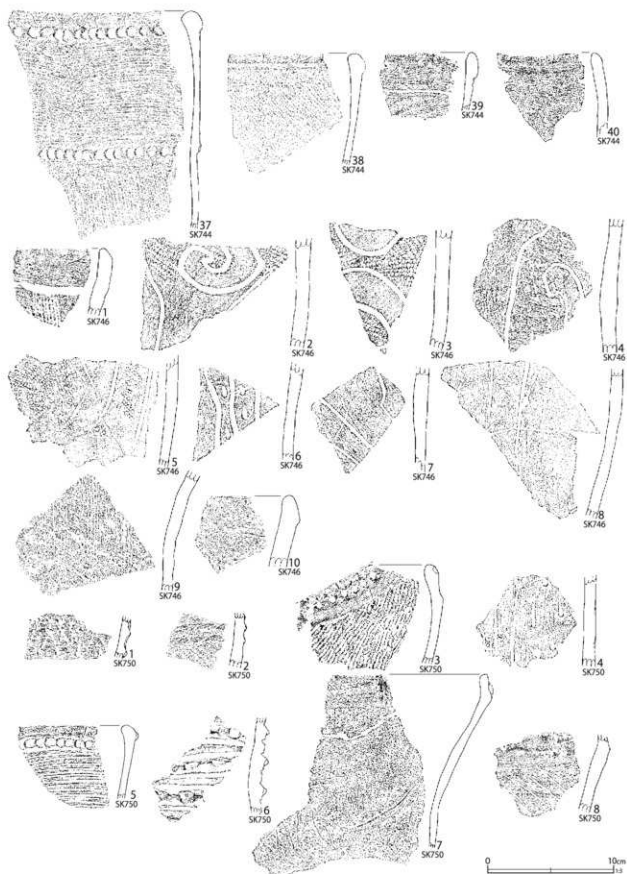
第494図 土壇出土土器 (127)



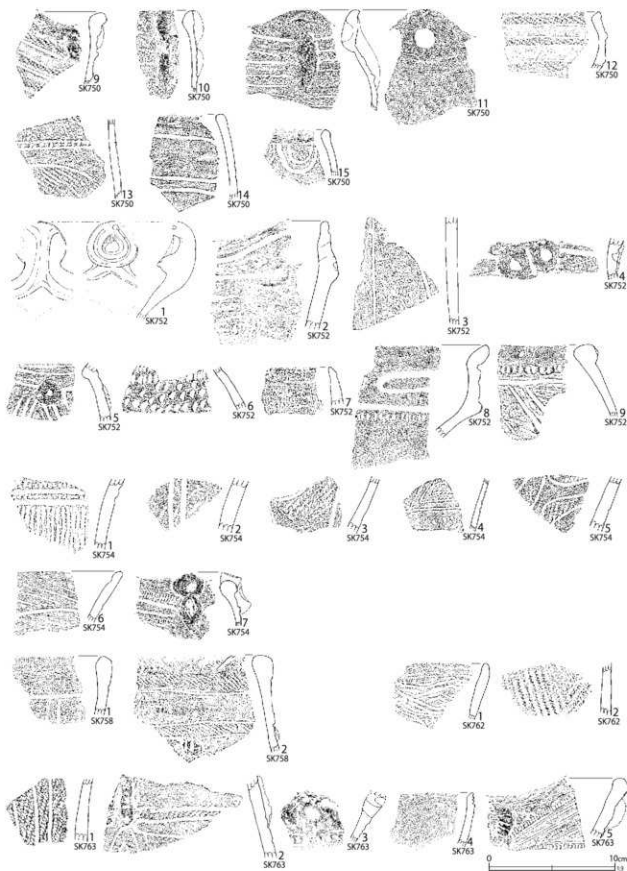
第495図 土壙出土土器 (128)



第496图 土城出土土器 (129)



第497図 土壙出土土器 (130)



第498図 土壙出土土器 (131)



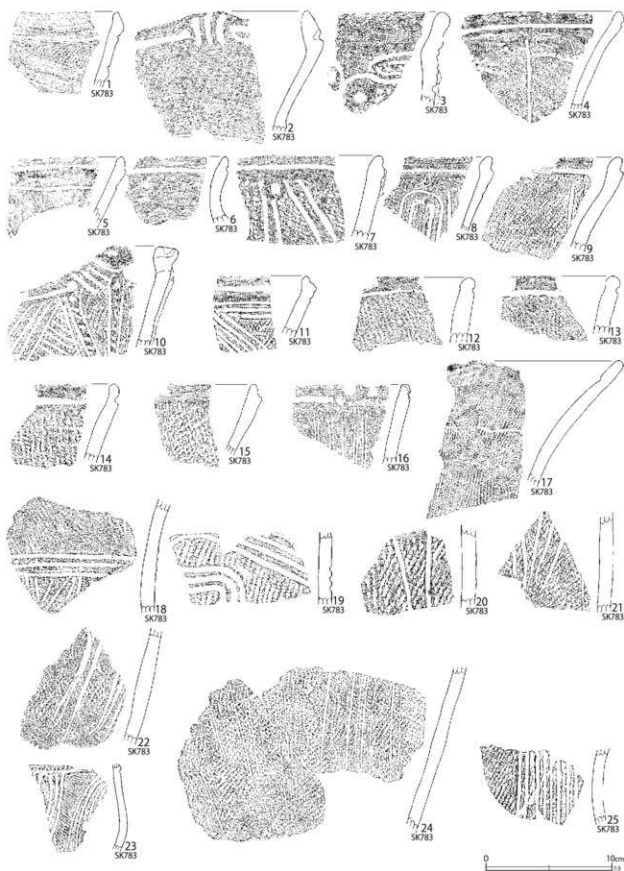
第499图 土坑出土土器 (132)



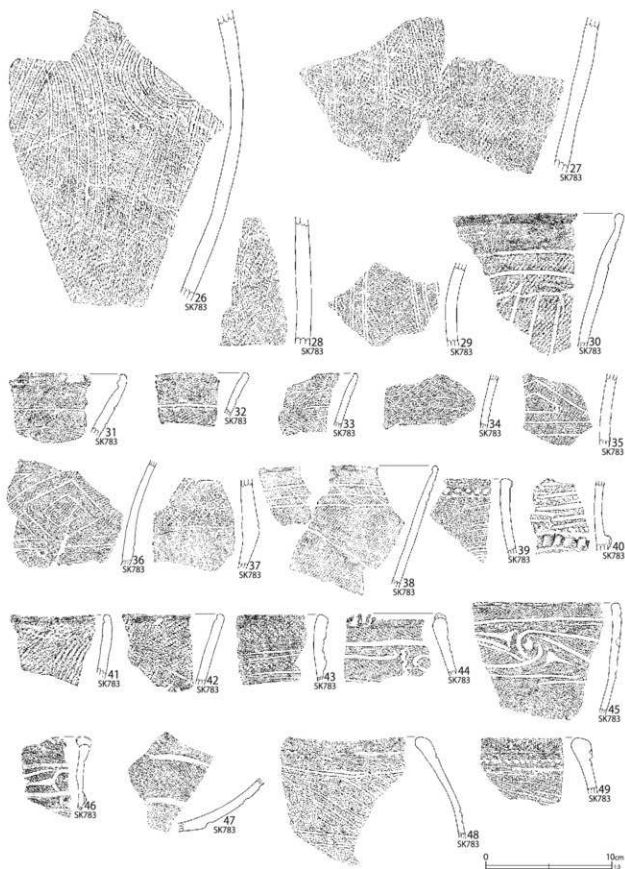
第500图 土城出土土器 (133)



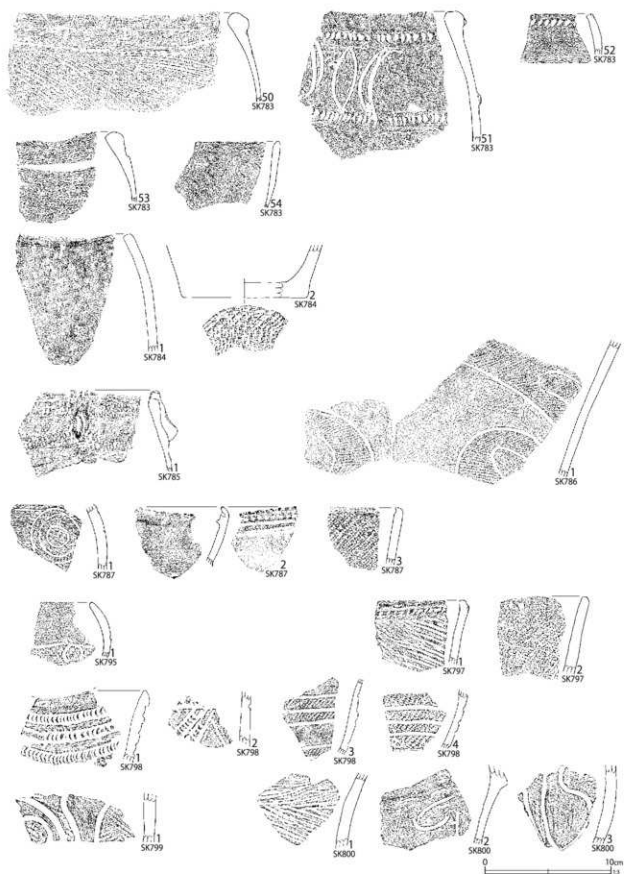
第501図 土壙出土土器 (134)



第502図 土壇出土土器 (135)



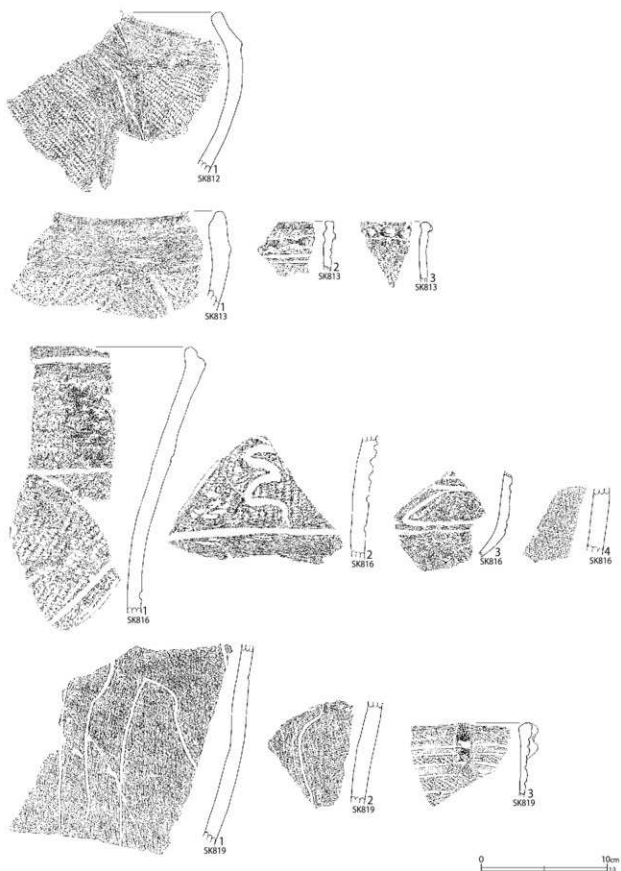
第503図 土壙出土土器 (136)



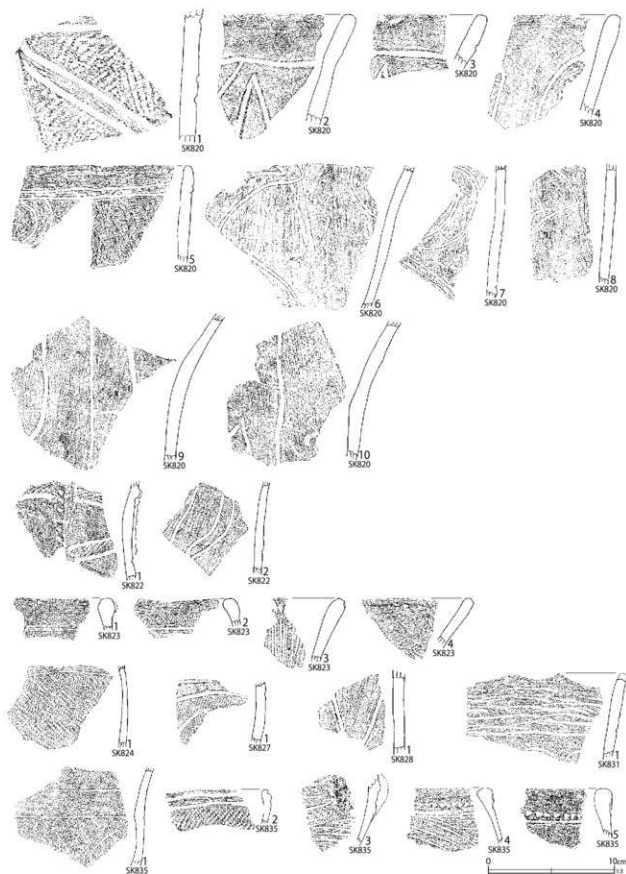
第504図 土壇出土土器 (137)



第505図 土壙出土土器 (138)



第506図 土壇出土土器 (139)



第507図 土壙出土土器 (140)

(4) 遺物集中出土土器

遺物集中1出土土器 (第508図1～第510図26、第512・513図)

1・2は水平口縁の深鉢である。1は胴下半部がやや膨れ、胴中段にくびれを持って、口縁は内湾しつつ立ち上がる。上下を平行沈線で区画した文様帯を胴上半部に配し、単沈線の入り組み三叉文を描く。安行3c式である。2は胴下半部が強く張り出し、胴中段にくびれを持って、口縁は直線的に立ち上がる。胴上半部に文様帯を持ち、鋭角な波頭文と弧線文を交互配置して、下端を単沈線で区画している。安行3c式である。

3は波状口縁の深鉢である。5単位の波状口縁をなすものとみられ、波頂部は台形でやや肥厚する。胴下半部は強く張り出し、胴中段にくびれを持って、口縁はやや外反しつつ立ち上がる。胴上半部に文様帯を持ち、波状の沈線で器面を三角形に区画し、独立した入り組み三叉文を配置している。文様帯下端は平行沈線+複列の列点文で区画している。安行3d式であろう。

4～7は台付き鉢である。4は中段が丸く膨らむ脚台であったとみられ、裾が大きく「ハ」の字に開いている。中段には平行沈線による波状の区画を巡らせ、下段には平行沈線の逆U字モチーフと融合している。安行3cから3d式であろう。5は中段がやや丸く張り、玉抱き三叉文を模した透かし文様を配して、上下を平行沈線+列点文で区画する。裾は小さく「ハ」の字に張り出して、放射状の沈線文を巡らせる。安行3c式であろう。6は下段から裾部分のみ残存する。中段が張り出し、裾が扁平に大きく張り出す安定感のあるプロポジションである。裾には鋸歯文を2段に巡らせて菱形の区画を構成し、内部に小入り組み文を配する。安行3cから3d式であろう。7は底部から胴部にかけて内湾しつつ立ち上がり、胴部の文様帯下端を区切る横位の沈線が見て取れる。安行3cから3d式であろう。

8は小型の壺である。上げ底で、胴中段が平坦盤状に張り出し、頸部は「コ」の字にくびれて、口縁は直線的に開く。口端上に小突起を配する。晩期安行式に伴う土器であろう。

9～11は浅鉢である。9は胴部から口縁にかけて直線的に開き、口端上に粘土紐を巻き付けた小突起を配する。平行沈線による弧線文を上下対向させて縄文を充填する。底部は周縁に沈線を巡らせ、胴部と同様の弧線文が巡るものとみられる。安行3aから3b式であろう。10の底面は楕円形で、底部周縁に高台状の隆帯を巡らせる。胴下半部には帯縄文を巡らせる。安行3aから3b式であろう。11は無文の浅鉢で、胴部から口縁にかけて内湾しつつ立ち上がり、口端上に二叉の突起を2個一単位で配する。

12は無文の壺で、肩部は平板状で、口縁は外反しつつ立ち上がる。

13は波状口縁の深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、頸部は「く」の字にくびれて、口縁は内湾しつつ立ち上がる。波頂部は台形で、口縁に沿って平行沈線を巡らせ、これと対向するように胴中段にも弧状文を巡らせて、文様帯下端を3本沈線で区画して、押圧を伴うボタン状貼り付け文を配する。波頂部と突起との間を縦位の紡錘文で連繫する。地文は鋭利な工具の刺突文である。北関東系の天神原式である。

14は小型の深鉢で、胴部は樽形で、頸部がくびれて口縁は内湾しつつ立ち上がる。水平口縁上に刻みを巡らせ、口縁外面に平行沈線を巡らせて刻みを施す。胴上半部に幅の狭い文様帯を持ち、直線化した羊歯状文を描く。大洞C1式であろう。

15は小型の壺であろう。胴上半部に粗放な雲形文を描いて縄文を施文し、上下を平行沈線で区画する。胴下半部は無文である。大洞C1式であろう。

16～19は無文の深鉢である。16は二叉の山形波状口縁の深鉢である。17～19は水平口縁である。17は胴上半部が「く」の字に張り出し、頸部でく

びれて口縁は直線的に開く。18の胴部は中段が張る紡錘形で、頸部がくびれて口縁は短く外反する。19は内湾口縁で、胴上半部に最大径を持つ。

20～26は無文の深鉢である。21・22は底部直上にくびれを持つ。23は裾が若干張り出す。

第512・513図は破片資料である。

1～4は安行3 b式で、1は姥山系の土器である。5～12・23は安行3 c式、13～15は安行3 d式である。16・17は安行3 cから3 d式の深鉢胴部である。

18は丸底の鉢、19は注口土器でいずれも安行3 b式、20・30は大洞C 1式であろう。22は天神原式か。

24～58は無文土器である。24・25は口端上に突起を持つ。26は波状口縁、27～31は口端上に押圧を巡らせる。32～42は折り返し口縁である。43～49は頸部屈曲する。

遺物集中2出土土器（第514図）

1は曾谷・高井東式、2は安行3 aから3 b式、3は細密沈線文の安行3 b式である。4～6は安行3 c式、7は内文を持つ浅鉢で、安行3 d式か。8は無文土器である。

遺物集中3出土土器（第510図27、第514図）

27は台付き鉢である。ソロバン玉形で、裾が「ハ」の字に張るものとみられる。波状の沈線で器面を区画し、対向三叉文を交互配置している。安行3 d式であろう。

第514図は破片資料である。

1は堀之内2式、2は遠部第一類で加曾利B 2式である。3は堀之内式の粗製深鉢、4は加曾利B 2式か。5は安行3 aから3 b式で、壺の肩部である。

8～13・15は安行3 c式で15は台付き鉢、6・7は安行3 d式である。14は安行3 cから3 d式の胴部である。16～23は無文土器である。16は口端上に押圧を施す。24は異系統の土器で、大洞C 2式であろう。

遺物集中4出土土器（第515図）

1は安行3 c式、2は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。

遺物集中5出土土器（第515図）

1・6は安行3 b式である。2・4・5は安行3 c式、3は安行3 d式であろう。

遺物集中6出土土器（第510図28・29、第515図）

28は波状口縁の深鉢である。波頂部に2個一単位の小突起を配する。胴上半部に文様帯を持ち、上下に弧線文を対向させて菱形の区画を構成し、肉彫り風の対向三叉文を描く。文様帯下端は平行沈線で区画する。安行3 d式であろう。

29は台付き鉢である。扁平なボウル状の胴部で、山形の波状突起に沿って刻み隆帯を巡らせて三角形の区画を構成する。胴部中段に文様帯を持って、粗大な工字文を描いている。大洞C 2式であろう。

第515図は破片資料である。

1は安行3 aから3 b式、2・3は無文土器である。

遺物集中7出土土器（第510図30～第511図37、第515～519図）

30は水平口縁の深鉢で、胴上半部に平行沈線の区画を巡らせ、口縁外面に平行沈線の弧状文を巡らせて三角形の区画を構成して円文を配する。安行3 cから3 d式である。

31は波状口縁の深鉢で、胴部中段に平行沈線+複列の列点文の区画を巡らせて、口縁から胴上半部までを文様帯とする。平行沈線+複列の列点文で大柄の工字文風のモチーフを巡らせて器面を分割し、対向三叉文を交互配置する。安行3 d式である。

32・33は台付き鉢であろう。32は内面に凹線を持つ二叉の波状口縁である。胴下半部は半球状で、胴部中段でS字に屈曲し、口縁外反する。胴部中段に平行沈線+複列の列点文の区画を巡らせて、口縁から胴上半部までを文様帯とする。波頂部を

起点にV字状の沈線を巡らせて器面を三角形に分割し、上に三叉文、下に対向弧線文を配して、列点文を充填する。安行3 d式であろう。

33は脚台で、「ハ」の字状に開く下端部である。中段は球状に膨れ、境に凹線を巡らせる。上下を沈線で区画した文様帯を持ち、入り組み文や対向三叉文を描いている。安行3 d式であろう。

34は壺で、胴部中段が「く」の字に張り出し、平行沈線と連続弧線文を巡らせて文様帯下端を区画する。胴上半部には対向三叉文を中心とした沈線文を描く。安行3 d式であろう。

35は折り返し口縁の深鉢で、胴部はわずかに内湾しつつ一本調子に開き、口縁は直立する。扁平で末端が反り返る折り返し口縁を2段重畳させる。晩期安行式に伴う土器であろう。

36・37は無文の深鉢底部である。

第515～519図は破片資料である。

1は花積下層式、2は堀之内式、3は加曾利B 1式である。4は遠部第二類、5は遠部第一類で

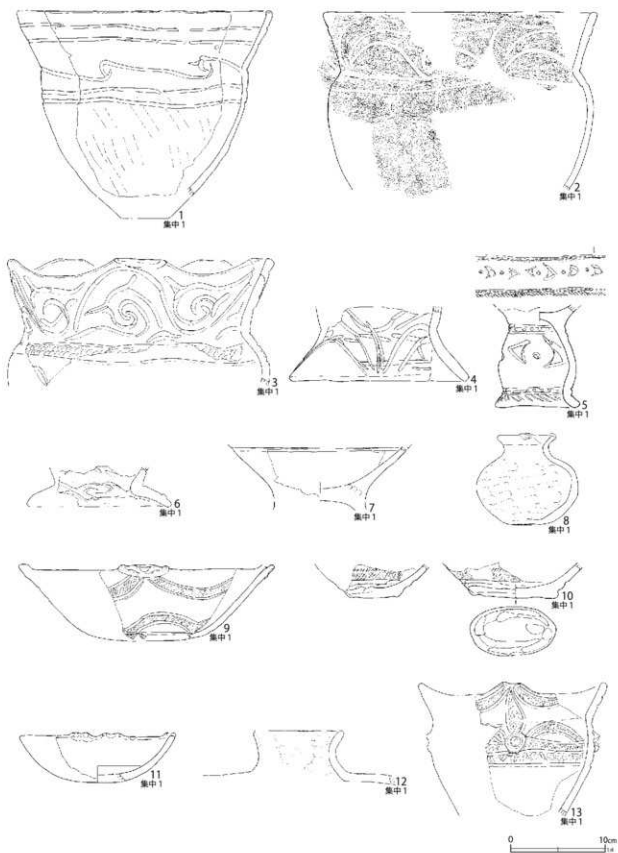
加曾利B 2式であろう。6は曾谷式である。7～10は安行3 b式で姥山系の土器である。

11～17は擦り消し縄文の土器で安行3 aから3 b式である。18・19は細密沈線文の安行3 b式である。20～29・34～65は安行3 c式である。30・66～68は安行3 d式である。31～33は北関東の天神原式である。69・70は安行3 cから3 d式の深鉢胴部である。

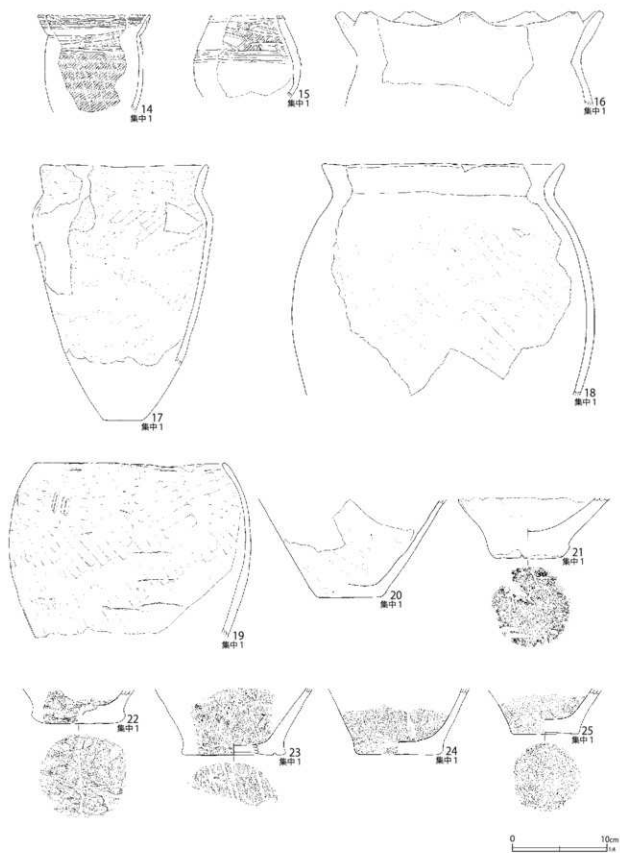
71～73は浅鉢で、安行3 aから3 b式である。74～78は台付き鉢で、75・76は安行3 c式、77は安行3 aから3 b式である。79は広口壺で安行3 a式である。

80～84は大洞系の土器で、84は大洞C 2式、他は大洞C 1式であろう。

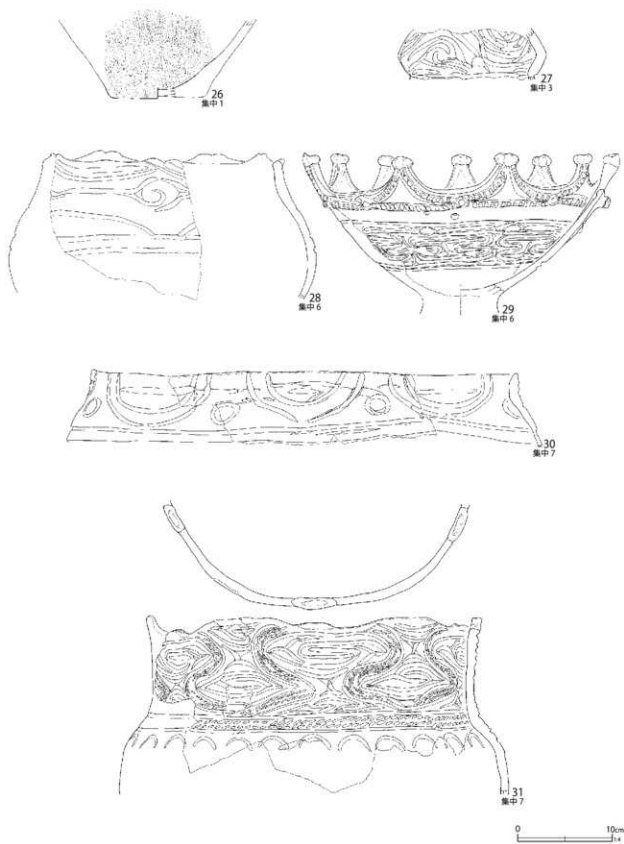
85～122は無文土器である。85は波状口縁、87は口端上に押圧を巡らせる。88～100は折り返し口縁である。123～125は底部で、木葉痕や網代痕を残す。



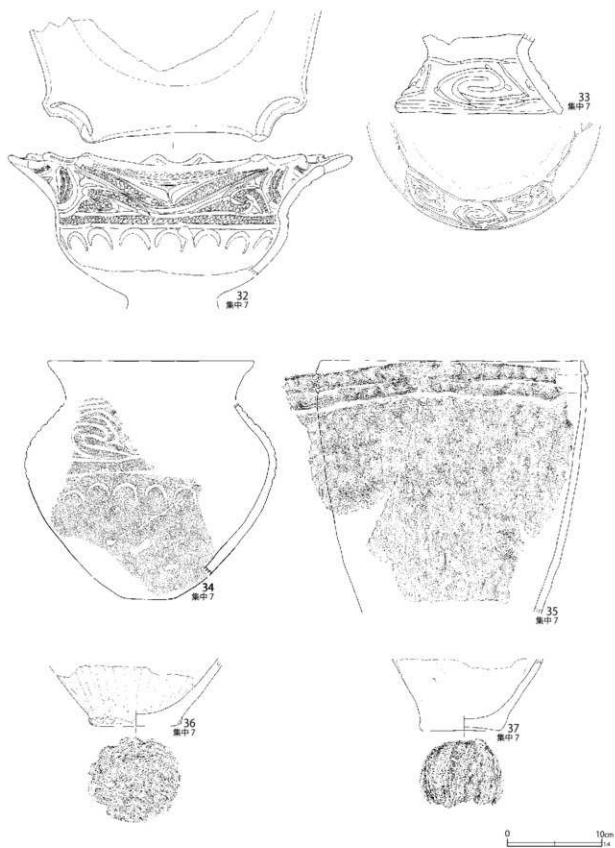
第508図 遺物集中出土土器 (1)



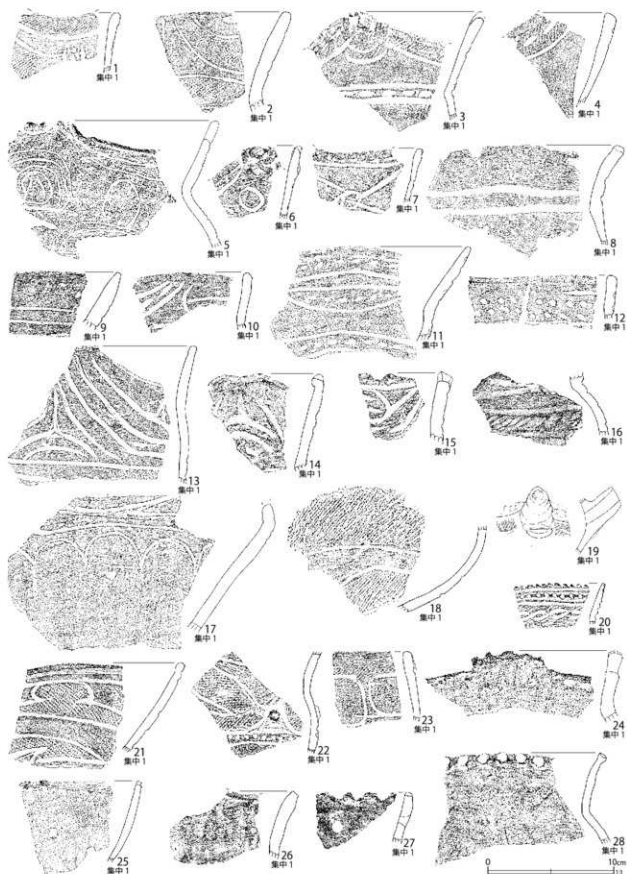
第509図 遺物集中出土土器 (2)



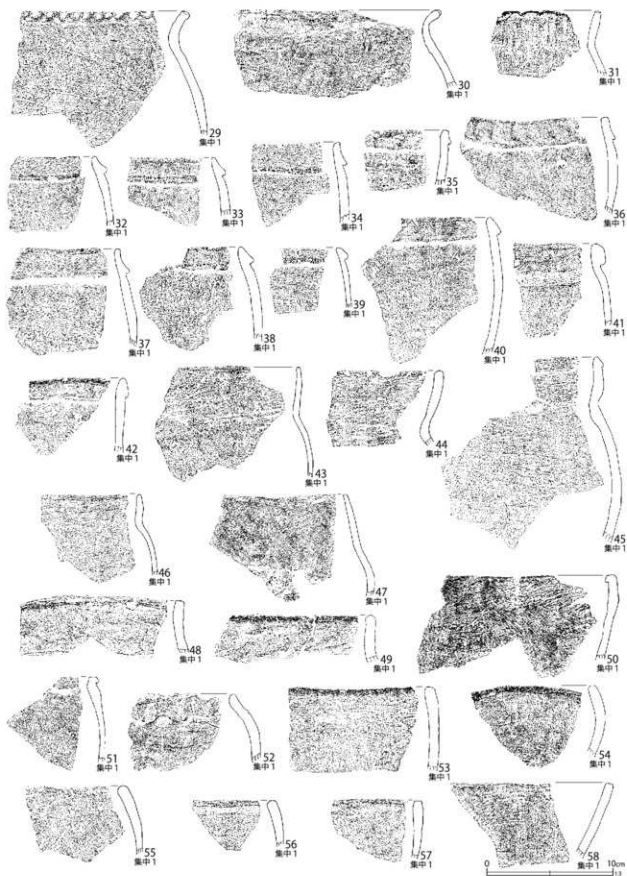
第510図 遺物集中出土土器 (3)



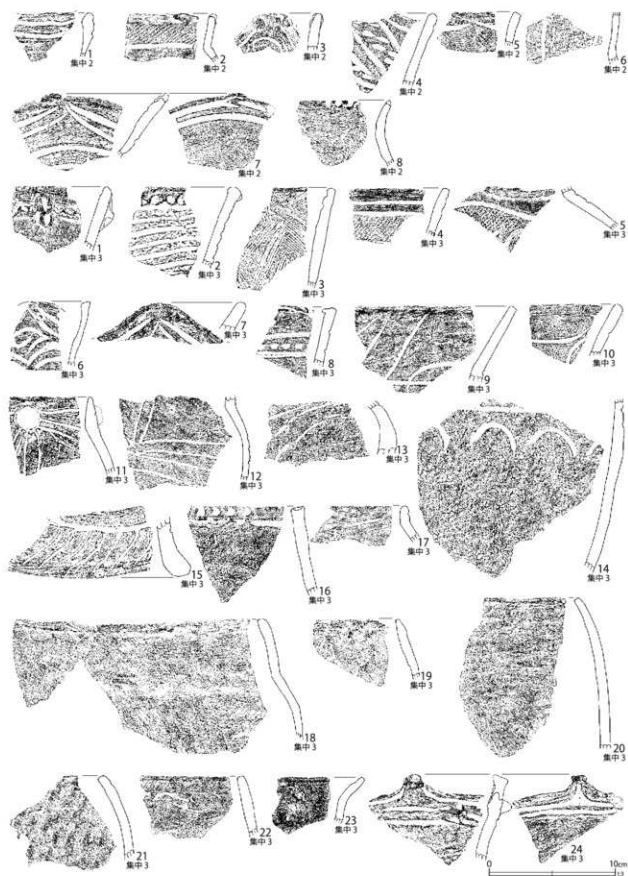
第511图 遺物集中出土土器 (4)



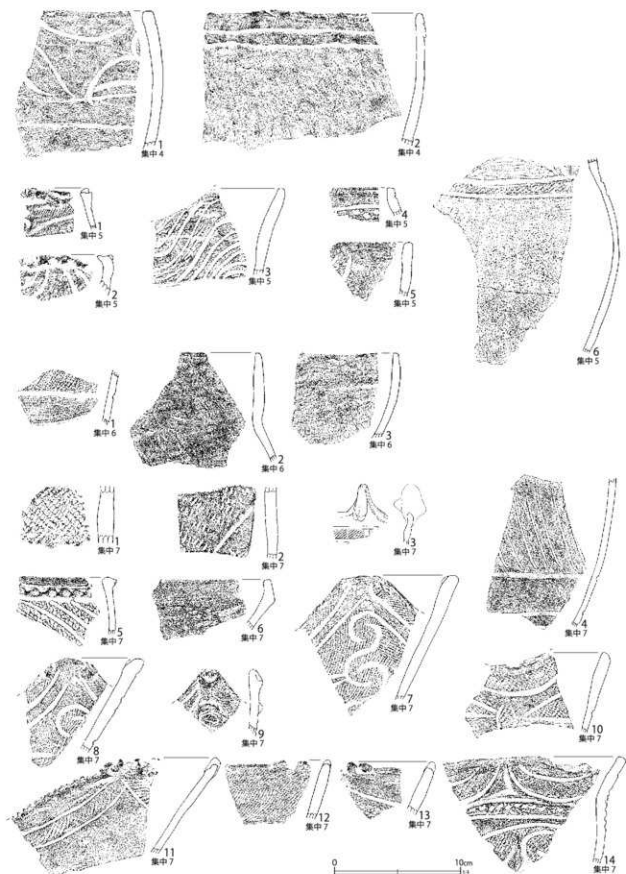
第512図 遺物集中出土土器 (5)



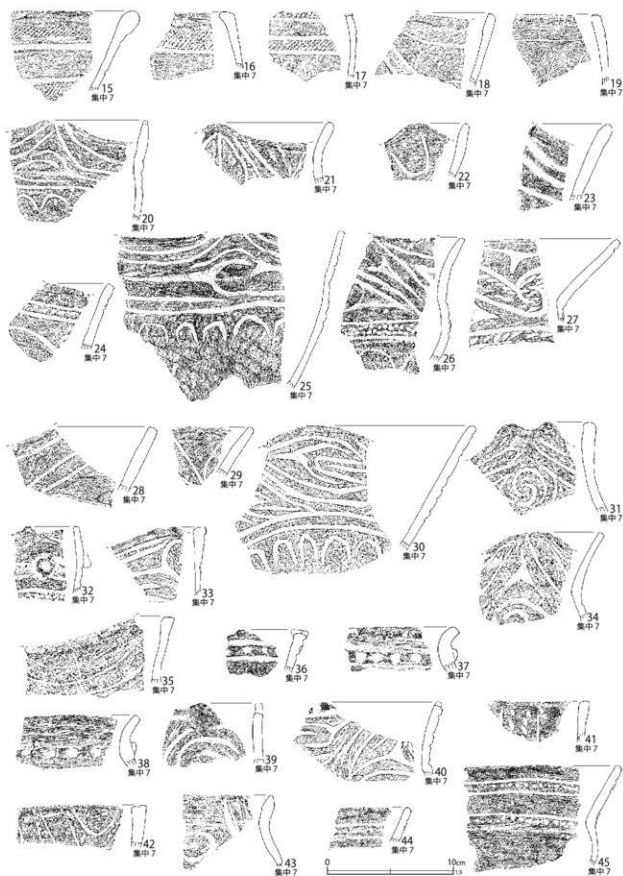
第513図 遺物集中出土土器 (6)



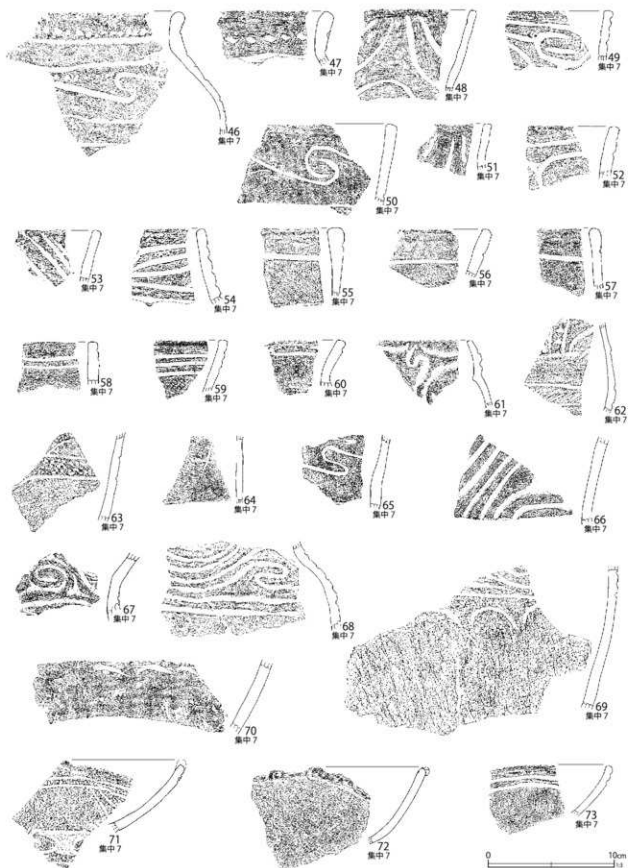
第514図 遺物集中出土土器 (7)



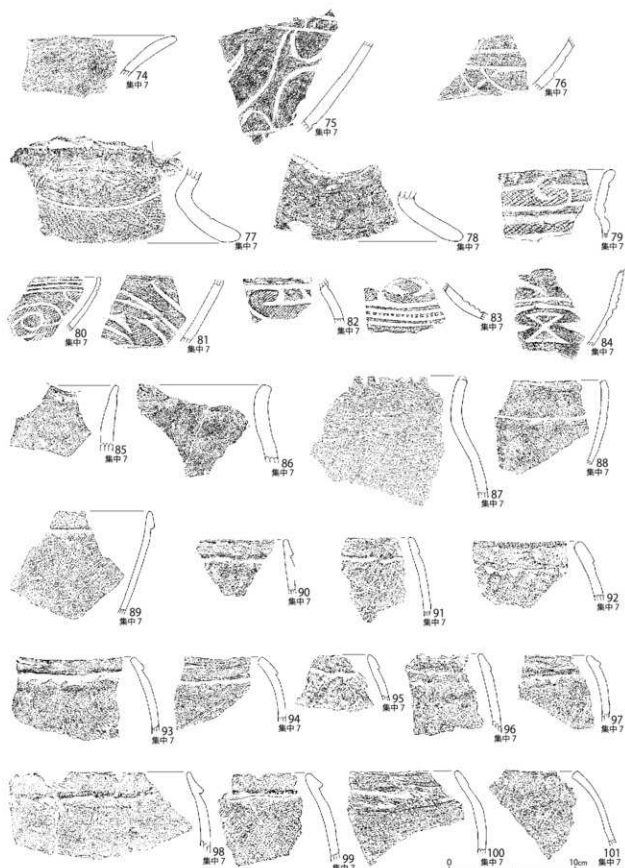
第515図 遺物集中出土土器 (8)



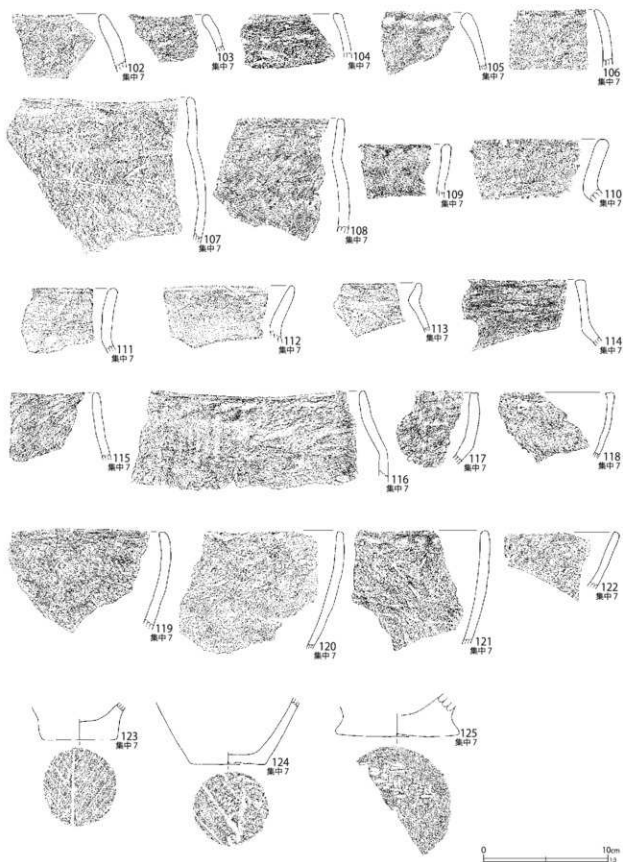
第516図 遺物集中出土土器 (9)



第517図 遺物集中出土土器 (10)



第518図 遺物集中出土土器 (11)



第519図 遺物集中出土土器 (12)

(5) 埋甕出土土器

第4号埋甕出土土器 (第520図1)

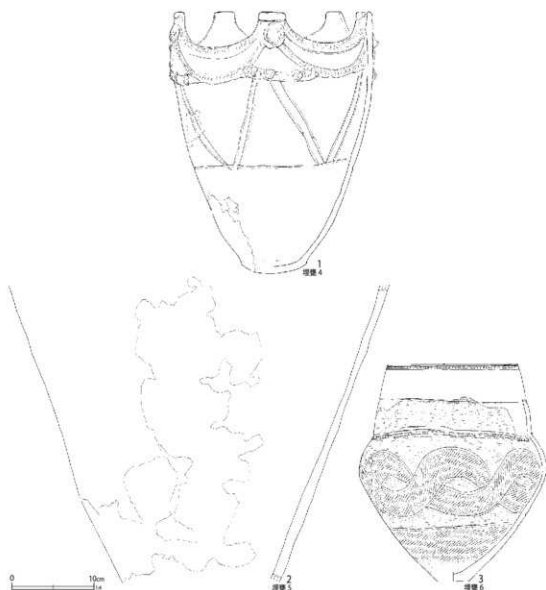
1は波状口縁の深鉢である。丸底で、底部の周縁に段を持つ。胴部から口縁部まで内湾しつつ一本調子に立ち上がる。5単位の波状口縁で、外面に段を持ち、鋭利な工具の刺突文を施す。波頂部には形骸化した豚鼻突起を配して、刺突を施す。胴上半部には隆帯+刺突文で三角形区画文を描き、豚鼻突起を配する。胴部中段に幅広の文様帯を持って平行沈線の斜行文を巡らせ、下端を1条の沈線で区画する。天神原式である。

第5号埋甕出土土器 (第520図2)

2は無文の深鉢である。直線的に開く単調な器形である。内外面ともに被熱による風化が著しい。

第6号埋甕出土土器 (第520図3)

3は瓢形深鉢で、胴下半部が強く張り出し、胴部中段にくびれを持って、口縁は内湾する。くびれの部分に沈線+押し引き文の区画を巡らせ、胴下半部には櫛状入り組み文を描いて、底部付近は縄文帯とする。加曾利B3から曾谷式であろう。

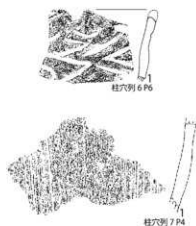


第520図 埋甕出土土器

(6) 柱穴列出土土器

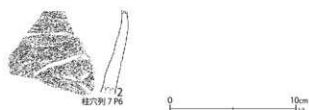
第6号柱穴列出土土器 (第521図)

1はP6から出土した。安行3cから3d式である。



第7号柱穴列出土土器 (第521図)

1はP4から出土した。堀之内式の粗製土器である。2はP6から出土した。安行3c式である。



第521図 柱穴列出土土器

(7) 焼土跡出土土器

焼土跡30出土土器 (第523図)

1・2は堀之内2式である。

焼土跡31出土土器 (第523図)

1は遠部第一類で加曾利B2式、2は安行3aから3b式で大波状口縁深鉢である。3・4は晩期安行式の粗製深鉢、5は安行3c式である。

焼土跡32出土土器 (第522図1、第524図)

1は深鉢である。底径小さく、胴部は内湾しつつ一本調子に立ち上がる。胴部中段から下半部にかけて斜位の条線を施文する。安行式である。

第524図は破片資料である。

1は加曾利B3式である。

焼土跡34出土土器 (第524図)

1は曾谷式である。

焼土跡35出土土器 (第524図)

1～3は堀之内2式で、1・2は精製深鉢、3は注口土器である。

焼土跡36出土土器 (第522図2)

2は大波状口縁深鉢で、非常に小型の個体である。胴部から口縁にかけて直線的に開く。口縁外面に帯縄文の区画を多段に配し、波頂部と波底部それぞれに縦瘤を重畳させる。胴部中段には条線を施文する。安行1式である。

焼土跡39出土土器 (第522図3・4)

3は水平口縁の深鉢である。内湾しつつ開く単調な器形で、口端部は外面に隆帯を巡らせ、2個一対の突起を配する。胴上半部に文様帯を持って単純化した雲形文を描き、上下を平行沈線で区画する。胴部中段以下には縄文を施文する。晩期中

葉の土器であろう。

4は小型の深鉢と考えたが、台付き鉢の脚台の可能性もある。胴部中段が「く」の字に張り出し、胴上半部は外反しつつ開く。胴上半部は平行沈線による菱形の区画を描いて中央に楕円文を配し、胴部中段には平行沈線+刻み目文を巡らせる。安行3cから3d式である。

焼土跡40出土土器 (第522図5・6、第524図)

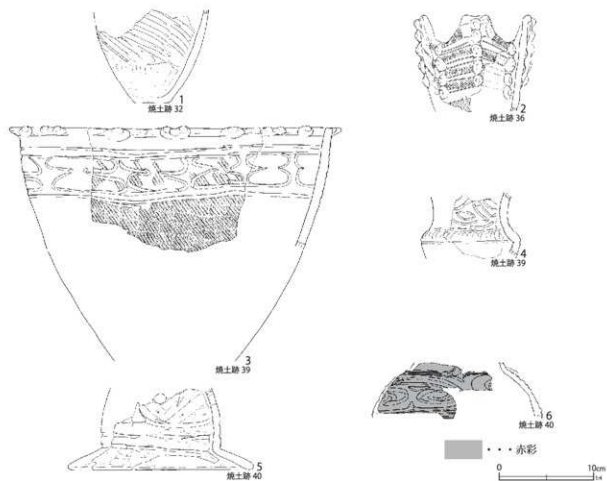
5は台付き土器の脚台部である。ドーム形に膨れる脚台で、裾が扁平に開く安定したプローションである。円形の透かしを中心として単沈線の入り組み文を描き、下端を平行沈線で区画する。安行3c式であろう。

6は壺で、胴部中段が丸く張って、肩部は内湾し、頸部に屈曲して口縁は外反しつつ立ち上がるものとみられる。胴上半部に雲形文を描いてネガ部分を肉彫り状に削り込む。頸部は無文で、胴部との境に平行沈線を巡らせて楕円形の貼り瘤を配する。地文は持たず、器面を入念に研磨している。黒色と赤色の顔料が付着しており、彩色されていたものとみられる。大洞C1式であろう。

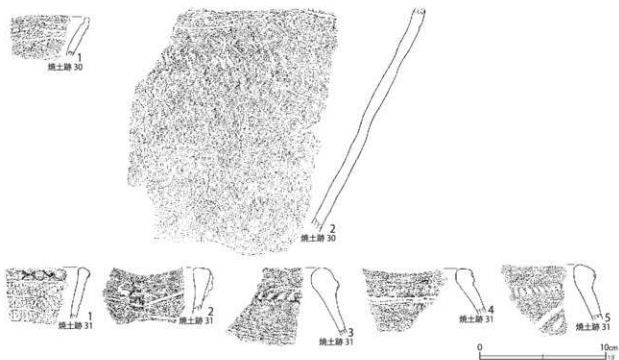
第524図は破片資料である。

1は堀之内2式の広口壺、2・3は安行3b式である。4は無文土器である。5～9は安行3c式、10～13は安行3d式である。

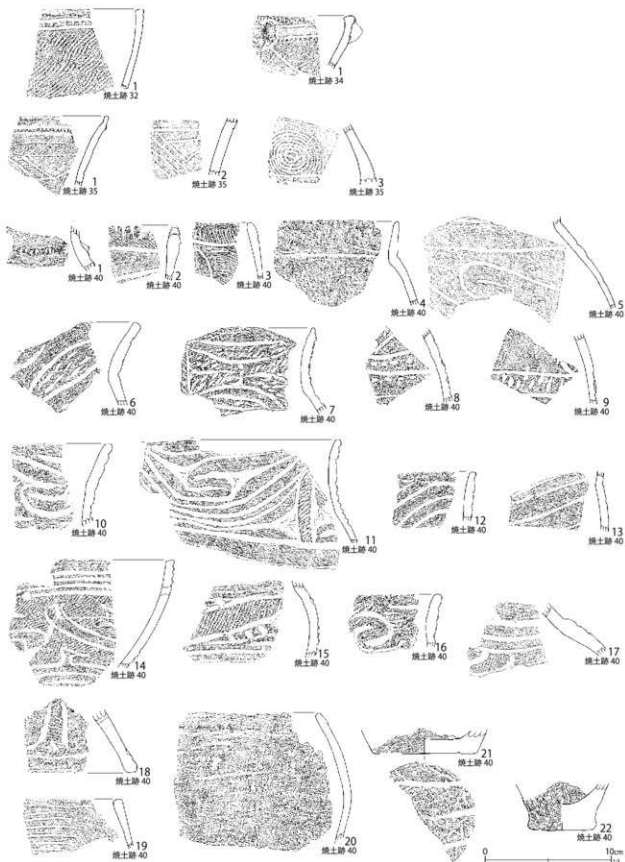
14・15は大洞C1式である。16～18は前浦式で、18は台付き鉢の脚台部である。19は晩期安行式の粗製土器、20も晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。21・22は無文の底部である。



第522図 焼土跡出土土器 (1)



第523図 焼土跡出土土器 (2)



第524图 烧土跡出土土器 (3)

(8) 不明遺構出土土器

第15号不明遺構出土土器 (第526図)

1・2は諸磯a式、3は諸磯b式である。4～6は堀之内1式である。7～9は加曾利B2式で、8は遠部第四類、9は遠部第三類である。

10は安行式の水平口縁深鉢、11は安行3c式、12は安行3d式である。13・14は晩期安行式の粗製土器で、14は貝殻背面による押し引き文を巡らせる。15～17は無文土器である。

第16号不明遺構出土土器 (第526・527図)

1は堀之内式の粗製土器、2は加曾利B1式、3・5は加曾利B2式で、5は遠部第三類である。6は加曾利B3式である。

7～17は安行式である。7～9は安行1式の水平口縁深鉢である。10・11は安行3b式、12～16は安行3c式で、16は胴部中段が張り出して鱗状

の隆帯を巡らせる鉢である。17は台付き鉢の脚台部で安行3b式であろう。

4は前浦式で壺の肩部である。18～21は折り返し口縁、22は無文の深鉢で、いずれも晩期安行式に伴う土器である。

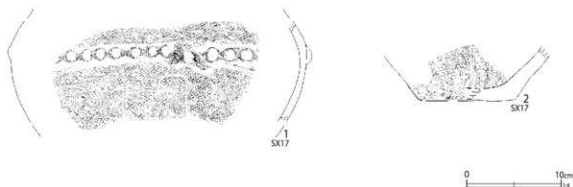
第17号不明遺構出土土器 (第525図1・2、第527図)

1は鉢である。胴部中段が円盤状に張り出して指頭押圧を伴う隆帯を巡らせ、2個一對の貼り瘤を配する。全面に縄文を施文する。安行3aから3b式であろう。

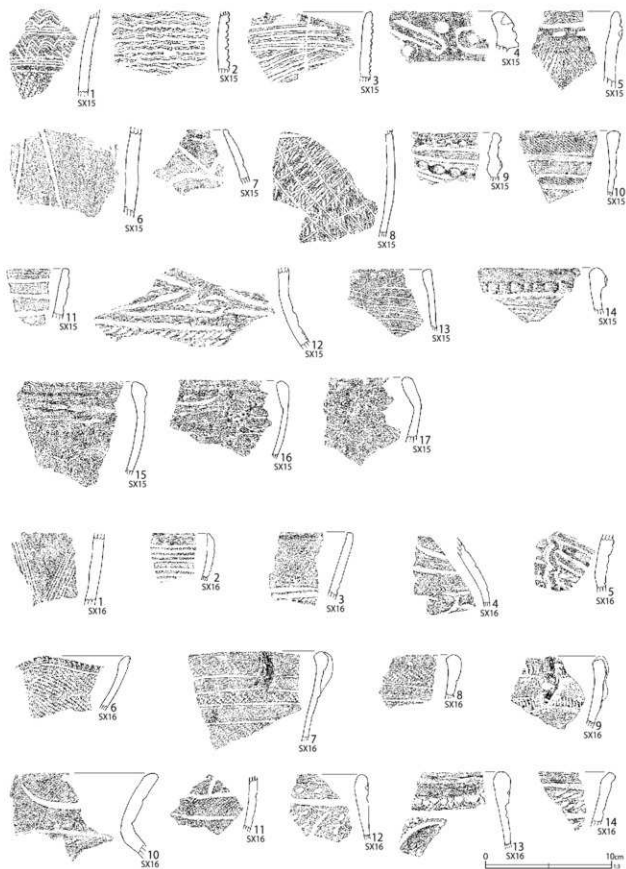
2は無文の深鉢である。

第527図は破片資料である。

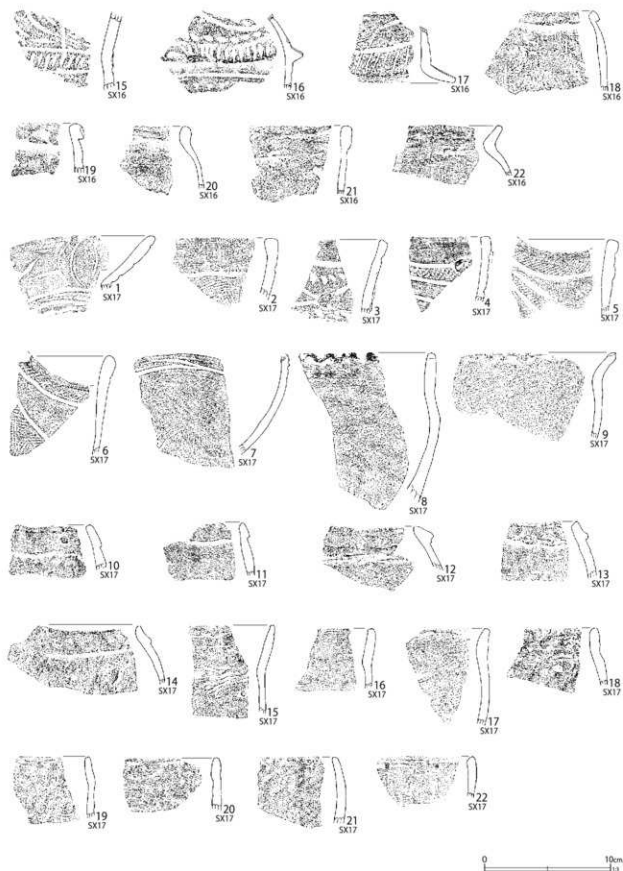
2は称名寺式である。1は安行3aから3b式、4～6は安行3b式、3・7は安行3c式である。8・9は口端に押圧を巡らせる土器、10～14は折り返し口縁、15～22は無文の深鉢である。



第525図 不明遺構出土土器 (1)



第526図 不明遺構出土土器（2）



第527図 不明遺構出土土器（3）

(9) グリッドピット出土土器 (第528図1～3、第529～533図)

1はZY-998グリッドP18から出土した。無文の深鉢底部で、裾が張り出し、底面に網代痕を残す。後期前葉から中葉の土器であろう。

2はB-2グリッドP15から出土した。壺で、胴部中段が円盤状に張り出し、胴上半部は内湾、頸部で屈曲して口縁は外反しつつ立ち上がるものとみられる。胴上半部に大柄の工字文を巡らせて器面を分割し、上下に入り組み文を配する。文様帯の上下は平行沈線で区画している。安行3d式であろう。

3はC-2グリッドP40から出土した。小型の壺で、胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部屈曲して内傾しつつ立ち上がり、口縁は直線的に開いて、口端が内屈する。胴上半部に雲形文を描いて、上下を平行沈線で区画する。頸部から口縁部は無文、胴下半部には縄文を施文する。大洞C1式である。

第529～533図は破片資料である。

第529図1・2はZY-997グリッドP1から出土した。1は安行式の水平口縁深鉢、2は後期安行式に伴う粗製土器である。

第529図3はZY-997グリッドP3から出土した。堀之内2式の精製深鉢であろう。

第529図4・5はZY-998グリッドP1から出土した。4は堀之内1式、5は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。

第529図6はZY-998グリッドP2から出土した。堀之内1式である。

第529図7はZY-998グリッドP3から出土した。堀之内1式である。

第529図8・9はZY-998グリッドP4から出土した。8は堀之内1式、9は加曾利B3から曾谷式の瓢形深鉢である。

第529図10はZY-998グリッドP13から出土した。堀之内1式である。

第529図11～13はZY-998グリッドP14から出土した。11は安行1式の瓢形深鉢で、12は同時期の粗製土器、13は無文の深鉢である。

第529図14はZY-998グリッドP16から出土した。曾谷から安行1式であろう。

第529図15はZY-998グリッドP17から出土した。堀之内1式である。

第529図16～19はZY-998グリッドP18から出土した。16・17は堀之内1式である。18・19は同時期の深鉢で、18は縄文施文部、19は無文部であろう。

第530図20・21はZY-998グリッドP20から出土した。いずれも堀之内1式で、21は縦位の押圧隆帯を配する山形波状口縁である。

第530図22はZY-998グリッドP21から出土した。安行1式の水平口縁深鉢である。

第530図23はZY-998グリッドP22から出土した。後期安行式の水平口縁深鉢である。

第530図24・25はZZ-998グリッドP1から出土した。24は堀之内1式、25は安行1式の瓢形深鉢である。

第530図26～28はZZ-998グリッドP3から出土した。26は関山式、27は加曾利B2から3式で遠部第一類、28は安行1式の瓢形深鉢である。

第530図29はZZ-998グリッドP4から出土した。曾谷式である。

第530図30～33はZZ-999グリッドP2から出土した。30・31は曾谷・高井東式、32は安行1式の瓢形深鉢、33は後期安行式の粗製深鉢である。

第530図34～37はA-999グリッドP1から出土した。34は堀之内1式、35は堀之内式の粗製土器、36は加曾利B3から曾谷式で遠部第一類、37は晩期安行式で折り返し口縁の深鉢である。

第530図38はA-999グリッドP47から出土した。堀之内式の壺であろう。

第530図39・40はA-0グリッドP1から出土した。39は前浦式、40は無文土器である。

第530図41・42はA-0グリッドP5から出土した。41は堀之内2式、42は同時期の粗製深鉢であろう。

第530図43~47はA-0グリッドP3から出土した。43は称名寺式、44は加曾利B2式、45は加曾利B式の粗製深鉢である。46・47は安行3c式である。

第530図48~50・第531図51~53はA-0グリッドP6から出土した。48は諸磯b式、49は堀之内1式、50は堀之内式の粗製土器である。

51は安行3c式、52は綾線文を施文する大洞系の土器、53は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。

第531図54・55はA-0グリッドP20から出土した。54は堀之内式の粗製土器、55は同時期の壺であろう。

第531図56はA-0グリッドP21から出土した。加曾利B2式で、遠部第四類である。

第531図57~59はA-0グリッドP27から出土した。57は諸磯b式、58は堀之内式の粗製土器、59は加曾利B3から曾谷式の瓢形深鉢である。

第531図60~62はA-0グリッドP29から出土した。60は安行3b式、61は大洞BC式の台付き鉢である。62は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。

第531図63はA-0グリッドP43から出土した。加曾利B2式である。

第531図64はA-0グリッドP45から出土した。加曾利B式の粗製浅鉢である。

第531図65はA-1グリッドP3から出土した。無文土器で、口端上に小突起を配する。

第531図66~68はA-1グリッドP4から出土した。66は加曾利B1式で内文を持つ浅鉢、67は加曾利B2式で遠部第二類、68は大洞C1式であろう。

第531図69・70はA-1グリッドP5から出土した。堀之内1式の波状口縁深鉢で、同一個体と

みられる。

第532図71はA-1グリッドP8から出土した。安行3b式の砲弾形深鉢である。

第532図72はA-1グリッドP10から出土した。堀之内1式である。

第532図73はA-1グリッドP21から出土した。堀之内1式である。

第532図74~76はA-1グリッドP27から出土した。74・75は大洞C1式の浅鉢で、同一個体とみられる。76は大洞C2式である。

第532図77~85はA-1グリッドP29から出土した。77・78は堀之内1式である。79は加曾利B2式、80・81は曾谷式である。82は瓢形深鉢で、曾谷から安行1式、83は水平口縁深鉢で安行3b式である。84は大洞C1式の浅鉢、85は口端外面に押圧の巡る無文深鉢である。

第532図86はB-1グリッドP3から出土した。安行3c式である。

第532図87はB-1グリッドP17から出土した。堀之内1式である。

第532図88・89はB-1グリッドP19から出土した。88は堀之内2式、89は天神原式である。

第532図90はB-1グリッドP20から出土した。口縁内面に段を持つ無文土器である。

第532図91はB-1グリッドP21から出土した。堀之内1式である。

第532図92・93はB-1グリッドP24から出土した。92は加曾利B式の粗製深鉢、93は紐線文の土器で、加曾利B3から曾谷式であろう。

第532図94・95はB-1グリッドP25から出土した。いずれも称名寺式と考えたが、時期が下る可能性もある。

第532図96はB-2グリッドP2から出土した。堀之内2式の精製深鉢口縁部である。

第532図97~99はB-2グリッドP6から出土した。97は曾谷式か。98は加曾利B式の粗製深鉢、99は曾谷式である。

第532図100・101はB-2グリッドP7から出土した。100は堀之内1式、101は堀之内式の粗製土器である。

第533図102・103はB-2グリッドP8から出土した。102は加曾利B1式の注口土器の口縁部である。103は加曾利B式の粗製深鉢である。

第533図104はB-2グリッドP9から出土した。堀之内1式である。

第533図105はB-2グリッドP16から出土した。加曾利B式の粗製深鉢である。

第533図106はB-2グリッドP17から出土した。加曾利B2式である。

第533図107~109はB-2グリッドP22から出土した。107・108は堀之内2式、109は加曾利B2式である。

第533図110はB-2グリッドP23から出土した。堀之内2式である。

第533図111~120はB-3グリッドP1から出土した。111・115は堀之内2式の注口土器で、111は非常に大型の個体の把手である。

113・114は加曾利B2式である。113は擦り消し文様に沿って円形竹管状工具の刺突を巡らせる東北系の土器である。114はソロバン玉状の鉢で列点文を地文とする。116・119は加曾利B3式である。117は加曾利B式の粗製深鉢である。

118は安行1式の台付き鉢である。112・120は安行3b式で、120は姥山系の大波状口縁深鉢である。

第533図121はC-2グリッドP1から出土した。水平口縁に対をなす小突起を配する無文土器である。

第533図122はC-2グリッドP4から出土した。壺ないし注口土器で、安行3aから3b式であろう。

第533図123・124はD-3グリッドP5から出土した。123は安行3b式、124は無文土器である。

第533図125はD-3グリッドP10から出土した。無文土器である。

第533図126・127はD-3グリッドP11から出土した。126は安行3aから3b式、127は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。

第533図128はD-3グリッドP15から出土した。無文土器である。

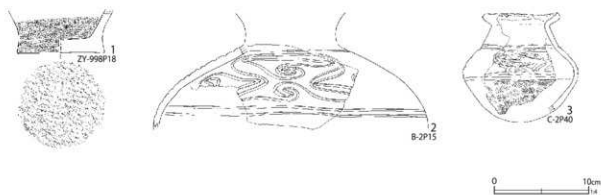
第533図129はD-3グリッドP29から出土した。細密沈線文の安行3b式である。

第533図130・131はD-4グリッドP5から出土した。いずれも加曾利B2式で、131は遠部第二類である。

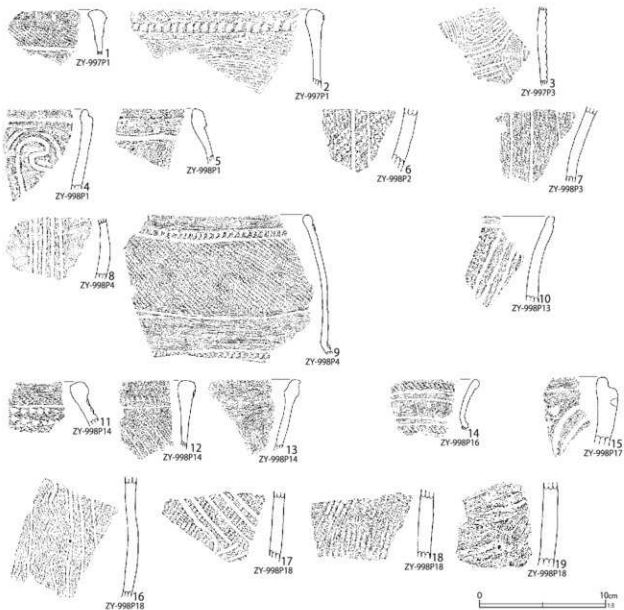
第533図132・133はE-3グリッドP1から出土した。132は大洞C1式、133は晩期安行式に伴う折り返し口縁の深鉢である。

第533図134・135はE-3グリッドP4から出土した。いずれも加曾利B2式で、遠部第二類である。

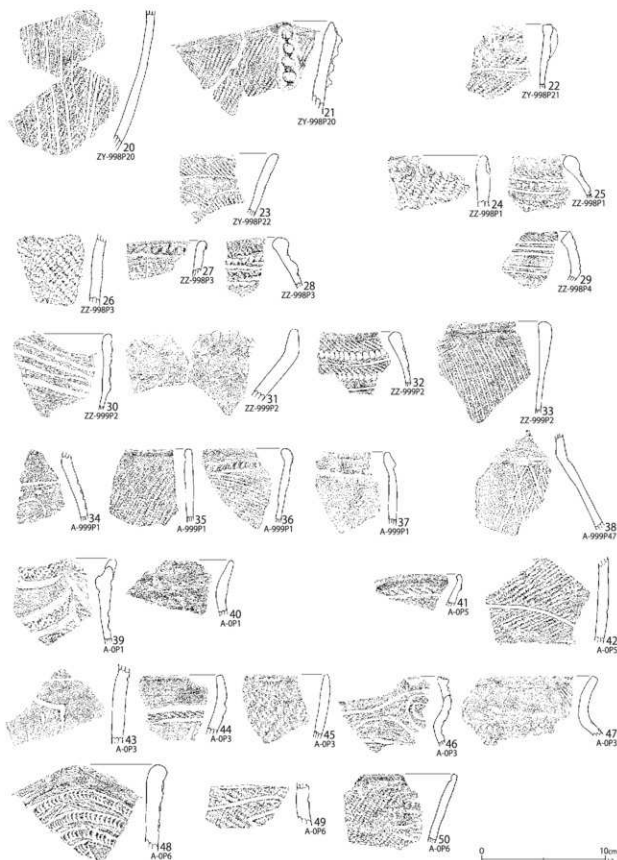
第533図136はE-4グリッドP1から出土した。安行3cから3d式である。



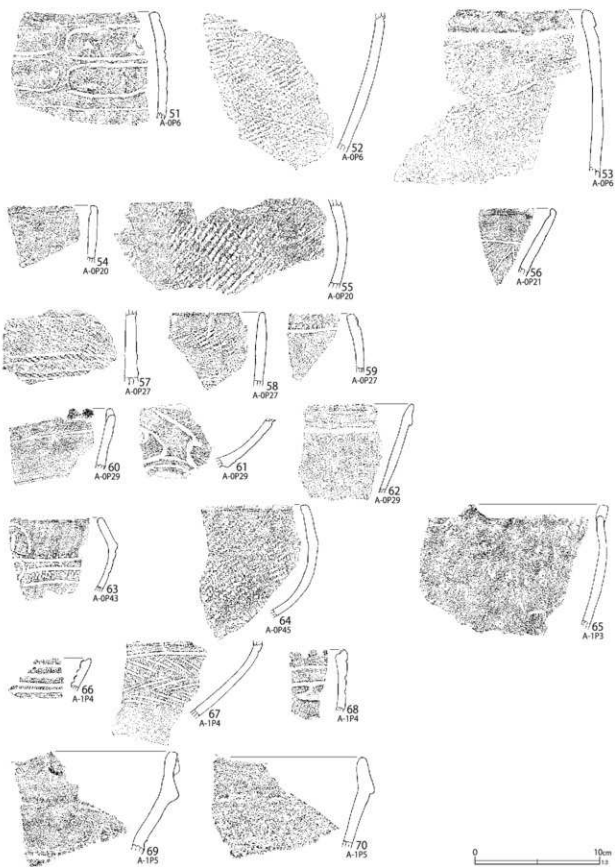
第528図 グリッドビッド出土土器 (1)



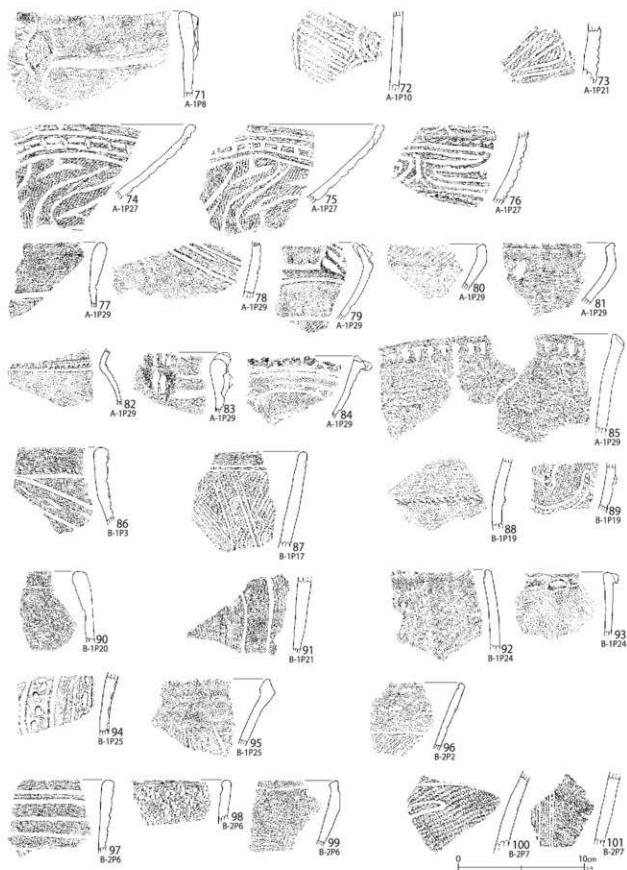
第529図 グリッドビッド出土土器 (2)



第530図 グリッドビッド出土土器 (3)



第531図 グリッドビッド出土土器 (4)



第532図 グリッドビッド出土土器 (5)



第533図 グリッドピット出土土器 (6)

第17表 遺構出土復元土器観察表(1) (第239~247図)

非完形品は()つき、単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SJ99	1	-	(16.4)	(17.0)	-	安行3b式	130-1
SJ99	2	-	-	7.2	7.2	安行3a~3b式	130-2
SJ99	3	-	-	(20.4)	2.7	晩期安行式	130-3
SJ99	4	-	(34.0)	(36.4)	-	晩期安行式	130-4
SJ100	5	-	(22.0)	(22.8)	-	安行3a式	130-5
SJ100	6	-	(20.4)	(20.8)	-	安行3a~3b式	130-6
SJ100	7	-	(19.2)	(27.0)	-	安行1式	130-7
SJ100	8	-	-	(22.0)	-	安行2~3a式	130-8
SJ100	9	-	(20.6)	(21.2)	-	安行2式	131-1
SJ100	10	-	(24.5)	(24.9)	-	安行3a式	131-2
SJ100	11	-	(23.4)	(26.6)	-	後期安行式	131-3
SJ100	12	-	-	(27.4)	-	安行3b~3c式	131-4
SJ100	13	-	17.3	18.3	-	晩期前葉	131-5
SJ100	14	-	(26.2)	(32.0)	-	安行3a~3b式	131-6
SJ100	15	-	(20.2)	(20.8)	-	安行2~3a式	131-7
SJ100	16	7.2	(23.8)	(24.2)	(10.4)	安行2~3a式	131-8
SJ100	17	-	-	(11.2)	(4.8)	安行2~3a式	132-1
SJ100	18	-	-	(14.0)	-	安行3a式	132-2
SJ100	19	-	(23.6)	(26.2)	-	安行式	132-3
SJ100	20	-	-	(33.0)	-	後期末~晩期前葉	132-4
SJ100	21	-	(11.4)	(12.6)	-	晩期	132-5
SJ100	22	-	(16.3)	(17.2)	-	晩期前葉	132-6
SJ102	23	-	-	(21.8)	3.9	安行式	132-7
SJ103	24	-	-	(8.7)	7.1	晩期	132-8
SJ104	25	-	-	(20.8)	-	高井車式	133-1
SJ104	26	-	(23.8)	(23.8)	-	安行3b式	133-2
SJ104	27	-	(31.6)	(32.6)	-	安行1式	133-3
SJ104	28	-	(27.0)	(27.8)	-	安行1式	133-4
SJ104	29	-	(27.0)	(27.8)	-	安行1式	133-5
SJ104	30	-	-	(29.4)	-	安行1式	133-6
SJ104	31	-	-	(31.6)	-	安行1~3b式	133-7
SJ104	32	-	-	(20.5)	4.0	安行1~3b式	133-8
SJ104	33	-	(20.4)	(24.4)	-	安行3d式	134-1
SJ104	34	-	(21.4)	(22.0)	-	後期安行式	134-2
SJ104	35	-	-	(17.8)	-	後期安行式	134-3
SJ104	36	-	(28.6)	(28.6)	-	後期安行式	134-4
SJ104	37	-	(26.8)	(27.3)	-	後期安行式	134-5
SJ104	38	-	(23.4)	(24.4)	-	後期安行式	134-6
SJ104	39	-	(25.0)	(25.6)	-	後期安行式	134-7
SJ104	40	-	(27.2)	(29.6)	-	晩期前葉	134-8
SJ104	41	-	(33.2)	(34.0)	-	後期末~晩期初頭	135-1
SJ104	42	-	(29.8)	(34.2)	-	安行3b式	135-2
SJ104	43	46.4	(32.7)	36.5	5.0	晩期	135-3
SJ104	44	-	-	(17.0)	(4.6)	安行式	135-4
SJ104	45	-	-	(12.4)	3.3	安行式	135-5
SJ104	46	-	-	(17.9)	4.8	安行式	135-6
SJ104	47	-	-	(28.2)	-	安行式	135-7
SJ104	48	-	(21.0)	(24.8)	-	晩期安行式	135-8
SJ104	49	-	(34.8)	(40.6)	-	安行3a~3b式	136-1
SJ104	50	-	-	(13.8)	7.5	晩期安行式	136-2
SJ104	51	-	-	18.2	16.0	後期安行式	136-3
SJ104	52	-	-	(8.3)	(7.9)	晩期前葉	136-4
SJ104	53	10.4	(20.0)	(20.2)	-	曾谷~安行1式	136-5
SJ104	54	10.1	18.5	19.0	4.0	後期安行式	136-6
SJ104	55	-	(25.6)	(25.6)	-	安行3c式	136-7
SJ104	56	11.2	17.6	19.0	10.0	晩期安行式	136-8
SJ104	57	-	(17.0)	(17.8)	-	晩期安行式	137-1
SJ104	58	5.0	(16.2)	(16.4)	-	安行3b式	137-2
SJ105	59	-	(27.0)	(31.2)	-	安行3b式	137-3

第18表 遺構出土復元土器観察表(2) (第247～253図)

非完形品は()つき。単位はcm (小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SJ105	60	-	(16.0)	(17.0)	-	安行3b～3c式	137-4
SJ105	61	-	(19.0)	(19.2)	-	安行3b式	137-5
SJ105	62	-	(29.2)	(30.8)	-	安行3c式	137-6
SJ105	63	-	(30.5)	(36.3)	-	晩期前葉～中葉	137-7
SJ105	64	-	(27.8)	(28.0)	-	安行3a式	137-8
SJ105	65	-	(29.4)	(29.7)	-	安行3a式	138-1
SJ105	66	-	14.6	15.3	-	安行3式	138-2
SJ105	67	-	-	(17.0)	-	晩期前葉	138-3
SJ105	68	-	-	(12.2)	-	安行3a式	138-4
SJ105	69	-	-	(12.1)	-	晩期前葉	138-5
SJ105	70	-	-	11.1	10.6	晩期前葉	138-6
SJ105	71	-	(15.0)	(19.6)	-	安行3b式	138-7
SJ105	72	-	-	(12.6)	-	安行3b式	138-8
SJ105	73	-	(12.5)	(13.2)	-	晩期安行式	138-9
SJ105	74	6.8	(15.0)	(15.0)	-	安行3a式	138-10
SJ105	75	4.3	(11.2)	(11.2)	-	晩期安行式	139-1
SJ105	76	5.1	(11.6)	(11.8)	(7.0)	晩期安行式	139-2
SJ105	77	-	(7.5)	(11.8)	-	晩期安行式	139-3
SJ105	78	5.0	(21.2)	(21.5)	-	晩期前葉	139-4
SJ105	79	10.5	29.8	30.0	-	晩期前葉	139-5
SJ105	80	-	-	(13.0)	9.0	安行式	139-6
SJ105	81	-	-	(12.6)	4.2	安行式	139-7
SJ105	82	-	-	(16.2)	(4.3)	安行式	139-8
SJ105	83	-	-	(10.9)	3.8	安行式	139-9
SJ106	84	-	(13.8)	(14.0)	-	安行3a式	139-10
SJ106	85	-	(24.6)	(24.8)	-	天神原式	140-1
SJ106	86	11.4	(11.0)	(11.8)	3.2	晩期安行式	140-2
SJ106	87	-	(19.3)	20.0	-	後期末～晩期初頭	140-3
SJ106	88	-	-	(14.5)	(14.2)	晩期中葉	140-4
SJ106	89	-	(26.0)	(26.4)	-	安行1式	140-5
SJ106	90	-	(13.8)	(14.4)	-	安行3b式	140-6
SJ106	91	9.0	17.8	18.4	-	安行3a～3b式	140-7
SJ106	92	-	(21.2)	(21.3)	-	安行3a～3b式	140-8
SJ106	93	-	-	(16.2)	(8.2)	安行3c式	140-9
SJ106	94	-	-	(13.0)	-	安行3c式	141-1
SJ106	95	-	-	10.1	1.7	安行3a式	141-2
SJ106	96	-	-	(20.4)	-	安行3c式	141-3
SJ106	97	-	(33.4)	(34.6)	-	後期末～晩期初頭	141-4
SJ106	98	-	(28.4)	(30.0)	-	後期末～晩期初頭	141-5
SJ106	99	-	(26.8)	(31.4)	-	晩期安行式	141-6
SJ106	100	-	(25.6)	(27.4)	-	晩期安行式	141-7
SJ106	101	-	(16.7)	(17.3)	-	安行3a～3b式	141-8
SJ106	102	-	(28.0)	(33.6)	-	晩期安行式	141-9
SJ106	103	-	(15.4)	(16.0)	-	安行3c式	142-1
SJ106	104	-	-	(17.0)	3.7	晩期安行式	142-2
SJ107	105	-	-	(18.8)	-	高井東式	142-3
SJ107	106	-	(19.7)	(19.7)	-	安行1式	142-4
SJ107	107	-	(25.8)	(26.0)	-	安行1式	142-5
SJ107	108	-	(26.8)	(27.5)	-	曾谷～安行1式	142-6
SJ107	109	-	(24.2)	(31.8)	-	安行3b～3c式	142-7
SJ107	110	-	(23.2)	(26.2)	-	高井東式	142-8
SJ107	111	-	(24.4)	(29.2)	-	安行1式	143-1
SJ107	112	-	(33.0)	(33.0)	-	安行1式	143-2
SJ107	113	-	-	(18.4)	-	後期安行式	143-3
SJ107	114	-	27.0	27.4	-	晩期前葉	143-4
SJ107	115	21.7	13.8	14.0	2.8	晩期安行式	143-5
SJ107	116	-	(25.0)	(26.2)	-	晩期安行式	143-6
SJ107	117	-	-	(30.0)	-	曾谷～安行1式	143-7
SJ107	118	-	-	(24.9)	3.9	晩期安行式	143-8

第19表 遺構出土復元土器観察表(3) (第254~261図)

非完形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)							分類	図版
遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径			
SJ107	119	-	-	(17.4)	6.8	晩期安行式		144-1
SJ107	120	-	-	(15.2)	2.0	晩期安行式		144-2
SJ107	121	-	-	(12.8)	2.9	晩期安行式		144-3
SJ107	122	-	-	(13.6)	2.9	安行1~3b式		144-4
SJ107	123	-	(17.0)	(18.0)	-	安行1式		144-5
SJ107	124	-	-	(9.6)	(9.1)	新地式		144-6
SJ107	125	-	(32.2)	(32.8)	-	加曾利B2式		144-7
SJ108	126	-	(14.0)	(15.3)	-	晩期安行式		144-8
SJ108	127	5.8	13.8	14.2	-	安行3c式		144-9
SJ109	128	-	(16.6)	(16.6)	-	安行1式		144-10
SJ109	129	-	(15.7)	(16.0)	-	安行1式		145-1
SJ109	130	-	(16.8)	(18.0)	-	安行3c式		145-2
SJ109	131	-	25.0	25.6	-	安行3b~3c式		145-3
SJ109	132	-	(27.0)	(28.0)	-	後期安行式		145-4
SJ109	133	-	(26.2)	(29.0)	-	晩期安行式		145-5
SJ109	134	-	-	(21.4)	2.9	安行式		145-6
SJ109	135	-	-	(13.0)	3.1	安行式		145-7
SJ109	136	-	-	(12.2)	3.1	安行式		145-8
SJ109	137	-	(24.8)	(25.7)	-	安行1式		145-9
SJ109	138	-	(24.2)	(24.9)	-	安行2式		146-1
SJ109	139	-	(20.0)	(22.8)	-	安行3a~3b式		146-2
SJ109	140	-	-	(19.0)	-	晩期		146-3
SJ109	141	-	-	(18.0)	10.8	安行3b~3c式		146-4
SJ111	142	-	(23.0)	(24.0)	-	安行3a式		146-5
SJ111	143	-	-	-	-	安行3b式		146-6
SJ111	144	-	(19.7)	(20.3)	-	安行3b式		146-7
SJ111	145	-	(12.2)	(12.2)	-	安行3b式		146-8
SJ111	146	11.7	9.5	9.5	1.7	安行3b~3c式		146-9
SJ111	147	-	-	(27.8)	-	安行3b~3c式		146-10
SJ111	148	-	(16.0)	(18.6)	-	後期末~晩期初頭		147-1
SJ111	149	-	-	(31.0)	-	後期安行式		147-2
SJ111	150	-	-	(13.0)	3.6	安行式		147-3
SJ112	151	-	25.3	25.7	-	後期安行式		147-4
SJ112	152	-	-	(24.0)	3.4	安行式		147-5
SJ112	153	-	-	(13.1)	8.8	後期前葉~中葉		147-6
SJ113	154	-	-	(27.0)	-	高井東式		147-7
SJ113	155	-	(28.6)	(30.1)	-	曾谷・高井東式		147-8
SJ113	156	-	(26.2)	(26.6)	-	安行1式		148-1
SJ113	157	-	(15.8)	(16.4)	-	安行1式		148-2
SJ113	158	-	30.6	31.6	-	安行1式		148-3
SJ113	159	-	(24.6)	(27.6)	-	安行1式		148-4
SJ113	160	-	-	(27.3)	-	曾谷~安行1式		148-5
SJ113	161	-	(23.7)	(27.7)	-	高井東式		148-6
SJ113	162	-	(19.0)	(19.3)	-	安行式		148-7
SJ113	163	-	-	(16.0)	(4.4)	安行式		148-8
SJ113	164	-	-	16.7	2.4	高井東式		149-1
SJ113	165	-	-	(23.2)	5.2	安行式		149-2
SJ113	166	-	-	(17.1)	3.7	安行式		149-3
SJ113	167	-	-	(16.0)	9.0	後期前葉~中葉		149-4
SJ114	168	-	(18.2)	(19.0)	-	安行2式		149-5
SJ114	169	-	-	(15.8)	-	安行3a~3b式		149-6
SJ114	170	-	(17.9)	(18.2)	-	安行2式		149-7
SJ114	171	-	(19.5)	(20.2)	-	安行2式		149-8
SJ114	172	-	(19.5)	(20.2)	-	安行3a~3b式		149-9
SJ114	173	-	-	(30.0)	-	曾谷~安行1式		150-1
SJ114	174	-	-	(16.4)	-	後期安行式		150-2
SJ114	175	-	-	(15.5)	-	後期安行式		150-3
SJ114	176	8.6	(22.0)	(22.6)	(7.2)	安行2式		150-4
SJ114	177	-	(24.2)	(25.0)	-	後期安行式		150-5

第20表 遺構出土土器観察表(4) (第261~267図)

非完形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SJ114	178	-	(23.2)	(24.2)	-	曾谷・高井東式	150-6
SJ114	179	-	-	(12.8)	4.0	安行式	150-7
SJ114	180	-	-	(14.2)	(3.1)	安行式	150-8
SJ114	181	-	-	(14.0)	3.5	安行式	150-9
SJ114	182	-	-	(9.2)	1.0	安行式	150-10
SJ115	183	-	(19.0)	(20.1)	-	堀之内1式	151-1
SJ115	184	-	-	(31.2)	-	安行3b式	151-2
SJ115	185	-	(27.8)	(28.3)	-	安行1式	151-3
SJ115	186	-	(21.5)	(22.4)	-	安行1式	151-4
SJ115	187	-	(24.6)	(25.4)	-	曾谷~安行1式	151-5
SJ115	188	-	(28.0)	(28.8)	-	安行1式	151-6
SJ115	189	-	(14.6)	18.2	-	曾谷~安行1式	151-7
SJ115	190	-	-	(18.2)	-	安行3a~3b式	151-8
SJ115	191	-	-	(17.6)	2.6	安行式	152-1
SJ115	192	-	27.0	27.8	-	曾谷~安行1式	152-2
SJ115	193	-	-	(27.6)	-	曾谷~安行1式	152-3
SJ115	194	-	(29.6)	(30.3)	-	晩期安行式	152-4
SJ115	195	-	-	(10.2)	7.2	後~晩期	152-5
SJ115	196	4.2	(9.2)	(9.5)	4.1	晩期安行式	152-6
SJ116	197	-	14.8	14.8	-	曾谷・高井東式	152-7
SJ116	198	-	(24.3)	(24.9)	-	曾谷・高井東式	152-8
SJ116	199	-	17.0	17.8	-	曾谷・高井東式	152-9
SJ116	200	-	24.8	25.4	-	安行1式	153-1
SJ116	201	-	(33.0)	(33.4)	-	安行1式	153-2
SJ116	202	-	(24.0)	(24.8)	-	安行1式	153-3
SJ116	203	-	(17.2)	(17.9)	-	安行1式	153-4
SJ116	204	-	(28.0)	(28.8)	-	安行1式	153-5
SJ116	205	-	(27.4)	(28.2)	-	安行1式	153-6
SJ116	206	-	(24.2)	(25.8)	-	安行3b式	153-7
SJ116	207	-	-	(27.4)	-	曾谷~安行1式	153-8
SJ116	208	-	-	(27.1)	-	曾谷式	154-1
SJ116	209	-	-	(15.4)	-	安行1式	154-2
SJ116	210	-	(23.6)	(25.8)	-	安行1式	154-3
SJ116	211	-	(26.0)	(26.7)	-	安行1式	154-4
SJ116	212	-	(21.5)	(21.8)	-	晩期安行式	154-5
SJ116	213	8.8	(23.6)	(24.0)	-	晩期安行式	154-6
SJ116	214	-	(28.6)	(29.6)	-	曾谷~安行1式	154-7
SJ116	215	-	-	(33.6)	-	加曾利B3~曾谷式	154-8
SJ116	216	-	(24.0)	(27.2)	-	晩期安行式	154-9
SJ116	217	-	-	(24.2)	3.7	安行式	155-1
SJ116	218	-	-	(19.0)	3.8	安行式	155-2
SJ116	219	-	-	(12.2)	(10.2)	後期前葉~中葉	155-3
SJ117	220	-	(20.2)	(24.3)	-	曾谷式	155-4
SJ117	221	-	-	(23.6)	7.0	安行式	155-5
SJ117	222	-	(23.3)	(24.0)	-	安行3b~3c式	155-6
SJ117	223	-	(22.0)	(22.4)	-	安行3c式	155-7
SJ117	224	-	-	(10.2)	7.0	後~晩期	155-8
SJ117	225	-	-	(9.2)	7.0	後~晩期	155-9
SJ117	226	-	-	(11.7)	10.2	後~晩期	155-10
SJ117	227	-	(16.3)	(18.4)	-	曾谷式	156-1
SJ118	228	-	-	(11.1)	(3.0)	安行1式	156-2
SJ118	229	-	-	(28.4)	-	安行3a~3b式	156-3
SJ118	230	-	-	(13.6)	4.4	安行式	156-4
SJ118	231	-	-	(16.8)	(3.8)	安行式	156-5
SJ118	232	-	-	(25.4)	-	安行式	156-6
SJ118	233	-	(26.0)	(31.2)	-	安行3c式	156-7
SJ118	234	-	(14.2)	(16.4)	-	安行3c式	156-8
SJ118	235	-	(13.2)	(13.7)	-	安行3c式	156-9
SJ118	236	-	(12.4)	(12.8)	-	安行3c式	157-1

第21表 遺構出土復元土器観察表(5) (第267~274・354図)

非完形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SJ118	237	-	(23.0)	(24.0)	-	後期安行式	157-2
SJ118	238	-	(27.5)	(28.1)	-	後期安行式	157-3
SJ118	239	-	-	11.5	11.5	曾谷~安行1式	157-4
SJ118	240	-	-	(16.0)	(14.4)	安行3c式	157-5
SJ118	241	18.4	(28.0)	(28.6)	8.6	安行1式	157-6
SJ118	242	-	(24.8)	(26.4)	-	安行3c式	157-7
SJ118	243	-	(18.2)	(19.0)	-	曾谷式	157-8
SJ118	244	-	(20.4)	(22.0)	-	曾谷・高井東式	157-9
SJ118	245	-	(18.0)	(19.6)	-	安行3a式	158-1
SJ118	246	-	11.8	12.1	-	曾谷式	158-2
SJ118	247	-	-	(10.5)	7.0	晩期安行式	158-3
SJ118	248	-	-	(22.6)	3.0	晩期安行式	158-4
SJ118	249	-	-	(23.5)	-	安行3a式	158-5
SJ118	250	-	(23.6)	(24.6)	-	曾谷~安行1式	158-6
SJ118	251	-	(32.6)	(33.2)	-	曾谷~安行1式	158-7
SJ118	252	-	(22.6)	(23.3)	-	曾谷~安行1式	158-8
SJ118	253	-	(32.2)	(32.2)	-	曾谷~安行1式	158-9
SJ118	254	-	(20.8)	(21.0)	-	曾谷~安行1式	159-1
SJ118	255	-	-	(32.7)	-	安行式	159-2
SJ118	256	-	-	(21.6)	5.0	安行式	159-3
SJ118	257	-	(31.3)	(34.0)	-	安行3b~3c式	159-4
SJ118	258	-	-	(13.0)	(13.0)	晩期安行式	159-5
SJ118	259	-	(20.7)	(20.8)	-	晩期	159-6
SJ118	260	-	(11.8)	(12.6)	-	後~晩期	159-7
SJ118	261	-	(23.0)	(23.6)	-	後~晩期	159-8
SJ118	262	-	-	(13.0)	5.6	後~晩期	159-9
SJ118	263	-	-	(19.0)	(5.0)	晩期安行式	160-1
SJ119	264	-	(17.8)	(23.8)	-	加曾利B式	160-2
SJ119	265	-	(19.7)	(20.0)	-	曾谷~安行1式	160-3
SJ119	266	-	-	(20.8)	5.2	安行式	160-4
SJ119	267	-	-	(12.7)	10.2	後期前葉~中葉	160-5
SJ119	268	-	-	(11.2)	7.2	後~晩期	160-6
SJ120	269	-	(13.2)	(13.2)	-	加曾利B1式	160-7
SJ121	270	-	(27.2)	(27.8)	-	曾谷~安行1式	160-8
SJ121	271	-	-	(12.2)	2.4	曾谷~安行式	160-9
SJ122	272	-	(15.0)	(15.0)	-	加曾利B1式	161-1
SJ122	273	-	-	(10.4)	(7.8)	堀之内2~加曾利B1式	161-2
SJ122	274	-	-	(8.6)	6.0	加曾利B1式	161-3
SJ122	275	-	-	(8.2)	(6.0)	加曾利B式	161-4
SJ122	276	-	-	(9.8)	-	加曾利B1式	161-5
SJ123	277	-	(33.5)	(34.7)	-	晩期安行式	161-6
SJ123	278	11.0	(21.9)	(21.9)	12.6	堀之内2式	161-7
SJ123	279	-	(22.0)	(24.6)	-	曾谷式	161-8
SJ124	280	-	(26.2)	(27.4)	-	安行3a~3b式	161-9
SJ124	281	-	-	(18.9)	16.1	後期安行式	162-1
SJ126	282	-	(26.6)	(26.6)	-	安行3b式	162-2
SJ128	283	57.3	46.8	47.1	11.1	堀之内2式	162-3
SJ129	284	-	(23.2)	(23.2)	-	安行3d式	162-4
SJ129	285	-	(24.8)	(25.4)	-	前浦式	162-5
SJ131	286	-	(19.5)	(22.2)	-	堀之内1式	162-6
SJ131	287	-	(13.4)	(18.8)	-	曾谷・高井東式	162-7
SJ131	288	-	-	(18.4)	(3.8)	安行式	162-8
SJ131	289	4.4	(8.2)	(8.2)	(4.0)	後~晩期	163-1
SJ133	290	-	(23.3)	(24.0)	-	安行1式	163-2
SJ133	291	-	(28.0)	(28.3)	-	安行1式	163-3
SJ133	292	-	-	23.4	7.0	曾谷・高井東式	163-4
SJ134	293	-	(16.8)	(16.8)	-	安行1式	163-5
S18	1	-	(21.4)	(22.2)	-	安行1式	163-6
S18	2	-	(16.8)	(21.0)	-	曾谷式	163-7

第22表 遺構出土復元土器観察表(6) (第354~358・368~370図)

非定形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
S18	3	-	(28.7)	(29.0)	-	安行1式	163-8
S18	4	-	(20.1)	(20.4)	-	曾谷~安行1式	164-1
S18	5	-	(16.0)	(17.1)	-	曾谷~安行1式	164-2
S18	6	-	(23.4)	(29.2)	-	晩期安行式	164-3
S19	7	-	(22.6)	(23.0)	-	高井東式	164-4
S19	8	-	-	(29.7)	-	高井東式	164-5
S19	9	-	(16.4)	(16.6)	-	安行1式	164-6
S19	10	-	(15.4)	(16.8)	-	安行1式	164-7
S19	11	-	(18.6)	(18.8)	-	安行1式	164-8
S19	12	-	23.0	(24.8)	-	安行1式	165-1
S19	13	-	(24.0)	(25.4)	-	安行3b式	165-2
S19	14	-	-	(29.7)	-	安行1式	165-3
S19	15	-	(16.2)	(16.5)	-	安行2式	165-4
S19	16	-	(21.0)	(22.0)	-	後期安行式	165-5
S19	17	-	(17.2)	(21.5)	-	曾谷式	165-6
S19	18	-	(9.6)	(10.1)	-	晩期安行式	165-7
S19	19	14.7	(15.8)	(15.8)	2.6	晩期安行式	165-8
S19	20	-	(31.8)	(31.8)	-	晩期安行式	166-1
S19	21	-	(29.9)	(32.0)	-	安行式	166-2
S19	22	-	(25.5)	(25.8)	-	安行式	166-3
S19	23	-	(28.9)	(29.6)	-	安行式	166-4
S19	24	-	(26.2)	(26.8)	-	後期安行式	166-5
S19	25	-	(25.0)	(25.0)	-	安行式	166-6
S19	26	-	(26.2)	(27.1)	-	後期安行式	166-7
S19	27	-	(32.4)	(32.8)	-	後期末~晩期初頭	166-8
S19	28	-	(22.4)	(25.6)	-	晩期安行式	167-1
S19	29	-	-	(20.0)	3.0	安行式	167-2
S19	30	-	-	(21.0)	3.0	安行式	167-3
S19	31	-	-	(21.8)	3.0	安行式	167-4
S19	32	-	-	(14.4)	-	安行式	167-5
S19	33	-	-	(27.4)	7.0	安行式	167-6
S19	34	-	-	(13.0)	8.0	後~晩期	167-7
S19	35	-	-	(20.2)	(5.6)	後~晩期	167-8
S19	36	-	-	(19.0)	-	安行1式	167-9
S19	37	-	(18.0)	(19.5)	-	高井東式	168-1
S19	38	-	(10.0)	(10.0)	-	晩期安行式	168-2
S19	39	-	-	(14.6)	6.6	安行3a~3b式	168-3
S19	40	2.1	(10.3)	(10.3)	8.0	安行3a~3b式	168-4
S19	41	8.2	(24.3)	(24.3)	(18.0)	晩期前葉	168-5
SK196	1	12.5	13.2	13.7	4.0	曾谷・高井東式	168-6
SK196	2	-	(27.0)	(27.2)	-	曾谷・高井東式	168-7
SK196	3	-	(22.0)	(24.6)	-	晩期安行式	168-8
SK197	4	11.3	11.2	11.4	3.2	晩期安行式	169-1
SK197	5	-	(26.4)	(29.0)	-	晩期安行式	169-2
SK197	6	-	(17.2)	(17.2)	-	安行3a~3b式	169-3
SK197	7	6.4	16.4	17.2	4.0	安行3a~3b式	169-4
SK197	8	-	-	(16.8)	-	安行3a~3b式	169-5
SK198	9	15.0	10.6	15.7	4.0	晩期安行式	169-6
SK198	10	5.5	18.0	18.0	-	晩期安行式	169-7
SK199	11	-	(18.4)	(19.0)	-	安行3b式	169-8
SK199	12	-	(28.8)	(35.2)	-	晩期前葉	169-9
SK200	13	14.7	7.6	14.6	6.5	安行3b式	170-1
SK200	14	13.3	15.4	16.2	2.6	晩期安行式	170-2
SK200	15	7.2	14.4	15.2	2.6	晩期安行式	170-3
SK201	16	11.3	8.0	14.8	-	東北系の大洞式	170-4
SK202	17	7.0	18.2	18.8	3.2	大洞C式	170-5
SK202	18	6.5	13.3	13.5	2.5	晩期安行式	170-6
SK202	19	13.7	6.6	14.4	3.2	晩期安行式	170-7
SK203	20	-	(27.0)	(29.2)	-	晩期安行式	170-8

第23表 遺構出土復元土器観察表(7) (第370~380図)

非完形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SK207	21	-	-	(20.0)	(19.8)	安行3b~3c式	171-1
SK207	22	-	(21.0)	(23.0)	-	安行3b~3c式	171-2
SK207	23	-	(30.0)	(31.4)	-	安行3b~3c式	171-3
SK207	24	-	-	(18.8)	(18.2)	安行3a~3b式	171-4
SK207	25	8.7	23.8	23.8	5.2	大洞C1式	171-5
SK207	26	-	(10.6)	(15.6)	-	大洞C1式	171-6
SK207	27	10.0	11.8	16.2	4.3	大洞C1式	171-7
SK208	28	-	22.0	22.9	-	安行3c~3d式	171-8
SK208	29	-	(20.8)	(22.4)	-	晩期安行式	172-1
SK208	30	-	(26.2)	(27.0)	-	晩期安行式	172-2
SK208	31	-	-	(23.4)	-	安行3c~3d式	172-3
SK208	32	7.8	18.6	18.6	6.0	晩期安行式	172-4
SK208	33	12.6	(8.2)	13.2	3.6	安行3c式	172-5
SK208	34	-	-	16.0	(3.8)	安行3c~3d式	172-6
SK210	35	-	(22.2)	(25.0)	-	安行3b式	172-7
SK210	36	15.5	(8.2)	17.0	-	安行3b式	172-8
SK211	37	17.0	12.0	12.0	4.7	安行3b式	172-9
SK211	38	4.4	19.6	19.6	-	安行3b式	173-1
SK213	39	-	-	(24.0)	(9.7)	晩期安行式	173-2
SK213	40	7.6	8.4	10.0	3.2	安行3c式	173-3
SK215	41	-	-	(34.2)	-	晩期安行式	173-4
SK215	42	-	-	(27.0)	-	晩期安行式	173-5
SK216	43	-	(26.4)	(30.0)	-	晩期安行式	173-6
SK218	44	-	(16.0)	(16.0)	-	安行3c式	173-7
SK218	45	-	(27.0)	(29.5)	-	安行3b式	173-8
SK218	46	-	-	(22.2)	-	安行3c式	174-1
SK218	47	15.3	(7.8)	(15.0)	-	安行3b式	174-2
SK219	48	-	(26.8)	(32.3)	-	晩期安行式	174-3
SK220	49	15.8	13.4	14.7	2.2	晩期安行式	174-4
SK220	50	-	-	(14.2)	5.5	晩期安行式	174-5
SK220	51	5.8	15.6	15.6	7.2	晩期安行式	174-6
SK221	52	12.7	(25.2)	(25.2)	(5.4)	安行3b式	174-7
SK222	53	8.2	17.2	17.2	6.3	安行3b~3c式	174-8
SK222	54	-	-	(12.8)	2.5	安行3c式	174-9
SK223	55	17.6	(13.8)	(15.6)	3.8	晩期安行式	175-1
SK223	56	-	-	(35.0)	-	晩期安行式	175-2
SK224	57	-	-	(31.8)	-	晩期安行式	175-3
SK224	58	7.7	22.4	22.4	6.5	安行3b~3c式	175-4
SK225	59	-	(24.6)	(30.0)	-	安行3b~3c式	175-5
SK225	60	-	-	(16.8)	7.5	晩期安行式	175-6
SK226	61	-	(17.8)	(18.4)	-	安行3c式	175-7
SK226	62	-	-	(27.2)	-	晩期安行式	175-8
SK226	63	-	-	(35.2)	-	晩期安行式	176-1
SK226	64	14.2	(12.0)	17.2	6.7	晩期安行式	176-2
SK230	65	-	(24.4)	(27.8)	-	晩期安行式	176-3
SK232	66	-	(29.6)	(35.7)	(6.5)	晩期安行式	176-4
SK232	67	-	-	(22.0)	(7.5)	晩期安行式	176-5
SK232	68	12.3	6.4	15.8	4.5	安行3b式	176-6
SK233	69	-	(41.0)	(43.6)	-	晩期安行式	176-7
SK233	70	-	(26.6)	(27.6)	-	安行3c式	176-8
SK234	71	-	(24.4)	(25.0)	-	安行3b式	177-1
SK237	72	-	(43.0)	(46.8)	-	晩期安行式	177-2
SK237	73	-	(30.6)	(31.4)	-	晩期安行式	177-3
SK238	74	15.6	11.8	12.2	2.4	安行3c式	177-4
SK238	75	-	15.2	(16.9)	-	安行3b式	177-5
SK238	76	-	-	(27.4)	-	晩期安行式	177-6
SK238	77	8.0	(14.2)	(14.6)	-	晩期安行式	177-7
SK238	78	10.0	(10.8)	14.5	3.8	大洞B C式	177-8
SK238	79	14.4	(7.0)	17.3	-	安行3b式	177-9

第24表 遺構出土土器観察表(8) (第380~388図)

非完形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SK239	80	-	-	(9.8)	4.2	後晩期	178-1
SK241	81	-	(25.2)	(25.2)	-	大洞C1式	178-2
SK241	82	-	(15.2)	(16.2)	-	安行3c式	178-3
SK245	83	-	-	(27.2)	-	堀之内2式	178-4
SK245	84	-	-	(15.6)	9.9	堀之内2式	178-5
SK246	85	11.4	22.4	22.8	-	加賀利B3~曾谷式	178-6
SK248	86	-	-	(34.8)	-	安行3b式	178-7
SK248	87	-	29.1	30.2	-	安行3b式	178-8
SK248	88	12.6	(13.0)	13.1	4.6	大洞C1式	178-9
SK248	89	-	-	(23.4)	6.5	安行3b~3c式	179-1
SK248	90	-	-	(10.2)	6.5	晩期安行式	179-2
SK249	91	-	(22.2)	(22.4)	-	安行3c式	179-3
SK249	92	5.8	14.0	14.4	7.2	安行3c式	179-4
SK249	93	10.6	(10.4)	13.8	4.5	安行3b~3c式	179-5
SK249	94	8.0	24.4	25.2	2.5	安行3b~3c式	179-6
SK250	95	-	-	(18.0)	4.5	後晩期	179-7
SK250	96	5.7	(20.2)	(20.4)	8.0	安行3b式	179-8
SK250	97	11.7	6.0	13.6	5.8	晩期安行式	179-9
SK253	98	6.7	13.2	14.0	2.2	晩期安行式	179-10
SK256	99	17.1	(19.2)	(20.2)	(5.1)	安行3b式	180-1
SK257	100	-	(18.4)	(19.0)	-	大洞C1式	180-2
SK257	101	6.2	15.4	15.8	3.8	大洞C1式	180-3
SK262	102	-	(28.8)	(32.3)	-	安行3c式	180-4
SK268	103	-	-	10.6	2.0	晩期安行式	180-5
SK523	104	-	-	(15.0)	4.0	安行式	180-6
SK526	105	-	-	(28.4)	-	安行3b式	180-7
SK527	106	14.3	14.0	14.3	1.8	安行3c式	180-8
SK527	107	-	-	(32.2)	3.0	晩期安行式	180-9
SK531	108	-	-	(10.8)	-	安行3b~3c式	181-1
SK533	109	-	(16.8)	(17.2)	-	安行3b式	181-2
SK534	110	-	(25.8)	(27.4)	-	安行3d式	181-3
SK534	111	-	-	(12.4)	3.0	安行式	181-4
SK536	112	-	-	(15.8)	2.8	安行式	181-5
SK536	113	-	25.4	26.0	-	安行1式	181-6
SK536	114	-	(20.8)	(21.7)	-	安行1式	181-7
SK538	115	-	-	(11.5)	9.2	後晩期	181-8
SK539	116	-	(25.5)	(26.0)	-	安行3a~3b式	181-9
SK539	117	7.3	(15.4)	(17.0)	-	安行3c式	182-1
SK539	118	-	(26.4)	(28.4)	-	晩期安行式	182-2
SK540	119	-	(20.0)	(21.6)	-	安行1式	182-3
SK540	120	-	27.4	28.0	-	安行3a~3b式	182-4
SK541	121	-	(32.2)	(34.6)	-	晩期安行式	182-5
SK541	122	-	-	(13.8)	4.0	晩期安行式	182-6
SK541	123	-	-	(20.0)	(19.8)	安行3b式	182-7
SK542	124	-	-	(14.4)	-	晩期安行式	182-8
SK544	125	-	-	(17.3)	-	安行3b~3c式	182-9
SK544	126	-	-	(21.6)	-	安行3c式	183-1
SK544	127	-	(18.0)	(19.4)	-	安行3c式	183-2
SK544	128	-	(15.6)	(18.0)	-	安行3c式	183-3
SK544	129	-	(18.4)	(19.0)	-	安行3c式	183-4
SK544	130	-	-	(11.5)	4.0	安行3c式	183-5
SK544	131	7.9	(17.0)	(17.4)	-	晩期安行式	183-6
SK544	132	-	(28.1)	(37.8)	-	晩期安行式	183-7
SK544	133	18.8	(17.6)	(19.4)	4.0	晩期安行式	183-8
SK544	134	-	(28.0)	(31.6)	-	晩期安行式	183-9
SK544	135	-	-	(24.1)	5.0	晩期安行式	184-1
SK544	136	-	-	(20.4)	9.0	晩期安行式	184-2
SK544	137	-	-	(12.0)	5.5	晩期安行式	184-3
SK546	138	-	27.2	27.6	-	安行3b式	184-4

第25表 遺構出土復元土器観察表(9) (第388~397図)

非完形品は() につき、単位はcm (小数点第一位まで)							分類	図版
遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径			
SK547	139	-	-	(11.0)	(10.6)	晚期安行式		184-5
SK547	140	8.5	(14.2)	(14.6)	(5.6)	晚期安行式		184-6
SK547	141	-	(7.2)	(16.5)	-	安行3b式		184-7
SK548	142	-	(25.7)	(26.2)	-	安行3b式		184-8
SK548	143	-	(25.0)	(27.8)	-	安行3b式		184-9
SK548	144	-	(25.6)	(27.6)	-	晚期安行式		185-1
SK548	145	-	-	(34.6)	-	晚期安行式		185-2
SK548	146	-	-	(43.4)	-	晚期安行式		185-3
SK548	147	-	-	(29.7)	-	安行3b式		185-4
SK549	148	-	19.6	(26.6)	-	安行3a式		185-5
SK549	149	-	(25.8)	(30.1)	-	晚期安行式		185-6
SK550	150	-	-	(17.8)	5.0	晚期安行式		185-7
SK550	151	-	-	(10.7)	9.2	晚期安行式		185-8
SK550	152	-	-	(26.2)	(8.0)	晚期安行式		185-9
SK555	153	-	(28.6)	(29.4)	-	晚期安行式		186-1
SK555	154	-	28.4	29.0	-	安行3b式		186-2
SK556	155	-	(22.4)	(26.4)	-	後期末~晚期前葉		186-3
SK561	156	-	(25.4)	(29.1)	-	安行1式		186-4
SK561	157	-	(24.4)	(28.2)	-	晚期安行式		186-5
SK561	158	-	-	(18.8)	-	安行式		186-6
SK561	159	-	-	(8.0)	1.9	晚期安行式		186-7
SK564	160	-	(24.6)	(26.2)	-	晚期安行式		186-8
SK564	161	-	(21.8)	(22.4)	-	前涌式		186-9
SK565	162	-	(26.4)	(27.0)	-	安行2式		187-1
SK565	163	-	(32.6)	(37.4)	-	後期末~晚期初頭		187-2
SK567	164	-	(26.4)	(27.2)	-	晚期安行式		187-3
SK568	165	-	(29.6)	(31.2)	-	晚期安行式		187-4
SK568・569	166	-	(23.8)	(24.4)	-	安行3d式		187-5
SK568・569	167	-	(39.0)	(40.2)	-	大洞C2式		187-6
SK573	168	-	-	(12.0)	-	安行3a~3b式		187-7
SK578	169	-	-	(41.4)	-	堀之内1式		188-1
SK578	170	-	-	(12.8)	(12.0)	堀之内式		188-2
SK579	171	-	(29.0)	(31.0)	-	安行式		188-3
SK579	172	-	(27.2)	(30.4)	-	後期末~晚期初頭		188-4
SK579	173	-	-	(18.1)	4.0	安行式		188-5
SK580	174	-	(32.0)	(34.4)	-	安行3c式		188-6
SK580	175	-	-	(15.9)	4.0	晚期安行式		188-7
SK581	176	-	(15.0)	(24.0)	-	安行2式		188-8
SK584	177	-	(20.2)	(22.0)	-	安行2~3a式		189-1
SK584	178	-	(21.6)	(28.0)	-	安行1式		189-2
SK584	179	-	(32.4)	(37.0)	-	晚期安行式		189-3
SK584	180	-	(21.6)	(22.4)	-	晚期安行式		189-4
SK584	181	-	(31.6)	(34.2)	-	晚期安行式		189-5
SK584	182	-	(19.8)	(20.0)	-	晚期前葉		189-6
SK584	183	-	-	(24.0)	-	晚期安行式		189-7
SK586	184	-	(20.0)	(21.0)	-	安行3b式		189-8
SK586	185	-	(26.4)	(28.0)	-	安行3b式		190-1
SK586	186	-	-	(16.4)	4.0	晚期安行式		190-2
SK588	187	-	-	(16.6)	-	安行3b式		190-3
SK588	188	-	24.4	29.9	-	安行3b式		190-4
SK588	189	-	(14.4)	(15.2)	-	晚期安行式		190-5
SK588	190	-	-	(26.2)	-	晚期安行式		190-6
SK588	191	-	-	(24.4)	4.6	晚期安行式		190-7
SK588	192	8.9	(29.6)	(30.2)	-	安行3b式		190-8
SK588	193	-	-	(14.2)	-	晚期安行式		190-9
SK590	194	-	(24.6)	(29.2)	-	晚期安行式		191-1
SK590	195	-	-	(20.2)	7.0	晚期安行式		191-2
SK601	196	-	(29.0)	(30.0)	-	後期末~晚期初頭		191-3
SK602	197	-	-	(13.0)	3.2	安行式		191-4

第26表 遺構出土復元土器観察表 (10) (第397~404図)

非完形品は () つき。単位はcm (小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SK602	198	-	27.2	28.0	-	安行 2 ~ 3 a 式	191-5
SK603	199	-	(24.2)	(27.4)	-	後期末 ~ 晩期初頭	191-6
SK603	200	-	-	(15.4)	-	安行式	191-7
SK603	201	-	-	(26.8)	(13.7)	安行式	191-8
SK604	202	-	(31.4)	(34.8)	-	後期末 ~ 晩期初頭	191-9
SK606	203	-	(21.6)	(22.0)	-	安行 1 式	192-1
SK608	204	-	(29.0)	(30.1)	-	安行 3 b 式	192-2
SK611	205	-	-	(17.0)	(8.5)	後晩期	192-3
SK614	206	10.4	7.8	10.8	4.5	安行 3 b 式	192-4
SK614	207	3.8	14.4	14.8	-	晩期安行式	192-5
SK615	208	-	(29.7)	(30.0)	-	晩期安行式	192-6
SK616	209	-	-	(37.8)	-	安行 3 c ~ 3 d 式	192-7
SK616	210	4.7	(15.6)	(16.6)	(5.0)	前罐式	192-8
SK620	211	-	-	(10.2)	8.4	晩期安行式	192-9
SK624	212	15.0	16.2	17.6	4.0	晩期安行式	192-10
SK624	213	-	(19.6)	(20.0)	-	安行 3 c 式	193-1
SK624	214	7.4	14.6	15.2	3.5	晩期安行式	193-2
SK624	215	-	-	(16.4)	-	晩期安行式	193-3
SK629	216	37.0	(26.0)	(28.6)	8.4	堀之内 1 式	193-4
SK629	217	-	-	(34.6)	-	堀之内 1 式	193-5
SK630	218	-	(22.0)	(24.6)	-	晩期安行式	193-6
SK630	219	-	-	(31.8)	-	晩期安行式	193-7
SK630	220	10.2	11.6	12.4	3.0	晩期安行式	193-8
SK630	221	-	-	(23.2)	-	安行 3 b ~ 3 c 式	194-1
SK630	222	10.2	(19.8)	(20.2)	-	安行 3 b ~ 3 c 式	194-2
SK630	223	8.8	(21.2)	(21.4)	-	晩期安行式	194-3
SK630	224	11.1	11.0	14.0	5.6	安行 3 b 式	194-4
SK631	225	-	(29.0)	(29.2)	-	加曾利 B 1 式	194-5
SK631	226	-	(16.2)	(16.6)	-	加曾利 B 1 式	194-6
SK631	227	-	-	(7.0)	(5.5)	加曾利 B 式	194-7
SK631	228	-	-	(10.4)	7.0	加曾利 B 式	194-8
SK632	229	-	(19.2)	(27.8)	-	安行 1 式	194-9
SK632	230	-	(26.1)	(31.4)	-	安行 3 b 式	195-1
SK632	231	-	(22.5)	(24.0)	-	晩期安行式	195-2
SK632	232	-	(21.8)	(22.8)	-	加曾利 B 3 式	195-3
SK633	233	-	-	(28.4)	-	安行式	195-4
SK638	234	-	(24.1)	(28.4)	-	安行 3 c 式	195-5
SK638	235	-	-	(24.8)	6.4	晩期安行式	195-6
SK638	236	-	-	(21.8)	-	安行 3 a ~ 3 b 式	195-7
SK638	237	11.0	5.1	10.0	-	安行 3 b 式	195-8
SK647	238	-	-	(23.0)	-	堀之内 1 式	196-1
SK648	239	7.3	10.6	11.0	-	安行 3 a ~ 3 b 式	196-2
SK655	240	-	-	(10.0)	(8.3)	堀之内 ~ 加曾利 B 式	196-3
SK661	241	-	-	(32.0)	-	安行式	196-4
SK663	242	-	(25.6)	(26.6)	-	安行 1 式	196-5
SK663	243	-	(29.6)	(30.4)	-	安行 1 式	196-6
SK667	244	-	-	6.4	6.2	堀之内 2 ~ 加曾利 B 式	196-7
SK674	245	14.3	(13.6)	(14.4)	-	安行 3 b 式	196-8
SK674	246	-	(11.7)	(15.6)	-	安行 3 a ~ 3 b 式	196-9
SK674	247	-	(24.1)	(27.0)	-	安行 3 b 式	197-1
SK674	248	-	-	(14.2)	7.4	晩期安行式	197-2
SK674	249	-	(19.2)	(19.6)	-	安行 3 a 式	197-3
SK675	250	-	(23.6)	(27.2)	-	晩期安行式	197-4
SK675	251	-	(24.5)	(28.6)	-	晩期安行式	197-5
SK676 ~ 678	252	-	(21.6)	(23.0)	-	曾谷式	197-6
SK682	253	-	-	(23.0)	-	後期安行式	197-7
SK683	254	-	-	(15.0)	3.0	安行式	197-8
SK687	255	-	20.0	(27.6)	-	安行 1 式	197-9
SK687	256	-	(27.5)	(29.0)	-	安行式	197-10

第27表 遺構出土復元土器観察表 (11) (第404～412図)

非定形品は () つき。単位はcm (小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SK687	257	-	(30.8)	(32.0)	-	後期末～晩期初頭	198-1
SK687	258	-	(30.7)	(31.0)	-	安行1式	198-2
SK693	259	24.0	10.0	10.9	4.8	祇名寺～堀之内1式	198-3
SK699	260	-	(15.0)	(15.5)	-	大洞C2式	198-4
SK701	261	11.2	9.6	11.8	5.0	安行3c式	198-5
SK701	262	-	-	(13.6)	7.0	晩期安行式	198-6
SK714	263	-	(21.5)	(24.4)	-	晩期安行式	198-7
SK714	264	-	-	(14.0)	2.0	安行式	198-8
SK716	265	-	(22.8)	(23.4)	-	安行3c～3d式	198-9
SK726	266	6.8	19.0	19.0	-	安行3b～3c式	199-1
SK726	267	5.4	15.4	15.8	7.0	晩期安行式	199-2
SK732	268	-	(24.4)	(25.2)	-	高井東式	199-3
SK734	269	-	(36.6)	(38.2)	-	堀之内1式	199-4
SK734	270	-	(27.0)	(28.0)	-	堀之内1式	199-5
SK738	271	-	(15.0)	(15.5)	-	堀之内2式	199-6
SK741	272	-	25.0	(28.0)	-	安行1式	199-7
SK741	273	-	(25.4)	(26.0)	-	安行1式	199-8
SK741	274	-	21.3	21.8	-	安行1式	200-1
SK741	275	-	-	(17.0)	2.2	安行式	200-2
SK741	276	-	-	(15.0)	3.0	安行式	200-3
SK741	277	-	-	(14.4)	3.0	安行式	200-4
SK742	278	-	(26.0)	(26.0)	-	安行1式	200-5
SK742	279	-	-	17.2	2.8	安行式	200-6
SK742	280	-	(27.2)	(29.5)	-	後期末～晩期初頭	200-7
SK742	281	-	(34.0)	(37.0)	-	後期末～晩期初頭	200-8
SK742	282	-	-	(18.4)	-	安行式	200-9
SK743	283	-	(29.0)	(29.6)	-	堀之内2式	201-1
SK743	284	-	(15.0)	(20.8)	-	安行3b式	201-2
SK743	285	-	(30.4)	(34.6)	-	加曾利B式	201-3
SK744	286	-	-	(27.8)	-	祇名寺式	201-4
SK744	287	-	-	(24.9)	-	安行1式	201-5
SK744	288	-	(27.4)	(27.8)	-	安行1式	201-6
SK744	289	-	(28.6)	(29.0)	-	安行1式	201-7
SK744	290	-	-	(15.6)	(14.6)	後期安行式	201-8
SK744	291	-	(23.2)	(24.0)	-	安行1式	202-1
SK744	292	-	(27.6)	(28.6)	-	安行1式	202-2
SK744	293	-	(21.5)	(25.2)	-	晩期安行式	202-3
SK744	294	-	(11.8)	(12.0)	-	後晩期	202-4
SK744	295	-	-	(14.0)	4.0	安行式	202-5
SK744	296	-	-	(12.4)	5.0	安行式	202-6
SK744	297	-	-	(10.4)	3.0	安行式	202-7
SK744	298	-	-	(10.4)	3.0	安行式	202-8
SK744	299	-	-	(10.6)	2.4	安行式	202-9
SK745	300	-	-	(21.0)	12.0	晩期前～中葉	203-1
SK763	301	-	(20.6)	(23.2)	-	晩期安行式	203-2
SK763	302	5.3	(15.6)	(16.0)	(5.3)	晩期安行式	203-3
SK765	303	-	-	(19.4)	-	曾谷・高井東式	203-4
SK766	304	-	(26.4)	(27.0)	-	安行1式	203-5
SK769	305	-	-	(19.6)	(3.8)	曾谷～安行1式	203-6
SK769	306	-	-	(5.6)	5.0	堀之内～加曾利B式	203-7
SK774	307	-	(23.0)	(25.8)	-	晩期安行式	203-8
SK775	308	-	-	(24.0)	(10.6)	堀之内1式	203-9
SK775	309	-	(20.0)	(20.4)	-	安行3b式	203-10
SK775	310	12.6	8.6	12.4	5.6	安行3b式	204-1
SK783	311	-	(22.8)	(23.3)	-	堀之内1式	204-2
SK783	312	-	(21.0)	(39.0)	14.0	堀之内1式	204-3
SK783	313	-	(27.3)	(28.0)	-	安行2式	204-4
SK784	314	-	(28.4)	(30.2)	-	天神原式	204-5
SK787	315	19.0	(24.6)	(25.0)	8.4	加曾利B1式	204-6

第28表 遺構出土復元土器観察表 (12) (第412・508～511・520・522・525・528図)

非完形品は () 付き。単位はcm (小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
SK807	316	-	(29.4)	(30.2)	-	加曾利B1式	204-7
SK819	317	-	(34.6)	(36.6)	-	堀之内1式	205-1
集中1	1	-	(27.0)	(27.0)	-	安行3c式	205-2
集中1	2	-	(28.4)	(29.0)	-	安行3c式	205-3
集中1	3	-	(27.4)	(28.2)	-	安行3d式	205-4
集中1	4	-	-	(19.0)	(18.2)	安行3c～3d式	205-5
集中1	5	-	-	(9.0)	8.3	安行3c式	205-6
集中1	6	-	-	(15.2)	(14.8)	安行3c～3d式	205-7
集中1	7	-	-	(18.3)	-	安行3c～3d式	205-8
集中1	8	9.7	(6.0)	10.8	3.0	晩期安行式	205-9
集中1	9	-	(26.8)	(27.0)	-	安行3a～3b式	206-1
集中1	10	-	-	(14.3)	8.5	安行3a～3b式	206-2
集中1	11	-	(16.0)	(16.4)	-	晩期安行式	206-3
集中1	12	-	9.6	(20.2)	-	晩期安行式	206-4
集中1	13	-	(19.4)	(20.0)	-	天神原式	206-5
集中1	14	-	(11.8)	(12.0)	-	大洞C1式	206-6
集中1	15	-	-	(11.4)	-	大洞C1式	206-7
集中1	16	-	(27.5)	(28.5)	-	晩期安行式	206-8
集中1	17	-	17.4	(19.2)	-	晩期安行式	206-9
集中1	18	-	(25.6)	(31.8)	-	晩期安行式	207-1
集中1	19	-	20.2	(25.6)	-	晩期安行式	207-2
集中1	20	-	-	(20.8)	6.2	晩期安行式	207-3
集中1	21	-	-	(16.4)	6.0	晩期安行式	207-4
集中1	22	-	-	(11.8)	8.0	晩期安行式	207-5
集中1	23	-	-	(16.6)	(11.0)	晩期安行式	207-6
集中1	24	-	-	(14.8)	8.4	晩期安行式	207-7
集中1	25	-	-	(12.0)	7.0	晩期安行式	207-8
集中1	26	-	-	(20.8)	(10.0)	晩期安行式	207-9
集中3	27	-	-	(15.6)	-	安行3d式	208-1
集中6	28	-	(25.0)	(32.6)	-	安行3d式	208-2
集中6	29	-	(30.2)	(33.6)	-	大洞C2式	208-3
集中7	30	-	(44.8)	(50.2)	-	安行3c～3d式	208-4
集中7	31	-	(35.4)	(40.9)	-	安行3d式	208-5
集中7	32	-	(32.0)	(32.4)	-	安行3d式	208-6
集中7	33	-	-	17.8	17.0	安行3d式	208-7
集中7	34	-	-	(26.6)	-	安行3d式	208-8
集中7	35	-	(27.6)	(28.8)	-	晩期安行式	209-1
集中7	36	-	-	(18.0)	8.0	晩期安行式	209-2
集中7	37	-	-	(16.6)	8.2	晩期安行式	209-3
埴埴4	1	30.0	24.0	24.2	-	天神原式	209-4
埴埴5	2	-	-	(46.4)	-	晩期安行式	209-5
埴埴6	3	-	-	22.9	3.8	加曾利B3～曾谷式	209-6
焼土跡32	1	-	-	(12.0)	3.6	安行式	209-7
焼土跡36	2	-	(11.2)	(12.0)	-	安行1式	209-8
焼土跡39	3	-	(33.4)	(33.4)	-	晩期中葉	210-1
焼土跡39	4	-	-	(10.6)	-	安行3c～3d式	210-2
焼土跡40	5	-	-	(19.7)	(19.0)	安行3c式	210-3
焼土跡40	6	-	-	(18.0)	-	大洞C1式	210-4
SX17	1	-	-	(31.3)	-	安行3a～3b式	210-5
SX17	2	-	-	(17.6)	(10.0)	晩期安行式	210-6
ZY-998P18	1	-	-	(11.1)	9.3	後期前～中葉	210-7
B-2P15	2	-	-	(29.0)	-	安行3d式	210-8
C-2P40	3	-	(7.8)	(12.2)	-	大洞C1式	210-9

2. 土製品

(1) 住居跡出土土製品

土偶 (第534・535図)

1・2は第100号住居跡から出土した。

1は中空みみずく土偶である。腹部から右腰部にかけての部分で、背面は剥落する。下腹部に円柱形の突起を配し、これを起点として腰回りに刻み隆帯を巡らせて、刻みを持つ横瘤を配する。

中央の突起の下面には一对の球状の小突起を配しており、併せて男性器を表現したものとみられる。男性像としての土偶は稀有である。

胴部と大腿部には横位の集合沈線を施文し、胴部のみ縄文を施文する。沈線内にわずかに赤色顔料が残っており、本来は赤彩されていたものであろう。黒色の堅緻な器壁である。安行3a式期のものであろう。現存部分の高さ66cm、幅86cm、厚さ44cm、重さ1322gである。

2はみみずく土偶の右脚である。扁平板状で、全体に緩やかな内反りの弧を描き、爪先がわずかに隆起している。足指の表現は無く、横位の集合沈線文を描いて、前面のみ縄文を施文している。

黒褐色の堅緻な器壁である。安行3a式期のものであろう。現存部分の高さ56cm、幅30cm、厚さ18cm、重さ238gである。

3は第101号住居跡から出土した。みみずく土偶の頭部で、結髪を欠損する。

顔の表現は刻み隆帯と結節沈線で行っている。ハート形の隆帯で顔面を囲繞しているが、大半を欠損している。環状の隆帯+結節沈線で両眼および口を表現している。鼻は欠失するが、両眼の中間に存在したものとみられる。両頬には弧状文を描く。

顔面の両側に三角形の突起で耳を表現し、中央に貫通孔を持って、表裏とも周囲に円文を描く。後頭部には楕円形の区画を配して縄文を充填する。背中には横位の結節沈線文を重畳させる。

暗茶褐色の堅緻な器壁で、全体に微量の赤色顔料が残存する。安行2式であらう。現存部分の高さ62cm、幅68cm、厚さ26cm、重さ848gである。

4は第106号住居跡から出土した。みみずく土偶の頭部である。顔の表現はすべて縄文を伴う隆帯で行っている。

輪郭は円形で、隆帯で縁取っている。下向きの弧を描く隆帯で眉を表現し、これと対峙する上向きの弧状の隆帯で口を表現している。眼は顔のほぼ中段に存在し、鼻は眉に接する上額部に位置し、一对の鼻孔を持っている。

結髪はいくつかの鱗状突起で構成し、上面観楕円形で前後に扁平である。後頭部には菱形の区画を描いて、中央に入り組み文を配する。

沈線内部に赤色顔料が残っている。器壁は暗橙色で、焼成は良好である。安行3b式期のものであろう。現存部分の高さ72cm、幅80cm、厚さ30cm、重さ1477gである。

5～7は第118号住居跡から出土した。

5は中空みみずく土偶で、左後頭部から背中にかけての部分である。幅広の沈線で文様を描く。

頭頂部が開口して、これを取り巻くように長方形の隆帯を巡らせ、コーナー部分に突起を配する。結髪は内向きの弧を描く角状の突起である。

後頭部に菱形の区画を描いて対向三叉文を描く。背中には同種のモチーフを描いていたものとみられる。

黒色の堅緻な器壁である。安行3b式期のものか。現存部分の高さ104cm、幅54cm、厚さ21cm、重さ1302gである。

6はみみずく土偶で、胸部のみ残存する。みぞおちから両肩にかけてV字状の刻み隆帯を貼り付ける。胸部は縦位の結節沈線文を挟んで対向三叉文を描いている。背中には菱形の区画を描いて、紡錘文を挟んで対向三叉文を描く。

黒褐色の堅緻な器壁である。安行3b式期のものか。現存部分の高さ54cm、幅70cm、厚さ38cm、重さ1231gである。

7はみみずく土偶の左脚である。沈線と縄文を持つ隆帯で文様を描いている。脚は前面が張り出し、断面三角形で全体に縄文を施文する。腰の部分が横に張り出して、脚の付け根に平行沈線を巡らせる。足首に沈線を巡らせ、足は円筒状で爪先の表現は持たず、足裏は丸みを帯びている。

器壁は黄橙色で風化がみられる。安行3b式期のものであろう。現存部分の高さ62cm、幅36cm、厚さ36cm、重さ574gである。

8は第130号住居跡から出土した。小型のみみずく土偶である。表現に簡略化が目立ち、文様は刻み目文と粗雑な集合沈線文から成っている。

顔面は刻み目を伴う環状の微隆起帯で表現し、両眼・口は刻みを持つ円形の貼り付け文である。鼻は刻みを持つ縦瘤で上額に位置し、鼻孔を持たない。結髪は前後一対ずつの鱗状突起で、額にも一個の突起を持つ。

耳は表現せず、顔の両側にいかり肩の小さな腕

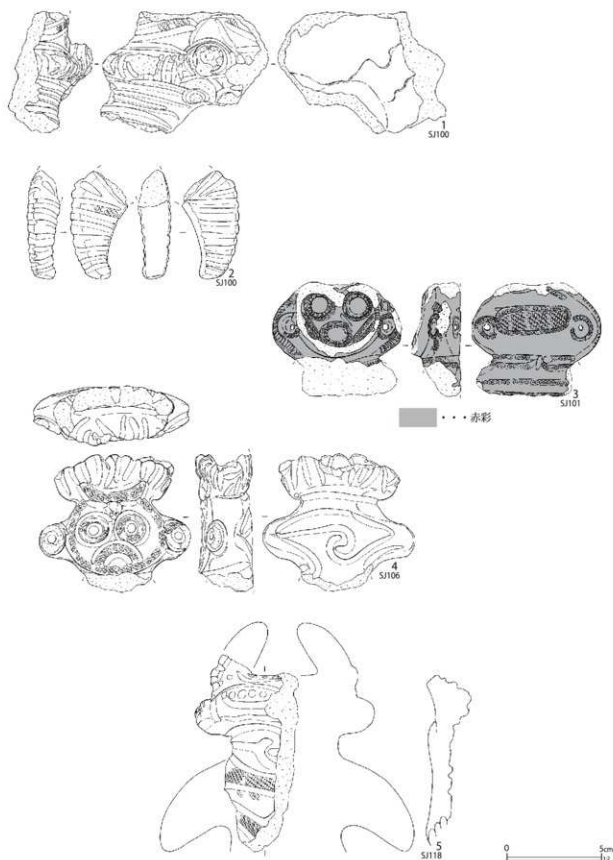
を配しており、手先がわずかに外に反っている。胴は非常に短く、腹の中央に眼と同様の貼り付け文を配する。

後頭部に一対の縦瘤を配し、背中には同心円文を描く。手足には横位の集合沈線を描く。器壁は黒灰褐色で焼成は良好である。安行3b式か。現存部分の高さ78cm、幅68cm、厚さ30cm、重さ1386gである。

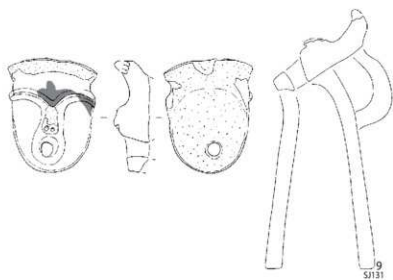
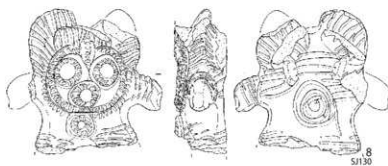
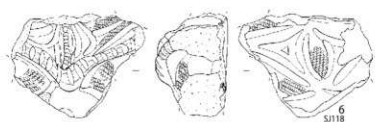
9は第131号住居跡から出土した。筒形土偶の顔面である。結髪を欠損する。顔は小判形で、中央がやや隆起する。眉から鼻、口までを一続きの隆帯で表現し、眼を持たない。

眉は左右対称の弧状の隆帯で、断面三角形である。鼻は三角形で鼻孔を持つ。口は円孔で周囲に微隆起帯を持つ。前額部にひさし状の結髪表現を持っていたものとみられる。頭頂部には円孔を持つ。

暗茶褐色の堅緻な器壁で研磨を徹底し、額と左眉にタール状の付着物が残る。堀之内式に伴う土偶である。現存部分の高さ60cm、幅46cm、厚さ20cm、重さ415gである。



第534図 住居跡出土土製品 (1)



第535図 住居跡出土土製品（2）

耳飾り (第536図～第541図)

土製の耳飾りは、以下の分類に基づいて整理した。

I：白形

A：装着部が凹まないもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：装着部が凹むもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

II：栓形

A：貫通孔を持たないもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：貫通孔を持つもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

III：環状

A：断面長方形ないし丸棒状のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：断面三角形のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

C：断面「く」の字状ないし弧状のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

D：断面鉤状のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

IV：台形

A：上面透かしを持たないもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：上面透かしを持つもの

V：「千網型」タイプ

10～15は第99号住居跡から出土した。

10は白形無文で装着部が凹むタイプで、指頭痕や成形時の窠跡を残す粗雑な造りである。11は環状無文で断面弧状のタイプ、12・13は環状無文で断面鉤状のタイプである。

14・15は台形で透かし文様を持つタイプである。いずれも巴状の透かし文様を描き、周縁部には4単位の小突起を持って、対向三叉文で連繋する。いずれも赤彩している。

16～41は第100号住居跡から出土した。16～18は白形無文で装着部が凹まないタイプ、19は白形有文で装着部が凹むタイプで、上面に渦文を描いて赤彩し、下面にも凹みを持つ。

20は環状有文で断面棒状のタイプで、貫通孔を持つ白形とも解される。上面および側縁部に刺突列を描く。

21・24は環状無文で断面弧状、22・23は環状無文で断面棒状のタイプである。25は環状有文で断面弧状のタイプで、内面に沈線を巡らせる。26は環状無文で断面三角形である。

27～34は環状有文で断面弧状のタイプである。27はU字状の立体装飾をおそらく4単位配する。28は長楕円形の区画文で赤彩する。

29は27と同種のU字とわらび手状の立体装飾を交互配置する。サイズや色調も似通っており、対をなす可能性がある。30・31は二叉の小突起を配して沈線で連繋する。

32は中央押圧を持つ瘤を配して沈線で連繋する。33は円孔を中心に組み文様を描く突起である。34の突起は小渦文を挟んでわらび手状の沈線が対峙する。

35～37は環状無文で断面鉤状のタイプ、38は環状有文で断面鉤状のタイプで、対弧文を挟んでY字の沈線が対峙する。

39は台形有文で透かしを持たないタイプで、渦文を描いて赤彩する。40・41は台形で透かし文様を持つタイプで、橋梁状の透かし文様である。

42・43は第101号住居跡から出土した。42は環状無文で断面弧状、43は環状有文で断面棒状のタイプで、粗雑な沈線文がみられる。

44～49は第102号住居跡から出土した。44・45は環状無文で断面弧状のタイプ、46～48は環状有文で断面弧状のタイプである。46・47は粗雑な沈線文を描き、48は3個1単位と2個1単位の小突起を対置する。49は環状有文で断面鉤状のタイプである。

50・51は第103号住居跡から出土した。50は環状有文で断面棒状のタイプで、上端に刻み目文を巡らせる。51は環状有文で断面弧状のタイプで、短沈線を伴う楕円形の突起を沈線で連繋する。

52～59は第104号住居跡から出土した。52は白形無文で装着部が凹まないタイプ、53は環状無文で断面棒状のタイプである。54・57は環状有文で断面弧状のタイプである。54はU字状の小突起を4単位配する。57はワンポイントの沈線文を配する。

55・56は環状無文で断面三角形のタイプである。56は内面が厚みを持ち、貫通孔を持つ白形とも解される。

58は台形有文で透かしを持たないタイプで、中央の刺突文をはさんで3の字状の沈線文が対峙する。59は台形で透かし文様を持つタイプで、わらび手状の立体装飾が対峙する。

60～74は第105号住居跡から出土した。60は白形有文で装着部が凹まないタイプである。粗雑な沈線文で、上面に同心円文を配し、側縁に平行沈線を巡らせる。61は環状有文で断面棒状のタイプで、貼り瘤と平行沈線文をそれぞれ対置する。62は環状無文で断面三角形のタイプである。

63～65は環状有文で断面弧状のタイプである。63はワンポイントの沈線文を配する。64・65は短沈線列を巡らせる。

66は環状無文で断面鉤状のタイプである。67は環状有文で断面鉤状のタイプで、ワンポイントの沈

線文を配する。

68～76は台形で透かし文様を持つタイプである。68～74は波頭状の立体装飾が交錯し、非常に細かな刻み目文や刺突文を施す。68と69、71と72、73と74はサイズや意匠が似通っており、対をなす可能性がある。

75・76は第106号住居跡から出土した。橋梁状の立体装飾が十字に交わるものであろう。橋梁の付け根に小突起を配してわらび手状の沈線で連繋する。76は破片ながら75と同意匠とみられ、サイズも近いことから、対をなす可能性がある。

77～80は第107号住居跡から出土した。77は白形無文で装着部が凹まないタイプである。上面より下面がやや小さくなっており、粗大な枠形とも解される。78は台形有文で透かしを持たないタイプで、上面に同心円文を描く。

79は環状無文で断面棒状のタイプ、80は環状無文で断面弧状のタイプである。

81は第108号住居跡から出土した。環状無文で断面三角形のタイプである。

82～85は第109号住居跡から出土した。82は環状無文で断面三角形のタイプである。83は環状有文で断面鉤状のタイプである。ワンポイントの沈線文を配し、上端に刻み目文を巡らせる。84は環状無文で断面鉤状のタイプである。85は台形で透かし文様を持つタイプで、橋梁状の透かしの中央に入り組み文を配する。

86～90は第111号住居跡から出土した。86は環状無文で断面弧状のタイプである。87は環状有文で断面三角形のタイプで、3単位の楕円形区画文を配する。88は環状有文で断面鉤状のタイプで、刺突を伴う貼り瘤をはさんでY字状の沈線文が対峙する。

89は台形無文で透かし文様を持たないタイプ、90は台形で透かし文様を持つタイプで楕円形の透かしを3つ配する。

91は第112号住居跡から出土した。環状有文で

断面鉤状のタイプで、ワンポイントの沈線文を配する。

92～95は第114号住居跡から出土した。92は白形無文で装着部が凹むタイプで、中央に貫通孔を持つ。93は環状無文で断面棒状のタイプである。94は環状有文で断面弧状のタイプで、内面に短沈線列を巡らせる。95は環状無文で断面鉤状のタイプである。

96は第115号住居跡から出土した。環状有文で断面弧状のタイプで、豚鼻突起を沈線で連繋して刻み目文を巡らせるものであろう。

97～107は第118号住居跡から出土した。97・98は白形無文で装着部が凹まないタイプである。どちらもこの種のものとしては良好に研磨している。98は下面に穿孔して軽量化を図っている。

99・101は環状無文で断面弧状のタイプである。100・102・103は環状有文で断面弧状のタイプである。

100は内面に沈線を巡らせる。102は豚鼻突起を

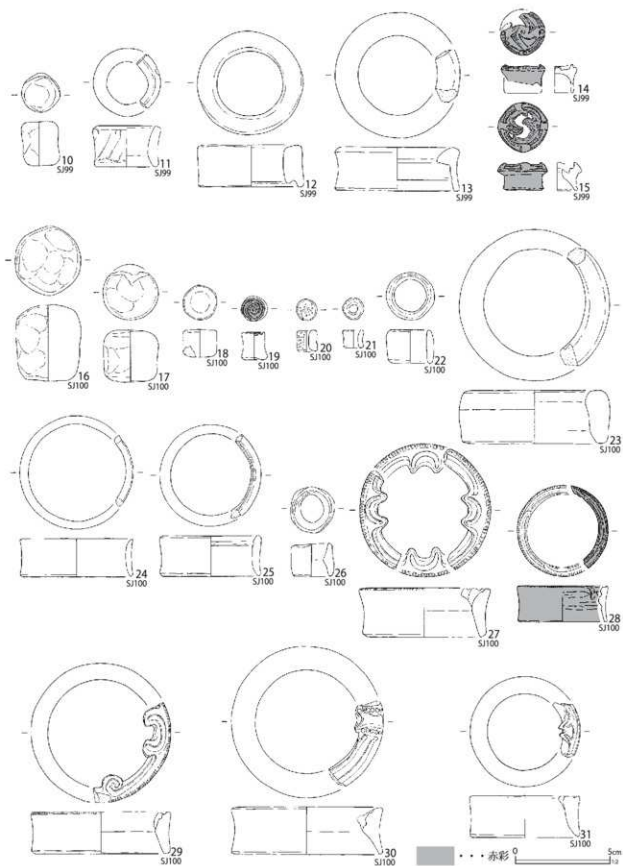
配して沈線を巡らせる。103は内面に沈線、上端に短沈線列を巡らせる。

104～107は台形で透かし文様を持つ。104は波頭状の立体装飾が交錯して刻み目文を施す。105・106は工字文風のモチーフを描き、赤色顔料を残す。107は楕円形の透かしを3箇所配して赤色顔料を残す。

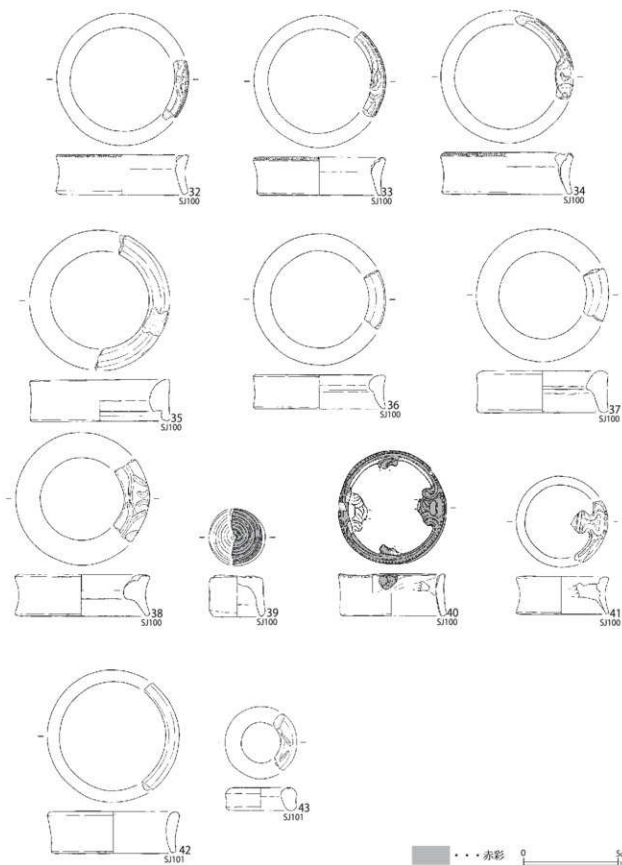
108～112は第124号住居跡から出土した。108は白形無文で装着部が凹むタイプである。109は環状無文で断面弧状、110は環状有文で断面弧状のタイプで、橋梁状の立体装飾を持つ。

111は環状無文で断面鉤状のタイプである。112は環状有文で断面鉤状のタイプで、工字文風の突起をはさんで対向三叉文を配する。

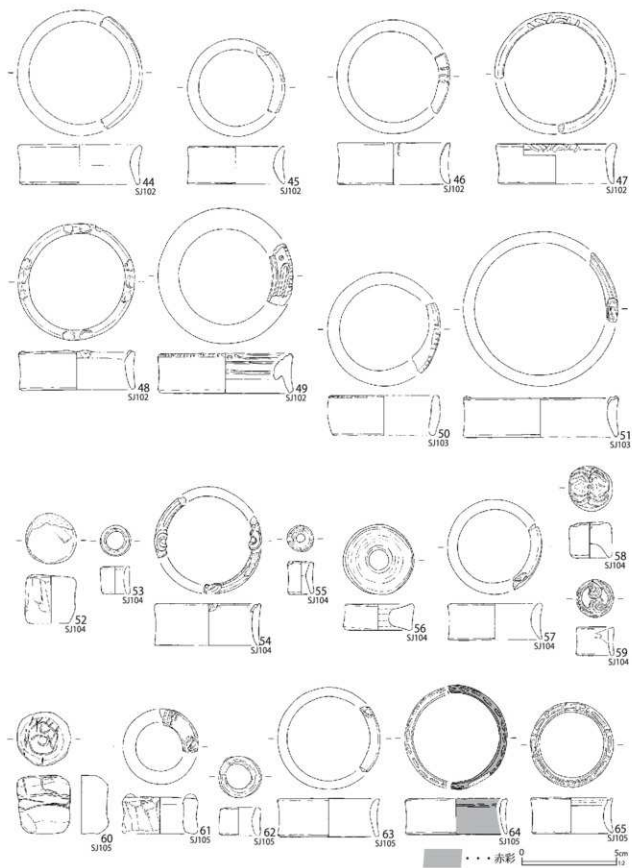
113～115は第132号住居跡から出土した。113は環状無文で断面三角形、114は環状無文で断面鉤形、115は環状有文で断面鉤形のタイプで、4箇所小入り組み文を配し、非常に良く研磨している。



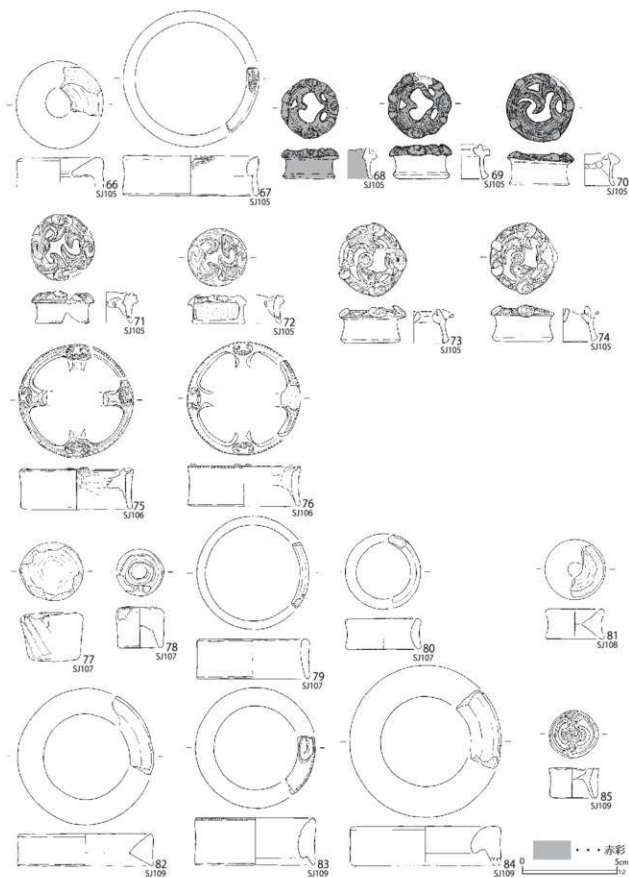
第536図 住居跡出土土製品(3)



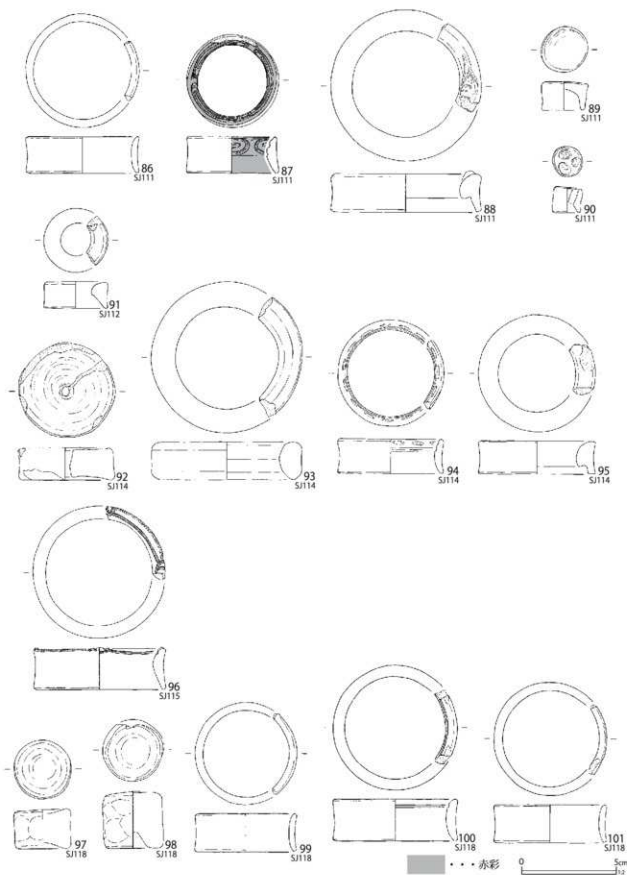
第537図 住居跡出土土製品（4）



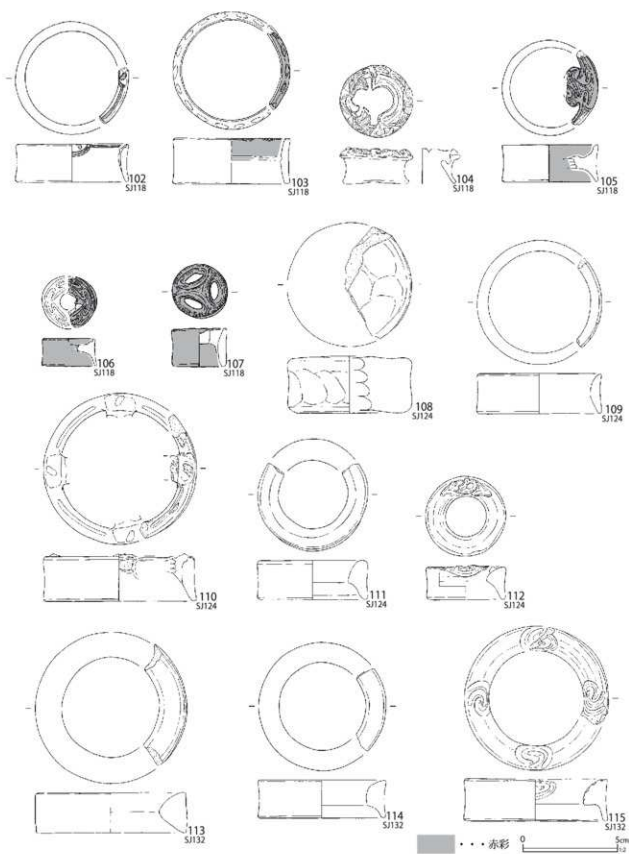
第538図 住居跡出土土製品 (5)



第539図 住居跡出土土製品 (6)



第540図 住居跡出土土製品（7）



第541図 住居跡出土土製品 (8)

土製円盤（第542～第550図）

今回の発掘調査で出土した土製円盤については、大きく2つのタイプに分けることができる。

I類：磨製タイプ

土器片の周縁を整形研磨して文字通りの円盤状に再加工したもの。従来の定義での「土製円盤」である。

II類：打製タイプ

土器片の周縁部から中央部に向かう複数回の打撃が観察できるもの、あるいは突起・隆帯等を打撃により人為的に取り除いたと判断できるもの。I類とは異なり、必ずしも形態が「円形」であることを認定基準としない。

II類の加工痕は、あたかも石器における剥離面のような外観を呈しており、また、明瞭な切り合いを持っている。

このII類の土製円盤を、素材となっている土器片の部位により以下のとおり細分する。

A：口縁部

ア：突起を持つ口縁

イ：隆帯を巡らせる口縁・折り返し口縁

ウ：断面肥厚する口縁

エ：その他の口縁

B：胴部

ア：突起を持つ胴部

イ：隆帯を持つ胴部

ウ：その他の胴部

C：底部

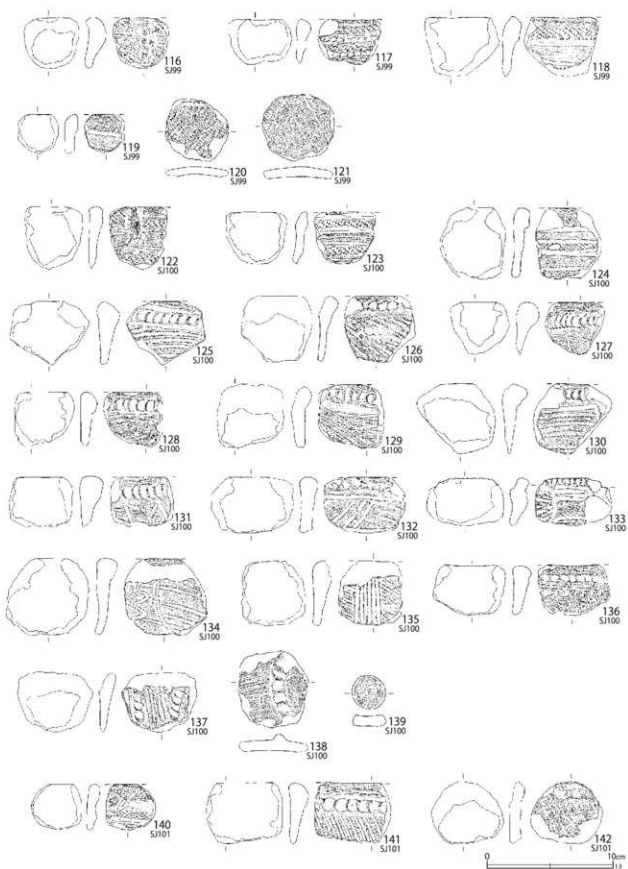
D：その他・不明

掲載資料の法量と分類は第31～35表にまとめた。一見して、口縁部の破片を使用したII A類が多数を占める傾向が見て取れる。

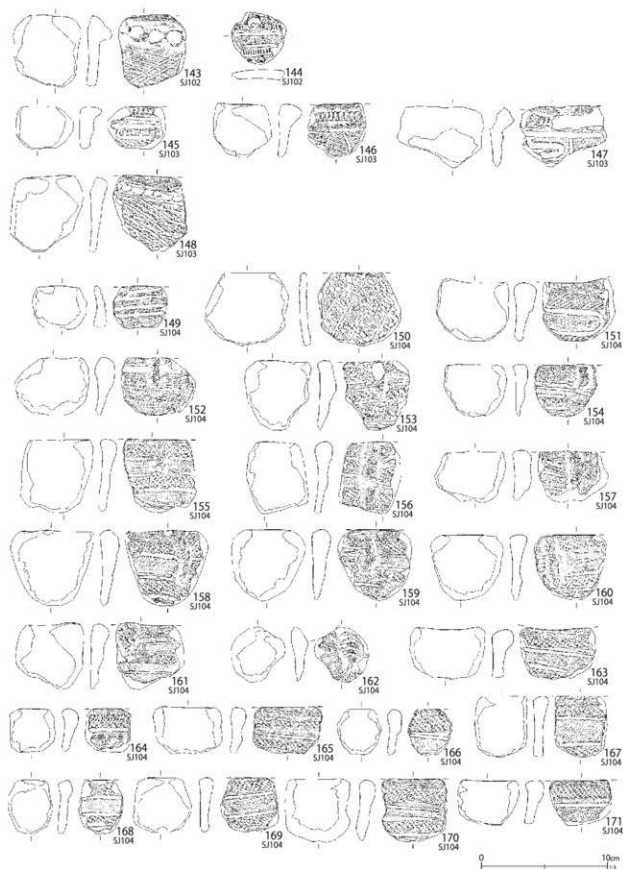
また、II ア～ウでは、突起や隆帯が存在する表面だけではなく、口端部内面の隆起に打撃が集中する傾向も顕著である。

こうした傾向は、II類土製円盤の成因や用途に密接に関わっている可能性が高い。

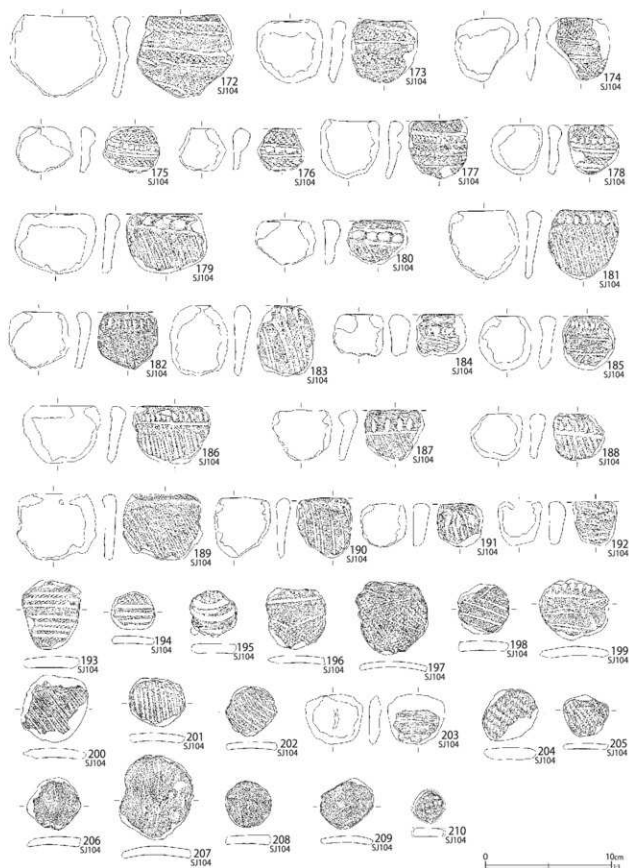
使用する土器片の時期は、判別可能なものについては安行1式と思われるものが多く、安行2式から晩期安行式のものも若干目に付く。



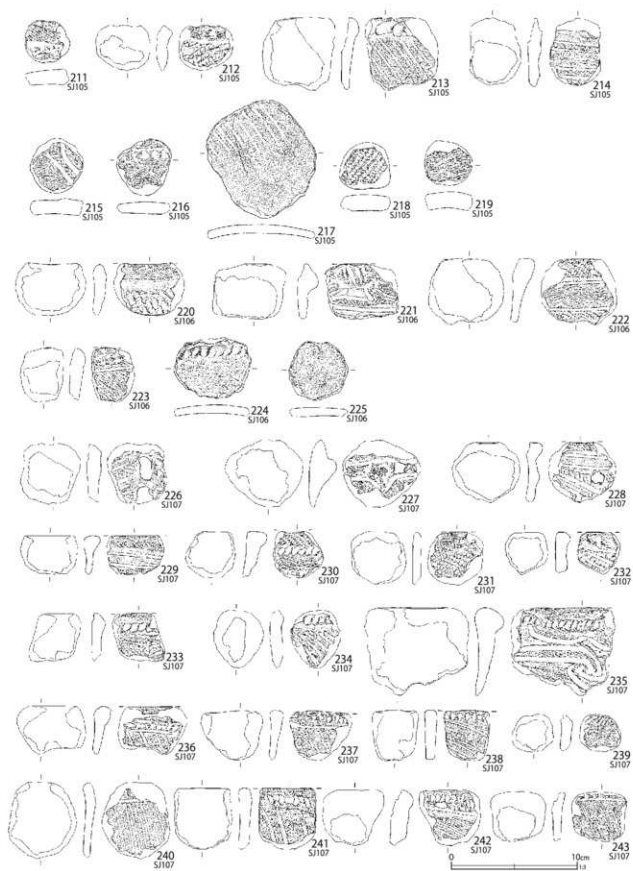
第542図 住居跡出土土製品 (9)



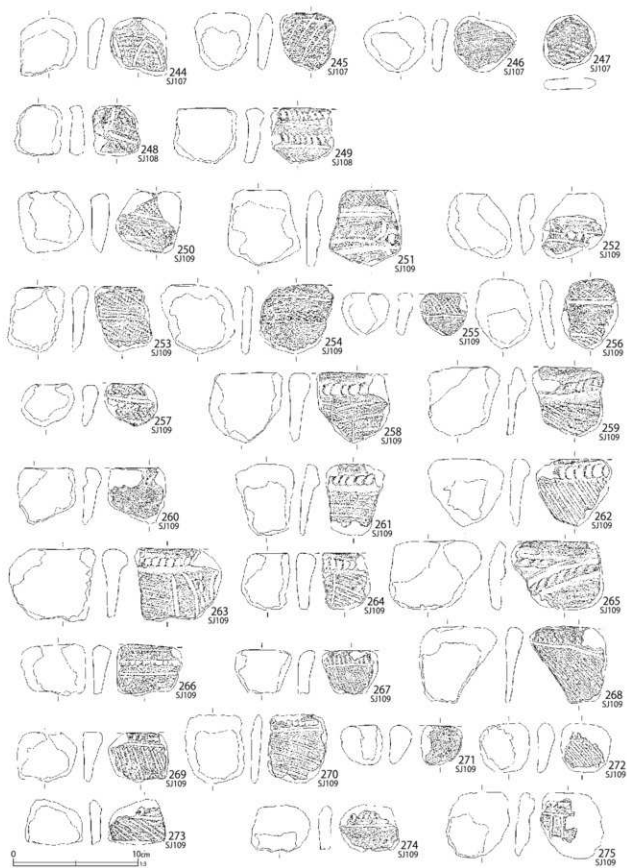
第543図 住居跡出土土製品 (10)



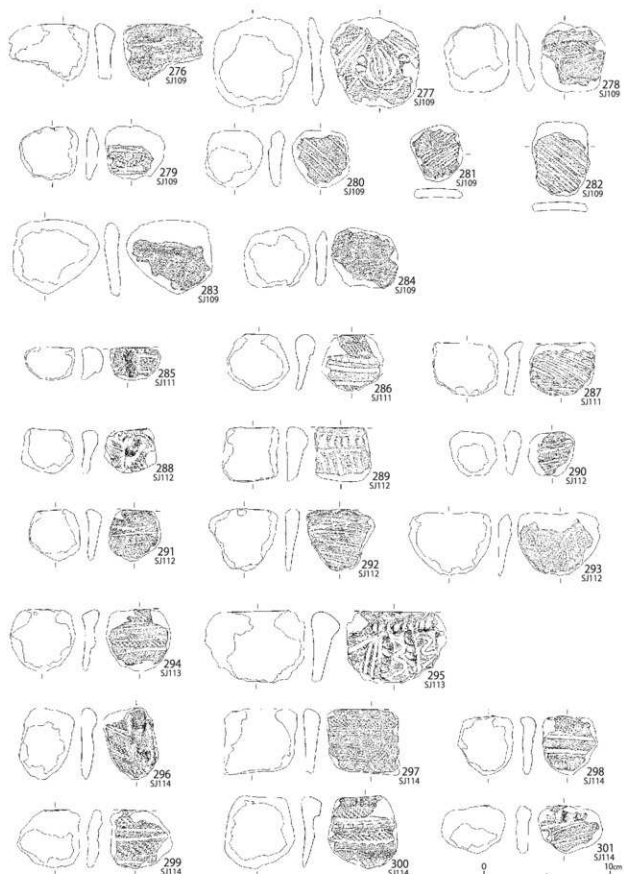
第544図 住居跡出土土製品 (11)



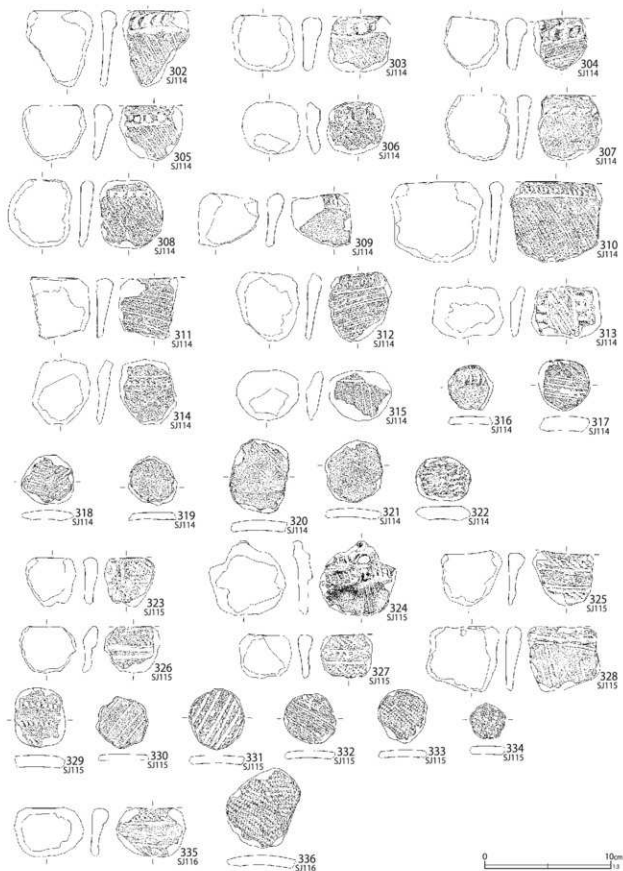
第545図 住居跡出土土製品 (12)



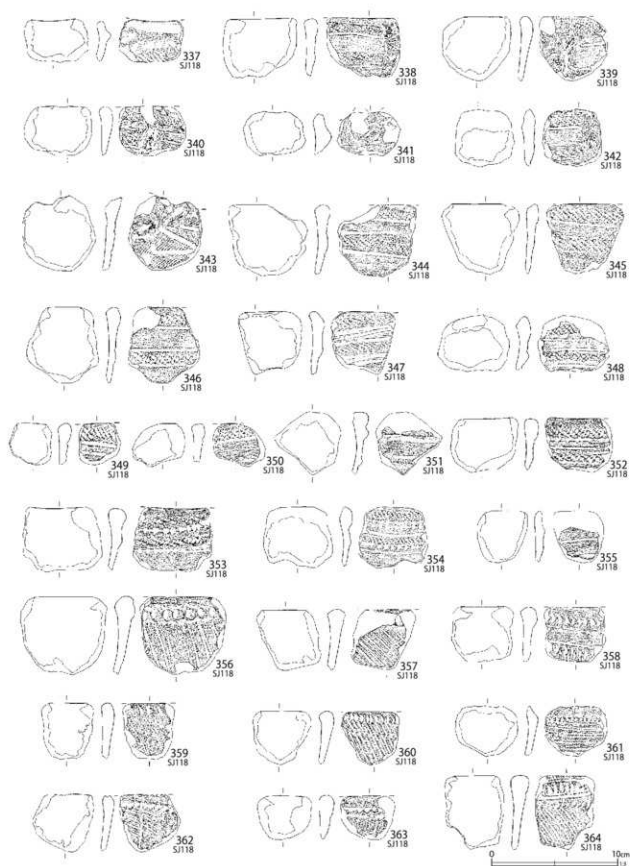
第546図 住居跡出土土製品 (13)



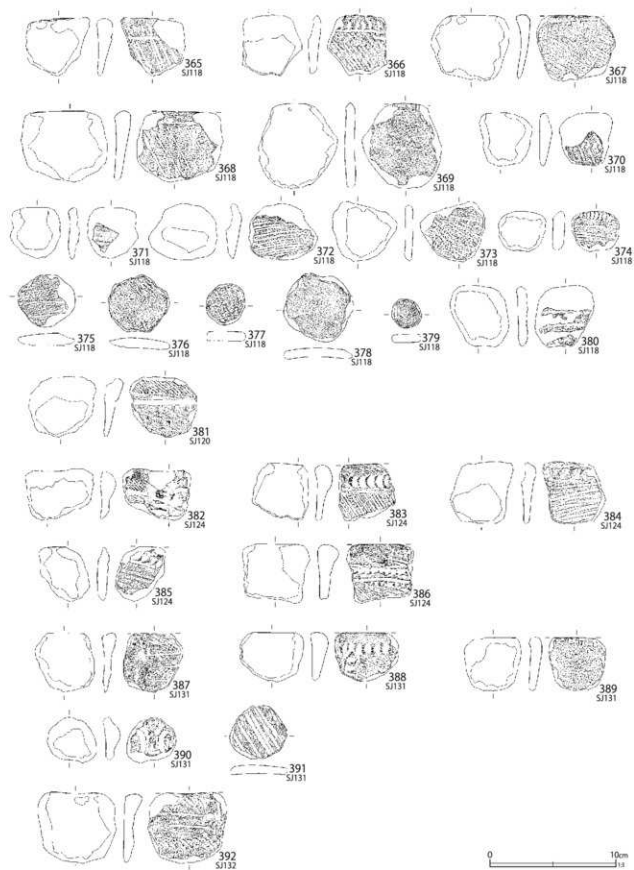
第547図 住居跡出土土製品 (14)



第548図 住居跡出土土製品 (15)



第549図 住居跡出土土製品 (16)



第550図 住居跡出土土製品 (17)

その他の土製品 (第551図～第554図)

393～395は第99号住居跡から出土した。

393はミニチュア土器である。手づくね品で、逆円錐形の深鉢型である。丸底で、口唇断面は丸味を帯びている。無文で、成形時の指頭痕を残している。現存高33cm、最大径30cm、重さ176gである。

394はミニチュアの台付き鉢で、脚台部を欠失する。安行3b式の台付き鉢を忠実に再現しており、胴部中段に入り組み三叉文を描いて、余白を弧線文で埋め、水平口縁上には2個一対の突起を配する。縄文は施文しない。現存高42cm、最大径86cm、重さ197gである。

395は手づくね土器で、口縁部を欠失する。上面観楕円形で丸底、非常に粗雑な造りで、内面に成形時の指頭押圧痕を残し、また亀裂を生じている。現存高33cm、長径70cm、短径59cm、重さ547gである。

396～402は第100号住居跡から出土した。

396～398はミニチュア土器である。

396は浅鉢で、口縁部の大半を欠失する。造りが粗雑で内面に成形時の指頭押圧痕を残す点は395の個体に共通する。丸底・水平口縁で、胴下半部に刻み隆帯を巡らせる。現存高33cm、最大径58cm、重さ338gである。397は浅鉢である。やや丸みを持った平底で水平口縁、口唇断面は角頭棒状である。やはり粗雑な造りだが、輪積みにより成形している。高さ23cm、最大径40cm、重さ168gである。398は壺である。球胴で、肩部にはたが状の微隆起帯を配して、これに沿って凹線を巡らせる。口縁は短く、外反気味に立ち上がる。造りは粗雑で無文、成形時の指頭痕を残している。現存高49cm、最大径51cm、重さ964gである。

399は扁平で貫通孔を持つことから垂飾とも考えられる。表面左側縁の鉤形のカーブに沿って刻み隆帯を巡らせ、下方の突起に鋭利な工具の刺突文を施文する。隆帯の特徴は同時期のみみずく土

偶の胸から腕にかけての表現と類似しており、簡略化した人体表現とも解し得る。長さ34cm、幅20cm、厚さ11cm、重さ43gである。

400は有孔の土製品である。両端が丸みを帯びて中段にくびれを持つピーナツ殻形で、両端に貫通孔を持ち、中段には粗雑な沈線文を描いている。垂飾と考えたが、紐擦れの痕跡はみられない。幅38cm、高さ17cm、厚さ14cm、重さ87gである。

401は環状の土製品である。断面鉤形で、一部の土製耳飾りに共通するが、上面から側面にかけては丸味を持っており、装着部の凹みが存在しない。上面の一箇所に粗雑な沈線文を描いている。最大径35cm、厚さ12cm、重さ47gである。

402は棒状の土製品である。両端がわずかに欠損するが、ほぼ完形に近いものとみられる。無文で、器面は平滑に仕上げられている。長さ26cm、幅0.9cm、厚さ0.6cm、重さ16gである。

403は第100・112号住居跡から出土した。ミニチュアの異形台付き土器で、脚台部を欠失する。安行式の精製土器の特徴を備えており、同時期のものと考えられる。盃形の体部で、口端上に刻み目文を巡らせ、口縁外面に刻みを持つ縦線を配し、刻み隆帯で弧状に連繋する。胴部には三日月形の透かし文様を配する。脚台との境には押し引き文を巡らせる。現存高50cm、最大径65cm、重さ624gである。

404・405は第103号住居跡から出土した。ミニチュア土器で、いずれも無文の壺である。

404は丸底で、胴部はほぼ垂直に立ち上がり、肩部が「く」の字に張って、口縁はわずかに外反しつつ集束する。器面に手づくねの指頭痕を残している。高さ60cm、最大径54cm、重さ960gである。

405は丸底でやや扁平な球胴、肩部に段を持って、口縁は内湾しつつ集束する。器面に成形時の指頭痕を残している。現存高43cm、最大径49cm、重さ564gである。

406～411は第104号住居跡から出土した。

406はミニチュアの台付き鉢で、底部と脚台部の接続部分である。無文で、2個1単位の貫通孔を4方に配するものとみられる。現存高26cm、最大径80cm、重さ320gである。

407は手づくね土器である。平底で底面に網代痕を持ち、中央に指頭の押圧による浅いくぼみを持つが、器壁はほとんど立ち上がらない。高さ14cm、最大径40cm、重さ188gである。

408は垂飾であろう。棒状の土製品の上端が鉤状に屈曲して貫通孔を持ち、下端が欠損している。鳥などの動物の顔を模したものとみ解される。現存部分の長さ74cm、幅30cm、厚さ16cm、重さ211gである。

409は土玉である。中央に貫通孔を持ち、緻密な粘土を用いて、表面は極めて平滑に仕上げられている。高さ14cm、最大径15cm、重さ23gである。

410は筒状の製品で、注口部の可能性がある。断面は楕円形で、短軸方向に反りを持ち、表面を赤彩している。新地式に伴うものか。長さ42cm、最大幅25cm、厚さ17cm、重さ104gである。

411は円盤状の土製品で、土器の突起の一部であろう。表は幅広の凹線にわらび手文を描き、裏面は中央の盲孔を中心に凹線を巡らせる。加曾利B2式であろうか。

412～420は第105号住居跡から出土した。

412・413は土版である。412はほぼ完形品で、胴張りの長方形の土版である。表裏とも正中線を持ち、中央円文を持つ菱形の区画文を重畳させるが、表面のみ最上段に盲孔と弧線文で抽象化した人面表現を配する。時期は共伴する土器から安行3a式と考えられる。長さ100cm、幅72cm、厚さ24cm、重さ2325gである。

413は小型の土版で、完形品である。不整な隅丸方形で、断面楕円形の粗雑な成形である。表裏に正中線を持ち、表面は上端に下向きの弧線文を配して顔面表現とし、左右に複数の弧線文を対峙させる。裏面は正中線の中段に円文を配し、やは

り左右に弧線文を対峙させている。412と共通してさらに抽象化したモチーフであり、やはり安行3a式のものと考えられる。長さ52cm、幅44cm、厚さ14cm、重さ427gである。

414は土鍾と考えた。本来楕円形であったとみられるが、長軸方向に中央から割裂している。長軸・短軸方向に、十文字に沈線を巡らせている。現存部分の長さ58cm、幅23cm、厚さ27cm、重さ424gである。

415～419はミニチュア土器/手づくね土器である。

415は深鉢で、口縁部から胴部中段まで残存する。口縁内湾する砲弾形の深鉢とみられ、水平口縁上に対をなす小突起を配して、刻み目文を巡らせる。胴部無文で、内面にくらべ外面の風化が著しく、実際に火にかけて用いた可能性がある。現存高42cm、最大径106cm、重さ143gである。

416は鉢である。底部を欠失する。半球状の胴部から、頸部から口縁部が直線的に開く。文様は持たない。サイズに比較して厚手の器壁で、脚台である可能性もある。現存高31cm、最大径70cm、重さ225gである。

417は深鉢で、胴下半部から底部が残存する。底面はやや上げ底気味で、底部は裾が張って胴部との境がくびれ、胴部は直線的に立ち上がる。非常に厚底であり、台付き土器を意図した可能性もある。現存高37cm、最大径42cm、重さ381gである。

418は浅鉢ないし皿である。平底で、胴部は緩やかに立ち上がり、折り返し口縁となって表裏に段を持つ。口端に豆粒状の小突起を配する。極めて粗雑な造りで、折り返し口縁も未圧着の輪積み痕とも解される。現存高23cm、最大径70cm、重さ145gである。

419は浅鉢である。丸底で胴部は緩やかに立ち上がり、口縁は指で摘んだひだ状の圧痕を残している。高さ28cm、最大径63cm、重さ494gである。

420は棒状の土製品で、両端欠損する。扁平で、表面に指頭痕、裏面に篋ナデを残している。成形は雑だが焼成は良好である。吊り手の一部の可能性もある。長さ48cm、幅17cm、厚さ10cm、重さ94gである。

421は第106号住居跡から出土した。浅鉢である。丸底で内湾口縁、文様を持たないが、内面に篋先を引きずった数条の痕跡が存在し、粗放な沈線文の可能性もある。成形は粗雑だが、焼成は良好である。現存高28cm、最大径63cm、重さ494gである。

422～426は第107号住居跡から出土した。

422は土版である。隅丸長方形であったとみられるが、大半を欠失している。中央に盲孔を持ち、四隅に弧線文を配して、I字文で連繋するものであろう。裏面は無文で、ごく粗い成形である。共伴する土器はほとんどが安行1式だが、本資料は成立期のI字文を持ち、安行3c式期のものと考えられる。現存部分の長さ20cm、幅34cm、厚さ05cm、重さ30gである。

423～426はミニチュア土器/手づくね土器である。

423は異形台付き土器であろう。口縁から胴部中段まで残存する。胴張りの内湾口縁で、縦瘤と楕円形の透かしを配する。弧状の擦り消しモチーフを巡らせて円形刺突文を配する。加曾利B3から曾谷式期のものであろう。

424は注口土器の頸部から口縁部であろう。円盤状の胴部に付属するものとみられ、中段が「く」の字にくびれて口縁は直線的に外反する。晩期安行式に伴う土器であろう。現存高36cm、最大径70cm、重さ156gである。

425・426は手づくねの浅鉢である。425は丸底で胴部は緩やかに内湾し、口端が「く」の字に内屈する。胴部には成形時の指頭痕を残している。現存高25cm、最大径47cm、重さ129gである。

426は平底で、胴部は緩やかに内湾して口縁直立する。現存高15cm、最大径33cm、重さ109gで

ある。

427・428は第109号住居跡から出土した。

427は土製の蓋である。無文で、円形の粘土板に橋梁状の把手を配している。容器に接する底面が入念に研磨してあるのに対し、上面や把手は粗雑な篋ナデを残している。共伴する土器は大半が後期安行式であるが、これに対応する器種が存在しないため、本資料は晩期のものと考えられる。現存高30cm、最大径82cm、重さ969gである。

428は環状の土製品の一部とみられる。本来は楕円形であったと思われる、断面は鉤状で、下面に凹部が巡る。作り損なった耳飾りをそのまま焼成したものとも解される。現存高15cm、現存部分の最大径34cm、重さ96gである。

429は第111号住居跡から出土した。ミニチュア土器で、浅鉢ないし台付き鉢である。半球状の鉢で、水平口縁上に鱗状突起を配し、胴部に弧線文を巡らせて非常に細かい縄文を施文する。安行3b式であろう。現存高32cm、最大径111cm、重さ132gである。

430は第112号住居跡から出土した。小型の異形台付き土器である。胴部中段が残存する。二段の刻み隆帯を巡らせて、上下二段の瘤と、朝顔形の開口部をそれぞれ一対ずつ対象に配置する。胴下半部は盃形で、縦位の集合沈線を施文する。現存高37cm、開口部を除く最大径82cm、重さ539gである。

431は第113号住居跡から出土した。土器の吊り手か土偶の結帯であろう。2個一対の柱状の突起を持ち、集合沈線を施文する。後期安行式に伴うものであろう。

432・433は第114号住居跡から出土した。

432は異形台付き土器で、胴部中段が残存する。3段の刻み隆帯を巡らせて朝顔状の開口部を持ち、多段の円孔を配する。現存高46cm、開口部を除く最大径推定86cm、重さ404gである。

433は土器片鉢である。後期の土器片を楕円形

に成形して、長辺側に一對のスリットを設けている。長さ23cm、幅19cm、厚さ0.9cm、重さ50gである。

434～436は第116号住居跡から出土した。

434は楕円形の浅鉢ないし蓋であろう。水平口縁で丸底、全体を入念に研磨している。長径推定10.4cm、短径9.1cm、高さ3.1cm、重さ62.3gである。

435はミニチュア土器として図化したのが、内面の造りが非常に粗悪であり、土偶片の可能性も考えられる。平行沈線+押し引き文の区画が2段に巡る。現存高3.7cm、土器と考えた場合の最大径5.2cm、重さ23.3gである。

436は土鍾である。手づくねの非常に粗悪な造りで、平面観は棗型、長軸方向のスリットが一巡する。長さ5.5cm、幅3.6cm、厚さ2.4cm、重さ52.0gである。

437・438は第118号住居跡から出土した。

437は土版である。長方形の土版の長軸一端が残存し、裏面が剥落している。菱形の区画文を重ねさせた中に渦文を描き、余白を三角文で埋める。また、上方の小口にも鋸歯文を描いている。共存する土器は大半が後期安行式であるが、本資料は晩期のものであろう。

438は環状の土製品の一部で、側縁に1箇所の突起を持ち、貝輪を模したものと考えられる。文様は施文せず、器面調整も粗雑である。直径推定

6.6cm、高さ2.0cm、重さは8.7gである。

439・440は第119号住居跡から出土した。

439は手づくね土器である。半球状の胴部に、やや内湾しつつ開く口縁を付したもののだが、非常に粗雑な成形である。器高4.5cm、最大径4.2cm、重さ46.3gである。

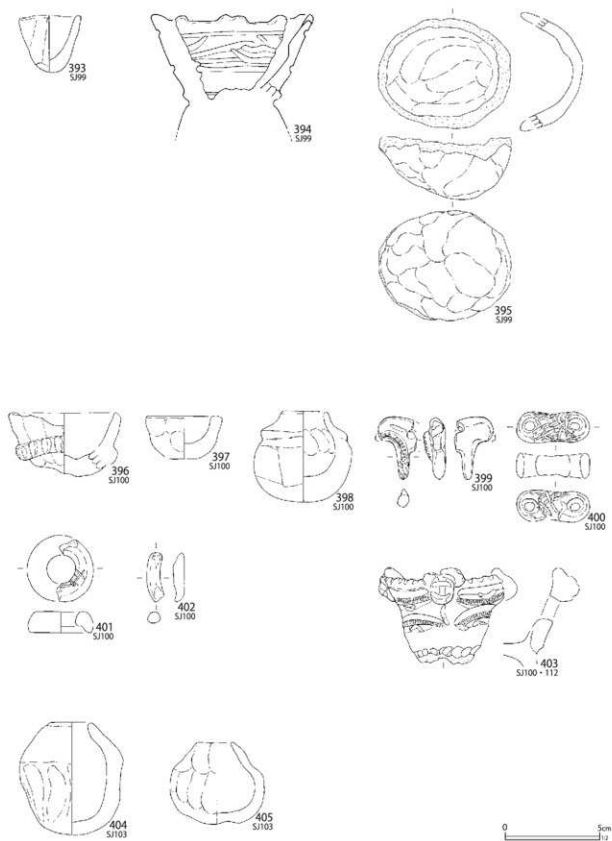
440はボタン状の土製品である。碁石状の円盤に一對の貫通孔を穿つ。表面の調整は粗雑である。垂飾ないし土鍾の一種か。現存高1.3cm、最大径2.6cm、重さ6.3gである。

441・442は第120号住居跡から出土した。

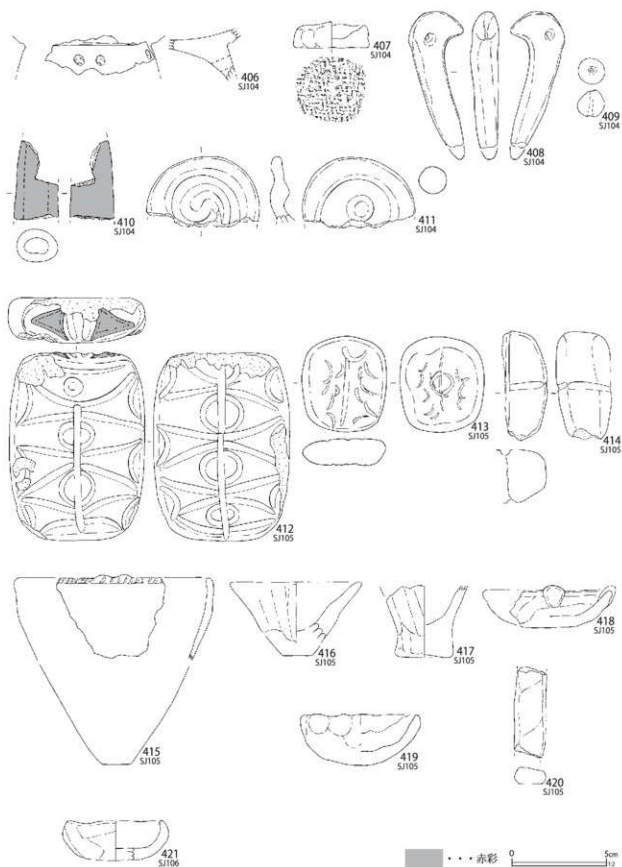
441はミニチュアの台付き鉢脚台部である。無文で、比較的背の低い半球状の脚台で、体部との境に一對の円孔を穿っている。現存高2.1cm、最大径5.0cm、重さ31.9gである。

442は土鍾であろう。長軸方向に半割している。長軸に沿って縦横にスリットを巡らせ、正中線に沿って2箇所の貫通孔を持つ。表面を入念に研磨している。長さ6.2cm、現存幅2.0cm、厚さ2.0cm、重さ22.4gである。

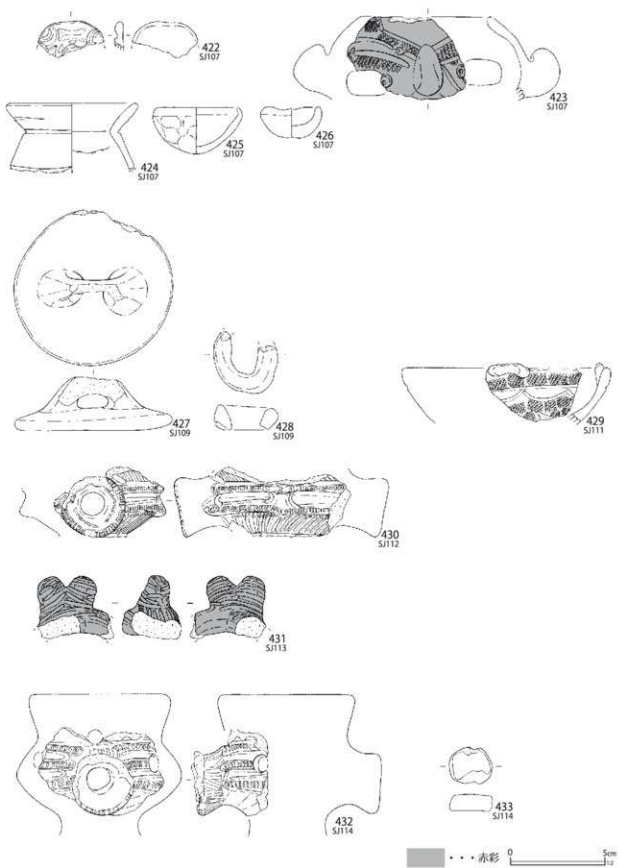
443は第128号住居跡から出土した土玉である。球体の中央に貫通孔を持つが、全体にややいびつで、表面の調整も粗雑である。現存高1.3cm、最大径1.5cm、重さ2.5gである。



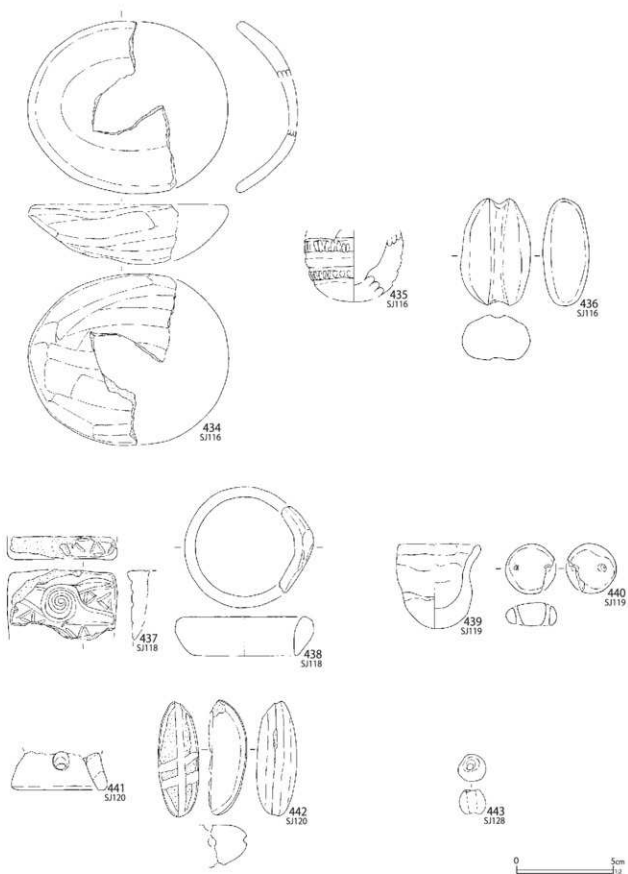
第551図 住居跡出土土製品 (18)



第552図 住居跡出土土製品 (19)



第553図 住居跡出土土製品 (20)



第554図 住居跡出土土製品 (21)

(2) 堅穴状遺構出土土製品

土偶 (第555図)

1～3は第9号堅穴状遺構から出土した。

1はみみずく土偶の頭部である。右耳と結髪の大半を欠失する。顔面はほぼ円形で、刻み隆帯で縁取っており、上額部のみY字に貫入する。ここに鼻が位置しているが、欠損し、鼻孔の有無は不明である。

眼は中央押圧を持つ円形の貼り付け文で、顔面中段よりやや上に位置している。口は顔面の下端に、上向きの弧を描く刻み隆帯として表現している。耳は顔面の真横に接して、円文と刻み隆帯を持つ突起として表現している。結髪は前方に3基、後方に1基の鱗状突起であったとみられるが、前方の1基を除いてすべて欠失しており、故意に取り除かれた可能性もある。

後頭部は紡錘文をはさんで左右対称にY字の沈線文を配し、縄文を施文する。安行3b式期のものであろう。現存部分の高さ68cm、幅66cm、厚さ42cm、重さ1290gである。

2は小型のみみずく土偶の頭部である。顎と両耳を欠失する。顔面はハート形の隆帯で、眼は中段より上に中央押圧を持つ円形の貼り付け文で表現し、周囲に刺突列を巡らせる。鼻は表現しない。耳は顔面中段よりやや下方の矮小な突起であったとみられる。

前頭部に3個の小突起を持ち、中央のものから上額部に向かって隆帯が垂下する。結髪はハート形の粘土板で後頭部に位置し、中央が凹んでいる。また、下端中央に1個の小突起を配する。胎土はきわめて砂質だが、焼成は良好である。

安行3aから3b式期のものである。現存部分の高さ40cm、幅46cm、厚さ26cm、重さ334gである。

3はみみずく土偶の右脚である。腰が大きく横に張り出し、脚は末端に行くにつれ幅を減じる。爪先の表現を持たず、足裏は平坦である。また、側面観は前方に向かって緩やかな反りを持っている。内股に沿って刻み隆帯を巡らせており、断面は三角形である。表裏とも横位の平行沈線を多段に施文し、表面のみ縄文を施文する。安行3aから3b式期のものであろう。現存部分の高さ84cm、幅44cm、厚さ32cm、重さ788gである。

耳飾り (第555図)

耳飾りの分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。また、法量は第29表に記した。

4・5は第8号堅穴状遺構から出土した。4は環状無文で断面「く」の字状のタイプである。上端が下端に比べ大きく張り出す。装着部はV字状に深く切れ込んでいる。上方の人目に触れる部分のみ黒色に研磨している。

5は台形で上面透かしを持つタイプである。4方に鰹状の小突起を配し、内面に巴状の透かし文様を配して細かな刺突文を施文する。

6～10は第9号堅穴状遺構から出土した。

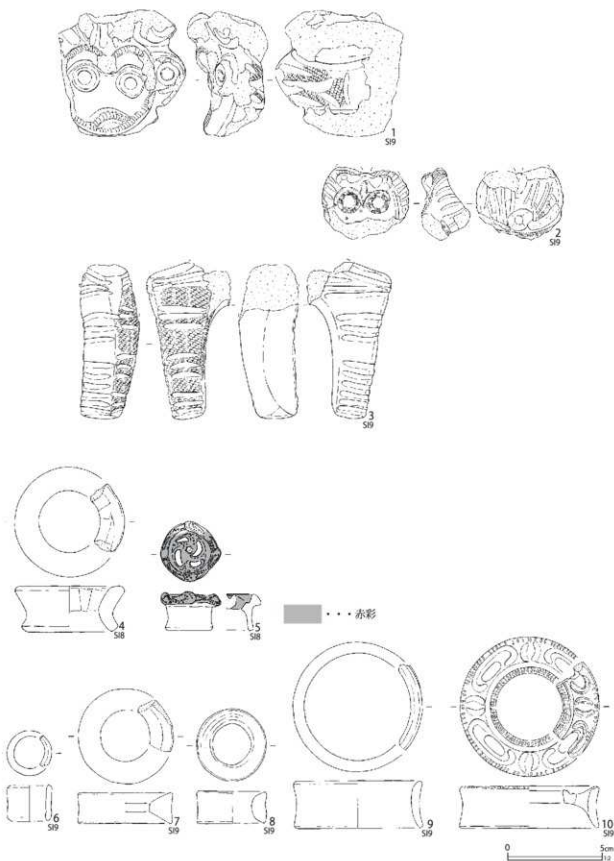
6は環状無文で断面棒状のタイプである。装着部はほとんど凹まない。

7は環状無文で断面三角形のタイプである。内面を平坦に面取りしている。

8は完形品で、環状無文で断面弧状のタイプであり、比較的厚手の器壁である。

9も環状無文で断面弧状のタイプである。全体を入念に研磨している。

10は台形で上面に透かし文様を持つ。中央に円孔を持ち、外縁と内縁に刻み目文を巡らせる。円孔の周囲にも楕円形の透かしを配して、弧線文を描いている。



第555図 竪穴状遺構出土土製品（1）

土製円盤（第556図～第558図）

打製品・磨製品がそれぞれ多数出土した。時期判別可能なものは後期安行式の破片が多いようだ。法量は第33・34表に示した。また、土製円盤の分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。

その他の土製品（第559図）

すべて第9号堅穴状遺構から出土した。共存する土器は概ね後期安行式期のものであり、これらの土製品も同時期のものであろう。

108は手燭形土器の把手である。末端に刻みを伴う鱗状突起を配し、表面には集合沈線による入り組み文を描いて一対の貫通孔を穿つ。裏面は無文である。長さ56cm、幅63cm、厚さ15cm、重さ537gである。

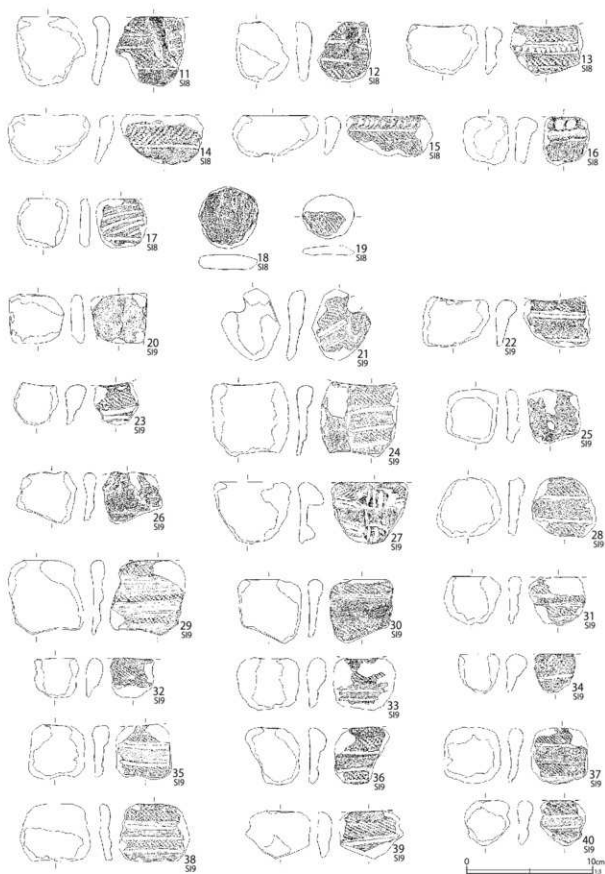
109は高台付きの碗で、高台部と体部の境に段を持って、沈線を巡らせ、胴部は無文で入念な研磨を施す。焼成は良好である。現存高28cm、最大径52cm、重さ362gである。

110は土製管玉である。プロポジションはいびつで、中心からかなりずれた位置に貫通孔を穿つ。長さ25cm、最大幅12cm、重さ37gである。

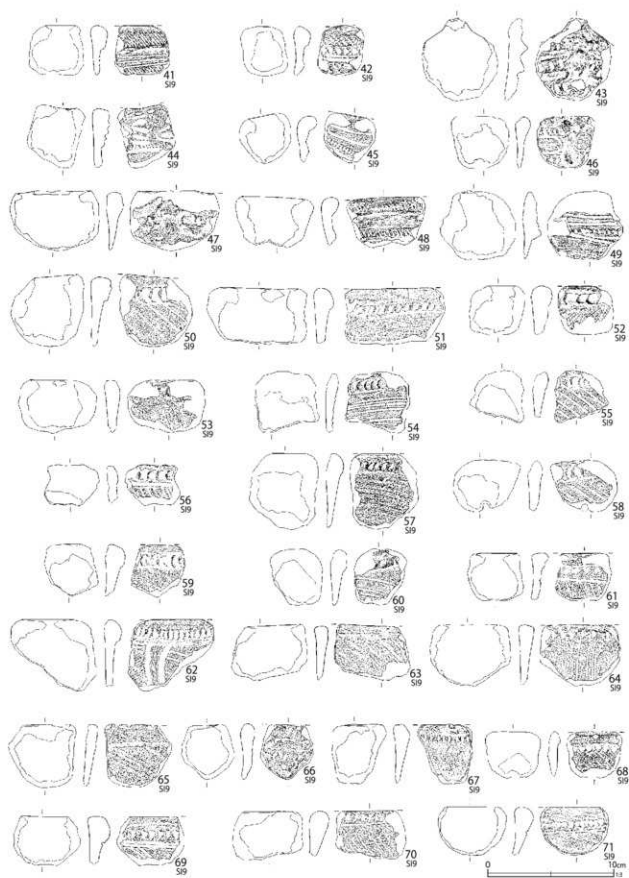
111は粗大な土錘である。扁平な棗形で、長軸方向にごく浅い凹線が一巡している。成形は手づくねで、指頭痕を残している。長さ61cm、幅40cm、厚さ26cm、重さ126gである。

112は焼成粘土塊である。不整形の手づくね品だがいくつかの部分に圧着した痕跡がみとめられ、土偶などの「失敗作」を握り潰すなどしてそのまま焼成している可能性がある。長さ67cm、幅57cm、厚さ32cm、重さ793gである。

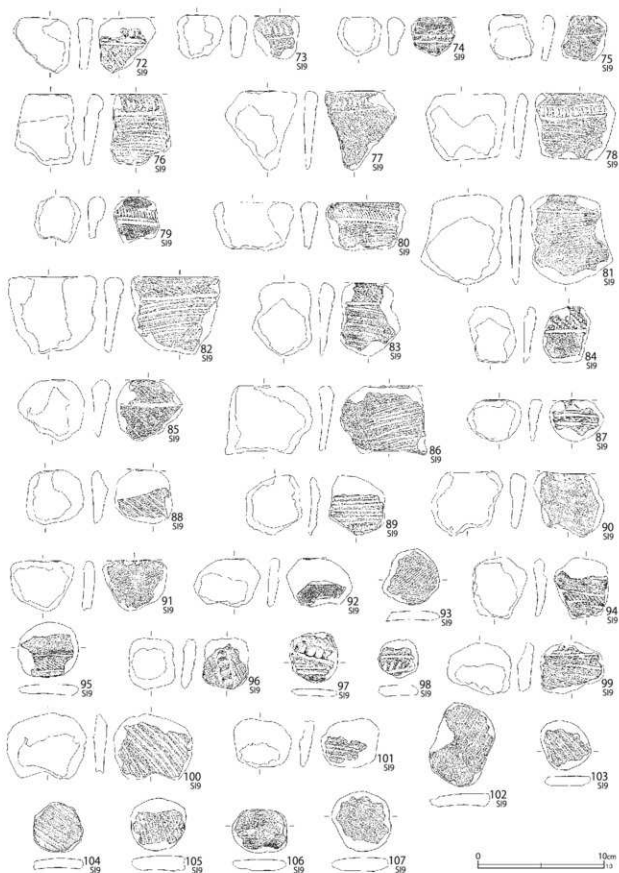
113は棒状の土製品である。片側欠損し、現存する一端には斜め方向の溝状の穿孔が行われており、木の枝や骨等の平滑な棒状の部品が取り付けられていたか、あるいはその一部として機能していた可能性が考えられる。長さ46cm、幅18cm、重さ126gである。



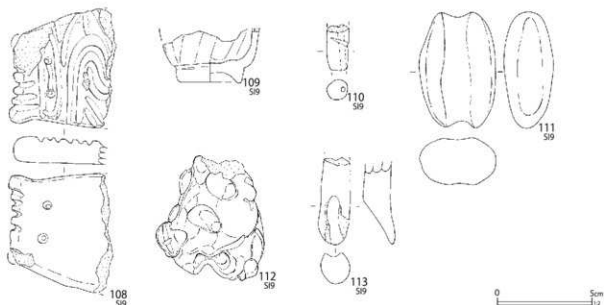
第556図 竪穴状遺構出土土製品 (2)



第557図 竪穴状遺構出土土製品 (3)



第558図 竪穴状遺構出土土製品 (4)



第559図 竪穴状遺構出土土製品（5）

（3）土竪出土土製品

土偶（第560図）

1は第264号土竪から出土した。小型のみみずく土偶の左腕であろう。いかり肩に短い隆帯を貼り付けた肩パッド風の表現を持つ。手首が若干くびれて手先が内側に突出するが、指は表現していない。晩期前葉の土偶であろう。現存部分の高さ36cm、幅34cm、厚さ16cm、重さ130gである。

2は第550号土竪から出土した。系統不明の土偶右脚である。緩やかな外反りのカーブを描き、足首がくびれて、かかと以外の3方向が軽微に張り出している。足裏は平坦である。

また、側面視は前方に踏み出すように傾斜しており、歩行を示すか、あるいは尻を突き出すようなポーズをとっていた可能性がある。文様を持たないが、共伴した土器から晩期前葉のものである可能性が高い。現存部分の高さ50cm、幅30cm、厚さ26cm、重さ334gである。

3は第675号土竪から出土した。系統不明の土偶左脚である。太短く、内向きのカーブを描く。大腿部に平行沈線を巡らせる。足先は爪先側と内側に張り出し、足裏は平坦で、爪先をやや持ち上げた状態である。共伴した土器から、晩期前葉の

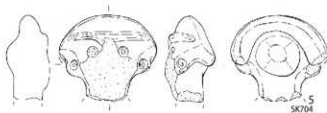
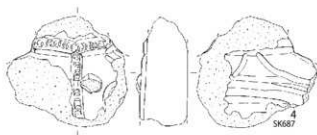
ものである可能性が高い。現存部分の高さ50cm、幅32cm、厚さ32cm、重さ430gである。

4は第687号土竪から出土した。山形土偶で、首から胸にかけての部分である。首の前面にV字の刻み隆帯を配し、ここから正中線に沿って縦位の刻み隆帯を垂下させる。円形の小突起で乳房を表現する。背面には横位の平行沈線文を描き、対弧状のモチーフを配する。

安行1式期の土偶である。現存部分の高さ60cm、幅64cm、厚さ26cm、重さ929gである。

5は第704号土竪から出土した。頭部で、顔面の下半分が剥落している。山形土偶の系統をひくもので、比較的写実的な造形を持っている。顔は逆三角形で、T字状の隆帯で眉と鼻を表現していたものとみられるが、鼻から顎にかけての部分を欠失する。円形竹管状工具の刺突で眼を表現する。耳は顔の両側に半円形の小突起として付しており、眼と同一工具の刺突を施す。後頭部は丸く張り出し、逆U字状の突起で頭髪を表現する。

加曾利Bから曾谷式期の土偶であろう。現存部分の高さ44cm、幅50cm、厚さ26cm、重さ402gである。



第560図 土壙出土土製品（1）

耳飾り (第561図～第563図)

耳飾りの分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。また、法量は第29・30表に記した。

6は第227号土壙から出土した。栓形無文で貫通孔を持たないタイプである。非常に薄手の器壁で上面と下面のサイズが等しく、両側に凹みを持つ。

7は第241号土壙から出土した。千網型の耳飾りである。非常に薄手の器壁で明灰褐色、赤色顔料が付着している。共存している土器は安行3c式である。

8は第248号土壙から出土した。環状無文で断面「く」の字のタイプである。上面が下面にくら

べ大きく張り出し、装着部はV字に深く切れ込む。9は第249号土壙から出土した。環状無文で断面「く」の字のタイプとしたが、貫通孔を持つ白形とも解される。上面が下面にくらべ大きく張り出し、装着部は深く切れ込む。上面を丁寧に研磨しているのに対し、下面および側面の調整は粗雑で、器形も全体に大きくひしゃげている。

10は第526号土壙から出土した。環状有文で断面棒状のタイプで、内面上方に長方形の区画文を描き、上端に単沈線列を巡らせている。

11は第527号土壙から出土した。環状無文で断面弧状のタイプである。

12・13は第531号土壙から出土した。12は環状有文で断面三角形のタイプである。内面にわらび手状の立体装飾を配し、刻目目文を巡らせる。全体に白色の付着物を残しており、焼成の際に化粧土を掛けていたものとみられる。13は環状無文で断面弧状のタイプである。

14は第539号土壙から出土した。環状無文で断面三角形のタイプで、微量の白色付着物がみられる。

15は第545号土壙から出土した。環状有文で断面「く」の字のタイプである。上面が下面にくらべ大きく張り出している。上面には平行沈線+列

点文による弧状のモチーフを巡らせる。外面に赤色顔料と白色の付着物を残している。

16は第549号土壙から出土した。環状有文で断面弧状のタイプである。上端に4単位の豚鼻突起を配し、沈線で連繫する。全体に研磨を徹底する。

17は第556号土壙から出土した。白形で装着部が凹むタイプである。白色の付着物を残している。

18は第558号土壙から出土した。白形有文で装着部が凹むタイプである。上下面とも鍋底状に凹むが、下面は広く剥落している。上面は渦巻き文に沿って円形竹管状工具の刺突を巡らせ、末端に三叉文を配する。

19は第561号土壙から出土した。白形有文で装着部が凹まないタイプである。上面中央の小突起を挟んで、対称に4個の円錐形の突起を配する。赤色顔料が付着する。

20～22は第579号土壙から出土した。20は白形有文で装着部が凹むタイプである。上面中央の円錐形の突起を中心に、対称に8個の突起を配するが、うち5個は欠失している。突起部分だけが失われており、故意に打ち欠いた可能性がある。白色の付着物がみられる。

21は環状無文で断面三角形のタイプで、内面に白色の付着物を残す。22は白形無文で装着部が凹むタイプである。

23は第580号土壙から出土した。白形無文で装着部がわずかに凹む。

24・25は第582号土壙から出土した。24は台形有文で透かしを持つタイプで、刺突を中心に渦巻き文を描く。

25は白形無文で装着部が凹むタイプである。上下面とも中央に凹孔を持って、周縁が土手状に盛り上がるが、表面は周縁部を複数回の打撃で取り除き、下面も周縁部の三分の一を打ち欠いている。

26は第584号土壙から出土した。環状有文で断面棒状のタイプである。内面中段に沈線を、上端に単沈線列を巡らせている。単沈線内部に赤色顔

料が残存している。

27は第590号土壙から出土した。台形有文で透かしを持つタイプである。上面の四方に小渦巻状の突起を、内面に波頭状の装飾を配して非常に細かな刺突文を施文する。

28は第603号土壙から出土した。環状無文で断面鉤状のタイプである。灰白色の緻密な胎土である。

29は第606号土壙から出土した。環状有文で断面三角形のタイプである。鋭利な工具の平行沈線文を4単位配する。灰白色の緻密な胎土である。

30は第607号土壙から出土した。環状無文で断面三角形のタイプである。

31は第629号土壙から出土した。環状無文で断面弧状のタイプである。上端・下端を平坦に整形し、全体を入念に研磨している。

32・33は第632号土壙から出土した。いずれも台形で透かしを持つタイプである。

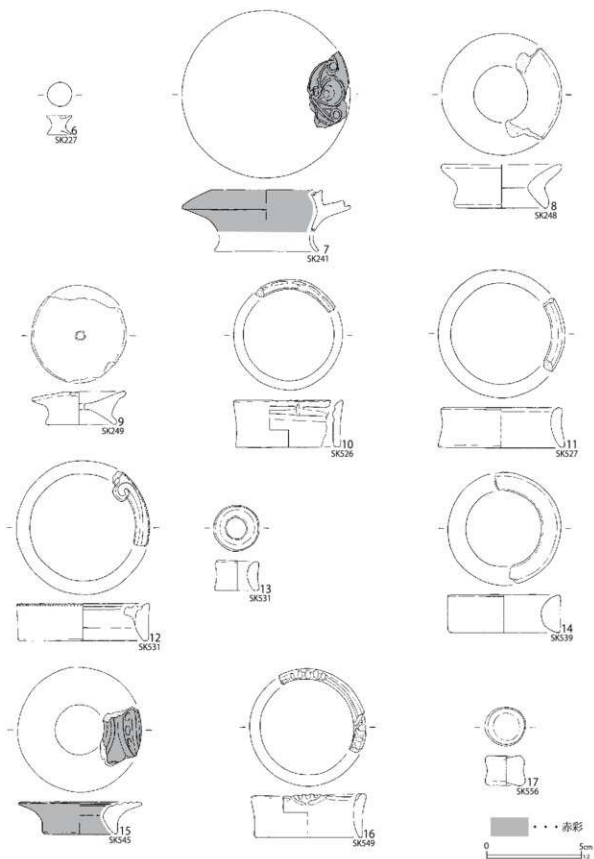
四方に環状の突起を配し、内面に橋梁状の立体装飾を持って、細かな刺突文を施文する。大きさ・文様・胎土が似通っており、一対で装用した可能性が高い。

34は第651号土壙から出土した。環状有文で断面三角形のタイプである。豚鼻状突起を沈線で連繋する。

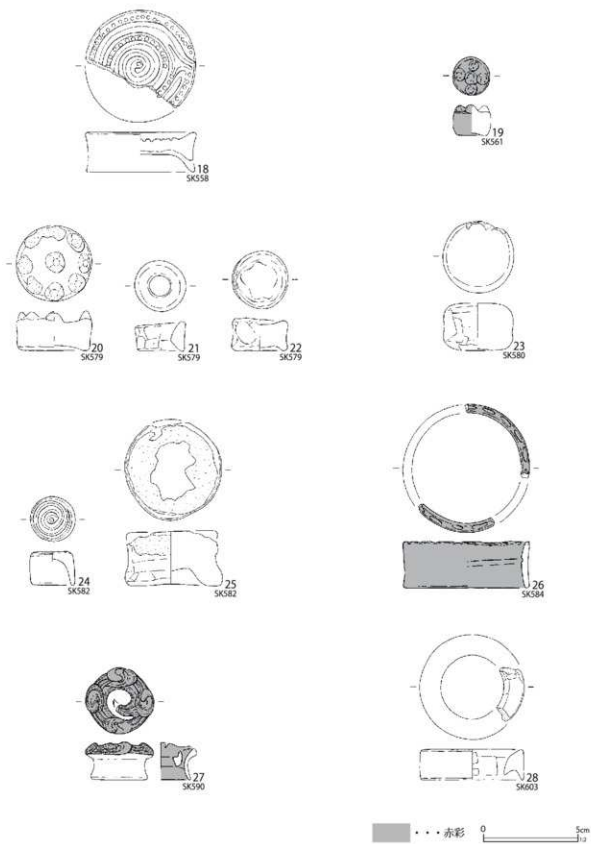
35・36は第687号土壙から出土した。35は環状有文で断面三角形のタイプである。上面に2本一組の刻み隆帯を配するが、1本は剥落している。36は環状無文で断面三角形のタイプである。

37は第754号土壙から出土した。環状無文で断面弧状のタイプである。

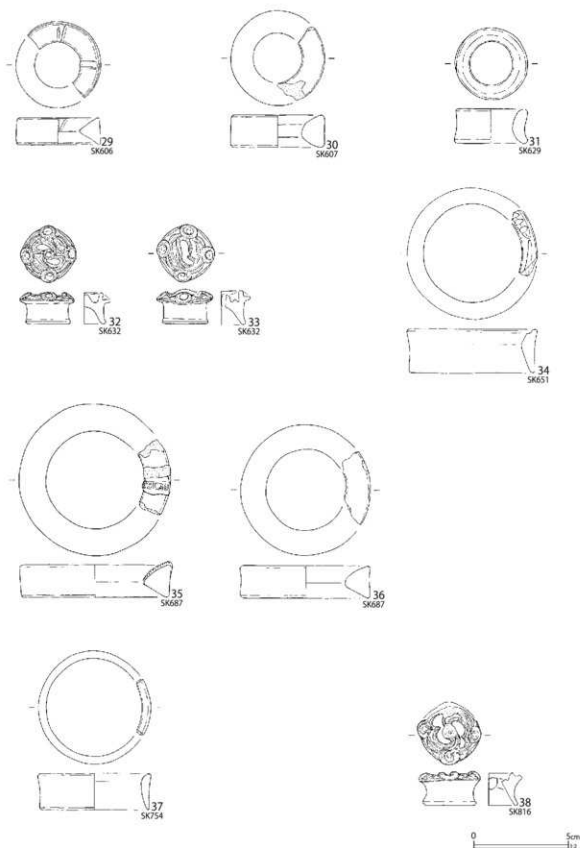
38は第816号土壙から出土した。台形で透かし文様を持つタイプである。四方に小渦状の突起を配して三角陰刻文を巡らせ、内面に波頭状の立体装飾を配して刻み目文を施文する。



第561図 土壙出土土製品（2）



第562図 土壇出土土製品 (3)

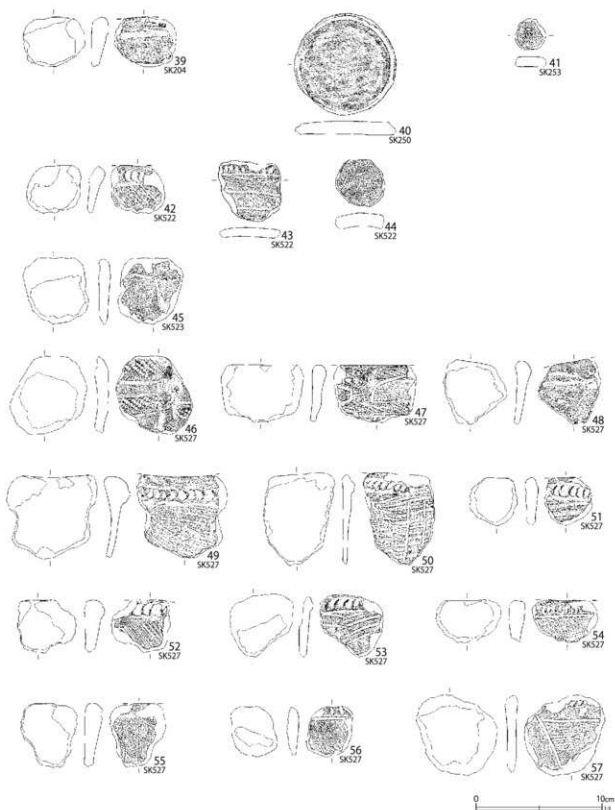


第563図 土壙出土土製品（4）

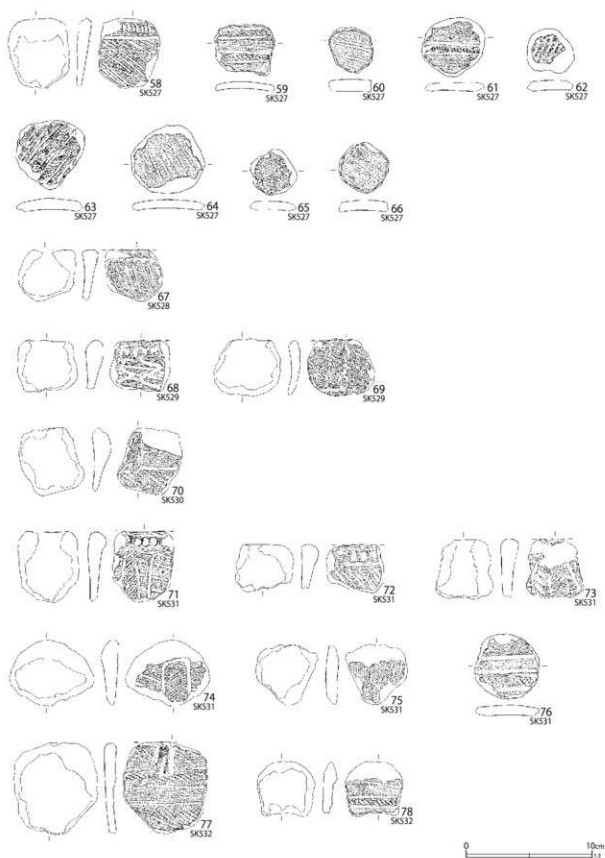
土製円盤（第564～第571図）

磨製品・打製品がそれぞれ出土している。法量

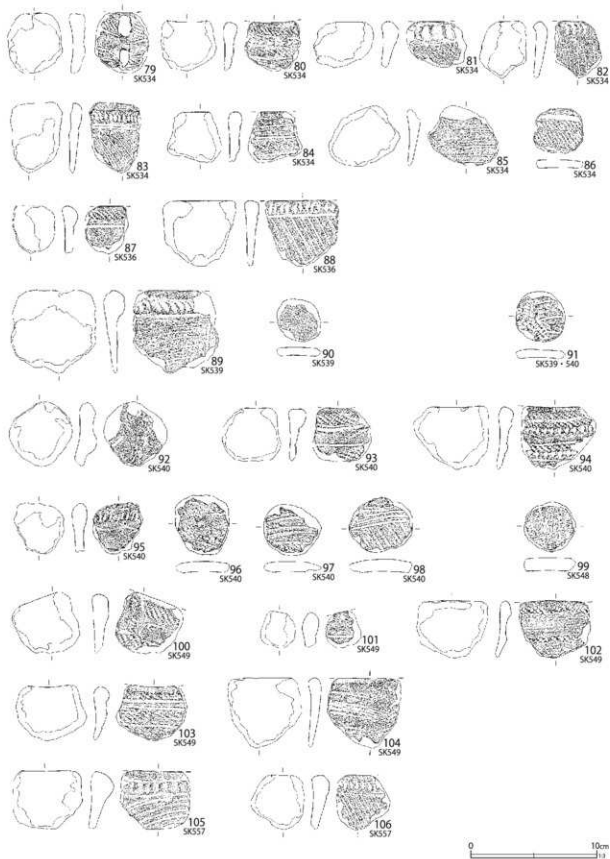
は第34・35表に示した。また、土製円盤の分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。



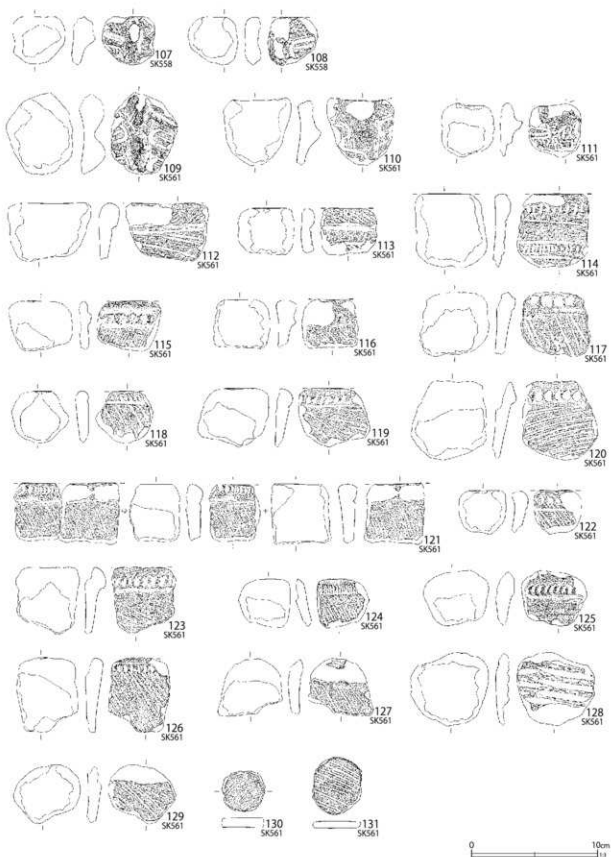
第564図 土壇出土土製品（5）



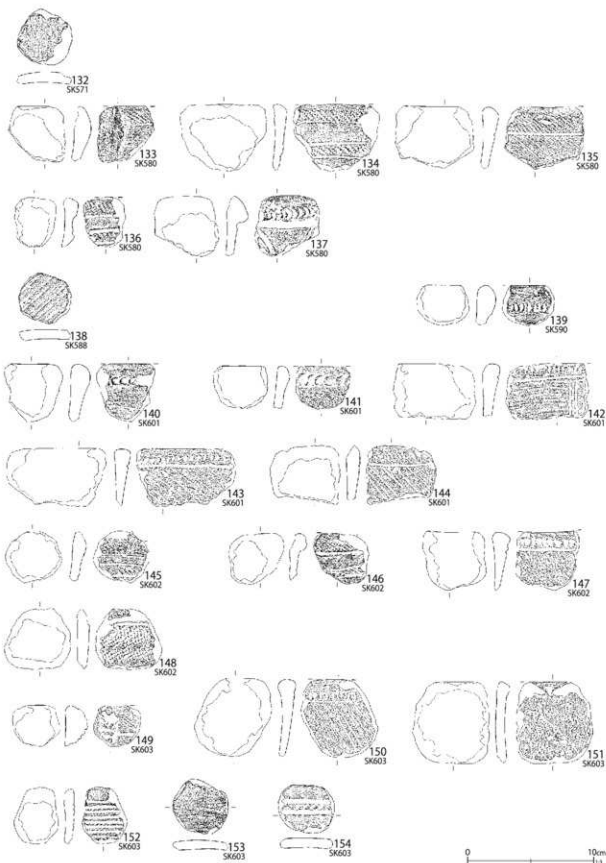
第565図 土壙出土土製品 (6)



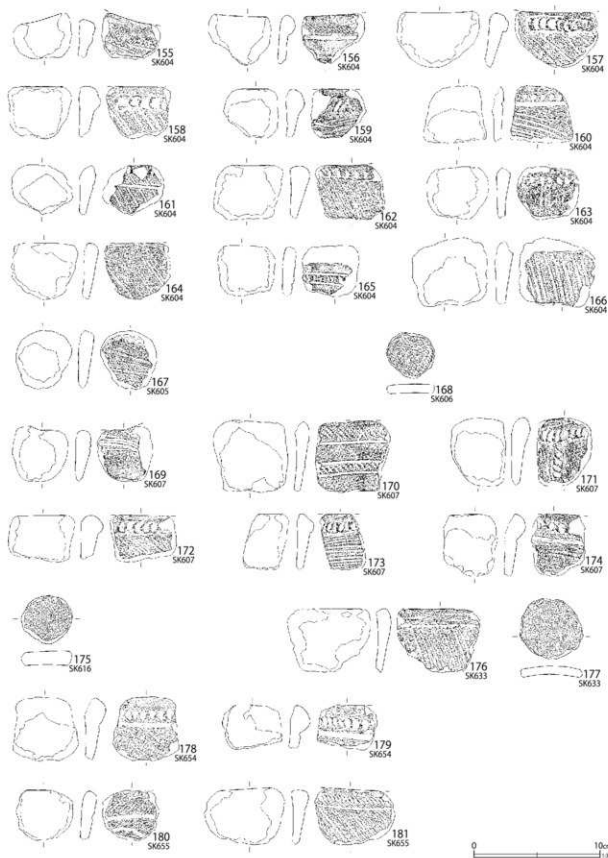
第566図 土壇出土土製品(7)



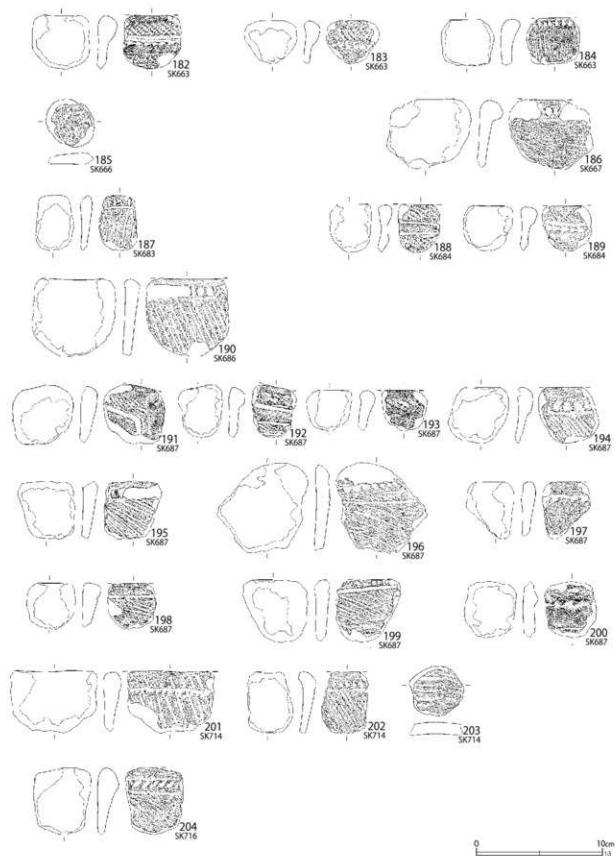
第567図 土壇出土土製品 (8)



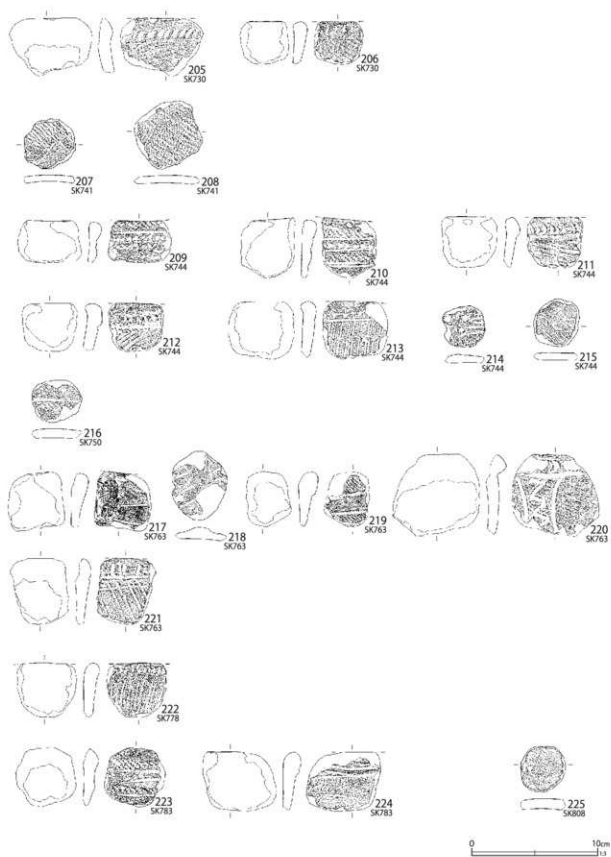
第568図 土壇出土土製品（9）



第569図 土壙出土土製品 (10)



第570図 土壇出土土製品 (11)



第571図 土壙出土土製品 (12)

その他の土製品 (第572図～第574図)

226は第196号土壺から出土した。土製管玉である。棒状の土製品の中央を穿孔しており、焼成前に全体が軽く曲げられている。長さ38cm、最大幅10cm、重さ55gである。

227は第207号土壺から出土した。土版である。長軸側の一端が残存し、右側縁部を欠損している。平面観長方形で側縁が緩やかな内向きのカーブを描き、横断面は紡錘形である。表面は入り組み文を描き、背面は平行沈線で三角形の区画文を描いて、鋭利な工具による三角形の刺突文を充填している。天神原式に共通の文様であり、共存する土器も概ね安行3bから3c式に属するものである。長さ42cm、幅58cm、厚さ21cm、重さ574gである。

228はミニチュア土器で、壺の肩部であろう。多段の平行沈線を巡らせて縄文を施文し、刻みを持つ貼り瘤を配する。共存する土器は加曾利Bから曾谷式であり、本資料も同時期のものであろう。

229～231は第527号土壺から出土した。共存する土器は後期安行式が中心となる。

229はミニチュア土器である。円筒状の鉢で、口縁直下に鐮状の突起を巡らせ、放射状の沈線文を描く。口端は内傾してごく短く立ち上がる。胴部には粗雑な沈線文を描いている。現存高42cm、最大径48cm、重さ417gである。安行2式であろう。

230はミニチュアの異形台付き土器である。胴部中段から底部付近まで残存する。胴部中段は刻みを持った縦瘤を配して刻み隆帯で連繋し、円孔を穿つ。胴下半部は縦位の集合沈線文を描く。現存高42cm、最大径100cm、重さ590gである。安行2式期のものであろう。

231は焼成粘土塊である。長軸一端を欠損する。平滑な楕円形で無文、側縁部の一箇所に窠先の刻みが集中している。土偶等の一部の可能性もある。長さ35cm、幅24cm、厚さ26cm、重さ191gである。

232は第531号土壺から出土した。ミニチュアの注口土器である。上面観楕円形で、注口部側が短軸となる横長の器形であり、皮袋等を意識したものであろうか。丸底で、肩部は強く内傾して、口縁部は「ハ」の字に短く立ち上がる。注口部は下面に一对の刻みを持つ縦瘤を配し、左右に三角文を配して縄文を施文する。背面には菱形の区画文を描いて入り組み文を配する。安行3a式期のものか。長さ70cm、短径53cm、高さ52cm、重さ948gである。

233は第534号土壺から出土した。垂飾であろうか。隅丸長方形で長軸両端に貫通孔を持ち、表面中央に巴文を描いて周囲に小入り組み文を配する。裏面は無文で丸みを帯びている。実測図上方の貫通孔に紐ずれがあることから、こちらを上と判断した。部分的に赤色顔料が残存する。長さ42cm、幅28cm、厚さ07cm、重さ105gである。安行3d式土器を共存しており、文様のにも類似することから、同時期のものと考えた。

234は第537号土壺から出土した。土器片鉢である。楕円形に研磨整形した土器片の短辺側に一对のスリットを持ち、表裏面も研磨している。時期は不明である。

235は第539号土壺から出土したミニチュア土器である。胴下半部から底部にかけて残存する。胴部は無文で丸味を持ち、底面に指先で摘み出したような高台を持つ。安行3a式土器と共存している。

236は第540号土壺から出土した。吊り手の一部であろう。断面円形の棒状の吊り手で、カーブはそれほど強くない。中段に刻みを持つ縦瘤を配するほかは無文である。共存している土器は後期安行式であり、同時期かやや先行する時期のものであろう。

237は第556号土壺から出土した。口縁内湾する紡錘形の鉢で、底面は不安定な平底である。口縁直下に刻み隆帯を巡らせ、末端をわらび手状に巻

いている。後期安行から晩期前葉まで幅広い時期の土器と共存するが、隆帯の特徴から曾谷・高井東式期のものと考えた。現存高5.1cm、最大径5.6cm、重さ91.2gである。

238は第561号土壌から出土した。手燭形土器の把手である。持ち手基部にスリットを持つ紡錘形で、集合沈線文を描いて周縁部に刻みを巡らせ、末端に円孔、中段に一对の楕円形の透かし文様を配する。安行2から3a式期のものであろうか。長さ6.7cm、幅4.9cm、厚さ1.4cm、重さ37.5gである。

239は第564号土壌から出土した。土版の一部であろう。楕円ないし胴張りの隅丸方形であったとみられ、表面は同心円文、裏面は三角形区画文の内部に入り組み文を描くものであろう。表裏とも鋭利な工具の刺突文を施文している。前浦式類似の浅鉢が共存しており、本資料も同時期かやや遅る時期のものと考えた。

240は第579号土壌から出土した。中空の土製品である。円形の透かし文様を複数持っており、香炉形土器に類似する。赤色顔料を残している。現存高2.2cm、最大径5.1cm、重さ11.8gである。

241は第580号土壌から出土した。半球型の浅鉢ないし蓋であろう。水平口縁に刻みを持つ小突起を配し、胴部無文で内外面とも入念に研磨している。現存高2.7cm、最大径9.1cm、重さ57.9gである。安行3c式土器を伴っている。

242は第607号土壌から出土した。手燭形土器の把手である。比較的大型の個体で、末端がH字状に張って一对の貫通孔を穿つ。表面は紡錘文、裏面には集合沈線文を描いて縄文を施文し、周縁部に刻み目文を巡らせる。長さ9.5cm、幅7.2cm、厚さ2.5cm、重さ123.6gである。安行2式を中心にその前後の土器が共存しており、同時期のものと考えた。

243は第616号土壌から出土した。土版である。胴張りの長方形の土版とみられ、表面に独立したI字文と列点文、裏面には大柄の三叉文を描いて

いる。安行3c式土器を伴っており、同時期の遺物と考えた。長さ8.3cm、幅6.2cm、厚さ2.7cm、重さ151.5gである。

244は第633号土壌から出土した。土錘である。断面円形の槲形で、長軸・短軸方向それぞれに十文字にスリットを設けている。黒色の堅緻な器壁で、表面を丁寧に研磨している。長さ3.9cm、幅2.4cm、厚さ2.4cm、重さ20.2gである。時期は不明である。

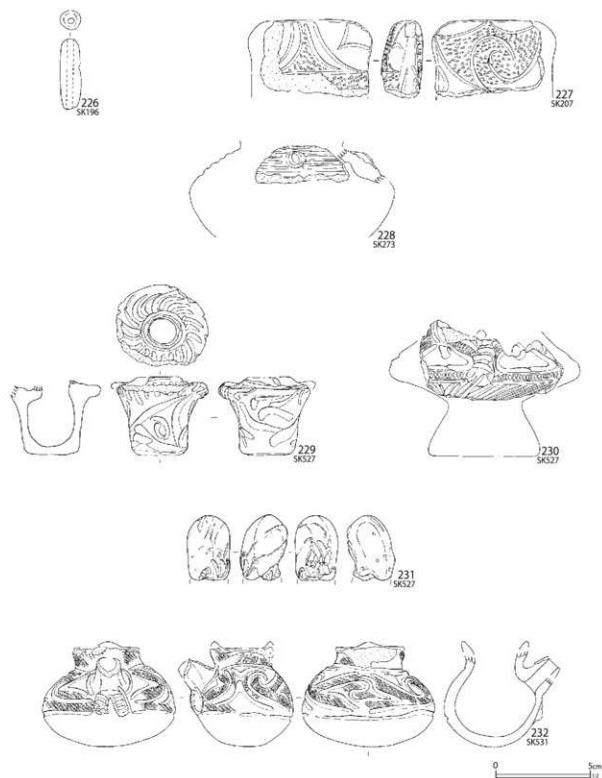
245は第634号土壌から出土した。土錘である。扁平な槲形で、長軸・短軸方向それぞれに十文字にスリットを設けている。長さ4.6cm、幅2.7cm、厚さ1.8cm、重さ24.4gである。時期は不明である。

246は第636号土壌から出土した。土器片錘である。楕円形に研磨整形した土器片の短辺側に一对のスリットを設け、表裏面も研磨している。長さ2.6cm、幅2.0cm、厚さ1.3cm、重さ7.4gである。時期は不明である。

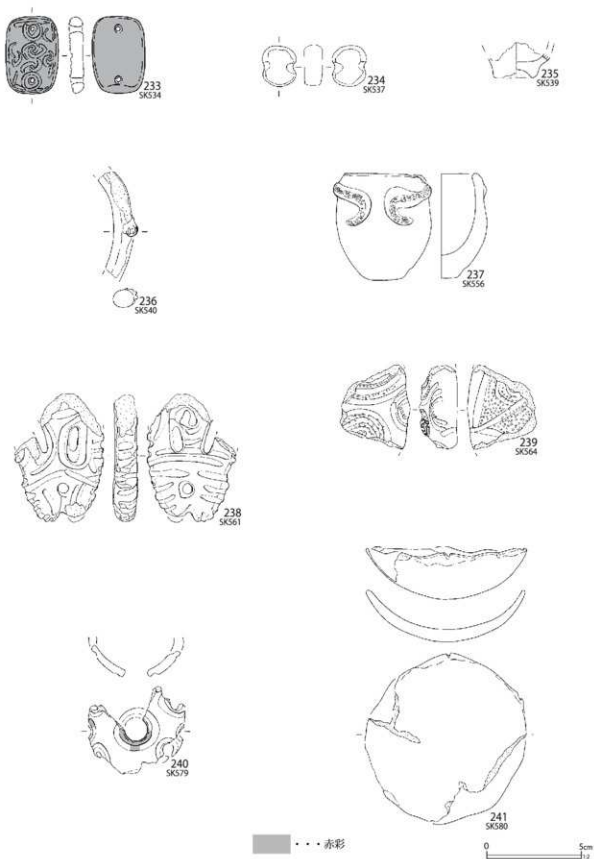
247は第666号土壌から出土した。人体表現を持つ土版である。扁平かつ小判形で、断面隅丸長方形、上端のみやや水平となっており、前後に一对の小突起を配して頭部の表現としている。また、この左右にも小突起を配して矮小な腕を表すが、いずれも折損している。表面上半身には乳房を持ち、H字状の沈線文を描く。下半身には「井」字状の沈線文を描く。脚は表現しない。背面は無文である。長さ7.3cm、幅4.4cm、厚さ2.4cm、重さ75.6gである。後期安行式を中心とする土器片を伴っている。

248は第742号土壌から出土した。ミニチュアの異形土器である。全体に反りを持った筒形の構造で、一端が受け口状に開口して貫通孔を持ち、もう一端は閉塞して平坦となっている。平坦部を底部と考えて立位で図化した。双口土器や舟形土器とも類似しており、胴縁の膨らんだ部分を「腹」として横位に置くこともできよう。手づくねの粗雑な造りで、指頭による凹凸を残している。

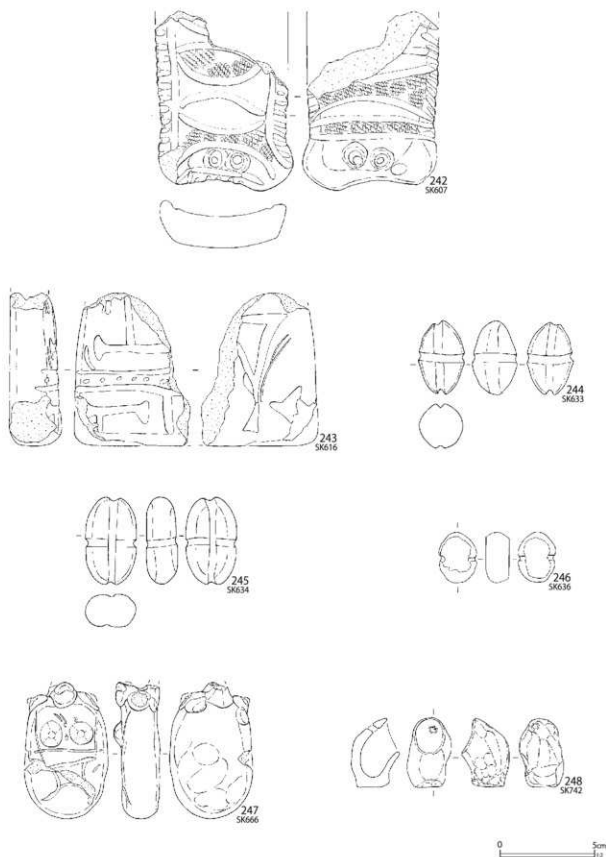
長さ 36cm、幅24cm、厚さ25cm、重さ141gである。遺物の可能性もある。
 安行1式を中心とする土器が共伴するが、晩期の



第572図 土壌出土土製品 (13)



第573図 土壙出土土製品 (14)



第574図 土壇出土土製品 (15)

(4) 遺物集中出土土製品

耳飾り (第575図)

耳飾りの分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。また、法量は第30表に記した。

1・2は遺物集中1から出土した。1は台形で透かし文様を持つタイプである。四方に波頭状の小突起を配し、内面に橋梁状の立体装飾を持って、非常に細かな刺突文を施文する。

2は千網型の耳飾りである。非常に薄手で精緻な造りだが、目目に触れない部分には粗い調整痕を残している。橙色の堅緻な器壁で、赤色顔料を残すほか、白色の付着物がみられ、化粧土を掛けていた可能性がある。

3は遺物集中7から出土した。環状無文で断面弧状のタイプである。上面が下面に対し大きく張り出しており、装着部は深く切り込んでいる。胎土に砂や小礫を含み、成形も粗い。

土製円盤 (第575図)

5点出土しており、いずれも磨製品の範疇に入るものである。法量は第35表に示した。また、土製円盤の分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。

その他の土製品 (第576図)

9は遺物集中1から出土した。人体表現を持つ土版である。平面観小判形で、断面長楕円形である。表面は正中線に沿って楕円文を重畳させ、鋭利な工具の刺突文を施文する。この左右にも刺突文を持つ円文を配し、両側縁に沿って同心円文を重畳させ、やはり刺突文を施文する。正中線の上端には盲孔を配して口を表現し、その上には「山」の字の凹線を描いているが、これは眉の表現と解される。両肩には一対の貫通孔(耳?)を持ち、

その下には小突起で乳房を表現する。腕・脚は存在しない。裏面は無文である。長さ11.4cm、幅8.4cm、厚さ2.1cm、重さ2535gである。

10～14は遺物集中7から出土した。安行3c式を主体とする土器群と共伴しており、大半が同時期のものと考えられる。

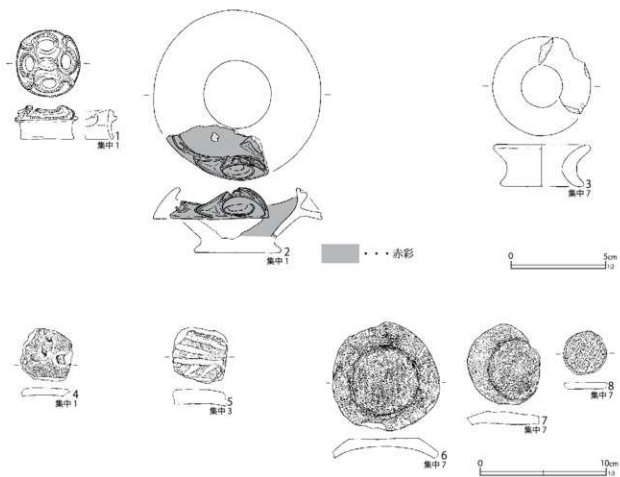
10は土版であろう。平面観小判形で断面長方形の扁平な造りである。表面の風化が甚だしく、文様等は一切観察されない。もともと無文の個体であった可能性もある。長さ7.6cm、幅5.8cm、厚さ2.5cm、重さ1147gである。

11は小型の台付き鉢である。体部は身が浅く、緩やかな山形波状口縁で後端部に沈線を巡らせる。胴上半部は平行沈線の波状文を巡らせて刺突文を充填し、上の余白に対向三叉文、下の余白に大柄の肉彫り風三叉文を交互配置する。脚台は球胴状に彫れて、肉彫り風三叉文と三叉の透かし文様を交互配置し、下端は「ハ」の字に開いて、平行沈線の弧線文を巡らせる。現存高7.5cm、最大径11.0cm、重さ1722gである。

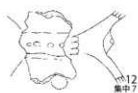
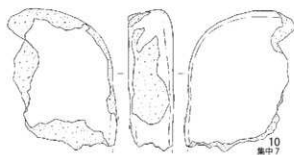
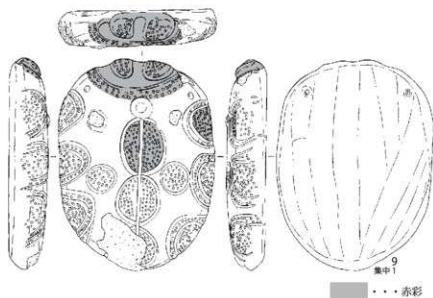
12も小型の台付き鉢で、帯部と脚台部の接合部分である。刺突を伴う隆帯を巡らせている。現存高4.0cm、最大径5.3cm、重さ182gである。

13はミニチュア土器である。無文で丸底、胴部にはほぼ垂直に立ち上がり、水平口縁直下に軽微なくびれを持って、1箇所に横一対の貫通孔を穿っている。現存高5.0cm、最大径4.5cm、重さ587gである。

14は土製勾玉である。手づくねの粗雑な造りで、一端に貫通孔を穿つ。長さ1.8cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、重さ15gである。



第575図 遺物集中出土土製品（1）

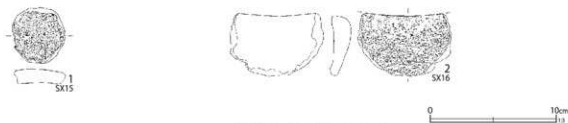


第576図 遺物集中出土土製品 (2)

(5) 不明遺構出土土製品

土製円盤 (第577図)

磨製品・打製品それぞれ1点ずつ出土している。



第577図 不明遺構出土土製品

(6) グリッドピット出土土製品

耳飾り (第578図)

耳飾りの分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。また、法量は第30表に記した。

1はZY-998グリッドP 1から出土した。白形有文で装着部が凹まないタイプである。直径より高さが卓越している。上面に楕円形の袈りを配し、下面も円形に袈りこんでいる。器面は黒色で堅緻、入念に研磨している。

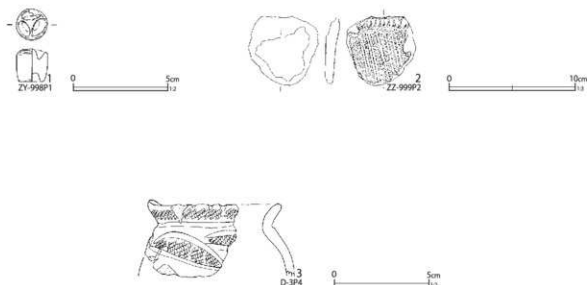
土製円盤 (第578図)

2はZZ-999グリッドP 2から出土した。打

製品で、後期安行式粗製深鉢口縁部を使用する。口縁内面の隆起を取り除いている。法量は第35表に示した。また、土製円盤の分類については住居跡出土遺物の項を参照されたい。

その他の土製品 (第578図)

3はD-3グリッドP 4から出土した。ミニチュアの広口壺で、口縁から胴上半部にかけて残存する。胴張りで、頸部屈曲して口縁外反する。水平口縁上に3個1単位の刻みを配する。胴上半部に入り組み文を描いて縄文を施文する。現存高4.1cm、最大径7.2cm、重さ23.6gである。



第578図 グリッドピット出土土製品

第29表 遺構出土土師師観察表(1) (第536~541・555・561図)

非定形品は()つき。残存値は口単位はmm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類	遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類
SJ99	10	1.9	1.7	2.3	11.5	I-A-ア	SJ105	71	3.3	2.7	1.8	6.2	IV-B
SJ99	11	(3.6)	(3.3)	2.2	5.5	III-C-ア	SJ105	72	(3.1)	(2.5)	[1.3]	2.2	IV-B
SJ99	12	5.5	-	2.2	52.0	III-D-ア	SJ105	73	3.8	2.8	1.9	9.5	IV-B
SJ99	13	(6.6)	(6.2)	2.3	5.8	III-D-ア	SJ105	74	3.7	2.8	1.9	10.2	IV-B
SJ99	14	2.3	(2.0)	[1.1]	2.5	IV-B	SJ106	75	6.0	5.8	2.2	24.4	IV-B
SJ99	15	2.6	2.1	1.5	5.1	IV-B	SJ106	76	(6.0)	(5.8)	2.1	5.6	IV-B
SJ100	16	3.4	-	4.0	55.2	I-B-ア	SJ107	77	3.3	2.8	2.6	31.4	I-B-ア
SJ100	17	2.8	-	2.7	25.0	I-B-ア	SJ107	78	2.5	-	2.2	14.7	IV-A-イ
SJ100	18	1.8	-	1.5	4.7	I-B-ア	SJ107	79	(6.0)	-	2.1	5.1	III-A-ア
SJ100	19	1.4	1.1	1.5	3.0	I-A-イ	SJ107	80	(4.0)	(3.8)	1.6	5.3	III-C-ア
SJ100	20	1.1	-	1.1	1.7	III-A-イ	SJ108	81	-	(2.8)	[1.7]	4.2	III-B-ア
SJ100	21	1.2	1.1	1.0	1.3	III-C-ア	SJ109	82	(7.2)	-	1.7	8.1	III-B-ア
SJ100	22	2.5	-	1.7	6.8	III-A-ア	SJ109	83	(6.4)	(6.3)	2.5	8.4	III-D-イ
SJ100	23	(7.8)	-	2.8	31.6	III-A-ア	SJ109	84	(8.0)	-	[1.9]	13.7	III-D-ア
SJ100	24	(6.0)	(5.8)	2.0	4.4	III-C-ア	SJ109	85	2.6	2.5	1.6	7.6	IV-B
SJ100	25	(5.4)	(5.2)	2.1	7.8	III-C-ア	SJ111	86	(6.0)	(5.8)	1.9	3.8	III-C-ア
SJ100	26	2.2	-	1.8	6.8	III-B-ア	SJ111	87	4.9	4.7	1.9	16.2	III-B-イ
SJ100	27	(7.0)	(6.4)	2.6	38.1	III-C-イ	SJ111	88	(8.0)	(7.8)	2.2	12.3	III-D-イ
SJ100	28	(4.8)	(4.6)	1.9	4.0	III-C-イ	SJ111	89	2.5	2.2	1.5	8.1	IV-A-ア
SJ100	29	(7.4)	(7.2)	2.2	17.8	III-C-イ	SJ111	90	1.5	-	1.4	3.5	IV-B
SJ100	30	(8.0)	(7.6)	2.5	14.4	III-C-イ	SJ112	91	(3.4)	(3.3)	1.4	3.6	III-D-イ
SJ100	31	(5.8)	(5.7)	2.2	5.8	III-C-イ	SJ114	92	5.0	4.9	1.7	50.0	I-A-ア
SJ100	32	(7.0)	(6.7)	2.1	4.8	III-C-イ	SJ114	93	(8.0)	-	2.0	23.0	III-A-ア
SJ100	33	(7.0)	(6.5)	2.0	7.4	III-C-イ	SJ114	94	(5.6)	(5.4)	1.8	3.9	III-C-イ
SJ100	34	(7.0)	(6.6)	2.2	10.7	III-C-イ	SJ114	95	(6.2)	(6.0)	1.7	4.9	III-D-ア
SJ100	35	(7.4)	(7.3)	2.2	24.3	III-D-ア	SJ115	96	(7.0)	(6.8)	2.2	8.4	III-C-イ
SJ100	36	(7.0)	(6.8)	1.8	5.6	III-D-ア	SJ118	97	3.0	2.9	2.1	24.2	I-B-ア
SJ100	37	(7.0)	(6.8)	2.2	7.2	III-D-ア	SJ118	98	3.2	-	3.0	30.8	I-B-ア
SJ100	38	(7.1)	(6.7)	2.2	11.3	III-D-イ	SJ118	99	(5.4)	(5.2)	2.0	5.0	III-C-ア
SJ100	39	(3.0)	(2.8)	2.2	9.9	IV-A-イ	SJ118	100	(6.6)	(6.4)	2.2	7.1	III-C-イ
SJ100	40	6.0	5.5	2.2	25.1	IV-B	SJ118	101	(6.0)	(5.8)	2.0	3.5	III-C-ア
SJ100	41	(4.9)	(4.5)	2.0	5.2	IV-B	SJ118	102	(6.0)	(5.8)	2.0	3.9	III-C-イ
SJ101	42	7.0	6.6	2.2	13.4	III-C-ア	SJ118	103	(6.2)	(6.0)	2.4	7.5	III-C-イ
SJ101	43	(3.8)	(3.7)	2.2	3.9	III-A-イ	SJ118	104	3.9	3.1	2.0	11.1	IV-B
SJ102	44	(6.6)	(6.3)	2.1	11.5	III-C-ア	SJ118	105	(5.1)	(4.9)	2.0	7.3	IV-B
SJ102	45	(5.2)	(5.0)	2.0	4.3	III-C-ア	SJ118	106	(2.9)	(2.8)	1.5	3.6	IV-B
SJ102	46	(6.0)	(5.8)	2.2	4.9	III-C-イ	SJ118	107	3.0	2.8	2.0	12.9	IV-B
SJ102	47	6.4	6.2	2.1	18.5	III-C-イ	SJ124	108	(6.6)	(6.4)	3.0	60.6	I-A-ア
SJ102	48	6.2	6.0	2.1	24.6	III-C-イ	SJ124	109	(6.6)	(6.5)	2.1	8.2	III-C-ア
SJ102	49	(7.2)	(7.0)	2.1	6.5	III-D-イ	SJ124	110	(8.1)	(7.9)	2.5	18.0	III-C-イ
SJ103	50	(6.0)	-	2.1	4.7	III-A-イ	SJ124	111	5.8	5.7	2.1	31.9	III-D-ア
SJ103	51	(8.2)	(8.0)	2.2	4.4	III-C-イ	SJ124	112	4.2	4.1	1.8	21.4	III-D-イ
SJ104	52	2.6	-	2.6	22.7	I-B-ア	SJ132	113	(8.0)	-	2.1	23.3	III-B-ア
SJ104	53	1.6	-	1.5	3.0	III-A-ア	SJ132	114	(6.8)	(6.6)	2.0	9.1	III-D-ア
SJ104	54	(5.7)	(5.5)	2.2	13.3	III-C-イ	SJ132	115	(7.6)	(7.4)	2.2	19.2	III-D-イ
SJ104	55	1.4	1.3	1.7	3.4	III-B-ア	S18	4	(5.8)	(4.6)	2.4	9.1	III-C-ア
SJ104	56	3.7	3.6	1.4	19.6	III-B-ア	S18	5	3.2	2.3	2.1	8.6	IV-B
SJ104	57	(5.0)	(4.8)	1.9	4.9	III-C-イ	S19	6	(2.4)	(2.3)	1.9	1.3	III-A-ア
SJ104	58	2.3	-	1.9	12.9	IV-A-イ	S19	7	(5.0)	(4.9)	1.6	5.9	III-B-ア
SJ104	59	2.0	-	1.5	3.9	IV-B	S19	8	3.7	3.6	1.7	18.2	III-C-ア
SJ105	60	2.8	2.6	3.1	30.4	I-B-イ	S19	9	(6.8)	(6.5)	2.5	7.7	III-C-ア
SJ105	61	(4.0)	(3.8)	2.1	6.8	III-A-イ	S19	10	(7.4)	(7.1)	2.2	14.8	IV-B
SJ105	62	2.2	-	1.5	5.5	III-B-ア	SK227	6	(1.3)	(0.7)	1.0	1.2	II-A-ア
SJ105	63	(5.4)	(5.2)	2.0	4.0	III-C-イ	SK241	7	(9.0)	(5.2)	[2.3]	7.7	V
SJ105	64	5.4	5.2	1.9	7.9	III-C-イ	SK248	8	6.4	4.7	2.3	16.2	III-C-ア
SJ105	65	4.4	4.2	1.9	13.4	III-C-イ	SK249	9	5.0	3.3	1.7	22.7	III-C-ア
SJ105	66	(4.6)	-	[1.3]	4.9	III-D-ア	SK526	10	(5.8)	(5.5)	2.4	7.3	III-A-イ
SJ105	67	(7.2)	(7.0)	2.1	4.6	III-D-イ	SK527	11	(6.7)	(6.3)	2.1	7.1	III-C-イ
SJ105	68	3.3	2.7	1.8	8.1	IV-B	SK531	12	(7.0)	(6.9)	2.0	7.9	III-B-イ
SJ105	69	3.3	2.7	1.8	8.6	IV-B	SK531	13	2.4	2.2	1.6	8.2	III-C-ア
SJ105	70	3.5	2.9	1.8	8.8	IV-B	SK539	14	6.0	-	2.0	20.8	III-B-ア

第30表 遺構出土土師器観察表(2) (第561~563・575・578図)

非定形品は○つき、残存値は□単位はcm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類	遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類
SK545	15	(6.6)	(4.0)	1.7	6.2	Ⅲ-C-イ	SK606	29	(4.5)	-	1.4	10.3	Ⅲ-B-イ
SK549	16	(6.1)	(5.7)	2.2	12.2	Ⅲ-C-イ	SK607	30	(5.0)	-	1.7	10.8	Ⅲ-B-ア
SK556	17	2.2	1.9	1.6	8.2	I-A-ア	SK629	31	3.9	3.6	1.8	20.3	Ⅲ-C-ア
SK558	18	5.9	5.5	[1.5]	27.1	I-A-イ	SK632	32	2.9	2.2	1.7	7.6	IV-B
SK561	19	2.4	-	1.6	7.0	I-B-イ	SK632	33	3.0	2.3	1.8	8.6	IV-B
SK579	20	4.0	3.9	2.1	31.3	I-A-イ	SK651	34	(6.9)	(6.6)	2.3	6.8	Ⅲ-B-イ
SK579	21	2.7	2.5	1.5	9.7	Ⅲ-B-ア	SK687	35	(8.0)	-	1.7	10.5	Ⅲ-B-イ
SK579	22	3.0	2.8	1.7	17.0	I-A-ア	SK687	36	(6.9)	(6.8)	1.7	8.5	Ⅲ-B-ア
SK580	23	3.6	3.5	2.5	45.3	I-A-ア	SK754	37	(6.0)	(5.8)	1.9	3.4	Ⅲ-C-ア
SK582	24	2.4	-	1.7	8.7	IV-B	SK816	38	3.3	2.5	1.7	7.5	IV-B
SK582	25	5.2	4.7	2.8	72.4	I-A-ア	集中1	1	3.4	2.7	1.7	8.3	IV-B-イ
SK584	26	(6.7)	(6.5)	2.4	15.7	Ⅲ-A-イ	集中1	2	(9.0)	(4.0)	[2.6]	8.7	V
SK590	27	3.6	2.7	2.0	8.2	IV-B	集中7	3	(5.2)	(3.8)	2.2	13.5	Ⅲ-C-ア
SK603	28	(5.5)	-	1.6	3.9	Ⅲ-D-ア	ZY998 P1	1	1.7	-	1.7	4.9	I-B-イ

第31表 遺構出土土製円盤観察表(1) (第542~544図)

非定形品は○つき、単位はcm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
SJ99	116	打	4.6	20.9	Ⅱ-A-ア	SJ104	159	打	6.0	40.5	Ⅱ-A-ア
SJ99	117	打	5.0	20.1	Ⅱ-A-イ	SJ104	160	打	5.8	38.4	Ⅱ-A-ア
SJ99	118	打	6.2	38.9	Ⅱ-A-イ	SJ104	161	打	6.0	40.4	Ⅱ-A-ア
SJ99	119	打	3.4	14.6	Ⅱ-A-イ	SJ104	162	打	4.4	22.2	Ⅱ-A-ア
SJ99	120	磨	5.4	20.7	I-A-ウ	SJ104	163	打	6.2	39.1	Ⅱ-A-イ
SJ99	121	磨	5.8	34.7	I-B-ウ	SJ104	164	打	4.2	15.9	Ⅱ-A-イ
SJ100	122	打	5.4	25.1	Ⅱ-A-ア	SJ104	165	打	5.8	22.8	Ⅱ-A-イ
SJ100	123	打	5.2	23.1	Ⅱ-A-イ	SJ104	166	打	3.8	13.6	Ⅱ-A-イ
SJ100	124	打	6.0	31.5	Ⅱ-A-イ	SJ104	167	打	5.6	26.8	Ⅱ-A-ウ
SJ100	125	打	6.4	43.8	Ⅱ-A-イ	SJ104	168	打	4.2	16.0	Ⅱ-A-イ
SJ100	126	打	6.2	40.3	Ⅱ-A-イ	SJ104	169	打	5.0	26.8	Ⅱ-A-イ
SJ100	127	打	4.8	30.0	Ⅱ-A-イ	SJ104	170	打	5.8	39.3	Ⅱ-A-イ
SJ100	128	打	5.6	30.7	Ⅱ-A-イ	SJ104	171	打	5.2	24.1	Ⅱ-A-イ
SJ100	129	打	6.6	40.8	Ⅱ-A-イ	SJ104	172	打	7.6	48.7	Ⅱ-A-イ
SJ100	130	打	6.6	45.6	Ⅱ-A-イ	SJ104	173	打	5.2	32.8	Ⅱ-A-イ
SJ100	131	打	5.4	39.2	Ⅱ-A-イ	SJ104	174	打	5.2	25.9	Ⅱ-A-ア
SJ100	132	打	6.4	41.7	Ⅱ-A-ウ	SJ104	175	打	4.4	15.3	Ⅱ-A-イ
SJ100	133	打	6.0	38.7	Ⅱ-A-ア	SJ104	176	打	3.8	16.7	Ⅱ-A-イ
SJ100	134	打	6.8	50.6	Ⅱ-A-イ	SJ104	177	打	5.2	24.9	Ⅱ-A-ア
SJ100	135	打	5.4	38.7	Ⅱ-A-ウ	SJ104	178	打	4.2	18.9	Ⅱ-A-イ
SJ100	136	打	6.0	36.1	Ⅱ-A-ウ	SJ104	179	打	6.2	40.5	Ⅱ-A-イ
SJ100	137	打	6.0	30.9	Ⅱ-B-イ	SJ104	180	打	4.8	21.8	Ⅱ-A-イ
SJ100	138	磨	6.6	40.3	I-B-イ	SJ104	181	打	6.2	32.3	Ⅱ-A-イ
SJ100	139	磨	2.8	8.2	I-B-ウ	SJ104	182	打	5.2	24.4	Ⅱ-A-イ
SJ101	140	打	4.0	15.9	Ⅱ-A-ア	SJ104	183	打	5.8	28.5	Ⅱ-A-ウ
SJ101	141	打	6.2	47.3	Ⅱ-A-イ	SJ104	184	打	4.8	23.6	Ⅱ-A-イ
SJ101	142	打	6.6	26.4	Ⅱ-B-イ	SJ104	185	打	4.4	24.7	Ⅱ-A-イ
SJ102	143	打	6.2	43.5	Ⅱ-A-イ	SJ104	186	打	6.2	36.0	Ⅱ-A-イ
SJ102	144	磨	4.2	16.0	I-B-ア	SJ104	187	打	4.8	24.7	Ⅱ-A-イ
SJ103	145	打	4.4	23.7	Ⅱ-A-イ	SJ104	188	打	4.2	19.9	Ⅱ-A-ウ
SJ103	146	打	5.0	30.8	Ⅱ-A-イ	SJ104	189	打	6.6	43.2	Ⅱ-A-イ
SJ103	147	打	7.0	45.5	Ⅱ-A-イ	SJ104	190	打	5.2	23.3	Ⅱ-A-イ
SJ103	148	打	6.8	41.0	Ⅱ-A-ウ	SJ104	191	打	4.0	17.8	Ⅱ-A-ウ
SJ104	149	打	4.4	16.9	Ⅱ-A-エ	SJ104	192	打	4.2	18.6	Ⅱ-A-ウ
SJ104	150	打	6.8	37.7	Ⅱ-A-エ	SJ104	193	磨	5.4	27.6	I-B-ウ
SJ104	151	打	6.0	51.3	Ⅱ-A-イ	SJ104	194	磨	3.4	9.5	I-B-イ
SJ104	152	打	5.8	30.0	Ⅱ-A-ア	SJ104	195	磨	3.8	14.3	I-B-ウ
SJ104	153	打	6.2	28.5	Ⅱ-A-ア	SJ104	196	磨	5.2	18.1	I-B-ウ
SJ104	154	打	5.2	22.1	Ⅱ-A-ア	SJ104	197	磨	5.8	22.0	I-B-ウ
SJ104	155	打	7.2	37.4	Ⅱ-A-ア	SJ104	198	磨	4.0	17.5	I-B-ウ
SJ104	156	打	6.4	36.5	Ⅱ-A-ア	SJ104	199	磨	5.6	23.4	I-B-ウ
SJ104	157	打	5.6	36.1	Ⅱ-A-ア	SJ104	200	磨	6.0	26.2	I-B-ウ
SJ104	158	打	6.8	55.2	Ⅱ-A-ア	SJ104	201	磨	4.4	17.7	I-B-ウ

第32表 遺構出土土製円盤観察表(2) (第544~548図)

非定形品は () つき、単位はcm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
SJ104	202	磨	4.0	11.6	I-B-U	SJ109	263	打	7.2	62.8	II-A-I
SJ104	203	打	4.6	18.0	II-B-U	SJ109	264	打	5.0	28.0	II-A-I
SJ104	204	磨	4.6	19.0	I-B-U	SJ109	265	打	8.0	56.4	II-A-I
SJ104	205	磨	3.8	8.1	I-B-U	SJ109	266	打	5.0	33.4	II-A-U
SJ104	206	磨	4.2	14.9	I-B-U	SJ109	267	打	4.4	22.3	II-A-U
SJ104	207	磨	6.6	31.0	I-B-U	SJ109	268	打	7.4	39.0	II-A-U
SJ104	208	磨	3.6	12.3	I-B-U	SJ109	269	打	5.0	27.6	II-A-U
SJ104	209	磨	4.4	10.2	I-B-U	SJ109	270	打	6.0	31.0	II-A-E
SJ104	210	磨	2.8	5.8	I-B-U	SJ109	271	打	3.6	18.8	II-A-U
SJ105	211	磨	3.6	18.3	I-B-I	SJ109	272	打	4.2	22.3	II-A-U
SJ105	212	打	4.2	17.4	II-A-I	SJ109	273	打	4.8	17.9	II-A-U
SJ105	213	打	6.2	42.5	II-A-I	SJ109	274	打	5.0	20.2	II-A-E
SJ105	214	打	5.4	25.1	II-B-I	SJ109	275	打	6.2	27.6	II-A-U
SJ105	215	磨	4.2	26.6	I-B-I	SJ109	276	打	6.2	42.6	II-A-U
SJ105	216	磨	4.8	19.1	I-B-U	SJ109	277	打	6.8	50.9	II-B-A
SJ105	217	磨	9.4	68.7	I-B-U	SJ109	278	打	5.4	31.7	II-B-I
SJ105	218	磨	4.2	24.2	I-B-U	SJ109	279	打	4.8	21.6	II-B-I
SJ105	219	磨	3.8	22.8	I-B-U	SJ109	280	打	5.0	28.5	II-B-U
SJ106	220	打	5.6	30.4	II-A-E	SJ109	281	磨	4.4	15.6	I-B-U
SJ106	221	打	6.4	36.5	II-A-A	SJ109	282	磨	6.2	22.2	I-B-U
SJ106	222	打	6.0	40.2	II-A-U	SJ109	283	打	6.6	50.0	II-B-U
SJ106	223	打	4.6	21.0	II-A-U	SJ109	284	打	5.6	26.3	II-B-U
SJ106	224	磨	6.0	28.4	I-B-I	SJ111	285	打	4.0	13.5	II-A-A
SJ106	225	磨	4.8	17.8	I-B-U	SJ111	286	打	5.0	30.1	II-A-I
SJ107	226	打	5.2	30.7	II-B-A	SJ111	287	打	5.8	27.9	II-A-I
SJ107	227	打	6.2	45.3	II-A-A	SJ112	288	打	4.0	21.9	II-A-A
SJ107	228	打	5.4	24.7	II-A-A	SJ112	289	打	5.4	37.7	II-A-I
SJ107	229	打	4.6	16.0	II-A-I	SJ112	290	打	4.0	17.5	II-A-U
SJ107	230	打	4.0	20.4	II-A-I	SJ112	291	打	4.4	21.8	II-A-U
SJ107	231	打	4.8	15.9	II-A-E	SJ112	292	打	5.4	29.6	II-A-U
SJ107	232	打	3.4	13.6	II-A-I	SJ112	293	打	6.6	34.6	II-A-U
SJ107	233	打	5.0	16.7	II-A-I	SJ113	294	打	5.2	28.6	II-A-I
SJ107	234	打	4.6	14.7	II-A-I	SJ113	295	打	7.8	89.8	II-A-I
SJ107	235	打	8.8	103.0	II-A-I	SJ114	296	打	5.6	31.3	II-A-A
SJ107	236	打	5.6	28.3	II-A-I	SJ114	297	打	7.2	46.0	II-A-U
SJ107	237	打	5.0	18.2	II-A-U	SJ114	298	打	4.8	25.2	II-A-I
SJ107	238	打	4.6	17.1	II-A-E	SJ114	299	打	5.0	26.0	II-A-I
SJ107	239	打	3.4	10.5	II-B-U	SJ114	300	打	5.8	40.0	II-A-I
SJ107	240	打	5.6	30.8	II-A-U	SJ114	301	打	5.0	25.5	II-A-I
SJ107	241	打	5.4	27.8	II-A-E	SJ114	302	打	6.6	33.6	II-A-I
SJ107	242	打	5.2	35.7	II-A-I	SJ114	303	打	5.0	41.4	II-A-I
SJ107	243	打	4.8	18.6	II-B-U	SJ114	304	打	4.4	32.6	II-A-I
SJ107	244	打	5.6	24.7	II-A-U	SJ114	305	打	5.0	31.7	II-A-I
SJ107	245	打	5.0	25.0	II-A-U	SJ114	306	打	4.8	22.7	II-A-I
SJ107	246	打	5.0	21.8	II-B-U	SJ114	307	打	5.6	33.0	II-A-U
SJ107	247	磨	4.2	15.7	I-A-E	SJ114	308	打	5.6	36.2	II-A-U
SJ108	248	打	4.6	23.5	II-A-A	SJ114	309	打	5.2	24.4	II-A-U
SJ108	249	打	5.6	34.1	II-A-I	SJ114	310	打	7.8	55.9	II-A-U
SJ108	250	打	5.6	38.9	II-A-A	SJ114	311	打	5.8	30.3	II-A-U
SJ109	251	打	6.8	40.4	II-A-A	SJ114	312	打	6.0	29.4	II-A-U
SJ109	252	打	6.2	29.5	II-A-A	SJ114	313	打	5.6	29.4	II-B-I
SJ109	253	打	5.8	29.9	II-A-U	SJ114	314	打	5.2	23.3	II-B-I
SJ109	254	打	6.6	29.4	II-A-E	SJ114	315	打	5.0	24.1	II-A-U
SJ109	255	打	3.8	14.3	II-A-U	SJ114	316	磨	3.8	10.6	I-B-U
SJ109	256	打	5.8	25.2	II-A-I	SJ114	317	磨	4.2	20.3	I-A-E
SJ109	257	打	4.2	17.8	II-A-I	SJ114	318	磨	4.2	15.6	I-B-U
SJ109	258	打	6.6	49.9	II-A-I	SJ114	319	磨	4.0	11.6	I-B-U
SJ109	259	打	6.8	37.2	II-A-I	SJ114	320	磨	5.8	28.9	I-B-U
SJ109	260	打	5.4	26.6	II-A-I	SJ114	321	磨	5.2	21.4	I-B-U
SJ109	261	打	6.0	33.9	II-A-I	SJ114	322	磨	4.4	19.6	I-B-U
SJ109	262	打	6.0	38.4	II-A-I	SJ115	323	打	4.2	22.3	II-A-A

第33表 遺構出土土製円盤観表(3) (第548~550・556・557図)

非完形品は () つき、単位はcm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
SJ115	324	打	6.2	32.9	II-A-ア	SJ124	385	打	5.0	17.8	II-A-イ
SJ115	325	打	5.2	23.3	II-A-イ	SJ124	386	打	6.0	42.1	II-A-イ
SJ115	326	打	4.4	18.2	II-A-イ	SJ131	387	打	5.2	25.0	II-A-ア
SJ115	327	打	4.0	16.7	II-A-イ	SJ131	388	打	4.8	31.0	II-A-イ
SJ115	328	打	6.2	45.6	II-A-ウ	SJ131	389	打	5.0	22.8	II-A-エ
SJ115	329	磨	4.8	22.1	I-A-イ	SJ131	390	打	4.2	13.1	II-A-ア
SJ115	330	磨	4.2	9.7	I-B-ウ	SJ131	391	打	4.6	16.3	I-B-ウ
SJ115	331	磨	4.8	18.9	I-B-ウ	SJ132	392	打	6.8	48.1	II-A-ア
SJ115	332	磨	4.2	11.8	I-B-ウ	S18	11	打	5.8	35.1	II-A-ア
SJ115	333	磨	4.2	12.5	I-B-ウ	S18	12	打	5.0	19.9	II-A-ア
SJ115	334	磨	2.8	7.1	I-B-ウ	S18	13	打	5.8	31.1	II-A-イ
SJ116	335	打	5.4	28.7	II-A-イ	S18	14	打	6.6	29.0	II-A-ウ
SJ116	336	磨	6.6	36.4	I-B-ウ	S18	15	打	6.6	27.4	II-A-ウ
SJ118	337	打	5.4	20.0	II-A-イ	S18	16	打	4.4	23.3	II-A-イ
SJ118	338	打	6.4	37.5	II-A-ア	S18	17	打	4.4	16.3	II-A-エ
SJ118	339	打	5.4	34.6	II-A-ア	S18	18	磨	4.8	31.0	I-B-ウ
SJ118	340	打	5.4	25.8	II-A-ア	S18	19	磨	4.2	11.9	I-B-ウ
SJ118	341	打	5.2	21.2	II-A-ア	S19	20	打	4.8	22.9	II-A-イ
SJ118	342	打	5.2	24.6	II-A-ア	S19	21	打	5.4	31.9	II-A-ア
SJ118	343	打	6.0	39.2	II-A-ア	S19	22	打	6.0	31.6	II-A-イ
SJ118	344	打	7.0	40.1	II-A-イ	S19	23	打	3.8	18.9	II-A-イ
SJ118	345	打	6.4	35.4	II-A-イ	S19	24	打	7.4	54.2	II-A-ア
SJ118	346	打	6.2	35.7	II-A-イ	S19	25	打	4.8	20.8	II-A-ア
SJ118	347	打	5.6	31.2	II-A-イ	S19	26	打	4.8	21.3	II-A-イ
SJ118	348	打	5.8	28.8	II-A-イ	S19	27	打	6.2	41.1	II-A-ア
SJ118	349	打	3.8	13.6	II-A-イ	S19	28	打	5.2	32.0	II-A-イ
SJ118	350	打	4.4	13.4	II-A-イ	S19	29	打	7.2	36.4	II-A-イ
SJ118	351	打	5.2	23.7	II-A-イ	S19	30	打	6.0	29.1	II-A-イ
SJ118	352	打	5.4	28.8	II-A-イ	S19	31	打	4.6	18.9	II-A-イ
SJ118	353	打	7.0	43.2	II-A-イ	S19	32	打	3.8	16.0	II-A-イ
SJ118	354	打	6.0	24.2	II-A-イ	S19	33	打	5.2	33.4	II-A-イ
SJ118	355	打	4.8	16.1	II-A-イ	S19	34	打	3.8	16.5	II-A-イ
SJ118	356	打	7.0	68.7	II-A-イ	S19	35	打	5.0	25.5	II-A-イ
SJ118	357	打	6.2	31.5	II-A-イ	S19	36	打	5.2	24.6	II-A-イ
SJ118	358	打	5.4	29.6	II-A-イ	S19	37	打	5.0	22.2	II-A-イ
SJ118	359	打	4.8	23.7	II-A-ウ	S19	38	打	5.8	28.1	II-A-イ
SJ118	360	打	5.0	23.7	II-A-イ	S19	39	打	5.2	24.2	II-A-イ
SJ118	361	打	5.0	17.7	II-B-ウ	S19	40	打	4.0	16.3	II-A-イ
SJ118	362	打	5.0	21.6	II-A-ウ	S19	41	打	5.0	22.9	II-A-イ
SJ118	363	打	4.4	21.7	II-A-ウ	S19	42	打	4.6	17.9	II-A-イ
SJ118	364	打	6.4	40.9	II-A-ウ	S19	43	打	6.4	50.1	II-A-ア
SJ118	365	打	5.6	27.1	II-A-ウ	S19	44	打	5.8	26.7	II-A-ア
SJ118	366	打	5.2	25.0	II-A-ウ	S19	45	打	4.2	20.4	II-A-イ
SJ118	367	打	6.4	35.0	II-A-ウ	S19	46	打	4.8	19.1	II-A-ア
SJ118	368	打	7.4	49.0	II-A-ウ	S19	47	打	7.4	47.0	II-A-ア
SJ118	369	打	6.8	47.5	II-A-エ	S19	48	打	6.2	34.6	II-A-イ
SJ118	370	打	4.8	18.7	II-A-ウ	S19	49	打	6.2	41.6	II-A-イ
SJ118	371	打	4.4	14.9	II-A-エ	S19	50	打	6.4	44.5	II-A-イ
SJ118	372	打	5.4	26.2	II-B-ウ	S19	51	打	8.4	60.9	II-A-イ
SJ118	373	打	5.2	18.3	II-B-ウ	S19	52	打	4.8	34.8	II-A-イ
SJ118	374	打	4.8	16.2	II-B-ウ	S19	53	打	6.2	35.6	II-A-イ
SJ118	375	磨	4.4	17.7	I-B-ウ	S19	54	打	5.6	27.0	II-A-イ
SJ118	376	磨	4.8	21.5	I-B-ウ	S19	55	打	4.6	18.5	II-A-イ
SJ118	377	磨	3.2	10.0	I-B-ウ	S19	56	打	4.4	14.5	II-A-イ
SJ118	378	磨	5.6	28.5	I-B-ウ	S19	57	打	6.4	44.5	II-A-イ
SJ118	379	磨	2.2	5.1	I-B-ウ	S19	58	打	5.6	26.2	II-A-イ
SJ118	380	打	4.6	25.4	II-A-イ	S19	59	打	4.8	27.0	II-A-イ
SJ120	381	打	5.4	28.8	II-A-イ	S19	60	打	5.0	22.9	II-A-イ
SJ124	382	打	5.6	34.0	II-A-ア	S19	61	打	5.0	21.6	II-A-イ
SJ124	383	打	5.2	28.4	II-A-イ	S19	62	打	7.6	48.3	II-A-イ
SJ124	384	打	6.0	24.1	II-A-イ	S19	63	打	6.4	32.4	II-A-ウ

第34表 遺構出土土製円盤観察表(4) (第557~558・564~567図)

非定形品は () つき、単位はcm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
S19	64	打	6.6	41.7	II-A-U	SK527	56	打	4.6	17.9	II-A-U
S19	65	打	5.6	30.8	II-A-U	SK527	57	打	6.8	48.4	II-A-U
S19	66	打	4.4	23.0	II-A-U	SK527	58	打	5.8	30.7	II-A-U
S19	67	打	5.6	24.3	II-A-U	SK527	59	磨	5.2	17.8	I-B-I
S19	68	打	4.4	17.5	II-A-I	SK527	60	磨	3.8	15.1	I-B-U
S19	69	打	5.2	42.8	II-A-I	SK527	61	磨	5.2	17.4	I-B-I
S19	70	打	5.8	39.1	II-A-U	SK527	62	磨	3.8	12.1	I-B-U
S19	71	打	5.4	33.7	II-A-U	SK527	63	磨	5.6	29.9	I-B-U
S19	72	打	5.2	23.6	II-A-I	SK527	64	磨	5.8	28.9	I-B-U
S19	73	打	4.0	18.0	II-A-U	SK527	65	磨	3.6	11.1	I-B-U
S19	74	打	3.4	16.3	II-A-U	SK527	66	磨	4.0	16.0	I-B-U
S19	75	打	4.2	14.7	II-A-U	SK528	67	打	5.0	22.9	II-A-U
S19	76	打	6.2	43.3	II-A-I	SK529	68	打	5.2	31.4	II-A-U
S19	77	打	6.6	32.5	II-A-U	SK529	69	打	5.4	28.0	II-A-U
S19	78	打	6.8	42.9	II-A-U	SK530	70	打	5.8	27.4	II-A-U
S19	79	打	3.8	18.2	II-A-I	SK531	71	打	5.8	36.3	II-A-I
S19	80	打	6.2	33.7	II-A-U	SK531	72	打	4.8	26.0	II-A-I
S19	81	打	7.8	50.5	II-A-E	SK531	73	打	5.4	27.4	II-A-I
S19	82	打	7.8	56.3	II-A-U	SK531	74	打	6.8	50.5	II-A-I
S19	83	打	5.6	29.7	II-A-U	SK531	75	打	5.0	27.1	II-A-U
S19	84	打	4.8	17.9	II-A-U	SK531	76	磨	5.2	27.5	I-A-I
S19	85	打	5.2	28.6	II-A-U	SK532	77	打	7.6	50.2	II-A-U
S19	86	打	7.2	43.0	II-A-U	SK532	78	打	5.0	24.0	II-A-I
S19	87	打	4.2	13.2	II-A-I	SK534	79	打	5.0	28.1	II-A-U
S19	88	打	4.6	25.8	II-A-U	SK534	80	打	4.8	21.1	II-A-I
S19	89	打	5.2	18.5	II-A-U	SK534	81	打	5.0	23.8	II-A-I
S19	90	打	6.2	36.8	II-A-I	SK534	82	打	4.5	16.9	II-A-I
S19	91	打	5.2	22.2	II-A-E	SK534	83	打	5.6	23.8	II-A-U
S19	92	打	5.2	18.7	II-A-U	SK534	84	打	4.6	21.4	II-A-I
S19	93	磨	4.6	17.4	I-B-U	SK534	85	打	5.6	23.5	II-A-U
S19	94	打	5.0	19.3	II-A-U	SK534	86	磨	4.2	11.7	I-B-U
S19	95	磨	5.0	20.8	I-B-I	SK536	87	打	3.8	15.1	II-A-I
S19	96	打	4.6	15.4	II-A-I	SK536	88	打	6.2	37.6	II-A-U
S19	97	磨	4.0	12.4	I-B-I	SK539	89	打	7.6	60.2	II-A-I
S19	98	磨	3.2	9.9	I-B-I	SK539	90	磨	3.8	10.7	I-B-U
S19	99	打	5.2	25.5	II-B-U	SK539	91	磨	4.2	13.9	I-A-I
S19	100	打	6.4	36.6	II-B-U	SK540	92	打	5.0	31.7	II-A-U
S19	101	打	4.8	22.1	II-A-U	SK540	93	打	4.8	21.1	II-A-I
S19	102	磨	6.6	30.9	I-B-U	SK540	94	打	6.2	36.7	II-A-I
S19	103	磨	4.4	15.1	I-B-U	SK540	95	打	4.4	18.8	II-A-I
S19	104	磨	4.0	15.9	I-B-U	SK540	96	磨	5.0	21.4	I-B-U
S19	105	磨	4.6	25.6	I-B-U	SK540	97	磨	4.6	18.1	I-A-E
S19	106	磨	4.4	16.1	I-B-U	SK540	98	磨	5.0	25.7	I-A-U
S19	107	磨	4.6	28.4	I-B-U	SK548	99	磨	4.2	18.4	I-B-U
SK204	39	打	4.8	28.4	II-A-U	SK549	100	打	5.4	33.4	II-A-U
SK250	40	磨	8.2	92.0	I-C	SK549	101	打	3.0	10.2	II-A-I
SK253	41	磨	2.6	7.1	I-B-U	SK549	102	打	6.0	27.6	II-A-I
SK522	42	打	4.6	20.4	II-A-I	SK549	103	打	5.6	30.5	II-A-I
SK522	43	磨	5.8	19.1	I-A-E	SK549	104	打	6.0	33.8	II-A-U
SK522	44	磨	4.0	20.7	I-B-U	SK557	105	打	6.0	45.7	II-A-I
SK523	45	打	6.0	33.2	II-B-U	SK557	106	打	4.4	24.6	II-A-U
SK527	46	打	6.8	42.4	II-A-U	SK558	107	打	4.6	21.8	II-A-U
SK527	47	打	6.8	43.3	II-A-U	SK558	108	打	4.2	21.3	II-A-U
SK527	48	打	5.2	23.2	II-A-I	SK561	109	打	6.4	44.4	II-A-U
SK527	49	打	8.2	70.8	II-A-I	SK561	110	打	6.0	38.8	II-A-U
SK527	50	打	7.8	33.0	II-A-I	SK561	111	打	4.6	22.7	II-A-U
SK527	51	打	4.0	19.8	II-A-I	SK561	112	打	7.0	48.4	II-A-I
SK527	52	打	5.0	27.8	II-A-I	SK561	113	打	4.8	21.6	II-A-I
SK527	53	打	5.6	2.3	II-A-I	SK561	114	打	7.0	47.4	II-A-I
SK527	54	打	5.2	26.3	II-A-U	SK561	115	打	5.4	20.3	II-A-I
SK527	55	打	5.6	31.5	II-A-U	SK561	116	打	5.0	29.9	II-A-I

第35表 遺構出土土製円盤観覧表(5) (第567~571・575・577・578図)

非完形品は () つき、単位はcm/g (小数点第一位まで)

遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
SK561	117	打	6.2	38.3	II-A-イ	SK633	176	打	6.8	38.7	II-A-ウ
SK561	118	打	4.6	20.8	II-A-エ	SK633	177	磨	5.2	21.7	I-B-ウ
SK561	119	打	6.2	32.1	II-A-イ	SK654	178	打	5.6	38.5	II-A-イ
SK561	120	打	7.0	49.0	II-A-イ	SK654	179	打	5.2	26.0	II-A-イ
SK561	121	打	8.8	69.6	II-A-イ	SK655	180	打	4.6	24.4	II-A-ウ
SK561	122	打	4.0	17.8	II-A-ウ	SK655	181	打	6.4	32.7	II-A-ウ
SK561	123	打	6.0	33.2	II-A-イ	SK663	182	打	5.2	29.7	II-A-イ
SK561	124	打	4.4	17.2	II-A-ウ	SK663	183	打	4.2	16.6	II-A-イ
SK561	125	打	5.2	33.0	II-A-イ	SK663	184	打	4.6	24.8	II-A-ウ
SK561	126	打	6.4	38.2	II-A-ウ	SK666	185	磨	4.2	15.4	I-B-ア
SK561	127	打	5.6	25.4	II-A-イ	SK667	186	打	7.0	46.5	II-A-イ
SK561	128	打	6.4	37.6	II-B-イ	SK683	187	打	4.4	12.8	II-A-ウ
SK561	129	打	5.2	26.0	II-B-ウ	SK684	188	打	4.0	13.8	II-A-イ
SK561	130	磨	3.4	11.4	I-B-ウ	SK684	189	打	4.2	18.7	II-A-イ
SK561	131	磨	4.4	14.1	I-B-ウ	SK686	190	打	7.2	51.9	II-A-イ
SK571	132	磨	4.4	20.6	I-B-ウ	SK687	191	打	5.0	34.2	II-A-ア
SK580	133	打	5.6	22.9	II-A-ア	SK687	192	打	4.2	19.3	II-A-イ
SK580	134	打	7.0	37.9	II-A-イ	SK687	193	打	3.8	14.9	II-A-イ
SK580	135	打	6.4	43.6	II-A-ウ	SK687	194	打	5.2	27.7	II-A-イ
SK580	136	打	4.0	14.9	II-A-イ	SK687	195	打	5.6	29.0	II-A-イ
SK580	137	打	6.0	34.7	II-A-イ	SK687	196	打	7.8	58.4	II-A-イ
SK588	138	磨	4.2	16.2	I-B-ウ	SK687	197	打	5.0	20.3	II-A-ウ
SK590	139	打	4.2	25.3	II-A-イ	SK687	198	打	4.2	20.5	II-A-ウ
SK601	140	打	5.2	31.8	II-A-イ	SK687	199	打	6.0	31.4	II-A-イ
SK601	141	打	4.4	18.6	II-A-イ	SK687	200	打	4.8	19.2	II-B-イ
SK601	142	打	7.0	46.7	II-A-ウ	SK714	201	打	7.2	53.2	II-A-ウ
SK601	143	打	7.8	48.7	II-A-ウ	SK714	202	打	5.2	22.3	II-A-ウ
SK601	144	打	6.2	31.9	II-A-ウ	SK714	203	磨	4.4	22.6	I-B-ウ
SK602	145	打	4.6	18.4	II-A-イ	SK716	204	打	5.6	40.0	II-A-イ
SK602	146	打	5.0	19.8	II-A-イ	SK730	205	打	6.6	36.4	II-A-イ
SK602	147	打	6.0	29.0	II-A-ウ	SK730	206	打	4.2	18.7	II-A-ウ
SK602	148	打	5.4	29.3	II-B-ウ	SK741	207	磨	4.2	13.4	I-B-ウ
SK603	149	打	4.0	18.3	II-A-ア	SK741	208	磨	5.6	20.9	I-B-ウ
SK603	150	打	6.8	42.4	II-A-ウ	SK744	209	打	5.2	19.5	II-A-イ
SK603	151	打	7.2	45.7	II-A-イ	SK744	210	打	5.4	24.4	II-A-イ
SK603	152	打	4.6	15.4	II-B-ウ	SK744	211	打	4.8	28.2	II-A-イ
SK603	153	磨	4.6	17.2	I-B-ウ	SK744	212	打	4.6	26.4	II-A-イ
SK603	154	磨	4.4	17.3	I-B-イ	SK744	213	打	5.6	33.2	II-A-イ
SK604	155	打	4.8	22.1	II-A-イ	SK744	214	磨	3.6	9.5	I-A-ア
SK604	156	打	5.0	21.1	II-A-イ	SK744	215	磨	4.0	10.6	I-B-ウ
SK604	157	打	6.8	46.8	II-A-イ	SK750	216	磨	4.0	12.1	I-A-イ
SK604	158	打	5.4	36.4	II-A-イ	SK763	217	打	5.4	32.3	II-A-ア
SK604	159	打	4.8	22.1	II-A-イ	SK763	218	磨	5.4	21.5	I-A-ア
SK604	160	打	5.8	23.9	II-A-イ	SK763	219	打	4.4	22.3	II-A-イ
SK604	161	打	5.0	21.9	II-A-ウ	SK763	220	打	7.4	50.5	II-A-イ
SK604	162	打	6.2	37.3	II-A-ウ	SK763	221	打	5.6	27.4	II-A-ウ
SK604	163	打	5.0	24.5	II-A-ウ	SK778	222	打	5.0	28.4	II-A-ウ
SK604	164	打	5.6	26.1	II-A-ウ	SK783	223	打	5.0	24.2	II-A-イ
SK604	165	打	5.0	19.8	II-A-ア	SK783	224	打	6.6	38.5	II-A-イ
SK604	166	打	6.6	41.8	II-A-ウ	SK808	225	磨	3.8	13.4	I-B-ウ
SK605	167	打	4.8	24.1	II-A-ウ	集中1	4	磨	4.6	14.9	I-B-ア
SK606	168	磨	3.8	13.9	I-B-ウ	集中3	5	磨	5.0	32.5	I-B-ウ
SK607	169	打	4.8	24.2	II-A-ア	集中7	6	磨	8.8	95.3	I-C
SK607	170	打	7.0	39.3	II-A-イ	集中7	7	磨	6.2	44.8	I-C
SK607	171	打	5.8	36.8	II-A-イ	集中7	8	磨	3.6	9.9	I-B-ウ
SK607	172	打	5.4	37.8	II-A-イ	SX15	1	磨	4.4	27.2	I-B-ウ
SK607	173	打	5.0	20.1	II-A-イ	SX16	2	打	7.4	51.7	II-A-ウ
SK607	174	打	5.2	28.1	II-A-イ	Z7999 P2	2	打	6.0	28.2	II-A-ウ
SK616	175	磨	4.0	21.5	I-B-ウ						

3. 石器

石鏃 (第579図1~24)

石材は青灰色から黒色のチャートが好んで用いられ、黒曜石がこれに次いでいる。

1・2は円基の鏃である。いずれも先端部は鈍角で、2は先端部裏面に自然面を残している。

3~8は凸基有茎の鏃である。

3は基部を欠損する。4・5・7等全形を知り得るものについては両側縁の逆刺を挟んで鏃身と茎のサイズが拮抗する。7は裏面に主要剥離面、表面に節理面を残す。8は先端部が丸味を持ち、折損後再加工している可能性がある。

9~19は平基有茎の鏃である。11・14・15は裏面に主要剥離面を残している。17は凸基有茎に近いタイプで逆刺が鈍角で鏃身は肉厚である。18は非常に細かな両面加工で、鋭利な逆刺を持つ凹基有茎に近いタイプである。

20~24は凹基無茎の鏃である。20は基部が緩やかな内反りのカーブを描き、21・23の基部は鋭角なV字に切り込む。

24は先端部と左逆刺部を欠損するが、鏃身部と逆刺部のサイズが拮抗するもので、再生品の可能性がある。

石錐 (第580図25~29)

25・26は不整形で、鈍角の軸部を持っており、未成品の可能性がある。特に26は右側縁部に逆刺状の突起を持っていて、石鏃の再加工品とも解される。

27・28はほぼ軸部のみの、棒状の石錐である。28は上方に左右対称の小突起を持っている。

29は軸部とつまみ部が明瞭に分離したT字形の石錐で、裏面に主要剥離面を持っている。

スクレイパー (第580図30~第581図43)

30は石筥風のスクレイパーである。裏面に広く主要剥離面を残して、両側縁に両面加工による刃部を形成している。上端は数回の剥離で打痕を取

り外し、丸みを帯びている。

31は全体に丸みを帯びた石核使用のスクレイパー、32・33は剥片とも解される。34は円形の剥片を使用する。裏面に主要剥離面、右上方に節理面を残しており、刃部の加工は簡素である。

35は分銅形打製石斧の基部とも解される。下方を中心に両面加工の刃部を形成する。36は板状節理の薄板を使用し、刃部横長で上方に小突起をつくり出す石匙である。表面中央が極めて平滑であり、石皿片の転用が考えられる。

37は小型の石匙である。左右対称の水滴形で、両面加工の精緻な刃部を持つ。38は縦型の石匙である。比較的大型で、刃部は両面加工で柳葉形につくり出し、下端は鋭角で、一種の刺突具とも解される。つまみ部は左上方に節理面を残しており、刃部との境に明瞭な挟りを持つ。

39は石棒片からの再加工品で、表面左上方に非常に平滑に研磨した面を残し、裏面に打割面を残している。下方裏面に細かな剥離を集中させて刃部としており、石筥の先端部に類似する。

40は粗大なスクレイパーで、表面中央に節理面、裏面に打割面を残し、表面を中心におおまかな加撃で刃部を形成する。

41~43は石筥である。41は台形で、下端部表面に細かな剥離を施して刃部としている。42は本来撥形であったものとみられるが、基部折損する。磨石ないし石棒片からの再加工品とみられ、裏面に平滑面を残して、両側縁は緩やかな内向きの弧を描き、下端部は表面のみの細かな剥離で刃部をつくり出している。43は裏面平坦な亀の甲形で、裏面と右側縁部に広く原礫面を残し、左側縁と下端部に片面加工の刃部を持つ。

二次加工剥片 (第582図44~47)

44は上端部に節理面を持つ。逆五角形で、下端部がくびれて折損しており、石錐の破損品の可能

性もある。45は裏面に主要剥離面を持ち、左下端部に簡素な加工で刺突部を形成している。

46は縦長の剥片を縦置きに使用し、裏面に主要剥離面を残す。表面の上方に左右からの剥離を施しており、粗製の石匙とも解される。47は縦長の剥片を横置きにしたものか。長方形で、厚みのある上辺に細かな剥離を施して持ち手とし、下辺を簡素な刃部としている。

磔器 (第582図48～第583図59)

48は扁平棒状の磔の右側縁部下方に細かな剥離が集中するもので、敲石の一種であろう。49は磨石からの転用品で、全体に非常に平滑に研磨しており、側縁部裏面下方に剥離を施している。

50は水滴形の磔の下方に両面加工の刃部を持つが、刃部を形成する剥離面にも研磨を施しており、最終的に磨石として役割を終えたものとみられる。51は結晶片岩の板石を素材として表裏に磨り面を持ち、表面には凹孔を残すことから、石皿片とみられる。三角形の両側縁を叩打して握りを形成し、下方を片刃の刃部としている。

52も結晶片岩の板石を素材とする。楕円形で、右側縁が丁寧な面取りされ、残る3方向に剥離が集中する。表面が平坦である一方、裏面は緩やかな凹面となっており、石皿片を再加工したものとみられる。53は小判形の磨石を再加工したもので、長軸側の両極に打撃を集中させている。

54は断面三角形の磔の1辺を使用している。55は棒状の石材を短軸方向に打割し、1辺を加工して刃部としたものか。56は石筥の刃部の可能性がある。57は小判形の磔を横置きにして下辺と両側縁を刃部とする。58・59は棒状の磨石の長軸側1側縁を刃部とする。

打製石斧 (第584図60～第587図93)

60～68・72は不定形の石斧を一括した。

60は結晶片岩の板石を楕円形に加工したもので、表面に節理面、裏面に打割面を残す。61は左側縁部に細かな剥離を施して刃部としている。62

は撥形の石斧の基部、ないしはそれを再加工したものか。64～67も破損した刃部等からの再生品の可能性がある。72は短冊形ないし撥形の石斧の基部を再加工しており、表面に原礫面、裏面に打割面を残す。63は水滴形の石斧で、表裏に原礫面を残す。68は石皿片を整形して使用したものとみられ、表裏に凹孔を残す。

69～71・73～75は板状節理の板石を長方形に整形したものである。71は下方に明瞭な刃部を持つが、それ以外はいずれも鈍角であり、磨石ないし敲石と解すべきかもしれない。70は石皿片で、表面に凹面を残し、表裏に雨だれ石状の凹孔を持つ。74・75も石皿片か。74は裏面に凹面を残し、表面を研磨して全体に長軸方向の反りを形成している。75は表裏とも極めて平滑に研磨しており、被熱による風化が著しい。

76～78・80～83は小型の石斧で、短冊形ないし撥形である。76は刃部折損する。78は小型三角形の石斧で、折損した基部に刃部を再生したものとみられる。80は表面に広く原礫面を残している。刃部は不自然な三角形で、やはり再生品の可能性がある。81は完形品とみられる。やや末広がりの短冊形で、刃部は著しく被熱している。82は折損した刃部で、細かな両面加工により鋭角な刃部をつくり出している。83は完形品で、表面に打割面、裏面に原礫面を残している。刃部は両面加工で鋭角である。

79・84～90は撥形である。79は緑泥片岩の板石を素材とし、刃部のみ残存する。84・85も片岩製で、84は胴部は断面長方形、両面加工の比較的鋭利な刃部を持つ。85は非常に薄身の石斧である。

86は基部欠損し、両側縁に浅い抉りを持つ。87は基部で、表面に広く原礫面を残す。88は刃部の大半を欠損する。裏面に非常に平滑に研磨した面を残しており、磨石等からの転用とみられる。基部が著しく磨減しているのは着柄によるものか。89も刃部欠損し、両側縁に抉りを持つ。表面に原

礫面、裏面に打割面を広く残している。90は非常に大型の石斧の基部とみられる。表面に原礫面を残すが、非常に平滑であり、磨石等からの転用が考えられる。

91・92は分銅形である。刃部と基部のサイズが拮抗するが、側縁部の挟りはそれほど深くない。91は折損した刃部を再生している可能性がある。92は片岩の板石を使用する。刃部は鈍角であり、石錘とするべきかもしれない。

93は石銚状の特異な石斧である。刃部はスベード形で比較的鈍角だが、右側縁を折損している可能性がある。胴部との境には浅い挟りを持つ。片岩製で、表面に平滑な原礫面を広く残している。

磨製石斧 (第588図94～第589図113)

94～100は断面楕円形～レンズ状の乳棒状石斧である。94～96は刃部欠損する。94は刃部方向への開きが弱く、表面に極めて平滑な原礫面を残すことから、磨石の可能性がある。95は基部側が平滑であるのに対し、胴部中段にはあばた状の叩打痕を残している。96は側縁部が平滑で光沢を持つのに対し、表裏ともあばた状の叩打痕を多く残している。いずれも着柄に伴うものか。97は板状節理の石材を用い、側縁部に剥離を残しつつ表裏、とりわけ刃部に研磨を施すもので、撥形の打製石斧を再加工したものとも解される。98は刃部の右側縁のみが残存する。研磨は良好である。99は胴部中段から折損した石斧を簡易に再生したものであろうか。100は胴部中段のみが残存する。

101～107は定角形の磨製石斧である。101は胴部中段から基部側が欠失し、刃部の左端を除き折損している。研磨等、全体の造りが精緻であるのに比して刃部のラインが不自然に歪んでいる。刃部が破損したものを再加工したものであろう。102は基部に二次的な叩打痕を持つほぼほぼ完形品とみられ、非常に肉厚な石斧である。全体がオレンジ色に変色しており、亀裂を生じていることから、二次的な火熱を受けている可能性がある。

103は基部右側縁を折損する。全体に研磨の行き届いた優品で、胴部は高さとも幅が拮抗する。104は刃部右側縁のみ残存する。刃部が非常に鈍角で、胴部が平滑であるのに対し刃部にはあばた状の叩打痕が残ることから、敲石的に転用したか、破損した刃部を再生しようとして未遂に終わったものであろうか。105は胴部表面と右側縁部が残存する。刃部側の破断面に細かな剥離が集中することから、破損後に敲石として転用したものと考えられる。106は基部のみが残存する。107は折損した基部を磨石として転用したものと考えた。基部末端より破断面側が薄くなっていることから、くさび状の小型石斧として再生しようとした可能性がある。

108～112は小型精製の磨製石斧で、いわゆる「玉斧」である。多くは断面定角形で、緑色・青灰色等、透明感のある石材を用い、入念に研磨している点に特徴がある。108は刃部のみ残存する。白色から淡紅色に変色し、非常に細かな亀裂が生じていることから、二次的な火熱を受けている可能性がある。109は基部のみ残存する。破損後、数回の打撃を加えており、再生を試みたか、転用した可能性がある。110は基部末端を欠損する。暗緑色の非常に美しい石材を用いている。111は基部のみ残存する。112は完形品である。丸刃で、研磨は良好だが、面取りがやや粗い。

113は緑色・水滴形の礫に研磨を加えたもので、石斧の範疇からは外れるものである。

砥石 (第590図114～第593図164)

114～116は緑泥片岩の板石を両面使用するものである。いずれも被熱しており、赤変がみられる。114・116は浅いながらも凹面を形成しており、石皿片と考えられるものである。

117～164は本来の砥石のイメージに近いものであろう。一部に安山岩を含むが、主として砂岩系の石材を使用しており、石器や骨角器、玉類の製作に使用したと思われる。また、敲石や凹石に転

用される例も多く、多用途石器としての性格も強い。

118・119はいずれも第586号土壌から出土したもので、石材も共通しており、同一の母岩に由来するものであろう。大型の礫を使用する置き砥石で、いくつかの使用面が切り合っており、また被熱により全体に赤変している。120も置き砥石であろう。表裏ともに片減りの使用面を持ち、断面三角形となっている。

121～148は手に持って使用するもので、大半は自然礫を整形せずに使用している。135は結晶片岩製で、扁平棒状の石材を適当な大きさに切断して使用したものとみられ、石剣の一部とも考えられる。

周縁部に細かな叩打がみられる136・144や、H字状の145は、用途に合わせてある程度の整形が行われた可能性がある。138・143・145・146は薄板状で断面紡錘形の石包丁様石器と呼ばれるものである。

149～162は有溝砥石である。多くは薄板状で、片面ないし両面に溝状の使用痕を残す。骨角器や玉類の製作に使用したものであろう。154～161は石包丁様石器の主軸線に沿って溝を設ける。

163は小破片で、石包丁様石器の一部であろう。

164は異系の砥石で、鶏卵形の礫の一端にくびれを持つ。

敲石（第594図165～第595図181）

165は石皿片を転用したものとみられ、表面に凹孔を持つ。二等辺三角形の底辺および片方の等辺に複数回の打撃を加えている。166～171は楕円形の磨石の長軸両端ないし一端に打撃を加えている。172・177は石棒片で、主に側縁部に打撃を加えている。175・176は定角形磨製石斧の破損品を転用したものである。

凹石（第596図182～185）

石材の平坦面に凹孔を持つものである。182・183は扁平な礫の中央に凹孔を持つもので、台石

や石皿を転用したものである。184は砥石からの転用ないし共用である。185は楕円形の軽石の表面に舟底状の凹部を持ち、裏面中央に凹孔を持つ。やはり砥石からの転用であろう。

磨石（第597図186～第606図305）

他の石器から転用したり、逆に他の石器の素材となったりする例が多く、とりわけ敲石や凹石との境界は極めてあいまいで、多くは叩打痕や凹孔を伴っている。不定形なものも多いが、使用が進んだものについては小判形や円形等に定型化するものも多くみられ、一部はあらかじめ整形して使い始めている可能性がある。

186は有脚の石皿片からの転用である。187は置き砥石からの転用とみられ、右側縁部に舟底状の凹部を持っている。188は有溝砥石からの転用である。190は小型の石皿から転用したものとみられ、表面が緩やかな凹面となっている。

193～197は平面観が三味線胴形で、断面も定角形となっている。211～233は平面観円形で、側縁部も使用することで断面長方形～定角形となっている。

多くは表裏二面＋側縁を使用面とするが、187・205・235・236・242・243・250等は3面使用のタイプである。

敲石として使用される場合の使用痕は多く長軸両端ないし一端に残り、あばた状の叩打痕が密集するタイプが大半である。237・246・247・280は周縁部から中央に向かう複数の剥離を伴っており、使用方法が異なっている可能性がある。

使用面は一様に平滑であるが、197・261・280・291・292等は光沢を持った鏡面となっている。磨製石斧や精製石棒等の製作に用いたものか。

190・192・197・201・218・223・270は表面がわずかに赤化している。焼土の付着や、石器そのものが被熱している可能性もあるが、土器や土製品に使用する赤色顔料を粉末化する作業に由来するものも含まれるであろう。

石皿 (第607図306～第611図343)

加工の程度により分類し得るが、凹面になるまで使い込まれたものも多い。小破片表裏に凹孔を形成するものがしばしばみられ、使用時における凹石との親和性が伺われる。

306～310・312・316・317・319・320・323～326等は扁平な自然礫に凹面を持つものである。凹面の成因は、長期の使用に伴うものか、あらかじめ整形が行われたものかは不明である。

311・318・321・322・327等は扁平な自然礫をそのまま使用して凹面を持たないものである。

337～343は板状節理の石材を使用するもので、ごく浅い凹面が存在する。

328～331・336等は側縁部に加工を持つもので、自然礫をあらかじめ整形して使用している。加工の程度はまちまちだが、336は側壁が垂直に立ち上がっており、箱状の整形が行われたものである。なお、磨石に転用した第597図186を除けば、有脚の石皿は出土していない。

台石 (第612図344～346)

いずれも枕状の自然礫の両面に平滑な使用面を持つもので、石皿のような凹面を形成せず、使用面の面積も小さい。用途としては石皿と同様の食物加工や磨製石器製作時の作業台等が考えられる。また、345には赤色の顔料の付着がみられる。

軽石類 (第613図347～359)

遺跡から出土した軽石を一括した。石材の性質上、人工的な穿孔等の見分けがつきにくい、自然礫の可能性もあるものも含め掲載している。以下、人工物であることが明確なものについて記述する。

347・348・350は打割面を平坦に整形するもので、350は長軸の一端に未貫通の孔を持つ。357は円形で中央に貫通孔を持つ。358は楕円形で長軸一端に貫通孔を持つ。354は両面を磨面とする。359はカツオブシ形で両面を磨面とし、断面レンズ状となる。

石錘 (第614図360～373)

360～366は小判形の礫をある程度研磨整形しており、長軸方向に全周するスリットを持つ。368・369は礫の長軸両端に研磨による挟入を持つ。

370・371は長軸両端に打撃による挟入をつくり出している。

372は礫の長軸末端と両側縁に打撃を加えるもので、十字に紐掛けしたものであろう。373は縦長薄片の長軸両端と両側縁に打撃を加えたもので、スクレイパーからの転用品とも解される。

石棒 (第614図374～第615図388)

374は大型の石棒頭部である。頭部は平面観台形で、横断面は円形、胴部との境に明瞭な段を持つ。375も石棒頭だが、表面剥離する。やや扁平な製品で、胴部との境に段を持つ。

376は両頭の石棒である。断面楕円形で、胴部と頭部の境に緩やかな段を持つ。377は扁平な石棒で、頭部に剥離を持つほかはほぼ完形である。頭部から胴部中段にかけて被熱による赤化と黒色付着物がみられる。

378～384は胴部である。380～383は緻密な石材を入念に研磨した精製の石棒だが、他は原礫の荒々しい質感を残している。379は著しい被熱によって白色に変化し、赤化が打割面にも及んでいる。382・383にも赤化がみられる。379は頭部との境界付近で、平行沈線を巡らせている。

385～387は精製石棒の基部で、多段の沈線を巡らせる。388は未成品とみられる。側縁からの打撃で蛇頭状の頭部をつくり出して胴部との間に段を形成し、部分的に研磨を開始している。

石剣 (第616図389～397)

石棒のうち、両側縁に稜線をつくり出しているもの、胴部著しく扁平なものを石剣とした。389は完形品で、蛇頭状で側縁のみ胴部との境に段を持ち、全体に被熱している。390・391は線刻文様を持つ石剣である。390は頭部平面観台形で胴部との境に明瞭な段を持って平行沈線を巡らせる。

391は蛇頭状で、頭部の表裏にX字を描き、先端部に平行沈線を巡らせる。

393は大型の石剣頭部で、胴部との境にごく緩やかな段を持つ。392も頭部で、緩やかな段を持つ蛇頭状である。

394は扁平な無頭の石剣で、再生品の可能性もある。

395・396は緻密な石材を入念に研磨する精製の石剣で、断面レンズ状である。396は基部付近まで残存し、両側縁に刻みを持つ。

397は胴部から基部で、扁平だが側縁の稜線は目立たない。

独鈷石（第617図398～401）

398・399は完形品である。398は両端を入念に研磨し、中段挟入部の上下に鐔状の隆起をつくり出している。399は挟入は明瞭だが鐔状の隆起を持たない。400は胴部で、鐔状の隆起を持つ。打割面に打撃を加えており、敲石への転用がみとめられる。401は胴部中段のくびれ部分と考えたが、石棒頭の可能性もある。

石冠（第617図402・403）

402は有頭の石冠である。頭部は球状で胴部との境に緩やかな段を持つ。胴部は側面観三角形で、底面に緩やかな反りを持っている。403は無頭の石冠と考えたが、異形の磨石の可能性もある。断面台形で、底面に反りを持つ。

岩版（第618図404～407）

404は四隅の張った長方形の岩版であったとみられる。裏面剥落する。コーナー部分に貫通孔を持ち、明瞭に分離したI地文を描いている。

405は三味線胴形の岩版であったものとみられる。表面は菱形の区画内部に紡錘文を描くモチー

フを重畳させ、上部には円孔+弧線文で簡略な顔面表現とみられるものを描いている。裏面には渦文が並ぶ。406・407も岩版片で、いずれも線刻文を描く。

垂飾（第618図408～422）

408・409は異形の勾玉である。408は長方形で胴部右側縁にV字の挟入を持ち、長軸一端を片面から穿孔して、多数のスリットを設ける。409は楕円形の頭部にJ字形の胴部を付す。頭部は両面から穿孔して、対弧状の線刻文とスリットを設けている。

410～416は扁平な碟の長軸一端を穿孔するものである。いずれも胴部は平滑に研磨整形しており、両面から穿孔している。

417は楕円形の原石の中段を片面穿孔しており、この部分から欠損している。本来は緑色の石材であったとみられるが、被熱により白変している。

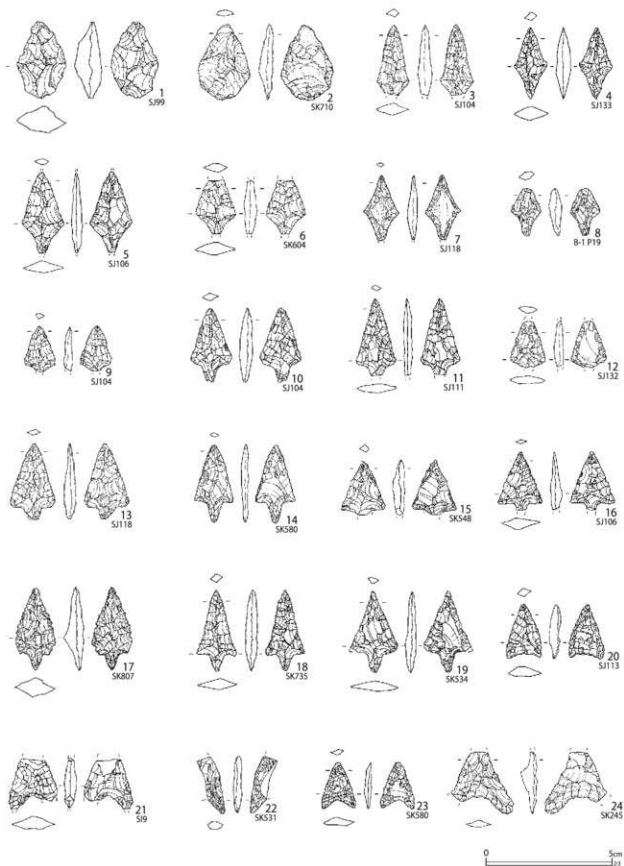
418は扁平な石材を多角形に面取りし、中央部を両面から穿孔している。

419～421はヒスイの玉である。いずれも原石を多角形に面取りした後に研磨整形しており、419・420は片面、421は両面から穿孔している。420は大部分が白色に変化しており、被熱している可能性がある。

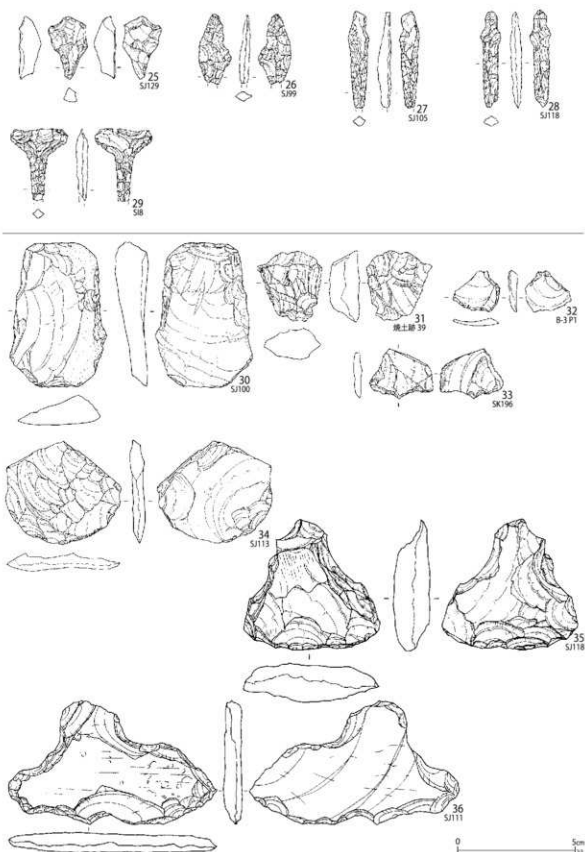
422は弧状の製品の一部で、玦状耳飾りの再生品とも考えられる。一端を両面から穿孔しているが、位置がずれており、このために破損したものとみられる。

不明品（第618図423）

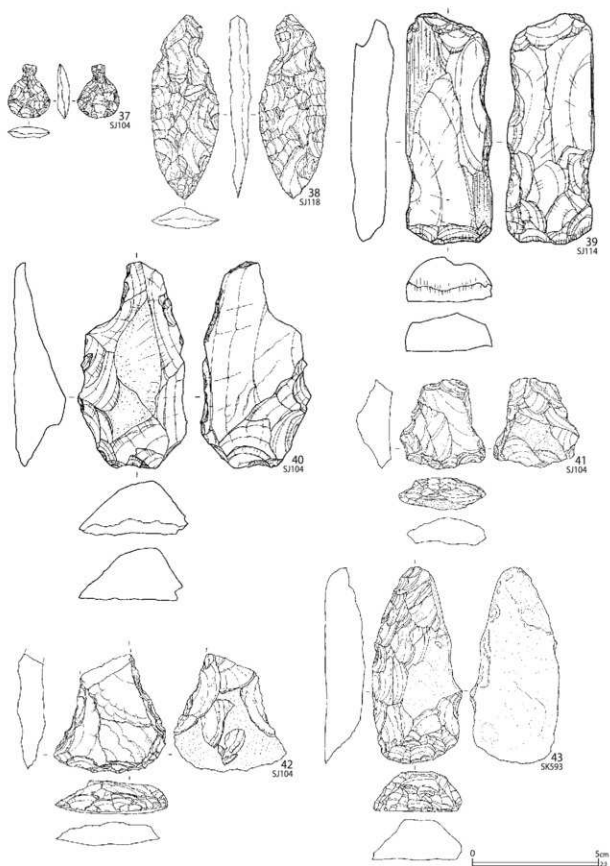
棒状の石材が節理に沿って割裂したもので、長軸一端に複数回の打撃を加えている。敲石か、粗製の石棒とも解し得る。



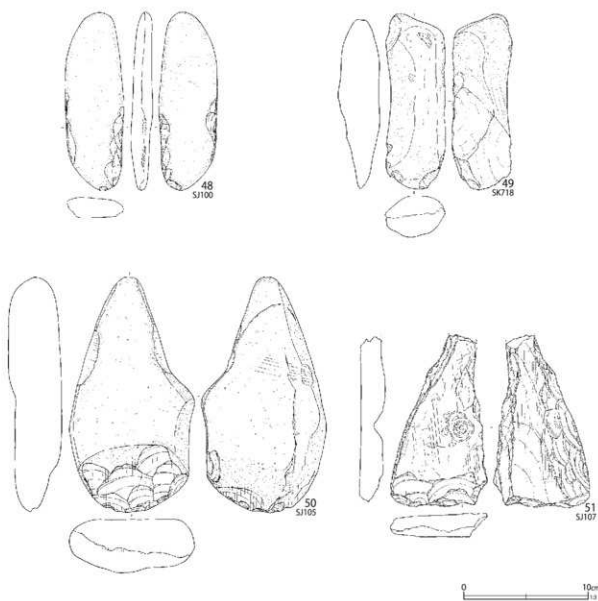
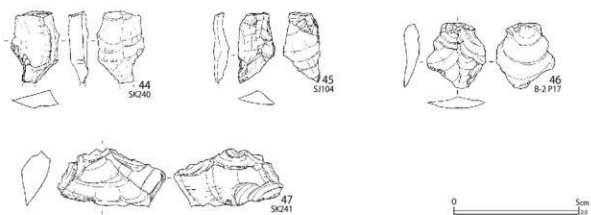
第579图 遺構出土石鏃



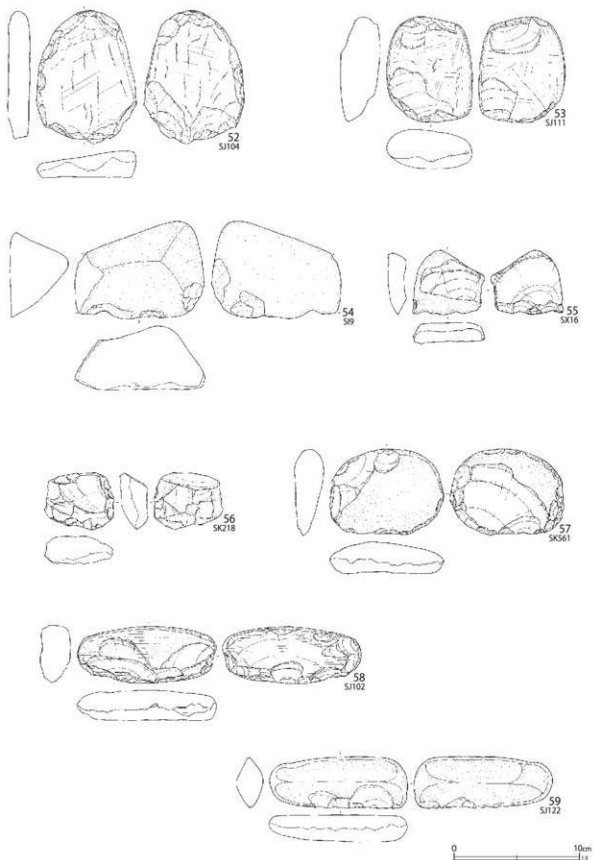
第580図 遺構出土石錐・スクレイパー（石匙）



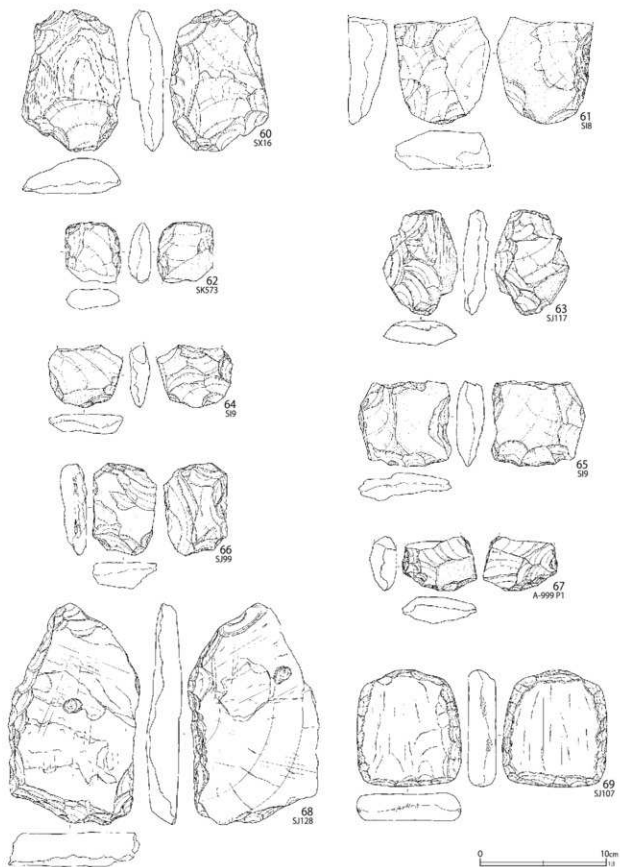
第581図 遺構出土スクレイパー（石匙・石篋）



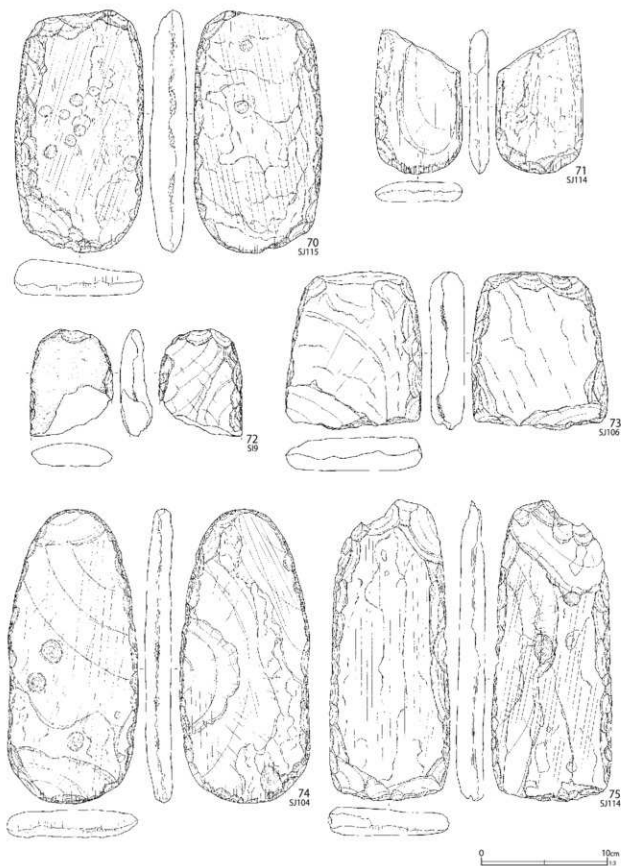
第582図 遺構出土二次加工剥片・礫器



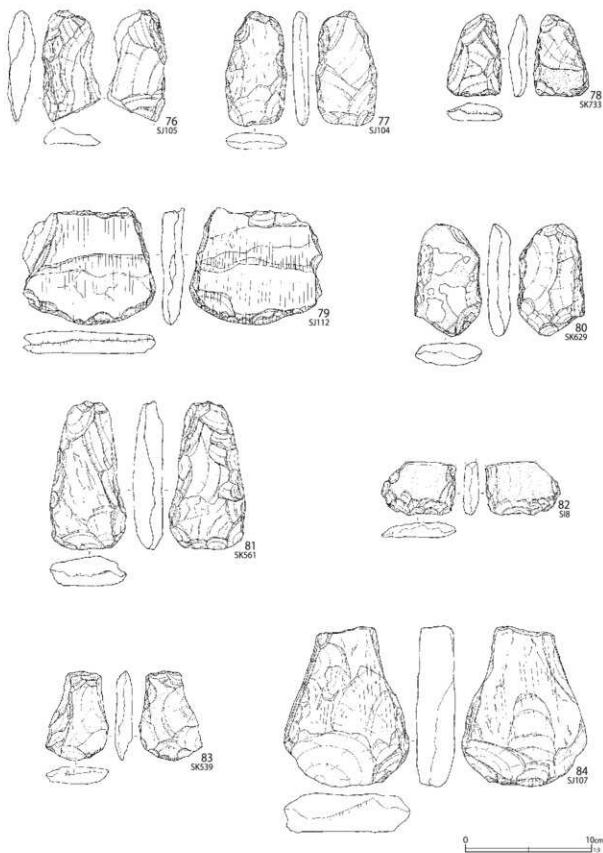
第583図 道構出土石器



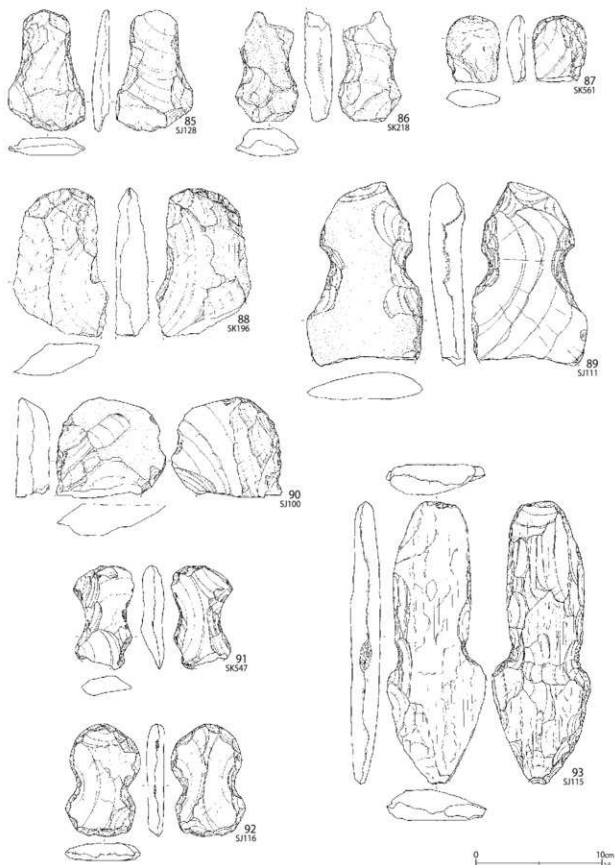
第584图 遺構出土打製石斧（1）



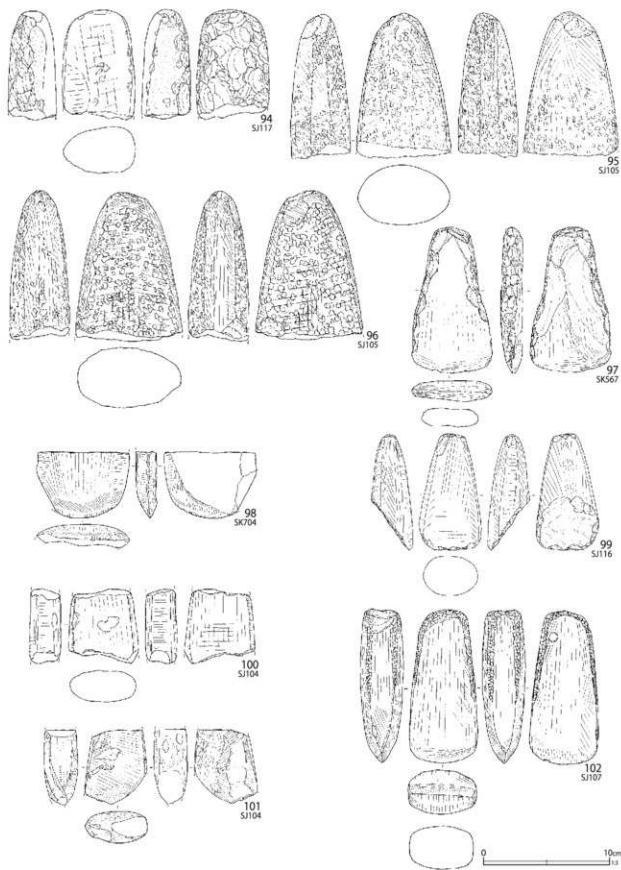
第585図 遺構出土打製石斧（2）



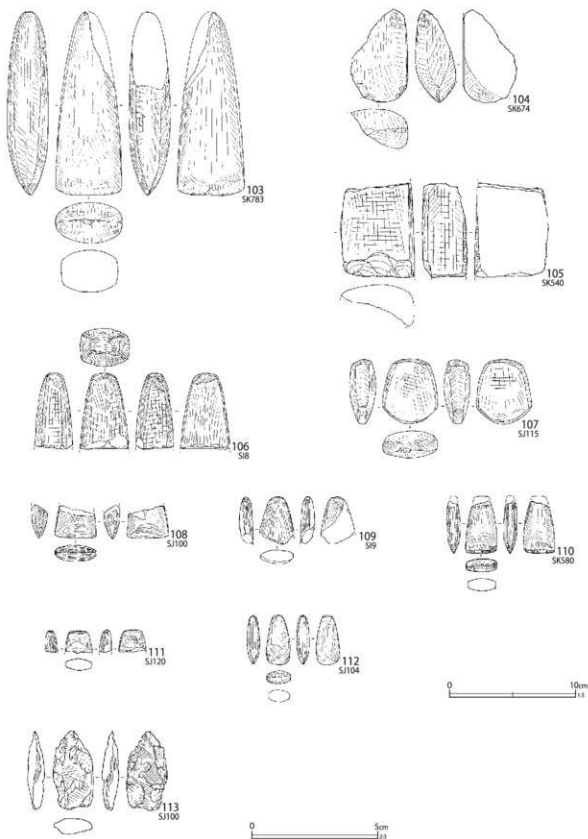
第586図 遺構出土打製石斧（3）



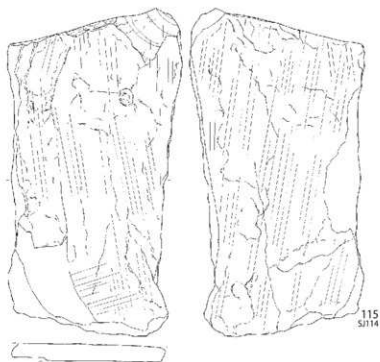
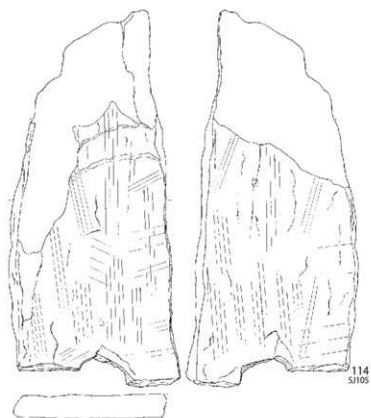
第587図 遺構出土打製石斧（4）



第588図 遺構出土磨製石斧 (1)



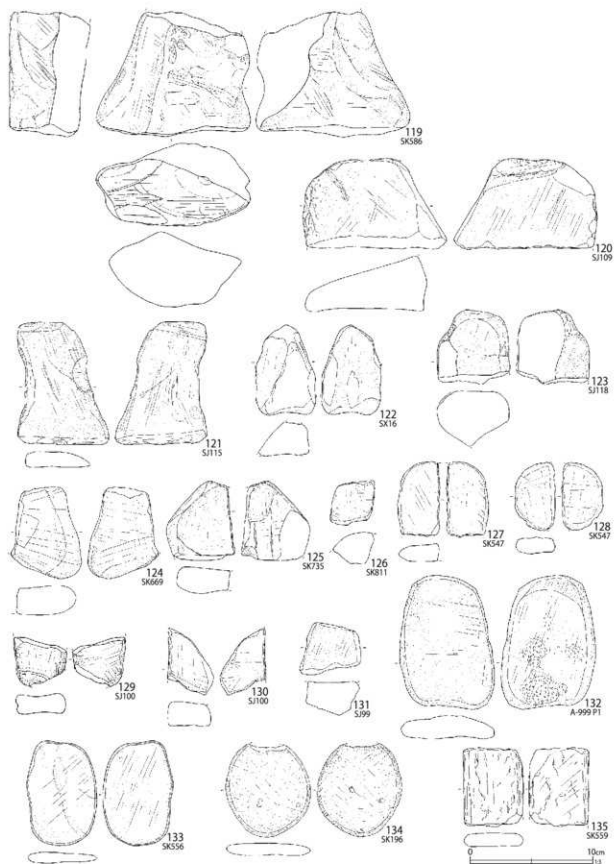
第589図 遺構出土磨製石斧（2）



第590図 遺構出土砥石（1）



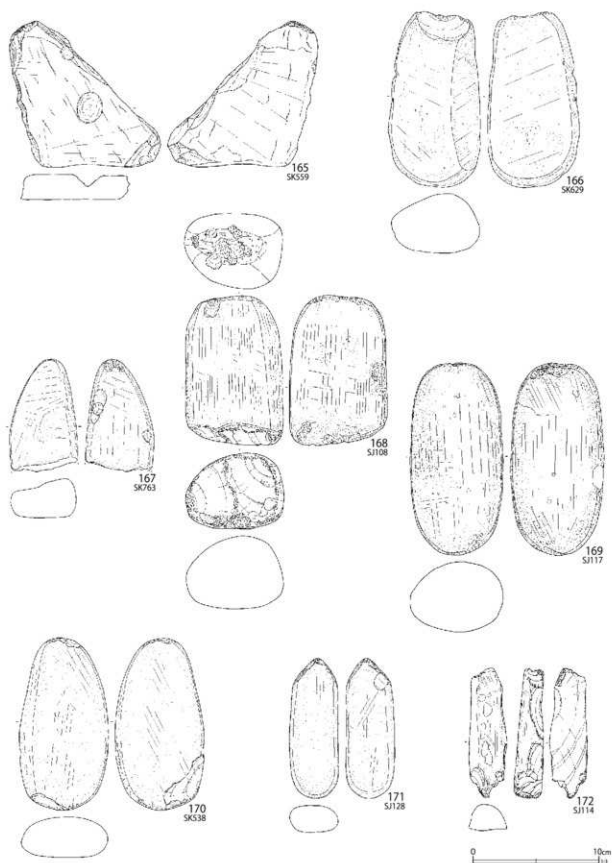
第591図 遺構出土砥石（2）



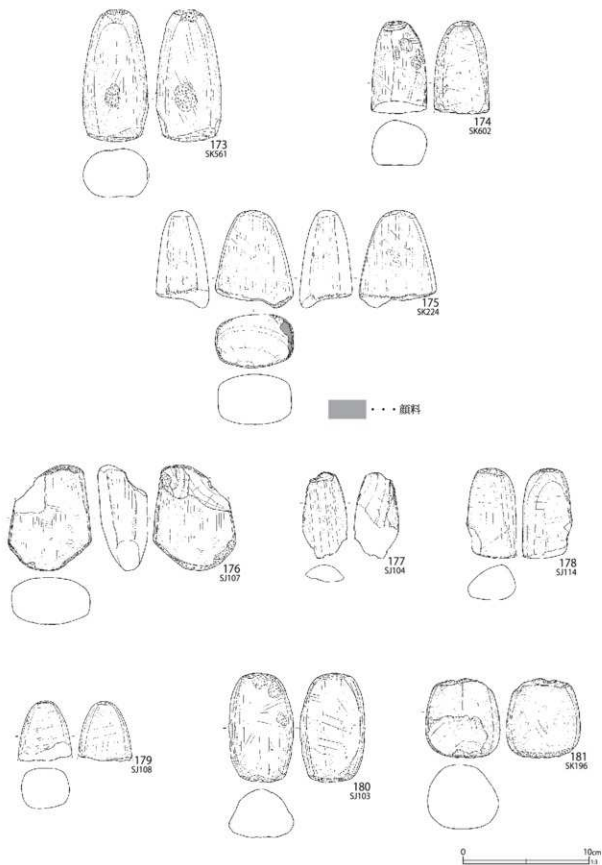
第592図 遺構出土砥石 (3)



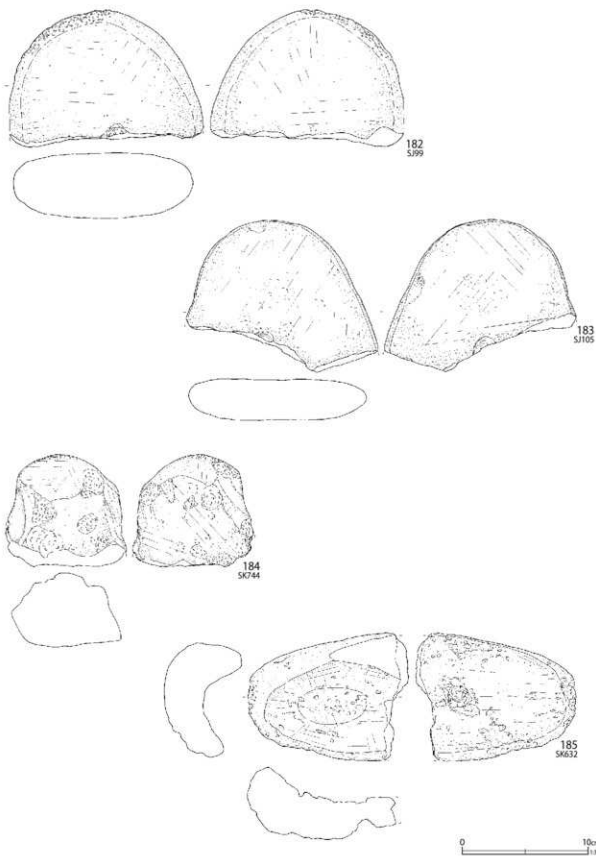
第593図 遺構出土砥石（4）



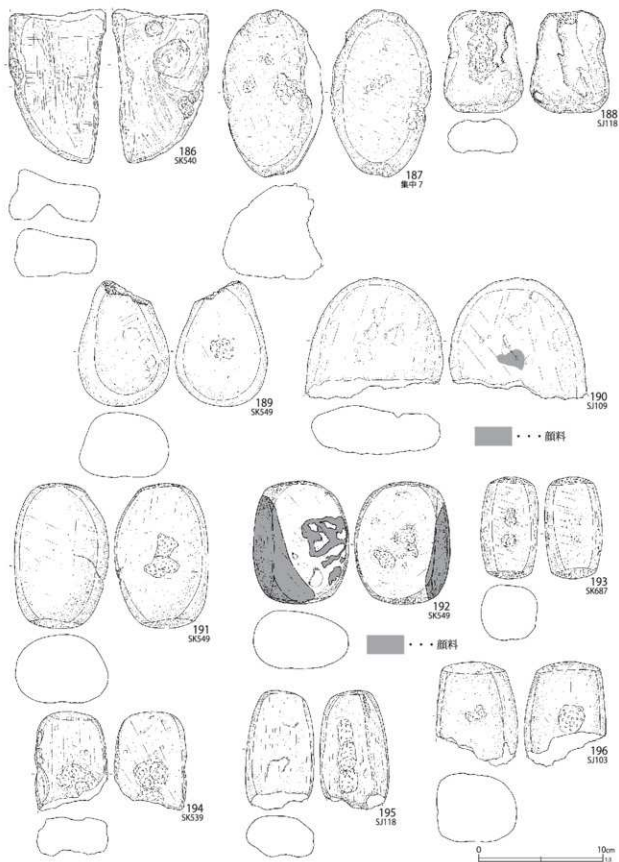
第594図 遺構出土敲石 (1)



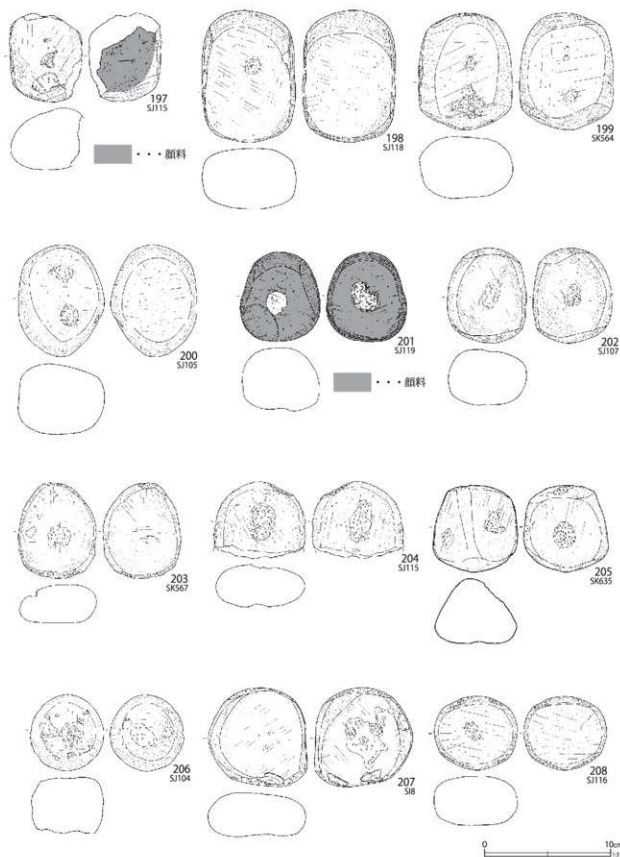
第595図 遺構出土石器 (2)



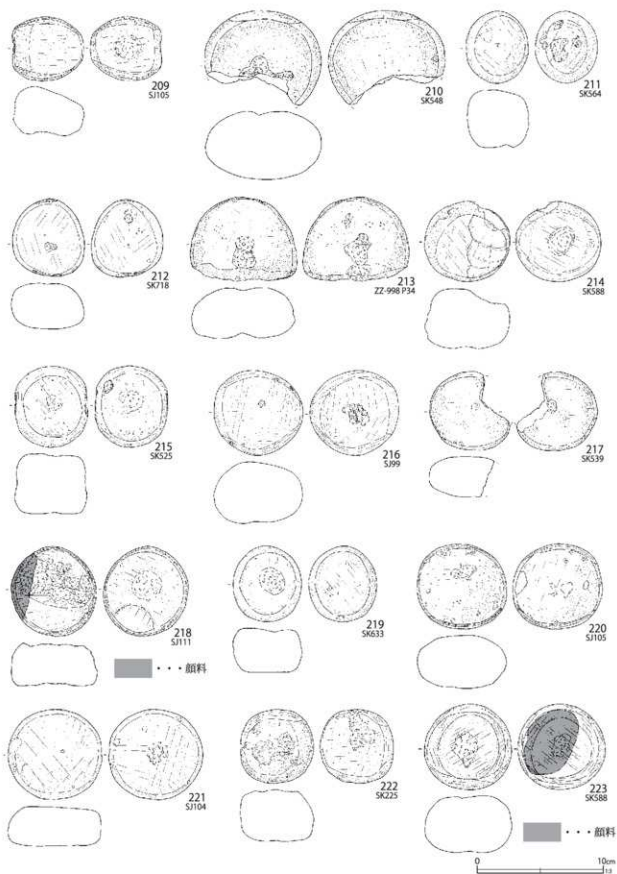
第596図 遺構出土凹石



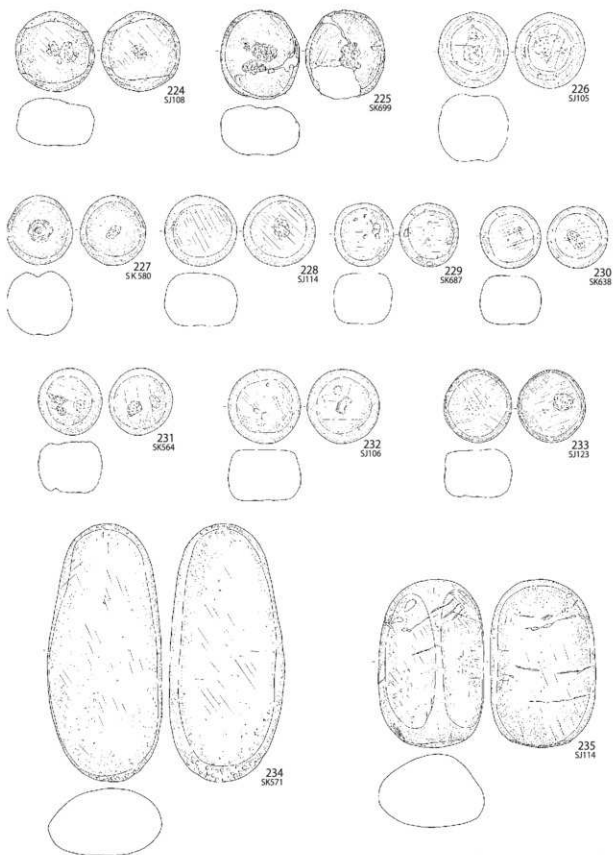
第597図 遺構出土磨石 (1)



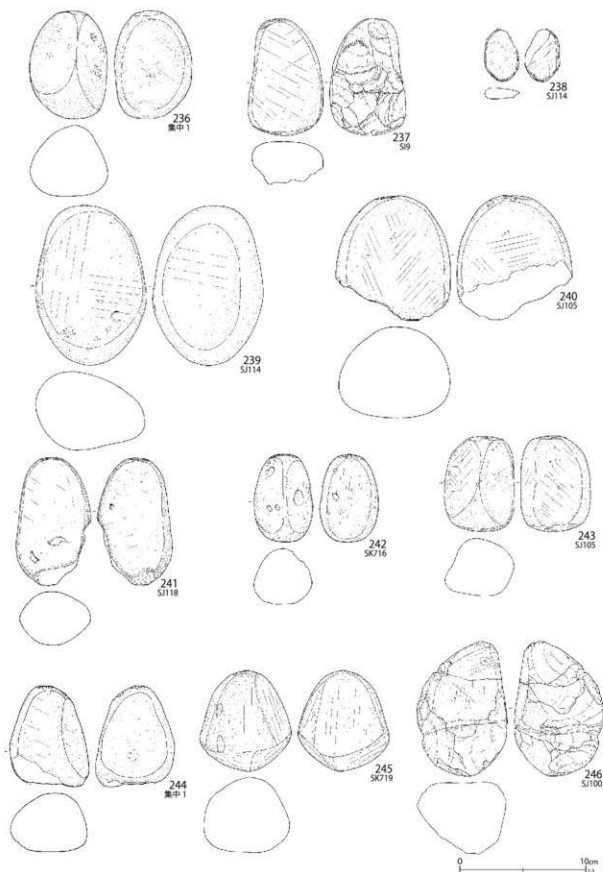
第598図 遺構出土磨石 (2)



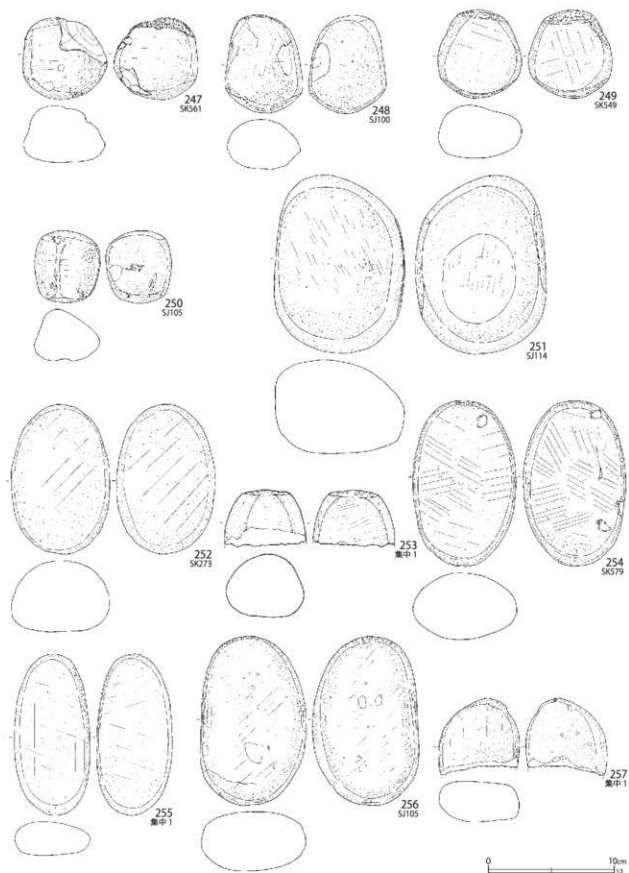
第599図 遺構出土磨石（3）



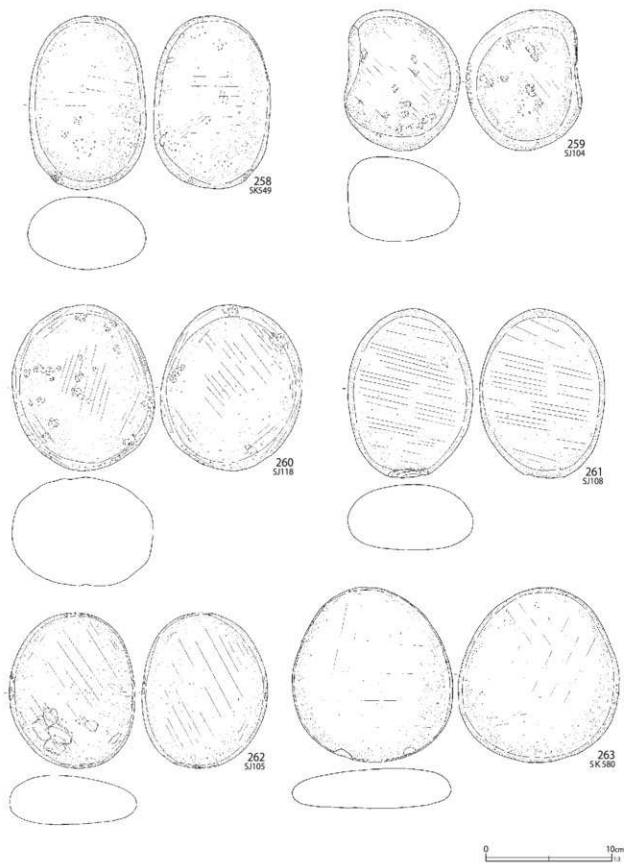
第600図 遺構出土磨石（4）



第601図 遺構出土磨石 (5)



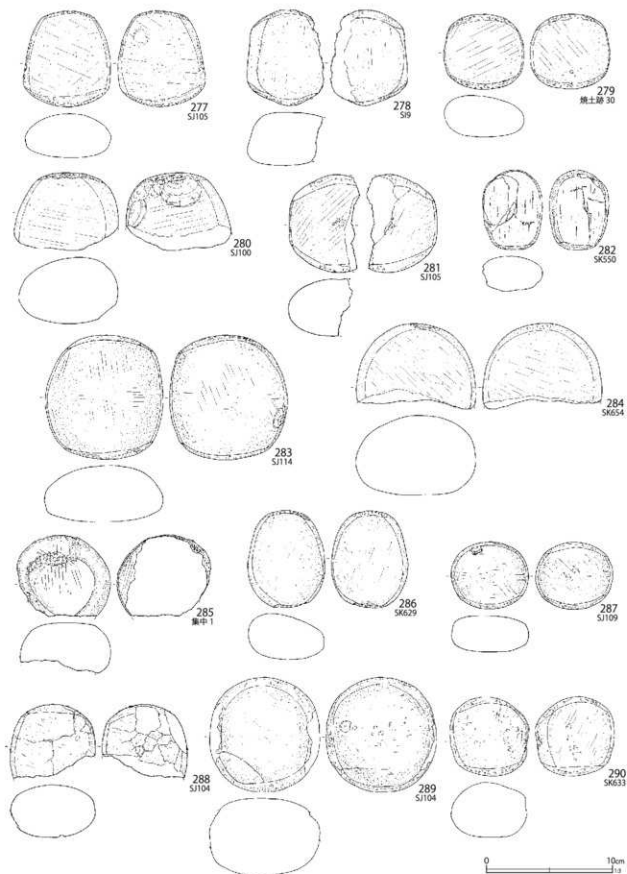
第602図 遺構出土磨石（6）



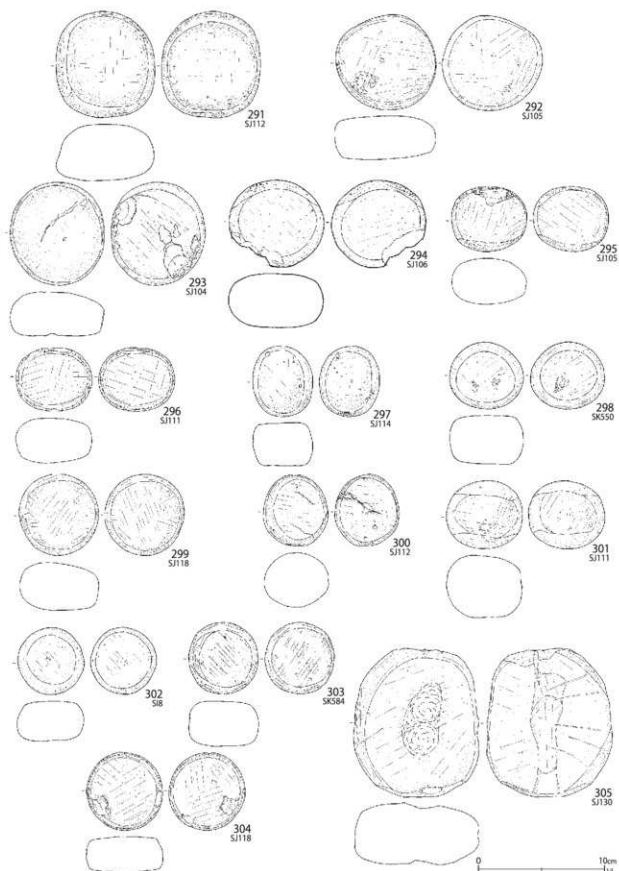
第603図 遺構出土磨石 (7)



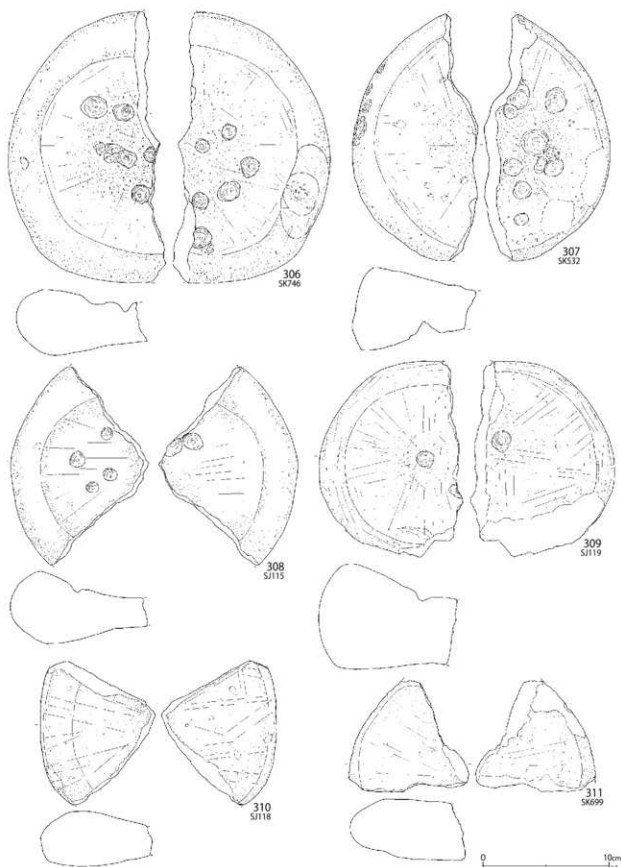
第604図 遺構出土磨石 (8)



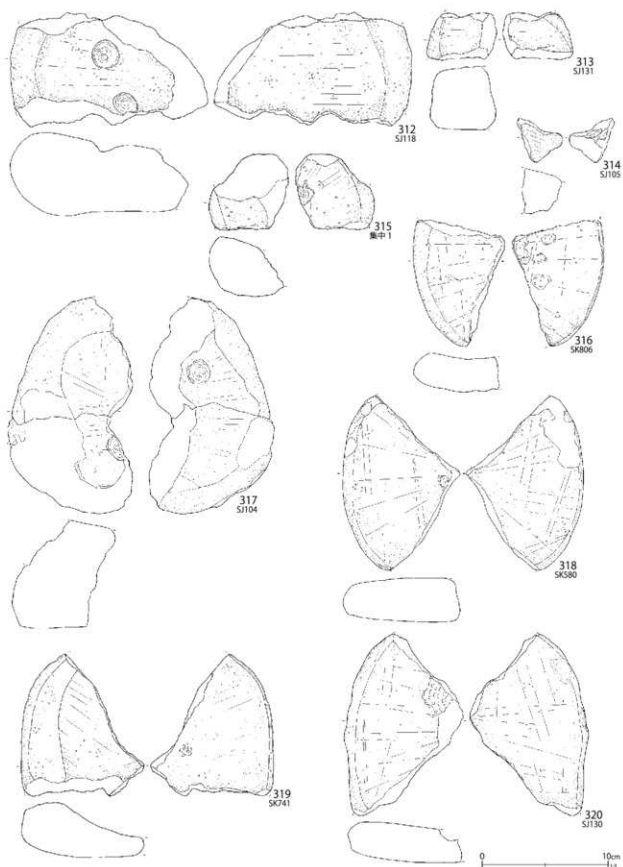
第605図 遺構出土磨石 (9)



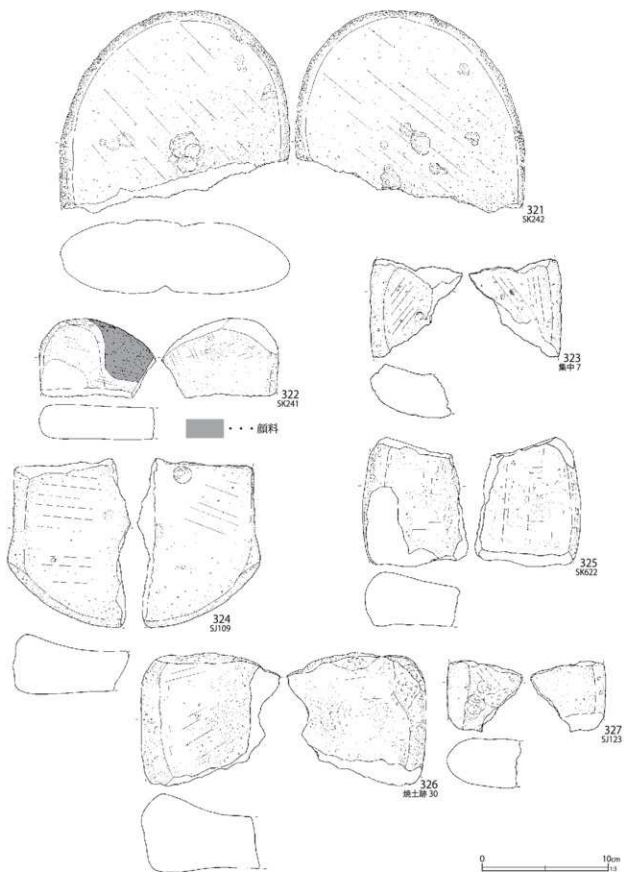
第606図 遺構出土磨石 (10)



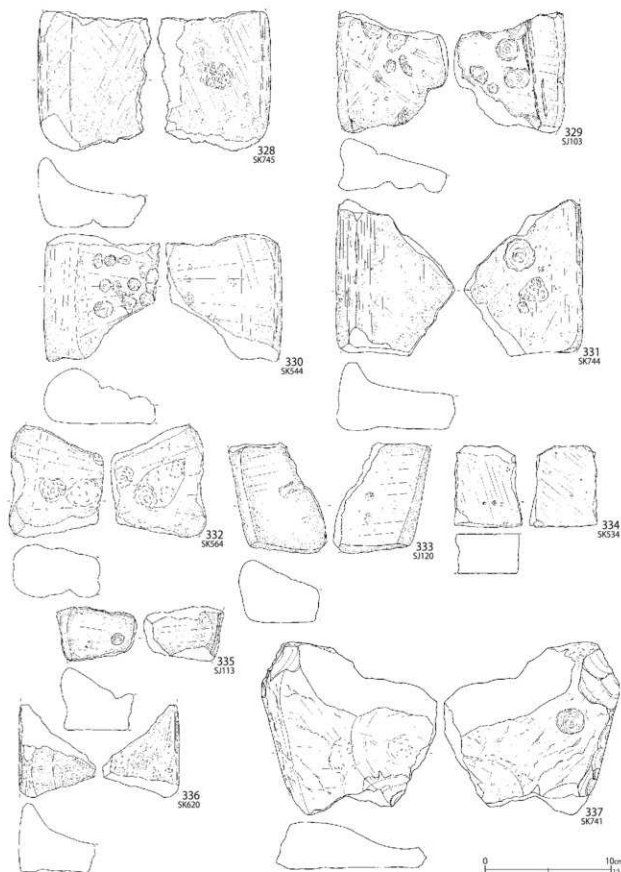
第607図 遺構出土石皿 (1)



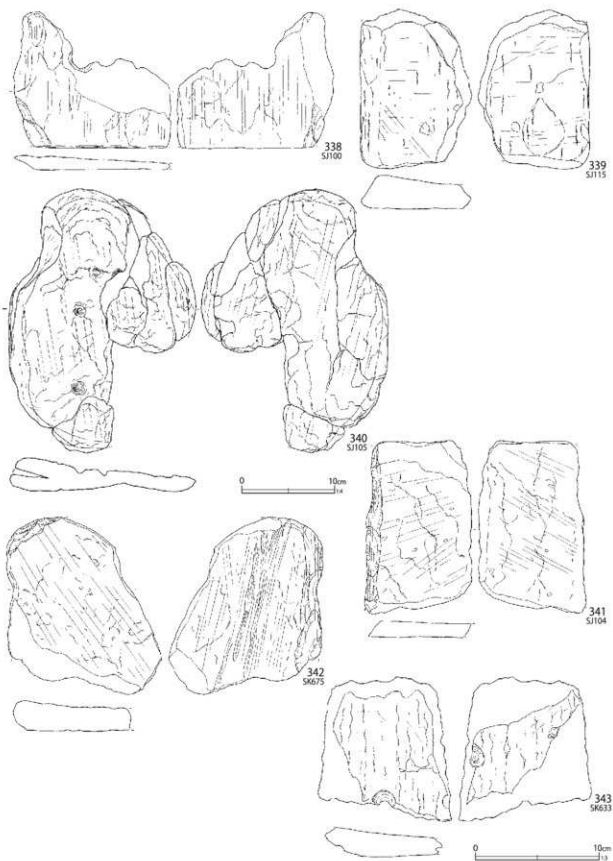
第608図 遺構出土石甗 (2)



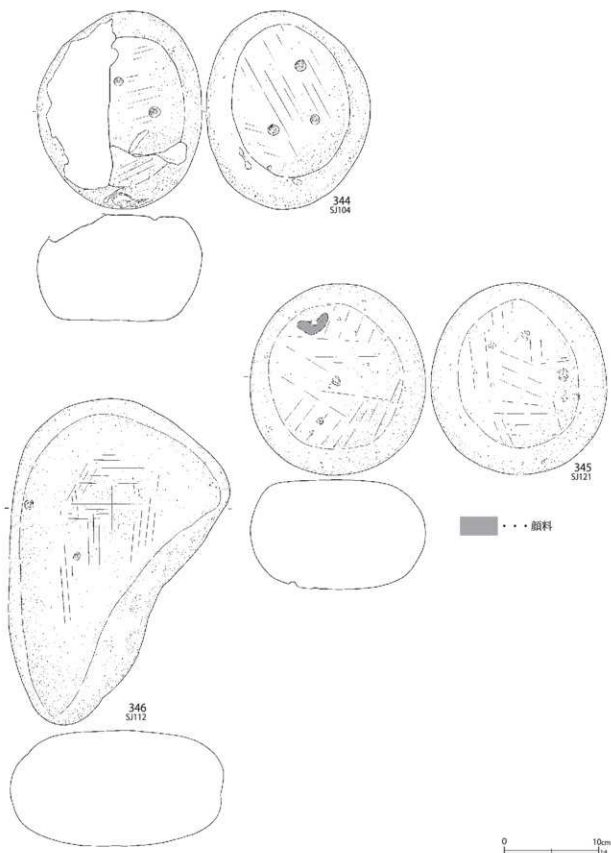
第609図 遺構出土石皿 (3)



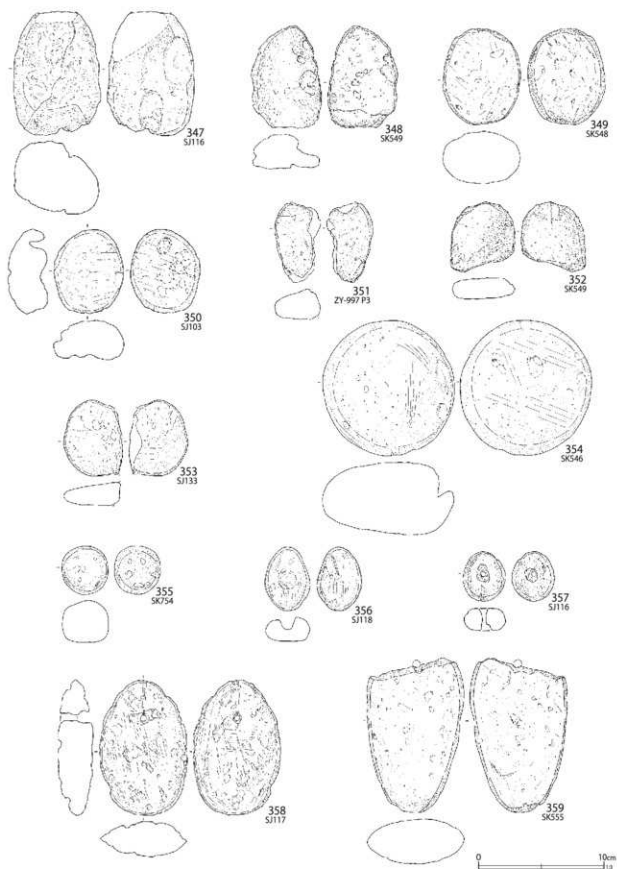
第610図 遺構出土石皿 (4)



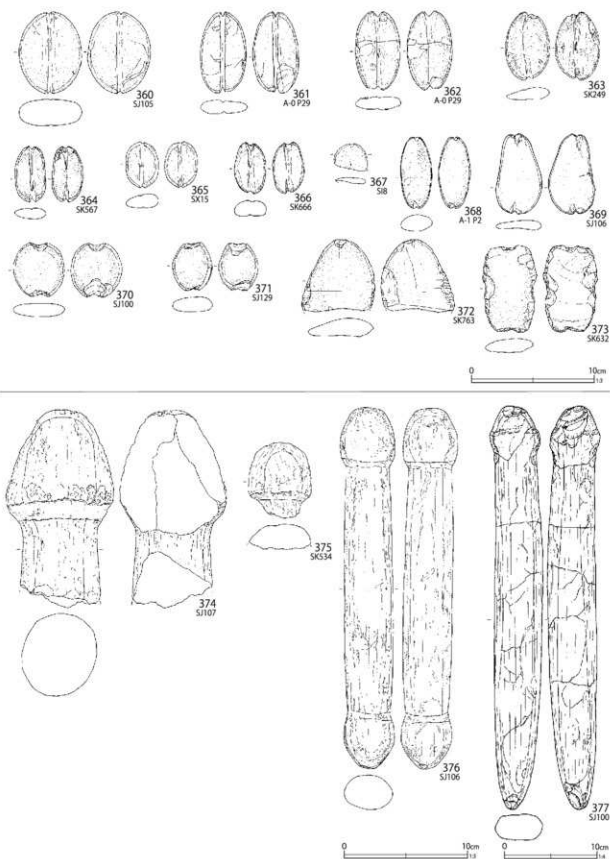
第611図 遺構出土石皿（5）



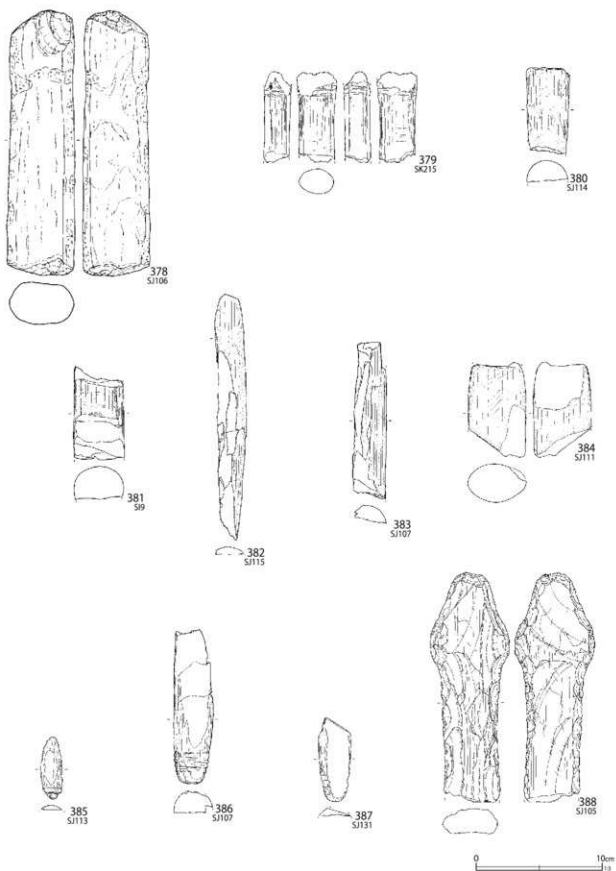
第612図 遺構出土台石



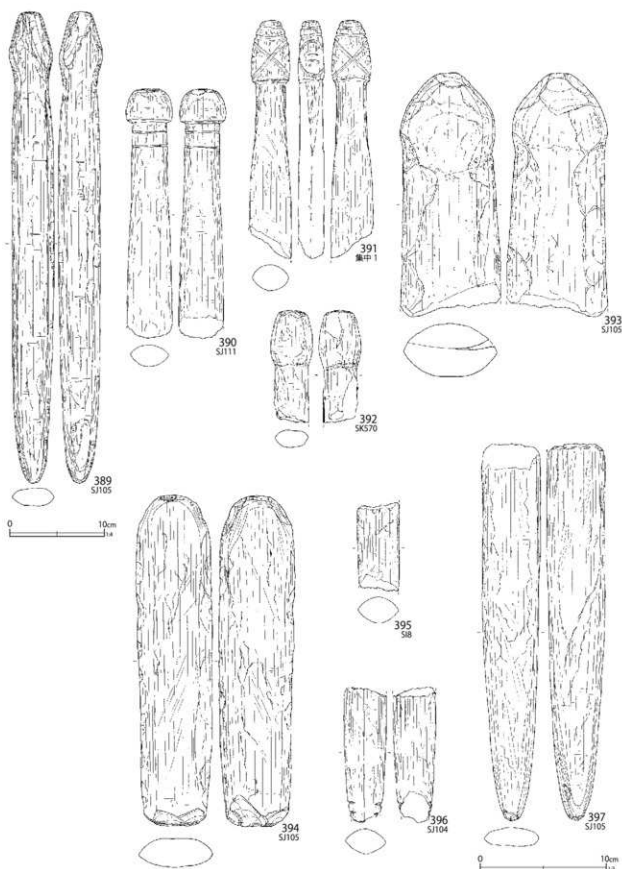
第613図 遺構出土軽石類



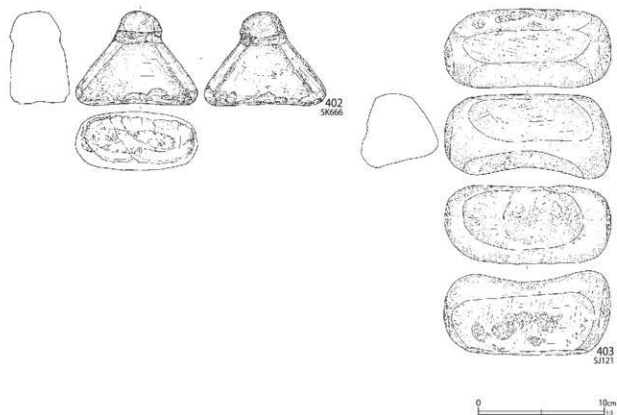
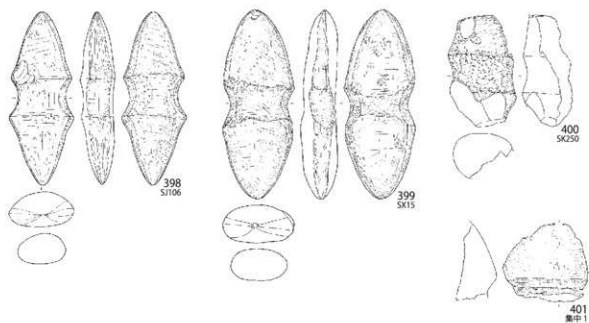
第614図 遺構出土石錘・石棒



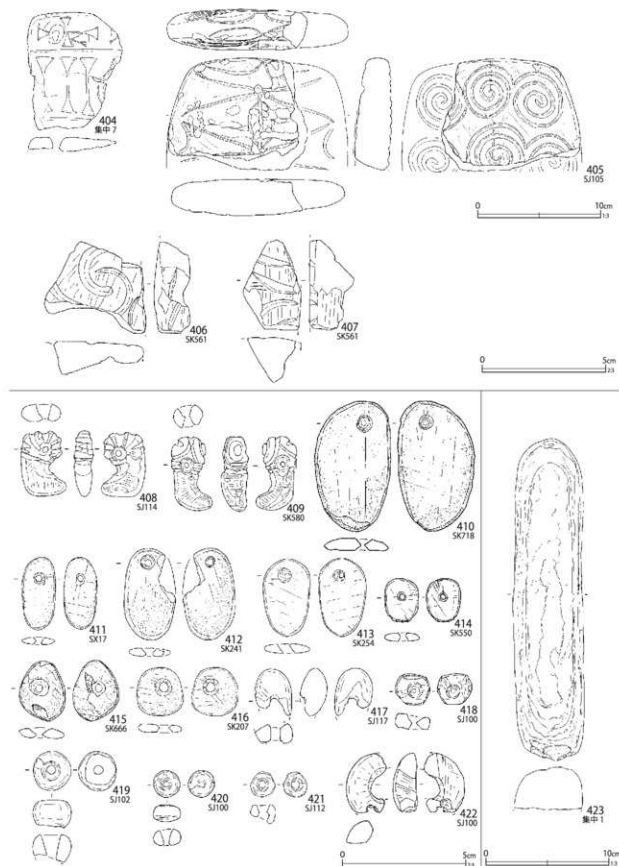
第615図 遺構出土石棒



第616図 遺構出土石剣



第617図 遺構出土独鈎石・石冠



第618図 遺構出土岩版・垂飾・不明品

第36表 遺構出土石器観察表(1) (第579～582図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
1	SJ99	石鏃	チャート	3.0	1.9	1.1	4.7			(未製品)	414-2
2	SK710	石鏃	チャート	3.0	2.0	0.6	2.9			(未製品)	
3	SJ104	石鏃	チャート	[2.8]	1.3	0.6	1.6	○			
4	SJ133	石鏃	チャート	2.8	1.3	0.6	1.4				
5	SJ106	石鏃	チャート	[3.2]	1.6	0.5	1.6	○			
6	SK604	石鏃	チャート	[2.1]	1.6	0.5	1.5	○			
7	SJ118	石鏃	チャート	[2.5]	1.4	0.4	1.0	○			
8	B-1 P19	石鏃	チャート	1.9	1.2	0.5	0.8				
9	SJ104	石鏃	チャート	[1.8]	1.3	0.4	0.6	○			
10	SJ104	石鏃	チャート	3.0	1.7	0.5	1.7				
11	SJ111	石鏃	チャート	[3.1]	1.6	0.3	1.4	○			
12	SJ132	石鏃	黒曜石	[1.9]	1.4	0.4	0.9	○			
13	SJ118	石鏃	チャート	3.0	1.8	0.5	1.9				
14	SK580	石鏃	チャート	3.1	1.5	0.3	1.0				
15	SK548	石鏃	黒曜石	[2.2]	1.8	0.5	1.1	○			
16	SJ106	石鏃	チャート	[2.3]	1.8	0.4	1.3	○			
17	SK807	石鏃	チャート	3.3	1.6	0.8	2.4				
18	SK735	石鏃	頁岩	3.2	1.6	0.5	1.5				
19	SK534	石鏃	チャート	3.2	[1.9]	0.4	1.8	○			
20	SJ113	石鏃	チャート	2.2	1.4	0.5	1.0				
21	S19	石鏃	黒曜石	[2.0]	1.9	0.5	1.5	○			
22	SK531	石鏃	黒曜石	[2.3]	[1.1]	[0.3]	0.5	○			
23	SK580	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6				
24	SK245	石鏃	チャート	[2.4]	[2.4]	0.6	1.7	○			
25	SJ129	石鏃	チャート	2.6	1.7	0.9	2.8				415-1
26	SJ99	石鏃	チャート	[2.8]	1.4	0.4	1.6	○		石鏃再生品	
27	SJ105	石鏃	シルト岩	[3.9]	0.9	0.6	1.8	○			
28	SJ118	石鏃	シルト岩	3.9	0.9	0.4	1.4				
29	S18	石鏃	頁岩	[2.8]	2.4	0.5	2.4	○			
30	SJ100	スクレイパー	安山岩	5.8	4.1	1.4	33.2				
31	礎土跡39	スクレイパー	チャート	2.8	2.7	1.3	10.3				
32	B-3 P1	スクレイパー	チャート	1.7	2.0	1.0	1.0				
33	SK196	スクレイパー	チャート	2.0	2.7	0.4	1.9				
34	SJ113	石匙	チャート	4.1	4.8	0.6	16.6				
35	SJ118	石匙	頁岩	5.3	5.7	1.6	43.9				
36	SJ111	石匙	緑泥片岩	5.0	8.9	0.8	40.5				
37	SJ104	石匙	黒曜石	2.2	1.6	0.5	1.4				415-2
38	SJ118	縦型石匙	チャート	7.2	2.7	0.9	16.4			石鏃類を欠損後再利用	
39	SJ114	石筥	頁岩	9.3	3.5	1.9	76.6				
40	SJ104	石筥	頁岩	8.2	4.4	2.2	64.4				
41	SJ104	石筥	チャート	3.6	3.4	1.3	14.7				
42	SJ104	石筥	ホルンフェルス	[4.6]	4.4	1.1	29.7	○			
43	SK593	石筥	チャート	7.8	3.6	1.6	55.8				
44	SK240	二次加工剥片	チャート	[2.9]	2.0	0.8	4.0	○			416-1
45	SJ104	二次加工剥片	チャート	2.8	1.5	0.6	2.2				
46	B-2 P17	二次加工剥片	頁岩	2.6	2.3	0.6	2.4				
47	SK241	二次加工剥片	チャート	2.3	4.3	1.2	9.6				
48	SJ100	礫器	安山岩	14.2	4.7	1.8	163.1				416-2
49	SK718	礫器	頁岩	14.0	4.8	3.3	261.2				
50	SJ105	礫器	砂岩	18.7	10.0	4.4	1071.1				

第37表 遺構出土石器観察表(2) (第582～588図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
51	SJ107	礫器	緑泥片岩	[13.8]	7.7	2.1	252.1	○		石皿の転用	416-2
52	SJ104	礫器	緑泥片岩	10.7	8.0	2.2	240.2				
53	SJ111	礫器	頁岩	8.4	6.8	3.2	265.5				
54	SI9	礫器	安山岩	7.8	[10.3]	5.2	418.7	○			
55	SX16	礫器	凝灰岩	5.2	5.7	1.8	60.9				
56	SK218	礫器	流紋岩	4.5	5.5	2.2	59.8				
57	SK561	礫器	砂岩	6.8	9.1	2.6	206.3				
58	SJ102	礫器	安山岩	4.5	11.1	2.5	186.8		○		
59	SJ122	礫器	砂岩	4.1	11.1	2.2	140.6				
60	SX16	打製石斧	緑泥片岩	11.4	7.9	2.9	297.0			石皿の転用	417-2
61	SI8	打製石斧	砂岩	[8.5]	[7.6]	3.1	236.8	○			
62	SK573	打製石斧	ホルンフェルス	[4.8]	4.5	1.8	50.8	○			
63	SJ117	打製石斧	頁岩	8.4	5.9	2.0	95.0				
64	SI9	打製石斧	頁岩	[5.0]	6.0	1.6	56.8	○			
65	SI9	打製石斧	頁岩	6.8	7.4	2.2	119.4				
66	SJ99	打製石斧	頁岩	7.3	5.1	2.1	86.1				
67	A-999 P1	打製石斧	ホルンフェルス	[4.3]	5.9	2.1	59.1	○			
68	SJ128	打製石斧	準片岩	17.5	10.4	2.8	700.9			石皿の転用	
69	SJ107	打製石斧	絹雲母片岩	9.3	8.3	2.2	328.3				
70	SJ115	打製石斧	緑泥片岩	19.2	10.2	2.9	890.5		○	石皿の転用	418-1
71	SJ114	打製石斧	緑泥片岩	[11.5]	6.9	1.7	225.6	○			
72	SI9	打製石斧	砂岩	[8.6]	6.6	2.6	155.7	○			
73	SJ106	打製石斧	緑泥片岩	12.6	10.8	2.7	588.3			石皿の転用	
74	SJ104	打製石斧	緑泥片岩	23.3	10.3	2.2	802.6			石皿の転用	
75	SJ114	打製石斧	緑泥片岩	23.8	9.5	2.2	759.2		○	石皿の転用	
76	SJ105	打製石斧	緑泥片岩	[8.9]	[4.7]	2.2	88.8	○			418-2
77	SJ104	打製石斧	石皿片岩	9.1	4.9	1.3	87.4				
78	SK733	打製石斧	砂岩	6.5	4.3	1.5	49.5				
79	SJ112	打製石斧	緑泥片岩	9.3	10.5	1.8	271.1			石皿の転用	
80	SK629	打製石斧	砂岩	9.0	5.3	1.8	113.5				
81	SK561	打製石斧	絹雲母片岩	11.9	6.1	2.4	212.2		○		
82	SI8	打製石斧	ホルンフェルス	[4.3]	6.0	1.3	39.7	○			
83	SK539	打製石斧	頁岩	7.2	5.0	1.4	53.4				
84	SJ107	打製石斧	緑泥片岩	12.7	9.9	3.1	564.9				
85	SJ128	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	6.1	1.4	85.5				419-1
86	SK218	打製石斧	流紋岩	[8.7]	5.0	2.2	98.5	○			
87	SK561	打製石斧	粘板岩	[5.3]	4.3	1.5	42.7	○			
88	SK196	打製石斧	安山岩	[11.7]	[7.6]	2.7	251.0	○			
89	SJ111	打製石斧	砂岩	[14.6]	9.1	2.8	425.6	○			
90	SJ100	打製石斧	頁岩	[8.0]	8.7	2.7	196.9	○			
91	SK547	打製石斧	ホルンフェルス	8.2	4.9	1.9	68.0	○			
92	SJ116	打製石斧	緑泥片岩	9.0	6.0	1.4	110.0				
93	SJ115	打製石斧	片岩	22.4	[7.8]	2.4	499.5	○		石棒類の転用	
94	SJ117	磨製石斧	安山岩	[8.6]	5.8	3.9	322.9	○		磨石の転用	419-2
95	SJ105	磨製石斧	砂岩	[11.3]	[7.5]	4.7	590.5	○	○		
96	SJ105	磨製石斧	砂岩	[11.8]	[8.5]	4.7	719.8	○	○	(再生利用加工途中)	
97	SK567	磨製石斧	粘板岩	11.5	6.5	1.7	175.0				
98	SK704	磨製石斧	閃緑岩	[5.2]	[7.2]	[1.6]	95.1	○			
99	SJ116	磨製石斧	緑色岩	9.2	5.0	3.1	186.7			(再生利用加工途中)	
100	SJ104	磨製石斧	砂岩	[6.0]	[5.5]	2.5	158.0	○			

第38表 遺構出土石器観察表(3) (第588～593図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
101	SJ104	磨製石斧	頁岩	[6.0]	[4.8]	2.7	127.6	○	○	(再生利用加工途中) (未製品)	419-2
102	SJ107	磨製石斧	安山岩	12.1	5.5	3.4	395.6		○		
103	SK783	磨製石斧	安山岩	[14.5]	5.2	3.3	343.3	○	○		
104	SK674	磨製石斧	安山岩	[7.3]	[4.5]	3.2	72.9	○	○		
105	SK540	磨製石斧	砂岩	[7.4]	5.8	3.5	205.2	○	○		
106	S18	磨製石斧	閃緑岩	[6.0]	[4.0]	3.0	113.8	○	○		
107	SJ115	磨製石斧	砂岩	5.1	4.4	2.0	76.9		○		
108	SJ100	磨製石斧	蛇紋岩	[2.5]	3.3	1.3	16.3	○	○		
109	S19	磨製石斧	蛇紋岩	[3.7]	[2.7]	1.1	15.7	○	○		
110	SK580	磨製石斧	蛇紋岩	[4.2]	2.5	1.0	20.7	○	○		
111	SJ120	磨製石斧	蛇紋岩	[1.7]	[2.2]	1.0	6.8	○	○		
112	SJ104	磨製石斧	蛇紋岩	3.9	1.9	1.0	13.1				
113	SJ100	磨製石斧	緑色岩	3.1	1.6	0.7	4.4			(定角式磨製石斧未製品)	
114	SJ105	砥石	緑泥片岩	[29.8]	[13.6]	2.5	1210.6	○	○	石重の転用	420-1
115	SJ114	砥石	緑泥片岩	[26.1]	[14.0]	1.9	981.2	○	○	石重の転用	
116	SJ100	砥石	緑泥片岩	[31.7]	11.8	2.2	1316.8	○	○	石重の転用	420-2
117	SJ106	砥石	砂岩	16.7	9.9	5.9	773.8		○		
118	SK586	砥石	砂岩	9.7	9.8	7.3	691.3		○		
119	SK586	砥石	砂岩	[10.0]	12.5	6.6	766.8	○	○	石棒の転用	421-1
120	SJ109	砥石	砂岩	[7.3]	[11.7]	[4.4]	398.9	○	○		
121	SJ115	砥石	砂岩	9.8	7.4	1.3	92.9		○		
122	SX16	砥石	砂岩	[7.2]	[4.9]	[3.0]	100.2	○	○		
123	SJ118	砥石	砂岩	[6.0]	5.9	4.5	184.8	○	○		
124	SK669	砥石	安山岩	[7.4]	[5.7]	2.9	123.2	○	○		
125	SK735	砥石	砂岩	[6.3]	[5.6]	2.3	86.6	○	○		
126	SK811	砥石	砂岩	[3.6]	[3.6]	[2.6]	35.5	○	○		
127	SK547	砥石	砂岩	[6.0]	[3.5]	1.7	39.9	○	○		
128	SK547	砥石	安山岩	5.5	[3.3]	1.4	26.6	○	○		
129	SJ100	砥石	砂岩	[4.0]	[4.3]	1.8	29.9	○	○		
130	SJ100	砥石	砂岩	[5.4]	[3.7]	2.1	46.8	○	○		
131	SJ99	砥石	砂岩	[4.3]	[5.0]	[2.9]	63.0	○	○		
132	A-999 P1	砥石	安山岩	10.7	7.7	2.5	199.6		○		
133	SK556	砥石	砂岩	8.3	5.7	0.9	61.5		○		
134	SK196	砥石	安山岩	[7.4]	6.9	1.0	55.5	○	○		
135	SK559	砥石	緑泥片岩	[6.3]	4.9	1.2	72.2	○	○		
136	SK661	砥石	砂岩	9.0	6.6	1.5	121.2			石重の転用	421-2
137	SK783	砥石	砂岩	6.2	4.4	2.8	63.4				
138	SK666	砥石	砂岩	[3.9]	[2.5]	1.3	14.7	○			
139	SK241	砥石	砂岩	[2.7]	[2.4]	1.3	7.7	○	○		
140	SK658	砥石	砂岩	[4.2]	4.2	1.7	28.3	○	○		
141	SJ107	砥石	砂岩	[4.2]	[3.7]	1.5	21.8	○	○		
142	SK650	砥石	砂岩	[4.4]	[3.8]	[1.6]	28.2	○	○		
143	SJ105	砥石	安山岩	8.7	4.7	1.2	60.1		○		
144	SJ105	砥石	砂岩	7.6	4.2	1.8	67.2				
145	SJ108	砥石	砂岩	[7.1]	[5.7]	1.7	73.1	○			
146	SJ118	砥石	砂岩	[6.2]	3.5	1.2	24.3	○			
147	S19	砥石	砂岩	[4.2]	[3.3]	1.8	25.8	○	○		
148	SK666	砥石	砂岩	[5.1]	[2.6]	1.4	19.1	○	○		
149	SK783	砥石	砂岩	[6.6]	[6.8]	1.1	46.7	○	○		
150	SJ118	砥石	砂岩	[6.7]	5.1	2.9	109.9	○	○		

第39表 遺構出土石器観察表(4) (第593~598図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
151	SJ119	砥石	砂岩	[6.4]	4.6	2.1	54.1	○	○		421-2
152	SJ109	砥石	安山岩	[5.2]	6.6	2.0	87.6	○	○		
153	SJ104	砥石	砂岩	[6.8]	[6.2]	1.7	56.5	○	○		
154	SJ104	砥石	砂岩	[5.9]	4.0	1.0	20.1	○	○		
155	SJ104	砥石	砂岩	[4.1]	3.9	0.9	14.0	○	○		
156	SK754	砥石	砂岩	[4.2]	[2.8]	0.9	11.2	○	○		
157	SJ115	砥石	砂岩	[2.9]	3.3	1.2	9.9	○	○		
158	SJ107	砥石	砂岩	[6.0]	[4.5]	1.1	21.8	○	○		
159	SJ104	砥石	砂岩	[5.2]	3.8	0.8	17.3	○	○		
160	SJ107	砥石	砂岩	[3.8]	5.7	0.9	19.0	○	○		
161	SJ117	砥石	砂岩	[2.8]	4.4	1.1	15.7	○	○		
162	SK573	砥石	砂岩	[2.5]	[3.2]	2.2	15.8	○	○		
163	SJ100	砥石	砂岩	[2.2]	[1.9]	0.9	4.7	○	○		
164	SK548	砥石	安山岩	7.0	4.0	2.9	64.4			(貝輪用)	
165	SK559	蔽石	緑泥片岩	11.6	12.0	2.2	403.3				422-1
166	SK629	蔽石	安山岩	13.9	7.3	4.8	758.7				
167	SK763	蔽石	砂岩	[8.9]	5.5	3.2	194.2	○	○	砥石の転用	
168	SJ108	蔽石	砂岩	11.9	7.7	6.0	906.6		○	表裏面鏡面状	
169	SJ117	蔽石	安山岩	15.2	7.4	5.5	1020.4		○	表裏面鏡面状	
170	SK538	蔽石	緑色岩	13.7	7.1	3.3	531.1				
171	SJ128	蔽石	砂岩	11.1	3.9	2.3	163.4				
172	SJ114	蔽石	頁岩	10.3	3.0	2.3	89.7		○	石棒の転用	
173	SK561	蔽石	安山岩	10.5	5.2	3.9	327.3	○			422-2
174	SK602	蔽石	砂岩	[7.4]	4.4	3.6	192.0	○			
175	SK224	蔽石	蛇紋岩	7.7	6.1	4.2	272.1			赤色顔料 磨製石斧の転用	
176	SJ107	蔽石	砂岩	8.5	6.5	3.9	284.9	○		磨製石斧の転用	
177	SJ104	蔽石	頁岩	[6.9]	3.6	2.3	42.7	○		石棒の転用	
178	SJ114	蔽石	緑色岩	[7.1]	3.9	2.8	135.0	○			
179	SJ108	蔽石	安山岩	[4.8]	[4.3]	3.4	88.9	○	○		
180	SJ103	蔽石	安山岩	8.7	5.1	3.9	221.3				
181	SK196	蔽石	黒雲母花崗岩	6.3	5.9	5.1	248.1				
182	SJ99	凹石	花崗岩	[10.8]	15.4	5.2	1228.1	○			423-1
183	SJ105	凹石	安山岩	[12.0]	[15.2]	3.3	637.5	○	○		
184	SK744	凹石	安山岩	[8.9]	[9.6]	6.3	334.5	○			
185	SK632	凹石	軽石	10.2	[12.8]	6.3	313.5	○		(舟形)	
186	SK540	磨石	安山岩	[12.1]	7.7	4.2	377.6	○		石皿の転用	423-2
187	集中7	磨石	安山岩	13.2	[8.1]	8.3	565.5	○			
188	SJ118	磨石	安山岩	8.1	6.3	2.9	145.3		○		
189	SK549	磨石	安山岩	9.9	7.3	5.1	577.1				
190	SJ109	磨石	安山岩	[9.6]	[11.4]	4.0	490.3	○		赤色顔料	
191	SK549	磨石	安山岩	11.5	7.6	5.4	768.1		○		
192	SK549	磨石	安山岩	9.7	7.7	4.6	565.4			赤色顔料	
193	SK687	磨石	安山岩	8.1	4.5	4.4	282.6		○		
194	SK539	磨石	安山岩	[7.9]	5.9	3.0	169.6	○	○		
195	SJ118	磨石	緑色岩	[9.5]	5.5	3.5	285.0	○			
196	SJ103	磨石	安山岩	[8.3]	6.6	5.6	459.4	○	○		
197	SJ115	磨石	安山岩	[7.0]	[5.7]	4.9	277.5	○		赤色顔料 表裏面鏡面状	424-1
198	SJ118	磨石	安山岩	10.5	7.4	5.4	675.0	○		表裏面鏡面状	
199	SK564	磨石	安山岩	9.3	7.5	4.9	524.3	○			
200	SJ105	磨石	安山岩	8.9	6.9	5.8	444.3	○			

第40表 遺構出土石器観察表(5) (第598~602図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
201	SJ119	磨石	安山岩	7.1	6.4	5.1	320.6			全面赤色顔料	424-1
202	SJ107	磨石	安山岩	7.6	6.3	4.4	337.1				
203	SK567	磨石	安山岩	7.6	6.2	3.3	107.9		○		
204	SJ115	磨石	安山岩	[6.1]	7.2	3.6	196.6	○			
205	SK635	磨石	安山岩	6.9	6.7	5.5	274.1				
206	SJ104	磨石	安山岩	6.0	5.8	4.7	253.7				
207	SI8	磨石	安山岩	7.9	7.8	3.6	372.3		○		
208	SJ116	磨石	安山岩	5.8	6.6	3.9	218.9		○		
209	SJ105	磨石	安山岩	5.1	5.6	3.9	151.3			表裏面鏡面状 赤色顔料 鏡面状 黒色物付着(根茎) 赤色顔料	424-2
210	SK548	磨石	安山岩	[7.4]	9.3	5.4	479.8	○			
211	SK564	磨石	安山岩	5.7	4.9	4.6	173.8				
212	SK718	磨石	安山岩	6.2	5.8	3.9	189.2		○		
213	ZZ-998 P3	磨石	安山岩	6.6	8.4	4.1	318.5				
214	SK588	磨石	安山岩	6.4	6.7	4.8	274.2	○	○		
215	SK525	磨石	安山岩	6.4	5.9	4.8	273.3		○		
216	SJ99	磨石	安山岩	6.7	7.0	4.9	334.2				
217	SK539	磨石	安山岩	6.2	[6.4]	3.2	179.0	○	○		
218	SJ111	磨石	安山岩	7.2	6.8	3.9	222.7				
219	SK633	磨石	安山岩	6.1	5.5	3.5	176.1		○		
220	SJ105	磨石	安山岩	6.7	7.1	4.2	286.6		○		
221	SJ104	磨石	安山岩	7.1	7.4	3.2	291.2				
222	SK225	磨石	安山岩	5.8	5.8	4.2	124.5				
223	SK588	磨石	安山岩	6.8	6.9	4.5	326.3		○		
224	SJ108	磨石	安山岩	6.3	6.2	3.8	223.0				425-1
225	SK699	磨石	安山岩	[7.0]	6.3	4.1	157.8	○	○		
226	SJ105	磨石	安山岩	6.0	5.5	5.3	232.4				
227	SK580	磨石	安山岩	5.5	5.2	5.0	170.9				
228	SJ114	磨石	安山岩	5.6	5.7	4.2	208.6		○		
229	SK687	磨石	安山岩	5.0	4.6	4.1	155.9		○		
230	SK638	磨石	安山岩	5.0	4.8	3.9	126.7				
231	SK564	磨石	安山岩	5.3	5.0	4.3	138.8				
232	SJ106	磨石	安山岩	5.9	5.7	4.1	217.4				
233	SJ123	磨石	安山岩	5.8	5.4	3.8	169.3				
234	SK571	磨石	閃緑岩	20.3	9.2	5.4	1510.6				
235	SJ114	磨石	砂岩	13.3	8.4	5.8	924.6		○		
236	集中1	磨石	黒雲母花崗岩	8.5	6.2	5.6	358.2		○		
237	SI9	磨石	安山岩	9.2	6.0	3.5	254.7		○		
238	SJ114	磨石	砂岩	[4.2]	[2.7]	1.0	14.6	○			
239	SJ114	磨石	閃緑岩	12.6	8.8	6.2	997.2		○		
240	SJ105	磨石	安山岩	[10.0]	9.1	7.4	716.1	○	○		
241	SJ118	磨石	安山岩	[10.1]	[5.9]	5.0	377.5	○			
242	SK716	磨石	安山岩	7.0	4.7	4.4	181.5				
243	SJ105	磨石	安山岩	7.6	5.6	4.7	282.9				
244	集中1	磨石	安山岩	[8.0]	6.3	4.9	302.9	○	○		
245	SK719	磨石	安山岩	8.0	7.3	6.1	424.1			表裏面鏡面状 黒色物付着 裏面鏡面状	426-1
246	SJ100	磨石	頁岩	10.7	7.2	5.8	555.8				
247	SK561	磨石	安山岩	6.5	6.7	4.5	281.2				
248	SJ100	磨石	砂岩	7.7	6.1	4.2	280.6				
249	SK549	磨石	砂岩	7.0	6.7	4.7	297.9				
250	SJ105	磨石	安山岩	5.7	5.2	4.2	162.2				

第41表 遺構出土石器観察表(6) (第602~606図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	欠損	被熱	備考	図版	
251	SJ114	磨石	閃緑岩	14.1	10.4	7.5	1741.8		○	鏡面状(一部)	426-1	
252	SK273	磨石	安山岩	11.9	7.8	5.7	708.8		○			
253	集中1	磨石	安山岩	[4.5]	6.5	5.2	174.4	○				
254	SK579	磨石	閃緑岩	13.2	8.2	5.3	836.6		○	裏面鏡面状		
255	集中1	磨石	砂岩	12.8	6.1	3.2	290.1					
256	SJ105	磨石	安山岩	13.4	8.4	4.7	829.9		○	鏡面状磨石		
257	集中1	磨石	黒雲母花崗岩	[6.0]	6.4	3.4	181.6	○	○	鉄錆状付着物		
258	SK549	磨石	安山岩	13.7	9.3	5.8	1163.1			表裏面鏡面状	426-2	
259	SJ104	磨石	安山岩	11.1	9.1	6.8	852.8		○			
260	SJ118	磨石	安山岩	13.2	11.2	8.7	1634.9					
261	SJ108	磨石	安山岩	13.5	10.0	5.2	1101.8		○	鏡面状磨石		
262	SJ105	磨石	安山岩	12.4	10.0	4.0	765.4		○			
263	SK580	磨石	安山岩	13.9	12.7	3.2	866.5		○			
264	S18	磨石	安山岩	8.7	6.6	4.0	365.6					427-1
265	SK758	磨石	安山岩	13.8	8.9	5.4	1015.0			表裏面鏡面状		
266	SJ105	磨石	安山岩	9.2	6.5	3.7	359.5					
267	SJ124	磨石	安山岩	8.0	6.2	2.5	175.7		○			
268	SJ117	磨石	安山岩	9.9	7.4	4.7	539.9	○	○	裏面鏡面状		
269	SX16	磨石	安山岩	7.9	6.5	5.3	405.2		○	○	表裏面鏡面状	
270	集中7	磨石	黒雲母花崗岩	[6.0]	[3.4]	[4.5]	115.7	○	○	赤色顔料		
271	SJ107	磨石	安山岩	8.4	4.4	4.0	238.1			側面鏡面状		
272	SJ115	磨石	安山岩	8.5	4.6	4.1	254.4		○			
273	SJ106	磨石	安山岩	8.7	7.0	5.4	548.7					
274	SJ118	磨石	閃緑岩	7.2	6.1	3.7	274.6					
275	SK689	磨石	砂岩	8.4	6.9	4.7	439.0					
276	SJ114	磨石	安山岩	7.9	6.5	3.6	295.0					
277	SJ105	磨石	安山岩	7.7	7.0	3.7	270.4		○		427-2	
278	S19	磨石	安山岩	7.6	[6.1]	4.4	298.5	○	○			
279	焼土跡30	磨石	安山岩	6.0	6.3	3.3	204.6					
280	SJ100	磨石	安山岩	[6.2]	[8.4]	5.6	374.6	○	○	鏡面状		
281	SJ105	磨石	安山岩	7.8	[5.6]	4.6	294.4	○	○			
282	SK550	磨石	石墨	6.3	4.7	2.9	74.9		○			
283	SJ114	磨石	安山岩	9.9	9.3	4.5	673.2		○	表裏面鏡面状		
284	SK654	磨石	安山岩	[6.9]	9.5	6.4	574.4	○	○			
285	集中1	磨石	安山岩	[6.5]	7.4	[4.0]	236.2	○				
286	SK629	磨石	安山岩	7.7	6.1	3.7	230.9					
287	SJ109	磨石	砂岩	5.3	6.1	2.9	145.5					
288	SJ104	磨石	安山岩	[5.9]	6.8	4.3	226.8	○	○	剥落		
289	SJ104	磨石	安山岩	9.1	8.7	6.1	727.6		○	鏡面状		
290	SK633	磨石	安山岩	6.3	6.3	4.5	270.9					
291	SJ112	磨石	安山岩	8.4	7.8	4.6	462.1			鏡面状	428-1	
292	SJ105	磨石	閃緑岩	7.5	7.9	3.6	366.4			鏡面状		
293	SJ104	磨石	安山岩	8.2	7.5	3.6	347.0		○			
294	SJ106	磨石	安山岩	6.9	7.5	4.4	340.6	○				
295	SJ105	磨石	安山岩	5.2	5.9	3.8	174.6			鏡面状		
296	SJ111	磨石	安山岩	5.1	6.0	3.6	162.0					
297	SJ114	磨石	安山岩	5.6	4.7	3.4	132.7					
298	SK550	磨石	安山岩	5.3	5.9	4.0	195.9					
299	SJ118	磨石	安山岩	6.5	6.3	3.8	254.8		○	表裏面鏡面状		
300	SJ112	磨石	安山岩	5.7	5.2	4.3	176.6		○			

第12表 遺構出土石器観察表(7) (第606~613図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
301	SJ111	磨石	安山岩	5.4	6.0	5.0	239.5				428-1
302	S18	磨石	安山岩	5.3	5.3	3.3	121.9				
303	SK584	磨石	安山岩	5.7	5.5	3.7	179.5				
304	SJ118	磨石	安山岩	6.2	6.1	2.9	165.9				
305	SJ130	磨石	安山岩	11.8	10.0	5.5	683.0				
306	SK746	石皿	安山岩	[21.4]	[12.6]	5.6	1622.5	○			428-2
307	SK532	石皿	安山岩	[19.5]	[9.9]	7.0	969.4	○			
308	SJ115	石皿	安山岩	[15.6]	[11.0]	5.7	906.2	○			429-1
309	SJ119	石皿	安山岩	[15.5]	[11.4]	8.4	1898.5	○			428-2
310	SJ118	石皿	安山岩	[11.4]	[9.1]	4.6	519.4	○			429-1
311	SK699	石皿	安山岩	[8.9]	[9.6]	5.1	450.1	○	○		
312	SJ118	石皿	安山岩	[9.0]	[15.7]	6.6	1156.9	○			429-2
313	SJ131	石皿	安山岩	[3.7]	[5.5]	5.0	126.4	○			
314	SJ105	石皿	安山岩	[3.5]	[3.5]	[3.7]	30.7	○			
315	集中1	石皿	安山岩	[6.1]	[6.3]	4.8	157.6	○			
316	SK806	石皿	安山岩	[10.0]	[7.3]	3.4	228.4	○			
317	SJ104	石皿	安山岩	[17.1]	[9.9]	[9.4]	1506.1	○	○		
318	SK580	石皿	閃緑岩	[13.9]	[9.2]	3.6	561.2	○			
319	SK741	石皿	安山岩	[11.3]	[9.7]	4.4	416.9	○			
320	SJ130	石皿	安山岩	[14.4]	[9.4]	3.2	541.2	○			
321	SK242	石皿	安山岩	[16.0]	18.2	6.1	2189.2	○			430-1
322	SK241	石皿	砂岩	[6.3]	[9.2]	2.9	258.8	○	○	赤色顔料	
323	集中7	石皿	安山岩	[7.8]	[7.4]	4.4	201.1	○			
324	SJ109	石皿	安山岩	[13.4]	[9.7]	4.8	789.9	○	○		
325	SK622	石皿	安山岩	[10.2]	[8.4]	4.3	515.7	○			
326	樓上跡30	石皿	安山岩	[10.6]	[11.0]	6.5	839.4	○	○		
327	SJ123	石皿	安山岩	[5.7]	[6.0]	4.3	177.2	○			
328	SK745	石皿	安山岩	[11.1]	[9.0]	5.6	462.1	○	○		430-2
329	SJ103	石皿	安山岩	[9.6]	[8.9]	4.7	246.6	○			
330	SK544	石皿	安山岩	[10.1]	[9.2]	4.5	440.6	○			
331	SK744	石皿	安山岩	[12.4]	[9.4]	5.8	291.0	○	○		
332	SK564	石皿	安山岩	[8.9]	[7.5]	4.6	241.4	○			
333	SJ120	石皿	安山岩	[8.8]	[7.7]	5.0	323.8	○	○		
334	SK534	石皿	安山岩	[6.6]	[5.4]	3.2	216.4	○	○	表裏面鏡面状	
335	SJ113	石皿	安山岩	[4.4]	[6.3]	5.2	122.5	○			
336	SK620	石皿	安山岩	[7.3]	[6.1]	5.6	140.6	○	○		
337	SK741	石皿	緑色岩	[13.7]	[13.9]	4.3	933.1	○			
338	SJ100	石皿	緑泥片岩	[10.9]	[12.7]	1.2	187.9	○	○		431-1
339	SJ115	石皿	緑泥片岩	[12.6]	[9.0]	2.8	510.2	○			
340	SJ105	石皿	絹雲母片岩	28.1	20.2	4.1	1530.4	○			431-2
341	SJ104	石皿	絹雲母片岩	[13.8]	[8.7]	1.3	268.6	○			431-1
342	SK675	石皿	絹雲母片岩	[14.2]	[12.6]	2.6	538.4	○	○		
343	SK633	石皿	緑泥片岩	[11.5]	[10.8]	2.4	317.3	○			
344	SJ104	台石	安山岩	20.9	17.3	[11.5]	6400.1	○	○		432-1
345	SJ121	台石	安山岩	20.3	18.4	11.7	7088.5			赤色顔料	
346	SJ112	台石	安山岩	34.6	23.5	12.7	13200.0				432-2
347	SJ116	軽石類	軽石	[9.8]	6.9	5.8	130.2	○	○		433-1
348	SK549	軽石類	軽石	8.1	5.6	2.8	38.2				
349	SK548	軽石類	軽石	7.6	6.2	4.1	96.5				
350	SJ103	軽石類	軽石	6.7	5.5	3.1	38.4				

第43表 遺構出土石器観察表(8) (第613~617図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	欠損	被熱	備考	図版
351	ZY-997 P3	軽石類	軽石	[6.3]	[3.6]	2.5	19.5	○			433-1
352	SK549	軽石類	軽石	5.5	5.1	1.7	27.0				
353	SJ133	軽石類	軽石	6.0	[4.6]	[1.8]	10.3	○			
354	SK546	軽石類	軽石	10.7	10.4	5.9	299.1				
355	SK754	軽石類	軽石	3.8	3.6	3.3	21.1				
356	SJ118	軽石類(凹石)	軽石	5.1	3.6	1.9	15.1				
357	SJ116	浮子	軽石	3.9	3.4	1.8	7.7				
358	SJ117	浮子	軽石	10.7	6.9	2.8	48.7				
359	SK555	浮子	軽石	12.2	7.7	3.6	38.6		○		
360	SJ105	石錘	凝灰岩	6.5	5.1	2.2	106.1		○		433-2
361	A-0 P29	石錘	凝灰岩	6.5	3.7	1.2	36.1		○		
362	A-0 P29	石錘	凝灰岩	6.3	3.6	1.1	37.2		○		
363	SK249	石錘	砂岩	5.5	3.5	1.1	27.0				
364	SK567	石錘	凝灰岩	4.4	2.5	0.9	15.0				
365	SX15	石錘	安山岩	3.6	2.6	1.2	14.3				
366	SK666	石錘	シルト岩	4.2	2.6	1.3	20.0				
367	S18	石錘	砂岩	[2.2]	[2.6]	[0.5]	3.7	○	○		
368	A-1 P2	石錘	安山岩	5.7	2.6	1.4	26.0				
369	SJ106	石錘	シルト岩	6.5	3.7	0.9	24.4				
370	SJ100	石錘	安山岩	4.3	4.1	1.2	25.3				
371	SJ129	石錘	安山岩	3.8	3.2	1.2	21.5				
372	SK763	石錘	砂岩	[5.8]	5.9	1.7	66.7	○			
373	SK632	石錘	安山岩	6.9	4.4	1.1	43.3				
374	SJ107	石棒	緑泥片岩	[15.8]	8.8	[7.9]	1312.0	○			434-1
375	SK534	石棒	緑泥片岩	[6.1]	[5.1]	[2.1]	84.9	○			
376	SJ106	石棒	緑泥片岩	28.8	4.6	2.9	623.4				
377	SJ100	石棒	緑泥片岩	43.0	5.8	3.4	1104.3		○	SJ132と接合	
378	SJ106	石棒	絹雲母片岩	21.1	5.4	3.4	754.1				434-2
379	SK215	石棒	緑泥片岩	[7.2]	[3.1]	2.2	79.0	○			
380	SJ114	石棒	頁岩	[6.9]	[3.4]	[1.9]	58.5	○	○	破砕	
381	S19	石棒	凝灰岩	[7.5]	[4.1]	[2.7]	92.5	○	○	SJ107と接合	
382	SJ115	石棒	凝灰岩	[19.4]	[2.5]	[1.3]	41.2	○	○	SJ116 P58と接合 破砕	
383	SJ107	石棒	凝灰岩	[12.5]	[2.7]	[1.4]	38.6	○	○	SJ115 P37とSJ116と接合 破砕	
384	SJ111	石棒	砂岩	[7.6]	4.6	3.1	131.8	○			
385	SJ113	石棒	凝灰岩	[4.9]	[1.7]	[4.0]	3.0	○			
386	SJ107	石棒	凝灰岩	[12.3]	[3.1]	[1.9]	77.7	○		SJ131と接合	
387	SJ131	石棒	凝灰岩	[6.6]	[2.6]	[0.8]	10.7	○			
388	SJ105	石棒	緑泥片岩	[18.2]	6.3	2.4	360.8	○		(未製品)	
389	SJ105	石剣	緑泥片岩	49.7	4.7	2.0	776.7				435-2
390	SJ111	石剣	緑泥片岩	[19.7]	[3.7]	2.1	234.9	○			435-1
391	集中1	石剣	緑泥片岩	[18.8]	[3.4]	2.1	222.2				
392	SK570	石剣	緑泥片岩	[9.0]	3.3	1.7	71.9	○			
393	SJ105	石剣	緑泥片岩	[19.3]	[8.0]	4.5	1081.4	○			
394	SJ105	石剣	片岩	26.1	6.1	2.5	666.8			鉄分付着 (再生利用加工途中)	
395	S18	石剣	緑泥片岩	[7.1]	[3.3]	2.2	85.5	○			
396	SJ104	石剣	緑泥片岩	[10.8]	[3.4]	2.3	60.6	○	○		
397	SJ105	石剣	緑泥片岩	[29.9]	[4.6]	2.2	462.8	○			435-2
398	SJ106	独鈷石	緑色岩	13.7	5.2	2.8	217.9				436-1
399	SX15	独鈷石	安山岩	15.0	5.7	2.9	323.1		○		
400	SK250	独鈷石	砂岩	[8.8]	[5.4]	[4.0]	206.7	○	○		

第14表 遺構出土石器観察表(9) (第617～618図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
401	集中1	独站石	安山岩	[6.2]	[6.8]	[3.4]	123.6	○			436-1
402	SK666	石冠	閃緑岩	7.4	9.6	4.7	402.3		○	底面一部鏡面状	
403	SJ121	石冠	安山岩	6.7	13.2	6.2	814.8				
404	集中7	岩版	凝灰岩	[9.3]	[7.7]	[1.9]	82.6	○			436-2
405	SJ105	岩版	凝灰岩	[9.0]	[14.6]	3.3	232.9	○			
406	SK561	岩版	凝灰岩	[3.6]	[4.1]	[1.5]	9.0	○	○		
407	SK561	岩版	凝灰岩	[3.6]	[2.4]	[1.8]	6.5	○	○		
408	SJ114	垂飾(勾玉)	蛇紋岩	2.5	0.8	0.8	5.4			穿孔片面 穿孔径0.2～0.6cm	437-1
409	SK580	垂飾(勾玉)	滑石	2.9	1.7	1.1	5.9			両面穿孔 穿孔径0.2～0.6cm	
410	SK718	垂飾	粘板岩	5.2	3.1	0.6	15.0			穿孔径0.2～0.6cm	
411	SX17	垂飾	シルト岩	2.9	1.4	0.4	2.0			穿孔径0.2～0.4cm	
412	SK241	垂飾	砂岩	3.7	2.1	0.6	5.0	○		穿孔径0.2～0.6cm	
413	SK254	垂飾	砂岩	3.1	1.9	0.4	3.8			穿孔径0.2～0.5cm	
414	SK550	垂飾	シルト岩	1.7	1.4	0.3	1.1			穿孔径0.2～0.4cm	
415	SK666	垂飾	シルト岩	2.4	1.9	0.5	2.6			穿孔径0.3～0.8cm	
416	SK207	垂飾	砂岩	1.9	1.9	0.4	1.7			穿孔径0.4～0.7cm	
417	SJ117	垂飾	滑石	[1.9]	1.6	1.1	3.3	○		穿孔径[0.4]cm	
418	SJ100	垂飾(玉状)	滑石	1.3	1.4	0.7	1.5			穿孔径0.2～0.6cm	
419	SJ102	垂飾(玉状)	ヒスイ?	1.6	1.6	[1.1]	4.1	○		穿孔径0.4～0.8cm	
420	SJ100	垂飾(玉状)	ヒスイ?	1.1	1.1	0.7	1.3			穿孔径0.2～0.5cm	
421	SJ112	垂飾(玉状)	ヒスイ?	1.0	1.0	0.8	1.0			穿孔径0.3～0.5cm	
422	SJ100	垂飾(玉状)	玉髓	[2.4]	[1.6]	0.9	3.9	○			
423	集中1	不明品	絹雲母片岩	25.5	5.7	[3.5]	882.2	○			436-2

4. 骨製品 (第619図)

北盛土の遺構から出土した骨角器は、合計8点である。また、骨角器の素材となりうる骨角類が3点みられる。

第104号住居跡に、筭・垂飾・骨角類が合計3点、第580号土壇に骨角類が2点みられる。その他の遺構では、ヤス状刺突具・筭、もしくは歯牙穿孔品が出土している。

以下、器種ごとに記載する。詳細は、第45表を参照されたい。

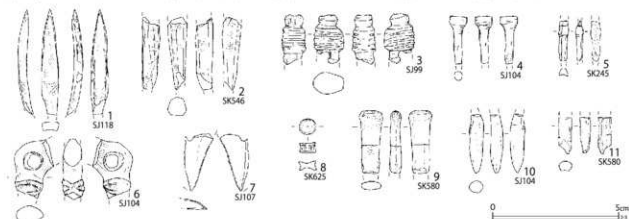
1はヤス状刺突具である。裏面に髓腔がみられる。やや湾曲している。断面形は、長方形状である。2は研磨により面取し、断面形が八角形である。直線的に先細りすることから、刺突具の先端部と考えられる。3～5は筭である。すべて頂部

の破片で、先端部を欠損している。3はくびれにより頭頂部、頭部、棒状部に区画している。頭部に横方向の線刻を4条施し、その下の棒状部に穿孔している。4はくぎ形状である。直線的で長狭な形態と想定されることから、筭の頂部と考えられる。5はくびれをもち、上部がやや膨らむ。非常に細身であることから、針の可能性もある。

6は垂飾である。一端に穿孔している。その下の部位では、表裏で対になる位置に、口唇状の文様を浅く浮き彫りしている。

7はホオジロザメの歯で、歯根部が欠損している。8はサメ・エイの椎骨である。これらは、歯牙穿孔品の一部、もしくは素材と考えられる。

9～11は加工のない骨角である。



第619図 遺構出土骨製品

第45表 遺構出土骨製品観察表 (第619図)

番号	遺構名	器種	素材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	図版
1	SJ118	ヤス状刺突具		[4.2]	0.7	0.6	1.3	437-2
2	SK546	ヤス状刺突具		[2.8]	0.7	0.7	1.1	
3	SJ99内柱穴	筭		[1.9]	1.2	1.0	1.4	
4	SJ104	筭	哺乳綱の角	[1.9]	0.7	0.7	0.5	
5	SK245	筭		[1.6]	0.4	[0.3]	0.2	
6	SJ104	垂飾		[2.4]	[1.6]	[0.9]	1.4	
7	SJ107	歯牙穿孔品	ホオジロザメの歯	[2.3]	[1.1]	[0.4]	0.3	
8	SK625	歯牙穿孔品	サメ・エイの椎骨	0.6	0.7	0.5	0.1	
9	SK580	骨角	哺乳綱の肋骨	[2.5]	0.9	0.5	0.8	
10	SJ104	骨角	鹿角	[2.3]	0.6	0.5	0.6	
11	SK580	骨角	鹿角	[1.4]	0.6	0.4	0.2	

VI 調査のまとめ

1. 縄文土器について

今次報告(第440・441集)に係る調査で出土した遺構出土の縄文土器のうち、後期前葉から晩期中葉のものを15の時期に区分し、第620~625図に代表的なものを図示した。

資料化にあたっては土壌出土のものを核として、住居跡のもので補完した。但し、住居跡出土資料には複数時期の組み合わせが併存する例も多く、必ずしも遺構の帰属時期を示すものではない。

1期: 堀之内1式である。北盛土を中心に土壌群が分布する。第629号土壌では、3本沈線による曲線文が横位展開する深鉢216と称名寺系の土器が共伴している。第734号土壌の269も口縁部の特徴から同時期と考えた。

2期: 堀之内2式である。北盛土第128号住居跡から大型の埋甕283が出土した。

3期: 加曾利B1式である。北盛土第122号住居跡から纏まった資料が出土した。

4期: 加曾利B2式である。南盛土第318号土壌の出土資料が比較的纏まっているが、それを除けば断片的な資料である。

5期: 加曾利B3式である。南盛土の第45・47・49号住居跡のほか、南盛土を中心に良好な資料を得られた。集落の拡大期と目される。

6期: 曾谷式である。前後の時期との区分が困難だが、南盛土第44号住居跡の資料が纏まっている。北盛土第133号住居跡ピット出土の注口土器292は、この時期に例の少ない優品である。

7期: 安行1式古段階である。前段階からの流れで水平口縁の深鉢類が確立する一方で、本遺跡にあっては大波状口縁深鉢を高井東系の土器が補完している。北盛土第9号竅穴状遺構の41は南盛土第38号住居跡で出土したような竅目土器を象ったもので、竅目土器自体もこの前後の時期に位置づけられよう。

8期: 安行1式新段階である。大波状口縁深鉢の確立期である。北盛土第742号土壌は晩期に盛行する土壌墓群のはしりと考えられる。

9期: 安行2式である。出土量は多くないが、南盛土第43号住居跡の古段階の資料が纏まっている。

10期: 安行3a式古段階である。南盛土第43号住居跡の新段階の資料が該当する。

11期: 安行3a式新段階である。大波状口縁深鉢の三角形区画文の弧状文化と、三叉文の変容、入り組み文の単段化を指標とし得る。

12期: 安行3b式古段階である。入り組み三叉文が盛行し、姥山系文様が確立する。北盛土の土壌墓群はこの時期から14期まで盛行する。

13期: 安行3b式新段階である。波頭文やステッキ文等のシンプルな横帯文が主流となる。三叉文が横帯文化する北盛土第248号土壌の87もこの時期であろう。横帯文化した羊歯状文の88、天神原系の注口土器89を伴っている。

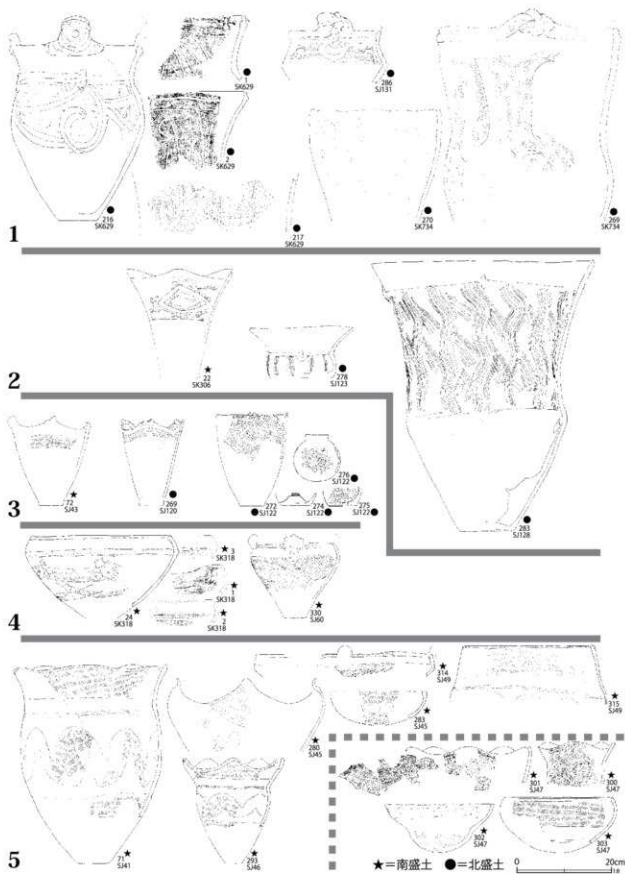
14期: 安行3c式古段階である。多くの器種が地文縄文を喪失する一方で、安行系の土器の文様構成は前段階のものを引きずっており、共伴する東北系の土器も大洞B C式の名残を残す。

15期: 安行3c式中から新段階である。米粒状の列点文を地文とし、対向三叉文が出現する。北盛土第208号土壌の28・34は初期前浦式の影響下にある土器であろう。土壌墓群が終息し、代わって墓域内に土器集中や焼土跡が形成され、次の16期まで続く。

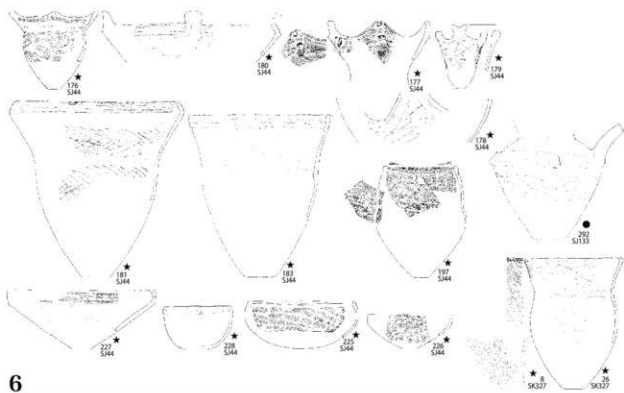
16期: 安行3d式である。沈線文が発達し、安行系の土器でも内文が顕著になる。大洞C2式類似の土器を明瞭に伴う。集落の終息期である。

2. 集落の形成と住居跡の変遷(第626図)

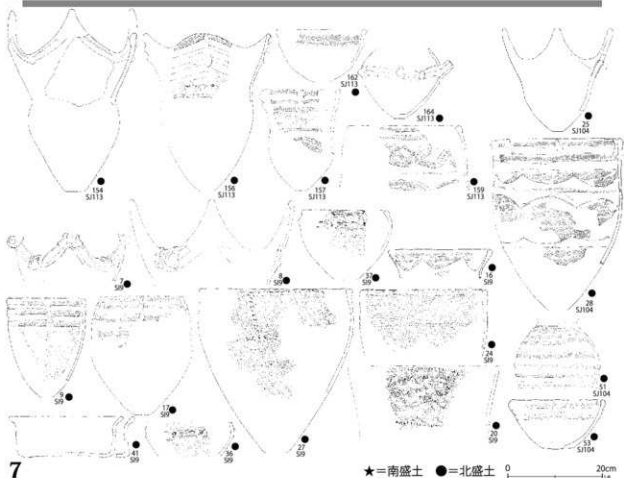
長竹遺跡北盛土からは、縄文時代早期後半から



第620図 長竹遺跡出土縄文土器 (1)



6

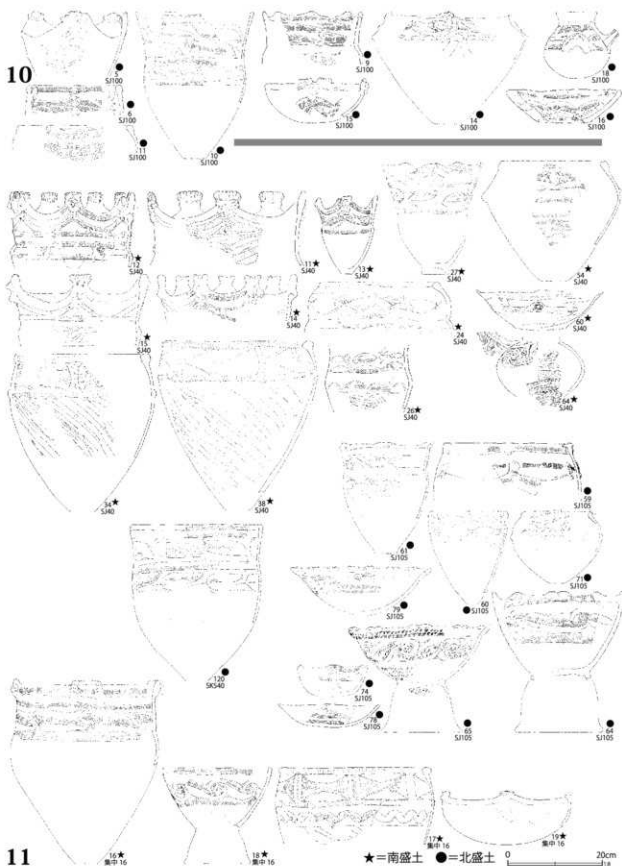


7

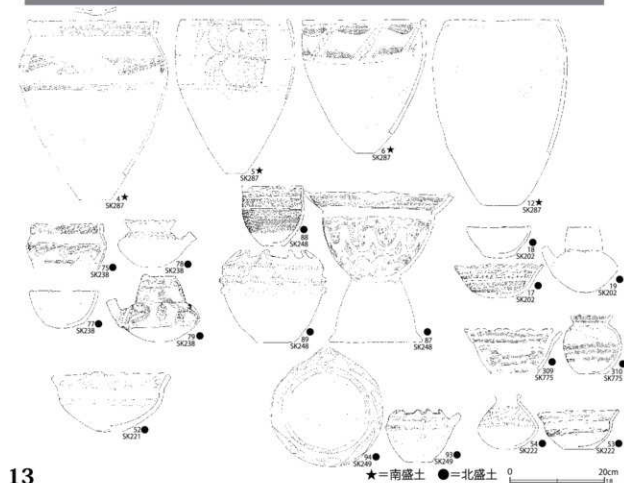
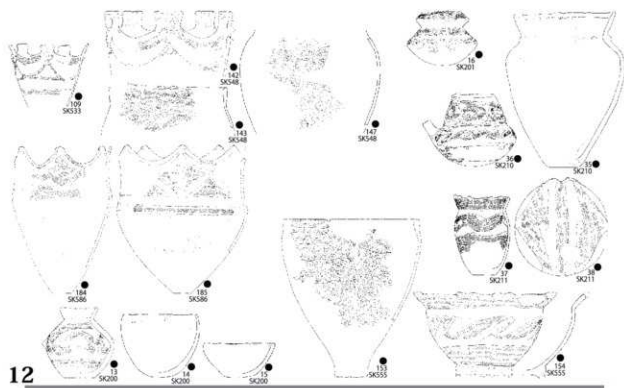
★=南盛土 ●=北盛土

0 20cm
1/4

第621図 長竹遺跡出土縄文土器(2)



第623図 長竹遺跡出土縄文土器（4）



第624図 長竹遺跡出土縄文土器(5)

晩期中葉までの遺物が出土したが、中期後葉以前の遺構は検出されなかった。長竹遺跡C区に当該期の遺構が検出されているので、活動範囲に入っているか、または、後期以降の遺構によって壊されたものと推察された。

調査の結果、集落の開始期は第Ⅰ期とした2軒の住居跡があたる。第123・128号住居跡からは、炉体土器と埋堯として後期前葉の堀之内2式土器が出土しており時期を特定できた。後期前葉に属する合計2軒の住居跡は、やや離れており、特に第123号住居跡は長軸方位をほぼ180°変えて建て替えが行われていた。環状盛土内での位置は、第128号住居跡が環の中央で、第123号住居跡がやや内縁側にかけであった。不整形プランを基調とし、入り口方向は環と並行（東側）と環のやや外側（北西）に向いていた。

第Ⅱ期は2軒があたり、Ⅰ期と軒数は変わらない。第120・122号住居跡は上下の重複住居跡で加曽利B式期の遺物が出土し、時期を特定できた。後期中葉に属する2軒の住居跡は入り口部の有無と柱穴配置が異なる。楕円形プランを基調とし、第120号住居跡は北側（環の外側）に張り出し型の入り口部が設けられていた。環状盛土内での位置は、やや内縁側にあり、Ⅰ期とほぼ変わらない。

第Ⅲ期は6軒があたり、Ⅱ期より軒数が増加している。上層の住居跡との重複が著しく後期安行式の遺物が混入しているが、すべての住居跡から曾谷式（高井東式）土器が出土し、後期後葉前半にあたる。合計6軒の住居跡は、大きく2グループに分かれ西側グループの第121号住居跡に対し、東側グループでは第134→133→131→132号住居跡の順に位置を北側にずらしながら建て替えた住居跡であった。

環状盛土内での位置は、外縁側と中央に分かれて分布していた。住居跡のプランは「D」字型、隅円方形、方形の3形態が認められ、第Ⅳ期への移行期的な様相を示していた。また、入り口方向

は環の内側（南—南東）と環の外側（北西）を向くものとの2種類に分かれていた。

第Ⅳ期は合計13軒の住居跡と2基の竪穴状遺構があたる。集落内では隆盛期にあたり且つ、各住居跡が最も集住していた時期であった。そこで、これらの時期をさらにa・b・cの3段階に分けて変遷をたどる。

Ⅳa期は3軒の住居跡があたる。すべての住居跡から後期曾谷式から安行式にかけての土器が出土し、後期後葉後半にあたる。

遺構は大きく2グループに分かれていた。第118号住居跡はⅣb期まで継続し、2回の建て替えが行われていた。また、第116号住居跡はⅢ期の東側グループと重複し、継続して立地していた。住居跡のプランは、ほぼ方形プランに移行していた。

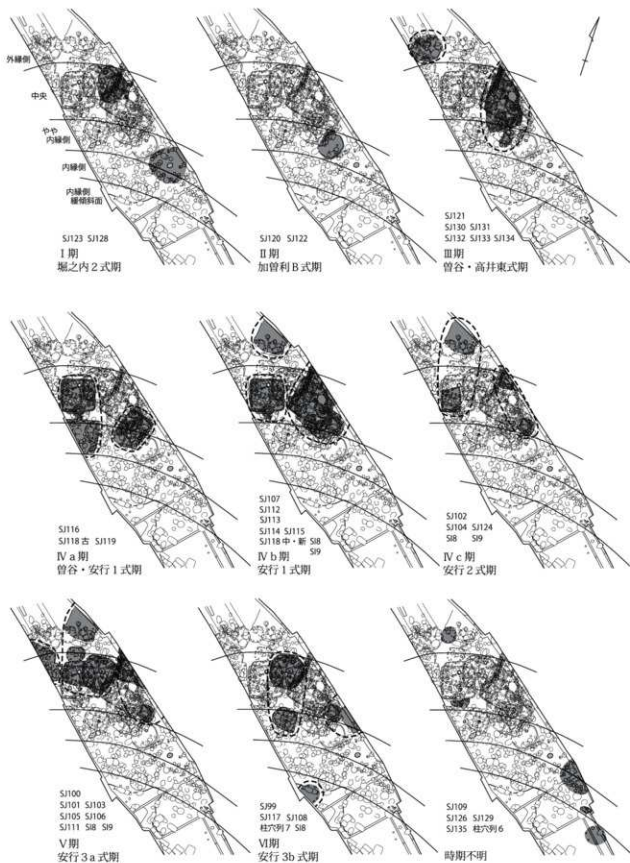
Ⅳb期は7軒の住居跡と2基の竪穴状遺構があたる。すべての住居跡から安行1式の土器が出土し、後期後葉後半にあたる。

遺構は大きく3グループに分かれていた。第118号住居跡はⅣa期からの継続であった。東側グループでは第115→113→107→114号住居跡の順で第114号住居跡を基準として位置を南北にずらし、かさ上げを行いながら建て替えを行った住居跡であった。住居跡のプランは、第107号住居跡が隅円方形であった以外は方形プランであった。竪穴状遺構は、住居跡群の北西側に離れて1基と、南東側に重複して1基が位置していた。

環状盛土内での位置関係は外縁側から中央に占地し、外側に拡大していた。住居跡の入り口方向は、環の内側（南—南東）を向くものに統一されていた。

Ⅳc期は3軒の住居跡とⅣb期から継続する2基の竪穴状遺構があたる。すべての住居跡から安行1から2式の土器が出土し、後期末葉にあたる。

遺構は大きく2グループに分かれていた。第104号住居跡は第118号住居跡の縮小建て替えて



第626図 北盛土縄文時代後・晩期集落変遷図

あった。東側グループでは第124→102号住居跡の順で、縮小建て替えを行った住居跡であった。住居跡のプランは、方形プランであった。堅穴状遺構は、IV b 期から継続していた。

環状盛土内での位置関係は外縁側から中央に占地し、IV b 期と同様の立地であった。住居跡の入り口方向は、判明した住居跡では環の内側（南東）を向いていた。

第V期は住居跡6軒と堅穴状遺構2基があったり、住居跡は減少していた。すべての住居跡から晩期安行3a式土器が出土し、晩期前葉前半にあたる。

遺構は大きく3グループに分かれ、第103・111号住居跡で1グループ、第101・105・106号住居跡、第9号堅穴状遺構で1グループ、第100号住居跡、第8号堅穴状遺構で1グループを形成していた。このうち堅穴状遺構はIV b 期から継続していた。第105号住居跡は佐倉宮内井戸作遺跡と類似し、隅円方形に近い円形プランで祭祀遺物が多く出土した。その他、方形プラン、不正円形プランがあり、方形プランから内部施設の定形配置が崩れた円形プランへの移行期にあっていた。

環状盛土内での位置関係は環の外縁側から中央部にかけ、盛土最上部に位置し最も集中して分布していた。入り口方向は環の内側（南—南東）に向いていた。

第VI期は住居跡3軒と堅穴状遺構1基、円形の柱穴列1基があたり、集落の縮小期に入っていた。各遺構から晩期安行3b式土器が出土し、晩期前葉後半にあたる。但し、円形柱穴列は後期前葉と晩期中葉の土器が出土したが、層位的な検出状況から判断した。

遺構は大きく3グループに分かれていた。第99号住居跡はV期の第105号住居跡をローム質土で埋め立てて構築していた。第8号堅穴状遺構はIV b 期から継続していた。これとは別に、第7号柱穴列が新たに建てられた。

環状盛土内での位置関係は環の中央から内縁側緩傾斜面の柱穴列にかけて分布し、再び内縁側への進出を志向していた。入り口部は、判明したものでは環の内側（南西）方向であった。

この他に、時期不明の住居跡4軒、円形柱穴列1基があった。第126号住居跡は、遺構の重複関係と周辺出土遺物の状況から、中期末に属すると推察された。

以上北盛土の集落をVI期に分け、変遷を後期前葉から晩期中葉にかけての集落の開始から収束までを提示したが、南盛土と比較総合すると、第I・II期は住居跡数が少なく、環のやや内縁側に立地している。III期から増加し始め、外縁側へ拡張する。また各住居跡の集中化が顕著となる。IV期は集落の隆盛期となり、南盛土で「大形堅穴建物跡」などの施設の構築や、全体に住居跡の集中化、かさ上げなどが頻繁に行われるようになる。V期は、南盛土と北盛土で様相が異なり、南盛土は縮小期に入るが、北盛土では、並行期で最も高い部分に立地している。但し、方形プランから不整円形プランへの移行期に入る。VI期は南北共通して縮小期に入り、環の内縁側を志向し、住居跡の小形化と共に、掘立柱建物跡、円形柱穴列などが新たに構築される。

なお、堅穴状遺構は、出土遺物の時期が幅広く外縁側傾斜面及び、住居跡のグループ間に立地していることから、何らかの特定機能を基に長期間使用された可能性が推察される。

土壌は、南盛土では、中央からやや内縁側で少数検出されたが、北盛土では、やや内縁側で後期前葉の堀之内I式期を主体に多く検出されている。良好な遺物を出土する土壌もあり、これらは、貯蔵穴として使用された可能性が推察される。但し、当該期の住居跡は検出されていない。また、後期後葉前半にかけては、当該期の住居跡と重複して筒状の土壌が多く検出されている。また後期後葉後半では、外縁側斜面部にも土壌が形成されている。

る。

内縁側の土壌群のさらに内側には、掘り込みの深い柱穴が廻るが、構造物としての特定には至らなかった。さらにその内側には土壌墓群が等高線に沿った列状に検出された。

このように長竹遺跡の環状盛土遺構のうち、各種遺構の分布状況は、各時期により差異は認められるものの、外縁側の土壌群、中央の住居跡群、やや内縁側から内縁側の土壌群、内縁側の柱穴群、内縁側緩傾斜面の土壌墓群に分かれるようである。当該期の他の集落遺跡（環状盛土遺構）においても類似例は複数あり、集落の企画に何らかの規範が働いていたことが推察される。その性格については今後の検討課題としたい。

3. 縄文時代後・晩期の土壌墓について（第627・628図）

北盛土の後・晩期の土壌墓は環状盛土の環の内縁側緩傾斜面で、纏まって検出されている。所謂土壌墓群を形成している。これとは別に外縁側傾斜面では第527号土壌を例として、後期後葉から晩期初頭の墓と推察される土壌が散見される。また、第549号土壌のように磨石による石組施設を伴った住居跡上に構築し、廃屋墓的性格を持つ晩期前葉の土壌も検出されている。これらの墓が晩期前葉に入ると、大規模且つ、集中的な土壌墓群（墓域）を環の内縁側に形成していく。この変化は集落の衰退期とも重なり、長竹遺跡の環状盛土遺構利用の大きな画期を成している。以下、土壌墓群について、群構成、各土壌墓の変遷、遺物の出土状況、他の遺跡例との比較、集落との関係に視点をあて概要を述べる。

まず、土壌墓の群構成と変遷についてであるが、土壌墓群は大きく3グループに分かれるものと推察される。

第Ⅰグループは、土壌墓群の最も北西側に位置し、北側を貫入する小さな窪地を境界としている。第196号土壌以下合計18基があたる。第Ⅰグルー

プはさらに3小群に分かれるものと推察され、それぞれ第199・200・203・774号土壌が開始期となり、最終的には第615号土壌と円形の第630号土壌で終焉を迎えると推察される。

各グループの動きは、Aグループが2箇所に重複して纏まる。Bグループは中央から2方向に離れる。Cグループは集散を繰り返している。

なお、第201・202・203・774・775・787号土壌を覆って晩期中葉の遺物が集中して出土した。また、第198・211号土壌も同様に晩期中葉の遺物が覆うように集中して出土した。

第Ⅱグループは、土壌墓群の中央に位置し、第208号土壌以下合計24基があたる。第Ⅱグループはさらに3小群に分かれるものと推察され、それぞれ第210・212・223・265号土壌が開始期となり、最終的には、第207・208号土壌で終焉を迎えると推察される。

各グループの動きは、Aグループが環の内側（南西側）から外側（北東側）へ向かい、また戻る状況を示している。Bグループは同じく環の内側から外側へ向かう纏まりと、1箇所に重複する纏まりがある。Cグループは環の内側と外側から中央に向かって重複し最終的に東側に離れる状況となる。なお、第223・224・225・226号土壌を覆うように晩期中葉の遺物が集中して出土した。

第Ⅲグループは、土壌墓群の南東に位置し、南側に貫入する、浅い谷地形を境界とする。但し、境界付近に3基の土壌墓が検出されているので、これらで第Ⅳグループを形成することも推察される。第232号土壌以下合計21基があたる。第Ⅲグループはさらに4小群に分かれるものと推察される。このグループは、北側の第242号土壌が遺物の出土が少なく明確に時期を特定できないものの、やや古手の様相を示していると推察される。これを踏まえて、開始段階は、Aグループの第254号土壌とBグループの第242号土壌があたると推察される。最終的には、第240号土壌で終焉を

迎える。

各グループの動きは、Aグループが中央で重複して1箇所に纏まる。BグループはAグループの北側に隣接して1箇所に纏まる。CグループはAグループから南東側方向へ離れてゆく。DグループはA・Bグループから北西方向へ離れてゆく状況を示している。Dグループでは、遺構の重複状況と出土遺物の時期に不整合が生じている。特に、第232号土壌は重複関係では、第233→239→240号土壌より新しいが、出土遺物は、晩期安行3b式で重複関係では古い土壌の出土遺物よりも時期が過る。この時期の不整合については、破碎資料であることから、第239・240号土壌を壊して構築する際に含まれていた遺物が埋土中に混入した可能性も推察されるが、今後の検討課題としたい。

次に、各土壌から出土した遺物についてであるが、大きく4形態に分類が可能である。まず第Ⅰ類としてほぼ完形の遺物が1点から数点出土した土壌墓をあてる。第Ⅱ類として大形の破片または、破碎された状態で出土した土壌墓をあてる。第Ⅲ類として小破片が散在して出土する土壌墓をあてる。第Ⅳ類としてほとんど遺物を出土しない土壌墓をあてる。以上の分類に基づいて検討すると、第Ⅰ類には、第202・210・211・222号土壌のように単独の土壌の底面付近から出土する傾向が認められる。但し、第210号土壌の注口土器はほぼ完形であるが、深鉢形土器は、破碎され欠失箇所が認められる。また、第630号土壌では覆土上層で、完形の注口土器、鉢形土器が小破片と共に出土している。これらから、単独土壌で完形土器が出土する状態は、重複による破壊を受けなかったことが理由としてあげられる。底面出土については、副葬品としての位置付けが可能であり、上層での完形品の出土は、供献土器としての位置付けが可能である。なお、第248号土壌は覆土上層より、脚部を欠失した台付鉢の中から、入れ子状態で完形の大洞BC式の鉢形土器が出土し、さらに、天

神原系の注口土器が伴うことなど、他地域の土器同士が共存する例として大変興味深い。

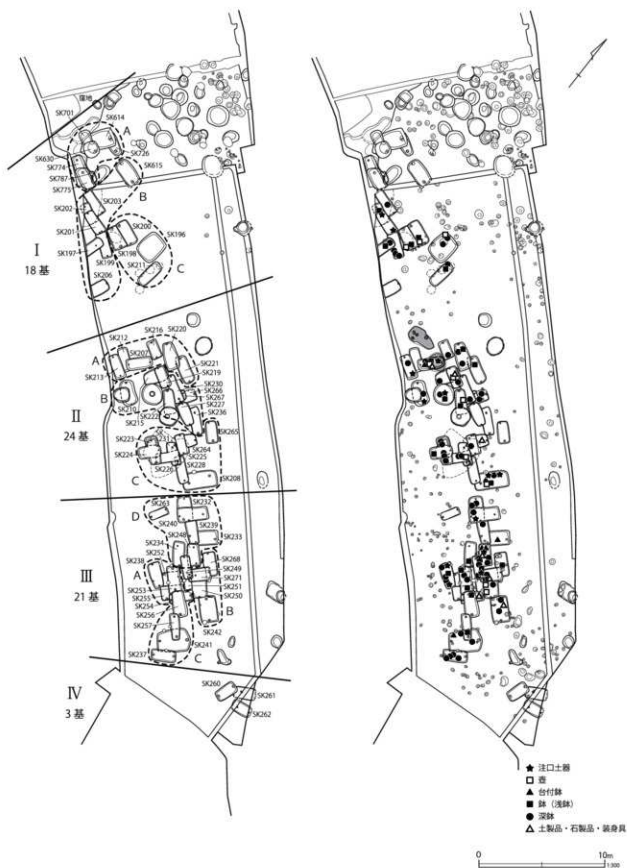
第Ⅱ類は破碎された土器や、深鉢形土器の大形破片が含まれ、第207・232・234号土壌などがある。出土位置は、底面付近から上層まで各種あり、いずれも他の土壌と重複していることから、重複の際に破碎され放置された遺物、または、土壌を埋め戻す際に混入した可能性が推察される。

第Ⅲ類は、第215・216・241・252号土壌などがある。第216号土壌は単独である。他は、重複している。第215・252号土壌は、重複の上覆土が浅く、本来あるべき遺物が飛んでしまった可能性が推察される。また、上層の盛土包含層や土器集中による覆土への遺物の混入の可能性も推察される。なお、第241号土壌は他の土壌に比べ、幅が広く両端ピットが2対となる可能性も指摘できることから、追葬が行われ、遺物が片付けられた状態であったのかもしれない。

第Ⅳ類は、第263・265号土壌など限られている。いずれも覆土が浅いので遺物が飛んでしまっている可能性も否定できないが、小形で単独であることがあげられる。

遺物の全体の出土状況は、第Ⅰグループでは、底面から第Ⅰ類の出土が比較的多く認められ、これとは対照的に、重複の著しい第Ⅲグループでは、第Ⅱ類の出土が多く認められる。

器種構成では、注口土器、浅鉢形土器、壺形土器に完形品が多く、台付鉢は脚部を欠失し、深鉢形土器の小形品は完形で出土しているが、大形品については破片としての出土例が多い。このうち、注口土器は、住居跡内など集落内では出土比率が低く、土壌墓に埋納される遺物として選定されていた可能性が推察される。また、壺は、貯蔵用として浅鉢とセットで、注口土器は液体貯蔵として同じく浅鉢とセットで出土している状況が窺える。台付鉢は浅鉢と同様の機能を付加し、鉢部のみが出土している。因みに、脚部は、集落内や



第627図 北盛土土墳墓群構成・出土遺物分布図

B区外縁側傾斜面で多く出土している。

他に耳飾りや土偶破片、石棒・独鈷石破片、石製装身具等が少数出土している。耳飾りについては、対で出土している遺構はない。また、装身具は第254号土壌を除きいずれも原位置での出土は認められない。

遺物の土壌墓内での出土位置は、長軸片端寄りで出土する事例と、中央短軸壁寄りから出土する事例、全体に散在して出土する事例がある。

特に注口土器は長軸片端寄りで多く出土している。そこで、南盛土の第277号土壌の出土人骨と遺物の位置関係が比較材料となる。第277号土壌では、頭位の左上に完形の注口土器が浮いた状態で正位で出土した。また頭位右脇底面から石鏃1点が出土した。さらに下肢骨脇で打製石斧が欠損して底面から出土した。特に注口土器の出土状況は頭位方向を認定する指標となりえる。但し、これ以外は全容の解る人骨は残存しておらず推測の域を出ないため、埋葬者の性別を含め今後の検討課題としたい。

他の遺跡例については、白岡市前田遺跡で同様の遺構が検出されている。

報告によると、検出された土壌27基のうち、確実に土壌墓と判断される土壌が15基検出されている。時期は土壌内出土土器から晩期安行3b式期から安行3d式期に収まる。長軸2m程度の長楕円・隅丸長方形で長軸方位を南西―北東とするもの、やや軸をずらすもの、直行するものとの3群に分かれている。重複する土壌は少ないが、配置は長竹遺跡と類似し2基が並行に配置される土壌があり、主軸を異にした複数集団の存在を想定している。また、第10・11号土壌からはピットが検出されており、「墓標」を支えた構造（木製）を想定している。遺物は、土壌長軸端部の底面付近や、中央壁際、覆土上層などから出土しており、それぞれ副葬用と供献用とに想定している。さらに完形品の出土が少なく意図的に破片を埋納した

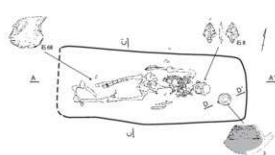
可能性も指摘している。土器の系統も、在地土器、姥山系土器、大洞系土器、前浦系土器など多地域にわたり、遺構検出数の相違は認められるが、長竹遺跡と類似点が多く認められる。時期的に長竹遺跡より開始時期がやや後出で、終了時期も同様であるが、これは、集落の継続期間ともかかわる状況となろう。

栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡では、窪地を囲み晩期中葉の住居跡2軒と、柱穴群を含む集落跡の一角に、独立した土壌墓群を形成している。土壌墓は合計27基あり、長軸方位は北西―南東及びそれに直行する土壌、中間方位を示す3群が認められる。このうち№5号土壌からは小形壺・鉢、№14号土壌からは小形壺・鉢、№16号土壌からは、小形壺・鉢・深鉢が出土している。№7号土壌にピットが1基検出されているが、他は検出されていない。土壌の規模、方位、遺物出土状況等に類似点があるが、墓域の立地は異にしている。

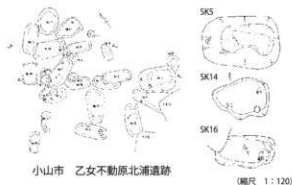
東京都町田市から神奈川県横浜市緑区にまたがる、なすな原遺跡では台地斜面に形成された縄文時代後・晩期の住居跡群のさらに下の段の一角に第IV類土壌とした約70基の土壌で墓域を形成している。これらの土壌墓は重複が著しく形成時期は後期中葉から晩期中葉に及んでいる。時期を特定できないが第181号土壌からはピットが検出されている。また、第310号土壌からは、両端ピットと完形の注口土器が出土している。集落から離れた一角に集中的に墓域を形成したと推察されるが、長軸方位の「特定方位志向」や一部土壌からのピット検出、遺物出土状況等に類似性を求めることができる。

長竹遺跡の両端ピットの性格については他に木杭が検出された例があるが、ここでは、「墓標」としての機能と、木棺墓の支持杭としての機能を想定し、詳細については検討したい。

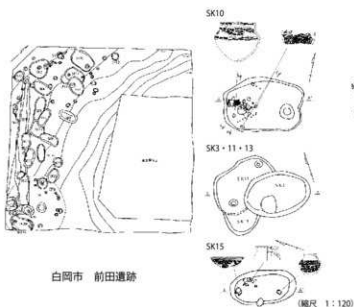
集落との関係は、前述したように、土壌墓群は環状盛土遺構の内縁側緩傾斜面に位置してい



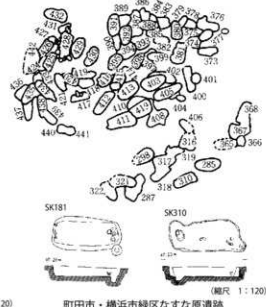
南盛土 第277号土墳 (縮尺 1:40)



小山市 乙女不動原北浦遺跡



白岡市 前田遺跡



町田市・横浜市緑区なすな原遺跡

第628図 第277号土墳・他遺跡との比較

る。土墳墓の方位軸は、等高線（北西—南東）に平行する軸線を取る土墳と、それとは直角（北東—南西）に軸線を取る土墳に大きく分かれている。等高線に平行する土墳墓群は、中央窪地の環をめぐるように微妙に変化しているのでこれらの土墳は「中央志向」といえる。但し、南盛土の第277・310・311号土墳を加えると、直線的配列も想定可能となり、「特定方位志向」も視野に入れる必要がある。今回の調査範囲では、「中央窪地」を意識しつつ、方位軸にも一定の規範があったものと解釈し、詳細については今後の検討課題とし

たい。

全体として、時期的には晩期前葉以降衰退する居住域と入れ替わるようにして土墳墓群が内縁側に形成される。環状盛土遺構の終焉については、かつて、盛土上部をローム質土で覆うことを挙げたが、今後の盛土編の報告で詳細は述べるとして、概ねこれと並行して墓域が形成されていった状況が窺える。これらの状況から、即断はできないが、晩期前葉を起点とし、居住域としての集落から墓域への性格を強めていったと推察される。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ながたけいせき						
書名	長竹道跡Ⅲ						
副書名	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						
シリーズ番号	第441集						
編著者名	吉田 稔 渡辺清志						
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木4丁目4番地1 TEL. 0493-39-3955						
発行年月日	西暦2018（平成30）年3月22日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
長竹道跡 (第3・6次)	さいたま市加須市大 あびのこあびのこくら 字大越字樋ノ口 620-1・702-1 ほか	11210 039	36°11'16"	139°36'47"	20120406～ 20130331 20140401～ 20150331	4,996.82	堤防建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
長竹道跡 (第3・6次)	集落跡	縄文時代	住居跡 堅穴式遺構 土壕墓・土壇 柱穴列 埋土 焼土跡 不明遺構 ビット 遺物集中	34軒 2基 361基 2基 3基 12基 4基 626基 7箇所	土器 土製品 石器 石製品 骨製品	縄文時代後・晩期に形成された環状盛土遺構の北側盛土遺構を調査した。盛土の径は190mに及び有数の規模である。 縄文時代後・晩期に営まれた住居跡は盛土の最も標高が高く、狭い範囲に集中していた。盛土の内縁端で検出された晩期の土壇墓群は企画性のある配置であった。	
要 約							
長竹道跡は、利根川沿いの埋没台地上に立地する縄文時代から近世にわたる複合遺跡である。今回の調査は縄文時代（第二期）の後期から晩期にかけて形成された環状盛土遺構のうち北側の盛土遺構から検出された遺構・遺物に関する報告である。 盛土外縁は想定190mに及び、盛土の形成は環の内縁端から外縁端に向かって形成されていた。環の内縁端にある窪地は基盤土であるローム層が削平されたような状況であった。遺構は主に後期前葉から晩期前葉にかけて盛土の最も標高の高い範囲から集中して検出された。検出された34軒の住居跡は開始期にあたる後期前葉で、環の最も標高の高い部分から1軒のみ検出され、後期中葉から後葉にかけては環の外縁端に拡張し、軒数も増加していく。各住居跡は、同一地点内で拡張建て替えが順次行われ、床面のかさ上げも行われている。 後期後葉の住居跡は南盛土で検出された最大規模の辺り12m級の「大形堅穴建物」は、北盛土では検出されていないが、8m級の住居跡が検出されている。また、狭い範囲内での住居跡の重複が著しく後期後葉から晩期前葉にかけて最大7軒の住居跡が重複していた。 晩期に入ると規模が小形化し、軒数も減少していった。各時期の住居跡のプランの変遷は南盛土と一部異なり、後期前葉の不整円形から後期中葉の楕円形へ変化し、後期後葉前半の隅円方形、後葉後半から晩期前葉までの方形プランへ変化する。晩期では、プランが崩れ、不整楕円形ないしは隅円方形で柱穴入り口部の配置もやや大形の第105号住居跡を除いて規則的配置をとらない住居跡が検出されるようになる。晩期中葉に入ると、住居跡は検出されず、包含層に伴う焼土層や環の内縁端から柱穴が検出される。 土壇は住居跡が密集する地域よりやや環の内縁端から検出され、円筒形で貯蔵穴が想定される土壇も検出された。また、盛土の内縁端斜面に沿って晩期の土壇墓が67基検出された。多くの土壇墓は長方形で大きく3グループに分かれていた。斜面の等高線に沿って配置された土壇墓と直角に配置される土壇墓があり、重複が著しい。また土器・浅鉢・台鉢・深鉢土器大形破片などの副葬品が伴い、墓底の底面隅端から小穴が検出された。 出土物は、縄文時代早期から晩期中葉にかけて膨大な量の遺物が出土し、日用雑器から、祭祀遺物、鉄質用具、加工具、装身具などに至るまで幅広く出土した。							

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第441集

長 竹 遺 跡 III

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

平成30年3月14日 印刷

平成30年3月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／巧和工芸印刷株式会社